

2015 年

ヴァレリー・ラルボー研究—ブルボネ地方への帰郷
(千葉大学審査学位論文)

佐藤みゆき

目次

凡例

序論—『アレン』の献辞が示唆するもの—	1
第1部 離郷	12
第1章 『幼なごころ』	12
第1節 少年たちの離郷	12
第2節 「未知の祖国」を求めて	22
第2章 『A. O. バルナブース全集』と異郷	31
第1節 『裕福なアマチュアの詩』からの改作	32
第2節 ラルポーと「架空の作者」バルナブース	36
第3節 異郷における自我探求—バルナブースの「日記」—	42
第2部 帰郷	57
第1章 『アレン』の構成	60
第1節 「著者解題」追録まで	60
第2節 作品の構成	69
第2章 故郷への旅	81
第1節 『アレン』の旅路と『私の道のり』	81
第2節 故郷礼讃—地方活性化の理想—	86
第3節 過ぎし日の友—レオン=ポール・ファルグ—	105
第4節 同郷意識	120
結論	131
参考文献目録	134
I. Valery Larbaud の著作（出版年順）	134
1. 全集	134
2. 単著	134
3. 一部執筆	136
4. 雑誌掲載（作品名で記載・初出を含む）	136
5. 書簡	137
II. Valery Larbaud に関する文献	139
1. 研究書・研究書所収の論文（著者名アルファベット順）	139
2. 雑誌論文・新聞記事・インタビュー記事（著者名アルファベット順）	140

3. コロック・シンポジウムカタログ（出版年順）	145
4. <i>Cahiers des amis de Valery Larbaud</i> （出版年順・2001年以降は副題を併記）	146
5. 書簡（出版年順）	147
III. ブルボネ地方関連	147
1. 書籍・研究書（著者名アルファベット順）	147
2. 雑誌論文・雑誌記事（著者名アルファベット順）	149
3. ブルボネ地方の地方語・方言に関する文法書・辞書（出版年順）	149
4. 書簡	150
IV. その他	150
1. 研究書・論文等（著者名アルファベット順）	150
2. 事典類（出版年順）	153
3. その他（著者名アルファベット順）	154
4. インターネットサイト	155

別冊 『アレン』日本語訳・補遺

凡例

1. ヴァレリー・ラルボーのテキストは、主にガリマール社刊行のプレイヤード版 Valery Larbaud, *Œuvres*, préface de Marcel Arland, Commentaires et notes par G. Jean-Aubry et Robert Mallet, Essai de bibliographie chronologique par Jacqueline Famerie, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1958 (『プレイヤード叢書・ヴァレリー・ラルボー全集』) を使用している。以後、プレイヤード版、と略記する。引用の場合、注の出典には *Pléiade* と略記し、著者名と出版年を省略の上、各作品のタイトルとページ数を併記している。なお作品名の表記には «» を使用せず、イタリックで表記している。

例 : *Allen, Pléiade*, p. 00.

Enfantines (『幼なごころ』) からの引用の場合、各篇の仏語タイトル表記には引用符 «» を使用している。

例 : « Devoirs de vacances », *Enfantines, Pléiade*, p. 00.

A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime (『A. O. バルナブース全集』) は、*A.O.B., Pléiade* と略記する。

2. *Œuvres complètes de Valery Larbaud*, 10 tomes, Paris, Gallimard, 1950-1954 (『ヴァレリー・ラルボー全集』) からの引用には、書籍名を *OC* と略記し、作品名・巻数・ページ数を表記する。

例 : « Deux notes sur E. A. Poe (1809-1849) », *OC*, t. 3, p. 00.

3. *Allen* (『アレン』) の「本編」から対話部分を引用する場合、引用文の文頭に論者が特定を試みた 5 人の発話者を、[L'Auteur :] (<作者>)、[L'Éditeur :] (<編集者>)、[Le Bibliophile :] (<愛書家>)、[Le Poète :] (<詩人>)、[L'Amateur :] (<アマチュア>)、また推定できない場合には [— :] (<—>) と付記している。

4. 上記以外のラルボー作品を引用する場合には、出版年、出版社等を明記し、適宜日本語のタイトルを補っている。

5. 人名、作品名や固有名詞は、初出時に原綴りを記し、丸括弧内に日本語表記を示した。注においても同様に表記している。また、作家名には生没年、作品名には出版年を併記した。二度目以降は日本語表記を用いている。

例 : 作家名 Valery Larbaud (ヴァレリー・ラルボー、1881-1957)

作品名 *Allen* (『アレン』、1927)

地名 *Bourbonnais* (ブルボネ地方)

6. *Cahiers des amis de Valery Larbaud* (『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』) の出典は、注においては *CVL* と略記し、号数と発行年を併記している。

7. *La Nouvelle Revue Française* (『新フランス評論』) の出典は、注においては *NRF* と略記し、号数と発行年を併記している。

8. 外国語で書かれた雑誌等、複数の著者が存在する研究文献を使用する際には、作品名や論文名の後ろに « in » を記した後に、文献名を記載する。なお論旨に関わる文献に限り、適宜日本語での表記を付している。

例 : Jacques Chevalier, « Valery Larbaud Bourbonnais au Pays d'Allen », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 2, 1957, p. 00.

9. 引用箇所について、外国語で書かれた文献からの引用には、本文中に拙訳による日本語訳を示したものに対しては、注に原文を記した。未邦訳の『アレン』では拙訳を試みたほか、『A. O. バルナブース全集』、岩崎力訳、河出書房新社、1973年、『A. O. バルナブース全集』(上・下)、岩崎力訳、岩波文庫、2014年、『幼なごころ』、岩崎力訳、岩波文庫、2005年、『めばえ (アンファンティヌ)』、池田公麿訳、旺文社文庫、1980年を参照した上で拙訳を用いた。なお *Enfantines* 各篇の邦題は、岩崎力訳『幼なごころ』での表記を用いた。その他、既訳が存在する場合には適宜参照している。

10. 先行研究の引用に日本人研究者を挙げる場合にも、敬称を省略させていただいている。

11. 本研究の「別冊」(以後「別冊」と表記)においても本凡例に挙げた事項を適用し、本論文に既出の作品名や出典、固有名詞、歴史的事項などについても、注において繰り返している。

序論—『アレン』の献辞が示唆するもの—

« À ma Mère / Je dédie cet ouvrage filialement consacré / à notre pays natal.¹ »

「母に／私は子として私たちの故郷に捧げられたこの作品を献じます。」

国際性に富む数々の作品や経歴によって「コスモポリットな作家」と評された 20 世紀のフランスの作家 Valéry Larbaud (ヴァレリー・ラルボー、1881-1957) は、どのように故郷と関わっていたのだろうか。本研究では、この問いを出発点として、ラルボーの作品をもとに、故郷との関わり方に一つの見解を示すことを目的とする。具体的には、*A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* (『A. O. バルナブース全集、すなわち一つの短篇、詩および日記』、1913、以後『A. O. バルナブース全集』と略記)、*Enfantines* (『幼なごころ』、1910-1914 年に各篇を執筆・発表、1918 年出版)、*Allen* (『アレン』、1927 年発表、1929 年出版)²の三作品を中心とする考察を通して、彼の故郷であるフランス中部の Bourbonnais (ブルボネ地方：現在の Allier [アリエ県] に相当) が、彼の作品に常に意識されていること、またラルボーが『アレン』によって故郷へ精神的に回帰する過程を示したい。

ヴァレリー・ラルボー研究の底本とされることの多いプレイヤード版 (1958) は、刊行当時の *La Nouvelle Revue Française* (『新フランス評論』)³の編集長 Marcel Arland (マルセル・アルラン、1899-1986) による前書き « Vers le pays d'Allen » (「アレンの国へ」)⁴で始まる。これは、1957 年にラルボーが死去した際に発行された『新フランス評論』のラルボー追悼号、*Hommage à Valéry Larbaud* (『ヴァレリー・ラルボーへのオマージュ』) に収録された論考の再録である⁵。本研究の第 2 部で説明するが、「アレンの国」とはラルボーが生まれ、また没した Vichy (ヴィシー) を含むブルボネ地方を指し、ラルボーはこの地方を題材に『アレン』を執筆した。だが、プレイヤード版の前書きが示すほどには、ラルボーと「アレンの国」である故郷が結びつけられることは少なく、『アレン』についての研究がなされているとは言えない。それだけラルボーには国際性が付き従うのであろう。

ラルボーは十代の頃に創作活動を始め、1935 年に脳障害に倒れて失語症に陥り、事実上の創作活動の停止を余儀なくされるまでの約四十年間にさまざまな作品を生み出し、そのジャンルは小説・詩・批評・翻訳と多岐にわたった。ところが文学史上、ラルボーは国際色豊かな作風から「コスモポリティズム文学の旗手」として紹介されることの多い作家で

¹ *Allen, Pléiade*, p. 721.

² 作品名は『アラン』とも表記しうるが、本論文では先行研究にならい『アレン』とする。

³ パリの Gallimard (ガリマール社) が 1909 年に創刊した文芸雑誌。

⁴ Marcel Arland, « Préface, Vers le pays d'Allen », *Pléiade*, pp. IX-XIII.

⁵ *Hommage à Valéry Larbaud, 1881-1956 [sic]*, *NRF*, n° 57, 1^{er} septembre 1957 ; repr., Paris, Nouvelle revue française, 1990, pp. 28-33.

ある。それはラルボーが、彼の代表作でもある『A. O. バルナブース全集』の主人公で、23歳の大富豪バルナブースの欧州各国をめぐる豪奢な生活ぶりが、幼年時代から欧州各国への旅を常としていたラルボーの実生活と重なっていたからである。

ラルボーは父親がヴィシーに近い Saint-Yorre (サン=ティヨール) にミネラルウォーターの鉱泉を所有していたことから、彼は裕福な家庭に生まれ育っていた。André Gide (アンドレ・ジッド、1869-1951) の日記の1908年7月28日の記述によれば、ラルボーと同郷の作家 Charles-Louis Philippe (シャルル=ルイ・フィリップ、1874-1909) がラルボーについて、友人でベルギーの作家 André Ruyters (アンドレ・リュイテルス、1876-1952) に、「横に並べばさすがのジッドも貧乏に見えるような人間に出会うと、僕はいつも愉快になるよ⁶」と語ったそうである。このようなエピソードや作品によって、ラルボーは裕福な出自の国際色豊かな作家、すなわち *écrivain cosmopolite* (コスモポリティスム作家) として認識されていたわけである。

続いてラルボー研究の歴史と状況について触れておこう。ラルボーの作品について、あるいは彼自身について、これまで多角的な分析がなされてきた。まず、ラルボーが作品の発表をほぼ終えた後に出版された、ラルボーの伝記的事項にもとづく研究書は、必携の参照文献として現在も論文中に多く引用されている⁷。また、1967年に設立された *Association des amis de Valery Larbaud* (ヴァレリー・ラルボー国際友の会、以後「ラルボー友の会」と略記) の活動によって、継続した研究とその成果の発表が可能になった。現在、「ラルボー友の会」からの情報発信は、毎年6月頃に会員に配付される *Cahiers des amis de Valery Larbaud* (『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』) に限られているが、この会報によって、前年の総会時に定められたテーマに沿った論文を読み、「ラルボー友の会」の活動状況を知るだけでなく、過去一年間に出版されたラルボーに関する書誌情報で、研究動向を把握することができる。また、『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』第49号(2013年)および第50号(2014年)には、同会報の第1号(1967年)から第37号(2001年)までの目次が掲載された⁸。このような研究環境の整備の成果を利用することで、研究動向や研究史の概観が容易になってきている。その一方で、「ラルボー友の会」がウェブサイトやメール

⁶ « Parlant de Valery Larbaud, Philippe disait à Ruyters : « Ça fait toujours plaisir de rencontrer quelqu'un auprès de qui Gide paraît pauvre. » », André Gide, *Journal*, t. 1, 1889-1939, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1951, p. 269.

⁷ Georges Jean-Aubry, *Valery Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, Monaco, Éditions Du Rocher, 1949 ; Jean-Philippe Segonds, *L'Enfance bourbonnaise de Valery Larbaud*, Moulins, Éditions des Cahiers bourbonnais, 1967 ; Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages*, Paris, Gallimard, 1973 ; Béatrice Mousli, *Valery Larbaud*, Paris, Flammarion, 1998.

⁸ Isabelle Minard, « Bibliographie et répertoire des Cahiers des Amis de Valery Larbaud n^{os} 1-20 (1967-1982) », in *CVL*, n^o 49, 2013, pp. 215-227 ; Françoise Lioure, « Bibliographie et répertoire des Cahiers des Amis de Valery Larbaud n^{os} 21-37 bis (1982-2001) », *CVL*, n^o 50, 2014, pp. 241-257.

マガジン、メーリングリストなどを利用していないため、ラルボー研究に関する情報公開は年に一度にとどまっております、研究者たちが情報を随時把握、あるいは交換できるシステムの整備には至っていない。

近年の研究は、ヴィシー市立図書館である Médiathèque Valery Larbaud (メディアテック・ヴァレリー・ラルボー) 内の Fonds Valery Larbaud (ラルボー文庫)⁹に収められた未公開資料の整理に重点が置かれ、その成果として 2009 年に決定版の *Journal* (『日記』)¹⁰が出版された。また、『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』第 48 号 (2012 年) および第 49 号 (2013 年) では、雑誌 *La Phalange* (『ラ・ファランジュ』) の主宰者で、詩人、批評家の Jean Royère (ジャン・ロワイエール、1871-1955) との書簡が公開された¹¹。ラルボーと知人との書簡から得られる創作過程のエピソードは、作者や作品の読解を深めるための重要な資料であり、「ラルボー友の会」では継続した書簡研究を予定している。こうした活動の成果から判断して、「ラルボー友の会」が研究を促進し、研究者を取りまとめる機能を果たしていると言える。

このほか、フランス語で発表された書籍や論文を網羅的に把握するには、他のフランス文学作品研究と同様に、1956 年から発行されている Otto Klapp (オットー・クラブ) による文献目録 *Bibliographie der französischen Literaturwissenschaft (Bibliographie d'histoire littéraire française)*, 1956- (『フランス文学史文献目録』、以後『クラブ』と略記) の参照が欠かせない。ラルボー研究の場合、彼の死の前年に発行を開始した『クラブ』を参照することで、フランス語で書かれた研究成果の把握がほぼ可能になる。それに加えて、1992 年までに刊行されたラルボーの著作や研究論文を年譜とともに収録した *Cahiers de L'Herne* (『カイエ・ド・レルヌ』) のヴァレリー・ラルボー特集¹²や、研究者による著作¹³によっても研究の状況を確認することができる。

小説や翻訳、批評など複数のジャンルで展開されたラルボーの作品は、研究史の面から

⁹ ラルボーの死後、25,000 点を超える膨大な蔵書や草稿等の資料は、ヴィシー市が買い取り、ラルボー文庫を設けたことで散逸を逃れた。下記のウェブサイトで蔵書を確認することができる。OPAC : <http://catalogue-mediathèque.ville-vichy.fr/> なお本論文では、ラルボーに関する資料を所蔵するこの団体名を、ヴィシー市立図書館、と表記する。

¹⁰ Valery Larbaud, *Journal*, éd. définitive, texte établi, préfacé et annoté par Paule Moron, Paris, Gallimard, 2009.

¹¹ Valery Larbaud-Jean Royère, *Correspondance I (1908-1918)*, édition établie, introduite et annotée par Gil Charbonnier, *CVL*, n° 48, 2012 ; Valery Larbaud-Jean Royère, *Correspondance II (1921-1927)*, édition établie, introduite et annotée par Delphine Viellard, *CVL*, n° 49, 2013. ラルボーは後に『幼なごころ』に収録する短篇などを『ラ・ファランジュ』誌上で発表していた。

¹² « Chronologies » in Valery Larbaud, *Cahiers de L'Herne*, n° 61, ce cahier a été dirigé par Anne Chevalier, Paris, Éditions de l'Herne, 1992, pp. 316-387.

¹³ Marcel Troulay, *Valery Larbaud : essai de bibliographie chronologique des études en toutes langues I, 1897-1935*, Paris-Caen, Lettres modernes minard, 1998. なお現在のところ続編は出ていない。

見ると、主に次の5点に集約されるテーマに繰り返し光が当てられている。それは第一に、作品における幼年時代の影響であり、第二にコスモポリットな作家としての欧州周遊の記述、第三に「内的独白」の手法を用いた作品による、新しい小説技法の流行の先駆者であったこと、第四には英国や南米の作品の翻訳によって、外国人作家や外国語作品をフランスに多く紹介した功績、そして第五には広範な知識にもとづく批評活動である。

まず、幼年時代と国際性を代表する作品として、『幼なごころ』としてまとめられた複数の「短篇」、『A. O. バルナブース全集』に収録した異なるジャンルの作品、すなわちラルボーが「Conte」（「短篇」）と冠した小説「Le Pauvre chemisier」（「哀れなシャツ屋」）、「詩篇」「Poésies」（「詩」）およびフィクションの日記「Journal intime」（「日記」）が挙げられる。さらにラルボーは、アイルランド出身の作家 James Joyce（ジェイムズ・ジョイス、1882-1941）の代表作 *Ulysses*（『ユリシーズ』、1922）のフランス語訳出版の監修を手掛け、後にラルボー自身も『ユリシーズ』における「内的独白」の手法を作品に取り入れた作品を執筆した。1921年から1923年にかけて発表した中編小説 *Amants, heureux amants...*（『恋人よ、幸せな恋人よ……』、1921年）と *Mon plus secret conseil...*（『秘めやかな心の声……』、1923年）は「内的独白」の手法を用いた作品として1920年代のフランス文学界の話題となった。さらには『新フランス評論』や、季刊誌 *Commerce*（『コメルス』）¹⁴の主要メンバーとして雑誌の編集に関わりつつ、作品や批評の発表を続けていた。先般、『新フランス評論』創刊百周年を記念した書籍が多く出版されたが¹⁵、それらの中に確認されるラルボーが果たした役割からも、フランスを代表する出版社が彼を重んじていることがわかる。

ラルボーの活躍はフランス国内にとどまらず、英国や南米の作家たちとの交流は、フランス文学を含めた文学界に多大な功績をもたらした。彼の生活は、パリを拠点に英国、スペイン、イタリアでの長期滞在が大きな割合を占め、その間に習得した英語、スペイン語、イタリア語などを駆使し、日常的に英語で日記を書き、諸外国語で批評を投稿するポリグロット、すなわち語学の達人でもあった。欧州各国におけるラルボーの人的交流や創作活動は、外国語で執筆した原稿の現地の新聞への投稿や、外国文学の翻訳や紹介など複数の分野にわたり、それぞれ多くの成果を挙げていた。例えば、アメリカ合衆国で発禁処分を受けた『ユリシーズ』が今も読み継がれているのは、ラルボーの功績によるものである¹⁶。

¹⁴ イタリアの大公と結婚し *Princesse de Bassiano*（バシアーノ大公妃）と呼ばれたアメリカ人 Marguerite Caetani（マルグリット・カエタニ、1880-1963）の出資によって、1924年から1932年まで発行された季刊文芸誌。ラルボーは、詩人で思想家の Paul Valéry（ポール・ヴァレリー、1871-1945）や詩人 Léon-Paul Fargue（レオン＝ポール・ファルグ、1876-1947）と共に編集責任者を務めた。

¹⁵ *L'Œil de la NRF, cent livres pour un siècle, choix des textes et présentation* par Louis Chevaillier, Paris, Gallimard, 2009 ; Alban Cerisier, *Une histoire de la NRF*, Paris, Gallimard, 2009 など。

¹⁶ 『ユリシーズ』は1918年3月から1920年8月にかけて、アメリカ合衆国の雑誌 *The Little Review*（『ザ・リトル・レビュー』）に連載されていたが、1921年2月に猥褻図書として有

そして、ラルボーが創作活動を始めた 1910 年代から 1920 年代にかけてのフランス国内外における幅広い分野での活躍ぶりが、彼にコスモポリティズム作家としてのイメージを与えたわけである。

実際、先行研究において、ラルボーの「コスモポリティズム」(国際性)あるいは「エグゾチズム」(異国性)は重要なキーワードであり、多くの視点からのラルボーとコスモポリティズムに関する考察が、ラルボーと作品への理解をうながしてきた。フランスでは Frida Weissman (フリーダ・ウェイスマン) の *L'Exotisme de Valery Larbaud*¹⁷などが出版され、ラルボーと外国とを結ぶ視点からなされた多くの成果を知ることができる。また日本では、岩崎力(現東京外国語大学名誉教授)による『幼なごころ』や『A. O. バルナブース全集』などの日本語訳および解説、複数の研究論文をまとめた『ヴァルボワまで—現代文学へのオベリスク—』¹⁸、西村靖敬(千葉大学教授)の『1920 年代パリの文学—「中心」と「周縁」のダイナミズム—』¹⁹における多角的な分析があり、いずれも日本におけるラルボーと彼の作品の受容をうながしている。さらに、研究者たちがラルボーに与えたコスモポリティズム作家との評価は、フランス国内外の長年の研究によって確立しつつ、現在も継続されている。ラルボーは 2007 年 2 月に没後 50 年を迎え、同年 6 月には記念コロックが開催された。主だった作品には一通りの研究がなされたようでもあり、研究活動は円熟期を迎えていると言える。

このような研究動向をもとに、近年、特に 2000 年以降に提出された博士論文を見ると、『幼なごころ』、『A. O. バルナブース全集』といった主要な作品を分析対象として、ラルボー作品の文体研究が深められている傾向にあると言える。

まず日本においては 2009 年に瓜生濃世の「ヴァレリー・ラルボーの作品における自己確立の葛藤とその表現」が関西学院大学に提出された。日本で最初のラルボーに関する博士論文は、『幼なごころ』、『フェルミナ・マルケス』、『恋人よ、幸せな恋人よ……』、『秘めやかな心の声……』、「テゼの船」を対象に、ラルボーの作品において主人公たちが抱える「私」とはなにものかという問題に対する人間的な不安が見られるとして、子供の心理的葛藤、語り的问题、内的独白の手法に注目している²⁰。その結果、短篇小说「テゼの船」²¹が、当

罪判決を受け、発禁処分となっていた。その後、ジョイスの連載を支持した Silvia Beach (シルヴィア・ビーチ、1887-1962) の営むパリの書店 Shakespeare and Company (シェイクスピア・アンド・カンパニー) が出版元となり、ラルボーが翻訳を監修したフランス語訳が出版された。

¹⁷ Frida Weissman, *L'Exotisme de Valery Larbaud*, Paris, Nizet, 1966.

¹⁸ 岩崎力訳による『A. O. バルナブース全集』、河出書房新社、1973 年、岩波文庫から 2014 年に出版された文庫版、および『ヴァルボワまで—現代文学へのオベリスク—』、雪華社、1985 年、『幼なごころ』、岩崎力訳、岩波文庫、2005 年。

¹⁹ 西村靖敬『1920 年代パリの文学—「中心」と「周縁」のダイナミズム—』、多賀出版、2001 年。

²⁰ 当該論文および関西学院大学のウェブサイトに掲載された論文審査委員による講評を

該論文で取り上げたそれ以外の作品に描かれた青年のその後の物語、すなわち完結編であると論じている。しかし論文審査委員の講評にもあるように、ラルボーの代表作である『A. O. バルナブース全集』が取り上げられていないことが、今後の課題として指摘されている。

次に、フランス語で書かれた博士論文²²について、オンデマンド出版などによって入手可能な以下の四つの論文の著者は、いずれも現在「ラルボー友の会」の主要メンバーとして研究の中心を担っている。まず2000年にNelly Chabrol Gagneがブレーズ・パスカル＝クレルモン第二大学に提出した、*De l'espace réel à l'espace imaginaire dans l'œuvre de Valery Larbaud*が挙げられる。「ヴァレリー・ラルボーの作品における現実空間から想像上の空間まで」と題するこの論文は、『幼なごころ』、『フェルミナ・マルケス』、『A. O. バルナブース全集』などラルボーの主要な作品を、場所の移動の観点から年代順に分析したものである。ラルボーが1930年代前半に生活の拠点をブルボネ地方に移し、それにともない故郷に関わる小作品や記事が増えたことについて、作品名や執筆の背景を挙げて言及していることから、本研究との関係では、帰郷時の作品の一つとして『アレン』を取り上げるという共通点が見られる。しかし、著者が『アレン』の成立の経緯や作品の分析には踏み込んでいないことから、研究の余地が十分にあると判断した。

次に、2006年にGil Charbonnierがパリ第四大学に提出した*Les Écritures de la sublimation dans l'œuvre de Valery Larbaud*²³である。「ヴァレリー・ラルボー作品におけるエクリチュールの昇華」と題するこの論文は2008年、『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』第44号に掲載されたラルボー研究者でブレーズ・パスカル＝クレルモン第二大学名誉教授のFrançoise Lioure（フランソワーズ・リウル）による書評において、賞讃とともに紹介された²⁴。この研究は、長年断片的に分析されてきたラルボーの文体と多くの作品を、ラルボーと信仰との関係を通して考察したもので、ラルボーと故郷に関しては、彼と母親との関係についての『アレン』を介した論述が短いながらも参考になる。

さらに同じく2006年にMaría Isabel Corbi Sáezがスペインのアリカンテ大学に提出した、*Valery Larbaud et l'aventure de l'écriture*²⁵が挙げられる。「ヴァレリー・ラルボーとエクリチ

参考にした。<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/5619>（2014年7月24日閲覧）

²¹ « Le Vaisseau de Thésée », 1932. *Pléiade*, pp. 1079-1105 所収。

²² 下記ウェブサイトでは1985年以降にフランスで登録、提出された博士論文を検索できる。<http://www.theses.fr/>（2014年7月24日閲覧）

²³ Gil Charbonnier, *Les Écritures de la sublimation dans l'œuvre de Valery Larbaud*, Lille, Atelier national de reproduction des thèses, 2006. なお下記ウェブサイトにて閲覧可能である。<http://www.theses.paris-sorbonne.fr/these-charbonnier/paris4/2006/these-charbonnier/html/index-frames.html>（2014年7月24日閲覧）

²⁴ Françoise Lioure, « Compte-rendu : Gil Charbonnier, *Les Écritures de la sublimation dans l'œuvre de Valery Larbaud* », in *CVL*, n° 44, 2008, pp. 161-165.

²⁵ María Isabel Corbi Sáez, *Valery Larbaud et l'aventure de l'écriture*, Paris, L'Harmattan, 2010. Voir Françoise Lioure, « Comte rendu : Maria Isabel Corbi Saez [sic], *Valery Larbaud et*

ュールの試み」とのタイトルのもと、主に『幼なごころ』、『A. O. バルナブース全集』、『恋人よ、幸せな恋人よ……』を含む「内的独白三部作」に焦点をあて、それぞれの作品における文体や言葉について分析している。特に『A. O. バルナブース全集』の冒頭に収録された「哀れなシャツ屋」についての考察は、これまであまり分析対象とされてこなかっただけに参考になろう。

最後に、2010年にパリ第四大学に提出された Ève Rabaté の *L'Espace littéraire de la revue Commerce (1924-1932)*²⁶である。2012年にタイトルを *La Revue Commerce : l'esprit « classique moderne » (1924-1932)*²⁷と変えて出版されたこの博士論文は、ラルボーが1920年代半ばから約十年間、発行と執筆に携わった雑誌『コメルス』について縦横に分析したもので、この雑誌におけるラルボーの活動を仔細に検証している。特に、これまで注目されてこなかった『コメルス』の出資者であるマルグリット・カエタニ（バシアーノ大公妃）の書簡を多く扱ったことは注目すべき事柄である。著者が本文中に引用し、また Annexe（補遺）にそのうちの数通を収録した、ローマにある Fondation Caetani（カエタニ財団）、あるいはヴィシー市立図書館や Archives Léon-Paul Fargue（レオン＝ポール・ファルグ資料館）が所蔵するバシアーノ大公妃の書簡は、この研究が扱った資料のごく一部ではあるものの、ラルボーに関する他の研究をうながす資料である。今後、書簡の全文の『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』などでの公開が期待され、それが実現すれば、『コメルス』で活躍していた頃のラルボーの言動がより明らかになるだろう。さらに、補遺にまとめられた『コメルス』各号の概要は、ラルボーが手掛けた作品や翻訳のみならず、『コメルス』に寄稿したラルボーと同時代の作家たちの活動を知るための有用な研究成果として、今後の『コメルス』関連の研究に必須の参照文献となるだろう。

このように近年博士論文に取り上げられた研究は、作品や形式の分析、その他の創作活動など、さまざまなテーマにもとづいている。そして、それらの論文や研究の成果を、長い研究歴を持ち「ラルボー友の会」の主要メンバーであるフランソワーズ・リウールが『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』において紹介しつつ、後進たちへの助言を行っている。一方、フランスで現在準備中の博士論文のテーマに「ラルボー作品におけるコスモポリティスム」²⁸があるように、ラルボーとコスモポリティスムとの関係には今なお追究の余地が残っているようである。

そして、こうした最近の研究動向からも、ラルボーと故郷、特に『アレン』を重点的に論じたものは見当たらないことが確認できる。研究者たちの詳細な考察、すなわちラルボー

l'aventure de l'écriture », in *CVL*, n° 46, 2010, pp. 109-111.

²⁶ Voir Françoise Lioure, « Comte rendu : Ève Rabaté, *L'Espace littéraire de la revue Commerce (1924-1932)*, in *CVL*, n° 48, 2012, pp. 163-170.

²⁷ Ève Rabaté, *La Revue Commerce : l'esprit « classique moderne » (1924-1932)*, Paris, Classiques Garnier, 2012.

²⁸ <http://www.theses.fr/?q=valery+larbaud> (2013年6月18日閲覧)

がさまざまな作品の登場人物たちに「私をめぐる問い」を課しつつ、古典作品や歴史を尊重し、伝統を踏襲しながら独自の作風を生み出す過程の分析において、特に初期の作品である『幼なごころ』の背景として、あるいはラルポーと『A. O. バルナブース全集』の主人公バルナブースに共通する裕福な出自の青年像を示すために、ラルポーの故郷であるブルボネ地方を紹介することは必定となっている。ところが、作家としての道のりを登場人物たちの人物像、あるいは文体を通して歩んできたラルポーが、『アレン』において精神的な帰郷を果たしたことには、あまり関心が向けられていないようである。

そこで、先達が光を当てた分野を踏まえて本研究の目的に立ち戻り、ラルポーの作品に常に故郷の存在が付き従っていることを論じる重要性を強調しておこう。例えば『幼なごころ』に収録された短篇のいくつかの舞台がブルボネ地方であることはよく知られている。ところがラルポーが終生にわたって故郷との関わりを保ち続けていたことは、彼が欧州各国で展開した創作活動の特色や、翻訳家あるいは批評家としての側面が広く認知されていることに比べれば、それほど知られているとは言えない。このことは本研究で取り上げる『アレン』が、故郷への回帰を示す作品でありながらも、これまで関心を持たれにくかったことを見れば明らかであろう。

しかしながら、現在ラルポーに関する主要な研究がブルボネ地方で行われていることにも留意しておきたい。その一例として、ヴィシー市立図書館が1995年5月20日から7月15日にかけて開いた、「*Le Bourbonnais de Valéry Larbaud*」（「ヴァレリー・ラルポーのブルボネ地方」）と銘打った展示会に触れておこう。この時に出版されたカタログの冒頭で、ヴィシー市長が記した言葉は、以下に引用するように、ラルポーとブルボネ地方との関わりを簡潔に説明している。

ヴァレリー・ラルポーのすべての著作にブルボネ地方が息づいています。ブルボネ地方は彼の「隠遁生活」の場所、安らぎと交友の場所であるだけでなく、熟考と文学創造の場所でもあったのです。

1927年には、彼自身で「フランスの地方の生活」ばかりでなく「ブルボネ地方の礼讃」と名付けた『アレン』を出版しました。そして、ヴァレリー・ラルポーがこの著作において思い描く、文化で成り立つヨーロッパとは、彼の故郷にもとづいているのです。彼が讃えたブルボネ地方とは、彼の出身地であり、ヴァルボワ、サン=ティヨール、ヴィシーの三か所に分散し²⁹、『幼なごころ』の中に生き続ける彼の幼年時代なのです。

²⁹ ヴァルボワは母方の屋敷、サン=ティヨールは父親が所有するミネラルウォーターの源泉、ヴィシーには自宅があった。いずれもブルボネ地方におけるラルポーの拠点として重要な場所である。

また、ブルボネ地方でヴァレリー・ラルボーはシャルル・ルイ=フィリップ³⁰、エミール・ギョーマン³¹、そして後にはアンリ・ビュリオ=ダルシル³²と出会います……彼らとともに、ラルボーは「文学的友好関係」の縁を結ぶことになるのです³³。

ラルボーに関する研究が、彼が長く活動の拠点を置いていたパリでもロンドンでもなく、故郷において盛んに行われていることは、ブルボネ地方を足場とする研究者たちがラルボーと故郷との関わりに関心を寄せ続けている証左である。故郷において長く静かに愛され続けるラルボーとその作品について、今後もヴィシー市立図書館が所蔵する資料の分析を中心とした研究が続き、その成果を『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』やブルボネ地方で発行されている季刊誌、*Les Cahiers Bourbonnais* (『レ・カイエ・ブルボネ』)³⁴などで確認することができるだろう。言い換えれば、ブルボネ地方で発行される印刷媒体が、ラルボー研究者たちの研究成果の発表や交流の場としての機能を果たし、恒常的な研究対象

³⁰ フィリップの作品は Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes*, 5 tomes, édition présentée et établie par David Roe, Moulins, Ipomée, 1986 に収録されている。また書簡等の資料をヴィシー市立図書館の Fonds patrimoniaux Charles-Louis Philippe (シャルル=ルイ・フィリップ文庫) が所蔵している。

³¹ Émile Guillaumin (1873-1951)、Ygrande (イグランド) 出身の農民作家。ギョーマンの業績は、Musée Émile Guillaumin の下記のウェブサイト詳しい (2014 年 5 月 21 日閲覧)。
<http://musee-emile-guillaumin.planet-allier.com/default.htm>

³² Henri Buriot-Darsiles (1875-1944) ムーランの高校 Lycée Théodore de Banville (リセ・テオドール・ド・バンヴィル) のドイツ語教師で、雑誌 *Les Cahiers du Centre* (『サントル地方手帖』) の創刊者。ヴィシー市立図書館は計 244 通の両者の書簡を保管しているが、公開には至っていない。二人は共通の友人シャルル=ルイ・フィリップの紹介で 1908 年に知り合った。Cf. « professeur d'allemand au lycée de Moulins dont Valery Larbaud avait fait la connaissance en 1908, « sur la recommandation de Charles-Louis Philippe (G.-J. Aubry, *Valery Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, Monaco, Éditions Du Rocher, 1949, p. 102) », *CVL*, n° 19, 1981, p. 31 ; « Le 1^{er} mars 1910, Valery Larbaud, avec lequel il [= Buriot-Darsiles] correspondait depuis 1908, [...] », Maurice Sarazin, « Buriot-Darsiles et *Les Cahiers du Centre*, revue régionaliste et décentralisatrice (1908-1936). Cet érudit, honora les lettres bourbonnaises », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 221, 2012, p. 72.

³³ « Le Bourbonnais vit dans toute l'œuvre de Valery Larbaud, il fut son lieu de « retirance », lieu de repos, d'amitié mais aussi de réflexion et de création littéraire. / En 1927, il publie « Allen » qu'il qualifie lui-même de « vie des provinces françaises » mais aussi d'« Éloge du Bourbonnais », et c'est à partir de sa province que Valery Larbaud rêve dans cette œuvre à une Europe des Cultures. Le Bourbonnais qu'il fête, c'est celui de sa terre d'origine et de son enfance dispersé dans trois lieux, Valbois, Saint-Yorre et Vichy, qui revivront dans « Les Enfants ». / C'est aussi dans le Bourbonnais que Valery Larbaud rencontre Charles-Louis Philippe, Émile Guillaumin et plus tard Henri Buriot-Darsiles... avec lesquels il va tisser des liens d'« amitié littéraire ». », *Le Bourbonnais de Valery Larbaud*, Exposition organisée à la Médiathèque Valery Larbaud-Vichy, du 20 mai au 15 juillet 1995, à l'occasion du 29^e prix Valery Larbaud, p. 1.

³⁴ 『レ・カイエ・ブルボネ』は 1957 年の創刊以来、ラルボーの逝去時には特集号 (n° 2, 1957) を刊行し、以来ラルボーに関する記事を随時掲載している。また表紙には「アレンの国」を象徴する飛翔する鹿の図柄を用いている。<http://www.cahiers-bourbonnais.com/index.php> (2011 年 4 月 17 日閲覧)

であるラルボーのコスモポリティスムの問題も、彼の故郷で公になっている。だがそこにラルボーの作品と故郷との関係を明らかにするものはまだ見られない。

そこで本研究では、故郷との関係からラルボーの作品史を見ることで気づく、ブルボネ地方を中心とした「離郷」と「帰郷」の動きに注目した。『幼なごころ』の短篇のいくつかの舞台がブルボネ地方であり、『A. O. バルナブス全集』など諸外国を題材にした作品や翻訳、批評を手掛けた後に執筆した『アレン』では、その献辞を長い間確執のあった母親へ贈り、作品の舞台を再びブルボネ地方へと移し、郷土史から得た知識をもとに郷里を再認識しているからである。

『アレン』の「本編」において登場人物の一人である「編集者」が、「まず初めに、私はあなた方に、長い間私がこの地方を嫌っていたことから告白しようと思います。私はこの地方を『流刑地』、『隠遁地』、『隠棲地』、『墓場』と呼んでいました³⁵」と語るように、かつてのラルボーには故郷を避けていた時期があった。長年親しく交流していたレオン＝ポール・ファルグに宛てた 1916 年 1 月 19 日付の書簡において、ラルボーはヴィシーを「愚かな町」を意味する « crétinville » という造語で呼んでいたほどである³⁶。

ところが『アレン』ではブルボネ地方の言葉である « *retirance* »（「隠遁生活」）を繰り返し用いるなど、ラルボーに故郷に寄り添おうとする姿勢が見られる。幼年時代からヨーロッパ周遊を常とし、長らくブルボネ地方の外へ眼差しを向けていたラルボーの故郷への意識の変化は、どのように起こったのだろうか。またラルボーは、『アレン』執筆と同時期に、*Mon itinéraire*（『私の道のり』、1926 年執筆、1986 年出版）³⁷、と *Notes pour servir à ma biographie : an uneventful one*（『私の伝記のための覚え書き：ごくありふれた伝記』、以後『私の伝記のための覚え書き』と略記、2006 年出版）³⁸といった、自らの半生を振り返るメモ

³⁵ « [L'Éditeur :] — et je commencerai par vous avouer que pendant longtemps j'ai détesté ce pays. Je l'appelais l'Exil, la Réclusion, la Thébaïde, le Sépulcre. », *Allen, Pléiade*, p. 754.

³⁶ 「わかるだろう、僕が機嫌を取り戻して、みんなと上手くやってくには、母が僕に愚かな町から出て行く理由を与えることを認めてくれさえすればいいんだ。」（« Tu vois : pour me remettre de bonne humeur et d'accord avec le monde, il suffirait que ma mère consentît à me donner de quoi sortir de Crétinville. », la lettre de Valery Larbaud à Léon-Paul Fargue du 19 janvier 1916, lettre 209, in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud*, texte établi, présenté et annoté par Th. Alajouanine, Paris, Gallimard, 1971, p. 194.）なおこの書簡集を補完するものとして、*CVL*, n°8 (1971) に掲載された誤表記などの指摘と未公開の書簡を含んだ書評と、それに対する編者の返答も参照している。Voir Jean Charpentier, « Léon-Paul Fargue-Valery Larbaud, Correspondance 1910-1946 (compte rendu et 12 lettres inédites) », in *CVL*, n° 8, 1971, pp. 13-49 ; Th. Alajouanine, « Réponse à M. Charpentier », *ibid.*, pp. 51-57.

³⁷ Valery Larbaud, *Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926*, établi en septembre 1926 à la demande d'Alexandre Stols, Paris, Éditions des Cendres, 1986.

³⁸ Valery Larbaud, *Notes pour servir à ma biographie : an uneventful one*, notes et postface par Françoise Lioure, Paris, Éditions Claire Paulhan, 2006. 同書によれば、ラルボーは前述の『私の道のり』の原稿を、1925 年に知り合ったオランダ人編集者 Alexandre Alphonse Maurice Stols（アレクサンドル・アルフォンス・モーリス・ストール、1900-1973、以後 A. A. M. ストールと略記）の依頼により 1926 年に執筆し、翌年 10 月 26 日にストールに渡し、ストー

や作品を続けて執筆している。帰郷という大きな決意と、半生を振り返る作業でもある自伝の執筆には、どのような関わりがあるのだろうか。

これらの問いに答えることは、『幼なごころ』の登場人物たちが思い描く現実世界からの逃避から、『A. O. バルナブース全集』におけるバルナブースの自己探求を経て、ラルボーが創作活動を通して追い求めた理想像に迫ることであり、ラルボーの作品をより深く理解するための一助となろう。本研究で、ラルボーの作品の中から特に実人生との結びつきが強いとされるものを年代順に追いながら、『アレン』によって帰郷に至る過程を考察し、ラルボー文学における故郷の位置づけに一つの見解を示すことは、ラルボーの枕詞でもある「コスモポリティズム」の面に新たな見方を加えることになるだろう。

このような理由から、本研究はラルボー作品における「離郷」と「帰郷」の動きに注目し、以下の2部構成で分析を進めてゆく。まず第1部では、『幼なごころ』と『A. O. バルナブース全集』を対象とする。ラルボーの代表作として必ず挙がるこの二作品は、これまでの研究で繰り返し咀嚼されてきた。そこで本研究では、この二作品を故郷との関わりから見ることで、幼年時代のラルボーの姿を連想させる主人公たちが抱く離郷の希望、異郷への憧れの言動を通して、今いる場所の外へ出ようとする気概や、何でも知ろうとする好奇心を確認し、パリや欧州各国といった異郷を知りつつも、ブルボネ地方という帰る場所を持つラルボーに由来する主人公たちの原動力を示す。第1章では、大人たちの存在によって成り立つ故郷への反発が登場人物たちにうながす離郷の言動を確認する。続く第2章では、『A. O. バルナブース全集』について、主人公のバルナブースが異郷で試みる自我探求の様子を考察する。

続いて第2部では『アレン』の分析に焦点をあて、作品を概観した後、1920年代に手がけた複数の自伝的な著作物とブルボネ地方への意識の変化の様子、また『アレン』から得られる郷土愛や文学観を通して、ラルボーの精神的な帰郷を考察する。

なお『アレン』には、現在フランス語文献においても詳細な注釈を加えた版が存在せず、かつ未邦訳でもあるため、『アレン』の日本語訳（注釈および発話者を推定）および『アレン』に関連する資料、ならびにラルボーの略年譜を「別冊」として付した。

ルはそれを複写の後、1928年1月にラルボーに返却したが、作品は未発表のまま60年が経過したことがわかる。Cf. *ibid.*, p. 92. ラルボーが断続的に書いていた日記は1920年2月13日（金）を最後に途絶えたため、1931年9月7日（月）に再開するまでの約10年間、すなわち『アレン』執筆から出版までの間の動向を知る手がかりは他の時期と比べて少ない。そのため、特に2006年に『私の伝記のための覚え書き』が刊行されたことで、ラルボーと作品との関わりに新たな側面が加わると期待できる。

第1部 離郷

第1章 『幼なごころ』

第1節 少年たちの離郷

最初に取り上げる『幼なごころ』は、8歳から14歳の少年少女を主人公とする短篇集である。(表1参照)

表1：『幼なごころ』の収録作品と発表時期（収録順）

	題名（収録順・下段は邦題）	主人公の性別 （年齢）	執筆時期 （年）	掲載雑誌	掲載年月日
1	« Rose Lourdin » 「ローズ・ルルダン」	女（12）	1910	<i>NRF</i>	1910. 11月号
2	« Le Couperet » 「包丁」	男（7-8）	1899	<i>Phalange</i>	1910. 10. 20号
3	« L'Heure avec la Figure » 「《顔》との一時間」	男（? 「包丁」と同年代）	1914	—	—
4	« Dolly » 「ドリー」	女（12）	1905	<i>NRF</i>	1909. 10月号
5	« La Grande Époque » 「偉大な時代」	男（8）	1913	<i>Phalange</i>	1913. 10. 20号
6	« Rachel Frutiger » 「ラシエル・フリユティージェール」	女（12）	1913	<i>NRF</i>	1913. 5月号
7	« Devoirs de vacances » 「夏休みの宿題」	男（13）	1917	—	—
8	« Portrait d'Éliane à quatorze ans » 「エリアーヌ十四歳の肖像」	女（14）	1907	<i>Phalange</i>	1908. 8.15号
9	« Gwenny-toute-seule » 「ひとりぼっちのグウェニー」	女（12）	1912	補遺：1949年に限定出版の後、追加収録	
10	« La Paix et le Salut » 「平和と救い」	男（後年のラルボー）	1914	補遺：1941年に限定出版の後、追加収録	

この表が示すとおり、『幼なごころ』には執筆時期の異なる 10 篇が収録されている。ラルポーは、これらの短篇を単行本としての出版するために執筆していたのではなく、作品によっては『新フランス評論』や『ラ・ファランジュ』（表 1 では NRF および *Phalange* と表記）に掲載の後、1918 年に一冊にまとめた。

『幼なごころ』にはラルポーの幼年時代にも通じる次の三点が特徴的に描かれている。それは、彼が裕福な家庭に生まれ育ったこと、成長過程を過ごした環境が国際色豊かなものであったこと、そして、少年の頃から詩作に興味を抱いていたことである。ラルポーの主治医だった神経科医で作家の Théophile Alajouanine（テオフィル・アラジュアニーヌ、1890-1980）は、著書 *Valery Larbaud sous divers visages*（『さまざまな表情のものとヴァレリー・ラルポー』、1973）の補遺に収めた « Valbois et Valery Larbaud »（「ヴァルボワとヴァレリー・ラルポー」）の末尾に載せた書誌情報において、ラルポーが母方の屋敷のあるヴァルボワに触れている作品のうち、『幼なごころ』に関するものについて、「包丁」、「《顔》との一時間」、「偉大な時代」、「夏休みの宿題」を挙げている³⁹。この論考の中でアラジュアニーヌは、ラルポーの作品に直接ヴァルボワの名前は見つからない、と断りながらも、ヴァルボワでの幼年時代の思い出がこの 4 篇を生み出した⁴⁰、と述べている。

そこで本研究では、『幼なごころ』の 10 篇のうち、ラルポーの故郷を舞台とするこの 4 篇を分析対象として取り上げたい。『幼なごころ』は当初、後の単行本出版時に補遺として収録する「ひとりぼっちのグウェニー」と「平和と救い」を除く 8 篇の構成で、1914 年に出版する予定だったが、第一次世界大戦開戦のため延期となった。加えて「平和と救い」は、大人になったラルポーの視点で描かれているため、分析対象を補遺の 2 篇を除いた 8 篇に絞ることができる。そのうちラルポーが登場人物たちに自身の経験を投影したと考える作品が、いずれもブルボネ地方を舞台とし、ラルポーの家庭環境を想起させる内容を描いた上記の 4 篇だからである。

なお、本研究では、少女を主人公とする作品、「ローズ・ルルダン」、「ドリー」、「ラシェル・フリュティジュール」、「エリアーヌ十四歳の肖像」および補遺の「ひとりぼっちのグウェニー」の 5 篇を二次的に扱った。「ラシェル・フリュティジュール」の登場人物である姉妹がラルポーの母親や叔母をモデルとしていること、あるいは「エリアーヌ十四歳の肖像」の主人公エリアーヌがモンペリエの公園で見かけただけの少女から着想を得たものであるといった、それぞれの作品の成立過程から判断したからである。また、これらの短篇は、いずれも語り手が振り返る過去を題材としているため、一つの短篇集に収録されてい

³⁹ Cf. Théophile Alajouanine, « Valbois et Valery Larbaud », in *Valery Larbaud sous divers visages*, Paris, Gallimard, 1973, p. 164.

⁴⁰ Cf. « On ne trouve cependant nulle part dans l'œuvre de Larbaud de pages consacrées directement à Valbois. [...] Plus précis, et surtout d'une tout autre importance, sont les souvenirs d'enfance à Valbois qui ont fourni *Le Couperet*, *L'Heure avec la figure*, *La Grande Époque*, *Devoirs de vacances*, le sujet de plusieurs des *Enfantines*. », *ibid.*, pp. 160-161.

るとはいえ、これから離郷を果たそうとする少年たちが主人公である作品とは分けて考えなければならないからである。

それでは、この4篇の作品同士の結びつきを執筆時期の順に確認してみよう。まず「包丁」は、ラルボーが18歳の1899年頃に構想し、執筆を始めたもので、彼の創作活動の出発点として位置付けられる。主人公の Émile Raby (エミール・ラビー)、愛称「ミルー」は、物語の冒頭でまもなく8歳になる少年である⁴¹。ラルボーは、ミルーの誕生日を自身と同じ8月29日とした上で、ミルーに「この日付が自分の人生に大きな変化をもたらすに違いないと指折り数え⁴²」させている。

作品の舞台 l'Espinasse (レスピナス) は、ラルボーが少年時代に絶えず滞在していた、母の双子の妹である叔母、Jane Bureau des Étivaux (ジャーヌ・ビューロー・デ・ゼチヴォー、1843-1926) の所有地の名前で、ミルーの祖母 Mme Saurin (ソーラン夫人) は、この叔母の面影を描いたものである。また、作中に出てくる地名 Riveclaire-les-Bains (リーヴクレール=レ=バン) は、ラルボーが作った架空の地名ではあるが、「明るい河畔の湯治場」の意味や描写などから、ヴィシーの自宅近くを流れるアリエ川の河畔を指している⁴³。実際、アリエ川岸の風光明媚な様子は、ラルボーの命名どおりの「明るい河畔」で⁴⁴、その周辺に広がる公園には温泉水の湧き出る湯治場がある。さらにミルーの祖父と同じく、ラルボーの祖父も政治家であった。

ミルーはまた、ラルボーが1912年に執筆した「ひとりぼっちのグウェニー」にも間接的に登場する。成人した男性と思われる語り手の「私」は、滞在先の英国の別荘で知り合った12歳の少女グウェニーの面影を町の公園などに探す時の描写に、「ミルーと私は、子供たちの舞踏会や温泉地のホテルのサロンで、可愛い外国の少女たちに、こうしたおぼろげ

⁴¹ 「この8月29日で8歳になるエミール・ラビー、しかもその日付が自分の人生に大きな変化をもたらすに違いないと指折り数えている彼——『ミルー』[……]」(« Émile Raby, qui aura huit ans le vingt-neuf de ce mois d'août, et qui compte les jours comme si cette date devait apporter un grand changement dans sa vie, — « Milou » [...], « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, p. 410.)

⁴² *Ibid.*

⁴³ ラルボーは幼なじみの Marcel Ray (マルセル・レイ、1878-1951) に送った1912年9月11日付の書簡においても、ヴィシーを指して « Riveclaire » と呼んでいる。Cf. « « Impatient des mois, furieux des semaines » — déjà ! car avec ce temps froid et gris, Riveclaire a déjà son aspect sinistre de l'hiver : l'odeur des feuilles mortes au parc et la fumée amère des ménages pauvres dans mon quartier. », la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 11 septembre 1912, lettre 205, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, 3 tomes, introduction et notes de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1979-1980, t. II, 1910-1920, p. 196 et p. 315, notes. (« Riveclaire » のイタリック強調は原典) マルセル・レイはアリエ県の Saint-Léon (サン=レオン) 生まれの外交官。レイの父親が、ラルボーが通っていた L'école Carnot de Vichy の校長だったことから、ラルボーは母親の引き合わせによって1894年にレイと出会った。二人の交流は終生続き、その様子を三巻の書簡集で確認することができる。

⁴⁴ 岩崎力訳の『幼なごころ』には、訳者が1970年から1982年頃に撮影したヴィシーの公園など、ラルボーゆかりの地の写真が掲載されている。

で秘やかな思いを抱いたものだ⁴⁵」と、ミルーが語り手のかたわらにいた様子を描いている。ここでラルポーが語り手に設定した人物とは、彼自身の姿を反映している。それは、彼が「ひとりぼっちのグウェニー」の原稿をアンドレ・ジッドに送りながらも、内面の秘密を含んでいることから発表の保留を頼んだことが示している⁴⁶。またそれは、この短篇の結びの部分における次の段落からも判断できる。

というのも、もう何年も前から、私は十分大人のふりをしてきたからです。でも私にはどうしても上手く振る舞えないのです。大人たちの考えや話に興味を持とうと努めてはみたものの、やはりできなかつたのです。彼らの物の見方や真摯な情熱や野心を分ち持とうと試みたこともありましたが、成功しませんでした。もしかしたら私は間違っているのかも知れませんが、私の唯一本当の喜び、それは絵、おもちゃ、詩人たちの夢、ごくひそかな愛だけなのです。ただ私の邪魔だけはしないでいただきたいのです。そしてあなたの訪問はフローレンス荘に私を訪ねてきたあのグウェニーの訪問のようであってほしいのです。いかなる不純な言葉、いかなる邪悪な考えもあってはならないのです。かつて私がいたところで、私の子ども時代を取り戻させてほしいのです⁴⁷。

⁴⁵ « Milou et moi nous avons connu ces amours vagues et cachées de nous-mêmes, avec des petites étrangères dans les bals d'enfants et les salons d'hôtel des villes d'eaux. », « Gwenny-toute-seule », *Enfantines, Pléiade*, p. 528. なお、プレイヤー版の「ノート」にも、ミルーを「包丁」の主人公の名前であるとする注記がある。Voir « Notes », *ibid.*, p. 1231.

⁴⁶ ラルポーは、「ひとりぼっちのグウェニー」を執筆した直後の1912年5月にジッドに原稿を送った際、あまりにも内面の秘密をさらけ出しているため、この短編の発表を諦めた、との手紙を添えていた。Cf. « Dès que je sortirai, je vous enverrai les enveloppes rouges et en même temps le ms. de *Gwenny-toute-seule* que je renonce à publier, et que je brûlerais certainement si vous ne m'aviez pas réconforté un peu sur elle. Vous garderez ce cahier pour vous, n'est-ce pas et ne le montrerez à personne ? La chose est trop intime, et puis mal faite comme arrangement : c'est comme ces paradis qu'on fait dans une boîte d'aiguilles, dans une boîte vide, en carton avec un couvercle en verre bordé de papier découpé doré. », la lettre de Valéry Larbaud à André Gide [du début de mai 1912], lettre 91, in *Correspondance André Gide et Valéry Larbaud, 1905-1938*, édition établie, annotée et présentée par Françoise Lioure, introduction de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, *Cahiers André Gide*, n° 14, 1989, p. 126. (« paradis » のイタリック強調も原典)

⁴⁷ « Car j'ai assez de jouer à la grande personne depuis des années. Je m'y prends trop mal. J'ai essayé de m'intéresser à leurs idées, à leurs histoires, je n'ai pas pu. J'ai essayé de partager leurs manières de voir, leurs passions sérieuses, leurs ambitions ; je n'y ai pas réussi. J'ai tort peut-être. Mes seules vraies joies ont été mes images, mes jouets, les rêveries des poètes et le plus secret amour. Veuillez seulement ne pas me déranger, et que vos visites soient pour moi ce qu'étaient les visites de Gwenny dans Florence Villa ; nulle parole impure, nulle pensée méchante ; laissez-moi reprendre mon enfance où j'en étais. », « Gwenny-toute-seule », *Enfantines, Pléiade*, pp. 531-532. 例えばラルポーは、鉛の兵隊の収集を大人になっても続けていた。現在ヴィシー市立図書館がそのコレクションを展示している。

「ひとりぼっちのグウェニー」は、ラルボーの了解を得たジッドの手配によって 1949 年に草稿の複製が 150 部出版され⁴⁸、その後プレイヤード版出版時に『幼なごころ』の補遺として「平和と救い」とともに収録された。ラルボーはすでに病に倒れていたが、作品の執筆から 37 年が過ぎてミルーが再び姿を現すことになった。

次に、1913 年に執筆した「偉大な時代」の主人公 Marcel (マルセル) について、「突然彼は思い出す。ずっと前、5 年も前になるが (彼は 3 歳だったはずだ)、公園と鉄道を見下ろすテラスから、真っ白な列車を見たことがある⁴⁹」との記述から、年齢は 8 歳であろう。彼は父親が経営する工場の工場長の息子 Arthur (アルチュール) とその妹 Françoise (フランソワーズ) とともに夏休みを過ごしている。マルセルがパリの寄宿学校への入学を予定していること、また彼が « le fils du patron » (「社長の坊ちゃん」)⁵⁰であるがゆえに、アルチュール兄妹と遊ぶ際に彼らから手心を加えてもらったことを知って悲しむ様子から、作品の舞台は、ラルボーの父がブルボネ地方のサン=ティヨールで経営していたミネラルウォーターの鉱泉の工場と邸宅付近であると推測できる。加えて広大な庭に鉄道網を構築する遊びの中で、「ティエール行きの普通列車が、あいかわらず庭園のはずれを通過していた⁵¹」と、ブルボネ地方から隣接する地域へ向かう電車を登場させていることから、この作品の舞台もまたブルボネ地方であるとわかる。

続いて、1914 年に執筆した「《顔》との一時間」では、主人公の少年の年齢や名前が明らかでない。しかも彼はピアノ教師の M. Marcatte (マルカット先生) を待ちながら自宅のマントルピースの前にいるため、テキストからは外の風景を知ることはできない。しかし、ラルボーが後に同郷の友人で『アレン』の書評も手掛けた批評家アンリ・ビュリオ=ダシルに送った書簡に「ブルボネとは名付けていませんが、ここに描かれているのはヴァルボワの周囲の低い草木や田園です⁵²」と記していることから、「《顔》との一時間」の舞台が「包丁」と同じであると判断できる。

⁴⁸ Valery Larbaud, *Gweny-toute-seule*, Neuchâtel, Ides et Calendes, 1949. ヴィシー市立図書館所蔵 (Cote : A 107)

⁴⁹ « Et soudain il se souvient d'avoir vu, il y a bien longtemps, il y a cinq ans (il devait en avoir trois), il a vu, de la terrasse qui domine le parc et le chemin de fer, un train tout blanc. », « La Grande Époque », *Enfantines, Pléiade*, p. 443.

⁵⁰ *Ibid.*, p. 471.

⁵¹ « Et les trains omnibus qui vont à Thiers continuaient à passer au bout du parc. », *ibid.*, p. 446. ティエールはブルボネ地方に隣接するオーヴェルニュ地方ピュイ=ド=ドーム県東部の町で、ラルボーの自宅があったヴィシーからは直線距離で 40km 足らずである。ラルボーは「偉大な時代」を執筆する前年、1912 年 8 月 8 日 (木) 付の日記に、当地を旅行した時の様子を英語で記している。« After lunch and in spite of the rain, in the car (with Mother, her maid and the dogs) to Thiers, Where I saw L — and bought a knife (very pretty : Thiers steel and mother-of-pearl). », Valery Larbaud, *Journal*, éd. définitive, texte établi, préfacé et annoté par Paule Moron, Paris, Gallimard, 2009, p. 102. (下線強調は引用者)

⁵² « Le Bourbonnais n'y est pas nommé, mais ce sont les sous-bois et la campagne autour de Valbois. », la lettre de Valery Larbaud à H. Buriot-Darsiles du 23 février 1925, citée par « Notes », *Pléiade*, p. 1226.

最後に、1917年に執筆した「夏休みの宿題」は、パリの中学校に通う少年が別荘で過ごすヴァカンスの様子を描いたものである。主人公の名前は不明だが、家に遊びに来た従兄の Mathieu (マチュー) に「君のかい？ この本、このライブニッツの本は？ これから第三学年に入るところだというのに、もう哲学級の準備かい？⁵³」と尋ねられていることから、13歳頃であろう。そして、別荘に到着した時の「すぐにまた僕に慣れないわけではない部屋で、もう一度風の語る長い話に耳を傾け、マントルピースの大理石の石目の中に例の細い《顔》を見出したのだったが、僕を見つめるその顔は、非難と悲しみに満ちていた⁵⁴」との描写から、主人公の少年が先述の「《顔》との一時間」の少年と同一人物であると判断できる。また、少年一家が向かう La Bourboule (ラ・ブールブール)⁵⁵もピュイ＝ド＝ドーム県の県庁所在地 Clermont-Ferrand (クレルモン＝フェラン) の南西に位置する保養地で、ブルボネ地方に隣接する地域である。

これらのことから、少年を主人公とする4篇の舞台が、いずれもブルボネ地方であり、ラルボーの故郷との結びつきの強い作品群であると言える。では、これらの4篇において、彼の幼年時代はどのように現れているのだろうか。ラルボーの生い立ちを『幼なごころ』における記述を照らし合わせながら確認しておこう。

ラルボーは1881年8月29日に父 Nicolas (ニコラ)、母 Isabelle (イザベル) との間のひとり息子として、フランス中部の有名な温泉都市ヴィシーに生まれた。父ニコラはこの土地でミネラルウォーターの鉱泉を開発・経営し、今日ヴィシーが鉱泉保養都市として繁栄する基礎を築いた人物である。ラルボーが誕生した当時、父は59歳で、ラルボーが8歳の時に他界した。以後、鉱泉はラルボーの母イザベルが管理することになり、商才に長けていた母親が手腕をふるって莫大な財をなした。ラルボーは事業の後継者として複数の所有地などの財産を相続したため、労働によって生計を立てる必要がなかった。しかし、ラルボーの母親が、ラルボーの成人後も彼の資産を管理し、行動を制限するなど大きく影響していたことは留意しておかなければならない。

ラルボーゆかりの地ヴィシーは、18世紀以来、温泉地としてヨーロッパに名を広めていた。さらにナポレオン三世が好んだことで、パリやニースと並ぶ国際色の濃い町となった。それゆえ、ラルボーがヴィシー生まれであったことが、彼のコスモポリティズムを形成する要素の一つになった。彼は生まれつき虚弱だったため、子供の頃から母親と療養をかね

⁵³ « C'est à toi, ce bouquin-là, le Leibniz ? Tu vas passer en troisième et tu prépares déjà la philosophie ? », « Devoirs de vacances », *Enfantines, Pléiade*, p. 488. 当時のフランスの教育制度については、『小学館ロベール仏和大辞典』、1988年、908頁の表を参照した。

⁵⁴ « Nous avons écouté une fois encore la longue histoire du vent dans les pièces qui ne s'étaient pas réhabituees tout de suite à nous, et nous avons retrouvé, dans les veines du marbre de la cheminée, l'étroite Figure, qui nous a regardé d'un air de reproche et de tristesse. », « Devoirs de vacances », *Enfantines, Pléiade*, p. 486. (下線強調は引用者)

⁵⁵ « Mais bientôt ont commencé les préparatifs du départ pour La Bourboule... », *ibid.*, p. 488. (下線強調は引用者)

た旅行に頻繁に出かけていた。当時、ヨーロッパを旅することは教育の一環としてフランスの富裕階級の伝統であったが、彼もまたフランス国内のみならず、断続的にほぼ全ヨーロッパを旅行した⁵⁶。

学齢期に入り、ラルボーの生活環境はさらに国際的なものになった。彼が 1891 年から 1894 年までを過ごした Collège Sainte-Barbe-des Champs (コレージュ・サント=バルブ=デ・シャン) は、パリの Quartier Latin (カルチュエ・ラタン) に本校を持つカトリック系の私立学校であった。そして、パリ南郊の Fontenay-aux-Roses (フォントネー=オ=ローズ) にある分校において寄宿生として過ごした生活が、ラルボーの広い視野の形成に大きく寄与することになる。

ラルボーがフランス国内外の多くの町で過ごした時間は、彼のコスモポリティズムを育むとともに、言葉への興味を抱かせた。裕福な家庭の中で彼は文学に出会い、詩作を試みる少年だった。後に改めて触れるが、1920 年にスペイン語で執筆したエッセー « Fragment d'autobiographie » (「自伝断章」)⁵⁷には次のような記述がある。

私はその頃とても体が弱く、病気がちだった。それで、深い孤独の中で、外界との接触が一切ない、すべてから身を引いた病人の生活を送っていた。時々両親とともに旅行したり、どこかの町に滞在したり、温泉地で湯治することもあった。ジュネーヴ、パリ、ピレネー地方やサヴォワ地方の温泉地で。しかしいつも孤独で、すべてを自分とは関わりのない光景として眺めており、自分で作り出した内面世界から外に出ることは決してなかった。その内面世界の中で、私はあらゆる種類の冒険と情熱、敗北と勝利を生きていた。すべてが夢想だったが、やがて少しずつ形をなし、「言葉のない」長い詩を形作っていった。6 歳か 7 歳ごろのある日、私はそれらの夢に文学的な形を与えたいと思った⁵⁸。

こうした経験は、以下に挙げるように、ラルボーが『幼なごころ』に描いた情景に重なる

⁵⁶ ラルボーが訪れたのは、イギリス、アイルランド、スウェーデン、デンマーク、ベルギー、オランダ、スイス、ドイツ、ルクセンブルグ、スペイン、ポルトガル、イタリア、ギリシャ、アルバニア、ロシアなどである。さらに、イギリス、スペイン、イタリアには数回訪れていた。池田公磨訳『めばえ (アンファンティヌ)』、240 頁を参照した。

⁵⁷ « Fragment d'autobiographie », traduit de l'espagnol par Nicole Canto, in *Europe revue littéraire mensuelle*, n° 798, 1995. pp. 7-11.

⁵⁸ « J'étais alors très fragile et malade ; je vivais dans une grande solitude ; une vie de malade, sans contact avec l'extérieur, en retirant de tout. De temps à autre je partais avec mes parents pour un voyage, ou un séjour dans une ville, ou une saison dans une station thermale. Genève, Paris, les eaux des Pyrénées ou de Savoie. Mais toujours dans la même solitude, regardant tout comme un spectacle dont je ne faisais pas partie, sans sortir d'un monde intérieur, de mon invention, où je vivais toute sorte d'aventures, de passions, de défaites et de triomphes. Tout cela était rêvé mais peu à peu prenait forme, s'organisait en de longs poèmes « sans mots », jusqu'au jour où, à l'âge de six ou sept ans, j'eus le désir de donner une forme littéraire à ces rêves. », *ibid.*, p. 8.

だろう。「包丁」のミルーは « La Misère du couperet » (「包丁のみじめさ」) という「お話」を作ることに気持ちを集中させるが、納得のゆく言葉が見つからず延々と苦しんだ後に、ようやく一つの単語にたどり着く。ミルーにとって、それはあたかも戦いである。

しかし単語が、フランス語のすべての単語がそこにおいて、軍隊のように隊列を組み、彼の行く手をふさいでいるかのようだ。勇ましくも彼はそれらの単語に向かって突進し、まず一列目に並んでいる自分のよく知っている二つか三つの単語を攻撃する。しかしそれらの単語さえ彼を押し戻す。そして単語のすべての隊列が彼を取り囲み、じっと動かず、深々と、しかも城壁のように高くそびえ立っている。彼は最後の突撃を試みる。おお！ほんの百ほどの単語の支配者になって、自分が言わなければならないあのとても大切なことを、それらの言葉に何が何でも言わせなければ！最後の努力が彼の精神を緊張させる。それは膨れあがって今にも破裂しそうだ。まるで、どうしようもなく硬直した筋肉のようで、痛いほどだ……突然彼は降参し、企てをあきらめる。打ちのめされ、士気を失い、果てしない虚無感が彼の中に広がる。

とその時、なぜなのかどうにも説明ができないのだが、「包丁のみじめさ」という題のお話に含まれるはずだったことをすべて網羅する一つの単語が見つかる。そして彼はシーツの下に頭を突っ込み、手をまるめて口元に当て、聞き取れないほどの小声でささやく。

「ジュステイーヌ…… ジュステイーヌ…… ジュステイーヌ……」

そしてやっと眠りに落ちる⁵⁹。

また、「偉大な時代」では、主人公のマルセルが語彙の豊かな友人アルチュールに屈辱を感じる。マルセルの内心を表した描写には、執着とも言えるような言葉についての鋭敏な感性が見られる。

(「アルチュールのやつ、なんて頭が良いのだろう」屈辱を覚えながらマルセルは考

⁵⁹ « Mais les mots, tous les mots de la langue française sont là, rangés comme une armée qui lui barre la route. Bravement, il s'élançait sur eux, et s'attaquait d'abord à deux ou trois mots qu'il voit au premier rang, et qu'il connaît bien. Mais ceux-là même le repoussent. Et toute l'armée des mots l'entoure, immobile, profonde, haute comme des murailles. Il tente un dernier assaut : Oh ! se rendre maître d'une centaine de mots seulement et les forcer à dire cette chose très importante qu'il a à dire ! Un dernier effort tend son esprit, cela se gonfle à éclater, c'est un muscle désespérément raidi qui fait mal... Il succombe soudain, et abandonne l'entreprise ; accablé, avec une sorte d'écoeurement, et la sensation d'un vide immense en lui-même. / Et c'est alors qu'il trouve un mot qui contient d'une façon inexplicable tout ce qu'aurait embrassé la fable intitulée « la Misère du couperet » ; et, la tête sous les draps, la main arrondie sur sa bouche, il chuchote imperceptiblement : / « Justine... Justine... Justine... » / Et s'endort à la fin. », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, pp. 418-419.

える。「ヴァニラの聖油なんて、僕には絶対思いつかないな」——学校の先生が聖油 « le saint-chrème » の話をしてくれた時、マルセルは、てっきりクリーム « la crème » のことだと思っていた。でもそれがあまりにも完璧なクリームだから男性形になって、しかももっとはっきり区別をさせるために *h* をつけて書くのだと考えていたのだ⁶⁰。

さらに、「夏休みの宿題」にも言葉と格闘する少年が現れる。この短篇は語り手が一人であるにもかかわらず、主語人称代名詞は、通常「僕たち」、「私たち」を表す一人称複数形の « nous » である⁶¹。語り手の « nous »（「僕」）は、夏休みの思い出を詩にするため、手始めにホテルでの生活と、中庭で羽根つき遊びをしている二人の外国人少女の描写を試みる。しかし、丸一日と夜の半分を費やしても、彼には半ダースほどの詩節が書けたに過ぎなかった。しかも音韻に重大な誤りがあることを発見し、彼は再び頭を悩ませる。ようやく韻律法の問題も解決した「僕」は、昔の夏休みの思い出をもとに次の詩に取りかかるが、彼にはさらなる苦しみが待ち受けていた。以下の長く連なる独白には、その苦悩がにじみ出ている。

そしてまたしても、言葉との格闘だった。またしても言葉は僕を拒むのだった。とはいえ、本の中で初めてそれらの単語に出会った時、僕はそれらを喜んで迎えたものだった。まれにしか見かけない言葉、夢に浸された言葉、例えばある道具の各部の名称のように極めて正確に事物を指し示す言葉、天候を表したり、または「帆柱」とか、「帆」とか、ある事物全体を表すための言葉など、僕はそれらの言葉を収集したのだった。「これは覚えておくといい」と思い、心の中に蓄えたものだ。しかし、それらが必要な時になって、彼らは身をかわすのだった…… それにこれほどの量の印象を配列し、それらに動きを与えるとすると、輪回しの細い棒で池の水面全体を掻き回そう

⁶⁰ « (« Comme Arthur est intelligent, pense Marcel, humilié ; jamais je n'aurais trouvé ce chrème à la vanille. » — Quand le maître avait parlé du saint-chrème, Marcel avait bien pensé à de la crème ; mais c'était une crème si parfaite, qu'on l'appelait *le* crème, pour mieux la distinguer, et qu'on écrivait son nom avec un *h*.) », « La Grande Époque », *Enfantines, Pléiade*, p. 448. (イタリック強調は原典)

⁶¹ 「夏休みの宿題」における主語人称代名詞 « nous » の使用について、先行研究には「子供というもの」の総称、あるいは作品が回想形式であることから「思い出している大人の « moi » と、思い出されている少年時代の « moi » の融合」(Cf. « Dans une autre pièce, les *Devoirs de vacances*, le narrateur assume encore plus de communauté affective avec le héros, si l'on peut dire. Contaminant les deux « moi-s », celui de l'adulte qui se souvient, et celui de l'enfant dont on se souvient, il relate l'histoire en première personne du pluriel. », Stéphane Sarkany, « L'Art des enfantines de Valéry Larbaud », in *Colloque Valéry Larbaud*, tenu à Vichy du 17 au 20 juillet 1972, Paris, Nizet, 1975, p. 236.)、また、主人公が成長期にあることから「主人公の少年の中で自我の分裂が始まることに起因する、『ふたつの自我』の芽生えによるもの」(樋口裕一「見えない手・見えない聞き手—V.ラルボーの《語り》と《人称》」、国学院大学外国語研究室編『Walpurgis』、1984年、146-147頁)とする見解がある。

とするようなものだった。それによろやく僕の手元に戻ってきたわずかな単語も、リズムの歯車装置に巻き込まれるのを拒むのだった…… それだから僕は絶望し、力なく意気消沈してしまう…… 詩作法の規則はこんなによく知っているのに！ 初めて書いた詩はそんなに悪くなかったのに……⁶²

このような『幼なごころ』における少年たちの様子の描写を通して、幼年時代のラルボーの姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。彼らが言葉に対峙する様子とは、すなわちラルボーの姿を映したものであり、彼らが真摯に取り組み、苦悩の結果生み出した言葉がテキストに現れていると言えよう。ラルボーは、学科では地理や地質学を好むと同時に、早くからギリシャ語、ラテン語、英語などの外国語に興味を示し、また、度重なる旅行の影響から、イタリア語、スペイン語にも精通していった。こうした環境と経験によって、ラルボーの創作活動の素地が育まれたわけである。

だが物理的に恵まれた環境にいなながらも、母親の存在と影響力の大きさが、ラルボーに後の人生にも長く尾を引く辛さを与えていた。彼の母親イザベルは、夫の死後も女手一つで事業を継続、繁栄させた実務家だったが、性格は頑固一徹で、自分の言い分を押し通す面があったようである。ラルボーは31歳頃の日記に、母に口やかましく指図されて育ったことから、自己の半生を「囚人同然だった⁶³」と書き、54歳頃にも「私の生涯を振り返ると、12歳（サント・バルブを出た年）までは、健康にこそ恵まれなかったものの、まあまあ幸福だったと思う。13歳から17歳にかけては、だんだん幸福の度合いが薄れ、17歳か

⁶² « Et une fois encore, ce fut la bataille avec les mots. Une fois encore ils se refusaient à nous. Pourtant nous les avons bien accueillis lorsque nous les avons rencontrés pour la première fois dans les livres. Ceux qui sont rares et tout baignés de songe ; ceux qui désignent les choses avec une grande précision, comme les noms des parties d'un instrument ; ceux qui sont faits pour dire un aspect du temps, ou pour exprimer un ensemble d'objets comme « la mâture », « la voilure » ; nous les avons recueillis ; nous avons pensé : « C'est bon à savoir », et nous les avons thésaurisés dans notre cœur. Et voici que maintenant, quand nous avons besoin d'eux, ils se dérobaient... Et puis, une telle masse d'impressions à coordonner et à mettre en mouvement, c'était comme si nous eussions voulu agiter, avec le bâtonnet d'un cerceau, toute la surface d'un étang. Enfin, le peu de mots qui nous viennent refusent de se laisser prendre dans l'engrenage du rythme... Alors, nous retombons, sans forces, désespéré... Pourtant, nous savons si bien les règles de la prosodie ! Pourtant, notre première poésie n'était pas si mauvaise... », « Devoirs de vacances », *Enfantines, Pléiade*, pp. 501-502.

⁶³ 1912年8月5日の日記における記述による。1912年に加え、ラルボーは1917年から1920年の日記の全文を英語で書いたが、これは母親に読まれることを防ぐためでもあった。Cf. « I like the breakfasts in Mother's room between 7¹/₂ and 8 a.m. (what there is to be seen from the window, etc.) It is curious how long it has taken me to find again something interesting or indeed worthy to be loved about here where I have been so long as a prisoner and in these places which I had come to hate so much. », Valéry Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 99. (下線強調は引用者) 同じ日の日記には « (As to Vichy, all my memories of it are bad—and, with Moulins, the worst in my life.) » とも書かれている。

ら成年に達するまでは本当にひどく不幸だった⁶⁴」と記している。公開や出版を目的とせずに綴る日記の中で反復する記述は、そこに思い出を書き残すことよりもむしろ、書くことによって過去に受けた心の傷の痛みを和らげようとする治癒行為を示している。それほどまでに、ラルボーが故郷で過ごす中で母親との関係を通して得た経験や、それにとまなう感情は、後々まで彼を支配し続けたようである。

こうした環境からの脱却への試み、その延長としての旅を題材とするものが多く見られることから、ラルボーの作品はしばしば、「逃避の文学」と評されてきた⁶⁵。その逃避行為には二つの種類が見られる。その一つは、書くことによって作品の中に別の世界を創り出すこと、もう一つは旅に出ることである。ラルボーがあわせ持つこれら二種類の逃避の行為が、『幼なごころ』や『A. O. バルナブース全集』において、登場人物が空想の世界の中で、あるいは旅先で創作を行うことによって現れ、ラルボーの作品に旅と執筆との密接な関わりをもたらしている。

しかし、ラルボーの作品史における『幼なごころ』を離郷への序章の作品として見た場合、少年たちが抱く「ここではないどこか」への憧れは、果たして「逃避」でしかないのだろうか。そこで、『幼なごころ』に描かれた彼らの言動をもとにラルボーと故郷との関係を考察し、ラルボーの創作史における離郷の過程を見ることにしよう。次節では、先に定めたブルボネ地方を舞台とする主人公が少年たちである4篇をもとに、ブルボネ地方の言葉の使用という地域特性を示す要素から、当時のラルボーの言語観を規定し、少年たちが抱く離郷へのあこがれについて検討したい。

第2節 「未知の祖国」を求めて

『幼なごころ』の登場人物たちは、まだ大人の庇護、あるいは監視のもとでの限られた空間で生活している。そして先に挙げた4篇の舞台がブルボネ地方であることを、本節ではさらに「包丁」における地方語の使用によって確認しておきたい。登場人物の一人である12歳の少女 Julia Devincet (ジュリア・ドヴァンセ) は、主人公ミルーの父親が所有する土地の小作人の娘で、母親の死後3年間を南仏の親類宅で過ごしていたため、わずかにガスコーニュなまりで、「ブルボネ地方の言葉は彼女が軽蔑するこの土地の人たちをからかいたい時以外は一言も口にしない⁶⁶」少女である。そのジュリアのミルーへの発言を見ることにしよう。次の引用は、ジュリアがミルーと他愛のない言い合いの後に発したもので

⁶⁴ 1935年2月25日の日記に記載。Cf. « [...] si je considère ma vie, je trouve : jusqu'à l'âge de douze ans (mon départ de Sainte-Barbe), assez heureux malgré une mauvaise santé ; de 13 à 17 ans, de moins en moins heureux, et vraiment très malheureux de dix-sept ans à ma majorité [...] », *ibid.*, p. 1359.

⁶⁵ Cf. Marcel Thiébaud, *Évasions littéraires*, Paris, Gallimard, 1935.

⁶⁶ Cf. « [...] elle n'emploie jamais un seul mot bourbonnais, sauf quand elle veut se moquer des gens du pays, qu'elle méprise. », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, pp. 413-414.

ある。

ジュリアはやりかけの仕事をテーブルに放り出し、両腕を頭の上に持ち上げて、思い切り伸びをしながら「うわあ！ のびのびする！」と言う⁶⁷。

標準フランス語の辞書やフランスの地方語の辞書において、現時点で「のびのびする」にあたる « s'égnauler » を明確に定義したものは見当たらないが、ブルボネ地方に隣接するオーヴェルニュ地方ピュイ＝ド＝ドーム県出身の作家 Marcel Laurent (マルセル・ローラン、1912-1985) の私家版の研究書、*Fermina Marquez & Enfants de Valery Larbaud : dialogue avec les chefs-d'œuvre* (1981) によれば、「s'égnauler」はブルボネ地方に近い Limagne (リマーニュ) 北部の言葉で、標準フランス語の « s'étirer » (「伸びをする、手足を伸ばす」) を意味する言葉である⁶⁸。次にもう一つ、ジュリアの発言を少し長くなるが引用して見よう。

「エミールさま、優しくしてくださいな。膝をついてお許しを乞います。許してください？ くださるのね。まあ、嬉しい！ もう二度とあなたを怒らせるようなことはしないわ。じゃ、おんぶしましょうか。私の背中にお乗りなさい。私の首に腕を巻きつけて、そう、私が痛がるなんて気にしなくてもいいわ、しっかり締めつけて。今なら私の頭を小突いてもいいわ。乱暴されると嬉しいの。でも髪の毛は引っ張らないでね。おんぶ！ おんぶ！ ちっとも重くないのね！ あなたのパパがいくらお金持ちでも、あなたはあまり長生きできないと思うわ、かわいそうな『坊や！』⁶⁹」

⁶⁷ « Julia pose son ouvrage sur la table, élève ses bras au-dessus de sa tête et s'étire tant qu'elle peut, en faisant : « Ouââ ! Je m'égnaule ! », *ibid.*, p. 415. (下線強調は引用者)

⁶⁸ Cf. « Quelques termes de patois « bourbonnichon », comme nous disons en Auvergne, donnent une saveur de terroir à cette délicate étude de l'âme enfantine. Du patois, c'est-à-dire du français écorché — non une vraie langue comme notre dialecte d'oc — nous en avons, quand parle le fermier Devincet (p. 409), ou quand M. Raby veut montrer ses connaissances « populaires » (« De làvòu que t'es, gatte ? »). Nous usons aussi (la Limagne du Nord est proche du Bourbonnais) de l'expression pittoresque : « s'égnauler ». C'est s'étirer, quand on n'a aucune besogne à laquelle s'appliquer. Aujourd'hui, on appellerait cela une « relaxation », un peu bruyante, il est vrai. Mais la devise moderne n'est-elle pas : « là où il y a de la gêne, il n'y a pas de plaisir » ? Ou : vive la « décontraction » ! », Marcel Laurent, *Fermina Marquez & Enfants de Valery Larbaud : dialogue avec les chefs-d'œuvre*, Maringues, Chez l'auteur, 1981, p. 82. (下線強調は引用者) また論者が2010年9月に、ラルボーの出身地ヴィシーに70年以上住む女性に尋ねたところ、現在は使わない言葉だが(「のびのびする」という)意味は分かる、とのことであった。

⁶⁹ « Monsieur Émile, soyez bon. Je vous demande pardon à genoux. Vous me pardonnez ? Oui. Oh ! comme je suis contente ; jamais plus je ne vous ferai enrager. Eh bien ! je vais vous porter à la chèvre-morte. Grimpez sur mon dos. Vos bras autour de mon cou, là, n'ayez pas peur de me faire du mal, serrez-moi bien. Maintenant, vous pouvez cogner. J'aime à être brutalisée. Mais ne me tirez pas les cheveux. À la chèv' morte ! à la chèv' morte ! Vous n'êtes pas lourd, vrai ! Je crois que malgré tous les sous de votre papa, vous ne ferez pas de vieux os,

ここでラルボーが括弧に入れて示した「坊や」を意味する « chetit » は、「ジュリアがブルボネ地方の人を軽蔑したい時に使うブルボネ地方の言葉」として強調されている。実際、ベリー地方とブルボネ地方の地方語の辞書、*Dictionnaire du français régional du Berry-Bourbonnais* (1993) において、「アリエ県、シェール県南部で使われる『子供』⁷⁰」の意味として、上記の引用を用例として挙げられている。このようなブルボネ地方の言葉の使用は、作品の舞台を特定する一助となる。また、上に挙げた二つの引用から、ジュリアがブルボネ地方の言葉である「のびのびする」や「坊や」を意図的に使ってミルーをからかう様子を、ラルボーが引用符 « » (ギユメ) を用いて強調したと考えられる。

さらに、地の文における標準フランス語での記述と、ジュリアの会話に組み込まれた地方語との対比を、「包丁」の執筆に取り組んでいた頃のラルボーと、彼が思い出す幼年時代の自分の姿との対比に置き換えることができるだろう。そこにはラルボーが年齢や経験を重ね、パリや外国での生活を好むようになるにつれて抱くようになった、郷里への思いが投影されている。ジュリアがブルボネ地方の人を軽蔑し、彼らを揶揄する時に限って土地の言葉を用いることを通して、かつてラルボーが抱いていたブルボネ地方における日常生活への反発や、郷里を拒む思いが浮かび上がってくるからである。

さて、先に見た少年たちは、物静かであったり活発であったり、それぞれ性格は異なるものの、いずれも生きることに對し野望にも似た望みを抱いている。ここで興味深いのは、少年たちが「地図」に興味を示していることである。そこで次に「地図」を含む描写をもとに少年たちの言動を見ることにしよう。まず、「包丁」では、大人たちの俗物的な会話に辟易したミルーが自分の空想の世界に入り込み、想像上の友人 Dembat (ダンバ) に旅をさせる。

ダンバは地図に載っているあらゆる国、ガリエニ中佐の本に描かれているすべての国々を遍歴する。(ミルーはジュール・ヴェルヌが好きではない、本当に起こったことではないから。) ダンバは行動する人だ。世界がどのように創られているか、この目で確かめに行く⁷¹。

mon pauvre « chetit ! » », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, p. 416. (下線強調は引用者)

⁷⁰ « n.m. Enfant [Allier ; Cher : sud] », Pierrette Dubuisson, Marcel Bonin, *Dictionnaire du français régional du Berry-Bourbonnais*, Paris, Bonneton, 1993, p. 44, s.v. chetit.

⁷¹ « Dembat parcourt tous les pays qu'on voit sur les cartes et dans les livres du lieutenant-colonel Gallieni. (Milou n'aime pas Jules Verne, parce que ce n'est pas arrivé.) Dembat est un homme d'action : il va voir comment le Monde est fait. », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, pp. 410-411. (下線強調は引用者) 幼年時代のラルボーは、Jules Verne (ジュール・ヴェルヌ、1828-1905) の小説の読書経験によって未知の世界への空想に熱中したようである。Cf. Béatrice Mousli, *Valery Larbaud*, Paris, Flammarion, 1998, p. 24. Joseph Simon Gallieni (ジョゼフ・シモン・ガリエニ、1849-1916) は、フランスの軍人で最終階級は陸軍元帥。フラン

そのミルーにとって「地図」から連想するものとは「まだ見ぬ故郷」であることが、次の描写から推測できる。彼は、しっかり者の祖母が「われわれを追い出した法王が／疝痛でおっ死んだ／別の法王に呼び戻されて……⁷²⁾」と歌うイエズス会の歌に耳を傾けながら次のように空想する。

ああ！ 英雄的な美しい音楽！ その音楽が鳴り響くなかで、黄金のよろいに身を固めた騎士たちの騎馬芸が繰りひろげられる。そこはモレス侯爵もミゾンも行ったことのない国、地理学者が未知の部分〔パルティ・アンコニュ〕と呼ぶ国だ。ミルーはそれを未知の祖国〔パトリ・アンコニュ〕！ と発音する⁷³⁾。

この直後に8歳の誕生日を迎える幼いミルーは、モレス侯爵やミゾンの政治がらみの活動を詳しくは知らないだろうが、未知の世界に自分の拠り所があることを感覚的に理解しているようである。そして誕生日を迎えた日に、ミルーは自分に過剰な期待を寄せる大人たちへの嫌悪感を新たにし、自分の考えをジュリアに打ち明ける。

一気に彼は自分の計画を彼女に聞かせてやる。15歳になったら両親の家から逃げ出して、プロシア軍に入隊するんだ、そして……⁷⁴⁾

この「両親の家から逃げ出して」で用いられた「逃げ出す」を意味する動詞 « s'enfuir » が、

ス領マダガスカル、スーダン等の植民地勤務の経験による著書はラルボーの愛読書だったようである。

⁷²⁾ « Un pape nous exila, / Il mourut dans les coliques ; / Un autre nous rappela... », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, p. 413. Anne Chevalier (アンヌ・シュヴァリエ) は、この歌詞はラルボーの記憶によるもの、あるいはフランスの歌手 Pierre-Jean de Béranger (ピエール＝ジャン・ド・ベランジェ、1780-1857) の1819年の歌 « Les Révérends Pères » (「司祭様たち」) の以下の歌詞の替え歌ではないかと指摘している。Cf. « Un pape nous abolit ; / Il mourut dans les coliques ; / Un pape nous rétablit : / Nous en ferons des reliques », Anne Chevalier, « La blessure du « Couperet » ou l'enfant et les mots », in *Roman 20-50, Revue d'étude du roman du XX^e siècle*, n° 37, Centre d'étude du roman des années 1920 à 1950, 2004, p. 51, note 5.

⁷³⁾ « Oh ! la belle musique héroïque, sur laquelle tournoient des fantasias de cavaliers aux armures d'or, dans un pays où ni le marquis de Morès ni Mizon ne sont encore allés, dans un de ces pays que les géographes désignent par les mots : partie inconnue, que Milou prononce patrie inconnue! », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, p. 413. (« patrie » のイタリック強調は原典、下線強調は引用者) Marquis de Morès (モレス侯爵、1859-1896) はフランスの冒険家、政治活動家 (反ユダヤ主義者)、Louis Alexandre Antoine Mizon (ルイ＝アレクサンドル＝アントワヌ・ミゾン、1853-1899) はフランスの探検家。

⁷⁴⁾ « D'une haleine, il lui [Julia] apprend ses projets : quand il aura quinze ans, il s'enfuira de chez ses parents, il ira s'engager dans l'armée prussienne et... », *ibid.*, pp. 421-422. (下線強調は引用者)

「〔～から〕逃げ出す行為を開始することに力点を置いて用いられる⁷⁵⁾」ものであることも、ラルボー作品に付随する「逃避の文学」の印象を裏付ける一例になろう。だがミルーはただ逃げるのではなく、まだ漠然とではあるが新天地を求めている。それは、同じ少年が主人公と考えられる「《顔》との一時間」の次の描写に見られる。

「顔」よ、高貴な「顔」よ、解放の時を待ちながら、夕暮れの大陸で別の旅をしよう。
庭の上の空は青と金色に彩られて、別世界の地図のようだ……⁷⁶⁾

また、「偉大な時代」では、マルセルたちの国を築く道具として地図が用いられる。次の二つの例を見てみよう。

寝るまでの間、マルセルがつくった島の地図を前にして、条約の原案が起草される。島を三分割してそれぞれ独立国にするのだ⁷⁷⁾。

しかし重要なのは庭で勃発した戦争を続けることだ。だからそれは三人〔マルセル、アルチュール、フランソワ〕の英雄同士の戦いになるだろう。そして雨が止んだら、征服した領土を分割し、世界地図が塗りかえられるだろう⁷⁸⁾。

けれども休暇中に思い描いた帝国が成立することはなく、マルセルがパリの寄宿学校へと旅立つ日がやって来る。過干渉な両親から離れて暮らす少年の内心を、語り手は次のように描いている。

こんなふうには彼にしか関係のないこと、彼らには全く無関係なことに、両親がいちいち口をさしはさむなどということが、一生続くのだろうか？ 少なくとも寄宿学校ならうるさくないはずだ。彼は家を離れるのを、とても喜んでいる。寄宿学校におおいに期待しているのだ⁷⁹⁾。

⁷⁵⁾ 『小学館ロベール仏和大辞典』、1988年、897頁を参照した。

⁷⁶⁾ « Figure, noble Figure, en attendant l'heure de la délivrance, allons faire un autre voyage dans les continents du soleil couchant : le ciel au-dessus du jardin est comme la carte, bleue et dorée, d'un autre monde... », « L'Heure avec la figure », *Enfantines, Pléiade*, p. 434. (下線強調は引用者)

⁷⁷⁾ « À la veillée, devant une carte de l'île, dressée par Marcel, on jette les bases d'un traité. L'île est divisée en trois États indépendants. », « La Grande Époque », *Enfantines, Pléiade*, p. 450. (下線強調は引用者)

⁷⁸⁾ « Mais il s'agit surtout de continuer les guerres commencées dans le jardin. Ce sera donc une guerre entre les trois héros, et, quand il ne pleuvra plus, on se partagera les territoires conquis et on remaniera la carte du monde. », *ibid.*, p. 461. (下線強調は引用者)

⁷⁹⁾ « Est-ce que, toute sa vie, ses parents continueront ainsi à se mêler de ce qui le regarde et de ce qui ne les regarde pas ? Au moins, au collège, il sera tranquille. Il est bien content de quitter la

「夏休みの宿題」の少年も、地図を自ら作ることに関心がある。その様子は、保養地への出発の前日にパリの百貨店で文房具を選ぶ喜びとともに現れている。

僕たちは清書用のきれいな紙、ペン先（箱ごと）、定規、大きな消しゴムは柔らかくてしっとりくるやつを買った。それに、バラ色、薄いブルー、緑、すみれ色の厚手の吸い取り紙が詰まった包みも一つ。それから、地図を描くために、12色の色鉛筆一箱とトレーシングペーパーも。出発の前日、僕たちはそれらを全部買うために、朝早くルーヴル百貨店に行ったのだった⁸⁰。

少年は本心では40色の色鉛筆が欲しいのだが、それを買うと他の文房具を購入できないため断念し、入手した色鉛筆を有効活用しようとする。

実際、極上の12色の色鉛筆があれば、それだけでとてもきれいな地図が描けるのだ。
どんなに熱心に僕は勉強することだろう！⁸¹

さらに少年は、保養地ラ・ブルブルへ出発する時の心境を次のように語っている。語り手が用いる主語が一人称複数形の « nous » であることに留意しながら引用して検討しよう。

だがまもなくラ・ブルブルへ出かける準備がはじまる……家を離れる時にいつも感じるあの喜びは、いったいどこから来るのだろうか？ 両親が大好きだったし、彼らが世の常の両親より優しかったのは確かだ。それに彼らはしかるべき育ちの人だった。（「育ちの悪い両親」については、いずれ本が書かれてしかるべきだと思うが、いったい誰が書くだろう？）そう、家に帰るたびにいつも胸が締め付けられるように感じたのはなぜなのだろう？ 家以外のところではすべてが美しく豪華に思えた。パパが「おぞましい」と断言してはばからない駅の軽食堂のスープさえ、僕には家の食卓に

maison. Il attend beaucoup du collège. », *ibid.*, p. 470. (下線強調は引用者)

⁸⁰ « Nous avons acheté du beau papier pour les mettre au net, et des plumes (une boîte entière), et une règle et une grosse gomme à effacer, douce et sympathique ; et une enveloppe pleine de feuilles d'un buvard épais, rose, bleu pâle, vert, violet. Et une boîte de douze crayons de couleurs et du papier à décalquer, pour faire les cartes. Nous étions allés de bon matin acheter tout cela aux Magasins du Louvre, la veille du départ. », « Devoirs de vacances », *Enfantines, Pléiade*, p. 480. (下線強調は引用者)

⁸¹ « Tout de même, avec douze crayons de couleurs surfins on peut déjà faire de bien belles cartes. Comme nous allions travailler ! », *ibid.*, p. 481. (« surfins » のイタリック強調は原典、下線強調は引用者)

出されるスープよりはるかにおいしく感じられた。きっとそれは怪しからぬ感情であり、自分で押さえ込まなければならなかったのに違いない……⁸²

ラルボーが「夏休みの宿題」の執筆に取り掛かったのは、第一次世界大戦中の1917年、戦乱を避けるために滞在していたスペインのアリカンテにおいてである。この頃ラルボーは *Fermina Márquez* (『フェルミナ・マルケス』、1911) を、また1913年には『A. O. バルナブース全集』の出版を終えていた。すると、この二つの作品に登場する Joanny Lénio (ジョアニ・レニオ) やバルナブースといった、時に青年時代のラルボーと二重写しになる主人公たちは、ラルボーの作品の中でそれぞれ成長し、学業を終えて戦地へ赴き、あるいはヨーロッパ周遊の後に故郷へと帰還していることになる。先に挙げた『幼なごころ』の4篇に見た、ラルボーの面影を残すとも言える少年たちが、ラルボーのその後の作品においても、ジョアニ・レニオやバルナブースなどに姿を変えながら受け継がれていると言えよう。

この点について、「夏休みの宿題」をもう少し見ることにしよう。主人公である語り手は、語りの時点ではラルボーやバルナブースと同じく作家になっており、そこから少年時代を回想して物語を進めている。少年の頃、彼は諦めきれない40色の色鉛筆の購入が大人になれば叶うのではと考え、「いまにバシュリエ [大学入学資格者] になったら…… いや、その時でもまだだめだろう。しかし学士か博士になったら…… あるいは——誰が知ろう——僕が作家になったあかつきには……⁸³」と語っている。また主人公は夏休みを終えてパリへ戻る汽車の中で次のように考える。

例の友の思い出に胸がときめく…… 彼が今ここに、僕のそばに、客車の座席に座っているのだったら…… 彼と一緒に旅行し、一緒に彼の国を訪れる、その国はあまりにも遠いのだが、絶対にたどり着けないわけではないと思い、いつかは彼に会いにその国を訪れることもあるかもしれないと考えるには、一ヶ月半もかかって届く手紙に貼られた、その国の切手を見なければならぬ…… そう、彼に、大人になった彼に再び会うんだ。そして忘れはしなかったと彼に言おう。やっと少し厳しくなった微笑の中に、僕たちの少年時代のすべてを見出し、優しい名前の、あれほど夢にまで見た

⁸² « Mais bientôt ont commencé les préparatifs du départ pour La Bourboule... D'où venait cette joie que nous avons toujours à quitter la maison ? Nous aimions bien nos parents, et ils étaient assurément meilleurs que la plupart des parents. Et c'étaient des gens bien élevés. (Qui donc écrira le livre qu'il y aurait à faire sur « les Parents mal élevés » ?) Oui, pourquoi éprouvions-nous toujours une espèce de serrement de cœur à nous retrouver à la maison ? Tout nous paraissait si beau, si luxueux, ailleurs qu'à la maison. Même le bouillon des buffets des gares, que Papa déclarait « infâme », nous paraissait avoir bien meilleur goût que celui de la table de famille. Mauvais sentiments, sans doute, et que nous devons réprimer... », *ibid.*, pp. 488-489. (下線強調は引用者)

⁸³ « Plus tard, quand nous serions bachelier... Non, même pas alors ; mais quand nous serions licencié, ou docteur, ou même — qui sait — auteur... », *ibid.*, p. 480. (下線強調は引用者)

彼の故郷の町の街路を一緒に散歩するんだ…… いつも旅に出よう…… もう決して学校にはもどらない…… もう決して家には帰らない……⁸⁴

ここに言及された友人が、手紙が到着するまで一ヶ月半もの時間を要する遠い国にいることから、この一節は、さまざまな国籍の生徒が集う寄宿学校、すなわち『フェルミナ・マルケス』の舞台となった学校のモデルであり、またラルボーが学生時代を過ごした、コレージュ・サント=バルブ=デ・シャンでの経験を反映していると考えられる。彼が『フェルミナ・マルケス』に描いた「フランス語話者が少数でスペイン語が多用され、万国博覧会よりももっとコスモポリットな生徒たちの学校生活⁸⁵」の思い出が、1917年に執筆した「夏休みの宿題」において形を変えながら再び現れている。つまりラルボーは、自身の姿を投影した作中人物に自らの思い出を重ね合わせ、「あの頃の僕と今の僕」との意味合いとして「nous」を用いたと考えられる。

『幼なごころ』において、「包丁」のミルーと「《顔》との一時間」の少年は、「偉大な時代」のマルセルを経て「夏休みの宿題」の少年へと成長する。彼らはそれぞれに空想の世界を持ち、その中で静かな理想郷を作っていた。また、そうした空想行為が、大人から受ける過度な期待や干渉から逃れるためのものであることを確認した。しかも大人のいる世界からの脱出を試みる少年たちは、あてどなく故郷から逃げるのではない。まだ年端のゆかぬ子供の言動とはいえ、彼らにはプロシア軍に入る、あるいは寄宿学校で新たな生活を始めるといった願望や現実がある。また彼らは自ら描く地図を持っており、それは現在の生活の拠点とは異なる世界を客観視できる道具でもあろう。自分の真の居場所を求めて慣れ親しんだ場所を離れること、すなわち「離郷」は、これまで言われてきたように「逃避」のニュアンスを含んではいるが、同時に少年たちの前向きな心の成長、自立への動きをともなっていると言える。

以上見てきたように、ラルボーの初期の短篇における、少年たちが抱く郷里に住む大人たちへの反発や逃避願望は、まだ外の世界を実地体験してはいないものの、書物や地図などから得た情報をもとに想像する、外の世界への憧れに起因するものである。「包丁」にお

⁸⁴ « Le souvenir de l'ami fait battre notre cœur... S'il était ici, près de nous, sur la banquette du wagon... Voyager avec lui, visiter avec lui son pays, qui est si lointain qu'il nous faut en voir les timbres-poste sur les lettres, qui mettent un mois et demi à venir, pour comprendre qu'il n'est pas inaccessible et qu'un jour peut-être nous irons l'y voir... Oui, le retrouver, devenu un homme ; lui dire que nous ne l'avons pas oublié ; retrouver toute notre enfance dans son sourire devenu enfin plus grave, et nous promener avec lui dans les rues de sa ville natale, qui a un nom si doux, et dont nous avons tant rêvé... Voyager toujours... ne plus jamais rentrer au collège... ne plus jamais revenir à la maison... », *ibid.*, pp. 504-505. (下線強調は引用者)

⁸⁵ Cf. « Nous n'étions pas élevés à la française, et, du reste, nous Français, nous n'étions qu'une bien faible minorité dans le collège ; à tel point que la langue en usage entre élèves était l'espagnol. [...] notre vieux collègue, plus cosmopolite qu'une exposition universelle, [...] », *Fermina Márquez, Pléiade*, pp. 309-310.

いてミルーが描く「未知の祖国」、すなわち「異郷」は、彼らにはまだ具体性を持たない場所である。しかし、今の自分の居場所と対極にあるような未知の場所への夢想は、少年たちが外界に向けて行動するための原動力となっている。こうした点から、『幼なごころ』はラルボーの創作史における「離郷」の作品であると言える。そして、『幼なごころ』においてラルボーが少年たちとともに夢想する「未知の祖国」への憧憬が『A. O. バルナブース全集』においてどのように具体化するのか、その様子を次章で見ることにしよう。

第2章 『A. O. バルナブース全集』と異郷

ラルボーが1913年に出版した『A. O. バルナブース全集』には、三つの作品が収録されている。第一部は表書きに「短篇」と記された「哀れなシャツ屋」、第二部は38篇の「詩」、第三部は「日記」である。ラルボーはこの作品の設定に、一つの仕掛けをほどこした。この作品の冒頭に、自らを『A. O. バルナブース全集』をまとめた刊行者と位置づけた「Avertissement」（「はしがき」）を付し、収録した三作品が、主人公 Archibald Olson Barnabooth（アルシバルド・オルソン・バルナブース、以後バルナブースと略記）の著作であると強調した。

「作者」バルナブースは、アメリカ国籍を持つ南米出身の億万長者で、「日記」を執筆した当時は23歳である。両親はすでになく、自分を「poète」（「詩人」）と称してヨーロッパ各国をめぐる旅を始め、そのかたわらで創作に勤しみ、日常生活や内面の様子を「日記」に書き付ける。そして「日記」を書き始めて9ヵ月が過ぎる頃、同郷の女性との結婚を機に祖国である南米への帰郷を決意して筆を置く。

『A. O. バルナブース全集』に関する先行研究には、主に次の4つの柱が挙げられる。一つ目は、『A. O. バルナブース全集』を自己分析の記録として考察したものである。二つ目は、旅行文学の面からのアプローチで、三つ目は「詩」のみを対象とした分析である。そして最後に、作者ラルボーと主人公バルナブースとの結びつきに関する研究である。

これらの研究について以下に大まかにまとめておくと、まず、バルナブースの自己分析の旅は、自己探求の過程とその挫折である、と結論づけられている。バルナブースは「日記」に記した「絶対の探求に人生を費やしているこの僕!⁸⁶」という姿勢を、友人との交際を通して行う自己分析の様子を日記や詩篇に綴ることによって表現している。しかし、その結果としての彼の帰郷、すなわち文明社会であるヨーロッパを離れ、その当時未開の地であった南米へ移住することが、彼の挫折とされている⁸⁷。また、『A. O. バルナブース全集』を20世紀初頭のヨーロッパ旅行記として読むことによって、作品に描かれた急行列車や蒸気船を利用する豪華なヨーロッパ周遊の様子が、エキゾチスム文学の先駆けとして研究の対象となってきた⁸⁸。中でもバルナブースの「詩」は、自由詩による詩作といった

⁸⁶ Cf. « [...] moi qui consume ma vie dans la recherche de l'absolu ! », *A.O.B., Pléiade*, p. 84. (下線強調は引用者)

⁸⁷ 「[……] 最後の『第四の手帳』に至って急転回が起こるのだ。すなわち、自己の拠るべき『絶対』を求めて、文明の地＝ヨーロッパを遍歴し、多数の友人たちとも交わったあげく、結局は挫折に終わってしまうのである。『挫折』と言うのが言い過ぎなら、ヨーロッパではついに所期の目的を達せられなかったと言い換えてもよい。」西村靖敬『1920年代パリの文学―「中心」と「周縁」のダイナミズム―』、多賀出版、2001年、19頁。このほか、樋口裕一「V. Larbaudにおける『小説』の問題―A. O. Barnaboothの「*Journal intime*」をめぐって―」、日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』第35号、1979年、89頁を参照した。

⁸⁸ 序論に挙げた Frida Weissman, *L'Exotisme de Valéry Larbaud*, Paris, Nizet, 1966 など、

形式面や、列車や船など重厚長大な機械を讚美する斬新さによって、『A. O. バルナブース全集』から取り出され、詳しく分析されている⁸⁹。加えて、主人公バルナブースの人物像が、作者ラルボーの自伝的な要素との共通点によって結びつき、両者の同一視につながる点に寄せられる関心である。ラルボーが否定するにもかかわらず、バルナブースはしばしば、ラルボーの姿を投影した人物と見なされている。

言うまでもなく『A. O. バルナブース全集』はラルボーによって書かれた作品であり、バルナブースは架空の登場人物である。だがラルボーが『A. O. バルナブース全集』の随所で、『A. O. バルナブース全集』の作者はバルナブースである、と強調していることも、読み手の混乱や関心をいざなう理由になっているのであろう。ラルボーによる主人公との分化の強調には、バルナブースの「日記」が、1908年にラルボーが匿名で自費出版した *Poèmes par un riche amateur, ou Œuvres françaises de M. Barnabooth* (『裕福なアマチュアの詩、あるいはバルナブース氏によるフランス語の作品』、以後『裕福なアマチュアの詩』と略記) に収録されていた « *Biographie de M. Barnabooth* » (「バルナブース氏の伝記」)⁹⁰からの改作であることも関係している。またその際に、第三者が執筆する「伝記」から、自己の作品である「日記」へと作品のジャンルが移行したことも、『A. O. バルナブース全集』の構成に影響を与えたと判断できる。このような経緯によって完成したフィクション作品の「日記」とは、ラルボーにとってどのような存在なのであろうか。

本節では、『A. O. バルナブース全集』を介したラルボーと故郷との関わりについての考察を深めることを目的に、ラルボーがなぜ『A. O. バルナブース全集』の作者をバルナブースとし、また作品の結末でバルナブースをヨーロッパから南米へと、さらなる異郷へ旅立たせたのか、との問いをめぐる作者と作品との関わりを検討したい。そこでまず、『裕福なアマチュアの詩』から『A. O. バルナブース全集』への改作の経緯を見ることにしよう。

第1節 『裕福なアマチュアの詩』からの改作

ラルボーが1908年に出版した『裕福なアマチュアの詩』には、短篇「哀れなシャツ屋」と、「*Les Borborygmes*» (「ボルボリグム」) および « *Ievropa* » (「イエヴローパ」) の二部構成である52篇の詩篇に加え、最後に「バルナブース氏の伝記」が収録されていた。ラルボーはその後、この作品に詩篇の改稿、「バルナブース氏の伝記」の削除と「日記」の追加を施し、1913年に『A. O. バルナブース全集』として新たに出版した。そしてこの改作は、

『A. O. バルナブース全集』を旅行記の面から分析した研究がある。

⁸⁹ « *Cahier Barnabooth : publié avec le concours de l'Université de Caen : Centre de Recherche sur la Modernité* » in *CVL*, n°22, 1983 ; « *Étude de l'« Ode » de Valéry Larbaud* » in *CVL*, n°26, 1988 ; Michel Murat, « *Le vers libre de Barnabooth : un style international du modernisme* » in *Les Langages de Larbaud, études réunies par Stéphane Chaudier et Françoise Lioure, Centre de recherches sur les littératures modernes et contemporaines, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 2006, pp. 23-42* などが挙げられる。

⁹⁰ ラルボーが改作時に削除した部分は、プレイヤー版1135-1185頁に収録されている。

内容の改変だけでなく、『A. O. バルナブース全集』がバルナブースの著作であるとの印象を強める役割を担っていた。

『裕福なアマチュアの詩』に収録されていた「バルナブース氏の伝記」は、執筆者がバルナブースの執事の甥 X. M. Tournier de Zamble (X. M. トウルニエ・ド・ザンブル) であるとされており、国籍や出生地などバルナブースの生い立ちにまつわる事柄や、勝手気ままな性格が引き起こす出来事といった二十歳までの話題を年代順に語っていた。また、その「*Préface de l'éditeur*」(編集者による序文)では、トウルニエ・ド・ザンブルがバルナブースを指して、「これらの詩篇(ならびに詩篇に先立つ短篇)の作者⁹¹⁾と呼んでいた。

このように、先述の『A. O. バルナブース全集』の「はしがき」と同様に、ラルボーは1908年の『裕福なアマチュアの詩』において、バルナブースを「哀れなシャツ屋」と「詩」の作者として登場させていた。その上で「バルナブース氏の伝記」を「日記」へ改作し、「バルナブース氏の伝記」を削除するに至るには、次の三つの理由がある⁹²⁾。

一つ目は、アンドレ・ジッドによる「日記」執筆への要望である。ラルボーが『裕福なアマチュアの詩』を出版した翌年の1909年2月、『新フランス評論』の中心的人物であったアンドレ・ジッドが、『新フランス評論』の「*Note*」(「ノート」)に「A・G」との署名で批評を掲載し⁹³⁾、『裕福なアマチュアの詩』に好意的な評価を与える一方で、バルナブースについて「彼の性急さ、シニスム、その食欲さが私は好きだ。[……]もし彼が旅行中に『日記』をつけたのなら、バルナブース氏は私たちにそれを見せてくれるといいのに⁹⁴⁾」と希望したからである。二つ目は、ラルボーの同郷の友人シャルル＝ルイ・フィリップからラルボーに寄せられた、バルナブースの人物像に関する感想によるものである。『新フランス評論』誌上で期待を公にしたジッドとは異なり、フィリップは1908年7月8日付のラルボーへの書簡で、バルナブースがうたう富める者への讚美や貧者への軽蔑について、「富がどういうものであるかがわかったからには、私にはもう何物も存在しないことになりま

⁹¹⁾ « *L'auteur de ces poèmes (et du conte qui les précède)* », « *Notes* », *Pléiade*, p. 1135. (下線強調は引用者)

⁹²⁾ この改作に関する研究は、西村靖敬「『伝記』から『日記』へ—ラルボーの『裕福なアマチュアの詩』から『A. O. バルナブース全集』への改作をめぐって—」、『千葉大学フランス文学研究 2』、1988年、52-61頁に詳しい。

⁹³⁾ « *Notes* » in *NRF*, n° 1, 1^{er} février 1909, pp. 101-103 および岩崎力訳『A. O. バルナブース全集』(下)、岩波文庫、2014年、378-379頁を参照した。

⁹⁴⁾ Cf. « *J'aime sa précipitation, son cynisme, sa gourmandise. [...] S'il tint un « journal » au cours de ses voyages, ce M. Barnabooth devrait bien nous le montrer.* », « *Notes* » in *NRF*, n° 1, 1^{er} février 1909, *op. cit.*, pp. 102-103. また、ジッドの1908年7月28日の日記には、「ヴァレリー・ラルボーの詩はおもしろい。これを読みながら、私は『地の糧』の中で、もっとシニカルであるべきだったと思う」との記述がある。Cf. « *Amusants, ces poèmes de Valéry Larbaud. En les lisant, je comprends que, dans mes *Nourritures*, j'aurais dû être plus cynique.* », André Gide, *Journal*, t. 1, *op. cit.*, p. 269.

す⁹⁵」との感想を告げていた。三つ目は、ラルボーが尊敬する詩人 Francis Jammes (フランス・ジャム、1868-1938) がラルボーへの書簡の中で、『裕福なアマチュアの詩』のバルナブースの不道德な言動に苦言を呈したことである⁹⁶。

ジッドの要望やフィリップ、ジャムの指摘を受けたラルボーは、5年の歳月をかけて書いた「日記」を「*Journal d'un milliardaire*」(「ある億万長者の日記」)と題し、1913年2月号から6月号までの5回にわたって『新フランス評論』誌上で発表した。その後、同年7月15日の『A. O. バルナブース全集』の出版時には、この「ある億万長者の日記」を「日記」と改題し、第三部に収録した。またこの時、ラルボーは『A. O. バルナブース全集』の最終部に収録する詩篇「*Épilogue*」(「エピローグ」)を初めて発表した。

この改作は作品に次の効果をもたらした。まず、人生を深く考えるバルナブースの様子を記した「日記」形式の作品が誕生し、「バルナブース氏の伝記」ではヨーロッパに留まり続けていたバルナブースが、「日記」の最終部で故郷である南米へと旅立つという決定的な変化が生じた。また、『裕福なアマチュアの詩』における、富を崇め貧者を貶める内容の詩篇を削除することで、富裕層と貧困層の対比の色合いが薄まった。ラルボーが諸先輩作家からの助言に応えた結果、このように『裕福なアマチュアの詩』は『A. O. バルナブース全集』へと発展的な変化を遂げた。

とはいえ、小説・詩篇・日記と、異なるジャンルの作品を収録した『A. O. バルナブース全集』において、自己探求を果たそうとするバルナブースの内的成長と、それにとまなう人物像の変遷を問うためには、バルナブースの奇抜な人物像が描かれた「バルナブース氏の伝記」を削除せず、作品の一部として残しておくほうが効果的であろう。だがそこには、ラルボーが同郷の先輩で、全幅の信頼を寄せるシャルル=ルイ・フィリップからの批判に対する配慮があったと考えられる。

ラルボーとフィリップは、ラルボーの親友マルセル・レイがフィリップと同じ Moulins (ムーラン: アリエ県の県庁所在地) の高校 (Lycée de Moulins) に通っていたことが縁で、1906年の秋に知り合った。フィリップはアリエ県の小さな町 Cérilly (セリイ) の、つましい木靴職人の息子で⁹⁷、パリ市役所の下級事務員として働いており、同郷とはいえラルボー

⁹⁵ Cf. « [...] rien n'existe plus pour moi, maintenant que je sais ce qu'est la richesse. », la lettre de Charles-Louis Philippe à Valéry Larbaud du 8 juillet 1908, « *Lettres à Valéry Larbaud* », in *NRF*, n° 311, 1^{er} août 1939, p. 281.

⁹⁶ 西村靖敬「『伝記』から『日記』へーラルボーの『裕福なアマチュアの詩』から『A. O. バルナブース全集』への改作をめぐる一」、前掲論文、58頁および Georges Jean-Aubry, *Valéry Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, op. cit., p. 121 を参照した。ジョルジュ・ジャン=オーブリー (1882-1950) はフランスの英文学者。ラルボーの友人で伝記の執筆者でもあった。

⁹⁷ 東海麻衣子は博士論文「シャルル=ルイ・フィリップにおける『時』・『時間』・『時間意識』の考察」(広島大学、2009年)の「序章」で、今日の文学史においてフィリップが「貧しい木靴屋の息子が文学者となった」、あるいは作品のテーマに貧困や病、貧者の厭世感などにもとづく人間愛が見られることから「ポピュリズムの先駆者」として評価されるにと

とは異なる境遇に生まれ育っていた。そのフィリップはラルボーの才能を見抜き、ラルボーが彼に、後に『幼なごころ』に収録する「ドリー」の原稿を送った際には、それを『新フランス評論』に掲載するために取り計らい、またジッドに引き合わせるなど、ラルボーの活躍の場を広げるための労を惜しなかった。

『私の道のり』の1909年の項によれば、ラルボーがブルボネ地方北部に位置するセリイを訪れたのは、『裕福なアマチュアの詩』を出版した翌年の1909年にフィリップが亡くなり、葬儀に参列した時が初めてだったようである⁹⁸。とすると、フィリップが1908年9月6日から1909年9月23日にかけてパリの日刊紙 *Le Matin* (『ル・マタン』) に連載した49篇のコント(短篇)⁹⁹の中に描いた、彼の地元セリイに暮らす貧しい庶民の日常生活の様子を実際に見たことも、「日記」の執筆途中だったラルボーに影響したと考えられる。

このような経緯で出版された『A. O. バルナブース全集』と『裕福なアマチュアの詩』とを比較すると、構成面では次のような相違点を確認される。まず、「哀れなシャツ屋」は、ごくわずかな字句を訂正した上で再録された¹⁰⁰。そして、かつて「バルナブース氏の伝記」で触れられていたバルナブースの出自について、彼の先祖がハドソン川の干拓事業への従事によって財をなし、彼はその資産を継承した成金¹⁰¹であったことの説明が、『A. O. バルナブース全集』では省略され、わずかに「哀れなシャツ屋」の最終部で、バルナブースの所有するヨットの名が « Le Parvenu » (「成金号」)¹⁰²と記されるにとどまっている¹⁰³。次

どまっていることに対し、フィリップは国家奨学生としてリセで学ぶなどの現代教育を受けており、また彼の早世とその後の二度の世界大戦による価値観の変化が彼についての正当な評価の定着を妨げたと論じている。

⁹⁸ Cf. « [en 1909 (28ans)] Étant en Bourbonnais, chez ma mère, j'apprends la mort de Ch.-L. Philippe. Je vais aux obsèques à Cérilly, et vois pour la première fois la région nord du Bourbonnais. », Valéry Larbaud, *Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926, établi en septembre 1926 à la demande d'Alexandre Stols*, Paris, Éditions des Cendres, 1986, p. 42. (イタリック強調は原典)

⁹⁹ 当時『ル・マタン』の編集部にいたリムーザン地方出身の小説家・外交官 Jean Giraudoux (ジャン・ジロドゥー、1882-1944) は、父親がセリイの税収吏だったことから、1895年から数年間、シャルル=ルイ・フィリップの家の近くに住んでおり、知遇を得ていたことから、フィリップにコントの執筆を依頼した(シャルル=ルイ・フィリップ『小さな町で』、山田稔訳、みすず書房、2003年、254頁の「解説」、および « Philippe et Giraudoux se connaissent depuis 1895 (le père de Jean était percepteur à Cérilly). », André Gide, *Correspondance avec Charles-Louis Philippe et sa famille 1898-1936*, édition établie, présentée et annotée par Martine Sagaert, Centre d'Études Gidiennes, Université Lumière (Lyon II), 1995, p. 125, note 4 de la lettre 29 を参照)。フィリップの死後、セリイを舞台にしたものが *Dans la Petite Ville* (『小さな町で』、1910)、それ以外のものは *Les Contes du Matin* (『朝のコント』、1916) にまとめられた。『小さな町で』には、ラルボーの『幼なごころ』と同様に子供たちを主人公とする複数の作品があるが、そこに描かれているのは、大人、子供を問わずセリイ近郊で一生を終える貧しい人々であり、生きることへの諦観の念が見られる点において、『幼なごころ』とは質を異にする作品である。

¹⁰⁰ Cf. « Notes », *Pléiade*, p. 1194.

¹⁰¹ Cf. « Biographie de M. Barnabooth », *ibid.*, pp. 1136-1137.

¹⁰² *A.O.B.*, *Pléiade*, p. 39.

に、「詩」は『裕福なアマチュアの詩』に収録された 52 篇のうち 14 篇が削除されて 38 篇となった。また、再録された詩篇のうち、「ボルボリグム」のいくつかの詩篇には字句の訂正が行われ、『裕福なアマチュアの詩』では「イエヴローパ」だったタイトルが « Europe » (「ヨーロッパ」) に改題されるなど、詩篇のいくつかが大幅に変更された¹⁰⁴。こうした変化を経て、『A. O. バルナブース全集』は、収録されたすべての作品がバルナブースの言葉を通して語られることになった。

第 2 節 ラルボーと「架空の作者」バルナブース

先に述べたように、『A. O. バルナブース全集』には異なる三つのジャンルの作品が収録されていた。そこでまず、プレイヤード版をもとに『A. O. バルナブース全集』の体裁を確認し、作品の構成を把握することにしたい¹⁰⁵。最初のページには « A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime » とのみ記されている。次に白紙のページをはさみ、刊行者 « V. L. » による序文として「はしがき」が記されているが、次頁には再び白紙が挿入されている。その次のページには、『A. O. バルナブース全集』の第一部であることを示すローマ数字 « I » の下に短篇のタイトル « Le Pauvre Chemisier » が置かれ、その下部にはジャンルを示す « Conte » と記されている。ここで注目したいのが、「はしがき」の内容である。該当部分を以下に挙げて、内容を見ることにしよう。

はしがき

ここに述べても仕方がないと思われる諸般の事情により、広くその名を知られた裕福なアマチュア、バルナブース氏の『A. O. バルナブース全集』の刊行を私が引き受けることになった。

この若き億万長者の「日記」はもちろんのこと、彼の「詩」さえもが、彼の人柄、教育、友人たち等々に関する詳細を十分に含んでいるので、全く主観的な、そしていわば自己中心的なこの本の冒頭に、生い立ちに関する覚え書きをつける必要はないも

¹⁰³ だがヨットは、バルナブースの財力、すなわち消費社会の権化、消費＝美徳の体現者のイメージを担っている。それは、アメリカの経済学者 Thorstein Veblen (ソースティン・ヴェブレン、1857-1929) が *The Theory of the Leisure Class* (『有閑階級の理論』、1899 年) で用いた « Conspicuous Consumption » (「顕示的消費」) や « Conspicuous Leisure » (「顕示的閑暇」) といった、当時の有閑階級を表す術語の概念に一致する。すると、バルナブースが富裕階級の出であるという情報が、「ヨット」の一語に凝縮されていると考えることができる。Cf. Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, New York, A.M. Kelley, 1975. 邦訳は『有閑階級の理論』、高哲男訳、筑摩書房、2009 年を参考にした。

¹⁰⁴ 岩崎力訳『A. O. バルナブース全集』(下)、前掲書、380 頁を参考にした。詳細は *Pléiade*, pp. 1158-1184 を参照した。

¹⁰⁵ Voir A.O.B., *Pléiade*, pp. 19-23.

のと信じる。

本書は完本であり、かつ決定版である。

V. L.¹⁰⁶

ここには『A. O. バルナブース全集』の二つの特徴が強調されている。一つは「刊行者」の存在である。ラルポーのイニシャルを連想させる「V. L.」との署名が、作者とは別にいる「刊行者」の存在を示しているからである。またそれを「はしがき」の前後に白紙のページを挿入することで、二点目の特徴、すなわち『A. O. バルナブース全集』の作者はバルナブースだ、との主張が再び強調される。

「V. L.」は作品の構成について次のように語っている。まずバルナブースが「若い裕福なアマチュア作家」で、『A. O. バルナブース全集』には彼の作品である「詩」と「日記」が収録されており、それらの作品が「自己中心的」なものであること。また、『A. O. バルナブース全集』が「完本かつ決定版」であるとの言明は、『A. O. バルナブース全集』が後に改訂されることがないことを示す宣言である。加えて「V. L.」が、バルナブースの作品や友人を示す際に三人称の所有形容詞「son」、「sa」、「ses」を用いていることや、作品について「いわば自己中心的」との主観的な評価を与えていることに注目したい。そこには『A. O. バルナブース全集』をバルナブースが著した作品として読者に提供しようとする「V. L.」の意志が見えるからである。

さらに「V. L.」は、「はしがき」の他にも『A. O. バルナブース全集』内にコメントを差しはさむことで、繰り返しバルナブースと自身との区別を強調する。例えば、「日記」の4月16日の欄外に、バルナブースの記述内容に関する下記の注釈を付け加えている。ここでは「V. L.」がバルナブースを示す際に、「auteur」（「作者」）と表現していることにも留意が必要である。

自らそれとは知らぬらしいが、作者 [バルナブース] は「彼らは無価値というより、存在しないも同然なのだ」という奴隷の定義を自分に当てはめている。V. L.¹⁰⁷

¹⁰⁶ « Par suite de diverses circonstances qu'il me semble inutile de rapporter ici, je me suis engagé à publier ce recueil des *Œuvres complètes* de M. Barnabooth, le riche amateur bien connu. / Le « Journal » du jeune milliardaire, et même ses « Poésies », contiennent assez de détails sur sa personne, son éducation, ses amis, etc., pour que je me sente dispensé de placer en tête de ce livre, tout subjectif et pour ainsi dire égoцентриque, une notice biographique. / Cette édition est complète et définitive. / V. L. », *ibid.*, p. 21. (下線強調は引用者)

¹⁰⁷ « Sans qu'il paraisse s'en douter, l'auteur s'applique la définition de l'esclave : *Non tam viles quam nulli sunt*. V. L. », *ibid.*, p. 93. (イタリック強調は原典、下線強調は引用者) なお、6月7日の「日記」における「[……] つまり、マクシムで礼装の紳士が膝に一人ずつ女性を乗せていて、テーブルの下にはカラになったシャンパンの瓶がずらり、というわけだ*……」(Cf. « [...] Maxim et le monsieur en habit avec une femme sur chacun de ses genoux, des bouteilles de champagne vides sous la table*... », *ibid.*, p. 188.) に付されたアステリスクに対し、

また登場人物であるバルナブースにも、5月3日の「日記」で友人の名前を列挙する際に、作者ラルボーを連想させる名前を書き記させている。

カルチュイヴェルス〔バルナブースの執事〕は、僕には所有物の概念がないと言うし、いつも一緒にいるグイド・ド・S. とかヴァレリー・L.（ささやかな年収で暮らしているひがみ屋たち）は、僕を冷やかしの対象にする¹⁰⁸。

「はしがき」や上記の注釈における署名のイニシャル « V. L. » および「ヴァレリー・L」から判断して、それらが作者ラルボーを指しており、彼が刊行者を名乗っていることは明白である。このようにラルボーは、自らが刊行者に扮し、『A. O. バルナブース全集』の冒頭部分に一般的な書物と同様の体裁を与えることで、バルナブースを実在する作家のように見せていた。しかも、バルナブースの人物設定にラルボー自身と同じく「自分の楽しみのために書く」という^{アマチュア}愛好家の特徴を与え、「日記」において両者が重なり合うような要素を備えさせている。さらにその際に、作者ラルボーが作品に介入するといった古典的な手法を用い、読み手にバルナブースが作者であるとの印象を強めようとしたのであろう。

しかし、『A. O. バルナブース全集』の真の作者はバルナブースではなく、ラルボーである。しかもラルボーの作品にバルナブースが登場するのは、この『A. O. バルナブース全集』のみである。それにもかかわらず、ラルボーとバルナブースは双方の類似点によってしばしば同一人物と見なされてきた。「バルナブース氏の伝記」によれば、バルナブースは1883年に現在はチリ領であるアレキパ地方の Campamento（カンパメント）に生まれた。その年、その地方の領有をめぐる、ペルー、チリ、ボリビアの三つの共和国の軍隊が戦争をしていたため、バルナブースが人に尋ねられて『無国籍者』だと答えることも当然であった。彼は後に、先祖が住んでいた土地であるニューヨーク州の市民権を得た。先祖は Olsson（オルソン）というフィンランド人であったが、やがてスウェーデンに移り、17世紀の初めに植民者たちと一緒にアメリカに渡り、ハドソン川での事業に従事した、と書か

プレイヤー版では原注で「*マクシムというのは、パリのロワイヤル街の、カフェ=レストランの名前である。」（« *Maxim est le nom d'un café-restaurant, rue Royale, à Paris. », *ibid.*）と書かれているが、1913年の『新フランス評論』における初出およびガリマール社刊行の文庫版（1923）には見られない記述であることから、この原注は『ヴァレリー・ラルボー全集』（1951）あるいはプレイヤー版の出版時（1957）に編集者によって付されたと思われる（下線強調は引用者）。マクシムは現在もパリ8区、コンコルド広場とマドレーヌ広場との間に位置する1893年創業のレストランである。

¹⁰⁸ Cf. « Cartuyvels dit que je n'ai pas le sentiment de la propriété, et Guido de S. et Valery L., les deux inséparables, m'ont pris pour objet de leurs railleries (petits rentiers envieux), [...] », *ibid.*, p. 117.（下線強調は引用者）« Guido de S. » は架空の人名のようである。

れている¹⁰⁹。また、バルナブースとは「納屋」を意味する « barn » と「バラック」を意味する « booth » に由来すると書かれており¹¹⁰、その発音は、「バルナブース氏の伝記」の注釈で「*th*は英国風に発音するように¹¹¹」と記されている¹¹²。このように、ラルポーは彼自身とバルナブースの出自に決定的な相違を設定していた。にもかかわらず、『A. O. バルナブース全集』においてバルナブースの人物像が示す暮らしの裕福さや、日常的な外国周遊の習慣、複数の外国語の習得や文筆活動といった、ラルポーの生い立ちを連想させるような生活環境との共通点が、バルナブースが南米出身の孤児であるという、ラルポーの出自との決定的な相違点よりも、読者に強い印象を与えたのであろう。「バルナブース氏の伝記」の削除による副次的な影響が、作者と登場人物との間に生じたわけである。

このような、作者ラルポーと架空の登場人物であるバルナブースのイメージとの混同を招いた原因には、『A. O. バルナブース全集』の前後に執筆した『フェルミナ・マルケス』や『幼なごころ』などの複数の作品の設定に、ラルポーが実体験に則した背景を用いたことが挙げられる。『フェルミナ・マルケス』は、パリ近郊の国際的なカトリック系の私立学校を舞台に、かつての寄宿生である語り手が学校生活や下級生の姉フェルミナへの思慕を回想しているが、その背景はラルポーが1891年から1894年までを過ごした、パリ南郊の寄宿学校の様子を下敷きにしたものである。また『幼なごころ』には、先ほど確認したように、複数の短篇の主人公が幼年時代から言葉に強い関心を持ち、ラルポーと同様に詩作に励む様子が描かれていた。それらはラルポーが、創作を始める際に身近な題材をもとにしながら、登場人物を介して、彼自身が持つ言葉や表現方法への関心の高さを作品に還元した結果である。したがって、『A. O. バルナブース全集』の場合も同様に、バルナブース

¹⁰⁹ Cf. « M. Barnabooth est né en 1883, à Campamento, province d'Arequipa, aujourd'hui au Chili. Mais, en l'an 1883, les armées de trois Républiques : le Pérou, le Chili et la Bolivie, guerroyaient dans cette province et prétendaient la posséder, en sorte que M. Barnabooth, quand on l'interroge, peut répondre avec quelque raison qu'il est « un sans-patrie ». Cependant, à sa majorité légale, il s'est fait naturaliser citoyen de l'État de New York, pays d'origine de sa famille. » ; « Barnabooth est un surnom qui ne date pas de plus d'un siècle. L'ancêtre, le premier aïeul connu, s'appelait Olsson, était finlandais, passa en Suède, et, dès les premières années du XVII^e siècle, vint s'installer en Amérique avec d'autres colons suédois qui fondèrent quelques établissements très prospères le long de l'Hudson. », « Biographie de M. Barnabooth », *ibid.*, p. 1136. (下線強調は引用者)

¹¹⁰ « Ils s'appelaient déjà Barnabooth, l'étymologie de ce surnom (barn : grange, booth : baraque) avec cet *a* intercalé dont la présence ne s'explique pas, est condamnée à demeurer obscure. », « Biographie de M. Barnabooth », *ibid.*, p. 1137. (イタリック強調は原典)

¹¹¹ Cf. « Prononcer : Barnabooth, le *th* anglais, dans ce cas, se prononce avec le son d'*s* zézayée. », *ibid.* (イタリック強調は原典)

¹¹² プレイヤード版巻末の Robert Mallet (ロベール・マレ、1915-2002) による「ノート」によれば、バルナブースという名前は、「*Barnes*」はロンドン近郊の地名、「*Booth*」は英国に現在も存在する薬局チェーン店 *Booths* (ブーツ) に由来し、それらを組み合わせたものである。Cf. « Le touriste de 18 ans compose le nom de son personnage à l'aide de celui d'une localité proche de Londres, *Barnes*, et du mot *Booth*, enseigne de pharmacies anglaises à succursales multiples. », « Notes », *ibid.*, p. 1130. (イタリック強調は原典)

に与えられたイメージがラルボーと二重写しになるのは当然の成り行きであろう。

「ラルボー=バルナブース」との混同については、ラルボーも問われることが多かったようである。そこで、後にラルボーがバルナブースとの関係を « pseudonyme » (「変名」)、つまり「作者が、借用してきたか自分で作り上げたかはともかく、偽りの名前を署名する¹¹³」との意味の語を用いた次の文章を参考にしながら、作者と作品との関係について類似する例を見ることにしよう。

バルナブースは〔私の〕変名ではなくて小説の主人公であると、はっきり言ってくださるようお願いいたします。つまり、クララ・ガスルがメリメの変名ではないのと同じなのです。ジル・ブラースがルサーージュの変名ではないのと同じだ、と申し上げたほうが良いかも知れませんが¹¹⁴。

ここでラルボーが引き合いに出した Prosper Mérimée (プロスペル・メリメ、1803-1870) とは、スペインの女優クララ・ガスルの戯曲の翻訳と称する処女作、*Théâtre de Clara Gazul* (『クララ・ガスル戯曲集』、1825) を出版したフランスの作家である¹¹⁵。また、劇作家 Alain-René Lesage (アラン=ルネ・ルサーージュ、1668-1747) の一人称小説、*Histoire de Gil Blas de Santillane* (『ジル・ブラース』、1715-1735) の主人公ジル・ブラースは、ルサーージュが創り出した登場人物である¹¹⁶。このようにラルボーは、有名な作家と作品を例示することで、バルナブースが自分の変名ではないことを強調している。

また、バルナブースをラルボーと切り離すには、Philippe Lejeune (フィリップ・ルジュンヌ、1938-) の *Le Pacte autobiographique* (『自伝契約』、1975) における「自伝の定義」が参考になろう。ルジュンヌは自伝の定義について、「実在の人物が、自分自身の存在について書く散文の回顧的物語で、自分の個人的生涯、特に自分の人格の歴史を強調する場合を言う¹¹⁷」としている。それに加えて、「自伝」と判断するには、言語形式、取り扱う主

¹¹³ Cf. « [...] il [= l'auteur] signe d'un faux nom, emprunté ou inventé : c'est le pseudonymat ; [...] », Gérard Genette, *Seuils*, Paris, Éditions du Seuil, 1987, p. 43. (イタリック強調は原典) 邦訳は、ジェラルール・ジュネット『スイユ：テキストから書物へ』、和泉涼一訳、水声社、2001年、52頁を参照した。

¹¹⁴ « N'oubliez pas, écrivait-il par exemple à un traducteur, de dire nettement que Barnabooth n'est pas un pseudonyme, mais le héros d'un roman, comme par exemple Clara Gazul n'est pas un pseudonyme de Mérimée, ou mieux comme Gil Blas n'est pas un pseudonyme de Lesage. », Jean-Benoît Puech, *L'Auteur supposé : Essai de typologie des écrivains imaginaires en littérature*, thèse EHESS, Paris, 1982, cité par Gérard Genette, *Seuil*, Paris, Éditions du Seuil, 1987, p. 51, note. 邦訳は、ジェラルール・ジュネット、同書、467頁を参照した。

¹¹⁵ 岩根久他編『フランス文学小事典』、朝日出版社、2007年、291-292頁を参照した。「『クララ・ガスル戯曲集』は] 当時一流のサロンで好評を博したが、この女優はメリメが創作した架空の人物で、その初版本に付された原著者クララの肖像も彼自身の女装であった。」

¹¹⁶ 同書、329頁を参照した。

¹¹⁷ « Récit rétrospectif en prose qu'une personne réelle fait de sa propre existence, lorsqu'elle met

題、作者と語り手と主人公の同一性、回顧的な視点に立った語りが要求され、これら複数の条件を満たさなければならない¹¹⁸。しかも、上記の条件を満たしていても、名前が作者の名前と異なる場合には「自伝」とは言えない¹¹⁹。この定義に照合すると、ラルポーとバルナブスは「主人公と語り手の名前の一致」との条件を満たせないことから、『A. O. バルナブス全集』におけるバルナブスが、ラルポーと同一視できる要素を有した別の存在であることが明らかになる。

この結果をラルポーとバルナブスとの関係に当てはめてみると、ラルポーとバルナブスを同一視する原因が、両者が作者すなわち実在の人物と、登場人物という架空の人物の間柄でありながらも、ラルポーが実体験に似た要素を作品の設定に加えたためであることがわかる。もしもラルポーが刊行者「V. L.」を名乗らず、また「V. L.」が「はしがき」や「日記」の注釈を加えなければ、こうした混同は避けられたはずである。つまり、ラルポーがバルナブスに書かせる「作品」に、作者ラルポーと登場人物であるバルナブスを重ね合わせる要素を与えながらも、たびたび作品に現れ、自らが施した仕掛けを否定することには、ラルポーの別の思惑が考えられる。

そこで、『A. O. バルナブス全集』の約8割のページ数を占める「日記」が、バルナブスの旅行を常とする日常生活の様子を詳細に描写しながら、彼の内面を記録していることに目を向けることにしよう。以下はバルナブスの4月16日の記述である。

僕たち人間が陥る危険は、自分の性格を分析していると思いこんでいながら、現実には一から十まで、本当に自分のものである性向すら定められていない小説の登場人物を創造してしまっていることだ。その人物の名前として、一人称単数を選択し、その存在を自分自身の存在と同様にかたく信じこむ。つまり、リチャードソンが小説と称するものは、実は仮面をつけた告白に他ならず、他方、ルソーの『告白』は、仮装した小説以外のなにものでもないのだ¹²⁰。

また、バルナブスは同じ日の日記に次のようにも書き記している。

l'accent sur sa vie individuelle, en particulier sur l'histoire de sa personnalité. », Philippe Lejeune, *Le Pacte autobiographique*, Paris, Seuil, 1975, p. 14. 邦訳は、フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』、花輪光訳、水声社、1993年、16頁を参照した。

¹¹⁸ Cf. *ibid.*, pp. 14-19. 邦訳は、同書、16-22頁を参照した。

¹¹⁹ Cf. « Nom du personnage ≠ nom de l'auteur. Ce seul fait exclut la possibilité de l'autobiographie. », *ibid.*, p. 28.

¹²⁰ « Le danger, avec nous autres hommes, c'est que, lorsque nous croyons analyser notre caractère, nous créons en réalité de toutes pièces un personnage de roman, auquel nous ne donnons pas même nos véritables inclinations. Nous lui choisissons pour nom le pronom singulier de la première personne, et nous croyons à son existence aussi fermement qu'à la nôtre propre. C'est ainsi que les prétendus romans de Richardson sont en réalité des confessions déguisées, tandis que *les Confessions* de Rousseau sont un roman déguisé. », *A.O.B., Pléiade*, p. 93.

それぞれが自分について心に抱いているイメージ、それは成熟した人間の場合一目瞭然だ！ でも僕の場合はまだ形作られていない、それだけのことだ——だからこそ僕は自分の自己分析を誠実なものと思えることができるのだ。けれども、年齢とともに僕の人格も固定するだろう。そうしたら僕もためらうことなく「僕」と書き、それが誰のことなのか、わかった気になるだろう。それは避けようがないことなのだ、死と同じように……¹²¹

「自分が誰であるか」との問いへの解決法を「書くこと」に求めるバルナブースの「日記」とは、単なる旅行の記録ではなく、自己認識の問題に根差している。それは同時に、作者ラルボーが文学作品である「日記」を装いつつおこなった彼自身の告白である。作品の冒頭で、ラルボーと思しき「刊行者」は、「はしがき」の最終部で「本書は完本であり、かつ決定版である」と明言し、そこにはバルナブースの独自性に異論をはさませないラルボーの矜持が現れていた。その『A. O. バルナブース全集』において、ラルボーがバルナブースに自身との共通点を設定しつつも繰り返してきた双方の分化の強調は、1908年の『裕福なアマチュアの詩』の出版に向けてバルナブースを構想した時から、両者がすでに分かちがたい存在だったことに由来する。その結果、一方は架空の登場人物であるとはいえ、お互いが書くことを楽しみ、かつ深い関心を寄せる作家としての立場を共有していたことが、『A. O. バルナブース全集』において、バルナブースのかたわらにいるラルボーの存在を強調する要因となっていた。すなわちバルナブースの「日記」とは、書く行為をめぐるバルナブースの心情の変化や成長の記録であるだけでなく、ラルボーにとって、『裕福なアマチュア』の執筆からその改作を経て『A. O. バルナブース全集』完成に至るまでの歳月と経験を示した、ラルボーの作家としての道のりの記録でもある。

第3節 異郷における自我探求—バルナブースの「日記」—

前述のとおり、『全集』を自己分析の記録として考察した先行研究では、バルナブースの自己探求が挫折に終わった、と結論づけられてきた。彼は「日記」の終章で同郷の女性 Conception（コンセプション、通称コンチャ）とその妹に金銭的な援助を申し入れ、最後にはコンチャに結婚を申し込むと同時に作品執筆をやめて帰郷を決意するが、バルナブースにとって生まれ故郷でしかない南米は、すぐには安住の地になり得ないだろう。では、このようなバルナブースの変化は、異郷で過ごす9か月間の旅の中で、どのように起こっ

¹²¹ « L'image que chacun se fait de soi-même : comme on la voit du premier coup d'œil, chez les hommes mûrs ! Chez moi elle n'est pas encore formée, voilà tout, — et c'est ce qui me fait croire à la sincérité de mon analyse personnelle. Mais avec les années mon personnage se fixera sans doute ; alors j'écrirai « Je » sans hésiter, croyant savoir qui c'est. Cela est fatal, comme la mort... », *ibid.*, p. 94.

たのだろうか。本節ではまず、「日記」形式の効果を確認し、バルナブースの生い立ちと言語感覚から見た人物像の変化を通して、バルナブースにとって異郷であるヨーロッパでの生活と、南米への旅立ちについて検討したい。

日記は、他者という読み手が形式上は存在せず、書き手は自分の考えの赴くままに筆を走らせ、また止めることが可能な、いわば際限のない、かつ断片的な独り言のような文章の連なりである。そして、それらの文章に日付を付与し、記述が区切られることで、日記の体裁が整う。このような特徴はバルナブースの「日記」においても確認できるが、加えてバルナブースの場合、「日記」の開始から終了までの291日間のうち、225日間は日記を執筆していない。このように、バルナブースの「日記」とは不連続で断片的なものである。とすると、「日記」と称した作品において、形式を踏襲しているとはいえ、期間として示した日数の7割以上が省略したものを、果たして日記体小説と言えるのだろうか。自らの回想を時間の経過の順に書き連ねるだけならば、「哀れなシャツ屋」と同様に小説の形式を用いることも可能なはずである。

初めに「日記」の形式を確認すると、バルナブースは「日記」を4月11日に書き始め、翌年の1月26日に書き終えている。この291日間のうちバルナブースが日記をつけた66日間の記述内容は、4冊の«cahier»（「手帳」）に分かれている。各々の「手帳」の冒頭にはタイトルに続いて旅行先が記されており、1冊の手帳を書き終えた後に旅行先が取りまとめられ、付記されたことを示している。手帳の内容は、まず«Premier cahier»（「第1の手帳」）には4月11日から5月10日までの21日分が、イタリアのフィレンツェ滞在中に書かれている。続く«Deuxième cahier»（「第2の手帳」）は、フィレンツェにおいて5月12日に始まり、サン・マリノからヴェニスへとイタリア国内を移動しながら23日分が記され、〔6月〕18日に終了している。その翌日の6月19日からは«Troisième cahier»（「第3の手帳」）が始まり、8月14日に終了するまでの間の11日分が、イタリア北東部のトリエステからロシアへの移動の様子とともに記されている。最後に8月20日に始まる«Quatrième cahier»（「第4の手帳」）には11日分が、ロシアのサンクトペテルブルグからデンマークのコペンハーゲンと英国ロンドンへの移動の間に書かれ、翌年1月26日に故郷に向けて出発するまで続いている。これらの結果から、バルナブースの記述回数と記述量には規則性がないと判断できる。

また、一日の記述量が定まっていないことも特徴的である。日によってプレイヤード版で1ページ（6月14日）の場合や、14ページにわたる場合（〔6月22日〕土曜日）までさまざまで、各「手帳」の総ページ数が、プレイヤード版では「第1の手帳」が約63ページ分、続いて「第2の手帳」が約72ページ、「第3の手帳」が約57ページ、「第4の手帳」が約30ページ分と多様である。つまりバルナブースは日記を不連続、不均一に書き、一冊の「手帳」を書き終えると、次の滞在先への移動を機に新しい「手帳」に交換している。「第4の手帳」は他の手帳の半量ほどで終了しているが、それは日記を書く目的が「手帳」

の最終ページまでを埋めることなく、記述内容に重点があることを示している。さらに「第4の手帳」は、書き始めから書き終わりまでの期間が、8月20日から翌年1月26日までの160日間と、4冊の手帳の中で最長であるのに対し、日記の執筆が11日間と「第3の手帳」と同様に短いことから、「日記」の不連続性の点においても際立っている。例えば58日目（8月29日）と59日目（10月3日）との間には約一か月の空白があるが、バルナブースはこの間についての詳述を避け、10月3日の冒頭で「一か月以上も放り出していたこの日記をまたつける。その間にしたことを手短かに書き留めておこう¹²²」と、サンクトペテルブルグからコペンハーゲンへの移動やスウェーデン周遊の様子を書いている。その直後の10月8日からは再び74日間の空白の期間があり、12月22日の記述再開時には「あと三週間で僕はヨーロッパを去り、未知ではあるが僕の祖国には違いないあの南米の国に二、三年、もしかしたら永久に住むつもりだ¹²³」と、帰郷の決心を固めている。このように、バルナブースの「日記」には複数の空白の期間を含むという特徴があり、急展開とも言えるバルナブースの重大な決意はその間になされている。

その一方で、「日記」を執筆した日であっても、バルナブースがその日の行動や考えのすべてを書きとめているわけではなく、バルナブースが毎日欠かさず日記をつけなくても、彼が旅行を継続していることに変わりはない。ひとの思考が一つの物事について延々と継続できないことを考え合わせれば、「日記」の記述が断片的であることは、日記体小説に真実味を与える要素にもなろう。また、心に思い浮かぶ二つの事柄を同時に書き表すことは不可能であるため、記述内容は線状にならざるを得ない。物事を想起した順、出来事が発生した順に時間を追ってまとめた文章にするには、内容の整理が必要となろう。例えば、読み手が存在する手紙と比較した場合、手紙にはまとまった考えを書くことに対し、読み手のいない日記には、思考が混乱したままであっても、その内容を思い浮かぶがまま断片的に書き記すことが可能である。とすると、バルナブースの「日記」における不均一な記述とは、彼が日記に内面をありのまま表現しようと試みる一方で、それを抑制しようとする気持ちを持ち合わせていることを、日記の記述量という物理的な数によって表した、彼の心の動きの記録であると言える。

その例として、日記の中盤で多く見られる、彼が交際している人物たちとの会話内容の直接話法による引用が、最終部に向かうにつれて減少することは、留意すべき点である。例えば、4月20日には、友人 Maxime Claremoris（マクシム・クレアモリス）の発言がプレイヤード版の2ページにわたって書かれており¹²⁴、また、6月11日から13日までの3

¹²² « Je retourne à ce journal après l'avoir négligé pendant plus d'un mois. Je note brièvement ce que j'ai fait pendant cet intervalle : », *ibid.*, p. 280.

¹²³ « Dans trois semaines je quitterai l'Europe pour aller vivre deux ou trois ans, peut-être me fixer définitivement, dans un pays de l'Amérique du Sud que je ne connais pas, et qui est pourtant mon pays. », *ibid.*, p. 290.

¹²⁴ Voir *ibid.*, pp. 99-101.

日間はそれぞれの数ページにわたって、Gaëtan de Putouarey（ガエタン・ド・ピュトゥアレイ）との会話をピュトゥアレイの発言を中心に引用している¹²⁵。ピュトゥアレイが話した内容の正確さを確認する方法はないものの、その描写は録音した音声を一字一句もらさずに書き起こしたかのようなものである。さらにバルナブースは6月14日の日記の冒頭で、「ピュトゥアレイがいないので、言葉で埋める術のない空虚な一日だった¹²⁶」と記し、友人の存在の大きさを再提示している。ところが、「日記」の最終部分である1月8日と1月26日では、会話の引用を示す引用符（ギユメ）の使用が極端に減少し、バルナブースの語り「日記」の記述を占めている。

これらの結果から、「日記」の冒頭で「絶対の探求」を掲げたバルナブースが、「日記」を書き始めた当初は、一日の出来事や他者の話す内容や口調、またそれにとまなう自らの発言を克明に再現しながら、自らの内面の表現方法を会得していったと考えられる。そして、バルナブースの内奥の変化が日記の記述を内省的なものへと向かわせたことを、これらの記述形式の変化が示していると言えよう。

バルナブースは、日記という書き手にとって応用自在な表現手段によって、ある時は心の赴くまま何ページも書き連ね、またある時には頭の中のまとまった考えや、事実だけを書きとめることができた。そして「日記」の中に生じる「書く自分」と「書かれる自分の過去」との時差が、彼に事物を客観視させてゆく。この効果の蓄積がバルナブースの変化につながるとことから、作者ラルボーによる「日記」というジャンルの選択こそが、バルナブースを新天地へと旅立たせるための有効な手段だったと言える。

それでは、「日記」の中でバルナブースはどのように変化するのだろうか。はじめに、バルナブースが「日記」に書く最も古い事柄である幼年時代への言及を検討し、彼が「日記」の最後に選択する結論、すなわち帰郷との関わりを考察したい。まずは「日記」の17日目、フィレンツェで記した4月30日の内容を見ることにしよう。

実際、僕は今でも子供の頃に感じた気持ちが変わることなく覚えている。つまりそれは眠って夜を過ごす連中に対する優越感だ。[……] 眠りに対し、夜は眠るものなどという習慣に対し、両親や女中たちや平凡な人間の思想や原理に対して、幾度となく僕は戦いを挑んだものだ。そして僕は勝った。僕は熱し過ぎた頭を、暁のうえに持たせかけることができた¹²⁷。

¹²⁵ Voir *ibid.*, pp. 194-205.

¹²⁶ « Un jour vide sans Putouarey pour le remplir de paroles. », *ibid.*, p. 205.

¹²⁷ « En effet, j'éprouve toujours ce sentiment que j'éprouvais dans mon enfance : le sentiment d'être supérieur à tous ceux qui avaient passé la nuit à dormir. [...] J'avais livré vingt batailles rangées contre le sommeil, contre la coutume qui veut que l'on dorme la nuit, contre toutes les idées et tous les principes de mes parents, des criadas et des autres gens ordinaires. Et j'étais vainqueur ; je pouvais laisser retomber ma tête trop chaude sur les seins de l'aube. », *ibid.*, p. 114. (« ordinaires » のイタリック強調は原典)

バルナブースが子供の頃に抱いた感情は、彼の後の姿につながっている。世の常識や一般的な習慣への服従について覚える違和感から、それらに逆らい、ついには勝利を収めることによって達成感を得るという構えが、幼年時代に育まれたことを示している。またそれは、先行研究や批評に見られる、バルナブースが旅の継続と日記の執筆の積み重ねによって自己確立を果たそうとした、との見解に当てはまる。

実際、バルナブースはこの日の日記の中で、昼夜逆転した生活習慣や、手がけている詩篇について次のように語っている。

数日前から、起床が午後の 5 時ということになっている。6 時頃にお風呂に入って身なりを整えるとアルビオンに行ってお茶とお菓子。8 時に軽く夜食を取り、9 時にはもうサヴォナローラの僕の机敷に収まっている。そこで雑音を飽きるほど聞き、もっとも崇高な夢の数々に満たされて、朝の 1 時頃カールトンに帰る。そして夜が明けるまでフランス語の詩の草稿を書く（自由詩で、題は『排泄物』にするつもりだ。これはまともなものではないとカルチュイヴェルスが思い込むように。彼をその典型とするような頭の良い分別屋に、まともだなどとは思われたくないのだ）¹²⁸。

また詩に取り組む際のバルナブースは、16-17 世紀の詩人 François de Malherbe（フランソワ・ド・マレルブ、1555-1628）¹²⁹を強く意識し、マレルブの詩法に傾倒している。少し長くなるが以下の部分を引用しておきたい。

近頃の日々——というよりむしろ夜な夜なのことは、僕の思い出の中で、いま僕が経験しているマレルブへの熱狂の発作に結びついて、長く残るだろう。大頌歌の詩句はトスカーナの風景に実にふさわしいのだ。もっともこの風景はマレルブが長い間暮らしていたプロヴァンスのそれと同じ系列に属している。淫蕩親父というあだ名や、彼

¹²⁸ « Depuis quelques jours, je me lève à cinq heures du soir. Je prends mon bain et m'habille vers six heures, puis je vais goûter à l'Albion. À huit heures, je soupe légèrement, et dès neuf heures je suis dans ma loge du Savonarole. Je m'y rassasie de bruits, et rentre au Carlton vers une heure du matin, plein des rêves les plus sublimes. Et jusqu'au matin j'écris des ébauches de poésies françaises (en vers libres, que j'intitulerai *Déjections* — afin que Cartuyvels croie que ça n'est pas sérieux. Je tiens à n'être jamais pris au sérieux par les gens raisonnables et intelligents dont Cartuyvels est le type). », *ibid.* 「アルビオン」はカフェ、「サヴォナローラ」は、飲み物付きで歌やショーを見せるカフェ・コンセール、「カールトン」はバルナブースが宿泊するホテルの名称。

¹²⁹ ラルポーは後年の作品のタイトル *Beauté, mon beau souci* (『美、我が美しき憂い』、1923) をマレルブの詩 « Dessein de quitter une dame qui ne le contentoit que de promesse » (「口約束しか与えてくれなかった一貴女から離れ去ろうともくろんで」、1598) の書き出しから得ている。

があれほど鼻にかけていた梅毒など、全く僕はこの文人がとても気に入った。弟子たちが熱狂のあまり披露するくだらない気取り文句を一撃のもとに打ち砕いてしまう寸鉄の詩句、すべての夢に覚め果てた彼が、いわゆる良識に対して与えていた見下し顔の保護、近代詩の始祖とも言うべき彼が自分の芸術に対して抱いていた軽蔑！ 豪胆の人！ セーヌ川の岸に詩句のルーヴルを築いた優れた石工！ フランスの偉大なる装飾家！ 彼の名を口にして、敬意の湧くのを覚えないことは一度もない。僕は一介の異邦人に過ぎないが、あえてフランス語で書こうとしている……。しかも、すでに彼が存在し、彼が僕のためにやってくれたこれらすべてのことがあるというのに！ 現代のしがたい預言者や救済者たちを介して、彼が我と我が身をからかった言葉のどれ一つを取ってみても、なんという平手打ちを食らうことか！¹³⁰

この記述における「僕は一介の異邦人に過ぎないが、あえてフランス語で書こうとしている……」には留意が必要である。バルナブースが自らを « un sans-patrie » (無国籍者)、« étranger » (「異邦人」)、また、後述する « colonial » (「植民地人」と称して、母国語¹³¹以外の言語での記述を試みる根源が、幼年時代に自らの内に覚えた違和感に向き合う意気を持ったことに由来するからである。したがって、フランス語で作品を執筆するバルナブースの試みとは、ヨーロッパという「異郷」における言葉を用いた挑戦であり、彼が覚える違和感を克服するために不可欠な作業である。

これらの幼年時代の思い出や、外国からやってきた異邦人であることの自覚との間に生じる時間の流れは、バルナブースが「日記」執筆の時点の彼と、そこで思い起こす過去の自分に、それぞれ異なる主語人称代名詞を用いることによって表れている。例えば、子供

¹³⁰ « Toutes ces journées, ces nuits plutôt, resteront sans doute liées, dans mon souvenir, à la crise d'enthousiasme *malherbien* que je traverse en ce moment. Les strophes des grandes odes vont si bien avec les paysages de la Toscane, de la même famille, d'ailleurs, que les paysages de la Provence où Malherbe vécut longtemps. Et l'auteur me plaît tant, avec son surnom de Père Luxure ; sa vérole dont il était si fier ; les mots-massues dont il assommait les petites affectations d'enthousiasme de ses disciples ; la protection hautaine qu'il accordait au bon sens, lui qui était revenu de tout ; et le dédain qu'il avait pour son art, lui le Père de la Poésie moderne ! Le brave homme ! le bon ouvrier, élevant son Louvre de strophes au bord de la Seine ! le grand décorateur de la France ! Je ne prononce jamais son nom sans me sentir pénétré de respect, moi un étranger qui se mêle d'écrire en français — après lui, après tout ce qu'il a fait pour moi. Et quelle giflle le moindre de ses mots où il s'est raillé lui-même flanque à travers les petits prophètes et les rédempteurs du temps présent ! », *A.O.B., Pléiade*, p. 115. (下線強調は引用者)「淫蕩親父」というあだ名は、17世紀に活躍したフランスの詩人で、マレルブに師事した Honorat de Bueil, seigneur de Racan (オノラー・ド・ビュエイユ、ラカン侯爵、1589-1670) と、回想録作者 Tallemant des Réaux (タルマン・デ・レオー、1619-1692) によるものである。Cf. « Notes », *ibid.*, p. 1199.

¹³¹ バルナブースの母親はオーストラリアのアデレード生まれである。そのため、現在チリ領にあたる南米の元ペルー領カンパメント生まれのバルナブースの「母語」は、母親が使う英語、「母国語」はスペイン語を指す。

の頃を過ごしたロシアに滞在中の7月21日(日)では、過去と現在の自分とを対比させ、ここで彼は過去の自分を「tu」(「おまえ」)と呼び、次のように語りかけている。

ハリコフのホテルで泣いていた男の子がみつめている。僕は、おまえの前に現れても恥ずかしくはない。僕はおまえのいいつけを全部やった。おまえが求めていたよりずっと多くのものを、僕はおまえにもたすのだ。少しばかりの賢明さをおまえにあげよう。でもそんなものは欲しくないとおまえの言うのが僕には聞こえる¹³²。

ここでは日記を書く時点のバルナブースが、「ハリコフのホテルで泣いていた男の子」である子供の頃を想起して「おまえ」に語りかけている。しかし、語りは一方的で「おまえ」からの返答はないため、それは内省的な対話のようでもある。そしてバルナブースは、この引用の次の文で、これまで「おまえ」と呼んでいた対象を「il」(「彼」)と呼びかえる。

結構なことだ。彼は満足している。ということはつまり彼は死んでしまったということだ。そして僕は、彼のいた場所に立って、新しい太陽の方に顔を向ける¹³³。

この一節では、前の文でかつての自分に「おまえ」と呼びかけた親しさが消えている。すると、過去を振り返ることで自覚した時間の隔たりから得られる距離感が、現在の自分とは遠い存在としての「おまえ」を「彼」へと呼びかえさせたと考えられる。このように、バルナブースは日記を書きながら昨今の出来事を振り返るだけでなく、人称を変えて過去の自分に向き合うことで、過ぎた時間を客観的に見ようと試みている。

バルナブースが自分に向かって「おまえ」と呼びかける場面は、48日目の「土曜日」と49日目の「日曜日」の同様の記述にも確認できる。両日とも日付が省略されているが、その前日が「6月21日〔金曜日〕」であるため、6月22日と翌23日の日記であると推察される。少し長くなるが引用して確認しよう。まず48日目では次の通りである。

ああ！ へっほこ詩人め、おまえがこのひと〔Gertrude Hansker、ジェルトリュード・ハンスカー夫人〕から、たとえ一瞬でも離れて、おまけに憂鬱だの隷属だのと言いだしたとは何としたことだ。おまえがおまえの人生を送るのに最良の手段は、彼女のそばで暮らすことなのだ。おまえの富は、ただ彼女を飾り立て、彼女を満足させるため

¹³² « Gamin qui pleurais dans une chambre d'hôtel, à Kharkow, regarde. Je n'ai pas honte de paraître devant toi : j'ai fait toutes tes commissions ; et je te rapporte beaucoup plus que tu ne m'avais demandé. Je te rapporte un peu de sagesse. Mais je t'entends me répondre : je n'en veux pas. », *ibid.*, p. 249. (下線強調は引用者)

¹³³ « Tant mieux, il est satisfait, donc il est mort. Et je me tiens à sa place, la figure tournée vers le soleil nouveau. », *ibid.* (下線強調は引用者)

にあるのだ。おまえの力がおまえに授けられたのも、ただ彼女を守らんがため、おまえの優しさもひたすら彼女を愛するためにこそあるのだ。おまえはフロリー・ベイリー〔Florrie Bailey〕のあとにくっついて町から町へと歩きまわるはずだった。女だって、次から次へと新しい女に出会うはずだった。しかしついにおまえはこのひとにめぐり会ったのだ。彼女だけは出発させてはならない¹³⁴。

バルナブスはこの記述の直前に、女友達のハンスカー夫人が夫と離婚して自分と人生を歩むさまを思い描いていたことを「僕のなかの本能がひとりでの物思いにふけていた。僕は子供のことや僕たちの生活の混和について考え、入念にしかも真剣に彼女に捧げようとしている自分の人生について考えた¹³⁵」と書いている。さらに、彼が先に挙げた「ああ！へっほこ詩人め」で始まる引用部分の直後に人称を「僕」に戻していることから、この引用部分では、日記の著述の時点のバルナブスが過去を思い起こしながら、かつての自分を非難していると考えられる。続いて、49日目の日記の記述を見よう。

僕は忘れ去っていた古い日々を再び見出す。それらは僕をみつめ、僕がそれらを見分けられるように僕の方に顔を向ける。そうだ、それは僕たちだ、僕たちの倦怠だ、役にも立たぬ仕事、古びたしくじり、これから先も苦しむに違いない自尊心。おまえの空しさやおまえの弱さが決定的なものに感じられているその時に、開いた窓からは、街の騒音が侵入してくる……。世間は時をおかず、おまえと反対のことを言い出す。おまえ自身はそれをなんと言う？ おまえはおまえの井戸の中を覗きこみ、そこに映ったものと濁った水を見て、この井戸には底がない、と思ったのだ。しかし、棒を取ってみるがいい、おまえにはすぐ地面が感じられるだろう。おまえが思っていたほど複雑ではないのだとおまえが知ったら、おまえはどんなにがっかりするだろう。そもそも生きるということそれ自体が美しすぎるなどと考えて、おまえは死の腕の中に逃げ込んでしまうにちがいない¹³⁶。

¹³⁴ « Ah ! Poète d'un sou, comment as-tu pu t'écarter de la femme un seul instant et parler d'ennui et de captivité ? Le meilleur emploi que tu puisses faire de ta vie, c'est de la passer près d'elle. Ta richesse n'est faite que pour l'orner et la rendre contente ; ta force ne t'a été donnée que pour la défendre ; ta tendresse, que pour l'aimer. Tu aurais dû suivre Florrie Bailey de ville en ville, et ensuite une autre, et ensuite une autre, et tu rencontrais enfin celle-ci, qu'il ne faut pas laisser partir. », *ibid.*, p. 233. (下線強調は引用者)

¹³⁵ « L'instinct en moi se pensait : je songeais à l'enfant, au mélange de nos vies, au don de ma vie que je voulais lui faire, avec soin, sérieusement. », *ibid.*, p. 232.

¹³⁶ « Je retrouve en moi de vieux jours que j'avais oubliés ; ils me regardent, se tournent vers moi pour que je les reconnaisse : oui, c'est bien nous, notre ennui, le travail inutile, les vieilles bévues, l'amour propre qui souffrira encore ; ta nullité et ta faiblesse définitivement senties, et les bruits de la rue par la fenêtre ouverte... Le monde ne s'attarde même pas à te contredire. Et toi-même, qu'en dis-tu ? Tu t'es penché sur ton puits, et à cause des reflets et de l'eau trouble tu l'as cru sans fond. Mais prends un bâton et tu sentiras tout de suite la terre ; et comme cela t'ennuiera, de t'être

ここではバルナブースが、「僕」と「おまえ」による過去の自分との対比だけではなく、「nous」や「notre」を用いて「それは僕たちだ、僕たちの倦怠だ」と表現することで、「僕」と「おまえ」との連帯感を表している。この「おまえ」や「彼」は、いずれもバルナブース自身を指しており、すべて「僕」に置き換えることが可能である。けれどもバルナブースは、過去と現在の時間の隔たりを自覚し、過去の自分を客観視できたことから、かつての自分を「おまえ」や「彼」と表現したと考えられる。

ひとが過去の光景を思い起こす時、本来ならば視界には入らないはずの自分の全身像が含まれることがある。それは、出来事が過去に属することによって、かつての自分の姿を鏡で見るように客観視するからであろう。加えて、その出来事に関するすべてを、あたかも他者の視点から見るように客観視できるようにもなる。バルナブースは、現在の「僕」を過去の「おまえ」または「彼」と対比させることで、こうした状態を表したのではないだろうか。さらに、彼が「おまえ」と書く場合には、日記を執筆している時点での彼との結びつきが示され、一方、過去との隔たりを実感する、あるいは実感したい場合には三人称で「彼」と書き、かつての自分との距離を明らかにしているとも考えられる。つまり、「日記」における人称代名詞の移行は、バルナブースの現在と過去との単純な対比だけではないと言える。

このように、バルナブースの記述には、執筆する時点の彼が物事を判断する際の土台となる幼年時代のさまざまな記憶が影響している。とりわけ、たびたび「日記」に現れる幼年時代の追憶が、彼にとって新しいものとは古いものから生まれるものであり、また未来の答えが過去の中に存在していることを示している。また、幼年時代の思い出を保ちながらも、彼は人称代名詞などを変化させる方法によって、過去の自分との間に距離を置こうと試みる。過去の自分を他者に見立てて客観視することで、バルナブースは自己を再認識しながら日記の記述を終え、人生の次の段階へと進んでゆく。

バルナブースにとって書くことが生きることと不可分であったことは、これまで見てきたとおりである。しかもそれは、彼にとって母国語ではないフランス語を使った日記の記述によって確かめられた。バルナブースと言語の関係について、再び「バルナブース氏の伝記」にさかのぼると、彼のフランス語の習得時期が14歳から16歳頃であったと記されている。彼は10歳で父を失い、莫大な遺産を相続したが、その当時は英語の読み書きが不自由で、常時スペイン語を話しており、フランス語を書けるようになるのはアメリカの私立学寮に入った頃であった。14歳だった1897年に学校を飛び出すと、宝石類を売り払ってヨーロッパ行きの船に乗り、最終的には南ロシアの貴族の城に落ち着いた。この間に各地を遊歴しながらフランス語を覚え、フランスの優れた文学作品を好んで読んだほか、ド

trouvé moins compliqué que tu n'avais cru, tu te réfugieras dans les bras de la mort en pensant qu'il est déjà assez beau de vivre. », *ibid.*, p. 247. (下線強調は引用者)

イツ語・イタリア語・近代ギリシャ語を学んだ¹³⁷。

このようなバルナブースの生い立ちで留意すべきことは、彼にとってフランス語が母語ではなく、成長した後に習得した外国語で、バルナブースの著作とは、『裕福なアマチュアの詩』の副題が示すように「バルナブース氏によるフランス語の作品」だということである。ところが彼は、「日記」の最終部で唐突に南米の言葉への親しみについて言及し、最終的に生まれ故郷でしかない南米への帰郷を決意する。『A. O. バルナブース全集』の時間の流れには、バルナブースの言語についての意識の変化が付随するわけである。以下はバルナブースが国と言葉の問題を通して、フランス語での執筆に取り組む様子である。まず、バルナブースが母国を離れてヨーロッパで生活することについて、自分が「植民地人」であると重ねて強調する場面を見ることにしよう。初めに、「植民地人」についての定義について、バルナブースが4月19日に書いた8日目の日記の内容を引用する。

「植民地人、われわれ植民地人」（というのも『われわれアメリカ人』などという言い方は、とどのつまりそれ以外のことを意味しないのだから、これはここではっきり承認しておこう）、僕はひとりの植民地人だ。ヨーロッパは僕を受け入れない。僕はそこ〔ヨーロッパ〕では、いつになっても観光客以外の何者でもないのだ¹³⁸。

この「植民地人」という言葉は、バルナブースが生まれた南米の元ペルー領で、現チリ領のカンパメントがスペインの属領だったことから、海外移住者によって開発され支配された土地に住む原住民、とのイメージを想起させる。しかし、バルナブースの場合、父親の先祖がフィンランドから北米へ渡った移民で、父親もアメリカ合衆国、メキシコ、キューバなどを経てペルーにたどり着いている。また、母親もオーストラリア出身であるため、バルナブースと南米との関係が深いとは言えない。それゆえ、「植民地人」という言葉が与える一般的なイメージである「植民地における、支配者と被支配者との間に生じるさまざま

¹³⁷ Cf. « Voici donc M. Barnabooth, fils et successeur de son père, abandonné à lui-même, et, orphelin à l'âge de dix ans. [...] En janvier 1897, étant dans ses quatorze ans, il s'échappa de l'institution, et, vendant assez habilement les quelques bijoux qu'on avait eu l'imprudence de laisser en sa possession, il partit pour l'Europe, débarqua à Hambourg, d'où il adressa à son tuteur une lettre qu'il a appelée depuis sa « Déclaration d'Indépendance ». [...] Il obtint de son pupille la promesse de rester, jusqu'à l'âge de seize ans révolus, auprès du Grand-Duc de..., qui consentit à l'accueillir dans son château du Sud de la Russie, à la condition que M. Barnabooth recevrait cent mille dollars par an pour son entretien jusqu'à sa majorité. Un vrai triomphe ! Quelques fugues à Constantinople, à Vienne, à Paris et à Londres furent tolérées, un vieux serviteur (mort depuis) accompagnant toujours le jeune homme. Durant tout ce temps, M. Barnabooth se perfectionna dans la langue française, lut avec délices nos meilleurs auteurs, apprit l'allemand, l'italien et le grec moderne. », « Biographie de M. Barnabooth », *ibid.*, pp. 1140-1141.

¹³⁸ « « Les coloniaux, nous autres coloniaux. » car la formule « nous autres Américains » ne signifie pas autre chose, avouons-le donc une bonne fois. Je suis un colonial. L'Europe ne veut pas de moi ; je n'y serai jamais qu'un touriste. », *A.O.B., Pléiade*, pp. 96-97. (イタリック強調は原典、下線強調は引用者)

まな摩擦や軋轢、特に被支配者の不利益」と比較すると、バルナブースが用いる「植民地人」とは、彼が続いて「観光客以外の何者でもない」と語るように、よその土地からヨーロッパに來た者が感じる日常生活の不自由さや、旅から旅へと各国をさすらう放浪者といった、不安定な存在に近いだろう。そこには彼の出生地が他国によって収奪されたことを原因とする否定的な感情は含まれてはいない。にもかかわらず、彼が「植民地人」と強調するその理由は、彼が23年間の人生のほとんどをヨーロッパで過ごす中で、フランス語をはじめとするヨーロッパ諸語にも通じるようになり、ヨーロッパにすることに自分の存在証明を感じていながらも、同時にヨーロッパという「異郷」に完全に帰属できずにいる、身の置き所のなさから生じていると考えられる。

それでは次に、複数のヨーロッパの言語に通じているバルナブースが、どのように外国語の一つとしてフランス語をとらえているのかについて、以下に二つの例を挙げて検討したい。まず一例目を、4月23日（金）の日記から引用しよう。

またしても^{ブテイキスム}買物趣味の発作……もしそんな言い方ができるなら。（フランス語にいささかうんざりするのそんな時だ、あまりに「ルイ十四世時代の服装」的なのだ。つまり金の刺繍をした硬い^{ジュストコール}襦袢や大きすぎる長靴下やズボンの裾のような感じなのだ。——それというのも、つまりは「ショッピング」にあたる言葉が見つからないからなのだ）¹³⁹。

フランス語辞典 *Trésor de la langue française* によれば、「boutiquisme」はラルボーによる造語で、その定義は「店のショーウィンドーを眺めることへの抑えがたい欲求、店に入って買い物せずにはいられないこと」である¹⁴⁰。つまりバルナブースは「買い物依存症」である。そして彼には、英語であれば「shopping」の一語で納得できることが、フランス語を使おうとすると、英語との比較で大げさに感じられる。それは、言葉に向き合う真摯さと習得言語と語彙の多さゆえに抱えるバルナブース特有の悩みが、個人の言語感覚にもとづく「言葉の選び方」に凝縮されていることの証である。彼にとっては、豊富な知識を持ち経験を重ねることが、かえって心理状態や経験に即した言葉を選ぶ妨げとなる。必要に迫られた結果であるとはいえ、新しい言葉を創りだすバルナブースに特有の言語感覚から、

¹³⁹ « Nouvelle crise de boutiquisme, si j'ose dire ainsi. (Mais C'est dans ces moments-là que la langue française me gêne un peu, me semble trop « costume Louis XIV », justaucorps roide de broderies d'or, chausses et canons trop grands, etc. — Tout cela parce que je ne trouve pas d'équivalent au mot « shopping ».) », *ibid.*, p. 104. (下線強調は引用者)

¹⁴⁰ « Le subst. Masc. *boutiquisme*, néol. d'aut [= néologisme d'auteur]. Envie irrésistible de regarder les vitrines des boutiques ; fait d'y céder en entrant faire des achats. », *Trésor de la langue française, dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, publié sous la direction de Paul Imbs, Paris, Édition du centre national de la recherche scientifique, t. 4, 1975, p. 861, s.v. *boutique*.

彼が言葉を通して社会に適応しようとしながらも、既成の概念にとらわれない信念を貫く人物像が見えてくる。

二例目は、バルナブースが5月のある木曜日、27日目の「日記」に書いた、監獄見学の際のエピソードに見られる。彼は、訪れた監獄の所長がバルナブースを出迎えた時の様子を次のように語っている。

V 監獄で。所長が自動車で迎えにきてくれた。その一挙手一投足がまったくシニョリーレな男（この言葉に相当するフランス語は見つからない。『紳士風』とでも言ったらいいのだろうか？）¹⁴¹。

« signoriles » とは、イタリア語で「紳士的な」という意味である。バルナブースは監獄の所長の様子を表現できる言葉をフランス語の中に見つけることができない。先の「ブティキスム」にせよ、この「シニョリーレ」の場合にせよ、これらは彼がフランス語を母国語としない外国人であることを象徴している。

先の二例に見た、フランス語とそれ以外の言語との対比の例は、バルナブースの言葉への意識が、いかに彼の内面の意識と分かちがたく結びついているかを示している。さらに彼は、「日記」の最終日の1月26日に次のように記している。その部分を下記に示そう。

古い世界よ、僕がおまえをすでに忘れてるように、僕を忘れるがいい。僕はもうすでにフランス語でものを考える習慣を失っている。家で毎日話している僕の母国語が少しずつ再び僕の内面の言葉になりつつある。あのカスティリアの言葉が、一つずつ、僕の精神の風土にふさわしいものになり、僕のこれまでの人生の朦朧とした思い出の中でも、最も見極め難く、最も懐かしい思い出をよみがえらせている……¹⁴²

引用部分を繰り返しながら見てみよう。まず « ma langue natale »（「僕の母国語」）とは « ces mots castellans »（「カスティリアの言葉」）、すなわちスペイン語である。そのスペイン語が、バルナブースがこれまで用いていたフランス語に取って代わって « mon esprit »（「僕の精神」）を表現するにふさわしい « mon langage intérieur »（「僕の内面の言葉」）になろうとしている。しかも彼が、「僕の言葉」ではなく「僕の内面の言葉」と表現したことに注意が必

¹⁴¹ « À la prison de V. Le directeur est venu me chercher dans son automobile. Un homme aux manières tout à fait signoriles (je ne trouve pas l'équivalent français : « de Monsieur » ?) », *A.O.B., Pléiade*, p. 159. (下線強調は引用者)

¹⁴² « Vieux monde, oublie-moi comme je t'oublie déjà. Voici que je me déshabitude de penser en français. Ma langue natale, peu à peu à la parler tous les jours dans ma famille, redevient mon langage intérieur. Un à un se réacclimatent dans mon esprit ces mots castillans qui rappellent tant de souvenirs, les plus obscurs et les plus chers, de tous les confins de ma vie... », *ibid.*, pp. 303-304. (下線強調は引用者)

要である。バルナブースが「日記」の最終日である故郷への旅立ちの直前に書いた告白は、心身ともに新天地の人になろうとする彼の決意表明であり、そこに帰郷への覚悟が現れていると考えられるからである。

また、この引用における « (le) vieux monde » (「古い世界」) とは、バルナブースの出生地の南米ではなく、ヨーロッパおよび彼のヨーロッパでの生活を指している。それは以前の彼が、« mon monde » (「僕の世界」) と表現していたものであった。しかし、12月22日にロンドンで書いた日記の内容から彼の考えが一転し、「ある日僕は、かつて『僕の世界』と呼んでいたものにまた戻った。最初にわかったのは、僕がもはやその世界に属していないということだった¹⁴³」と記した後に、周囲の人間との交際への疲れから「時と諸般の事情とが僕たちをひきさいていた¹⁴⁴」とだけ簡潔に説明し、帰郷への決意を固める。「mon monde」に付く所有形容詞 « mon » は、彼がそれまで過ごしてきた環境への愛着を示している。けれども、彼がこれから住む世界を「新しい世界」と表現することはない。なぜなら一旦新天地に移り住めば、今度はそこが「僕の世界」になるからである。「monde」に付与される冠詞の定冠詞から所有形容詞への移行とは、このようにバルナブースの心理状態を反映している。すなわち「僕の世界」には、そこに住むための言語が必要であるが、それは彼がどの世界に属するかによって変化し、内面の言葉と密接に関わっていると言える。

かつてバルナブースは、フランス語を使うことについて次のように記していた。以下は「日記」の48日目、「土曜日」の一節である。その前日の日付(6月21日・金曜日)から推測して、6月22日のものである。

僕はスイッチを切り替え、自分の考えていることをモリエールの言葉をあやつって表現する(もちろん僕にできる限りにおいての話だが)。毎日つけていた日記、それにピュトゥアレイとの会話のおかげで、僕のフランス語もさびつかずに済んだ¹⁴⁵。

このようにバルナブースは、自身が各国語に長け、フランス語で文学作品を書きながらも、フランス語を用いる際には一段階必要であることを示している。また、彼はその様子を « faire l'aiguillage » (「スイッチを切り替える」) と表現し、頭の中の使用言語の切り替えを、鉄道線路で車両を他の線路に向かわせる際の転轍機(ポイント)の操作になぞらえ

¹⁴³ « Je suis retourné, un jour, dans ce que j'appelais autrefois « mon monde ». J'ai compris d'abord que je n'en étais plus. », *ibid.*, p. 292. (下線強調は引用者)

¹⁴⁴ « Le temps et les circonstances nous avaient séparés. », *ibid.*, p. 293.

¹⁴⁵ « Je fais l'aiguillage et dirige ma pensée dans la langue (autant que possible) de Molière. Mon journal quotidien et mes conversations avec Putouarey ont empêché mon français de se rouiller. », *ibid.*, p. 231.

ている。バルナブースは詩篇の中の「頌歌」において鉄道を讃美していたが¹⁴⁶、鉄道とは常に前進する乗り物で、一旦路線を変更すれば容易に元の方向に戻ることはできず、列車は終着地まで定められた線路を進む。バルナブースは、言語の切り替えには退路を断つほどの決意を要することを説明し、その結果スペイン語の使用を決断する。

またそれは、日記の最後の文章において、バルナブースが飼っているオウムが、スペイン語で「オウム」を示す言葉を繰り返し始めることにも表れている。その部分を見てみよう。

4時。夜が明けるのを僕は待つだろう。家中の明かりという明かりを全部僕はつけた。その明かりで目を覚まし、積み上げられた荷物の上のカゴの中で羽をばたばたさせているオウムも、喋りだすのをもう我慢できないらしい——「ローロ……、ロリート？……、ロリート・リアル！」¹⁴⁷

飼い主の口まねが巧みなオウムの復唱する言葉がすでにスペイン語「ローロ」に変化していることは、バルナブースの変化の象徴であろう。けれどもバルナブースにとっては、思考する言語、会話する言語が変わるだけでは不十分である。彼には記述する言語との一体化も必要だからである。なぜなら彼の自己確立は、書く行為によって自己と一つになることで果たされるからである。

これまで見てきたように、バルナブースの「日記」は自己省察を含む「内心の日記」である。彼は、日記の執筆という継続した記述行為によって、幼年時代の回顧や他者の模倣、使用言語の選択といった複数の自己探求の過程を、異郷における旅の途中で記録し、その結論として帰郷という結論に至った。「日記」を書き始めた当初は、「植民地人」である生い立ちにまつわる特徴を前面に出すために、フランス語以外の言葉を繰り返し用いて強調するが、やがて自らが綴る言葉に、内面の言葉を反映させる必要性を感じるようになる。言葉をあやつり、「小説」や「詩」を執筆する作家でもあったバルナブースにとって、心に思うままの言葉を綴ることは、母国語の使用によってのみ可能だったわけである。このように「日記」は、バルナブースの旅の詳細を把握するための手段にとどまらず、『全集』がバルナブースの著作であると強調するラルボーの意図を際立たせる効果をもたらした。そしてラルボーは、バルナブースに「日記」を書かせることで、バルナブースを別人格として独立させることを、『全集』の構成において成し遂げたと見えよう。

バルナブースの南米への帰郷という、さらなる異郷への移動、しかも非文明国へと赴く

¹⁴⁶ Voir « Ode », *ibid.*, p. 44.

¹⁴⁷ « Quatre heures. J'attendrai le jour. J'ai allumé toutes les lampes de la maison ; et le perroquet, que la clarté a réveillé et qui s'agite dans sa cage au sommet d'une pile de valises, ne se retient plus de parler : « Loro... lorito...? lorito réal ! » », *ibid.*, p. 304.

行為は、確かに文明社会であるヨーロッパからの逃避である。「日記」を執筆した当時のラルボーは、ヨーロッパを一つの総体としてとらえており、それは彼の作品においても彼の言動において確認することができる。先に挙げた『A. O. バルナブース全集』に収録された詩篇の一つ「ヨーロッパ」では、主人公のバルナブースが「僕にとって、／ヨーロッパは一つの大きな町のようなものだ¹⁴⁸」とうたい、作者ラルボーも 1919 年 2 月 8 日の日記に「ヨーロッパという国がある¹⁴⁹」と英語で記している。また、『フェルミナ・マルケス』では、Victor Duruy（ヴィクトル・デュリュイ、1811-1894）のローマ史に関する著作を愛読し、ローマ帝国復活への願望を「僕はフランス人じゃない。僕の教理問答書は、僕がローマ・カトリック教徒であることを教えている。それを僕はこう解釈する。僕はローマ人であり、世界の支配者なのだ！ と¹⁵⁰」と語る中学生ジョアニ・レニオを登場させている。つまり当時ラルボーが持っていた「ヨーロッパは一つ」とする考えには、ローマを頂点とし、大国が主導権を握る構図が存在する。その概念に照らし合わせれば、バルナブースの帰郷は、先行研究が結論づけたとおり、異郷での挫折であろう。

だが、それにはバルナブースが「日記」の冒頭で家財を処分し、帰る場所を失っていたことにも原因がある。真の自律を目指して自己探究を続ける彼の旅は、異郷をめぐる一見華やかなコスモポリティズムに満ちているようでありながらも寄る辺ないものでしかなく、彼は常に物心両面の拠り所を求めていた。その結果、故郷という彼がいつでも帰ることができる、いつでも彼を受け入れてくれる場所を新たに南米に求めたと考えられる。それと同時にコンチャを伴侶に決めたバルナブースは、12 月 12 日の日記に「それに、愛する人の腕に抱かれていると、僕の故国が少しずつ優しく、僕の心を再びとらえてくる¹⁵¹」とも書いている。心身ともに安住の地を見出したことで、バルナブースの豪奢ではあるが浮き草のような旅は終わり、彼の自己探求は完結する。それゆえ、バルナブースがヨーロッパという異郷の国々での自己探求の過程で柔軟な思考を身につけ、母国語の使用が彼に精神的な安寧をもたらすことを自覚し、心の内を思うままに表現する手段をその言語に求め、それを実現する場として生まれ故郷を選んだこと、その選択には新たな人生の門出、再出発、再生の機会としての意味があると言えよう。

¹⁴⁸ « Pour moi, / L'Europe est comme une seule grande ville », « Europe », *ibid.*, p. 72.

¹⁴⁹ « There is a country Europe », Valery Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 661.

¹⁵⁰ « Je ne suis pas français. Mon catéchisme me dit que je suis catholique romain, et moi je traduis cela ainsi : Romain et maître du monde ! », *Fermina Márquez, Pléiade*, p. 354.

¹⁵¹ « Et par les bras de la bien-aimée, mon ancien pays me reprend peu à peu, doucement. », *A.O.B., Pléiade*, p. 294. (下線強調は引用者)

第2部 帰郷

1913年の『A. O. バルナブース全集』、1918年の『幼なごころ』の出版から1927年に『アレン』を発表するまでの間、ラルボーは多岐にわたる分野で創作活動を続けていた。第一次世界大戦時は、健康上の理由から徴用されずにスペインのアリカンテに断続的に滞在し、その間に英国の小説家 Samuel Butler (サミュエル・バトラー、1835-1902) の *Erewhon* (『エレホン』) を翻訳出版するなど、外国文学のフランスへの紹介に尽力した。特筆すべきは、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』の仏訳監修を務め、またそこから得た「内的独白」の手法を用いた作品『恋人よ、幸せな恋人よ……』、『秘めやかな心の声……』¹⁵²を發表したことである。1924年からは季刊誌『コメルス』の編集を手がけ、1925年には評論集 *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais* (『罰せられざる悪徳、読書：英語の領域』) を出版、また英語やスペイン語による記事¹⁵³を寄稿するなど、精力的に文学作品の創作や翻訳、批評の執筆をこなしていた。

その後、ラルボーは1927年に『新フランス評論』誌上で「Allen」(「アレン」)¹⁵⁴を發表する。しかし内容が難解であることからか、1925年に『新フランス評論』編集長に就任していた Jean Paulhan (ジャン・ポーラン、1884-1968) は、その年の8月に「あなたの著作の中で容易に好きにはなれない『アレン』をその地方〔ブルボネ地方〕は気に入っているようだね¹⁵⁵」と評していた。後に説明するように、その後も『アレン』はいくつかの版を重ねたが、その内容について詳細な解釈をされることが一切ないまま今日に至っている。ラルボーが『アレン』を介して故郷に光をあてたことは、案外知られていないように思われる。

¹⁵² 1923年に出版した三部作 *Amants, heureux amants...* (『恋人よ、幸せな恋人よ……』) には『美、我が美しき憂い』も収録されているが、この作品に内的独白の手法は用いられていない。

¹⁵³ 1914年に英国の週刊誌 *New Weekly* (『ニュー・ウィークリー』) に「Lettres de Paris」(「パリ通信」) を英語で連載、また1923年からの3年間は、アルゼンチンのブエノス・アイレスで発行されていた日刊紙 *La Nación* (『ラ・ナシオン』) に、フランス文学を紹介する記事を毎月スペイン語で執筆、寄稿していた。記事はそれぞれ以下のとおり刊行されている。Valery Larbaud, *Lettres de Paris : pour le New Weekly (mars-août 1914)*, traduit de l'anglais par Jean-Louis Chevalier, introduction et notes d'Anne Chevalier, Paris, Gallimard, 2001 ; Valery Larbaud, *Du Navire d'argent*, chroniques traduites de l'espagnol par Martine et Bernard Fouques, introduction, établissement du texte et notes d'Anne Chevalier, Paris, Gallimard, 2003.

¹⁵⁴ 『新フランス評論』に掲載した作品は、以後も「アレン」と表記する。

¹⁵⁵ Cf. « Cher ami, merci, je suis content que la province aime Allen, qui n'est pas facile à aimer, qui est peut-être, de vos œuvres, la moins facile à aimer : et moi-même (qui ai été l'un des premiers à le lire) je ne distingue que depuis une semaine tout ce palais de cristal. », la lettre de Jean Paulhan à Valery Larbaud de la seconde quinzaine d'août 1927, in Valery Larbaud, Jean Paulhan, *Correspondance 1920-1957*, édition établie et annotée par Jean-Philippe Segonds, introduction de Marc Kopylov, préface de Michel Déon de l'Académie Française, Paris, Gallimard, 2010, p. 67. (下線強調は引用者) この書簡に先立ち、ラルボーはポーランに、ブルボネ地方の批評家アンリ=ビュリオ・ダルシルとカミーユ・ガニョンによる『アレン』の書評を送付していたようである。Voir *ibid.*, note 3.

『アレン』に関する研究史においても同様に、先行研究に十分な蓄積があるとは言い難いが、フランソワーズ・リウールによる『アレン』の「本編」と「著者解題」についての論考、「Valery Larbaud : *Allen* ou de l'autonomie」¹⁵⁶、「La marge d'une œuvre : Valery Larbaud, *Allen* et les *Notes* sur *Allen*」¹⁵⁷は、作品中の引用に関する出典の提示や解説も決して多いとは言えないものの、発話者を推定するための手がかりを示した貴重な成果である。その後、1992年にストラスブールで開催されたコロクで Essaid Boumadiane (エサイード・ブーマディアヌ) が『アレン』における「ヨーロッパ合衆国構想」について発表し、それが後に論文となっている¹⁵⁸。最近では Nelly Chabrol Gagne (ネリー・シャブロール・ガーニュ) が、自動車旅行の速度とテキストとの関係についての論文、「Style et polyphonie dans *Allen*」¹⁵⁹を発表しているほかは、ブルボネ地方で発行される雑誌や地方紙が『アレン』を取り上げている程度である¹⁶⁰。また、それらは総じてテキストをたどることによってブルボネ地方の史実を確認するにとどまっているため、『アレン』の難解さのもとである発話者の推定や、引用の出典の特定には至っていない。しかもこうした『アレン』を研究対象とした論文が販路の限られた媒体に発表され、また掲載されていることも、各々の研究成果の周知や共有を難しくしている。

それに加えて、現在ラルボー研究の主たる参照文献であるプレイヤー版(1958年)に収録された『アレン』に生じた複数の誤植が、2006年に Sillage (シヤージュ) が刊行した単行本¹⁶¹においても訂正されずにいることも、『アレン』への関心の度合いを映し出しているかもしれない。詳しくは「別冊」に示したが、一例を挙げると、「著者解題」第10章における「Charles II」(「シャルル二世」)は Charles III de Bourbon (ブルボン公シャルル三世、1490-1527) の誤りであるが¹⁶²、ブルボン公シャルル三世が『アレン』における重要人物であることは、「本編」や「著者解題」の記述から明らかである。つまりこうした誤植

¹⁵⁶ Françoise Lioure, « Valery Larbaud : *Allen* ou de l'autonomie », in *L'Auvergne littéraire artistique et historique*, n° 201-202, Clermont-Ferrand, L'Auvergne littéraire, 1969, pp. 31-48.

¹⁵⁷ Françoise Lioure, « La marge d'une œuvre : Valery Larbaud, *Allen* et les *Notes* sur *Allen* », in *La Marge* : Colloque de Clermont-Ferrand, janv. 1986, édité par François Marotin, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 1988, pp. 61-69.

¹⁵⁸ Essaid Boumadiane, « *Allen* et l'avenir de l'Europe », in *Valery Larbaud : Espaces et Temps de l'Humanisme*, études rassemblées par Auguste Dezalay et Françoise Lioure, et présentées par R. Grenier, M. Kuntz et A. Dezalay, Clermont-Ferrand, Association des publications de la Faculté des lettres et sciences humaines de Clermont-Ferrand, 1995, Collection Littératures, pp. 27-33.

¹⁵⁹ Nelly Chabrol Gagne, « Style et polyphonie dans *Allen* », in *Les Langages de Larbaud*, études réunies par Stéphane Chaudier et Françoise Lioure, Centre de recherches sur les littératures modernes et contemporaines, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 2006, Collection Littératures, pp. 203-216.

¹⁶⁰ Jaques Chevalier, « Valery Larbaud Bourbonnais au Pays d'*Allen* », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 2, 1957, pp. 49-52 ; Isabelle Minard, « Le Bourbonnais de Valery Larbaud », in *Arpa*, n° 58, Clermont-Ferrand, Association de recherche poétique en Auvergne, 1995, pp. 16-21.

¹⁶¹ Valery Larbaud, *Allen*, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006.

¹⁶² Voir Valery Larbaud, *Allen*, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006, p. 136 ; *Allen*, *Pléiade*, p. 766.

の放置は、『アレン』が出版界からも研究者たちからも関心を持たれにくい作品だったことの表れであろう。

けれども、ラルボーが1911年に「*Journal de Quasie*」（「カジエの日記」）¹⁶³を執筆した頃から、後の『アレン』で実現する「ブルボネ地方に関する事柄」についての作品の構想を温め続けていたことや、『アレン』の発表時期である1927年を、ブルボン公国の始まりである1327年と、その終わりである1527年に関連づけていたことから、ラルボーと故郷とのつながりを示す重要な作品であると考えられる¹⁶⁴。というのも、1927年はLouis I^{er} de Bourbon（ブルボン公ルイー一世、1279-1342）がフランス王から領主に任命され、ブルボン公国が誕生した1327年から600年、また1527年にブルボン公シャルル三世がローマで戦死したことによって、ブルボン家の本流が断絶した年から400年にあたるからである。

そこで本研究では、まず『アレン』のテキストをもとに言葉の意味や出典を調査し、詳細な注釈を付すことによって、ラルボーが意図的に明かさなかった『アレン』の謎解きを試みた¹⁶⁵。その上で、ラルボーが『アレン』によってブルボネ地方へ帰郷する様子を示したい。まずは1927年の『新フランス評論』における「アレン」の発表から1929年の「決定版」の出版に至るまでの経緯を版ごとに示し、その過程でラルボーが「著者解題」を追加したことを説明する。続いて、作品の構成について、『アレン』という謎めいたタイトルの由来、登場人物たちについて順に説明してゆく。

¹⁶³ ラルボーは、1911年2月11日から3月19日にかけての、パリからブルボネ地方、フォレ地方、ブルボネ地方からパリ、パリからリヨンへの自動車旅行の様子を、「カジエの日記」としてまとめている。この日程のうち2月28日から3月7日にかけてのパリ往復の旅には、レオン=ポール・ファルグが同行していた。Voir « *Journal de Quasie* », in Valéry Larbaud, *Journal*, *op. cit.*, pp. 75-82. ラルボーはこの日記を出版する予定で草稿を準備していたが、二年後に断念し、草稿を破棄した。『日記』に掲載された内容は、ラルボーが1913年にアンリ・ビュリオ=ダルシルに渡したタイプライターによる写しをもとに、後に写しを受け取ったジョルジュ・ジャン=オーブリがラルボーの伝記に加えたものに依拠している。Cf. *ibid.*, p. 73 ; Georges Jean-Aubry, *Valéry Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, *op. cit.*, pp. 151-158.

¹⁶⁴ 下線強調は論者。

¹⁶⁵ 「別冊」を参照されたい。

第1章 『アレン』の構成

第1節 「著者解題」追録まで

ラルボーが『アレン』の執筆に取りかかったのは1926年、当時滞在していたポルトガルのリスボンにおいてである。プレイヤード版の「解説」に記された、アンリ・ビュリオ＝ダルシル宛の1926年1月27日の書簡から類推するところでは、執筆開始は1月のようである¹⁶⁶。この年の3月7日に叔母ジャーヌが83歳で亡くなり、ラルボーは急遽ヴァルボワへ帰省した¹⁶⁷。その後、翌1927年2月の初出から1929年6月の「決定版」の出版に至るまで、以下の表2「『アレン』出版の経緯」に示すように、ラルボーは四つの版の『アレン』を刊行した。

表2：『アレン』出版の経緯

年	月/日	掲載・出版	ブルボネ地方での批評 ¹⁶⁸
1927	2-3	« Allen », in <i>NRF</i> , n° 161, 1 ^{er} février 1927, pp. 137-154 ; « Allen », in <i>NRF</i> , n° 162, 1 ^{er} mars 1927, pp. 296-317. (『新フランス評論』初出版と略記)	—
	3/27	<i>Allen</i> , illustré d'eaux-fortes originales par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 1927. (120部：オ・ザ	—

¹⁶⁶ « C'est à Lisbonne, en janvier 1926, que Valery Larbaud semble avoir commencé à écrire ce livre. Il y fait allusion dans une lettre à H. Buriot-Darsiles (Lisbonne, 27 janvier 1926). », « Commentaires », *Pléiade*, p. 1247. ヴィシー市立図書館は両者の書簡244通を保管しているが、未だ公開されていない。「ラルボー友の会」の2008年の総会において、両者の書簡の公開が『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』の将来のテーマの一つとして議題に上がったものの、近年中に着手される予定はないようである。Cf. « Un souhait formulé naguère par Bernard Delvaille est écarté : la publication de la correspondance de Larbaud avec Henri Buriot Darsiles [*sic*]. Cette correspondance, font remarquer Anne Chevalier et Françoise Lioure, est trop factuelle et pas assez intéressante. En revanche, de l'avis de plusieurs personnes présentes, il serait intéressant d'envisager les relations de Larbaud avec le Bourbonnais, et de publier des extraits de correspondances de Larbaud avec des personnalités bourbonnais. », « Acquisitions remarquables 2008 », par Isabelle Minard [= une des bibliothécaires de MVL], in *CVL*, n° 45, *Valery Larbaud écrivain critique*, 2009, p. 117.

¹⁶⁷ Cf. « 1926 Voyage au Portugal de janvier à mars. Fait à Lisbonne une conférence sur les écrivains français du XVI^e siècle. Rentre précipitamment en France le 8 mars, à l'annonce de la mort de sa tante. », Françoise Lioure, « Valery Larbaud », in *Magazine littéraire*, n° 171, avril 1981, p. 18. (下線強調は引用者)

¹⁶⁸ これらの批評については、「別冊」138-142頁に掲載した第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」と、補遺に再録した書評(1.「著者解題」第16章に引用した記事三点、155-162頁)を参照されたい。

		ルド版と略記)	
1927	5/5	—	Henri Buriot-Darsiles, « LETTRES ET ARTS : VOYAGES », in <i>Courrier de l'Allier</i> , le 5 mai, 1927, p. 3a-d.
	7-8	—	Camille Gagnon, « VALERY LARBAUD : Allen, illustré d'eaux-fortes originales, par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 122, boulevard Murat, XVI ^e », in <i>Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais</i> , juillet-août 1927, pp. 233-236.
	7/28	—	Robert Tournaud, « « ALLEN » Par Valery LARBAUD », in <i>Courrier de l'Allier</i> , le 28 juillet, 1927, p. 2e-f.
1929	2/20	<i>Allen</i> , orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929. (650 部 : オリゾン・ド・フランス版と略記) 母への献辞、「読者への序文」、「著者解題」(全 23 章)を掲載	—
	6/10	<i>Allen</i> , Paris, Gallimard, 1929. (3,030 部 : ガリマール版と略記。「著者解題」全 21 章を掲載 : « Questions de virgules », « Double titre » を削除。この版を「決定版」とする)	—

以下、版を追って、各版の概略を説明しよう。

1. 『新フランス評論』初出版

この表が示すとおり、『アレン』の初出は1927年2月から3月にかけての『新フランス評論』誌上においてである。当時、『新フランス評論』はラルボーに別の作品の執筆を求め

ていた。1924年以來、『新フランス評論』の「à paraître」（「近日刊行」）欄には *Luis Losada : Violettes de Parme*（『ルイ・ロサダ：パルムのスマイレ』）と *Dernières nouvelles d'Alabona*（『アラボナからの近況報告』）が掲載されていたが、いずれも発表されることはなかった。

『ルイ・ロサダ：パルムのスマイレ』の詳細は明らかではないが、『アラボナからの近況報告』は「バルナブースの日記」の続編として、南米へ帰郷した後のバルナブースの様子を綴る構想であったという。ラルボーは1922年にこの二つの作品に着手したようであるが、結局完成には至らず、何の予告もしていなかった「アレン」を発表した¹⁶⁹。

雑誌に長年予告していた作品を脇へ置いてまで『アレン』に取り組んだラルボーは、ジャン・ポーランへの1926年9月26日付の書簡で、『アレン』の仕上げに取り組んでいることを伝えた後、『アラボナからの近況報告』について、他の実在する作品の告知と混同しかねないため、「『アレン』といえば、『新フランス評論』のグレーのページ〔広告欄〕に『アラボナからの近況報告』の宣伝をいつも見かけるが、もう一切告知しない方が良いでしょう」と伝えている¹⁷⁰。

2. オ・ザルド版

1927年3月27日、ラルボーはチェコ生まれの画家 Othon Coubine（オートン・クービーヌ、1883-1969）の挿絵版を限定120部で出版した。表紙には翼を備えた跳躍する鹿、また本文の各章と背表紙に風景の銅版画が添えられているが、地名などの解説は見られない。

このオ・ザルド版を出版する以前に、ラルボーがアンリ・ビュリオ＝ダルシルへの1927年1月12日付の書簡において示した「ブルボネ地方版」の出版への希望は注目に値する¹⁷¹。この時、次のオリゾン・ド・フランス版の挿絵を手掛ける同郷の版画家 Paul Devaux（ポール・ドゥヴォー、1894-1949）が、ブルボネ地方の版画をラルボーに託していたが、編集者の意向で、クービーヌの挿絵を配したオ・ザルド版の出版が先行したからである¹⁷²。

ラルボーは、オ・ザルド版を出版する直前にダルシルに、「ブルボネ地方版」実現への希望を改めて伝えている¹⁷³。本研究「別冊」の補遺に再録したダルシルの書評は、こうした

¹⁶⁹ Cf. « Je commence à écrire des ébauches en vue de *Dernières nouvelles d'Alabona* et *Violettes de Parme*. », Valery Larbaud, *Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926*, op. cit., p. 55.

¹⁷⁰ Cf. « À propos d'Allen, je vois qu'on annonce toujours dans les pages grises de la NRF « *Dernières lettre [sic] d'Alabona* » ; il vaudrait mieux ne rien annoncer du tout, [...] », Lettre de Valery Larbaud à Jean Paulhan (du 17 septembre 1926), in Valery Larbaud, *Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957*, op. cit., p. 53. (« lettre » のイタリック強調は原典)

¹⁷¹ Cf. « L'édition bourbonnaise d'Allen est un beau rêve : il faudrait trouver un nombre suffisant de souscripteurs dans le pays. Il est vrai que je ne demanderai rien pour moi. Enfin, je vais faire en sorte que l'édition parisienne soit aussi bourbonnaise que possible : dessins, emblèmes, cartes du duché du Bourbonnais, etc. », la lettre de Valery Larbaud à Henri Buriot-Darsiles du 12 janvier 1927, citée par « Notes », *Pléiade*, pp. 1247-1248.

¹⁷² *Ibid.*, p. 1248.

¹⁷³ Cf. « Je ne désespère pas d'une édition moulinoise dans quelques années. Je vous dirai pourquoi. », la lettre de Valery Larbaud à Henri Buriot-Darsiles du 15 mars 1927, citée par *ibid.*

経緯を踏まえて書かれたものである。

3. オリゾン・ド・フランス版

続いてラルポーは、1929年2月20日にポール・ドゥヴォー¹⁷⁴の版画による挿絵を入れた版をオリゾン・ド・フランス社から650部出版し、その際に母への献辞と「Prologue au lecteur」（「読者への序文」）、「本編」を解説した23章の「Notes」（「著者解題」）を追加収録した¹⁷⁵。すなわちラルポーは「著者解題」を、「本編」を発表し、また読者数を多く見込める『新フランス評論』にも、またラルポーがこの時期に活躍の舞台としていた『コムルス』にも掲載することなく¹⁷⁶、発行部数を限定したオリゾン・ド・フランス版で発表した。

巻末の挿絵一覧表「Table des gravures」に挙げられた9点の挿絵は、この版にのみ収録されたもので、パリのParvis Notre Dame（ノートルダム教会前広場）の敷石にはめ込まれた、フランスの道路の起点を示す八角形の「Rose des vents du parvis Notre-Dame」（「ノートルダム大聖堂広場の羅針図」p. 9）に始まり、「Priuré de Souvigny」（「スヴィニーの修道院」p. 11）、「Tour Quiquengrogne, à Bourbon-l'Archambaud」（「誰が何と言おうとも塔、ブルボン=ラルシャンポーにて」p. 21）、「Église de Saint-Menoux」（「サン=ムヌーの教会」p. 29）、「Château d'Hérisson」（「エリソン城」p. 35）、「Maison de Madame de Sévigné à Vichy」（「ヴィシーのセヴィニエ夫人の館」p. 43）、「Vieux toits et usines à Montluçon」（「モンリュソンの古い屋根と工場」p. 53）、「Château de Chantelle」（「シャンテル城」p. 63）、「Maisons roses et noires à Moulins」（「ムーランのバラ色と黒の家屋」p. 73）の順に掲載され、これら風景を経てムーランに到着する流れをすることによって「本編」を補完している。

この版についてラルポーは、「著者解題」第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」に書評を取り上げた、モンリュソン出身の歴史家で批評家のRobert Tournaud（ロベール・トゥルノー、1903-1938）¹⁷⁷への1929年4月18日付の書簡において、ドゥヴォー

¹⁷⁴ ラルポーは1928年にドゥヴォーの作品集（*Paul Devaux, tailleur d'images, présente quelques paysages bourbonnais*, Bellerive, Éditions bourbonnaise de L'Élan, 1928）の序文を書いている。

¹⁷⁵ 「Notes」, in Valéry Larbaud, *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, éd. de la chronique des belles lettres françaises, Horizons de France, 1929, pp. 85-107.

¹⁷⁶ Cf. Ève Rabaté, *La Revue Commerce : l'esprit « classique moderne » (1924-1932)*, Paris, Classiques Garnier, 2012, p. 189.

¹⁷⁷ 当時ロベール・トゥルノーは教職の傍ら、郷土に関する小冊子 *Visite au Bourbonnais—Notes sur Hérisson*（『ブルボネ地方探訪—エリソンに関する覚え書き』、1928）などを出版し、その献辞をラルポーに捧げていた。1927年の『アレン』の出版をきっかけに、二人は1927年から1929年にかけて書簡を交わした。Voir Monique Kuntz, « Autour d'Allen », in *Académie du Vernet, Cahier du 40^e anniversaire 1944-1988*, Vichy, impr. Wallon, 1987, pp. 45-58 ; « Lettre à Robert Tournaud », in Valéry Larbaud, *Lettres d'un retiré*,

が手掛けたブルボネ地方の風景に満足し、またその技法はフランス国内外に通用すると述べている¹⁷⁸。

だが同時に、この版の構成や校訂に関してラルボーは満足していなかった。というのも、ラルボーにとって明らかに不要な二つの章であった « Questions de virgules » (「読点の問題」) および « Double titre » (「二つのタイトル」)¹⁷⁹を「著者解題」に加えなければならなかったこと、「本編」第7章の「夏の美しい夜には、夢みがちな、和やかなその町は、ツバメたちの長い旋回と鳴き声の下にあります¹⁸⁰」における「ツバメたち」を示す語について、ラルボーの意図では « hirondelles » (「ツバメたち」) であるべきところを、編集者がラルボーに無断で « martinets » (「アマツバメたち」) に変更したからである¹⁸¹。ラルボーはこれらに納得できず、当時印刷中のガリマール版だけは彼の意図にかなったものになるだろうとの期待を寄せていた¹⁸²。また、1929年5月14日付のジャン・ポーランへの書簡で、ラルボーは「著者解題」の執筆に心血を注いだことを伝えているが¹⁸³、この書簡集の注釈によれば、編集者 G. = J. プラスの「ツバメたち」に関する、ラルボーにとって不本意な修

édition établie et préfacée par Michel Bulteau, Paris, La Table Ronde, 1992, pp. 197-212. また、トゥルノーは1929年10月号の『新フランス評論』に『アレン』の書評を寄せている。Voir Robert Tournaud, « Allen, par Valery Larbaud (Édition de la N. R. F.) », in *NRF*, n° 193, 1^{er} octobre 1929, pp. 555-558.

¹⁷⁸ Cf. « La Manière dont Paul Devaux interprète les paysages bourbonnais me paraît tout à fait remarquable : à la fois méditée, simple et forte, et je le crois destiné à être apprécié et admiré non seulement à Paris mais hors de France. », la lettre de Valery Larbaud à Robert Tournaud du 18 avril 1929, in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, op. cit., pp. 206-207.

¹⁷⁹ この二章について、「別冊」の補遺 3「削除された『著者解題』の二章」に全文を再録すると共に日本語訳と注釈を試みた。「別冊」165-167頁を参照されたい。

¹⁸⁰ « [L'Éditeur :] Et aux beaux soirs d'été, ville rêveuse, attendrie, sous les longs tournoiements et les cris d'hirondelles. », *Allen, Pléiade*, p. 753. (下線強調は引用者)

¹⁸¹ « Et aux beaux soirs d'été, ville rêveuse, attendrie, sous les longs tournoiements et les cris des martinets. », *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, op. cit., p. 72. (下線強調は引用者)

¹⁸² Cf. « C'est, d'ailleurs, grâce à ces illustrations que cette édition mérite d'être bien accueillie. Je ne suis pas très satisfait de l'établissement du texte lui-même. Les *Horizons de France*, croyant donner par là plus de valeur à cette édition, m'ont demandé deux *notes* supplémentaires (23 au lieu de 21) que je juge complètement inutiles ; et je vous prie de bien vouloir corriger à la plume, dans le chap. VII, l'erratum « ... les cris des martinets » pour « ... les cris d'hirondelles », — correction invraisemblable faite, à mon insu, sur les bonnes feuilles, par un dangereux maniaque. Heureusement, on est en train d'imprimer l'édition de la NRF qui sera (si MM. les typographes ne s'y opposent pas) la seule conforme à mes intentions. », la lettre de Valery Larbaud à Robert Tournaud du 18 avril 1929, in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, op. cit., p. 207. (イタリック強調は原典)

¹⁸³ Cf. « J'attends, non sans impatience, les bonnes feuilles d'*Allen* avec la page de titre et la page « du même auteur », que je n'ai pas encore vues. J'ai ajouté une petite *footnote* à laquelle je tiens beaucoup, et qui mentionne l'ouvrage de Daniel Halévy, dont je tenais absolument à dire un mot, parce qu'il a donné beaucoup d'attention bienveillante au Bourbonnais. J'espère qu'elle sera insérée, et qu'elle ne sera pas défigurée par des coquilles. », la lettre de Valery Larbaud à Jean Paulhan du 14 mai 1929, in Valery Larbaud, *Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957*, op. cit., p. 140. (« footnote » のイタリック強調は原典)

正によって、この版はラルボーの目に手の施しようのない失敗作に映り、後にラルボーはこの経験をもとに短い論評を残している¹⁸⁴。

またラルボーは、ガリマール版では「著者解題」から削除することになる「二つのタイトル」において、「[私は編集者である G. =J. プラスに]『アレン』がブルボネ地方の出版社から出版されるのを見たいものだと繰り返していた。つまりブルボネ地方の画家に挿絵を描いてもらい、公国の町の一つで印刷してもらい、本扉には出版地としてムーランの名前が記されている¹⁸⁵」との希望を表していた。さらに「そしてその夢は、少なくとも部分的に、この版で実現されたのだ。肝心な問題、すなわちブルボネ地方の画家よるテキストの挿絵は得られたし、また G. =J. プラスの巧みな工夫のおかげで、ブルボネ地方の会社の名前が本扉の一つに記されたからである¹⁸⁶」と説明して、この章を締めくくっている。ここでラルボーが「少なくとも部分的に」と強調したのは、先に引用した編集者の故意による原稿の書き換えを指しているのだろう。

こうした文脈から、この章を含めてラルボーが「著者解題」を執筆したのは、このオリジン・ド・フランス版の工程の後の方ではないかと思われる。ラルボーが「著者解題」に着手したのは1928年で、同年10月20日付のマルセル・レイへの書簡では、イタリアから帰国したことを報告した後に、「著者解題」の執筆について次のように伝えている。

帰国以来、特に変わったことはありません。ずっと母の相手をしながら、静かに仕事しています。執筆を存分に楽しんだ「著者解題」の論拠を示しつつ、私が「ブルボネ版」と名付けた『アレン』の豪華な新版の準備をしました。なぜって、今回、挿絵画家は初版の時のようにロシア人ではないだけでなく、ブルボネの人なのです。しかも

¹⁸⁴ Cf. « Pour cette édition définitive, dans les « Notes pour Allen », « Origine et fonction du Prologue », Larbaud a ajouté en effet un renvoi en bas de page qui ne figurait pas dans l'édition dite « bourbonnaise » des Horizons de France (édition gâchée irrémédiablement aux yeux de Larbaud par l'intervention malencontreuse de Joseph Place qui avait remplacé « hirondelles » par « martinets » — voir « Il Mattoide »). », *ibid.*, note 2. (下線強調は引用者)ラルボーは編集者による意図的な改稿について彼以外の作品の例を挙げた論評 « Il Mattoide » をイタリア語で執筆し、ジェノヴァの雑誌 *Esper*, Anno II (2^e année), n° 1, Gennaio (janvier) 1933, pp. 7-15 に掲載した後にフランスに翻訳した。Voir *OC*, t. 8, pp. 156-158 et p. 392, « B. Remarques ».

¹⁸⁵ « L'idée de cet hommage est due à G.-J. Place, à qui j'avais, à plusieurs reprises, exprimé le désir de voir paraître *Allen* dans une édition bourbonnaise, c'est-à-dire illustrée par un artiste bourbonnais, imprimée dans une des villes du Duché, et portant sur la page de titre, comme lieu de publication, le nom de Moulins. », « Note XXIII. Double titre », in *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, *op. cit.*, p. 107. 「別冊」166-167頁も参照されたい。

¹⁸⁶ « Cependant je n'avais pas renoncé à réaliser le rêve d'une édition bourbonnaise ; et il l'a été, du moins en partie, par la présente édition ; le point principal : l'illustration du texte par un artiste bourbonnais, est acquis, et grâce à l'ingénieuse trouvaille de G.-J. Place, le nom d'une firme bourbonnaise figure sur une des pages de titre. », *ibid.* (下線強調は引用者)「別冊」167頁を参照されたい。

ヴィカリディアン、——ヴィシーの人だからです。あなたが望んでくださるよう（あなたには重要でないかも知れませんが）。それに表紙に「ムーラン」と入れると約束してもらえたからです。そうはいつでも、パリで作られるのでしょうかね、やっぱり¹⁸⁷。

ここでラルボーが挙げた「ロシア人挿絵画家」は、オ・ザルド版で挿絵を担当したチェコ人のクービーヌを指しているようだが、手紙を書いた時に準備中だった新版の挿絵は、同郷の版画家ポール・ドゥヴォーが担当した。この「ブルボネ版」、すなわちオリゾン・ド・フランス版は、表紙に『アレン』のタイトルとともに出版元の名前 « Horizons de France » と、パリの住所が印字されているが、二枚目にはタイトルに添えて « À Moulins / chez Pierre Vernoy¹⁸⁸ / Au pase d'or / 1929 » と、印刷地「ムーラン」が記された。

ラルボーが『アレン』の出版に際して、印刷から製本までのすべての工程をブルボネ地方で行いたいと望んでいたことから、オリゾン・ド・フランス版は、完成に至る経緯を含め、ラルボーのブルボネ地方への回帰を示す一つの手掛かりとして重要な版である。ただ、それ以降の版でポール・ドゥヴォーの挿絵が再録されることはなく、また『アレン』出版の全工程をブルボネ地方で実現させたいとするラルボーの願いが彼の存命中に完全に叶うこともなかった。

4. ガリマール版

その後、1929年6月10日にラルボーが「決定版¹⁸⁹」とみなす版がガリマール社から3,030部出版され、その際にラルボーがオリゾン・ド・フランス版における「ツバメたち」にあたる語を訂正し、23章の「著者解題」のうちラルボーが不要とした「読点の問題」および「二つのタイトル」を削除し、以下の表3に示す全21章の「著者解題」を収録したことで、

¹⁸⁷ « Depuis, rien de particulier : j'ai travaillé tranquillement tout en tenant compagnie à ma Mère. J'ai préparé, en l'augmentant de « Notes » qui m'ont beaucoup amusé à écrire, une nouvelle édition de luxe d'*Allen*, que j'appelle « édition bourbonnaise » parce que l'illustrateur, cette fois-ci, non seulement n'est pas russe comme celui de la première édition, mais bourbonnais, et même Vicalidien, — vichyssois, comme vous voudrez (et je crois que ça vous est égal), et aussi parce qu'on m'a promis qu'il y aurait « Moulins » sur la couverture ; mais cela se fait à Paris, naturellement. », la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 20 octobre 1928, lettre 335, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. III, 1921-1937, p. 126.

¹⁸⁸ *Pléiade*, p. 1248 の « NOTES » には « Vernoy » と記されているが、オリゾン・ド・フランス版の表紙、下記ウェブサイトやヴィシー市立図書館の情報から、ムーランの出版社 Pierre Vernoy であると考えられる（下線強調は論者）。

<http://mediatheques.agglo-moulins.fr/agglo-moulins.fr/cms/articleview/id/28> (2014年4月8日閲覧)

¹⁸⁹ 1932年にラルボーは『新フランス評論』版（小型版）はよい。誤植が少なく、一つか二つの修正で済んだ。この版は決定版、唯一継続して使われる版として見なされるだろう」とメモを残したようである。Cf. « L'édition *N.R.F.* (petit format) est bonne : peu de coquilles ; une ou deux fautes à corriger. Elle peut être considérée comme définitive, et la seule à suivre », citée par « Notes », *Pléiade*, p. 1249.

現在確認できる『アレン』の体裁が整った¹⁹⁰。

『新フランス評論』に「アレン」を発表した2年後の1929年にラルボーが追加した「著者解題」は、第1章「I」から第21章「XXI」までの21章で構成され、それぞれにタイトルが付けられている。各章の順序は「別冊」の日本語訳を参考にさせていただきたいが、これら21項目の内容は、表3に示すように「創作の源泉」、「作品の構成」、「批評関連」、「ブルボネ地方関連」、「著者解題執筆の経緯」の5つに大別でき、それぞれの章においてラルボーは、「本編」で明らかにしなかった事柄に関する手掛かりを与えている。

表3：「著者解題」（全21章）の構成（内容別に分類）

内容	章とタイトル
創作の源泉	I. « Origine et fonction du Prologue » (第1章「序文の由来と役割」) II. « Le sommaire d'Allen » (第2章「『アレン』の概要」) III. « Origine du titre » (第3章「タイトルの由来」) IV. « Le discours de Louis II » (第4章「ルイ二世の演説」) V. « Sources d'Allen » (第5章「『アレン』の典拠」) VI. « Modèles du dialogue » (第6章「対話のモデル」) VII. « Sujet, ou sujets, d'Allen » (第7章「『アレン』の単数、あるいは複数の主題」) VIII. « Conception et maturation » (第8章「構想と成熟過程」) IX. « Les citations anonymes » (第9章「名前を挙げずにされた引用」) X. « Viva la fama de Borbon » (第10章「ブルボンの名声万歳」) XII. « Au drapeau » (第12章「旗に敬礼」) XIII. « Les interlocuteurs » (第13章「発話者たち」) XIV. « La thèse débattue » (第14章「議論された命題」)
作品の構成	XI. « Proportions et équilibre » (第11章「均整とバランス」)
批評関連	XV. « Réception de l'ouvrage » (第15章「作品の受容」) XVI. « Quelques extraits de la presse bourbonnaise » (第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」) XVII. « Azur et argent » (第17章「紺碧と銀色」)
ブルボネ地方関連	XVIII. « Cantilia » (第18章「カンティリア」)

¹⁹⁰ このほか、1953年に『ラルボー全集』の第5巻に収録され、また2006年には単行本が出版された。Cf. *OC*, t. 5, Paris, Gallimard, 1952 ; *Allen*, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006.

	XIX. « Retirance » (第 19 章「隠遁生活」)
	XX. « Cérilly » (第 20 章「セリイ」)
「著者解題」執筆の 経緯	XXI. « Ces notes » (第 21 章「これらの著者解題」)

「著者解題」は、オリゾン・ド・フランス版を出版する際に、ラルボーが編集者の依頼を受けて予約申込者へのサービスとして書いたもので、当初ラルボーは未公開原稿の追加を考えたが、最終的に「著者解題」を追加することによって「本編」を補足した。ラルボーは「著者解題」第 3 章「タイトルの由来」において、「タイトルはこの作品の構想の何年も前に決まっていた。『いつか私がブルボネ地方の事柄を書くとしたら、私はそれに「アレン」というタイトルを付けるだろう』と¹⁹¹」と説明しているが、「著者解題」は当初の構想に入っていなかった。

ここで留意しておきたいことは、ラルボーが自分の作品に「著者解題」等の注釈を後から付したのが、この『アレン』のみだったことである。ラルボーがこの「著者解題」において「本編」執筆の際に用いた文献を詳しく紹介し、ブルボネ地方の歴史家 Achille Allier (アシール・アリエ、1807-1836) の三巻の郷土史、*L'Ancien Bourbonnais* (『旧きブルボネ』、1833-1838)¹⁹²を筆頭に、フランスの歴史家 Jules Michelet (ジュール・ミシュレ、1798-1874) の *Histoire de France* (『フランス史』、中世 6 巻、1833-1844・近代 11 巻、1855-1867) やシェイクスピア (William Shakespeare、1564-1616) の歴史劇 *Henri V* (『ヘンリー五世』、1599 頃) など、「本編」では明かさずにいた多くの引用の出典を明らかにしたことは注目に値する。また、作品の形成過程や構成を詳らかにするために、Edgar Allan Poe (エドガー・アラン・ポー、1809-1849) の書評集 *Marginalia* (『マージナリア』、1845-49) や、物語詩 *The Raven* (『大鴉』^{おおがらす}、1845、『アレン』では *Le Corbeau* と表記)¹⁹³、André Gide (アンドレ・ジ

¹⁹¹ « Le titre avait été choisi bien des années avant la conception de l'ouvrage. « Si jamais j'écrivais une chose bourbonnaise, je l'intitulerais *Allen*. », « Note III. Origine du titre », *Allen, Pléiade*, p. 763.

¹⁹² Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais (histoire, monuments, mœurs, statistique)*, 4 tomes, continué par Adolphe Michel ; gravé et lithographié sous la direction de Aimé Chenavard ; d'après les dessins et documents de M. Dufour ; par une société d'artistes, Moulins, Desrosiers fils, 1833-1838 ; réédition, Moulins, Crépin-Leblond, 1934-1938. 『アレン』を掲載した『新フランス評論』編集長のジャン・ポーランとの書簡集によれば、ラルボーはポーランに宛てた 1928 年 12 月 7 日付の書簡の中で「19 世紀の伝統における本当の意味でただ一人といえるブルボネ地方の作家がアリエだ」と述べている。Cf. « Et je tiens beaucoup à ce livre [= *Allen*], que j'ai voulu (pendant, depuis, des années) faire comme une chose toute bourbonnaise, dans la tradition du seul écrivain vraiment bourbonnais du XIX^e siècle : Achille Allier, [...] », *Valéry Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957, op. cit.*, pp. 115-116.

¹⁹³ 「著者解題」第 21 章「これらの著者解題」の中で、ラルボーが言及したポーの作品とは、『大鴉』を解説した *The Philosophy of Composition* (『詩の原理』、1846) である。ポーは『詩の原理』の中で、『大鴉』の構成が計算し尽くされたものであることを示し、読者のさ

ッド、1869-1951) の *Le Journal des Faux-Monnayeurs* (『贋金作りの日記』、1926) などを参考にしたことも明かしているからである。

ラルポーがジャン・ポーランへの 1928 年 12 月 7 日付の書簡で、「もはや私は「著者解題」のない『アレン』では満足できないと思う。「著者解題」は『アレン』の一部であり、『アレン』には「著者解題」が欠けていたのだ¹⁹⁴」と綴るように、読者にとっても『アレン』読解には「著者解題」の参照が不可欠なものとなった。こうした過程を経てラルポーは『アレン』を完成させ、「著者解題」を含めて故郷に捧げる作品として書き終え、それを母親に献じた。ラルポーが『アレン』完成後は小説の執筆から離れ、批評や外国作品の翻訳に専念したこと¹⁹⁵、また 1901 年から 1935 年にかけて断続的に日記を書いていたものの、『アレン』執筆当時のものが存在しないこと、さらに 1935 年に脳障害による失語症から創作活動を終えたことも、「著者解題」の重要性を高める要素となろう。そこで、次節で作品を概観し、以降「著者解題」の意義を適宜説明しながら、ラルポーの帰郷の様子を読み解くことにしよう。

第 2 節 作品の構成

それではまず、タイトルの説明から始めよう。2006 年に出版されたシャージュ版の『アレン』における Bernard Delvaille (ベルナール・デルヴァイユ、1931-2006) の解説を借りれば、『アレン』は 1327 年にブルボン公ルイ I 世の公領として創られたブルボネ地方の旧州への讃辞である¹⁹⁶。ラルポーはこの作品で、現在のアリエ県に相当するブルボネ地方が、かつてブルボン公の領地であった時代の繁栄の歴史をもとにフランスの地方再興を望んだ。登場人物の一人は、タイトルに用いられた « Allen » について、ブルボン公ルイ二世から騎士たちへの説明をもとに、それがフランス語で « tous ensemble » (「みんな一緒に」) を意味する、英語で言うところの « All One » の縮約で¹⁹⁷、Louis II de Bourbon (ブルボン公

らに深い理解をうながしていた。ポーは『詩の原理』による解釈なくして『大鴉』の真の読者を得られなかったとも言えよう。

¹⁹⁴ « Je trouve que Allen sans ces « Notes » ne me satisfèrait plus. Elles en font partie ; elles manquaient. », la lettre de Valery Larbaud à Jean Paulhan du 7 décembre 1928, in *Valery Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957, op. cit.*, pp. 115-116.

¹⁹⁵ ラルポーの 1896 年から 1992 年までの著作年表は以下を参照。Anne Chevalier, « Étude chronologique des œuvres publiées de Valery Larbaud », in *Valery Larbaud, Cahiers de L'Herne*, n° 61, *op. cit.*, pp. 323-384.

¹⁹⁶ « Allen est un hommage à l'ancienne province du Bourbonnais érigée en duché pour Louis I^{er} de Bourbon, en 1327. », « Introduction » de Bernard Delvaille, in Valery Larbaud, *Allen*, Paris, Éditions de Sillage, 2006, *op. cit.*, p. 9.

¹⁹⁷ 「<編集者> [ルイ二世が騎士たちにおこなったその説明とは] (私の記憶によれば) 神への奉仕と私たちの国の防衛のためにみんな一緒に行こう、貴婦人たちを崇拝せしめるためにみんな一緒になることを誓おう。なぜなら、神の次には、彼女たちによって、この世のすべての恩恵がもたらされるのだから」ということなのです。:「<編集者>つまりそれは『すべてが一つになっている』の縮約だと私は思うのです。」(Cf. « [L'Éditeur :] [...]

ルイ二世、1337-1410、在位 1356-1410) が 1366 年に創設した « l'ordre de l'Écu d'or » (「金の盾騎士団」)¹⁹⁸の標語であると友人たちに説明している。英仏百年戦争のさなか、フランス王 Jean II de France (ジャン二世、1319-1364、在位 1350-1364) が 1356 年の Bataille de Poitiers (ポワティエの戦い) でイングランド軍に捕えられた。彼は 1360 年の Le traité de Brétigny (ブレティニー条約) によって釈放されたが、その際にフランスが莫大な身代金¹⁹⁹を支払い、また王族による人質を立てることで身柄を解放された²⁰⁰。ブルボン公ルイ二世は 1360 年に英国の捕虜となったが、7 年後に解放され、ブルボネ地方の領地へ戻った際に騎士団を結成した。その標語が「アレン」だったわけである²⁰¹。すなわち『アレン』は、作者ラルポーと故郷であるブルボネ地方との関係を、そのタイトルが示す作品である。

「著者解題」第 3 章の「タイトルの由来」の記述によれば、ラルポーは作品名を『アレン』にすることを、具体的な構想に入る前から決めていた。そして「みんな一緒に」を意味する合言葉を、次のように作品の中の一体感と結びつけている。

l'explication donnée par Louis II à ses chevaliers, et qui est (je cite de mémoire) : « Allons *tous ensemble* au service de Dieu et à la défense de nos pays, et jurons d'être *tous unis* pour faire respecter les Dames, car c'est d'elles, après Dieu, que vient tout l'honneur du monde. » », *Allen, Pléiade*, p. 729 ; « [L'Éditeur :] Je pense donc que c'est une contraction de All One. », *ibid.*, p. 730. イタリック強調は原典、下線強調は引用者)

¹⁹⁸ 「<編集者>アレンとは英国での捕虜生活から帰還した我らが公、ブルボン公ルイ二世が 1366 年に創設した金の盾騎士団の標語なのです。」 (« [L'Éditeur :] — Allen est la devise de l'ordre de l'Écu d'or, fondé en 1366 par notre duc, Louis II de Bourbon, au retour de sa captivité en Angleterre. », *ibid.*, p. 729.)

¹⁹⁹ 身代金の支払いには Écu d'or (エキュ金貨) が用いられた。「エキュ」は金貨の呼び名であると共に「盾」を意味するが、それはエキュ金貨の極印図案が、玉座に座った王のイメージを盾型の枠内におさめていたものだったからである (柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編、『世界歴史大系：フランス史 1—先史～15 世紀』、山川出版社、1995 年、239 頁および『騎士道百科図鑑』(D'Arcy Jonathan Dacre Boulton, *Knights in history and legend*)、コンスタンス・B・ブシャー監修、堀越孝一日本語版監修、悠書館、2011 年、224 頁を参照した)。なお、身代金の総額には諸説あるが、最近出版された、朝治啓三・渡辺節夫・加藤玄編『中世英仏関係史 1066-1500：ノルマン征服から百年戦争終結まで』、大阪、創元社、2012 年、118 頁の記述では 400 万エキュとなっている。フランス革命直前のエキュは、2006 年現在、日本円では 3,000 日本円にあたり、身代金は約 1,200 億円になる。

²⁰⁰ 人質はジャン二世の次男 Louis I d'Anjou (アンジュー公ルイー一世、1339-1384)、三男の Jean de Berry (ベリー公ジャン、1340-1416)、ジャン二世の弟 Philippe de Valois (オルレアン公フィリップ・ド・ヴァロワ、1336-1376) らの王族を含む 40 人で、そのうちの一人がブルボン公ルイ二世だった。

²⁰¹ この時に作られた騎士団の紋章には « Espérance » (「希望」) の文字が帯状に添えられている。後に Pierre II (ブルボン公ピエール二世、1439-1503、在位 1488-1503) は、「希望」を付した « cerf-volant » (「跳躍する鹿」、翼を備えた鹿 « cerf ailé » と表記されることもある) をブルボン家の紋章とした。紋章は下記のサイトで参照することが可能である。

<http://base-devise.edel.univ-poitiers.fr/index.php?id=920> (2014 年 9 月 12 日閲覧) 現在はヴィシー市立図書館の外壁に施されているほか、2000 年まで『ヴァレリー・ラルポー友の会会報』の表紙にも取り入れられていた。

タイトルはこの作品の構想の何年も前に決まっていた。「いつか私がブルボネ地方の事柄を書くとしたら、私はそれに『アレン』というタイトルを付けるだろう」と。この考えが浮かんできたのは、アシール・アリエの本でルイ二世の治世の歴史を読んだ時、あるいは再読した時である。私はもっと有名な、けれどもさほど特別ではない他の標語、すなわち「希望」を検討することもできたはずだ。例えば「希望の帯」なら、ブルボネ地方の書物の洒落たタイトルになるだろう。しかしながら、私は躊躇することなく『アレン』を選んだ。その謎めいていながらも明快な特徴、それが関わる美しい歴史上の逸話、ルイ二世の騎士道的な演説、フランス風に発音された時にその語が発する音によって。さらに、この単語は、その外見と語源によってヨーロッパの生活と結びつくからである。なぜなら『アレン』、それは我々の大陸とアメリカの三分の一の住人に「何かを伝える」もので、それはドイツへのパスポートであり、大英帝国、アメリカ合衆国とオーストラリアへの紹介状だからである²⁰²。

さらに「著者解題」第8章「構想と成熟過程」の一節を見てみよう。

「アレン」という言葉は、作品の形式と内容を決定する上で、魔法の言葉の役割を果たした。その言葉の周りにすべてが出現し、すべてが集まってきた。すなわち、一つの部屋に集い旅を通して一団となった5人の友人たち、そして歴史や地理とともに、過去と現在の対比とともに「アレンの国」が²⁰³。

このようにラルボーは、作品を練りながら、合言葉である「アレン」を繰り返すことで、彼がパリや外国を拠点とする生活から、精神的にもアレンの国であるブルボネ地方へと向かう。

²⁰² « Le titre avait été choisi bien des années avant la conception de l'ouvrage. « Si jamais j'écrivais une chose bourbonnaise, je l'intitulerais *Allen*. » Cette idée m'était venue en lisant ou en relisant l'histoire du règne de Louis II dans le livre d'Achille Allier. J'aurais pu songer à l'autre devise, plus connue, moins spéciale : « Espérance. » Par exemple « Ceinture d'Espérance » ferait un beau titre de livre bourbonnais. Cependant, j'ai choisi *Allen* sans hésitation, à cause de son caractère à la fois énigmatique et précis, de la belle anecdote historique à laquelle il se rapporte, du discours chevaleresque de Louis II et du son que le mot, prononcé à la française, rend ; et aussi parce que son aspect et son étymologie le rattachent à la vie européenne : *Allen*, cela « dit quelque chose » à un tiers des habitants de notre continent et des Amériques ; c'est un passeport pour l'Allemagne, une lettre d'introduction pour la Grande-Bretagne, les États-Unis et l'Australie. Enfin et surtout c'est un mot de ralliement dont la signification est proche parente de termes tels que : Union, Unité, Catholicité. », « Note III. Origine du titre », *Allen, Pléiade*, p. 763.

²⁰³ « Le mot « Allen » a joué, dans la détermination de la forme et de la substance de l'ouvrage, le rôle d'une parole magique : autour de lui tout a surgi, tout s'est assemblé : les Cinq Amis réunis dans une chambre et organisés en un groupe par le voyage, et le « pays d'Allen » avec son histoire et sa géographie et le contraste entre son passé et son présent. », « Note VIII. Conception et maturation », *ibid.*, p. 766.

次に「本編」を概観しよう。まず「本編」は、母への献辞に続き、「読者への序文」ではブルボネ地方の6都市、すなわち Souvigny (スヴィニー)、Bourbon-L'Archambaud (ブルボン=ラルシャンボー)²⁰⁴、Hérisson (エリソン)、Vichy (ヴィシー)、Montluçon (モンリュソン)、Chantelle (シャンテル) について短く説明している。ブルボネ地方が現在のアリエ県にほぼ相当するため、先の六つの地名がブルボネ地方に含まれることがわかる。

この序文に続き、I (第1章) から VII (第7章) までの本文が対話形式で展開され、ブルボネ地方がかつてブルボン公の領地だった時代に栄えた歴史をもとに、故郷の再興を望む。登場人物たちは第1章で旅の相談をした後に第2章でパリを出発し、第7章でブルボネ地方に到着する。旅の途中に取り上げられる史実は、『旧きブルボネ』をはじめ、複数の郷土史やフランス史に見られる14世紀から16世紀に関する記述に依拠している。

登場人物は「L'Auteur」(「作者」)、「L'Éditeur」(「編集者」)、「Le Bibliophile」(「愛書家」)、「Le Poète」(「詩人」)、「L'Amateur」(「アマチュア」)の5人で、いずれも名前や年齢などは明らかでない。旅の目的地であるブルボネ地方を「mon Duché」(「私の公国」)と話す「編集者」を除けば、彼らは男性であることと、おおよそその職業や嗜好が示されているだけで、出身地や年齢、家族構成などの素性に関する記述が省略されている。

「本編」第2章の冒頭で、彼らが旅に出るためノートルダム教会の前で集合する場面での、「作者」の語りの順に登場人物を紹介すると、まず運転手を務める「アマチュア」の車とは、「友の車は私たちが想像していたよりもずっと美しかった。全体が紺碧の青と銀のアルミニウム色の長い代物だった。そしてパリ近郊との別れの瞬間に、この車の美しさが際立って見えた²⁰⁵」もので、運転時の「我らが友は、帽子をかぶらずに運転していて、髪を風になびかせ、胸を張り、視線を定め、『狂人』となった²⁰⁶」様子が、粹を好み物事に熱中する愛好家を想起させる。また「愛書家」については、「愛書家は、読書という、いわゆる罰せられない悪徳のため軽く背中が曲がり、『奇形の人』になった²⁰⁷」との説明から、書籍を好む人の姿がイメージされよう。「編集者」と「詩人」は、「編集者は鬚が似ていることから、人々の関心の的になっているある罪人の名前で呼ばれた。そして詩人は共和国

²⁰⁴ アリエ県庁によれば、正式な地名の表記は「Bourbon L'Archambault」である(電子メールによる問い合わせに対する2013年11月15日のLe Service du Courrierからの回答による。下線強調は引用者)。また、ブルボン=ラルシャンボー町によれば、地名には幾度かの変遷があり、19世紀は「Bourbon L'Archambaud」と表記し、1880年頃に現在の表記になったが、この頃は表記が混在していたようである(電子メールでの問い合わせに対する、Paulette Debordes 助役からの2013年11月25日付の文書回答による)。

²⁰⁵ « [L'Auteur :] La voiture de notre ami était encore plus belle que nous ne l'avions imaginée : une longue chose toute bleu d'azur et aluminium argenté ; et l'adieu des faubourgs nous prouva que cette beauté n'était pas invisible. », *Allen, Pléiade*, p. 731.

²⁰⁶ « [L'Auteur :] Notre ami, qui conduisait tête nue, cheveux au vent, le buste très droit, l'œil fixe, devint le Fou. », *ibid.*

²⁰⁷ « [L'Auteur :] Le Bibliophile, légèrement voûté par le vice, prétendu impuni, de la lecture, devint le Déjeté. », *ibid.*

からよそ者として追放されていた」と説明されている²⁰⁸。最後に「作者」は、自らを「私のハンチング帽とパイプは私を『イギリス野郎』にしていた²⁰⁹」と評しており、外国の服装に慣れた人物であると同時に、英国に関連する会話の発話者であることを予想させている。

ラルボーが「著者解題」第5章『『アレン』の典拠』で明かした登場人物たちの役割は、モデルが実在する場合や彼の理想像の反映であった。まず、ブルボネ地方の歴史の解説役を担う「編集者」には、かつて故郷を嫌悪していた時期があったが、彼自身の独立国を空想し、また郷土史や郷土の文学者を知ることで、故郷を再評価し、地方再興、地方自治の理想を掲げるようになる。ラルボーが故郷に抱いていた否定的なイメージは、「愛書家」が見聞きした架空の地方での災難ともいえる経験によって説明される。そして、「詩人」が「眠った町」の再興に関心を持つ様子が、ラルボーに「地方」を受け入れようとする変化が生じたことを暗示している。「作者」が「彼らの対話は、まず作者の想像力の中で起こったが、ただし彼の判断が介入したことはなかった。彼は聞いていたのだ。それから文字で記された対話の中で、『作者』——傍観者であり、読者と発話者たちの間の代弁者、かつ第2章の語り手——は、話を聞き、ごくまれに自分の言葉を語ったが、それは二つの箇所における、テキストの片隅に潜んだ、ほとんど暗号のような署名に過ぎない²¹⁰」として作品全体の調整役を務める。最後に、「アレン」の書評では時に忘れられがちな存在であったことから、その存在について第17章「紺碧と銀色」において個別の言及を得ることになる「アマチュア」は、自動車旅行の実行役としてラルボーのすべての要素である5人をブルボネ地方へと運ぶ。その結果、5人は「著者解題」第14章「議論された命題」における、「編集者」と友人たちが思い描くヨーロッパ合衆国におけるフランス合衆国²¹¹の構想に賛同することによって一体となる。

これらの登場人物に関するラルボーによる説明は、「著者解題」第13章「発話者たち」に詳しいが²¹²、中でも「詩人」について、『『詩人』は、いくつかの身体的な特徴といくつかの言葉の言い回しによって、少なくとも私の考えでは、レオン=ポール・ファルグに似ている²¹³』と、ラルボーと親交の深かった詩人を挙げていることに注目しておきたい。『ア

²⁰⁸ « [L'Auteur :] L'Éditeur s'entendit appeler par le nom d'un criminel en vogue dont la barbe ressemblait à la sienne, et le Poète fut proscrit de la République comme métèque. », *ibid.*

²⁰⁹ « [L'Auteur :] Ma casquette et ma pipe me naturalisèrent Angliche. », *ibid.*

²¹⁰ « Leur dialogue a eu lieu d'abord dans l'imagination de l'auteur, et sans que son jugement intervint ; il écoutait ; et dans le dialogue écrit, l'Auteur, — spectateur, truchement entre le lecteur et les interlocuteurs, et narrateur dans le chapitre II, — écoute, et très rarement dit son mot, qui, en deux endroits, n'est guère plus qu'une signature discrète, et presque cryptique, dans un coin du texte. », « Note XIII. Les interlocuteurs », *ibid.*, p. 767.

²¹¹ Cf. « [...] l'Éditeur et ses amis imaginent des États-Unis français dans les États-Unis d'Europe. », « Note XIV. La thèse débattue », *ibid.*, p. 768.

²¹² 「別冊」131-135頁を参照されたい。

²¹³ « Le Poète a quelques traits physiques et quelques expressions verbales qui le font, du moins

レン』の登場人物の中でラルポーが実際に交流のあった人物を挙げたのはファルグのみである。また、下記に引用するように、ラルポーは「本編」の第4章にファルグの名と著作名を挙げている。

<愛書家>でも、もちろん、私がお話したいのはこの種の地方のことなのです。4日前から私たちが散策してきた地方のことで、フランスの大都市ではありません。それでもそこにもやはり、あちこちに人の集まりがあって²¹⁴

<詩人>外国ほどは多くないけれど²¹⁵

<愛書家>私たちはそこでポール・モランやダリウス・ミヨーが準備していることや、レオン=ポール・ファルグが『ヴュルチュルヌ』をまもなく出版するかどうかを私たちに尋ねるであろう人々に会おうでしょう。あの地方の²¹⁶。

このほか、「本編」第6章における「詩人」の発言、「つまりフランスの真ん中に、馬飾りを着せた馬の上に、この巨人のようなバヤールが立っている、ってことだね²¹⁷」と引用しているといった例が見られる。ラルポーの伝記によれば、これはラルポーとファルグがラルポーの母親が雇い入れた運転手をともない、ラルポーの母親が購入したばかりの « Quasie » (カジー) ²¹⁸と愛称を付けた自家用車で、1910年11月22日から30日にかけて、パリからブルボネ地方に隣接する Berry (ベリー地方) の都市 Bourges (ブールジュ)

dans ma pensée, ressembler à Léon-Paul Fargue. », « Note XIII. Les interlocuteurs », *ibid.*, p. 768.

²¹⁴ « [Le Bibliophile :] — Mais, bien entendu, c'est de ce genre de province que je veux parler, celle où nous nous promenons depuis quatre jours, et non celle des grandes villes françaises, où il y a tout de même des groupes », *ibid.*, p. 739.

²¹⁵ « [Le Poète :] — moins nombreux qu'à l'étranger », *ibid.*

²¹⁶ « [Le Bibliophile :] — où nous trouverions des gens qui nous demanderaient ce que préparent Paul Morand et Darius Milhaud et si Léon-Paul Fargue va bientôt donner son *Vulture* ; de cette province. », *ibid.*, p. 740. 『ヴュルチュルヌ』とはラルポー、ファルグ、ヴァレリーが共同編集者を務めていた季刊誌『コメルス』にファルグが発表した作品をまとめた詩集、Léon-Paul Fargue, *Vurturne*, Gallimard, 1928 を指す。

²¹⁷ « [Le Poète :] — Ainsi donc il y a, debout au milieu de la France, ce gigantesque Bayard sur son cheval caparaçonné. », *Allen, Pléiade*, p. 745. バヤールとは、ブルボン公シャルル三世の敵将であるフランスの軍人 Pierre Terrail de Bayard (ピエール・テライユ・ド・バヤール、1476-1524) を指す。Cf. Robert Sabatier, *Dictionnaire de la mort*, Éditions Albin Michel, 1967, p. 477.

²¹⁸ ラルポーがリムジンに名付けた愛称 « Quasie » とは、ブルボネ地方に隣接するベリー地方出身の女性作家 Marguerite Audoux (マルグリット・オードゥー、1863-1937) の姪の愛称で、パリでお針子として働いていたオードゥーは、彼女の才能を見出し懇意にしていたシャルル=レイ・フィリップの紹介でラルポーと知り合った。ラルポーはフィリップやジッドらと共に、オードゥーの自伝的小説で、1910年に Prix La Vie heureuse (「ラ・ヴィ・ウルーズ賞」〔後のフェミナ賞〕) を受賞した処女作 *Marie-Claire* (『マリー=クレール』〔『孤児マリー』]) の刊行に尽力した。

へと旅行した際²¹⁹、現在ではユネスコの世界遺産に登録されたゴシック建築を代表する Cathédrale de Bourges（ブルジュ大聖堂）を見ながらファルグが発したとされる言葉である²²⁰。これについてラルポーは「著者解題」第13章「発話者たち」において、「ブルジュの大聖堂についての言葉、『馬飾りを着せた馬の上のバヤール』は、実際に L.-P. ファルグが、私たちの友人である『自動車の所有者』を運転手にしていた『陸路の旅』の途中で言ったものである²²¹」と説明している²²²。

この旅行で用いた母親の車は、車種は特定できないものの、「ロイヤルブルーの塗装で、ライトブルーのラインの入った最新のリムジン²²³」である。しかし、これは『アレン』の一行が乗った「アマチュア」の車、「全体が紺碧の青と銀のアルミニウム色の長い代物」とは異なるようである。ラルポーがエミールギョーマンへの1927年4月9日付の書簡において、『アレン』は『カジーの日記』をいくらかもとにしているが、執筆のもとになったのは、友人の車での1921年のブルボネの散策で、その車が『アレン』に書いたものであって、質素な『カジー』ではない²²⁴、と説明しているように²²⁵、「アマチュア」の車は「カジー」

²¹⁹ Cf. Georges Jean-Aubry, *Valery Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, op. cit., pp. 146-147. この旅行でラルポーとファルグは、『マリー=クレール』の舞台でオードゥーの故郷である Cher（シェール県）の Sancoins（サンコワン村）を訪れている。なおラルポーは、ファルグと連名でオードゥーへ送った1910年11月30日付の書簡におけるこの旅の報告で、車の愛称「カジー」を「Kasie」と記している。Cf. « Lettre à Marguerite Audoux », in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, op. cit., p. 64 et p. 67. 後にラルポーは、オードゥーに関する批評「L'Atelier de Marie-Claire」（「マリー=クレールの仕事場」）を、1922年8月に雑誌 *Les Primaires*（『レ・プリメール』）に寄稿した。この批評は「Marguerite Audoux」（「マルグリット・オードゥー」）との表題で、OC, t. 7, pp. 312-317 に収録されている。

²²⁰ Cf. « C'est à ce moment-là, que Fargue se serait écrié, en voyant la belle Cathédrale de Bourges : « Ainsi donc il y a debout au milieu de la France, ce gigantesque Bayard sur son cheval caparaçonné ». », Louise Rypko Schub, *Léon-Paul Fargue*, Genève, Droz, 1973, p. 98. （下線強調は引用者）

²²¹ Cf. « La phrase sur la cathédrale de Bourges, « Bayard sur son cheval caparaçonné », a été réellement prononcée par L.-P. Fargue au cours d'un « voyage par la route » où nous avons pour conducteur notre ami le « propriétaire de l'automobile ». », « Note XIII. Les interlocuteurs », *Allen, Pléiade*, p. 768.

²²² このことから、「カジーの日記」の頃のラルポーとファルグが親しかったことがわかるが、本研究の第2部第2章第3節で改めて論じるように、二人の友情はラルポーが『アレン』を執筆、発表した頃には終わっていたことにも注意が必要である。

²²³ « Ceci est le journal de bord d'une jeune limousine peinte en bleu de roi à filets bleu clair, et qui a reçu son nom d'une petite fille surnommée Quasie. », Valery Larbaud, *Journal*, op. cit., p. 75.

²²⁴ Cf. « En effet, il y a un peu du « Journal de Quasie » à la base de « Allen ». Mais l'excursion que j'avais en vue quand je l'ai composé a eu lieu en 1921, dans la voiture d'un ami qui est celle qui est décrite dans « Allen » et non pas la modeste « Quasie ». », la lettre de Valery Larbaud à Émile Guillaumin du 9 avril 1927, « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin (suite et fin) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 17, 1959, p. 358.

²²⁵ この事柄については次の論考を参照されたい。Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux », in *FRACAS*, numéro 1, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 26 février 2014, p. 3.

よりも豪華なもののようなものである。

ラルポーは「編集者」と「愛書家」について、「それに対して、「編集者」にも「愛書家」にも実生活でのモデルはいなかった²²⁶」として、理想の人物を創り出したことを、次のように説明している。

「編集者」のために、私は理想的な、とはいえ有り得なくもない人物像を考案した。それは、仕事に対する彼の愛情と尊敬、文学の文明化の担い手という役割に対する信念、知識、審美眼や想像力の活発さによって特徴づけられる。そして「編集者」を創作しながら、私は彼に少々関心を寄せるであろう読者が、彼をエティエンヌ・ドレの系譜のような人を想像してくれることを願った。「愛書家」は「編集者」と同じ性格ではなくても、彼と同じ知識階級の男性なので、「編集者」の相手役にうってつけである²²⁷。

かくして5人は「アマチュア」の車に乗り込み、パリからブルボネ地方に向けて出発し、アリエ県の県庁所在地ムーランを目指す。旅の途中で彼らが繰りひろげる会話は、発話者が明示されていないため、誰の発言であるか判別しにくい。またしばしば句点のない状態で発話者が交代し、複数の人物が口々に発言している様子が示されている。その一例として、「本編」第1章の冒頭部分での登場人物たちの会話を見てみよう。便宜上、発言の順に番号を振り、発言が途中で途切れている部分を下線で、またその発言が完結する部分を波線で強調している²²⁸。

²²⁶ « Par contre, ni l'Éditeur, ni le Bibliophile n'ont eu de modèles dans la vie réelle. », « Note XIII. Les interlocuteurs », *Allen, Pléiade*, p. 768.

²²⁷ « Pour l'Éditeur, j'ai inventé un personnage idéal, mais non invraisemblable, que caractérisent son amour et son respect pour son métier, sa croyance au rôle civilisateur des Lettres, ses connaissances, son goût et la vivacité de son imagination. Et j'ai souhaité, en le composant, que le lecteur qui lui accorderait un peu d'attention, se le représentât comme un homme de la lignée des Étienne Dolet. Le Bibliophile est un homme de la même classe intellectuelle, sinon du même caractère, et bien fait pour lui donner la réplique. », *ibid.* 文中に挙げられた Étienne Dolet (エティエンヌ・ドレ、1509-1546) は、フランス・ルネサンス期の印刷・出版業者・ラテン語学者。ジョン・L・ブラウンは、「編集者」は Gaston Gallimard (ガストン・ガリマル、1881-1975) と、オランダ人の出版者でラルポーとの書簡集がある A. A. M. ストールをモデルにしている、と説明している。Cf. John L. Brown, *Valery Larbaud*, Boston, Twayne Publishers, 1981, p. 117.

²²⁸ « (1) « Et on voyait déjà sur la blancheur des routes les ombres vigoureuses de l'été. / (2) — Était-ce au Pays d'Allen ? / (3) — Pays d'Allen ? / (4) — « Oh ! que de souffles aux Provinces ! » / (5) — Non, Bibliophile : « Ah ! que de souffles aux Provinces ! » Saint-John Perse, chanson liminaire d'*Anabase*. Je vous disais donc que les auteurs de ma maison / (6) — On t'a livré ta nouvelle voiture ? / (7) — je les regarde / (8) — Une machine ! longue, fine, tranquillement puissante. La nuit dernière, pour essayer, de chez moi, au bout de Neuilly, jusqu'à la place du Tertre en quatorze minutes quarante secondes, mon cher, sans changer de vitesse, comme si ça se passait en Sologne. / (9) — « Ah ! que de souffles aux Provinces ! » / (10) — Combien ? / (11) — je les

- (1) 「すると街道の白さの上に夏の濃い影がもう見えていました。
- (2) それがアレンの国でだった、ってこと？
- (3) アレンの国？
- (4) 「おお！　なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」
- (5) いいえ、愛書家さん。それは「あゝ！　なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」、サン＝ジョン・ペルスの『遠征』の冒頭の歌ですよ。あなたに言いましたよね、つまり我が社の作家たちが
- (6) きみの新しい車が届いたの？
- (7) 私が思うに作家というのは
- (8) 長くて、すらりとして、もの静かなのに力強い機械だ！　昨日の夜に試してみたら、自宅からヌイイの端の、テルトル広場までギアチェンジせずに走って14分40秒だった。まるでソローニュを走っているみたいだったよ。
- (9) 「あゝ！　なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」
- (10) いくらするの？
- (11) 私が思うに作家というのは、デッラ・ロブビアのあの浅浮き彫り作品のようなものです。向かいの壁にその作品の写真がかかっていますが、
- (12) 95,000フランだよ、[エンジンだけでなく]車体も合わせて。でもその車は……　僕が望んでいたものすべてなんだ！　僕も製造に少し協力したんだよ。要するに、街道を走るのにこれ以上素晴らしい車はないよ。
- (13) デッラ・ロブビアのこの「さまざまな楽器を奏で歌う子供たち」はとても美しいですね。確かフィレンツェのものだったと思いますが？　まあそれは大したことじゃない。私にとって作家がそんなふうに見えるというのは
- (14) で、彼女はどうなったんだい……？
- (15) あゝ！　終わったよ。
- (16) そりゃそうだね。こんな機械のおもちゃを奮発できるとしたら、後のことはね…… [どうでもよくなる]。

regarde comme ces bas-reliefs de Della Robbia dont les photographies sont au mur en face ; / (12) — quatre-vingt-quinze billets avec la carrosserie. Mais elle est... Tout ce que je pouvais désirer ! J'y ai collaboré un peu. Voilà : pour la route on ne fait pas mieux. / (13) — ce Della Robbia si beau, *les Enfants jouant de divers instruments et chantant*. Je crois que c'est à Florence ? peu importe ; je les vois de cette façon parce que / (14) — Et Mademoiselle... ? / (15) — Oh ! Fini. / (16) — Je comprends. Quand on peut se payer des joujoux mécaniques comme celui-là, le reste... / (17) — parce que toute bonne littérature est Carmen Deo Nostro, et que tout ce qui est bon en littérature est en fin de compte hymne, action de grâces, alleluia. [...] », Allen, *Pléiade*, pp. 726-727. (下線強調、連番は引用者、イタリック強調は原典。発話者の推定、固有名詞などに関する解説や出典は、「別冊」の8-10頁を参照されたい)

(17) なぜかと言うと、すべてのよき文学とは私たちの神に捧げる讃歌なのであって、文学における良きものとは結局のところ頌歌、〔特にミサ中の〕感謝の祈り、喜びの歌だからです。〔……〕

まず (4) の発言に対する返答 (5) が、(6) によって遮られて (7) に続くが、それも (8)、(9) および (10) が割り込むことで (11) まで引き延ばされ、そこに (12) が割り込み (13) に続き、なおかつ (14)、(15)、(16) が入るため、(11) の発言は (17) で完結するまでさらに続く。またこの時、登場人物たちの対話が、(4)、(5)、(7)、(9)、(11)、(13)、(17) で構成される会話と、(6)、(8)、(10)、(12)、(14)、(15)、(16) で成り立つものの二手に分かれており、それら二組の会話が同時に行われていることがわかる。後の「アマチュア」の発言で、この車の座席が 6 席であることがわかり²²⁹、「アマチュア」が運転手役を務めていることを考えると、この会話の時点では (6) の発話者が助手席に座り、その他三人が後部座席に座っていると推測できる。

ラルポーは「著者解題」第 6 章「対話のモデル」において、ある批評家が論じた、「本編」で用いた対話形式でのディドロの模倣について引き合いに出しながら²³⁰、対話形式の手法に関して参考にした作家たちを次のように挙げている。

実際には、私はそれほどディドロのことを気にかけていたわけではなく、フォントネル、ウォルター・サヴィジ・ランドーとリュシアンを思い浮かべていた。セリフの冒頭で発話者を指示することとか、一人の新しい登場人物が他の登場人物によって始められた話を続ける時に終止符を打つことなどの束縛から私を解放しようと後押ししたのは、リュシアンの作品における対話のテンポの良さに関する私の記憶である。こ

²²⁹ 「<アマチュア>12 日間か。あなた方 4 人は 12 日間お暇かな？ そうですか。それじゃあ、僕の新車での初めての旅行をご一緒いただけますか？ 座席は 6 つあります。もちろん、運転手はここに置いていきます。初走行で運転するのは持ち主の役目ですからね。断るのは無いですよ。〔もし断ったら〕あなた方が私の運転能力を疑っていると思ってしまうですよ。」(« [L'Amateur :] — Douze jours. Vous seriez libres tous les quatre pour douze jours ? Alors. Alors le premier voyage de ma nouvelle voiture, nous pourrions le faire ensemble ? Six places. Naturellement, je laisse le chauffeur ici ; pour un maiden voyage c'est le patron qui doit conduire. Vous ne pouvez pas refuser : je croirais que vous doutez de mes capacités comme chauffeur. », *ibid.*, p. 728. 下線強調は引用者)

²³⁰ 「雑誌に発表したほんの数週間後、『アレン』についてある批評家とおしゃべりしていた時、彼が私に言った。『ディドロのスタイルを踏襲した対話に関して、熟考した上で、その手法をかなり模倣しながら同じ時期に X…氏がされたことを、まったく自由な形でなさいましたね』と。」(« Causant d'Allen avec un critique, peu de semaines après la publication en revue, il me dit : « Vous avez fait spontanément ce que X... a fait, vers le même temps, par réflexion et en suivant d'assez près son modèle : un dialogue selon la formule de Diderot ». », « Note VI. Modèles du dialogue », *ibid.*, p. 765.) Denis Diderot (ドゥニ・ディドロ、1713-1784) は、フランスの啓蒙思想時代を代表する哲学者。

の影響はフォントネルの影響の不足部分を補い、私を長い脱線に導いたであろう W. S. ランドーの影響を修正してくれた²³¹。

これらの説明に加えラルボーは、ジャン・ポーランへの1929年11月29日付の書簡で、キケローの『友情について』において、キケローが作品で目の前にいる人たちによって会話がなされているように思わせるために「私は言った」や「彼は語った」などの挿入句を意図的に削除した点に触れている²³²。加えてラルボーが『私の道のり』の中で、16歳から18歳にかけて影響を受けた本として Dostoïevski (ドストエフスキー、1821-1881) の対話形式による作品、*L'Esprit Souterrain* (『地下室の手記』、1864) を挙げていることも参考になろう²³³。その結果、ラルボーは『アレン』の登場人物たちの発話を直接話法で示す際に、発言者を説明する言葉、例えば「編集者は言った」や「編集者」など、「ト書き」にあたるような言葉を省略することで、テキストを見た読者をただちに発話者のセリフへと導いた。『アレン』では、登場人物の発言の途中で他の登場人物が話に割り込むような場面が頻繁に出てくるが、ラルボーがこの省略法を用いたことで、親しい友人たちの軽妙な会話のテンポが保たれている。

こうした点についてラルボーは、「著者解題」第1章「序文の由来と役割」の中で、『アレン』の創作において課した「ある種の迂回やある種の過剰を禁じた法則」である « loi du poème » (「詩の掟」)²³⁴を挙げ、さらにこの法則の適用を「著者解題」第13章「発話者た

²³¹ « En effet, je n'avais pas songé précisément à Diderot, mais à Fontenelle, à Walter Savage Landor, et à Lucien. C'est le souvenir que j'avais de la vivacité du dialogue chez Lucien qui m'a encouragé à me libérer d'entraves comme la mention des interlocuteurs au début des répliques, et des points lorsqu'un personnage nouveau continue la phrase commencée par un autre. Cette influence a complété celle de Fontenelle et corrigé celle de W. S. Landor, qui m'aurait entraîné dans de longues digressions. », « Note VI. Modèles du dialogue », *ibid.* Bernard le Bovier de Fontenelle (ベルナルル・ル・ボヴィエ・ド・フォントネル、1657-1757) は思想家、アカデミー・フランセーズ会員。Walter Savage Landor (ウォルター・サヴィジ・ランドー、1775-1864) はイギリスの詩人・散文作家。ラルボーが触れているのは *Imaginary Conversations* (『想像的対話集』、1824) であろう。ラルボーは1909年から1912年にかけて、『ウォルター・サヴェジ・ランドーの対話集』とのテーマで英文学の博士論文の準備をしていたが、論文は未完成に終わり、それ以降は創作活動に専念していた。

²³² Cf. « Voyez comme Cicéron, au début de *De Amicitia*, se félicite d'avoir osé supprimer les « inquam » et les « inquit ». », la lettre de Valéry Larbaud à Jean Paulhan du 11 juillet 1929, lettre 101, in *Valéry Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957, op. cit.*, p. 146.

²³³ Cf. Valéry Larbaud, *Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926, op. cit.*, p. 24.

²³⁴ 「対話形式は作家に完璧な自由という感覚を与える。いつでも、誰でもが、何でも言うことができるだろうという感覚を。それは人をあざむく感覚、罠と誘惑である。文学作品の動き、方向、均衡は、一つの掟——「詩の掟」と呼べるであろう——となり、それはある種の迂回やある種の過剰を禁じるからである。」 (« La forme dialoguée donne à l'écrivain le sentiment d'une liberté complète : à n'importe quel moment n'importe qui pourrait dire n'importe quoi. Sentiment trompeur, piège et tentation : le mouvement, la ligne, l'équilibre de l'ouvrage littéraire deviennent une loi, — qu'on peut appeler « loi du poème », — laquelle interdit certains détours, certaines surcharges. », « Note I. Origine et fonction du Prologue », *Allen, Pléiade*,

ち」において詳述している。引用して見てみよう。

5人の友人たちは名前を付けられておらず、対話の中でも明確に示されてはいない。それは、私が彼らの旅程を綿密に描写することや、彼らがパリへ戻るまで追うことを思いとどまったのと同じ理由による。それもまた、作品の内的な掟の結果である。しかし対話は、注意深い読者が難なく、少なくともそれが必要なところではどこでも、「編集者」のセリフと「愛書家」のセリフを見分けたり、この主要な発話者たちのセリフと他の3人の登場人物のセリフを見分けられたりするように書かれている。そもそも、かなりの数の「発言者不明」の受け答えを「詩人」に割り当てようが、「アマチュア」、あるいは「作者」に割り当てようが不都合はない²³⁵。

しかし、会話の内容からの推測に加え、下記の表4に示すように、発話者に「あなた」と丁寧話す「vousoyer」と「きみ」と親しげに話す「tutoyer」に分けることで、ある程度まで推定が可能である。そのため、「別冊」では日本語訳を示すとともに、発話者の区別を試みている。

表4：発話者と受け手（vousは「vousoyer」、tuは「tutoyer」、?は発話者不明）

		受け手				
		作者	編集者	愛書家	詩人	アマチュア
発話者	作者		?	?	?	?
	編集者	?		vous	vous	tu
	愛書家	?	vous		vous	?
	詩人	?	tu	tu		tu
	アマチュア	?	?	tu	tu	

このように『アレン』と「著者解題」の成立過程を通して『アレン』の構成を確認し、作品を概観したところで、次章ではラルボーが『アレン』とともに帰郷する様子を見ることにしよう。

p. 761. 下線強調は引用者)

²³⁵ « Les Cinq Amis ne sont pas nommés, et ne sont pas indiqués expressément dans le dialogue, pour la même raison qui m'a détourné de décrire minutieusement leur itinéraire et de les suivre jusqu'à leur retour à Paris. C'est là le résultat, encore une fois, de la loi intérieure de l'ouvrage. Mais le dialogue a été composé de telle sorte qu'un lecteur attentif distingue sans peine, du moins partout où cela est nécessaire, les répliques de l'Éditeur de celles du Bibliophile, et les répliques de ces deux principaux interlocuteurs de celles des trois autres personnages. Il n'y a du reste pas d'inconvénient à attribuer soit au Poète, soit à l'Amateur, soit à l'Auteur, un certain nombre de répliques « sans maître ». », « Note XIII. Les interlocuteurs », *ibid.*, p. 767.

第2章 故郷への旅

第1節 『アレン』の旅路と『私の道のり』

『アレン』の登場人物たちは、「本編」第1章で、4月28日午前8時にノートルダム教会前広場にあるシャルルマーニュ像のそばに集合し、ブルボネ地方への旅を始める²³⁶。この集合場所は、『アレン』における旅の出発点として、二つの意味を持っている。その一つは、この教会前広場にはフランス国道の道路元標 « Le point zéro »（「ゼロ地点」）があり、彼らの旅が行政上のフランスの中心地からフランスの地理上の心臓部へ向かうことを示していること、もう一つは、彼らがシャルルマーニュ（742-814）の騎馬像のそばに集まることである。カロリング朝のフランク王シャルルマーニュは、西暦800年にローマ教皇より皇帝号を与えられて西ローマ皇帝となり²³⁷、ヨーロッパのほぼ全土を統治、制度を整備し、学術の振興に努め、西ヨーロッパ世界の礎を築いた「ヨーロッパの父²³⁸」と称される人物である。「本編」第7章で「編集者」が、西暦800年を機にヨーロッパ大陸の活動が发展した旨の発言をしていることから²³⁹、シャルルマーニュ像をヨーロッパ繁栄の出発点として見ることができる。

登場人物たちの会話には数多くの地名が挙がっているが、ムーランまでの主な経由地²⁴⁰は、ブルゴーニュ地方 Yonne（ヨンヌ県）の町 Sens（サンス）、シャンパーニュ地方 Aube（オーブ県）の県庁所在地 Troyes（トロワ）、ブルゴーニュ地方の Tonnerre（トネール）、Auxerre（オーセール）、Lichères [-sur-Yonne]（リシェール=シュール=ヨンヌ）、Avallon（アヴァロン）、Vézelay（ヴェズレー）の展望台、サントル地方の Bourges（ブルージュ）、ブルゴーニュ地方 La Charité-sur-Loire（シャリテ=シュール=ロワール）、Nevers（ヌヴェール）、ブルボネ地方アリエ県の Saint-Menoux（サン=ムヌー）の教会などで、最終目的地はフランス中央部サントル地方 Le Cher（シェール県）の町 Saint-Amand-Montrond（サン=タマン=モンロン）の近くに位置する石柱²⁴¹である。「本編」第1章で「編集者」は、目的地がかつてのブルボネ公国に属すること、すなわちブルボネ地方がフランスの中心であることを、次のように語る。

²³⁶ Cf. « [L'Amateur :] Le 28 à huit heures du matin ? Parvis Notre-Dame, côté Statue de Charlemagne. », *Allen, Pléiade*, p. 730.

²³⁷ カロリング朝のフランク王としての在位は768-814、西ローマ皇帝の在位は800-814。

²³⁸ 『フランス文化事典』、田村毅・塩川徹也他編、丸善出版、2012年、272頁を参照した。

²³⁹ Voir *Allen, Pléiade*, p. 757.

²⁴⁰ 「別冊」の「4. 関連地図：4-1. L'itinéraire d'Allen (『アレン』の行程)」(168-169頁)参照されたい。

²⁴¹ 現在の Bruère-Allichamps（ブリュエール=アリシャン村）の三差路に設置された「旗を飾った里程標」を、同村のウェブサイトの « Bruère-Allichamps, ses monuments, ses installations » のページの « Le Centre de la France » の項目で確認することができる（2014年1月8日閲覧）。<http://www.bruere-allichamps.fr/centre-france/village/village.html>

<編集者>私はね、みなさんに次のことを提案しましょう。私たちが望むとおりの折れ曲がった、あるいは曲がりくねった一本の線によって、フランスの道路の出発点を私の公国の領土にあるフランスの二つの大きな対角線の交差点につなぐことを。言い換えましょうか。ノートルダム教会前広場から出発し、すっかり変形して色あせた粗織りの麻の旗がたいてい掲げられている、サン=タマン=モンロンから4キロのところにある、石と石膏でできた柱に到着する、ということにしましょう²⁴²。

<—>でもそれはシェール県にあるもので、アリエ県ではありませんよね？²⁴³

<編集者>サン=タマン=モンロンもブルボネ公国に属しているのですよ²⁴⁴。

この発言で「編集者」は、出発地と目的地の標石が一本の線で示されると説明しているが、それが一直線ではなく、折れ曲がった、あるいは曲がりくねった線であることに留意しておきたい。作者ラルボーがさまざまな事情から義務付けられた帰郷への屈折した思いのこもった比喩表現として、パリと故郷を結ぶ道のりを見ることができからである。それは、まっすぐな一本道ではなく、ジグザグに折れ、また蛇行し、車が右へ進んだかと思えば左へと向きを変える。その様子は、故郷を愛しいと思いつつも帰郷の煩わしさを拭えない、故郷に対する一つに定まらないラルボーの心情と重なり合うだろう。故郷への道は、帰りたい一心で向かうような、まっすぐな道ではないからである。同時に『アレン』には、どれほど道を曲がろうとも車が前へ進み、また、パリからブルボネ地方への道のりが一本につながっている様子から、パリと故郷が物理的にも心理的にも切り離されたものではないことが示されている。

到着地である石柱 « la colonne » は、フランス語での古い言葉では « (une) colonne itinéraire » (「里程標」)²⁴⁵ と表記し、現代フランス語の « itinéraire » は道順や人生、思考、理論などの「過程」を表す言葉である。すると « itinéraire » に関連するタイトルを持つ、本研究の序論で触れた自伝的な著作物、『私の道のり』を、ラルボーが『アレン』執筆と同時期である1926年に手がけたことに、『アレン』との関わりはあるのだろうか。ここで、ラルボーが『アレン』執筆とほぼ同時期に書いた『私の伝記のための覚え書き』と「自伝断章」という自伝メモも合わせて見ておくことにしよう。

²⁴² « [L'Éditeur :] — Moi, je vous proposerais ceci : joindre, par une ligne aussi brisée ou sinueuse que nous voudrions, le point de départ des routes françaises au point d'intersection des deux grandes diagonales de la France, qui est situé sur le territoire de mon Duché. Autrement dit : départ du parvis Notre-Dame, et arrivée à la colonne de pierre et de plâtre, généralement surmontée d'un drapeau d'étamine, tout de travers et déteint, qui est à quatre kilomètres de Saint-Amand-Montrond. », *Allen, Pléiade*, p. 730. この石柱にはフランス国旗が掲げられている。

²⁴³ « [— :] — Mais c'est dans le Cher, et non dans l'Allier ? », *ibid.*

²⁴⁴ « [L'Éditeur :] — Saint-Amand-Montrond est du duché de Bourbonnais. », *ibid.*

²⁴⁵ « Vieilli. Colonne itinéraire, posée dans un carrefour, avec des inscriptions indicatrices des routes », *Trésor de la langue française*, t. 10, 1983, p. 611, s.v. *itinéraire*.

まず、ラルボーが最も早く書いたのは、本研究の第1部第1章第1節で触れた「自伝断章」である。これは、スペインの作家 Ramón Gómez de la Serna（ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ、1888-1963）の依頼によって、ラルボーが1920年に執筆した数ページの記事で、翌1921年、ラモンは『フェルミナ・マルケス』のスペイン語版の出版を紹介する際に、この記事をスペインの新聞 *La Tribuna* と *El Liberal* に掲載した²⁴⁶。現在確認できるのは1995年に月刊誌 *Europe*（『ユーロップ』）に再掲されたフランス語訳である。ラルボーが、彼のことを知る読者が少ないであろうスペインの読者に向けたその記事の中で、生い立ちや学生時代の思い出、旅行の経験と創作活動や翻訳の関わりなどを簡潔に記していることから、これはラルボーが手がけた自伝的な著作物の中で、最も本質的な事柄に触れていると考えられる。

続いて、オランダの編集者 A. A. M. ストールが1926年6月9日付の書簡で、「あなたの著作の完全な書誌目録はありますか？²⁴⁷」と尋ねたことを機に、ラルボーは『私の道のり』を執筆した。ラルボーはその返信に「装丁、あるいは小冊子で出版した私の著作の書誌目録を作り、それをあなたに送らしましょう²⁴⁸」と記している。ラルボーが同年1月に『アレン』の執筆に取りかかっていることから、彼がこれら二つの作品を並行して書いていた可能性がある。当時45歳だったラルボーは、この『私の道のり』において、7歳から45歳までの半生を、両親の出自や自らの生い立ちを交えて綴っている。また、創作活動については、草案や出版、作品成立の背景を各年の生活の拠点や旅行先や滞在地を箇条書きの形式で簡潔に示している。

『私の道のり』の中で特に目を引くのは、彼がムーランの高校（Lycée Banville）に入学が決まった15歳頃を指して、「ここから私の青年期における最悪の3年間が始まる²⁴⁹」と前置きし、1897年から99年まで（16歳から18歳）の見出しを「流刑の時代²⁵⁰」としたことである。その後、1906年から1926年までの移動を見ると、たびたび帰郷はするものの、ほとんどの時間をブルボネ地方の外、特にパリで過ごしていたことがわかる。長い間、

²⁴⁶ Cf. Valery Larbaud, « Fragment d'autobiographie », *op. cit.*, p. 7. ラルボーの著作を年代順にまとめた Marcel Troulay の *Valery Larbaud : essai de bibliographie chronologique des études en toutes langues I, 1897-1935*, Paris-Caen, Lettres modernes minard, 1998 の1921年の項（ページ番号なし）によれば、掲載の詳細は以下のとおりである：Ramón Gómez de la Serna, « Variaciones : Valery Larbaud y Enrique Díez-Canedo », *La Tribuna*, núm. 3440, 21 de dic., 1921, p. 6a-d.

²⁴⁷ « Est-ce qu'il existe une bibliographie complète de vos œuvres ? », la lettre d'A. A. M. Stols à Valery Larbaud du 9 juin 1926, in *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, 2 tomes, édition établie par Christiane et Marc Kopylov, introduction de Pierre Mahillon, Paris, Éditions des Cendres, 1986, t. 1, p. 33.

²⁴⁸ « Je vais établir une bibliographie de mes ouvrages parus en volume ou en plaquette, et je vais l'enverrai. », la lettre de Valery Larbaud à A. A. M. Stols du 20 juin 1926, *ibid.*, p. 36.

²⁴⁹ « Les trois plus mauvaises années de mon adolescence commencent ici », Valery Larbaud, *Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926*, *op. cit.*, p. 22.

²⁵⁰ « les années d'exil », *ibid.*, p. 23.

特に 1920 年代のラルボーには、1919 年から住んでいたパリ 5 区の Rue du Cardinal-Lemoine (カルディナル=ルモワヌ通り) 71 番のアパルトマンこそが自宅であり、フランス各地や諸外国へ出向き、また戻るための本拠地であった。

加えて、ラルボーが半生を振り返ったこの回顧録を「ヴァルボワ、1926 年 9 月 26 日、V. L.²⁵¹」と記して締めくくっていることに注目しておきたい。ブルボネ地方は、彼が長い旅路、すなわち「道のり」の先に向かった場所だからである。また、最終部 (60-61 頁) では創作活動に関して、「私の養成期間中や実習期間中に、文学の趣味に関して自分と完全に意見の一致した友人は一人もいませんでした²⁵²」、「けれども私はこの道のりに挙げた作家のすべての影響を受けてきました²⁵³」と強調した上で、「それぞれの作品の成り立ちには私の過去の人生すべてが含まれている²⁵⁴」と結んでいる。ここから、ラルボーの作品が彼の経験と不可分であり、また、他の作家とは異なる独自の理念を築き、それにもとづいて創作に取り組んでいることを、彼自身の言葉によって確認することができる。すなわち『私の道のり』は、1926 年 9 月までのラルボーの人生を総括した、彼の「来た道」を示すと同時に、独自の創作姿勢を貫こうとする意思表示が、彼の「行く道」を見せていると言えよう。

ラルボーの自伝的な著作物の最後に挙げられる『私の伝記のための覚え書き』は、執筆が 1928 年でありながらも、出版は 2006 年であった。ラルボーは 1928 年、当時 *Les Nouvelles littéraires* (『ヌーヴェル・リテレール』) の編集長を務めていた Maurice Martin du Gard (モーリス・マルタン・デュ・ガール、1896-1970) の依頼を受けて、この原稿を執筆した²⁵⁵。その後、原稿はジャン・ポーランに渡されたものの、ラルボーの生前に出版されることはなかった。マルタン・デュ・ガールは、『新フランス評論』のラルボー追悼号『ヴァレリー・ラルボーへのオマージュ』に « Rencontres » (「出会い」)²⁵⁶と題する記事を寄せ、その中で『私の伝記のための覚え書き』の一部を引用した。後年、ラルボー研究者のフランソワーズ・リウールが、ラルボーと『新フランス評論』編集長 Jacques Rivière (ジャック・リヴィエール、1886-1925) との書簡²⁵⁷をヴィシー市立図書館で分析していた時に、この原稿が偶

²⁵¹ « Valbois, le 26 septembre 1926 / V. L. », *ibid.*, p. 59.

²⁵² « Dans ma période de formation et d'apprentissage, je n'ai eu aucun ami qui fût parfaitement d'accord avec moi en ce qui concernait nos goûts littéraires. », *ibid.*, p. 60. (イタリック強調は原典)

²⁵³ « Mais j'ai été influencé par tous les écrivains que j'ai nommés dans cet itinéraire. », *ibid.* (イタリック強調は原典)

²⁵⁴ « Le genèse de chaque ouvrage comprend toute la vie antérieure. », *ibid.*, p. 61.

²⁵⁵ ヴィシー市立図書館にはマルタン・デュ・ガールがラルボーへ 1921 年から 1957 年までに送った 23 通の書簡、4 通の葉書が保管されているが、公開には至っていない。

²⁵⁶ Voir *Hommage à Valéry Larbaud, 1881-1956 [sic]*, *op. cit.*, pp. 73-81.

²⁵⁷ 書簡集は 2006 年に出版された。Voir *Valéry Larbaud & Jacques Rivière, Correspondance 1912-1924 : le bénédictin et l'homme de barre*, édition établie, présentée et annotée par Françoise Lioure, Paris, Éditions Claire Paulhan, 2006.

然見つかり、ようやく日の目を見ることになったわけである。しかし『アレン』、あるいは帰郷との観点からいえば、ラルボーが作家としての日常を、彼と文学あるいは影響を受けた作家名や作品名との関わりから著しているこの作品は、本研究においては副次的な資料となろう。

すると、執筆時期や内容から『私の道のり』の重要性が増してくる。ラルボーがタイトルに用いた « itinéraire » は、その由来をラテン語に持ち、フランス語の男性名詞 « un itinéraire » はラテン語で「旅行記」や「出発の合図」を意味する « itinerarium », フランス語の形容詞での « itinéraire » は、ラテン語で「旅の」や「旅程の」の意味を持つ « itinerarius » がそれぞれの語源である。この「旅」と深く関わる言葉 « itinéraire » を、旅と深く結びついた人生を長く歩んできたラルボーが、自分の生い立ちから 1926 年までの人生を振り返った作品のタイトルに選んだことは偶然ではあるまい。

人生を旅に例えるならば、ラルボーが『アレン』において示した、広範な知識にもとづく多くの引用は、旅の途中に得た読書経験による経由地の記録であり、彼が旅の途中に生み出した幾多の作品は、その時々での目的地での思い出であり記念品である。すると、「本編」にラルボーが『アレン』以前に発表した作品が示唆されていることも、『アレン』とラルボーをブルボネ地方へ結びつける要素として注目すべき事柄となる。例えば、第 4 章における「詩人」の「ああ！ 風のそよぎが心地いいね！ 『息を吸いこむと、心の奥にまでフランスの心地よさが感じられる』²⁵⁸」との発言は、『フェルミナ・マルケス』第 3 章の最終部で、作品の舞台であるパリ近郊のカトリックの私立高等中学校 Collège Saint-Augustin (コレージュ・サン＝トージュスタン) の生徒だった語り手の « nous » (「僕たち」) が、校内の様子を描写した後に校内の園庭に戻り、「夏のはじめ。息を吸いこむと、心の奥にまでフランスの心地よさが感じられる²⁵⁹」と語った部分からの引用である。「本編」では「詩人」のこの発言に対し、「作者」と思しき人物が「引用ありがとう²⁶⁰」と返答している。

また第 7 章では、登場人物たちが理想の国家の実現に向けて協力しあおうとする会話での、「詩人」の「そして我らが友、ガエタン・ド・ピュトゥアレイが切手をデザインするだろう！²⁶¹」との発言が、『A. O. バルナブース全集』の登場人物の一人で、バルナブースの友人で切手などを収集する趣味人のピュトゥアレイを想起させる。『フェルミナ・マルケス』がラルボーの学生時代の経験を下敷きにしていること、またピュトゥアレイと同様に、ラルボーが旅先の国々の旗や切手を集めていたことを勘考すると、ラルボーの既刊の作品を想起させる「作者」のこれらの発言を、ラルボーが『アレン』に意図的に残した自身の足

²⁵⁸ « [Le Poète :] — Ah ! le mouvement de l'air fait du bien ! « On respire, et on sent jusqu'au fond du cœur la douceur de la France. » », Allen, *Pléiade*, p. 739. (下線強調は引用者)

²⁵⁹ « C'est le commencement de l'été : on respire ; et l'on sent jusqu'au fond du cœur la douceur de la France. », *Fermina Marquez, Pléiade*, p. 314. (下線強調は引用者)

²⁶⁰ « [L'Auteur :] — Merci pour la citation. », Allen, *Pléiade*, p. 739.

²⁶¹ « [Le Poète :] — et notre ami Gaëtan de Putouarey dessinera les timbres-poste ! », *ibid.*, p. 757.

跡として見なすことができる。すでに見た『幼なごころ』や『A. O. バルナブース全集』の主人公たちにラルボーの姿が二重写しになっていること以上に、『アレン』はラルボーと密接に結びついていると言える。

つまり、『アレン』における「ゼロ地点」からの旅立ちと、フランスの中央に位置する標石への到着とは、それまでパリを拠点にしていたラルボーの、パリから故郷に向けた再出発の手続きである。実際にラルボーが生活の拠点をパリから故郷へ移し、パリの住居が首都で活動するための仮住まいになるのは、1930年10月の母親の死後である²⁶²。ラルボーは、『アレン』を発表する直前の1926年10月16日付のA. A. M. ストールに宛てた書簡において、なおも「10月21日木曜日にパリに帰ります²⁶³」と書いていた。だがそれは、当時ラルボーがまだパリに住居があり、ラルボーが母親の死後、ヴァルボワに落ち着くためにヴィシーの所有地を分割し、ヴァルボワの自宅の改装と「ラ・テバイード」の整理を終えるには、1934年までの数年間を要するからである²⁶⁴。そして、それ以前にすでにラルボーの精神的な重心が故郷に移っていることを、『アレン』の旅路と『私の道のり』が裏付けていると言えよう。

第2節 故郷礼讃—地方活性化の理想—

『アレン』の「本編」において登場人物たちが繰り広げる話題には、ラルボーの足跡を示す多くの要素が盛り込まれている。5人の友人たちが会話に盛り込むさまざまな事柄や史実が「本編」の縦糸の役割を果たし、ラルボーが「著者解題」の第7章「『アレン』の単数、あるいは複数の主題」において、「もし誰かが私に、三つ編状のこの作品を構成している三つの主要な主題に序列をつけるよう求めるならば、私は一番目に『フランスの地方の生活』、二番目に『ブルボネ地方の礼讃』——そして『陸路の旅』を三番目に置くだらう²⁶⁵」と述べた事柄が、「本編」の横軸として絡み合う。このことは、『アレン』におけるブルボネ地方に抱く心情を、ラルボー自身のもので読むための土台となる。

そこで本節では、故郷を嫌悪していた時期のあったラルボーが、どのように「ブルボネ地方の礼讃」を表現したのか、また『新フランス評論』で「アレン」を発表した際の批評に生じた誤解に、彼がどのように対応し、『アレン』における故郷礼讃の姿勢を貫いたのか

²⁶² Cf. Béatrice Mousli, *Valery Larbaud, op. cit.*, pp. 441-442.

²⁶³ « Je rentre à Paris jeudi 21 octobre. », la lettre de Valery Larbaud à A. A. M. Stols du 16 octobre 1926, in *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, t. 1, *op. cit.*, p. 62. (« jeudi » のイタリック強調は原典、下線強調は引用者)

²⁶⁴ Cf. la lettre de Valery Larbaud à Jean Paulhan du 9 septembre 1934, in *Valery Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957, op. cit.*, pp. 339-342.

²⁶⁵ « — Si on me demandait d'établir une hiérarchie entre les trois sujets principaux qui, tressés, forment cet écrit, je donnerais la première place à « la vie des provinces françaises », et la seconde à « l'éloge du Bourbonnais », — « le voyage par la route » venant en troisième lieu. », « Note VII. Sujet, ou sujets, d'Allen », *Allen, Pléiade*, p. 765.

について見ていきたい。

まず、「著者解題」第8章「構想と成熟過程」の冒頭の部分を見てみよう。ラルポーは次のような定義を設けて作品に取り組んだと説明している。

計画の段階や、漠然と何年もの間に成熟過程に入る前に、「ブルボネ地方の事柄」を語るという『アレン』は、決してそうはならないだろうということによってすでに定義することができただろう。すなわち、描写的なガイドブックでも、田園小説、あるいは「地方風俗」でも、——ましてや歴史小説や短篇小説集でもないのだ²⁶⁶。

ラルポーが「読者への序文」に記したブルボネ地方の六つの町の紹介は簡単なものであったが、「本編」においても、彼がブルボネ地方の風景や、そこに暮らす人々の生活を描くことはなかった。写真がまだ一般的でなかった時代に、画像や映像、また風景描写にも頼らずに書かれた『アレン』は、まずもって「描写的なガイドブック」ではない。それは例えば、ブルボネ地方に隣接するベリー地方で育った George Sand (ジョルジュ・サンド、1804-1876) の、その地域を舞台にした数々の小説や、*Promenades autour d'un village* (『村の周辺の散歩』、1857) に収めた小論文 « Berry. — I. Mœurs et Coutumes » (「ベリー地方の風俗と風習」、1851-52) の詳細な記述と比べれば明らかであろう。また本章第4節で論じる同郷の作家たち、すなわちエミール・ギョーマンやシャルル＝ルイ・フィリップが描くような、その土地に根差した作品とも異なっている。

故郷を避けていた時期のあったラルポーは『アレン』において、かつての負の感情の対となる「ブルボネ地方の礼讃」を、影に対する光と言えるような、相対する事例によって示している。登場人物の中で、地方に関するエピソードを語っているのは「詩人」、「愛書家」とブルボネ地方出身の「編集者」である。パリから離れるにつれて広がる田園地帯の景色が、登場人物たちの話題を首都パリと地方との対比へと導くなか、第3章の終盤で「編集者」は一般的な古い町の印象を故郷の風景に結びつける。

<編集者> 古い町は私に、完全に成長の止まった自分の公国について、政権を取り上げられ、分割された私の国、柱廊、噴水、オレンジの木でいっぱいの公園に囲まれたバラ色の大きな城の幻影のまわりに眠る首都を持った、公なき私の公国について考えさせるのです²⁶⁷。

²⁶⁶ « À l'état de projet, et avant d'être entrée, imperceptiblement, au cours des années, dans la période de maturation, la « chose bourbonnaise », Allen, aurait pu déjà être définie par ce qu'elle ne serait certainement pas : ni un guide descriptif, ni un roman rustique ou de « mœurs de province », — encore moins un roman historique ou une série de nouvelles. », « Note VIII. Conception et maturation », *ibid.*, p.766. (下線強調は引用者)

²⁶⁷ « [L'Éditeur :] Elles me font penser à mon Duché arrêté en pleine croissance, à mon pays

この発言対して「詩人」は、第4章の冒頭で地方再興の必要性を、「編集者」の職業になぞらえて説いている。以下の発言を見てみよう。

＜詩人＞僕も、これらの眠った町が好きだな。でもそれを見ると、起こしたくなる衝動にかられるんだ。僕はね、振り子時計のぜんまいを巻き直して、時刻を合わせたり、散らかったものを片付けたり、輝きを失ったものをぴかぴかに磨いたり、曖昧になったものを明らかにしたり、屋根裏にしまいこまれた文明の古ぼけた玩具を修理したり掃除することに夢中になるんだよ。きみにはわかるだろう。だってそれはきみが古いテキストを自分で編集することでやっていることと同じなのだから²⁶⁸。

それは古いものを破棄して新しいものを取り入れるといった革新ではなく、慣れ親しんだ古いものに対し、視点を変えて接することによって、新たな一面を見出そうとする、発想の転換の提案である。特に「振り子時計のぜんまいを巻き直したり、時刻を直したり」は、止まった時計に再び時を刻ませ、時間の遅れ合わせることで、かつての輝きを失い、変化することを断念したかのような町を再生することであり、「曖昧になったものを明らかに」することは、「本編」第7章において、ブルボン公国最後の公シャルル三世が、彼を重用したフランス王にそむき、祖国を捨ててイタリアへ逃げた裏切り者であるとされる誤解を解き、ブルボン公国の繁栄を支えた公の名誉回復を望むことによって説明されることになる。

「愛書家」は第5章で、パリを離れ、架空の町 Saint-Machin-sur-Chose (サン=マシナ=シュル=マシナカ)²⁶⁹に移住した親戚(いとこ夫婦)が、否定的な意味での田舎気質に急速に染まったことを、さまざまな例を挙げて仔細に語り²⁷⁰、「4年目の終わりには、私は二人ともが同じレベルにいると思いました。粗野で、非社交的で、伝染性の倦怠がしみ込んでいました……²⁷¹」と嘆息する。さらに「愛書家」は、彼らについて「今度は田舎の大きな悪徳、吝嗇が、彼らを取り囲み、それがとても強固だったので、彼らは町の社会水準よ

confisqué, démembré, mon Duché sans duc avec sa capitale endormie autour du fantôme d'un grand palais rose entouré de jardins pleins de portiques, de fontaines et d'orangers. », *ibid.*, p. 735.

²⁶⁸ « [Le Poète :] Moi aussi, j'aime ces villes endormies. Mais quand je les vois, l'envie me vient de les réveiller. J'ai la manie de remonter les pendules, de les remettre à l'heure, de ranger les choses qui traînent, de faire reluire ce qui est terni, d'éclairer ce qu'on a obscurci, de réparer et nettoyer les vieux jouets de la civilisation relégués dans les combles. Tu me comprends : c'est aussi ce que tu fais, toi, avec tes éditions de textes anciens. », *ibid.*, p. 736. (下線強調は引用者)

²⁶⁹ *Ibid.*, p. 742. « machin » には「(名前を知らないか忘れてしまった) なんとかという人や物」、「あれ、それ」という意味がある。また « chose » も「あれ、それ、誰それ」の意味で用いる場合がある。

²⁷⁰ Voir *ibid.*, pp. 741-742.

²⁷¹ « [Le Bibliophile :] Au bout de quatre ans je les trouvai tous deux au même niveau : rudes, farouches, imbibés d'un ennui contagieux... », *ibid.*, p. 742.

り下に転落してしまったのです²⁷²」とも話している。このように、「愛書家」が語る地方在住者像とは、上昇志向のない拝金主義者という、影の部分の役割を担っている。

「編集者」は「愛書家」の話に耳を傾けつつ、ブルボネ地方の景観の美しさを友人たちに説明しながら旅を進めてゆくが、第7章でムーランに入った時、「編集者」は故郷との関わりについて「まず初めに、私はあなた方に、長い間私がこの地方を嫌っていたことから告白しようと思います²⁷³」と前置きし、ブルボネ地方と自身との関係を過去に抱いていた心情を吐露しはじめる。「編集者」は、地方を積極的に受け入れる「詩人」の発言を肯定し、地方を否定する「愛書家」の発言に共感しつつ、それら二つの考え方を統合する。まず彼はブルボネ地方に抱いていた嫌悪感を告白する。

<編集者>私はこの地方を「流刑地」、「隠遁地」、「隠棲地」、「墓場」と呼んでいました。私はここに生まれ、実際的な利害関係がここにはありましたが、私の本当の財産のすべて、私の友人関係、習慣や思考はパリに属していたのです。だから私が覚えている限りでは、私はこう言っていました。「パリへ帰る」、そして「地方へ行く」と。しかし家族や利益の問題のために、また避けられない事情のために、そこへ行き、滞在せざるを得ませんでした。私はその場所でじっとこらえていました。そこで日々を数えていたのです。そこで過ごした時間は、無駄な、浪費した時間だったのです。みなさんに封建的な態度でお話しした私の実家と地所、それは「どこでもない場所」、抽象的な空間で、そこで私は、監獄でそれをするかのように、パリへ戻る、あるいは外国へ出発できるのを待っていたのです²⁷⁴。

この発言から思い浮かぶ「地方」には、特に若者が寄り付きにくいイメージがともなうが、ラルボーがヴィシーの自宅に構えた書斎を « la Thébaïde » (「ラ・テバイド」)²⁷⁵と名付

²⁷² « [Le Bibliophile :] Le grand vice provincial, l'avarice, les avait saisis à leur tour, et si fortement, qu'ils étaient tombés au-dessous du niveau social de la ville. », *ibid.*

²⁷³ « [L'Éditeur :] — et je commencerai par vous avouer que pendant longtemps j'ai détesté ce pays. », *ibid.*, p. 754.

²⁷⁴ « [L'Éditeur :] Je l [=ce pays] appelais l'Exil, la Réclusion, la Thébaïde, le Sépulcre. J'y suis né ; j'avais des intérêts matériels ; mais tous mes vrais biens, et mes amitiés, et mes habitudes et mes pensées appartenaient à Paris ; et d'aussi loin qu'il me souviennne, j'ai dit : « Je rentre à Paris », et : « Je vais en province. » Mais j'étais obligé d'y aller, d'y faire des séjours, pour des raisons de famille, d'intérêt, pour d'inéluçtables raisons. J'y rongais mon frein ; j'y comptais les jours ; le temps passé était du temps perdu, gâché. Ma maison familiale et la terre dont je vous parlais féodalement, c'était Nulle-Part, un espace abstrait où j'attendais, comme je l'eusse fait en prison, de pouvoir rentrer à Paris ou partir pour l'étranger. », *ibid.* (イタリック強調は原典、下線強調は引用者)

²⁷⁵ ラルボーが残した « la Thébaïde » の最初の記述は、20歳当時の1901年9月11日付の日記であるが、下記の資料によれば、1895年(14歳)頃にこの書斎を作っていたようである。『アレン』において故郷への嫌悪を象徴する言葉や場所はまた、ラルボーにとって読み

け、好んで滞在していたことを考慮すると、故郷を形容する言葉が、真の安らぎを得られる場所としての意味をあわせ持っていたとも考えられる。けれども、『アレン』における「編集者」の「日々を数える」行為には、自分が置かれている状況が変わる日を今や遅しと待ち望む彼の心境が現れている。それは『幼なごころ』の「包丁」で、主人公で8月29日に8歳になるミルーが、「その日付が自分の人生に大きな変化をもたらすに違いないと指折り数えている²⁷⁶」ことに通じる。さらに、『A. O. パルナブース全集』の「日記」にも、パルナブースの友人ピュトゥアレイが、昔よりも幸福な日常を送っていることに関する発言の中で類似することを述べる場面が見つかる。

僕の幼年時代と青年時代がどんなに不幸だったか、今になって自分ではっきり認めることができるからなんだ。僕は僕の人生から6年間を他人に盗まれたんだ。すんでのところで不具者にされる場所だった。青年時代飢えに苦しんだとか、病気に悩んだとかいう連中のことを聞くと、普通かわいそうに、と思うだろう？ しかし田舎の城に閉じ込められ、ブルジョワ好みの快適な環境の中で教師たちの深情けに拷問の苦しみを舐め、法律上の青年に達するまでの年月を、いや一日一日を、指折り数えながらうめいていた連中のこともたまには考えて欲しいものだ……²⁷⁷

ここでラルボーが『アレン』に取りかかる以前、1924年に受けたインタビュー記事 « Une heure avec Valery Larbaud » (『ヴァレリー・ラルボーとの一時間』)²⁷⁸の冒頭にも引用された、『恋人よ、幸せな恋人よ……』の次の一節を先に見ておこう。

書きに集中できる静かな場所だったようである。Cf. Valery Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 37 ; *Colloque « Valery Larbaud et la France »*, Paris-Sorbonne, le 21 novembre 1989, sous la présidence de Roger Grenier, Président des Amis de Valery Larbaud, Jacques Lacarin, Député-Maire de Vichy, Clermont-Ferrand, Institut d'études du Massif central, 1990, pp. 1-2.

²⁷⁶ Cf. « Émile Raby, qui aura huit ans le vingt-neuf de ce mois d'août, et qui compte les jours comme si cette date devait apporter un grand changement dans sa vie, [...] », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, p. 410. (下線強調は引用者)

²⁷⁷ « À ce qu'à présent j'ose m'avouer combien mon enfance et ma jeunesse ont été malheureuses. On m'a volé six ans de ma vie. On a failli m'estropier. On plaint les hommes qui ont souffert de la faim ou de la maladie dans leur jeunesse. Pensez aussi quelquefois à ceux qui ont gémi, prisonniers dans des châteaux, en province, dans un confortable milieu bourgeois, amoureuxment torturés par leurs éducateurs, et comptant les années, les mois et les jours qui les séparaient de leur majorité légale... », *A.O.B., Pléiade*, p. 300. (下線強調は引用者)

²⁷⁸ 週刊誌 *Les Nouvelles littéraires* (『スーヴェル・リテレール』、1922年-1958年発行、1940年から1944までは第一次世界大戦のため休刊) に連載されたインタビューコラム *Une heure avec...* (『…との一時間』) で、インタビュアーは同誌の編集長で小説家・批評家の Frédéric Lefèvre (フレデリック・ルフェーヴル、1889-1949) である。Cf. « Une heure avec Valery Larbaud », in Frédéric Lefèvre, *Une heure avec...*, 2^e série, Paris, Nouvelle revue française, 1924, pp. 203-225. 初出は « Un Grand ambassadeur de l'esprit. Une heure avec M. Valery Larbaud », in *Les Nouvelles littéraires*, 3^e an., n° 85, 31 mai 1924, pp. 1e-f et 2a-c.

ヨーロッパのどの街のどこに、きみが自分の物、きみの仲間だと思えるような集団がいるのだろうか？ その人たちの中にと、きみが自分の家のように感じられる人たちが？ これまでのところ、そんな場所はどこにもない。 ひよっとしたらいつかは…… でも当分は、孤独だけが唯一考えられるお相手だ²⁷⁹。

この作品では、一人称の「僕」が南仏の町モンペリエで女性たちと過ごした数日間を語っている。ラルボーの伝記によれば、これまでもラルボーが作品の登場人物たちに、彼の自伝的な要素を取り入れていたことと同様に、この作品の舞台がラルボーが頻りに訪れたモンペリエであり、1904年の夏にヴィシーで出会ったドイツ人の踊り子 Ingrid（イングリッド）が Inga（インガ）として登場するなど、彼の経験が反映されている²⁸⁰。

すると、『ヴァレリー・ラルボーとの一時間』でインタビュアーのルフェーヴルがラルボーを評して「ヨーロッパ人ヴァレリー・ラルボー氏の人生は誇りに満ちた人生だ²⁸¹」と、『恋人よ、幸せな恋人よ……』からの引用とは正反対のコメントを加えたことは興味深い。先に見た「自伝断章」や『私の道のり』において、ラルボーは幼年時代の孤独な様子を強調し、外界を自分とは別世界のものと認識して関わりを持たず、自らが創り出した内面世界にだけ生きていたことを強調し、そうした時期を「流刑の時代」とも言い表していた。そのラルボーは、『A. O. バルナブース全集』や『幼なごころ』によって作家としての名声を得た後の1920年代前半頃に、傍目には栄光に満ちた人生を送っているように見えながらも、実際には安らげる場所を持たずにいた。

それは『アレン』の「編集者」にとって、かつて故郷が「流刑地」のように身の置き所のない場所で、自宅でさえ遭難した離島になぞらえてやり過ごすような場所だったことと重なってくる。ラルボー作品の登場人物たちは、それぞれに時間の経過がもたらすであろう状況の変化を願う一方で、指折り数えている場所に居続ければ変化の見込みがないと思ってもいる。彼らの場合、ミルーは離郷の望みを抱くことによって、またピュトゥアレイはその状況に耐えることで現実を受け入れていた。『恋人よ、幸せな恋人よ……』の主人公もまた諦めの境地にいたことが、この語りから伝わってくるだろう。

けれども、『アレン』において「編集者」は、故郷を疎んずる原因が彼の力では逆らうことのできない家庭環境にあると認めて受け入れた上で、発想を変え、新たな角度から故郷を見ることによって故郷に歩み寄ろうとする。彼は次に示すように故郷の歴史を学び、

²⁷⁹ « Où, dans quelle ville d'Europe, existe-t-il un groupe de gens que tu puisses considérer comme les tiens, tes compagnons, entre lesquels tu te sentes chez toi ? Nulle part, jusqu'à présent. Peut-être un jour... Mais en attendant la solitude est l'unique parti possible. », *Amants, heureux amants...*, *Pléiade*, p. 639. (下線強調は引用者)

²⁸⁰ Cf. Béatrice Mousli, *Valery Larbaud*, *op. cit.*, p. 102.

²⁸¹ « La vie de l'Européen Valery Larbaud est une vie toute de dignité. », « Une heure avec Valery Larbaud », in Frédéric Lefèvre, *Une heure avec...*, *op. cit.*, p. 212.

自宅を一つの国に見立てることによって、その歩みよりを実践する。

<編集者>私には私が軽蔑して「地方」と呼んでいたものを知ろうという気持ちだが、これっぽっちもありませんでした。私たちが明日見ようとしている、幾つも大きな池（本当の湖）のある、あの美しい森の存在も知らなかったのです。私は地方にいたけれど、それは辛いものでした。私は監視され、脅され、見捨てられていると感じていて、狭い谷底に落ちたかのように感じていたのです。そして——私がみなさんにお話しするのは、私の16歳か17歳の頃のことです——あざけりの気持ちから、そして私がおかれていた孤独を自分に表すために、私は自分の家族の所有地を、まずは私が遭難した、外洋船舶が通りかかるのを待っている島だと思ふ遊びをしたのです。それから、とても小さな独立国、私の家——「お城」——が首都で、それに属す農場が主要な町であるような独立国と思ふ遊びをね（それらを三色の地図に仕上げもしました）。こうして、「地方」のこの一部と遊ぶことを始めて、私は「公国」のもっとおもしろい遊びをだんだんに思いつくようになったのです。私は、どの程度まで公国が独立していたのか知りたいと思いました。そして、それがわかると、私は公国を地域ではなく、地方でもなければ、県でもない、一つのヨーロッパ国家だとみなしたのです。スイスやベルギーほど大きくはないけれど、ルクセンブルク大公国よりも広い国家。シャルル三世による至極正当な分離の時までフランスの王たちと同盟を結んでいたこの一国家は、ヨーロッパにおいて一つの役割を果たしていたのです²⁸²。

ラルボーが、「包丁」を発表した2年後の、1912年8月5日の日記に、故郷について「ヴィシーに関する私の思い出は悪いことばかりだ。ムーランについても同じく、人生で最悪だった²⁸³」と記していたことは、彼が若い頃に故郷を嫌っていた何よりももの証である。しかし、『アレン』に見る「編集者」の発言には、人目に触れることのない個人的な日記の記述

²⁸² « [L'Éditeur :] Je n'avais aucun désir de connaître ce que j'appelais avec mépris : la région. J'ignorais l'existence de cette belle forêt avec ses grands étangs (de vrais lacs) que nous verrons demain. J'étais en province et ce n'était pas drôle. Je me sentais épié, menacé, abandonné, et comme tombé au fond d'un ravin. Alors — et c'est de ma seizième ou dix-septième année que je vous parle, — par dérision, et pour m'exprimer l'isolement où j'étais, je jouai à considérer ma terre familiale, d'abord comme une île où j'étais le naufragé qui attend qu'un navire passe ; puis comme un minuscule État indépendant, dont ma maison, — le « château », — était la capitale, et les fermes qui en dépendent, les villes principales (j'en dressai même une carte en trois couleurs). Ainsi, ayant commencé à jouer avec ce fragment de « la région », j'en vins par degrés à inventer le jeu, plus intéressant, du « Duché ». Je voulus savoir jusqu'à quel point il avait été indépendant ; et, l'ayant su, je vis en lui non plus une région, ni une province, ni un département, mais un État d'Europe, moins grand que la Suisse ou la Belgique, mais plus étendu que le Grand-Duché de Luxembourg ; un État qui, allié des rois de France jusqu'à la sécession très justifiée de Charles III, avait joué un rôle en Europe. », *Allen, Pléiade*, p. 754.

²⁸³ « (As to Vichy, all my memories of it are bad — and, with Moulins, the worst in my life.) », Valéry Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 99.

とは異なる意義がある。この発言を見た時に、ブルボネ地方を「編集者」が言う通りの「流刑地」、「隠遁地」、「隠棲地」、「墓場」のような、価値のない土地であると思う読者や批評家もいるだろう。また、「編集者」が「どこでもない場所」でしかない場所でありながらも、それが故郷であるが故のしがらみに苦しんだ過去を告白することは、ブルボネ地方を讃える作品としての『アレン』の主旨に反するようにも思われる。

だが、『アレン』においてラルポーは、「編集者」が故郷に抱く影の部分を映し出すとともに故郷の光の部分を描いた。以下に見るように『アレン』では、「編集者」が故郷の光と影、表と裏を受け入れ、彼なりの郷土愛を育んでゆく。「編集者」にとっては色のない墓場同然であった故郷があわせ持つ光の部分、以下に述べる三点で確認しよう。

一点目は、ブルボネ地方の風光明媚なさまを、故郷の風景を象徴する「青色」と、イギリスの作家による文章の引用を反復することで示されている。まず『アレン』では「編集者」が繰り返しブルボネ地方の空の青さを讃え、美しい風景を同乗者たちと共有できた喜びを語る。第6章の冒頭では、シャンパーニュ地方からフランスの中部へと移動する様子を、「編集者」はシャンパン色から青色への変化になぞらえ、「どんなふうにフランス中部の青の中に、[シャンパーニュ地方の] 灰色と金茶色の光景が遠ざかり、溶けてゆくのかをご覧ください²⁸⁴」と語り、また「アレンの国の青はより一層美しいものですよ。それは南仏にあるサファイアだとか水晶の塊のような鉱物の青ではなくて、澄んだ色、地平線という磁器製のパレットの上のまばゆいばかりの群青色を含んだ絵筆がゆるやかに描く帯なのです²⁸⁵」と述べる。また「編集者」は、次のように誇らしげにも語る。

<編集者>私はみなさんに私の公国の綺麗な光を見てもらえると思うと嬉しくなります。その灰色、その青、それにエリソンの景色にあるような岩の上の苔のあの緑も。高い丘の上の廃墟、山岳地帯の険しい峡谷、それにすぐ下方の、なだらかなオマンヌ溪谷の入り口にうずもれた小さな町をね。あるいは鐘楼と塔のある、サン＝プルサン。緑の中に広がったシウール川のゆったりとした二つの分流の上に、とても綺麗に整備されています。ラテン語で ^{ラテン語} Scivola という名前のシウール川とは、「なめらかな川」を表しているようですよ。そして広い平野の奥に、なだらかな高原の上からは、いつも地平線にブルボネの山のあの青が見えるのです²⁸⁶。

²⁸⁴ « [L'Éditeur :] Voyez comme elle s'éloigne, se dissout, la vision grise et brun doré, dans le bleu-Centre-de-la-France. », *Allen, Pléiade*, p. 745.

²⁸⁵ « [L'Éditeur :] Le bleu du pays d'Allen est encore plus beau. Ce n'est pas ce bleu minéral, de saphirs, de bouquets de cristaux, des pays du Midi ; mais la couleur pure, la traînée lente du pinceau chargé d'un outremer éblouissant sur la palette de porcelaine de l'horizon. », *ibid.*

²⁸⁶ « [L'Éditeur :] Je suis content de penser que vous verrez la jolie lumière de mon Duché ; et ses gris, et ses bleus, et ce vert de mousse sur les rochers comme dans le paysage d'Hérisson : des ruines sur une haute colline, une gorge de pays montagneux, abrupte, et, tout de suite au-dessous, la petite ville tassée à l'entrée de la tendre vallée de l'Aumance. Ou encore Saint-Pourçain, avec

ラルポーが語る郷土の美観は、彼が 1911 年 2 月 11 日の日記²⁸⁷の冒頭に引用した、イギリスの作家 Laurence Sterne (ローレンス・スターン、1713-1768) の旅行記 *A Sentimental Journey* (『センチメンタル・ジャーニー』、1768) の一節、「*Bourbonnais, the sweetest part of France*」(「ブルボネ地方、フランスで最も快適なところ」)²⁸⁸の反復にも表れている。また、以下に見られるように、「包丁」と日記の双方に同様の文言を付したことも、ラルポーがブルボネ地方を美しい故郷であると評価していたことの裏付けになろう。

ラルポーが「包丁」を構想したのは『幼なごころ』の中でも最も早く、文章のいくつかを 18 歳頃の 1899 年には考えていたようである。しかも「包丁」の舞台は『アレン』と同じブルボネ地方である。ラルポーは主人公のミルーに同じ誕生日(8月29日)を与え、また物語の舞台をラルポー家の所有地があったヴァルボワとしたことから、「包丁」にはラルポーの経験が多く盛り込まれていると解釈されてきた。その「包丁」の語り手は、ミルーが散歩するレスピナスについて、「そこはフランスで最も快適な地方であるブルボネ地方の片隅だ²⁸⁹」と説明する。そのレスピナスこそ、ラルポーが少年時代から慣れ親しんでいた叔母の所有地である。

これに続いて語り手は、レスピナスからフルリエルの鐘楼と司祭館が見える様子を描いた後²⁹⁰に、「さらにその奥には、柔らかな青の広々とした土地が広がっており、時折、日が沈む頃になると、シャルーの町の窓がキラキラ光るのが見える²⁹¹」と語っている。また、ミルーの休暇が終わる 10 月 2 週目には秋の気配が感じられ、「空はきつく凝り固まったような青をしている。ブルボネ地方に沈黙の領域が広がる²⁹²」と述べる。ブルボネ地方が持つ青色のイメージが、『アレン』だけでなく「包丁」にも表れている例である。

son docker et sa tour, si joliment arrangé au-dessus des deux bras paresseux de la Sioule étalée dans la verdure ; la Sioule, dont le nom latin est *Scivola*, qui semble vouloir dire la Glissante. Et au fond des larges plaines et du haut des plateaux modestes, toujours ce bleu de la montagne bourbonnaise à l'horizon. », *ibid.*, pp. 745-746. (« *Scivola* » のイタリック強調は原典) サン=プルサンとは、アリエ県の地名 Saint-Pourçain-sur-Sioule (サン=プルサン=スユール=シウール) を指し、この近くのヴァルボワにラルポーの母方の屋敷があった。シウール川は中部フランスを流れるアリエ川の支流。クレルモン=フェラン西方に源を発し、ヴィシー北方で本流に注ぐ。

²⁸⁷ Voir Valéry Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 75.

²⁸⁸ Cf. « — to travel it through the Bourbonnais, the sweetest part of France — », Laurence Sterne, *A Sentimental journey through France and Italy*, with an introduction by Virginia Woolf, London, Oxford University Press, 1928 ; repr., 1967, p. 210.

²⁸⁹ Cf. « Pour un moment, Milou et Dembat et la petite Rose quittent l'Afrique et vont se promener dans les bois qu'on voit du perron de l'Espinasse. C'est un coin du Bourbonnais, la plus douce région de France. », « Le Couperet », *Enfantines, Pléiade*, p. 411. (下線強調は引用者)

²⁹⁰ Cf. « La rangée des collines boisées s'interrompt et la hauteur où est Fleuriel remplit l'intervalle, en arrière : on voit le clocher de Fleuriel et la cure. », *ibid.* (下線強調は引用者)

²⁹¹ « Et derrière encore s'étend un grand pays bleu tendre, où scintillent parfois, au soleil couchant, les fenêtres de Charroux. », *ibid.*

²⁹² « Le ciel est d'un bleu dur et figé. Les domaines du silence s'agrandissent, en Bourbonnais. », *ibid.*, p. 428.

さらに、1910年に「包丁」を雑誌『ラ・ファランジュ』に掲載した4年後の1914年、英国の週刊誌『ニュー・ウィークリー』に「パリ通信」を英語で連載し、英国の読者に向けてフランスの文化活動や地方に関する記事を書いていたラルボーは、6月13日の記事でブルボネ地方の中心地としてムーランに言及した際に、「ブルボネ地方とは、ローレンス・スターンが『フランスで最も快適なところ』と呼んだ²⁹³」場所であると記していた。それに加えて、先に見た「自伝断章」においても、出身地としてブルボネ地方を紹介する際には『センチメンタル・ジャーニー』のこの一節を引用し、「私はヴィシー——水源の町——に1881年に生まれました。歳のいった両親の一人っ子で、私はブルボネ地方（ローレンス・スターンの『センチメンタル・ジャーニー』における『フランスで最も快適なところ』）の家族の所有地で子供時代を過ごしました²⁹⁴」と語っている。このようにラルボーにとって、ブルボネ地方とはフランスで最も快適な場所であり、「青色」はその快適さの象徴である。

二点目は、次の「詩人」の発言を契機に引き出される、ブルボネ地方の言葉の使用である。第3章で「詩人」は、フランス西部の都市 Nantes（ナント）で使われていた、市内中心部にある商店街 « la rue Crébillon »（「クレビヨン通り」）でのウィンドーショッピングを意味する話し言葉 « crébillonner »（「クレビヨネ」）を挙げ、「ナントでは洗練された中心地と言えばクレビヨン通りで、ナントの人々はそれから素晴らしい動詞『クレビヨネ』を作ることができたんだ。そこにはクレブロンに〔ラテン語：頻繁に〕とトゥルビヨン〔渦〕という二つの単語が組み合わさっていて、そこから僕はすべての地方都市に適用する名詞『クレビヨン』を引き出したんだ²⁹⁵」と説明する。クレビヨン通りでショッピングを楽しむこ

²⁹³ Cf. « Tels sont, les *Cahiers du Centre*, fondés il y a environ six ans, à Nevers, par M. Paul Cornu. L'année suivante, ils passaient sous l'obédience rédactionnelle de M. Henri Buriot, qui demeure à Moulins, principale ville du Bourbonnais, que Laurence Sterne appelait « la plus douce partie de la France ». », Valéry Larbaud, *Lettres de Paris : pour le New Weekly (mars-août 1914)*, traduit de l'anglais par Jean-Louis Chevalier, introduction et notes d'Anne Chevalier, Paris, Gallimard, 2001, p. 81, cité par Maurice Sarazin, « Buriot-Darsiles et *Les Cahiers du Centre*, revue régionaliste et décentralisatrice (1908-1936). Cet érudit, honora les lettres bourbonnaises », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 221, *op. cit.*, p. 75. (下線強調は引用者)

²⁹⁴ « Je suis né à Vichy – la ville des sources – en 1881. Fils unique, de parents déjà âgés, j'ai passé mon enfance dans une propriété familiale du Bourbonnais (« The *swutert* [*sic*] part of France », Laurence Sterne, *Le Voyage sentimental*) », Valéry Larbaud, « Fragment d'autobiographie », *op. cit.*, p. 8. (« *swutert* » のイタリック強調は原典)

²⁹⁵ « [Le Poète :] À Nantes le centre élégant est la rue Crébillon, et les Nantais ont su en faire l'admirable verbe « crébillonner », où il y a du pluriel, crebro, et du tourbillon, et d'où j'ai tiré le substantif « crébillon » que j'applique à toutes les villes de province. », Allen, *Pléiade*, p. 735. (日本語訳における傍点強調は引用者) « crébillonner » とは、市内中心部にある商店街 « la rue Crébillon »（「クレビヨン通り」）をウィンドーショッピングすることを意味するナントの言葉で、次の資料と『フランス語源辞典』Walther Von Wartburg, *Französisches etymologisches Wörterbuch : eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes* (FEW) では、「クレビヨン通りで気取ること」、「クレビヨン通りでの夜歩き」と説明している。Cf. Paul Eudel, *Les Locutions nantaises*, Nantes, Morel, 1884, p. 44, s.v. *crébillonner*, « Faire le beau dans la rue Crébillon » ; FEW 2, 1298b s.v. *crébillon*, Nantais *crébillonner*, v.n., « se promener le soir dans la

とを表すには、ナントの人々にとって「クレビヨネ」を使うことが最もその行動を端的に表すことへの「詩人」の共感は、その地方独自のものの価値を認めようとする姿勢を示す一例である。そして、これに関連するものとして、「本編」第7章で「編集者」と思しき人物の、「ここは私たちが確保しておくべき安らぎの地、『^{ルティランス}隠遁生活』の地なのです²⁹⁶」との発言に見られる « *retirance* » (「ルティランス」) が挙げられる。

「ルティランス」とは、「隠遁所」や「隠遁生活」を表すブルボネ地方の古い言葉で、『アレン』発表当時すでに「お年寄りしか言わない言葉²⁹⁷」である。ブルボネ地方の方言辞典によれば « *retirance* » は住居を意味するが²⁹⁸、『新フランス評論』1929年10月号に書評を寄せたロベール・トゥルノーにラルボーが送った同年11月3日付の書簡²⁹⁹や、1920年に執筆した「自伝断章」から、ラルボーが「隠遁生活」の意味で使っていると判断できる。特に「自伝断章」では、それがブルボネ地方の言葉であるとの説明は省きながらも、「真面目な話、私は、自分の存在方法や生き方を最も特徴づける、つまり私の最も目に付く特徴とは、言うなれば、それは『ラ・ルティランス』だと思う³⁰⁰」と断言していることにも目

rue Crébillon ».

²⁹⁶ « [L'Éditeur :] Un lieu de repos, de « *retirance* », qu'il faut nous ménager. », *Allen, Pléiade*, p. 757.

²⁹⁷ Cf. « Le mot a dû, à quelque époque, appartenir au français commun. Je ne l'ai entendu qu'en Bourbonnais, et dit par de vieilles gens. [...] Il pourrait désigner tout particulièrement l'action de l'habitant d'une grande ville qui va s'installer pour quelque temps, — un mois, six mois, un an, — soit à la campagne, soit dans une paisible ville provinciale. », « Note XIX. *Retirance* », *ibid.*, p. 771.

²⁹⁸ Cf. « demeure où l'on prend sa retraite », Paul Duchon, *Grammaire et dictionnaire du patois bourbonnais (canton de Verennes)*, Moulins, Crépin-Leblond, 1904 ; repr., Bibliobazaar, 2009, p. 100, s.v. *retirance*. ; « habitation où l'on peut se retirer », Joseph-Édouard Choussy, *Le Patois bourbonnais, précédé d'un simple essai étymologique*, Moulins, impr. Bourbonnaise L. Lamapet, 1914 ; repr., Genève, Slatkine Reprints, 1978, p. 113, s.v. *retirance*. なお « *retirance* » には « *ressemblance* » (「類似」) の意味もある。 *Trésor de la langue française*, t. 14, 1971, p. 1025, s.v. *retirance*. また、フランス文学テキストデータベース Frantext では、ブルボネ地方に隣接する地域の作家、すなわちベリー地方の作家ジョルジュ・サンドとオーヴェルニュ地方の作家 Henri Pourrat (アンリ・プーラ、1887-1959) の作品において « *retirance* » の使用が確認できるが、サンドの *La Petite fadette* (『愛の妖精』、1849) における一例を除き「類似」の意味で用いられている。 <http://www.frantext.fr/> (2011年4月17日閲覧。本データベースの使用は契約者に限られる)

²⁹⁹ Cf. « J'aurais voulu vous écrire plus tôt pour vous remercier de la Note que vous avez publiée dans le numéro d'octobre de *La NRF* au sujet de l'édition définitive d'*Allen*. Mais le temps m'a manqué, et j'ai même eu beaucoup de peine à poursuivre régulièrement un travail commencé hors de Paris. Je crois bien que, pour terminer cet ouvrage et mettre ma correspondance à jour, il me faudra faire une « *retirance* ». », la lettre de Valéry Larbaud à Robert Tournaud du 3 novembre 1929, in Valéry Larbaud, *Lettres d'un retiré*, *op. cit.*, pp. 211. (下線強調は引用者)

³⁰⁰ Cf. « Pour être sérieux, je crois que ce qui caractérise le plus ma manière d'être et de vivre — mon trait le plus saillant, si on peut dire ici — c'est : la *retirance*. Ceux parmi mes amis qui ne me connaissent pas bien disent que je suis « fuyant » ; d'autres que je suis « trop modeste » ; et ceux qui ne savent rien de mes antécédents pensent que je n'ai pas été assez « dans le monde », qu'il me manque d'avoir voyagé, d'avoir vécu dans de grandes villes, etc. Certains de mes amis vont jusqu'à me croire si innocent qu'ils craignent toujours de me voir tomber dans un des pièges les plus

を向けておきたい。ラルポーは、自分のことをあまり知らない友人からは「逃亡者」、あるいは「控えめすぎる」といわれ、彼の来歴を知らない人たちから、旅行や大都市での生活を経験したことのない世間知らずだと思われる、と記している。他人の目には、自分が世間から一線を画した隠遁生活者として映っていることを、ラルポーは 39 歳頃、1920 年の時点で自覚し、なおかつその様子をブルボネ地方の言葉で表すことを好んでいたようである。

ラルポーが「著者解題」第 19 章「隠遁生活」で説明するように、「軍事上の意味〔退却〕や宗教上の意味〔黙想〕など内容的に複数の意味を持たなければならない³⁰¹」言葉である « ^{ルトレット}retraite » ではなく、ブルボネ地方の言葉である「ルティランス」を用い、その「ルティランス」を「この言葉は美しい」と述べ、この章がこの言葉の注釈のみに充てられていることは、ラルポーと故郷との結びつきを示す証左として注目すべき事柄である。かつて、ラルポーにとって隠遁生活が可能な場所は、母親の目の届かない場所であった。けれども『アレン』ではその評価が逆転し、さらにはその後のブルボネ地方における彼の静かな生活を象徴する言葉になっているからである。「編集者」が「流刑地」や「墓場」と語った故郷が、安らぎを得られる場所へと変化する過程が、『アレン』ではブルボネ地方の言葉によって示されている。それはまた、地元から古くから伝わる言葉によってのみ表現できるものが故郷に残っていること、すなわち、ブルボネ地方にパリの影響を受けない独自の言葉の財産があることへの賞讃であろう。

三点目は、ブルボン公国最後の公、ブルボン公シャルル三世の復権への試みである。「本編」第 7 章で、アレンの国であるムーランに到着した一行は、「詩人」が「ダチョウの声に驚いて飛ぶ鹿³⁰²」を引用したことから、シャルル三世の話題に入る。この引用は、フランス・ルネサンス期の詩人で、リヨン生まれの Maurice Scève (モーリス・セーヴ、1500 頃-1564 頃) の詩集 *Délie, objet de plus haulte vertu* (『デリー、至高の徳の対象』、1544) からのもので、全 449 篇の 10 行詩 (1 行 10 音綴が 10 行) のうちの 3 篇 (第 19 章から第 21 章) が、シャルル三世によるフランス王フランソワ一世への反逆に関連している。では「詩人」が引用した部分を含む第 21 章を見てみよう。

ダチョウの声に驚いて飛ぶ鹿は／寝ぐら〔没収されたブルボンの領地〕を離れ、度を失って飛び立った。／そしてヨーロッパの最高の梢〔ローマ〕に止まっては、／そこ

connus de la vie — et pourtant ils savent bien que je suis, à trente-neuf ans, encore « célibataire et sans compromis ! ». », Valéry Larbaud, « Fragment d'autobiographie », *op. cit.*, p. 10. (下線強調は引用者、イタリック強調は原典)

³⁰¹ Cf. « Il [= le mot « retirance »] est beau, et ne devrait pas faire double emploi avec la « retraite » dont les forces ont à soutenir plusieurs significations : militaire, religieuse, etc. », « Note XIX. Retirance », *Allen, Pléiade*, p. 771.

³⁰² « [Le Poète :] Le Cerf volant aux abois de l'Autruche. », *Allen, Pléiade*, p. 751.

を安全な休息の場とみなしたのか／実はその神聖きわまりないその土地を／世俗的に万人周知の勇敢さ〔ドイツ傭兵隊〕で侵害したのだ。

さらに勝利に先立つ死によって／彼の名は途方もなく傷つけられたが、／時に応じて彼の名誉にふさわしいものとして、／彼の信念にひとしい信念によって報われた³⁰³。

ここで「ダチョウ」を意味する « ^{オトリエウシユ}autruche » は、オーストリア共和国の伝語表記 « ^{オトリウシユ}Autriche » との掛け言葉、また「飛ぶ鹿」〔跳躍する鹿〕はブルボン公シャルル三世を、さらには彼が同盟を結び戦っていた Charles-Quint（神聖ローマ皇帝カール五世、1500-1558、在位 1519-1556）の紋章であるワシがダチョウに化したという皮肉を含んでいる。加藤美雄の注釈によれば、「この詩句の背後にあるものはド・ブルボン元帥〔ブルボン公シャルル三世〕のフランス軍に対する反逆と、その反逆をたまたまフランスに攻めこんだカール五世の軍隊が邪魔する結果になったことを、元帥の立場を中心として歌ったもの」とのことである³⁰⁴。

ブルボン公シャルル三世は、妻 Suzanne de Bourbon（シュザンヌ・ド・ブルボン、1491-1521）の死後にブルボン家の遺産を巡ってフランス王フランソワ一世の母（1476-1531）と争い、その結果 1523 年にカール五世のもとへ亡命、カール五世より委ねられたドイツ人とスペイン人の混成軍を率いてフランソワ一世と戦うが、1527 年にローマで狙撃された。「本編」第 4 章で「編集者」が引用した「ブルボンは一歩前進する！³⁰⁵」は、1527 年にローマで死亡した時の辞世の句である³⁰⁶。その結果ブルボン家は後継者を失い、公国の歴史を閉じることになった。「跳躍する鹿」はシャルル三世の紋章で、ムーランには現在も « Rue du Cerf

³⁰³ « Le Cerf volant aux aboys de l'Austruche / Hors de son giste esperdu s'envola : / Sur le plus hault de l'Europe il se jusche, / Cuydant trouver seurté, et repos là, / Lieu sacre, et saint, lequel il viola / Par main a tous prophanément notoyre. / Aussi par mort precedant la victoyre / Luy fut son nom insignément playé, / Comme au besoing pour son loz meritoyre / De foy semblable a la sienne payé. », Maurice Scève, *Délie, object de plus haulte vertu*, 1544, XXI. (原文は Maurice Scève, *Œuvres complètes*, texte établi et annoté par Pascal Quignard, Paris, Mercure de France, 1974, p. 23 を参照、邦訳はモーリス・セーヴ『デリ [ママ] 一至高の徳の対象一』加藤美雄訳、青山社、1990 年、32 頁を参考にした。下線強調は引用者)

³⁰⁴ モーリス・セーヴ『デリ一至高の徳の対象一』加藤美雄訳、前掲書、32 頁を参考にした。『アレン』執筆前の 1924 年に、ラルボーは『ラ・ナシオン』に、モーリス・セーヴに関する記事をスペイン語で寄稿していた。この記事は 1924 年 8 月 10 日に掲載された後、1925 年の *Commerce* V, pp. 209-231 に « Maurice Scève : Fragments de *Microcosme* : suivis de Notes sur Maurice Scève par Valéry Larbaud »（「モーリス・セーヴ：『ミクロコスム』断章：ヴァレリー・ラルボーによるモーリス・セーヴに関する覚え書き調査」として掲載されている。このようなラルボーの研究が、セーヴの作品を再評価する契機となった。

³⁰⁵ « [L'Éditeur :] Bourbon est en avant ! », Allen, *Pléiade*, p. 740.

³⁰⁶ Cf. Achille Allier, « Introduction », in *L'Ancien Bourbonnais (histoire, monuments, mœurs, statistique)*, 4 tomes, continué par Adolphe Michel ; gravé et lithographié sous la direction de Aimé Chenavard ; d'après les dessins et documents de M. Dufour ; par une société d'artistes, Moulins, Desrosiers fils, 1833-1838 ; réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t 1, 1934, p. xii.

Volant) (「跳躍する鹿通り」) と名付けられた通りがあり、またラルボーはこの紋章の意匠を蔵書印に用いていたようである³⁰⁷。

一般的にブルボン公シャルル三世は、「愛書家」がミシュレの『フランス史』の記述を引用して、「彼こそが『フランスを分割するという恐ろしい夢想にふけた』男ですよ³⁰⁸」と話したように、国王フランソワ一世に武勲を認められ、Connétable (大元帥) を任じられながらも国王を裏切った人物とのイメージを持たれているようである。この発言に対して「編集者」は、郷土史における光の部分の部分を語って反論する。

<編集者>しかしシャルル三世は、強奪を正当化して忌々しい母親を満足させようとしたフランソワ一世がお金を出した下劣な出版物のせいで、まだ名誉を汚され続けているのです。それにフランス革命支持者、危険な国粋主義者のミシュレときたら、彼のことで、こんな嘘八百を言っているのですよ。複数の概説書が言うには、「偉大なる封建君主の最後をなす者」——あるいは、近代政治家の最初をなす者ですね。国家体制の鎖を断ち切ろうとしていたとか、アンシャン・レジームと呼ばれるあの無政府状態の結果を予見していたとかだったかな?³⁰⁹

また先に引用した、「編集者」が少年時代に自分の「公国」を作っていたことを語る中で、「シャルル三世による至極正当な分離の時までフランスの王たちと同盟を結んでいたこの一国家は、ヨーロッパにおいて一つの役割を果たしていたのです³¹⁰」と、シャルル三世の

³⁰⁷ Cf. « Poussé par la même curiosité historique, Larbaud adopte comme *ex libris* le Cerf-Volant de Charles III. », Françoise Lioure, « Valéry Larbaud : Allen ou de l'autonomie », in *L'Auvergne littéraire artistique et historique, op. cit.*, p. 43. (« *ex libris* » のイタリック強調は原典)

³⁰⁸ « [Le Bibliophile :] Lui-même, l'homme qui a « fait le rêve atroce de démembrer la France » », Allen, *Pléiade*, p. 751. 若干の表記の違いはあるが、ジュール・ミシュレの *Histoire de France* (『フランス史』: 中世 6 巻、1833-1344・近代 11 巻、1855-1867) における、「そして七つの地方の君主となったブルボン公シャルルは、莫大な財力と、常軌を逸した自尊心を育んだがゆえに、フランスを分割するという恐ろしい夢想に至った」の部分からの引用と思われる。Cf. « Et Charles de Bourbon, devenu souverain dans sept provinces, fut, par cette fortune monstrueuse, par une éducation de frénétique orgueil, mené au rêve atroce de mettre la France en morceaux. », Jules Michelet, *Histoire de France*, t. 10, « Réforme », Paris, Marpon, 1881-1884, pp. 171-172. (下線強調は引用者) ラルボーは「著者解題」第 9 章「名前を挙げずにされた引用」において、『アレン』執筆にあたりミシュレの『フランス史』を参考にしたと説明している。Voir « Note IX. Les citations anonymes », Allen, *Pléiade*, p. 766.

³⁰⁹ « [L'Éditeur :] Mais Charles III est encore tout noirci de la mauvaise presse payée par François I^{er} qui voulait justifier la spoliation et contenter sa putain de mère. Et Michelet, homme de la Révolution, nationaliste dangereux, parlant de lui, s'exprime comme ces bourreurs de crâne. « Le dernier des grands féodaux », disent les manuels, — ou le premier des politiques modernes, s'efforçant de rompre les mailles du système national ? prévoyant les conséquences de cette anarchie appelée l'Ancien Régime ? », Allen, *Pléiade*, p. 751.

³¹⁰ Cf. « [L'Éditeur :] [...] un État qui, allié des rois de France jusqu'à la sécession très justifiée de Charles III, avait joué un rôle en Europe. », *ibid.*

下でブルボン公国が一つの国家として独立していた事実を引き合いに出し、最後の公の業績を讃えている。先に引用した発言で、「編集者」は故郷を « Nulle-Part »（「どこでもない場所」）と言いついていたが、『アレン』における「ブルボネ地方の礼讃」は、そのどこでもなかった場所を視点を変えて見直し、そこに見えたものに光を差すことによって示されていると言えよう。

すると、ラルポーが「著者解題」の3章分、すなわち第15章「作品の受容」、第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」、第17章「紺碧と銀色」を、批評についての見解や、1927年の『新フランス評論』での「本編」発表時に内容が難解であったことから生じた、当時の批評への反論にあてたことが、「ブルボネ地方の礼讃」という『アレン』における彼の目的を貫くために必要な手続きであったとわかる。まず第15章「作品の受容」において、ラルポーは次のように表している。

新聞に出た抜粋は、解説の有無にかかわらず、『アレン』にひどく間違った見解を与えており、『アレン』を地方や地方住民に対する風刺のようなものに単純化していた。

「愛書家」の災難のちょっとした身の上話のある第5章は、この作品の残りをすべて犠牲にしてまで、何人かの批評家の注意を引いていた。批評家たちは『アレン』を注意深くも、最後まで読んでいなかったのかもしれない。彼らは雑誌に掲載された二回の連載のうちの一つしか読んでいなかったのだろう。幸いにも、この作品はブルボネ地方において、もっと行き届いた、あるいは好意的な、さもなければ寛容な批評家たちに巡り合った³¹¹。

『新フランス評論』誌上で「アレン」は、1927年2月号に「本編」第1章から第4章までが、翌3月号に第5章から第7章までが掲載された。ラルポーが説明したように、2回目に掲載された第5章は、ほぼすべてが「愛書家」の地方での体験談で占められている。例えば、先に例を挙げた「愛書家」のいとこ夫婦が地方で暮らすうちに、若い作家が言うところの「しなびた精神」の持ち主になり³¹²、無関心で無知な人たちに変貌したことに加え、書籍の質よりも大きさに価値を見出す地方の製本屋の考え方に対し、「なぜだかわかりませんが、私にはこの製本屋との一件が、小さな町の無学、下手なうぬぼれ、愚かさ、ばかげ

³¹¹ « Des extraits publiés, avec ou sans commentaires, dans des journaux donnaient d'Allen une idée très fautive, le réduisaient à une espèce de satire contre la province et les provinciaux. Le chapitre V, avec la petite histoire de la mésaventure du Bibliophile, retint l'attention de quelques critiques au détriment de tout le reste de l'ouvrage. Peut-être ne l'avaient-ils lu ni attentivement, ni entièrement ; peut-être n'avaient-ils lu qu'une des deux livraisons parues en revue. Par bonheur, il trouva en Bourbonnais des critiques ou plus attentifs, ou plus bienveillants, ou plus indulgents. », « Note XV. Réception de l'ouvrage », *ibid.*, p. 769.

³¹² Cf. « [Le Bibliophile :] Et un jeune écrivain du groupe de *la Revue nouvelle*, Georges Petit, parlant de certains provinciaux, a écrit très justement : « Ces âmes flétries. » », *Allen, Pléiade*, p. 740. (下線強調は引用者)

た悪意、半ば未開人的な（そして面白味もない）性質をすべて凝縮しているように思われるのです³¹³」と語る様子が描かれている。

彼を落胆させた批評についてラルボーは詳らかにしていないが、それは2回目の連載の一部分を対象に書かれたものだったようである。また、ラルボーが「著者解題」第17章「紺碧と銀色」で「2、3の批評家は、ありがたくも『アレン』を論評してくれつつ、4人の対話者しかそこに見なかったが、このように彼らが忘れていた発話者が、まさしく『アマチュア』である³¹⁴」と一章を設けて説明したように、批評の中には、『新フランス評論』での1回目の連載から登場する、自動車の持ち主でもある運転手役の存在を認識していないものもあったと見られる。何人かの批評家は、それぞれ連載の一部を拠り所しながら記事を書いたのであろう。

ラルボーは「著者解題」第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」において、同郷の批評家たちによって書かれ、地元の新聞に掲載された批評を、批評家の氏名や掲載誌、掲載日を挙げるだけでなく、記事の抜粋を長く引用して紹介している³¹⁵。ここで留意しておきたいことは、これらの批評の三人の執筆者が、いずれもラルボーと旧知の間柄であるだけでなく、ラルボーと同郷のシャルル=ルイ・フィリップと深く結びつく人物たちだったことである。まずアンリ・ビュリオ=ダルシルは、エミール・ギョーマンを会長として1935年に設立された *Société des Amis de Charles-Louis Philippe*（シャルル=ルイ・フィリップ友の会）の事務局を担っていた³¹⁶。次に *Camille Gagnon*（カミーユ・ガニョン、1893-1983）³¹⁷は、この友の会の共同設立者であった。最後にロベール・トゥルノーは未完

³¹³ « [Le Bibliophile :] Je ne sais pourquoi, mais cette affaire avec ce relieur me semble résumer toute l'ignorance, la vanité mal placée la stupidité, la malveillance bête, la demi-sauvagerie (sans pittoresque) des petites villes. », *ibid.*, p. 744.

³¹⁴ « Deux ou trois critiques, qui ont bien voulu s'occuper d'*Allen*, n'y ont vu que quatre interlocuteurs, et celui qu'ils ont ainsi oublié est précisément l'Amateur. », « Note XVII. Azur et argent », *ibid.*, p. 770.

³¹⁵ 同郷の作家エミール・ギョーマンからラルボーへの1930年4月21日付の書簡によれば、ギョーマンも『アレン』に関する書評を書き、雑誌 *Quotidien* に掲載を依頼したが、幹部によって掲載を拒否されたようである。しかし原稿の内容が不明のため、直接の理由は確認できない。この事柄については、Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, *Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux* », *op. cit.*, p. 6 を参照されたい。なお書簡は、Lettre à Valery Larbaud du 21 avril 1930, in Roger Mathé (éd.), *Cent dix-neuf lettres d'Émile Guillaumin (dont 73 inédites) 1894-1951 autour du mouvement littéraire bourbonnais*, Paris, Klincksieck, 1969, pp. 185-186 を参照した。

³¹⁶ Cf. « H. Buriot-Darsiles, mort en 1945, était alors Secrétaire des *Amis de Ch.-L. Philippe* qu'il avait contribué à fonder. », Jean-Philippe Segonds, *L'Enfance bourbonnaise de Valery Larbaud*, Moulins, Éditions des Cahiers bourbonnais, 1967, p. 100, note 40. (イタリック強調は原典)

³¹⁷ ガニョンはブルボネ地方の行政官、文学者（1893-1983）で、ブルボネ地方の民俗研究の著書として *Le Folklore Bourbonnais, Première partie, La Vie matérielle*, dessins de Claude Joly, Moulins, Crépin-Leblond, 1947 ; *Deuxième partie, Les Croyances et les coutumes*, Moulins, Crépin-Leblond, 1948 ; *Troisième partie, Les Dits, les chants, les jeux*, Roanne, Horvath, 1981 ; *Quatrième partie, Les Parlers*, Moulins, A. Pottier, 1972（いずれもヴィシー市立図書館、

に終わることにはなるがフィリップに関する博士論文を準備しており、それが縁でラルボーと親交のあった人物である³¹⁸。ラルボーが『アレン』の「本編」において常にシャルル=ルイ・フィリップを意識していたことは、本章第4節「同郷意識」において改めて論じるが、それに加えて、この「著者解題」第16章には、ラルボーと同郷の批評家たちとの、フィリップの存在を共有した強固な結びつきが見える。

その「著者解題」第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」における最初の引用は、ラルボーが書簡で『幼なごころ』の「《顔》との一時間」の舞台を明かしたアンリ・ビュリオ=ダルシルが、1927年5月5日に地元の新聞 *Le Courrier de l'Allier* (『アリエ通信』) に載せたものである³¹⁹。ビュリオ=ダルシルは『アレン』の概要を説明した後、「そして作者が望むようなこと、作者とともにすべての真の地方主義者とすべての真の愛国者、ヨーロッパ合衆国を夢見るすべての人たちが望むべきこと、それは、若干眠っているようなこの地方と、すべての我々の地方における、『目覚め、もっと激しい熱気や光、自主性の再興、退屈な季節の終わり』なのである³²⁰」と、『アレン』の「本編」第7章における「編集者」の発言を引用しながら締めくくっている。

二番目は、ラルボーが参加していた *La Société d'Émulation du Bourbonnais* (ブルボネ振興協会) の会報誌、*Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais* (『ブルボネ振興協会会報』) 1927年7-8月号に掲載された、カミーユ・ガニョンの批評³²¹からの抜粋である。「……作者はその仕事を1927年に出版することを強く望んだ。なぜならこの年は、ある奇妙な偶然によって、二つの出来事を記念する年だからである。私たちの公国の独立の歴史を開き、また閉じる〔ブルボン家の〕公領の公国への昇格(1327年)とローマの城壁の下での、シャ

Cote : 10 390 GAG) などがある。

³¹⁸ ラルボーが『アレン』を発表した当時、トゥルノーは博士論文 *Charles-Louis Philippe et son temps* の執筆に取り組んでいた。ラルボーはフィリップとの書簡を提供するなどして、研究の進捗具合を時々尋ねていたが、トゥルノーの病死により論文は未完成に終わっている。ラルボーとトゥルノーの文通は2年あまりの期間であったが、ラルボーは彼を « mon cher compatriote » (「親愛なる同郷人」) と呼ぶなど同郷意識を示していた。

³¹⁹ この記事は、Henri Buriot-Darsiles, « LETTRES ET ARTS : VOYAGES », in *Courrier de l'Allier*, le 5 mai, 1927, p. 3a-d を指している。全文は「別冊」の155-157頁を参照されたい。Archives départementales de l'Allier (アリエ県立古文書館) が所蔵する紙面では、日付が « le 5 mai 1927 » (1927年5月5日) であるため、プレイヤード版の記述は誤植、あるいはラルボーの誤記であろう。

³²⁰ « Et ce que l'auteur voudrait, ce que doivent vouloir avec lui tous les véritables régionalistes et tous les vrais patriotes et tous ceux qui rêvent d'États-Unis européens, c'est, dans cette province un peu somnolente, et dans toutes nos provinces, « un réveil, une chaleur et une lumière plus vives, la renaissance de l'initiative, la fin de la saison d'ennui ». », « Note XVI. Quelques extraits de la presse bourbonnaise », *Allen, Pléiade*, p. 769.

³²¹ この記事は、Camille Gagnon, « VALÉRY LARBAUD : Allen, illustré d'eaux-fortes originales, par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 122, boulevard Murat, XVI^e », in *Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais*, juillet-août 1927, pp. 233-236 の抜粋である。全文は「別冊」の158-161頁を参照されたい。

ルル三世、大元帥の死（1527年）である……³²²」との引用は、「本編」では詳しく語られなかった200年間の故郷の自治の歴史に触れており、同郷の批評家がブルボネ地方の歴史ふまえて作品を鑑賞していることを示している。

最後は、ロベール・トゥルノー³²³の、1927年7月28日付の『アリエ通信』における批評からである³²⁴。抜粋は細切れだが、「『アレン』は]精神的な権力者たちへの大層奇妙な贈り物である。長い旅の後、……『バラいっぱいブルガリア』から霧のロンドンへの『A. O. バルナブース全集』の後、……（作者は）彼の故郷、公国に関して、そこにある生命力あふれるものを我々に復元して示したのだ、……本質を³²⁵」の部分は、ラルボーが彼自身の旅行と、旅を主題とする創作活動を経て、ブルボネ地方へ帰って来たことを示している。このようにラルボーが挙げたブルボネ地方の批評家による論評は、『アレン』におけるラルボーの本意を汲んだ上で論じられている。つまりラルボーは、『アレン』に掲げた地方再興の望みを理解せずにかかれた批評に対し、同郷の批評家たちによる記事を引き合いに出すことで、反論を試みたものと考えられる。しかもこれらの意見は、日記や友人たちとの書簡といった個人的なものではなく出版を目的として書かれ、かつ出版にかかるす

³²² « ...L'auteur a tenu à livrer son travail en 1927 parce que cette année-là présente deux anniversaires qui, par un curieux hasard, ouvrent et ferment l'histoire de notre indépendance ducale ; l'érection de la Sirerie en Duché (1327) et la mort de Charles III, le connétable, sous les murs de Rome (1527)... », « Note XVI. Quelques extraits de la presse bourbonnaise », *Allen, Pléiade*, p. 769.

³²³ ラルボーはオリゾン・ド・フランス版の出版時に、トゥルノーへの書簡で次のように説明している。「『アレン』の挿絵入りの第二版は限定版で、それには「著者解題」が含まれています。「著者解題」は私が、予約申込をされた方々のために編集者たちから依頼されたもので、未発表のものが望まれていました。もっとも私は丁寧さと熱意を持って（それは同じことですが）執筆に取り組み、その結果、第二版はおよそ30ページから40ページ分、量が増えました。「著者解題」のうちの一つでは、雑誌での発表後のものであれ、初版の挿絵入りの版の刊行後のものであれ、あなたとC. ガニョン氏、ビュリオ=ダルシル氏が私のために割いてくださった記事の抜粋を引用しています。」(Cf. « Elle [= une deuxième édition illustrée d'*Allen*] est à tirage limité et elle contient des « Notes », qui m'ont été demandées par les éditeurs pour satisfaire les souscripteurs, qui désiraient de l'inédit. J'ai du reste écrit ces Notes avec beaucoup de soin et de plaisir (c'est la même chose), et elle augmentait le volume de 35-40 pages environ. Une de ces notes cite des fragments des articles que vous, M. C. Gagnon et M. Buriot-Darsiles avez bien voulu consacrer à mon livre, soit après sa publication en revue, soit après la publication de la première édition illustrée. », la lettre de Valery Larbaud à Robert Tournaud du 11 mars 1929, in *Cahiers de l'Académie du Vernet, Cahier du 40^e anniversaire 1948-1988*, *op. cit.*, p. 51.)

³²⁴ この記事は、Robert Tournaud, « « ALLEN » Par Valery LARBAUD », in *Courrier de l'Allier*, le 28 juillet, 1927, p. 2e-f の抜粋である。全文は「別冊」の161-162頁を参照されたい。

³²⁵ « Une bien curieuse offrande aux puissances spirituelles. Après les voyages lointains... après A. O. Barnabooth, de la « Bulgarie pleine de roses » aux brouillards londoniens... [l'auteur] nous restitue de sa province natale, du duché, ce qu'il y a en elle de vivant... l'essence. », « Note XVI. Quelques extraits de la presse bourbonnaise », *Allen, Pléiade*, p. 770. « Bulgarie pleine de roses » は、『A. O. バルナブース全集』の「詩」に収録された「Ode」（「頌歌」）からの引用である。Voir *AOB, Pléiade*, p. 45.

すべての工程をブルボネ地方で行おうと試みた版において主張されている。そこに、かつて栄華を極めた故郷に捧げる作品に込めた強い意思が見えてくる。

それだけではない。ラルボーは、「著者解題」第14章「議論された命題」で述べた、『アレン』においてラルボーが理想とした、首都（パリ）と各地方が同等に発展することで、フランス全土が活性化する状態を理想とする「フランス合衆国構想」³²⁶を理解することなく、批評家たちが『アレン』を、地方蔑視というラルボーの思惑とは正反対の作品と見なしたことに異を唱えた。ラルボーが『アレン』で取り上げたブルボネ地方の美しさや言葉は、他の地方にもそれぞれに存在するであろう風景や地方語の一例に過ぎず、またラルボーが引き合いに出して讃えたブルボネ地方の歴史や歴史上の人物たち、また本章第4節で取り上げる尊敬すべき同郷の作家たちも、対象となる地域が変われば、それぞれに見出せるであろう歴史であり故郷の誉だからである。その考えは、「著者解題」第7章『アレン』の単数、あるいは複数の主題」において述べた、次の部分が示している。

最初の観点から見れば、『アレン』においてブルボネ地方が例として挙げられ、またフランスの地方「そのもの」を代表していることは確かである。そのことはベリー地方に与えられた「ウルシーヌの国」という異名が適切に示しており、「ウルシーヌ」は『アレン』と同様の目的の作品のタイトルになりうるだろう。だがそこではベリー地方が『アレン』におけるブルボネ地方の役割に類する役割を果たすことになるだろうし、『アレン』がアシール・アリエの『旧きブルボネ』をもとにしたように、「ウルシーヌ」はレナルの『ベリー地方の歴史』に基づくことになるだろう³²⁷。

同時に、ラルボーが第15章「作品の受容」の最後で「いずれにせよ、彼らが『アレン』に

³²⁶ 「例えば、[アシール・]アリエはフランス合衆国をはっきりと思い描いていた。『編集者』と友人たちはヨーロッパ合衆国におけるフランス合衆国を想像するのである。」
(Cf. « [Achille] Allier, par exemple, concevait nettement des États-Unis de France ; l'Éditeur et ses amis imaginent des États-Unis français dans les États-Unis d'Europe. », « Note XIV. La thèse débattue », *Allen, Pléiade*, p. 768.)

³²⁷ « Selon le premier point de vue, il est certain que dans *Allen* le Bourbonnais est pris comme exemple, et représente « la » province française. Cela est bien indiqué par le surnom de « pays d'Oursine » donné au Berry, « Oursine » pouvant faire le titre d'un ouvrage de même intention qu'*Allen*, mais où le Berry jouerait un rôle analogue à celui que joue le Bourbonnais dans *Allen*, et qui serait basé sur *l'Histoire du Berry* de Raynal comme *Allen* est basé sur *l'Ancien Bourbonnais* d'Achille Allier », « Note VII. Sujet, ou sujets, d'*Allen* », *ibid.*, p. 765. 「ウルシーヌ」は、ベリー公ジャン（1340-1416）の標章である « ours »（ウルス：「熊」）と « cygne »（シーニュ：「白鳥」）を縮約した造語。また『ベリー地方の歴史』とは、Louis Hector Chaudrude Raynal（ルイ・エクトール・ショードリュード・レナル、1805-1892）の著作 *Histoire du Berry : depuis les temps les plus anciens jusqu'en 1789*, 4 tomes, Bourges, Librairie de Vermeil, 1844-1847 を指す。

ついで示した分析は正確なもので、彼らの判断は私には公平なものに思われた³²⁸」と述べていることから、ラルボーが得た批評は、登場人物の紹介など「本編」に欠けていたものを指摘するものだったのであろう。言い換えれば、批評家たちが『アレン』を不正確に理解したからこそ、ラルボーは「本編」を補完する「著者解題」を通して故郷を讃え、地方の再活性化を唱える機会を再び得たと言える。

第3節 過ぎし日の友—レオン=ポール・ファルグー

5人の友人たちのうち、「詩人」のモデルがファルグであることは、本研究の第2部第1章第2節で述べたとおりであるが、ここで、『アレン』を発表した頃にラルボーとファルグがすでに絶縁状態だったことに触れておきたい。二人は1909年12月24日に行われたシャルル=レイ・フィリップの葬儀で出会って以来、頻繁に書簡を交わし、たびたび一緒に旅に出かけ、また時にはファルグがラルボーのヴィシーの自宅に長逗留する、といった親友同士であった。そしてラルボーが『アレン』の執筆に取り掛かる数年前から、両者はともに『コメルス』の共同編集責任者として発行準備に取り組んでいた。ところが1924年の夏に『コメルス』創刊号が発行された時、すでに二人の交流は途絶えていた。そこで本節では、この仲違いの後の作品である『アレン』に、ラルボーがファルグとの思い出を残していることについて検討する³²⁹。

『コメルス』の創刊は、出資者となったバシアーノ大公妃がヴェルサイユに持っていた別荘、Villa Romaine（ローマ荘）で開いた、芸術家への援助を目的として開いたサロンに、ラルボーとファルグ、ポール・ヴァレリーに加え、当時パリのオデオン通りにあった書店 La Maison des Amis des Livres（「本の友の家」）の店主 Adrienne Monnier（アドリエヌ・モニエ、1892-1955）も参加していたことが契機となった。バシアーノ大公夫人はこのサロンだけでなく、二週間ごとにパリのレストランで食事会を開いて作家や詩人たちを招いており、両方の会合に参加していたラルボー、ヴァレリー、ファルグ、モニエとともに雑誌を創刊する下地をつくった。『コメルス』は季刊誌として1924年から1932年まで発行され、ラルボーはヴァレリーやファルグとともに編集責任者を、またモニエが初期の管理担当を務めた。

ラルボーは『コメルス』創刊直後の1924年10月26日付の書簡で、バシアーノ大公妃に、『コメルス』へ向けた熱意を箇条書きの形式で次のように伝えている。

私が熱意をもってこの雑誌の構想に加わった頃、私の動機は次のようなものでした。

³²⁸ « En tout cas, l'analyse qu'ils donnèrent d'Allen était exacte, et leurs jugements me parurent justes. », « Note XV. Réception de l'ouvrage », *ibid.*, p. 769.

³²⁹ 『コメルス』をめぐるファルグとその他の仲間たちとの仲違いについては、序論で紹介した Ève Rabaté の博士論文に詳しい。Voir Ève Rabaté, *La Revue Commerce : l'esprit « classique moderne » (1924-1932)*, *op. cit.*, pp. 95-105.

あなたと大公が私に対して示してくださったすべてのご厚意に、私にできる限りの手段でお応えし、私の友情を証し、あなたのそれにふさわしいものにする事。

私の名前がポール・ヴァレリーの名前のそばに並べられているのを見ること——私が誇りに思う虚栄です。

私たちの最良の詩人のうちの二人と考える、レオン=ポール・ファルグとサンレジエ・レジエにもっと多くのものを書く機会を与えること。

そして最後に、あなたとともに他のどんな雑誌とも似ていない、すなわちそのタイトルにも関わらず、商業化されない雑誌を作ること³³⁰。

このようにラルポーは、寡作なファルグが作品を発表する機会を増やせるよう取り計らっているのだが、この頃すでにラルポーのファルグとの友情が失われていた。ラルポーは日記や書簡などにその詳細を残してはいないが、その原因には次の二つの理由が考えられる。一つは、ラルポーからファルグへの信頼が揺らいだことを原因とするものである。それには、『コメルス』の運営を通して、以前からのファルグの放漫な言動にラルポーが辟易したとの説と、1922年頃からラルポーは、結婚はしなかったものの生涯の伴侶となったイタリア人女性 Maria Nebbia (マリア・ネッビア、1881-1965) と出会い、それ以降は友人たちと過ごす時間が少なくなっていたようであるが³³¹、そのラルポーの留守中にファルグがマリア・ネッビアに言い寄ったとの説がある³³²。

もう一つは、ラルポーがマルセル・レイに書簡で伝えた、アドリエヌ・モニエの企てを理由とするものである。ラルポーは、創刊号発行時である1924年9月13日付のマルセル・レイ宛ての書簡において、『コメルス』の創刊準備の段階でモニエは怠惰なファルグと

³³⁰ Cf. « Lorsque je suis entré, avec enthousiasme, dans l'idée de cette revue, mes motifs étaient les suivants : / répondre dans la mesure de mes moyens à toutes les bontés que vous et le Prince avez eues pour moi, vous prouver mon affection et mériter la vôtre ; / voir mon nom figurer près de celui de Paul Valéry, — vanité dont je suis fier ; / donner à L.-P. Fargue et à Saintlèger Léger, que je considère comme deux de nos meilleurs poètes, l'occasion de produire davantage / et enfin, fonder avec vous une revue qui ne ressemblerait à aucune autre, c'est-à-dire qui, en dépit de son titre, ne se *commercialiserait* pas. », la lettre de Valery Larbaud à La Princesse de Bassiano du 26 Octobre 1924, lettre 157, in *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach, 1919-1933*, correspondance établie et annotée par Maurice Saillet, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 1991, p. 202. (イタリック強調は原典)

³³¹ Cf. Béatrice Mousli, *Valery Larbaud, op. cit.*, p. 352.

³³² 椎名正博「サロンの延長としての文芸誌—Commerce 創刊号について—」、日本大学文学部人文科学研究所、『研究紀要』第62号、2001年、166頁を参照した。

絶縁し、それがもとでモニエが『コメルス』の管理者を辞したため、二号目以降は別の管理者を探す必要があったと説明している³³³。さらにその4年後、ラルボーは1928年8月のレイへの書簡で、ラルボーとファルグの不仲の原因が、モニエによる二人の信頼関係を壊すような言動にあると伝えている³³⁴。書簡の注釈は、それがラルボーの被害妄想によるものだとしているが³³⁵、ラルボーによれば、モニエからの誹謗中傷や噂話によって親友同士の信頼関係が損なわれたようである。この書簡に対するレイからの返信は見つからず、ラルボーの主張を客観視する材料に欠けている。だがレイが返信に書かれていたと思われる、マルセル・レイからの「A. [モニエ] とその友人たちの力を過大評価しないように³³⁶」との助言にラルボーは意志を固め、以後モニエとの交流は事務的なものになってゆく。

ファルグとの仲違いの原因がモニエにあることについては、ラルボーがロベール・トゥルノーに宛てた1929年11月3日付の書簡も参考になろう。当時シャルル＝ルイ・フィリップに関する博士論文を準備していたトゥルノーに、ラルボーはそれまでにもたびたび助言をしていた。ラルボーは、同年11月3日付の書簡でトゥルノーが『新フランス評論』に掲載した『アレン』の書評³³⁷への礼を述べた後に研究の進み具合を尋ね³³⁸、トゥルノーはその返信においてファルグの住所をラルボーに問い合わせていた³³⁹。その質問に対してラルボーは、以下に引用するように、ファルグとの個人的な問題に触れながら答えている。

[……] フランシス・ジュルダンと L. P. ファルグがあなたに有益な示唆を与えてくれることでしょう。[……] L. P. ファルグと私は〔第一次世界大戦の〕戦後、絶えず友人関係を保っていました。しかし第三者たちが引き起こしたいくつかの誤解によって、私たちにとっての友情のコーヒーは冷めました。ブラジルのことわざによれば、

³³³ Cf. la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 13 septembre 1924, lettre 293, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. III, 1921-1937, *op. cit.*, pp. 71-74.

³³⁴ Cf. la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray [août 1928], lettre 334, *ibid.*, pp. 121-124. この書簡の中でラルボーはモニエを「A.」と呼んでいる。

³³⁵ Cf. *ibid.*, p. 323, lettre 334, note 1.

³³⁶ Cf. « Mais « Don't overrate the importance of A. [= Adrienne Monnier] et A's friends », m'a confirmé dans mon opinion. », la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 20 octobre 1928, lettre 335, *ibid.*, p. 125.

³³⁷ Robert Tournaud, « Allen, par Valery Larbaud (Édition de la N. R. F.) », in *NRF*, n° 193, *op. cit.*, pp. 555-558.

³³⁸ Cf. « Je serais heureux d'avoir de vos nouvelles : santé et travail ; et de savoir où en est votre Charles-Louis Philippe. », la lettre de Valery Larbaud à Robert Tournaud du 3 novembre 1929, in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, *op. cit.*, p. 212. (イタリック強調は原典)

³³⁹ Cf. « je voudrais vous demander un service : si vous connaissez l'adresse de Fargue, vous seriez très aimable de me la communiquer. Je tiens essentiellement à le voir, avant le travail ultime de rédaction de mon Charles-Louis Philippe. », la lettre de Robert Tournaud à Valery Larbaud du 9 décembre 1929, citée par Maurice Sarazin, « Un correspondant de Valery Larbaud : L'universitaire et écrivain Robert Tournaud (Montluçon 1903-Cestas 1938) », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 200, 2007, pp. 56-57. (書き出しの「j」の小文字表記およびイタリック強調は原典)

もう何の価値もありません。温めなおしたとしても。そんな状態になってすでに5年、私たちは疎遠になったと言えるでしょう。とはいえ彼が最高潮に賞讃されている詩人であると私が思っていることに変わりはないので、あなたにお伝えしようとはしなかったのです。それに、やっと彼が正当に評価されたと知って、私は嬉しくなりました。でも私はもう彼のプライベートな連絡先を知りません。どうやら引っ越したそうで、郊外に住んでいたようです。いずれにせよ「コメルス」(サン=ジェルマン大通り 128番地)宛ての手紙で連絡がつくでしょう。けれども私はあなたに彼に会うことをあえてお勧めします。彼はとても筆不精なのです。[……] ³⁴⁰

ブラジルで使われているポルトガル語のことわざに、「繕われた友は、沸かし直したコーヒーである」という句がある³⁴¹。類似することわざは「覆水盆に返らず」であろうか。このようにラルボーは、ファルグとの仲違いから5年を経た後に、冷めてしまった友情が再び温めなおされることはなく、友人関係に修復の可能性がないことを明かしている。なお、トゥルノーへの書簡からは「第三者たち」に関する情報を得られないが、ラルボーとジャン・ポーランの書簡集の注釈は、その一人がアドリエヌ・モニエであるとしている³⁴²。

『コメルス』の創刊から発生した問題に直面したラルボーは、『コメルス』の運営、すなわち出資者であるバシアーノ大公妃を補佐する役目に徹することを選び、ファルグから離れ、またモニエとも距離を置いた。ラルボーとモニエの付き合いは、『コメルス』の発行や『ユリシーズ』の翻訳出版などの業務を介して、それぞれの終了時まで続いたが、ラルボーとファルグの交流は1924年末の書簡を最後に、生涯再開されることはなかった。Saint-John Perse (サン=ジョン・ペルス、1887-1975)の詩集 *Anabase* (『遠征』、1924)の第

³⁴⁰ Cf. « [...] Je pense en effet que Francis Jourdain et L.P. Fargue pourront vous donner des indications utiles. [...] Avec L. P. Fargue j'avais gardé des relations assez suivies après la guerre ; mais quelques malentendus, créés par des tiers, ont refroidi pour nous le café de l'amitié qui, selon un proverbe brésilien, ne vaut rien, réchauffé. Voilà déjà cinq ans de cela, de sorte nous pouvons dire que nous nous sommes perdus de vue. Je n'ai pas besoin de vous dire que cela ne m'empêche pas d'avoir pour le poète qu'il est la plus vive admiration ; et je me suis réjoui de voir qu'enfin on lui rendait justice. Mais je ne connais plus son adresse privée ; on m'a dit qu'il en avait changé, et il habitait la banlieue. En tout cas une lettre adressée à « Commerce » (128 Bd St Germain) l'atteindrait. Mais je me permets de vous conseiller de le voir. Je sais qu'il est très paresseux pour écrire les lettres. [...] », la lettre de Valery Larbaud à Robert Tournaud du 10 décembre 1929, citée par Maurice Sarazin, « Un correspondant de Valery Larbaud : L'universitaire et écrivain Robert Tournaud (Montluçon 1903-Cestas 1938) », *ibid.*, p. 57. (下線強調は引用者) フランシス・ジュールダン(1876-1958)は画家、装飾家(1876-1958)で、後にパリ東方のSeine-et-Marne(セーヌ=エ=マルヌ)でフィリップの友人たちの再会の機会を設けた。

³⁴¹ ポルトガル語では « Amigo remendado, café requentado. » と表記する。富野幹雄、クララ・M・マルヤマ『ポルトガル語ことわざ用法辞典』、大学書林、1990年、100頁を参照した。

³⁴² Cf. *Valery Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957, op. cit.*, pp. 107-108, note 2.

1 歌における「わが魂のこの清らかな交流³⁴³」との詩句から着想を得た『コメルス』という「交流」や「交際」を意味する雑誌を舞台に、ラルボーが親友ファルグを世に送り出すために尽力し、その一環として彼を共同編集者に加え、作品を発表する機会を与えたことで、ファルグは詩人として高い評価を得ることができた。だがラルボーの骨折りによって創刊に至った『コメルス』によって、ラルボーが師と仰ぐシャルル=レイ・フィリップの葬儀での出会いから培ってきたファルグとの15年間の「交流」は、1924年をもって幕を閉じた。

とはいえ、二人の友情が途絶えた後も、ラルボーはファルグの詩人としての才能を敬愛していた。ファルグは1922年に、「本の友の家」書店に集う作家仲間たちにファルグが名付けた「Potassons」(「ポタッソン」)³⁴⁴に関する記事を、この書店が発行する雑誌 *Intentions* に掲載した³⁴⁵。その頃、モニエの店には当時の代表的な作家や芸術家たちが足しげく通って、それぞれに交流しており、ファルグはそこ集う作家仲間たちを「Potassons」(「ポタッソン」)と名付け、仲間内でこの言葉を使っていた。「ポタッソン」とはもともと、ファルグが飼っていた「pot」(「壺」)のように四角く太った飼い猫の名前である。ラルボーとファルグが1911年2月28日から3月2日にかけて、早逝した詩人 Henry Jean-Marie Levet(アンリ・ジャン=マリ・ルヴェ、1874-1906)の詩集³⁴⁶を出版するため、両親の許可を得にリ

³⁴³ Cf. « ...Or je hantais la ville de vos songes et j'arrêtais sur les marchés déserts ce pur commerce de mon âme, parmi vous / invisible et fréquente ainsi qu'un feu d'épines en plein vent. », « Anabase » (le chant I), in Saint-John Perse, *Œuvre poétique*, t. 1, Paris, Gallimard, 1953, pp. 150-151. (下線強調は引用者) 多田智満子の訳によれば、この部分は「さあわれは汝らの夢の町をさまよいるき、人気〔ひとけ〕なき市場で、わが魂のこの清き交易をとりきめるを常とした、風をうけた荊棘の火の如く人目にふれず、ひたむきに」となる。『サン=ジョン・ペルス詩集』、多田智満子訳、思潮社、1975年、142頁を参照した。「commerce」の意味は「商業」や「商売」など、売買や取引に関わるものが筆頭に挙げられるが、ラルボーたちがこの雑誌に求めたものは文学を介して結ばれる親交であった。³⁴⁴ モニエは著書 *Rue de l'Odéon* (『オデオン通り』、1960)において、「ポタッソン」を次のように定義している。「ポタッソン——人類の一種で、その優しさと人生への感覚によって他と区別される。ポタッソンにとって快樂はプラスの価値を持つ。彼らはただちに時流に通じ、人がよく、しかも大胆である。ポタッソンが相寄り相集う時には、すべてがうまくゆき、何事も丸く収まり、何の努力もせずに楽しむことができ、世界は明るく、その端から端まで、初めから終わりまで、始源の巨獣から——人はその場に居合わせて、それを見た——すべてが相変わらずの食欲と上機嫌のうちに再び始められる終わりの終わりまで、人は世界を横切ることになる。」(« Potasson. — Variété de l'espèce humaine se distinguant par la gentillesse et le sens de la vie. Pour les potassons, le plaisir est un positif : ils sont tout de suite à la page, ils ont de la bonhomie et du cran. Quand les potassons s'assemblent, tout va bien, tout peut s'arranger, on s'amuse sans effort, le monde est clair, on le traverse de bout en bout, du commencement à la fin, depuis les grosses bêtes des origines — on les a vues, on y était — jusqu'à la fin des fins où tout recommence, toujours avec bon appétit et bonne humeur. », Adrienne Monnier, *Rue de l'Odéon*, Paris, Albin Michel, 1960, pp. 47-48.)

³⁴⁵ Léon-Paul Fargue, « Les Potassons », in *Intentions*, n° 9, « numéro spécial consacré à Valéry Larbaud », novembre 1922, pp. 22-24.

³⁴⁶ Henry Jean-Marie Levet, *Poèmes*, portrait par Müller. Précédés d'une conversation de

ヨン南西の町 Montbrison (モンブリゾン) の実家を訪問する自動車旅行をした時、10年後に出版したルヴェの『詩集』に収録されることになる旅の途中の二人の「対話」³⁴⁷の中で、ファルグは当時 Polivard (ポリヴァール) と Potasson (ポタッソン) と名付けた猫を飼っていると話していた。それだけに「ポタッソン」は彼らにとってなじみの深い符牒であった。この旅もまたヴィシーを拠点にしたもので、ラルポーは、『アレン』執筆の契機となった「カジーの日記」の « Le Forez » (「フォレ地方」) の項に、旅の詳細を残している³⁴⁸。

この「ポタッソン」の記事に印刷されたファルグの名前の下に、ラルポーは次のような書き込みをしていた。

真の偉大なる詩人。
お騒がせな人生だ。
彼とは仲違いしたが、
彼を尊敬し評価している³⁴⁹。

この書き込みについて、『ヴァレリー・ラルポー友の会会報』第8号(1971年)を見ると、ヴィシー市立図書館が所蔵する *Intentions* 1922年11月号では、ラルポーが自筆の書き込みの二行目と三行目を、以下のように塗りつぶしていることがわかる³⁵⁰。

真の偉大なる詩人。
~~お騒がせな人生だ。~~
~~彼とは仲違いしたが、~~
彼を尊敬し評価している。

この書き込みにはさらに続きが4行あるが、いずれも判読できない。しかし、「彼とは仲違いしたが」の部分から、ラルポーが書き込みの一部を塗りつぶしたのは1924年以降であると思われる。

ラルポーからファルグへの友情が保たれていたことについて、テオフィル・アラジュア

Léon-Paul Fargue et Valéry Larbaud, Paris, La Maison des Amis des Livres, 1921.

³⁴⁷ 現在 « Conversation de Léon-Paul Fargue et Valéry Larbaud sur Henry J.-M. Levet », *OC*, t. 7, pp. 383-405 に収録されている。

³⁴⁸ « Journal de Quasie », in Valéry Larbaud, *Journal*, *op. cit.*, pp. 76-81.

³⁴⁹ « Vrai et grand poète. / Dans la vie trop bruyant. / Brouillé avec lui, mais / je l'admire et l'estime. », *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, t. 2, « Index », pp. 34-35.

³⁵⁰ Cf. Jean Charpentier, « Léon-Paul Fargue-Valéry Larbaud, Correspondance 1910-1946 (compte rendu et 12 lettres inédites) », in *CVL*, n° 8, *op. cit.*, p. 34. なお同じ箇所が *CVL*, n° 6, 1970, p. 38 にも掲載されているが、出典 (*Intentions*) や所蔵場所 (ヴィシー市立図書館) が明記されていない。

ニーヌは、ラルボーが1927年に雑誌 *Les Feuilles Libres* のファルグを讃える特別号の「詩人と友人たち」の章に、ファルグの語録を断章形式で取り上げた « Farguiana »³⁵¹ を寄稿し、詩人の個性的な言動を紹介しながら彼を讃えていたこと、そして同じ年にラルボーが発表した『アレン』にファルグの特徴を持つ詩人が仲間の一人として登場することを挙げている³⁵²。では、ラルボーの内に「詩人ファルグ」への尊敬が残っていた証は、『アレン』にどのように映し出されているのだろうか。

『アレン』に見られるファルグをモデルとする「詩人」に関するエピソードは、いずれもラルボーとファルグの親交において生じたものであった。本研究の第2部第1章第2節で取り上げたように、「本編」第6章において「詩人」が、「つまりフランスの真ん中に、馬飾りを着せた馬の上に、この巨人のようなバヤールが立っている、ってことだね」と、フランスの有名な軍人の名を挙げたのも、ラルボーとの自動車旅行の間での発言のようであった。そこで、ラルボーがファルグとのかつての友情を、ファルグとの旅と言葉の思い出を介して『アレン』に示したことを、次の三点のエピソードによって確認しよう。

一点目は、「本編」第7章に現れる、ブルボネ地方の町サン＝ムヌーの教会と、そこある石棺の中に頭を入れると狂気が治るとされる「脱狂気」を表す言葉 « débredinoire »³⁵³の使用である。フランス地方語辞典 *Dictionnaire des régionalismes de France* によれば、この言葉の初出は、ラルボーが『アレン』を執筆する直前の1924年である³⁵⁴。『アレン』では、「頭がおかしいこと」を指す言葉（俗語）をパリでは « loufoquerie »^{ルーフォクリ} と言うところを、ブルボネ地方では « bredinerie »^{ブルディヌリ} と言い、その狂気を取り除くことには、分離を表す接頭辞 « dé »^{デブルディノワール} を付した « débredinoire »（脱狂気）を用いると説明されている³⁵⁵。使用例と

³⁵¹ *Les Feuilles Libres*, n° 45-46, juin 1927, pp. 27-32. Cf. *OC*, t. 7, *op. cit.*, p. 428, « Notes ». 現在この批評は同じタイトルで *OC*, t. 7, pp. 359-365 に収録されている。ジョルジュ・ジャン＝オーブリへの1933年11月22日付の書簡によれば、ラルボーはこの原稿を雑誌『ラ・ファンジュ』に寄稿するため、「Portrait de Fargue」のタイトルで1914年に準備していたが不採用となり、1927年に改題、加筆した経緯がある。Cf. la lettre de Valéry Larbaud à Georges Jean-Aubry du 22 novembre 1933, lettre 107 in *Correspondance 1920-1935 : Valéry Larbaud, G. Jean-Aubry*, introduction et notes de Frida Weissman, Paris, Gallimard, 1971, pp. 146-149 et p. 244, note 3.

³⁵² Cf. « Introduction », in Théophile Alajouanine, *Valéry Larbaud sous divers visages*, *op. cit.*, pp. 24-25.

³⁵³ *Allen, Pléiade*, p. 751.

³⁵⁴ Cf. *Dictionnaire des régionalismes de France : géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*, Rézeau (éd.), Bruxelles, Duculot, 2001, p. 346a, s.v. *débrediner*. また « débredinoire » がブルボネ地方の言葉であることについては、次の論考を参照されたい。Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, Allen de Valéry Larbaud et des mots régionaux », in *FRACAS*, numéro 1, *op. cit.*, p. 6 et note 30.

³⁵⁵ 「<作者>実は、この穴に頭を入れると、頭痛が治るそうですよ。それから、狂気や奇行、パリでは『loufoquerie』[ルーフォクリ：頭がおかしいこと]、ここでは『bredinerie』[ブルディヌリ]と呼ばれるものが治ると言うのは……[無理がある] (« [L'Auteur :] En réalité, c'est des maux de tête qu'on guérit, paraît-il, quand on met la tête dans cette

して、登場人物たちの会話を二つ挙げておこう。一つは、第7章の冒頭で一行がブルボネ地方への到着を機に、「編集者」が突然ブルボン公シャルル三世の復権を唱えた時の、登場人物の一人の返答である。ここから彼らが前日にサン=ムヌーを訪れたことがわかる。

〈一〉でも昨日、サン=ムヌーで、彼〔編集者〕も脱^{デブルディノワール}狂気と呼ばれている石棺の中に頭を入れたよ……³⁵⁶。

もう一つは、同じく第7章において、故郷に出版機能がないことを改善するために発した「編集者」の言葉に対する「詩人」の次の返答である。

〈編集者〉私はここに身を落ち着きたい、ここに自分の出版社を移転させたいと本当に考えていました。

〈詩人〉なんてこったい！ 急げ、脱^{デブルディノワール}狂気の石棺へ！³⁵⁷

このように登場人物たちは、「編集者」の発言を奇抜なもの、狂気を帯びたような発言であるととらえ、その治療にサン=ムヌーの教会での「脱狂気」の儀式が必要だと述べることで、「脱狂気」の使い方を実践しながら、この言葉の意味を説明している。

『アレン』において「脱狂気」の対象は「編集者」であったが、作品に取り掛かる前にラルボーとファルグもサン=ムヌーの教会を訪れていた。テオフィル・アラジュアニーヌによれば、ラルボーとファルグは1910年から1924年にかけて、自家用車「カジー」に乗って度々ブルボネ地方を散策していた³⁵⁸。彼らの訪問地は、モンリュソン、スヴィニー、ムーラン、ブルボン=ラルシャンボー、イグランド、セリイと、ラルボーが『アレン』に挙げた地名にほぼ重なっており、時期が不明ではあるが、二人がサン=ムヌーの教会に立ち寄ったのも、こうした散策の途中だったようである。だがアラジュアニーヌによれば、ファルグには「脱狂気」の儀式が効かなかったようである³⁵⁹。すなわちこの説明から、サン=ムヌーの教会でファルグの非常識な行為をやめさせるために石棺に頭を入れて「脱狂気」を祈ったにもかかわらず、ファルグの天衣無縫な行いが治まらなかった思い出を、ラルボーが『アレン』に残したと考えられる。

ouverture ; et de là à dire qu'on guérit aussi de la folie, de la singularité, de ce qui s'appelle à Paris loufoquerie et ici bredinerie... », *Allen, Pléiade*, p. 752.)

³⁵⁶ « [— :] Et pourtant hier, à Saint-Menoux, lui [L'Éditeur] aussi a mis la tête dans la Débredinoire... », *ibid.*, p. 751.

³⁵⁷ « [L'Éditeur :] — J'ai vraiment songé à m'installer ici, à transporter ici ma maison d'édition. / [Le Poète :] — Ça, par exemple ! Vite, à la Débredinoire ! », *ibid.*, p. 756.

³⁵⁸ Cf. Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, pp. 26-27.

³⁵⁹ Cf. « Saint-Menoux (où se renouvelle peut-être la cérémonie de la Débredinoire, sans efficacité sur la « loufoquerie » de Léon-Paul) », *ibid.*, p. 27.

二点目は、「本編」第7章での「編集者」の発言に見られる、ファルグの詩集『タンクレード』出版時のエピソードである。それはブルボネ地方に到着した「編集者」が故郷に出版機能を備えたいと願う発言に現れる。

＜編集者＞フランスの書誌は出版地の項目について、あまりにも単調なのですよ！私はちょっとした多様性や独創性を取り入れたかったのです。一度だけ、あるとても若い人の限定版の小冊子に、私の公国の町の名前の一つを表紙に印刷させたことがありましてね。私はそれが極度の前衛詩人、超前衛派で、何でも思い切ってやってみよう、すべてを壊そうと決めた作者を喜ばせるだろうと考えていたのです。ところが、彼は異議を唱えたのです。「僕が一地方のアマチュアにみなされたいとでもお思いですか！」ってね。それで、「パリ」と大きな活字で書いた新しい表紙を印刷しなければならなかったのです。それにはがっかりしましたよ……。[……] ³⁶⁰

「編集者」のこの発言は、ラルボーが1911年にレオン＝ポール・ファルグに内密におこなったとされる、ファルグの詩集 *Tancrede* (『タンクレード』) 出版の経緯を想起させる。この私家版の詩集は、ファルグが1895年にドイツの雑誌 *Pan* に発表した同名の詩篇を、ラルボーが費用を負担することで200部のみ印刷された³⁶¹。そして、その詩集の表紙には、ファルグの名前、表題、出版年の他に「パリ」とだけ印刷されており、二番目の本扉に « *Achevé d'imprimer / le vingt Février mil neuf cent onze / Par A. RAYMOND / à SAINT-POURÇAN-SUR-SIOULE (Allier)* » と、ラルボーのヴァルボワの邸宅の近くの町、サン＝プルサン＝シュル＝シウールが印刷地として印字されているからである³⁶²。実際ファルグはラルボーのこの計らいに感謝していたようであるが³⁶³、これもファルグとの友情の記憶が『アレン』の題材になった例として挙げられよう。

三点目は、ラルボーが「著者解題」第18章で引用したシャンテルの旅行記 « *Chantelle*

³⁶⁰ « [L'Éditeur :] — La bibliographie française est d'une telle monotonie à l'article lieu de *publication* ! J'aurais voulu introduire un peu de variété, de fantaisie. Une fois même pour une plaquette à tirage restreint, d'un vrai jeune, j'ai fait imprimer sur la couverture le nom d'une des villes de mon Duché. Je pensais que cela plairait à l'auteur, poète d'extrême avant-garde, Plusultraïste, décidé à tout oser, à tout casser. Eh bien, il a protesté : « Pensez-vous que je veuille passer pour un amateur provincial ! » Et il a fallu tirer de nouvelles couvertures avec « Paris » en gros caractères. Ça m'a découragé... [...] », *Allen, Pléiade*, p. 756. (« *publication* » のイタリック強調は原典)

³⁶¹ Cf. Th. Alajouanine, « Un complot littéraire Valéry Larbaud et la publication de *TANCREDE* », in *CVL*, n° 4, 1969, pp. 23-29. この論考は、ほぼ同じ内容が、ラルボーとファルグの書簡集の補遺に収録されている。Voir « Appendice IV, Un « complot littéraire » de Valéry Larbaud : la publication de *Tancrede* de Léon-Paul Fargue », in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valéry Larbaud, op. cit.*, pp. 267-271.

³⁶² ヴィシー市立図書館所蔵 (Cote : C 65)

³⁶³ 詳細は「別冊」93-94頁の注266を参照されたい。

(Bourbonnais)»(「シャンテル(ブルボネ地方)」)に関するエピソードである。というのも、このシャンテル訪問に、ファルグと思しき人物が同行していたと考えられるからである。ラルボーは「シャンテル(ブルボネ地方)」を1926年9月に執筆し、翌1927年に雑誌*La Revue du Centre* (『サントル通信』)に発表した³⁶⁴。それはもちろんファルグとの絶交の後である。しかし、「著者解題」第18章(プレイヤード版770-771頁)における、ラルボーがこの記事に大きな変更を加えつつ引用した部分を見ると、ラルボーがこの紀行文を書いた9月某日に、同行者の「B」とシャンテルを訪ねたかのような印象を受ける。そこで原文と比較すると、「B」とのシャンテル訪問と、記事を書いた日が異なっているようである。まず、「著者解題」18章の最終部分では、次のように記されている。ラルボーがギユメでくくって引用した最後の文章を見てみよう。

「だが今日、9月のすでに褪せた空の下では、峡谷は冬の様相、つまり冬の深い悲しみを覆う落ち葉を感じさせていた。それはまさにシャルル三世の瞑想に思いを馳せるべき日であり時であった。——腹心たちとともにエルマンまで、続いてポンペランだけを連れて中央山地の谷での旅程を準備しながら——足下にこの谷底を見て、正面の川向うに視界をさえぎる巨大な隆起を見つめていたシャルル三世の」³⁶⁵。

この文章から、ラルボーがシャンテルを訪れた時期が9月であること、「シャルル三世の瞑想に思いを馳せるべき日」がブルボン公シャルル三世のイタリアへの逃亡の時期を指すことを推測できるだろう。ラルボーがこの第18章で引用した他の部分と考え合わせると、ここで引用した部分は、ラルボーが某年9月某日に「B」とともにシャンテルを訪れた際の心象を記しているように見える。

次に、原文である「シャンテル(ブルボネ地方)」の記述から、ラルボーが第18章で省略した部分を波線で強調して見てみよう。

私たち、B…と私は、9月の前半、シャルル三世の逃亡の記念日の時期に、そこに到着した。そして彼が腹心たちとともにエルマンまで、続いてポンペランだけを連れて中

³⁶⁴ 『サントル通信』、1927年5-6月号、85-87頁に掲載。サントルとはサントル地域圏を指す。全文は「別冊」の163-164頁に再録した木版画を除く記事を参照されたい。

³⁶⁵ « « Mais sous le ciel déjà pâli de septembre, aujourd’hui, le ravin laissait deviner son aspect de l’hiver, la chute des feuillages qui voilent sa grande désolation de l’hiver. C’était bien le jour et le moment pour songer à la méditation de Chartes III regardant à ses pieds cette profondeur, — tandis qu’il préparait son itinéraire dans les vallées du Massif central, avec ses fidèles jusqu’à Herment, et puis seul avec Pompéran, —et, en face de lui, l’énorme levée de terre de l’autre bord, sans horizon. » », « Note XVIII. Cantilia », *Allen, Pléiade*, p. 771. (下線強調は引用者) エルマンはオーヴェルニュ地域圏、ピュイ=ド=ドーム県の都市、ポンペランはオーヴェルニュ地方の貴族。

中央山地の谷での旅程を考えている間に見たであろうように、城から、私たちは峡谷を見た³⁶⁶。

先に見た「著者解題」第18章からの引用と比較すると、下線()で強調した部分が原文の最後の三行(「別冊」では164頁の« C'était bien le jour »以降)に書かれていることに對し、「——腹心たちとともにエルマンまで、続いてポンペランだけを連れて中央山地の谷での旅程を準備しながら——」は、原文の二段落目(「別冊」では163頁の« Nous y sommes arrivés, B...et moi [...] »に始まる段落)、に書かれている。このように、「著者解題」第18章における引用と「シャンテル(ブルボネ地方)」の記事原文には相違が見られ、第18章では原文の冒頭部分と最終部分を一つの文にまとめていることがわかる。

次に、ラルボーと« B »がシャンテルを訪問した「9月の前半、シャルル三世の逃亡の記念日の時期」を検討してみよう。『旧きブルボネ』によれば、ブルボン公シャルル三世がシャンテルの城からイタリアへ向けて逃走したのは、1523年9月9日の夜から翌10日にかけてのことである³⁶⁷。また、ラルボーが「著者解題」第14章「議論された命題」に引用した、ムーランにおける異なる年の同じ日に起こった出来事を記した暦、*Éphémérides moulinoises* の記述を見ると、「『1523年9月11日、ムーラン城の広大な中庭において、大元帥の裏切りを理由に、サヴォワの私生児とシャバンヌ元帥が「ブルボネ地方は没収され、王の手中に収められた」と宣言した。』³⁶⁸と書かれている。ここでの「大元帥の裏切り」は、シャルル三世がシャンテルの城からイタリアへと逃亡したことを指す。したがって、ラルボーたちがシャンテルを訪れた時期である「9月前半」と一致する。

では同行者« B »がファルグであると仮定した場合、ラルボーたちはいつシャンテルを訪問したのだろうか。ラルボーが日記や書簡などにシャンテル訪問時の様子を残していな

³⁶⁶ « Nous y sommes arrivés, B... et moi, dans la première quinzaine de Septembre, vers le moment de l'anniversaire de la fuite de Charles III et nous avons vu le ravin tel qu'il l'a pu voir, du Château, pendant qu'il songeait à son itinéraire dans les vallées du Massif Central, avec ses fidèles jusqu'à Herment et puis seul avec Pompéran. », Valéry Larbaud, « Chantelle (Bourbonnais) », in *La Revue du Centre*, mai-juin 1927, p. 85. (波線による強調は引用者、「Septembre」の« S »の大文字表記は原典)

³⁶⁷ Cf. « Ce fut dans la nuit du 9 au 10 septembre, que Bourbon, accompagné de tous ses officiers et serviteurs qui s'était avec lui à Chantelle, sortit de château et prit la route d'Auvergne ; il avait annoncé d'abord qu'il voulait se retirer à Carlet, dans la haute Auvergne, château beaucoup plus facile à défendre, en raison de sa situation, que celui qu'il quittait ; mais il est probable que son véritable projet était de gagner les Pyrénées ; car une fois jeté dans le parti violent qu'il venait d'adopter, il n'avait plus de refuge à espérer qu'auprès de l'empereur. », « Charles III, 9^e duc de Bourbon, connétable de France », in Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, pp. 532-533.

³⁶⁸ « « Le 11 septembre 1523, dans la grande cour du château de Moulins, le bâtard de Savoie et le maréchal de Chabannes déclarent, en raison de la trahison du Connétable, « le Bourbonnais saisi et mis sous la main du roi ». », « Note XIV. La thèse débattue », Allen, *Pléiade*, p. 768 ; Marcellin Crépin-Leblond et Claude Renaud, *Éphémérides moulinoises*, Moulins, Crépin-Leblond, 1926, p. 305.

いため手がかりに乏しいが、テオフィル・アラジュアニーヌによれば、それは1911年の出来事のようなものである³⁶⁹。しかし、毎年8月から9月にかけて実家で過ごすことの多かったラルボーが、シャルル三世の逃亡の時期である9月前半をファルグと過ごしていたのは、アラジュアニーヌが示した1911年の他に、その翌年の1912年が考えられる。ラルボーは「シャンテル（ブルボネ地方）」を執筆する直前の1926年にもブルボネ地方の調査旅行をしているが、この時の同行者の有無を明らかにしておらず、また時期も7月であった³⁷⁰。何より1924年以降、ラルボーはファルグとは疎遠になっていた。そこで「著者解題」第18章における次の引用を見ながらさらに検討しよう。

「B...は次のことを私に指摘した。私たちが会おうすべての女性——すなわちブルジョワの女性たち——は、都会と同じように帽子をかぶり、それがむしろシャンテルに田舎の雰囲気、家もまばらな農村の雰囲気を与えるということ。[……] 私たちは居心地が悪く、自分たちが残念なことによそ者で、お客さんで、派手で、しかも品がないと感じた。私たちもシャンテルの住民たちのように、喪服を着ればよかった。質素な喪服か陰気な半喪服だけが、何も通らない街道に絶望的にしがみついている大きな村の陰気さに似合うだろう。空の孤独と畑の静けさの間で押しつぶされた町外れとか、—— [シャルル＝ルイ・] フィリップは、『ペルドリ爺さん』の中で、ブルボネ地方の小さな町の周辺の打ち捨てられた状態や、手の施しようのない貧しさを何と巧みに描いたことか！——あるいはムーランの画家が描いた背景の青の中に堂々とそびえ立つシャンテルの公の城、いやむしろ城の亡霊とかに似合うだろう……³⁷¹」

³⁶⁹ Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages*, op. cit., pp. 28-29. 内容は下記の注372を参照されたい。

³⁷⁰ *Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926*, op. cit., p. 59.

³⁷¹ « B... me fait remarquer que toutes les femmes que nous rencontrons, — les bourgeoises, — portent chapeau, comme dans une ville, et que c'est surtout cela qui donne à Chantelle l'air campagnard, l'air d'une bourgade rurale... [...] Nous nous sentons dépaysés, fâcheusement étrangers, touristes, et voyants, et vulgaires. Nous devrions, comme les habitants de Chantelle, être en deuil. Un deuil pauvre ou un demi-deuil maussade seraient seuls en harmonie avec la tristesse du grand village désespérément accroché à la route où rien ne passe ; avec ses faubourgs écrasés entre la solitude du ciel, et le silence des champs, — comme [Charles-Louis] Philippe, dans *le Père Perdrix*, a bien exprimé l'abandon et l'irréparable pauvreté de ses faubourgs des petites villes bourbonnaises ! — avec le château, ou plutôt le spectre du château ducal de Chantelle qui se dresse triomphalement dans le bleu des fonds du Maître de Moulins... », « Note XVIII. Chantelle », *Allen, Pléiade*, pp. 770-771. (下線強調は引用者)『ペルドリ爺さん』はシャルル＝ルイ・フィリップの1902年の作品で、小さな町に住む貧しい鍛冶屋の老人の生活が加齢によって患った病気がもとで崩壊してゆく様子を描いている。Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes*, 5 tomes, édition présentée et établie par David Roe, Moulins, Éditions Ipomée, 1986, t. II, pp. 236-355 所収。「ムーランの画家」は、16世紀に活躍した匿名の画家。初期フランドル派の画家 Jean Hey (ジャン・エイ、生没年不詳) と同一人物であると考えられているが、詳細は不明である。

テオフィル・アラジュアニーヌは、ラルボーたちが、その当時黒っぽい服装をした人の多かったシャンテルの村に馴染まないような派手な格好をしていたエピソードについて、ラルボーがファルグとともに 1911 年に自家用車「カジー」でシャンテルを訪ねた時に、ファルグは地味な服装をしていたものの、ペルシャの王子のような威厳に満ちた顎鬚を蓄えており、一方、太り気味だったラルボーは、明るい色のゆったりとした服に、立派なパナマ帽をかぶっていたため、黒っぽい服装の多いシャンテルで浮いていたと説明している³⁷²。

彼らがシャンテルで浮いていたことの裏付けとしては、カミーユ・ガニョンによる記述も参考になろう。後に『アレン』の書評を執筆することになるガニョンは、著書において、エミール・ギョーマンが 1904 年に *La Vie d'un simple* (『ある百姓の生涯』) を出版した少し後の時期に、車から降りてきたラルボーとファルグを見かけ、二人のいでたちを目にして驚いた様子を記している³⁷³。ガニョンはこの時、二人がエミール・ギョーマンを訪ねたとも記しているが、時期が不明である。しかしラルボーからマルセル・レイへの 1911 年 9 月 23 日付の書簡を見ると、1911 年の 9 月半ば頃にラルボーがリューマチの発作に見舞わ

³⁷² Cf. « On peut se représenter ce qu'était en 1911 l'arrivée de la grande automobile (un événement mettant alors à leur porte tous les autochtones) sur une place de ces bourgades ; j'en ai un exemple pour le bourg d'Ygrande, où le président Camille Gagnon, alors adolescent (mais qui, plus tard, sera l'auteur au Bulletin de la Société d'émulation du Bourbonnais d'un des premiers articles sur *Allen*, commentaires recueillis par Larbaud dans les Notes ultérieures) fut le témoin de l'intérêt étonné suscité par les deux touristes sortant de « Quasie » : Valery Larbaud dont l'embonpoint se drapait dans des vêtements clairs et qui était coiffé d'un splendide « panama » alors que Léon-Paul Fargue était vêtu de sombre rendu plus sombre encore par une majestueuse barbe de prince persan. Il est assez curieux de rapprocher de ce tableaux des amis explorant la province bourbonnaise d'un passage de « Cantilia » (texte peu connu de Larbaud, mais signalé dans l'annotation par Robert Mallet de l'édition de la Pléiade) où, Larbaud parcourant les rues de Chantelle avec un ami, se trouve gêné, dans ses vêtements clairs d'été « dépaysés... voyants... » au milieu des costumes noirs (de cette époque) des habitants du pays. », Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, pp. 28-29. その数年後、アドリエヌ・モニエが 1916 年 2 月にファルグに初めて出会った時にも、ファルグはドビュッシー風の顎鬚を生やしていた。Cf. Adrienne Monnier, *Rue de l'Odéon, op. cit.*, pp. 133-134.

³⁷³ Cf. « Un peu plus tard, alors que je jouais sur la place avec des camarades nous fûmes surpris de voir tout à coup surgir une haute voiture automobile, du genre limousine qui s'arrêta près de l'hôtel de France. Le chauffeur mit pied à terre en ouvrit la portière. Deux personnages curieux en sortirent. Le premier, vêtu de sombre portait une longue barbe noire, analogue à celle que je découvrais dans les illustrations de mon histoire ancienne sur des visages assyriens. L'autre, dodu, bien en chair, le teint rose et net, coiffé d'un large et avantageux panama, habillé d'un costume veston très clair était en outre chaussé de souliers en toile grisâtre. Ces mises apparaissaient tellement étranges en pareille bourgade qu'elles firent sensation. Les commères, toujours à l'affût du moindre incident, ne tardèrent pas à manifester de porte à porte leur inquiétude en se demandant ce que pouvait signifier la survenance insolite de pareils phénomènes. Mais ceux-ci ne s'attardèrent pas. Ils se contentèrent de jeter un regard circulaire sur notre place et réintégrèrent leur majestueux véhicule qui disparut dans une pétarde. Il s'agissait tout simplement de Valery Larbaud et de son ami le poète Paul Fargue, venus de Vichy à Ygrande pour rendre visite à Émile Guillaumin grâce à la célèbre automobile surnommée « Quasi » et à son chauffeur mis à leur disposition par Madame Larbaud, mère. », Camille Gagnon, *De l'étoile matutine à l'étoile vespérale ; Mémoires*, t. 1, Moulins, Éditions des Cahiers Bourbonnais, 1978, p. 105.

れ一週間ほど動けなかったことから³⁷⁴、「シャンテル（ブルボネ地方）」が 1912 年 9 月の出来事を回想して執筆したものであると考えられる。

また、ラルボーとファルグとの書簡によれば、1912 年の夏、ファルグは 8 月初旬にラルボーの母親にサン=ティヨールのラルボー家での滞在許可を得ていたが³⁷⁵、実際の到着は翌月の 9 月中旬であった³⁷⁶。9 月 23 日にパリへ発つ予定のラルボーは、9 月 7 日付の書簡でファルグに来訪を催促しており、その書簡に対するファルグからの返答は収録されていないが、9 月 12 日付のラルボーからの書簡には、日時は明らかでないものの、ラルボーが最寄の駅にファルグを迎えに行き、また 23 日に一緒にパリへ向かうことが示されている。さらにこの書簡でラルボーは、ムーランやエミール・ギョーマンの住むイグランド、シャルル=ルイ・フィリップの故郷であるセリイへの散策をファルグに提案している。ラルボーの 1912 年の日記は最後の一行を塗りつぶした 8 月 15 日で終わり、それに続く 7 ページ分が、いつ破棄したのか定かではないが切り取られているため、その後の様子は不明である³⁷⁷。このように、決定的な証拠に欠けてはいるが、こうした状況から、二人が 9 月 13 日からラルボーが発発する前日の 22 日までの間に再会し、その間にシャンテルを訪れたと推測できる。

それに加えて、紀行文に現れるラルボーの同行者 «B» がファルグを指す可能性について、ラルボーがファルグに宛てた書簡で、ファルグのことを «Bibisch(e)» あるいはその派生語を愛称に用いて呼んでいたことも参考になろう。彼らが複数の愛称で呼び合っていたことは書簡集の補遺に詳しく³⁷⁸、いくつもの愛称を用いた手紙のやり取りが、気が置けない友人たちの親密な交流の様子を伝えている。中でも 1910 年にファルグが使い始めた «Grossbibish»³⁷⁹には、「Whole bibish」や «Ample Bibish」などさまざまな形に変化した種類や綴り方が見られ³⁸⁰、彼らは互いにそれらの愛称で呼び合っている。書簡の注釈では «grossbibish」の意味は明らかでないものの、もともとの意味をラルボーの肥満からくるものと推測している³⁸¹。現在確認できるラルボーからファルグに宛てた最後の書簡は

³⁷⁴ Cf. la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 23 septembre 1911, lettre 172, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. II, 1910-1920, *op. cit.*, pp. 135-137.

³⁷⁵ Cf. la lettre de Léon-Paul Fargue à M^{me} Larbaud du 1^{er} août 1912, lettre 121, in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud, op. cit.*, p. 128.

³⁷⁶ Cf. les lettres entre Valery Larbaud et Léon-Paul Fargue entre le 12 août 1912 et le 12 septembre 1912, lettres 122-126, *ibid.*, pp. 128-130 et pp. 337-338, notes.

³⁷⁷ « [Une ligne caviardée.] / [Sept feuillets déchirés.] », Valery Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 106. (イタリック強調は原典)ラルボーが日記を再びつけ始めるのは 1914 年 2 月である。

³⁷⁸ Cf. « Appendice III, Signatures et appellations des deux amis », in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud, op. cit.*, pp. 264-266.

³⁷⁹ Cf. la lettre de Léon-Paul Fargue à Valery Larbaud du 6 décembre 1910, lettre 7, *ibid.*, p. 37 et p. 307, note 4. (下線強調は引用者)この書簡における «s» を重ねた綴り方は原典による。

³⁸⁰ Cf. « Appendice III, Signatures et appellations des deux amis », *ibid.*, p. 266.

³⁸¹ *Ibid.*, p. 307, note 4.

1924年12月のものだが、そこでもラルポーはファルグに「Grossbibisch!」³⁸²と呼びかけている。そして、これら複数の愛称に反復する「B」の音が、シャンテル訪問の同行者「B」を連想させる。「シャンテル（ブルボネ地方）」の記事でラルポーは同行者の名前を明かしていないが、この記事や「著者解題」における引用部分をファルグが見れば、それとわかるように仕掛けていた可能性も考えられる。

ラルポーが1926年に執筆した「シャンテル（ブルボネ地方）」に、かつてのシャンテル訪問のエピソードを織り込み、その上で旅行記の一部を『アレン』の「著者解題」に取り入れているならば、それもラルポーからファルグへの親愛の情がすべて失われていないことの一つの証となろう。しかも、これまで見てきたエピソードは、すべてブルボネ地方におけるファルグとの思い出にもとづくものである。かつて、ラルポーの創作活動のかたわらにはファルグがおり、ラルポーが当時好ましく思っていなかったブルボネ地方を「カジ」で旅する時には必ずファルグがいた。このように『アレン』には、ファルグとの友情の追憶、仲違いの後にも消えることのない思い出が示されている³⁸³。

ラルポーが『アレン』にファルグの姿を残した理由には、ラルポーが同郷の親友であるシャルル＝レイ・フィリップを介してファルグに出会い、若い日の長い時間やパリとブルボネ地方とを結ぶ旅の思い出への旧懐が背景にあったこと、そうした思い出を仲違いの後にも保っていることを示すため、の二点がまず考えられる。ラルポーが『アレン』に挙げたブルボネ地方のそれぞれの地名には、ファルグとのブルボネ散策時の思い出の場所が反映されている。ラルポーは『アレン』を通してファルグと過ごした友情の原風景であるブルボネ地方へと帰郷する、と言ってもよいかもしれない。だが『アレン』の登場人物たちがムーランに到着しても、ラルポーがファルグとともに故郷へ赴くことは二度とない。『アレン』に描かれたファルグとは、過ぎた日の幻影であり、それはラルポーにとって、もはやファルグとの友情が思い出の中にしか存在しないことを同時に示している。

³⁸² Cf. la lettre de Valery Larbaud à Léon-Paul Fargue [en 1924], lettre 273, *ibid.*, p. 244.

³⁸³ 1924年の仲違いの後にラルポーの意志が変わることはなく、また『アレン』についてのファルグの反応も不明である。しかし、ラルポーが1935年にわずらった脳障害から失語症に陥り、創作活動の停止を余儀なくされた後にファルグが送った見舞いの手紙や、ファルグが1947年に出版した *Portraits de Famille : Souvenirs* に収録されたラルポーとの逸話が、かつて二人が固い友情で結ばれていたことを思わせる。Voir les lettres de Léon-Paul Fargue à Valery Larbaud, lettre 275 (en 1935 ou 1936), lettre 276 (en 1946), et lettre 277 (en avril ou mai 1946), in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud, op. cit.*, pp. 245-247 ; Léon-Paul Fargue, *Portraits de Famille : Souvenirs*, Avec un portrait de l'auteur par Denise Lannes et des photographies, Paris, J.B. Janin, 1947. ヴィシー市立図書館の蔵書にはファルグの自筆による次の献辞が添えられている (Cote : F 879)。Dédicace autographe de l'auteur à Valery Larbaud : « à Valery Larbaud avec qui je passe des heures sans qu'il s'en doute. Léon-Paul Fargue »

第4節 同郷意識

『アレン』に取り組む以前のさまざまな経験の結果、ラルポーは故郷を見つめ直す機会を得たが、それには彼が再評価するに値する対象があったからである。すなわち、ラルポーが「本編」においても「著者解題」においても強調する、同郷の作家たちの存在である。本研究の最終節では、ラルポーの故郷についての認識を同郷の作家との関わりにおいて検討し、『アレン』におけるラルポーの帰郷を総括したい。

ブルボン公国として栄えた日々も遠い日のこととなり、今日のブルボネ地方はフランスの一地方に過ぎないように見える。『アレン』では「編集者」が、ブルボネ地方には今も « des ducs spirituels »（「精神上的の君主たち」）に値する作家たちがいると述べる。

<編集者>そしてひとたび我々の独立が失われてからも、私たちには世界の舞台で我々を代表する精神上的の君主たちがなおもいたのです。ブレース・ド・ヴィジュネール、ジャン・ド・ランジャンド、最近ではテオドール・ド・バンヴィルとシャルル＝ルイ・フィリップです³⁸⁴。

「編集者」が挙げた作家たちのうち、ラルポーが最も深く関わったのは、短期間ながらも親交を結んだシャルル＝ルイ・フィリップである。1908年にラルポーが『裕福なアマチュア』で主人公の大富豪バルナブースの豪華な生活を描いた時に、フィリップがラルポーへの書簡で伝えた感想には、両者の経済状況の違いが作品にもたらす影響についての反発も見られた。しかし、本研究の序論で触れたように、同時期にフィリップはラルポーについて友人に、ジッドが貧乏に見えるような人に会うと愉快になる、と語るなど、フィリップはラルポーの裕福さを一つの個性として受け入れていたようである。

一方ラルポーは、学校の先輩であるだけでなく、人生においても作家活動においても先達であるフィリップに全幅の尊敬を寄せていた。ラルポーはフィリップの作品によって庶民の生活に開眼し、フィリップがトルストイやドストエフスキーなどのロシア文学や、ディ

³⁸⁴ « [L'Éditeur :] Et même une fois notre indépendance perdue, nous avons eu encore des ducs spirituels qui nous avaient représentés sur la scène du monde : Blaise de Vigenère, Jean de Lingendes, et plus près de nous Théodore de Banville et Charles-Louis Philippe. », *Allen, Pléiade*, p. 755. ブレース・ド・ヴィジュネールはサン＝プルサン生まれの外交官（1523-1596）、ジャン・ド・ランジャンドはムーラン生まれの詩人（1580頃-1616頃）。ラルポーは『アレン』執筆と同時期に « Notes sur Jean de Lingendes »（「ジャン・ド・ランジャンドに関する覚え書き」）を執筆し、ランジャンドの復権をはかった。Cf. « Notes sur Jean de Lingendes », in *Chronique des lettres françaises*, juillet-août 1927, pp. 500-508. 現在 « Jean de Lingendes » として *OC*, t. 7, pp. 143-166 に収録されている。テオドール・ド・バンヴィル（1823-1891）はムーラン生まれの詩人で、郷里に触れた詩篇もあるが、1830年からパリで教育を受け、その後もパリを中心に活動していた。

ケンズやハーディなど英文学の翻訳を好み³⁸⁵、当時ラルボーがまだ知らなかった作家の存在を教えたことが、ラルボーの外国文学の翻訳への傾倒や、世に知られていない作家の紹介への精力的な取り組みといった、後年の創作活動に影響した。また、ラルボーは 1909 年に『フェルミナ・マルケス』を脱稿した際、フィリップの紹介によって掲載を予定していた雑誌 *La Grande Revue* (『ラ・グランド・レヴュ』) の編集長から最終章の文章の書き直しや削除を命じられ、最終的には原稿を引き上げるのだが、この時フィリップがジッドらに掛け合ったことで『新フランス評論』での連載が実現している³⁸⁶。

しかしながら、パリ市役所の事務職員のかたわら創作活動を続けていたフィリップが同年 12 月に 35 歳の若さで早世したため、二人の交流は 3 年ほどに過ぎなかった。セレイでのフィリップの葬列に並んだラルボーは翌年 1 月、『ラ・ファランジュ』に寄せた « In memoriam Charles-Louis Philippe » (「シャルル=ルイ・フィリップを偲んで」)³⁸⁷において、以前からフィリップの作品 *La Mère et l'enfant* (『母と子』、1900)、*Le Père Perdrix* (『ペルドリ爺さん』、1902) など、パリで発行された新聞『ル・マタン』に連載した短篇の舞台であるブルボネ地方で彼とともに休暇を過ごしたいと計画していたが、それがフィリップの棺の前での実現となったことを悔やんでいる。さらには 1911 年 4 月 27 日にムーラン市役所で、フィリップに関する講演をおこなった³⁸⁸。ラルボーはこの後もフィリップの作品の評価を高めるために尽力し、遺作の刊行に奔走した。

ラルボーは「精神上的の君主」の一人としてフィリップを紹介し、また「著者解題」第 18 章「カンティリア」の項目を設け、『サントル通信』に寄せた旅行記の抜粋を引用する中で、フィリップの作品『ペルドリ爺さん』を例に挙げてシャンテル訪問時の様子を説明している。前節で挙げた引用とほぼ重複するが、再度見ることにしよう。

私たちもシャンテルの住民たちのように、喪服を着ればよかった。質素な喪服か陰気な半喪服だけが、何も通らない街道に絶望的にしがみついている大きな村の陰気さに似合うだろう。空の孤独と畑の静けさの間で押しつぶされた町外れとか、—— 〔シャルル=ルイ・〕フィリップは、『ペルドリ爺さん』の中で、ブルボネ地方の小さな町の周辺の打ち捨てられた状態や、手の施しようのない貧しさを何と巧みに描いたこと

³⁸⁵ ラルボーが『ラ・ファランジュ』に Thomas Hardy (トーマス・ハーディ、1840-1928) の叙事詩劇 *The Dynasts* (『霸王』、1903-1908) の批評を寄稿したことは、フィリップの影響の一例である。Cf. « *Les Dynastes de Thomas Hardy* », in *La Phalange*, n° 28, 15 octobre 1908, pp. 321-328.

³⁸⁶ Cf. « Notes » in *Pléiade*, pp. 1204-1207 ; Béatrice Mousli, *Valery Larbaud*, op. cit., pp. 151-154 ; « Lettre à Charles-Louis Philippe », in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, op. cit., pp. 59-62 ; *Correspondance André Gide et Valery Larbaud, 1905-1938*, op. cit., pp. 40-43.

³⁸⁷ Valery Larbaud, « In memoriam Charles-Louis Philippe », in *La Phalange*, n° 43, janvier 1910, pp. 193-195.

³⁸⁸ その内容が « Charles-Louis Philippe » として *OC*, t. 7, pp. 284-311 に収録されている。

か！——あるいはムーランの画家が描いた背景の青の中に堂々とそびえ立つシャンテルの公の城、いやむしろ城の亡霊とかに似合うだろう……³⁸⁹

下線で示した部分をラルボーが感嘆文で表していることから、ラルボーからフィリップへの敬意がここに見て取れる。それと同時に、故郷に暮らす人々の暮らしぶりを仔細に描くフィリップの作風がラルボーとは異なることを、この一文が示している。さらにラルボーは「著者解題」第20章で、「本編」で触れなかったフィリップの生まれ故郷を、「セリイ」とタイトルを付けて取り上げている。

これも私が『アレン』に入れたかった名前の一つである。とはいえ周知のとおり、シャルル＝ルイ・フィリップ、マルセラン・デブータン、地理学者で探検家のフランソワ・ペロンの生まれた町である。彼らの名は「精神上的君主たち」のリストに挙げるべきだったであろう³⁹⁰。

このようにラルボーは、「本編」にも「著者解題」にもフィリップを取り上げ、彼の人物、作品、出身地への敬意をブルボネ地方との関わりにおいて示している。それはフィリップへの変わらぬ尊敬の念であり、かつてフィリップの遺作の刊行に尽力した姿勢が、『アレン』においても継承されていることの証である。

また、これら「精神上的君主たち」について、ラルボーは1923年からブエノス・アイレスの日刊紙『ラ・ナシオン』に連載した25篇の「chronique」（「コラム」）において、「精神上的君主たち」のうちの二人に関する記事を書いている。すなわち、1923年7月22日号に掲載の「Renan et Banville prosateur」（「散文作家ルナンとバンヴィル」）³⁹¹と同年11月18日号の「Jean de Lingendes」（「ジャン・ド・ランジャンド」）³⁹²である。まず、「散文作家ルナンとバンヴィル」では、テオドール・ド・バンヴィルの創作活動を紹介する中で、

³⁸⁹ « Nous devrions, comme les habitants de Chantelle, être en deuil. Un deuil pauvre ou un demi-deuil maussade seraient seuls en harmonie avec la tristesse du grand village désespérément accroché à la route où rien ne passe ; avec ses faubourgs écrasés entre la solitude du ciel, et le silence des champs, — comme Philippe, dans le Père Perdrix, a bien exprimé l'abandon et l'irréparable pauvreté de ses faubourgs des petites villes bourbonnaises ! — avec le château, ou plutôt le spectre du château ducal de Chantelle qui se dresse triomphalement dans le bleu des fonds du Maître de Moulins... », « Note XVIII. Cantilia », *Allen, Pléiade*, p. 771. （下線強調は引用者）

³⁹⁰ « — Encore un nom que j'aurais voulu introduire dans *Allen*. Mais on sait bien que c'est la ville natale de Charles-Louis Philippe, de Marcellin Desboutins, et du géographe et explorateur François Péron, dont le nom aurait dû figurer dans la liste des « ducs spirituels ». », « Note XX. Cérilly », *ibid.*, p. 772. マルセラン・デブータンは画家、版画家、小説家（1823-1902）、フランソワ・ペロンは地理学者、探検家（1775-1810）。

³⁹¹ 記事は Valéry Larbaud, *Du Navire d'argent, op. cit.*, pp. 257-274 に収録されている。

³⁹² *Ibid.*, pp. 161-178.

テオドール・ド・バンヴィルがボードレーを礼賛していたことなどを記しており、ラルポーが両者の作風を把握していたと考えられる。また、「ジャン・ド・ランジャンド」では、フランス中部であるブルボネ地方に文化的、芸術的拠点がなかったことに苦言を呈しつつも³⁹³、「しかし、この地方は我々の文学史の一部をなす三人の作家を生み出した³⁹⁴」として、シャルル=ルイ・フィリップ、テオドール・ド・バンヴィル、ジャン・ド・ランジャンドを挙げている。またマルセル・レイに宛てた同年7月23日付の書簡を見ると、ラルポーは雑誌に載った傑作集刊行の予告を目にした際、そこにジャン・ド・ランジャンドが抜けていることから編者に手紙を書いたことを伝えて、「ジャン・ド・ランジャンドは象徴主義以前の時代に関する唯一重大な欠落だ³⁹⁵」と説明し、またレイにも編者へ手紙を書くよううながしている。

だがブレース・ド・ヴィジュネールについては単独の記事や作品はない。ラルポーは1928年に出版した*Notes sur Racan*（「ラカンに関する覚え書き」）³⁹⁶の中で、著作*Des prières et Oraisons qui se doivent conformer toutes à l'Écriture Sainte, selon que l'Église Catholique les règle et ordonne*（1595）を挙げるのみで、ブルボネ地方との結びつきには触れていない。しかし彼が『アレン』執筆と同時期の1927年にこの作品に取り組んでいることから、ラルポーがブレース・ド・ヴィジュネールの功績を把握していたことは確かであろう³⁹⁷。

³⁹³ Cf. « [...] il n'y eut jamais de vrais foyers culturels et artistiques dans les provinces du centre de la France. », *ibid.*, p. 163.

³⁹⁴ Cf. « Pourtant, cette province a produit trois écrivains qui font partie de notre histoire littéraire : un contemporain, l'infortuné Charles-Louis Philippe (1874-1909), dont l'influence domine encore de nombreux et importants aspects de notre littérature. Un des meilleurs poètes qui marquèrent la transition entre le romantisme et le symbolisme, Théodore de Banville (1823-1891). Et enfin, l'un des plus grands poètes des débuts de notre Siècle d'Or : Jean de Lingendes (1580-1615). *ibid.*, p. 164.

³⁹⁵ Cf. « Avez-vous vu, dans *Les Nouvelles Littéraires*, l'annonce d'une grande anthologie française publiée à la librairie d'Andréa, 199 Bd Raspail, sous la direction de Fernand Mazade. Genre publications Larousse, par livraisons. Très complet, sauf : *Jean de Lingendes, Rimbaud, Laforgue, Corbière* et *Germain Nouveau*. J'ai écrit à ce sujet à F. Mazade. Vous devriez écrire aussi. Jean de Lingendes est la seule grande omission pour l'époque antérieure au Symbolisme. Tout le reste est très bien. Il y a un Lingendes dans la collection de la S[ociété]té des Textes Français Modernes. », la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 11 juillet 1923, lettre 284, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. III, 1921-1937, *op. cit.*, p. 65.（下線強調は引用者、イタリック強調は原典）この名詩選は Fernand Mazade, *Anthologie des poètes français des origines à nos jours*, 4 tomes, Paris, Librairie de France, 1925-1930 を指すが、収録内容は不詳。

³⁹⁶ ラルポーが『ラ・ナシオン』1924年8月24日に掲載した、17世紀に活躍したフランスの詩人ラカンに関する記事「Racan」が原型であるが、内容は大きく異なっており、ここにはブレース・ド・ヴィジュネールについての言及は見られない。

³⁹⁷ ヴィシー市立図書館所蔵の草稿（Cote : Ms. IX-2 f° 155-159）には、ラルポーが『ラ・ナシオン』の準備のために書いたと思われる *Blaise de Vigenère*（『ブレース・ド・ヴィジュネール』）と題した5枚の草稿があるが、同図書館のOPAC上では創作年代が不明である。草稿にはヴィジュネールの二篇の詩のラテン語のタイトル「Exaudi Deus orationem meam...」（「神よ、私の祈りを聞きたまえ」）、「In te Domine speravi...」（「汝、主よ、私は

ラルボーがこれらの研究結果を、フランスではなく、アルゼンチンの新聞にスペイン語で掲載したことは興味深い。というのも、『ラ・ナシオン』に寄稿した記事のうち、「ジャン・ド・ランジャンド」は、4年後の1927年に『ブルボネ振興協会会報』に掲載する論考、「Notes sur Antoine Héroët et Jean de Lingendes」（「アントワヌ・エロエとジャン・ド・ランジャンドに関する覚え書き」）のもととなり、読者数は限られているもののフランス語で発表された。しかし、その他の記事は、掲載後まもなくフランス語で他紙に掲載した「*Élémir Bourges*」（「エレミール・ブールジュ」）³⁹⁸、「*La Phalange*」（『ラ・ファランジュ』）³⁹⁹、「*John-Antoine Nau*」（「ジョン=アントワヌ・ノー」）⁴⁰⁰、「*Maurice Scève*」（「モーリス・セーヴ」）⁴⁰¹を除き、2003年にアンヌ・シュヴァリエの編集によって *Du Navire d'argent*（『銀の船から』）と題する単行本が出版される際に、初めてスペイン語からフランス語へ翻訳されたからである。

ラルボーが『ラ・ナシオン』パリ支局長、M. F. Ortiz Echagué（M. F. オルティス・エチャゲ）の依頼によって「コラム」の執筆を承諾したのが1922年の年末であることから、この連載を機にラルボーが故郷の作家たちを詳細に研究し、彼らの存在を認識、あるいは再認識した可能性がある。また「コラム」の最終の掲載日は1925年9月6日で、すべて『アレン』執筆前に終了している。もとより知名度の低い、あるいは忘れられた作家を研究対象にする傾向の強いラルボーだったが、『ラ・ナシオン』のために彼が選んだブルボネ地方の作家たちは、後に彼が『アレン』の中で「精神上的の君主たち」と称讃し、彼らの文学的水準の高さがラルボーを故郷や地方の再評価に導くほど、ラルボーを刺激した文学者たちだったようである。そして、こうした故郷の作家研究に費やした時間が、ラルボーに精神的な帰郷をうながす一面を担っていたと考えられる。

その頃すでにラルボーは、早逝したシャルル=ルイ・フィリップから縁を引き継ぐよう

期待している……」）が記されているようである。

³⁹⁸ 『ラ・ナシオン』1923年12月11日掲載、*La Revue Européenne*（『ヨーロッパ評論』）1925年3月1日号にフランス語訳を掲載。Cf. Valéry Larbaud, *Du Navire d'argent, op. cit.*, p. 8 et p. 356.

³⁹⁹ 『ラ・ナシオン』1924年1月20日掲載の後、1927年に Camille Bloch（カミーユ・ブロック）の編集によって *Une campagne littéraire : Jean Royère et la Phalange, MCMVI-MCMXIV*（『ある文学的キャンペーン：ジャン・ロワイエールと「ラ・ファランジュ（1906-14）」』）として出版された。また『ラ・ファランジュ』1935年12月15日号に、単行本と同じタイトルで掲載されている。Cf. *ibid.*, pp. 110-111.

⁴⁰⁰ 『ラ・ナシオン』1924年3月9日掲載。Cf. *ibid.*, pp. 334-335. フランス語訳は『ヨーロッパ評論』1924年9月1日号に一部が、また以下に全文が再録されている。Voir Bernard Delvaille, *Essai sur Valéry Larbaud*, Paris, Seghers, 1963, pp. 193-208.

⁴⁰¹ 『ラ・ナシオン』1924年8月10日掲載の後、1925年に『コメルス』第5号に「*Maurice Scève : Fragments de Microcosme : suivis de Notes sur Maurice Scève par Valéry Larbaud*」（「モーリス・セーヴ：『マイクロコスム』断章：ヴァレリー・ラルボーによるモーリス・セーヴに関する覚え書き調査」）として掲載された。Cf. Valéry Larbaud, *Du Navire d'argent, op. cit.*, p. 153.

に、フィリップの友人で農民作家として知られるエミール・ギョーマンとも親しくなっていた。二人は 1907 年にフィリップの紹介によってパリで出会った⁴⁰²。ギョーマンはフィリップの出身地セレイの隣村、イグランドに生まれ、農業を営むかたわら創作に励んでいた。1904 年に出版した『ある百姓の生涯』でゴンクール賞を逃したものの、すでに作家として田園小説集 *Dialogues bourbonnais* (『ブルボネの対話』、1899) や *Les Tableaux champêtres, Scènes de la vie rurale en Bourbonnais à la fin du XIX^e siècle* (『農村の風景：ブルボネ地方における 19 世紀末の田園生活情景』、1901) などを出版していた⁴⁰³。

フィリップが亡くなった時、ラルボーとギョーマンは揃ってセレイでの葬儀に参列し、そこでギョーマンは弔辞を捧げ、また翌年には『新フランス評論』2 月 15 日号に « Philippe en Bourbonnais » (「ブルボネ地方のフィリップ」)⁴⁰⁴を寄稿している。さらにギョーマンは 1935 年のシャルル=ルイ・フィリップ友の会設立時に会長となり、1942 年にフィリップの生涯や創作活動をまとめた *Mon compatriote Charles-Louis Philippe* (『我が同胞シャルル=ルイ・フィリップ』、Grasset 社刊) を出版した。このようにラルボーとギョーマンとの親交には常にフィリップが存在している。

ラルボーとギョーマンの交流の様子を知るには、以下の二つの資料が参考になる。一つは、シャルル=ルイ・フィリップ友の会の会報 *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe* に 1957 年から 1966 年にかけて掲載された、1909 年から 1938 年までに断続的に交わされた書簡⁴⁰⁵、もう一つはギョーマンと知人たちとの書簡集 *Cent dix-neuf lettres d'Émile Guillaumin (dont 73 inédites) 1894-1951 autour du mouvement littéraire bourbonnais*⁴⁰⁶である。『アレン』では「編集者」がブルボネ地方の著名人を列挙した後に、「それに我らがエミール・ギョーマンの著作はドイツや英国の生徒たちのフランス語の教科書になっています⁴⁰⁷」と紹介していたが、1927 年にラルボーが『アレン』を発表した時にギョーマンに抜き刷りを送ったことに対する謝礼への返信からも、ラルボーが『アレン』にブルボネ地方への敬

⁴⁰² Cf. Béatrice Mousli, *Valery Larbaud, op. cit.*, p. 130.

⁴⁰³ Cf. *Dictionnaire des lettres françaises, Le XX^e siècle*, édition réalisée sous la direction de Martine Bercot et d'André Guyaux, Paris, Librairie Générale Française, 1998, p. 531

⁴⁰⁴ Émile Guillaumin, « Philippe en Bourbonnais », in *NRF*, n° 14-15, 15 février 1910, pp. 207-217.

⁴⁰⁵ « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 15-n° 17, 1957-1959 et « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 18-n° 24, 1960-1966.

⁴⁰⁶ Roger Mathé (éd.), *Cent dix-neuf lettres d'Émile Guillaumin (dont 73 inédites) 1894-1951 autour du mouvement littéraire bourbonnais*, Paris, Klincksieck, 1969.

⁴⁰⁷ « [L'Éditeur :] Et les livres de notre Émile Guillaumin servent de textes français aux écoliers d'Allemagne et d'Angleterre. », *Allen, Pléiade*, p. 755. ギョーマンの作品のうち、ドイツにおけるフランス語の教科書とは、『農村の風景：ブルボネ地方における 19 世紀末の田園生活情景』を指すと考えられるが、英国においては該当する作品がない。この事柄については次の論考を参照されたい。Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux », in *FRACAS*, numéro 1, *op. cit.*, pp. 1-3.

意を込めていたことが確認できる。この直前、ラルボーは『新フランス評論』に「アレン」を連載し、また3月27日にはオートン・クービーヌの挿絵を入れた版を出版していた。ラルボーは同年4月9日付のギョーマンへの書簡において次のように伝えている。

お言葉ありがとうございます。あなたにこの「アレン」の抜き刷りを是非ともお送りしたいと思っていました。これは私の精神における、ブルボネ地方での私の経験の精華、またブルボネ地方に敬意を表した作品であり、そしてそこにあなたを取りあげさせていただいたからです。さらに現在120部の豪華版を作っており、版元から14部の非売品、記名入りのものを入手しました。そのうち一部はあなたの分です。4月20日までにはお送りしたいと存じます⁴⁰⁸。

フィリップとギョーマンは、ラルボーと同郷の出身とはいえ、ラルボーとは生まれ育った環境が大きく違っていた。それは、彼らの作品が「*littérature prolétarienne*」（「プロレタリア文学」）と評されている点にも表れている⁴⁰⁹。フィリップとギョーマンの作品は、その土地に根ざした人々の労働や日常生活の様子を描いているからである。するとラルボーが『アレン』を「描写的なガイドブックでも、田園小説、あるいは『地方風俗』でも、——ましてや歴史小説や短篇小説集でもない」作品にしようとした意図が、故郷に暮らす人々の暮らしを描くフィリップやギョーマンへの敬意から生じた考えだと言えよう。

自動車の普及がもたらした美食の世界における地方料理の流行とは異なり⁴¹⁰、依然として当時の文学界の中心地は首都パリである。ラルボーが言うところの「田園小説、あるいは『地方風俗』」を描く作品の対象地域とは、首都パリを除くすべての地域を指している。

⁴⁰⁸ « Je vous remercie de votre mot. J'ai tenu à vous envoyer ce tirage à part de « Allen » parce que c'est un ouvrage qui est, dans mon esprit, le résumé de mon expérience bourbonnaise, et un hommage au Bourbonnais, et aussi parce que vous y êtes cité. Du reste, on est en train d'en faire une édition de luxe, de 120 exemplaires, et j'ai obtenu de l'éditeur 14 exemplaires hors commerce, nominatifs, dont un vous est destiné. J'espère vous l'envoyer avant le 20 avril. », la lettre de Valery Larbaud à Émile Guillaumin du 9 avril 1927, « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 17, *op. cit.*, p. 358.

⁴⁰⁹ Cf. Michel Ragon, *Histoire de la littérature prolétarienne de langue française*, Paris, Albin Michel, 1986. 邦訳はミシェル・ラゴン『フランス・プロレタリア文学史：民衆表現の文学』、高橋治男訳、水声社、2011年を参考にした。

⁴¹⁰ 地方料理の歴史などにも詳しい『フランス料理ハンドブック』（辻調グループ辻静雄料理教育研究所編著、柴田書店、2012年）の「モータリゼーションの進展と地方の美食の発見」（402-408頁）によれば、20世紀前半はモータリゼーションの進展と地方の美食の発見の時代である。自動車の普及が人々の行動範囲を広げ、あるいは距離を短縮し、ガイドブックの発行が利用者に正確な情報が与えた結果、ブルジョワジーの間で流行した自動車旅行が地方のレストランの振興をもたらした。自動車の普及によって、人々は行動範囲を広げ時間と距離を短縮したが、それには利用者に正確で詳細な情報が与えたガイドブックの功績が大きい。

ここで、文学事典 *Le Dictionnaire du littéraire* の「レジオナリズム」の項⁴¹¹が、当時の文学界を次のように説明し、この種の作品を創作する作家を « les écrivains régionalistes »（「地方主義の作家たち」）⁴¹²と表記していることを念頭に置きながら説明を見ることにしよう。

フランス文学の分野は、強力な中央集権化が特徴的で、地方主義はしばしば周辺地域の作品と同義とされ、概してそれには軽蔑的な意味合いが含まれている⁴¹³。

1900年から第二次世界大戦まで、地方主義の文学作品は著しい飛躍を遂げ、確かな好評を博している⁴¹⁴。

フランス文学の分野はほぼ大衆的な社会階層に囲い込まれており、農民たちは地方主義の作家たちの中にまれにしかいない。ブルボネ地方のエミール・ギョーマンや〔北仏〕ピカルディー地方のフィレアス・ルベグは、大きな困難はあったものの出版する力を持っていた、ほとんど唯一の作家である。文芸批評によって信用を失った作品も労働組合の責任者や教師たちの間ではかなりの支持を得ていた⁴¹⁵。

『アレン』の一行がフランス国家の中央集権の象徴であるパリを起点に、ブルボネ地方へ向かう様子は、『アレン』に描かれるパリ一極集中の現状からの地方再興への願望を体現している。しかし、ラルボーが『アレン』で志したものは、その土地に住む人々の日常生活を描くような大地に根差した作品ではなかった。ラルボーが田園小説の作者や作品を尊重し、高く評価する姿勢を持っていたことは確かであり、同郷のシャルル＝ルイ・フィリッ

⁴¹¹ *Le Dictionnaire du littéraire*, sous la direction de Paul Aron, Denis Saint-Jacques, Alain Viala, avec la collaboration de Marie-André Beudet et al., Paris, PUF, 2004, pp. 527-529, s.v. *régionalisme*. « régionalisme » が使われ始めたのは 1890 年であるが、一般に普及するのは 1900 年以降、すなわち「レジオナリズム」は二十世紀の言葉である。遠藤輝明編『地域と国家：フランス・レジオナリズムの研究』、日本経済評論社、1992 年、3 頁を参照した。

⁴¹² *Le Dictionnaire du littéraire*, *op. cit.*, p. 528.

⁴¹³ « Dans le champ littéraire francophone, marqué par une forte centralisation, le régionalisme est souvent tenu pour synonyme de production périphérique et il a généralement une connotation péjorative. », *ibid.*, p. 527.

⁴¹⁴ « À partir de 1900 et jusqu'à la Seconde Guerre mondiale, la production littéraire régionaliste connaît un essor considérable et un succès certain. », *ibid.*, p. 528. 当時、地方作家が文学賞を受賞するケースがたびたびあった。1904 年創設の Le Prix Femina（フェミナ賞）と、1926 年に創設の Le Prix Renaudot（ルノドー賞）の 1920 年代の受賞者には地方作家もおり、第一次世界大戦後には La Société des écrivains de province（地方作家協会）が設立された。

⁴¹⁵ « Le champ littéraire français étant quasiment fermé aux couches sociales populaires, les paysans sont rares parmi les écrivains régionalistes. Le Bourbonnais Émile Guillaumin et le Picard Philéas Lebesgue sont à peu près les seules à pouvoir publier, aux prix de grandes difficultés, une œuvre disqualifiée par la critique littéraire mais ayant une certaine audience auprès de responsables syndicaux ou d'instituteurs. », *ibid.*, p. 528.

プやエミール・ギョーマンへの尊敬が終生変わることもなかった。だがラルボーの作品における「地方」とは、彼自身の経験や記憶と結びつくことで初めて存在する。そのためラルボーは、地方における日常生活の様子を作品に取り入れることはあっても、彼自身、あるいは彼の分身的な存在が登場しないような、地方住民の一般的な生活を主題とする作品の創作には関心がなかったと考えられる。言い換えれば、それだけ彼の作品には、常に自己に根ざした問題が含まれている、というわけである。

しかも、ラルボーの「同郷」についての認識は、ブルボネ地方のみが対象であった。それにはブルボネ地方の隣、オーヴェルニュ地方ピュイ＝ド＝ドーム県 Ambert (アンベール) 出身の作家 Henri Pourrat (アンリ・プーラ、1887-1959) と、『アレン』が完成した1929年に交わした書簡が参考になる。プーラは『アレン』を読んで感銘を受けたことから、ラルボーに『アレン』を出版したオリゾン・ド・フランス社から刊行予定の、プーラを中心に編集する地元で根ざした作品の叢書への寄稿を数回にわたって求めたが、ラルボーは別の作家を何人も紹介するなどして謝絶している⁴¹⁶。また1932年には、著作 *En Auvergne : Les Limagnes* (『オーヴェルニュにて、リマーニュ平野』)⁴¹⁷でヴィシーをオーヴェルニュ地方の一都市であるとするプーラに対し、プーラ以上にヴィシーを描ける人がいるとは思えない、と応じつつも、ヴィシーはオーヴェルニュ地方には属していない⁴¹⁸、と返答するなど、双方の書簡からは創作方針と「同郷」に対する認識の違いが浮かんでくる。現在のフランス地方行政区画において、ヴィシーのあるアリエ県はオーヴェルニュ地域圏に属しているが、このような「(複数の県を包含する)地域圏」は1964年に設けられた。すなわち、フランス革命以前の地域区分によれば、アリエ県が属するブルボネ地方と、プーラが住むピュイ＝ド＝ドーム県が属するオーヴェルニュ地方は、隣り合う地方になるからである。

ラルボーが隣接するブルボネ地方とオーヴェルニュ地方とを明確に区別していたことは、『幼なごころ』の「偉大な時代」における、主人公マルセルが以前両親と訪れたオーヴェルニュ地方での思い出を語る際の、「真っ黒で大きな町に背の高いブロンドの人々が住んで

⁴¹⁶ Cf. la lettre de Valery Larbaud à Henri Pourrat du 11 juin 1929, in *CVL*, n° 1, 1967 (sans pagination).

⁴¹⁷ Henri Pourrat, *En Auvergne : Les Limagnes*, Grenoble, B. Arthaud, 1932.

⁴¹⁸ Cf. « En voyant Vichy annexé à l’Auvergne avec tant d’autorité, je me suis dit que si jamais un « Bourbonnais » entre dans cette même collection, vous entendrez les protestations irrédentistes d’un de mes compatriotes. Cusset à la rigueur, et Saint-Pourçain-sur-Sioule comme enclave auvergnate... ; mais Vichy ! Cependant je doute que le futur protestataire, décrire « La Reine des Villes d’Eaux » », la lettre de Valery Larbaud à Henri Pourrat du 8 juillet 1932, in *CVL*, n° 1, 1967, *op. cit.*, (sans pagination). ; « [Dédicace à Valery Larbaud :] À Valery Larbaud, Cher Monsieur, c’est un petit essai géographique, oserai-je vous en faire l’hommage ? Je souhaite que ce que vous y trouverez de Vichy, ou à propos de Vichy, ne vous déplaie pas trop. Voyez-y, je vous prie le témoignage d’une admiration que chacun de vos livres renforce et permettez-moi de me dire vraiment à vous. Henri Pourrat. Ambert, 31/5/1932 », *ibid.*, note 1. « La Reine des Villes d’Eaux » (「水の町の女王」) はヴィシーを指す。

いる、百の山々の国、つまりオーヴェルニュでのことだった⁴¹⁹」との表現にさかのぼる。またそれは、『アレン』の「本編」の第1章で、ブルボネ地方出身の「編集者」が、「愛書家」と思しき人物に「確かあなたはオーヴェルニュ地方のご出身ですよ？⁴²⁰」と尋ねられた時の「え、何ですって……⁴²¹」との返答に込められた、不服や反論の意味合いからも見て取れよう。このように対象をブルボネ地方に限定した同郷意識のもと、ラルボーは「著者解題」を次のように結んでいる。

それゆえ私は『アレン』をまずは私の同郷の人たちに、彼らのために書いた本として捧げることができるだろう。そうすることでこの本を、私の名前とともに、彼らの記憶に残せると思うのである⁴²²。

「著者解題」において « compatriote »（「同郷の人」）が、版画家ポール・デュヴォーの名を挙げる際の枕詞であるように、ここでは先に挙げた「精神上の君主たち」をはじめとする「同郷の人（たち）」の存在が、彼と故郷とを結ぶ際の心の拠り所であることが強調されている。『アレン』に限らず、ラルボー作品の読者とは、献辞を捧げた母親をはじめ、批評家を含む同郷の人たち、その他の批評家たち、一般の読者など多様であろうが、とりわけラルボーが同郷の読者を意識していたことが、この引用部分において強調されている。

ラルボーは『アレン』に「読者への前書き」と「著者解題」を付け加えることで、読者の読解を助けた。しかし彼が『アレン』に引用した、シェイクスピアの作品からブルボン公が登場する『ヘンリー五世』からの「少数だが、幸せな少数よ、我々は兄弟の絆で結ばれている⁴²³」が表すように、これまでラルボーは自分の作品に関して、少数の理解者だけを得られていれば良いとの立場を貫き、読者層を広げ販売部数を伸ばし、それによって収入増を図るような執筆からは距離を置いていた。作品を寄稿する際には、あまり有名ではない媒体を選んで発表するなど、彼は「自分の楽しみのために書く」姿勢を保っていた。ならば作品への読者の理解をうながす「著者解題」の執筆は、いつもの彼の方針とは少々異なっている。

だが史実を下敷きにすることによって新たに得た郷土愛と、ブルボネ地方の出身者への同郷意識が加わった成果としての『アレン』には、ラルボーの別の一面が見える。『私の道

⁴¹⁹ « C'était au pays des Cent Montagnes, où de grandes villes noires sont habitées par de grands hommes blonds, l'Auvergne. », « La Grande Époque », *Enfantines, Pléiade*, p. 442.

⁴²⁰ « [Le Bibliophile :] — Je vous croyais d'origine auvergnate ? », *Allen, Pléiade*, p. 729.

⁴²¹ « [L'Éditeur :] — Dites donc... », *ibid.*

⁴²² « Je crois donc pouvoir offrir *Allen* en tout premier lieu à mes compatriotes, comme un livre écrit pour eux, et ainsi le confier, avec mon nom, à leur mémoire. », « Note XXI. Ces notes », *ibid.*, p. 774.

⁴²³ « [L'Auteur :] *We few, we happy few we band of brothers*. Shakespeare, *Henri V*, la pièce où paraît Bourbon. », *ibid.*, p. 758. (イタリック強調は原典)

のり』記したように、これまで彼はさまざまな土地に滞在し、多様な文化を体験しつつ多くの国籍の人々と交流し、広範な教養を身に着け、多岐にわたるジャンルの創作に携わってきた。けれども、パリやロンドンを我が家のように拠点としながらも、ラルボーが深く根を下ろしていると実感できるのはブルボネ地方、すなわち母親のもとであり、同郷意識を共有できる友人や作家たちとの友情を育んだ土地であった。若き日のラルボーに、故郷を嫌悪し、パリや外国へ居場所を求めていた時期があったからこそ、彼は故郷を見直す機会を得て、その結果『アレン』においてブルボネ地方へ精神的な帰郷を果たす。

そして、ラルボーが欧州各国で得てきたもののすべて、すなわち経験や知識、広がりつつも時には断絶した人脈や友情などが、『アレン』とともにブルボネ地方にいるラルボーのもとに集結することで、故郷が彼にとっての首都となり、深く根を下ろした故郷から彼は再び各国、各地へ赴く。それは故郷をその他の地域を分けるものではなく、また地方と都会を対立させるものでもない、互いに関わり合う性質のものである。

それが、ブルボネ地方の人としての自覚とブルボネ地方と自らのと関わりを探究することによって得た、人生という一本の道のりの先にたどり着いた、ラルボー独自のコスモポリティズムである。すなわち『アレン』は、ラルボーが歩んだ道のりを凝縮したものである。そして、ブルボネ地方とは、彼がいつでも帰ることのできる場所であり、また出発点なのである。

結論

ここで序論の冒頭に挙げた『アレン』における母への献辞に戻ろう。ラルボーが母親の病に気づいたのは、1927年に『新フランス評論』で「本編」を発表した後の1928年10月のことであった⁴²⁴。それ以降、彼女が1930年10月11日に88歳で亡くなるまでの約2年間、ラルボーは多くの時間を母親のもとで過ごしている。1929年にオリゾン・ド・フランス社から『アレン』を出版した際に付した母への献辞は、ラルボーが母親との最後の時間を過ごす間に書いたものであろう。

この献辞には、ラルボーが生まれてから45歳に達するまでの間の、母親と故郷をめぐる長い歴史が凝縮されている。若い頃のラルボーは常に母親の厳しい監視のもとに置かれていたが、それは母親が彼の創作活動に理解を示さず、家業を継いで実業家にしたいと思う期待を捨てきれなかったことに起因するものであった。それゆえラルボーは親元である故郷を嫌悪し、パリや外国に居場所を求め続けていた。だが作家としてラルボーは、故郷に抱いていた過去の嫌悪感から『アレン』に示した賞讃にいたるまでの思いを、人生に例えられる旅を題材にした作品に込めて彼女に捧げた。この短い献辞にはまた、母親に対する長く、そして重いラルボーの心の歴史が凝縮されている。

本研究で触れてきたように、ラルボーは次の二点において、常にコスモポリティスムの際立つ作家であった。一つは、彼が幼い頃から旅の経験と、その後の努力によって多言語を操る語学の達人だったことである。生まれ育ったヴィシーが、ナポレオン三世の時代から各国の観光客の集まる名だたる温泉地であったことに始まり、病弱だったラルボーは、療養を兼ねた外国周遊や長期滞在を重ねる中で、英語やイタリア語、スペイン語などを習得していった。また学生時代にさまざまな国籍の生徒が集まるパリ郊外の寄宿学校で学んだ経験を『フェルミナ・マルケス』に、各国周遊の様子を、作品の舞台がフランスから欧州諸国へと広がりを見せる『A. O. バルナブース全集』など、複数の作品に反映してきた。その結果、文学史においてラルボーの代表作とされる国際色豊かなこれらの作品や、作品の随所に現れるラルボーの自伝的な要素から、ラルボーは作品についても彼自身についても、広い国際性を備えたコスモポリタンであるとの評価を得た。

もう一つは、ラルボーが精神的なコスモポリタンだったことである。『ユリシーズ』に代表される英文学作品の翻訳出版への尽力や、スペインや英国の新聞や雑誌にその国の言語で書いた原稿を寄せるといった執筆活動に見られるように、ラルボーは地域や国境だけでなく、言語の壁を超えていた。それは、彼の生活の拠点がどこにあろうとも、意識の中の国境が取り払われていたからである。

そのラルボーが『アレン』を発表した後も、ヨーロッパを一つの総体としてとらえて

⁴²⁴ Cf. « 1928 [...] Rentre en octobre en Bourbonnais où il [= Valery Larbaud] trouve sa mère malade. », Françoise Lioure, « Valery Larbaud », in *Magazine littéraire*, n° 171, *op. cit.*, p. 19.

いたことは、1931年11月25日の日記に記した、「どの特定の国に属しているとも感じない私たちにとって（私がイタリア人であるとおなじく、妻はフランス人だ）、パスポートだの領事館だの、とにかく国籍などという問題が大真面目にあつかわれているのは実に奇妙だ！⁴²⁵」との一文に現れている。しかし、かつて彼の考えにあった、大国が主導権を握るヒエラルキーのもとで、ある一つの国がかつてのローマのように特権的に三角形の頂点に君臨するような考えは、それぞれの国や地方が振興することで、ヨーロッパ全体の活力が底上げされるとの理想に転じた。するとフランスにおけるパリとは、周縁の地方との連携の中心地として機能する首都を指す。ラルボーにとって、パリもまた地方の一つである。

そして、このような国際性を備えたラルボーの創作活動の土台に、故郷であるブルボネ地方が常にあったことを確認した。かつて『A. O. バルナブース全集』の完成とバルナブースの人物像の成長の陰には、同郷の作家シャルル＝レイ・フィリップの指摘があり、また同郷の作家たちの研究を通して、ラルボーはそれまでの「ヨーロッパ大国至上主義」から地方を再認識するに至った。このような過程をもとに考えてみると、『A. O. バルナブース全集』を執筆していた当時のラルボーにとって、「世界」と認識していたヨーロッパの大国を去るバルナブースの南米への帰郷は敗北と逃避でもあろう。

しかし、故郷の歴史や同郷の作家たちの存在によって、ブルボネ地方など「大国」の対極に位置する小さな地方について認識を変えた後のラルボーの、『アレン』によるブルボネ地方への帰郷は、バルナブースの逃避的な帰郷とは異なっている。「地方への帰郷」と世界を股にかける「コスモポリティズム」が一般的に与えるイメージは、一見相反するようだが、ラルボーの場合、『アレン』の構想や執筆の過程で故郷の今昔を比較しながら故郷を認識し、地方を大国と同等に尊重することで、ラルボー独自のコスモポリティズムが完成するからである。ラルボーは、多くの言語や複数の異文化を経験した上で、故郷に差す光の部分を集めることによって、故郷を愛する気持ちを見つけた。それは、外の世界での見聞を広めたことで育まれた彼独自の郷土愛であり、同郷意識であろう。彼に深く根ざす郷土愛を土台として、ラルボーのコスモポリティズムは成り立っている。

このような意味から、『アレン』におけるブルボネ地方への帰郷は、彼の人生の集大成であり、その象徴として「みんな一緒に」を意味する「Allen」が存在していたと言える。登場人物たちが自動車での旅行の間に立ち寄り、また通り過ぎた場所の一つ一つは点の存在であっても、目的地に到着して振り返れば、それはパリと故郷とを結ぶ一本の道になっている。アシル・アリエの『旧きブルボネ』から、「神への奉仕と私たちの国の防衛のた

⁴²⁵ Cf. « C'est curieux ces affaires de passeports, de consulats, pour des gens comme nous qui ne nous sentons d'aucun pays en particulier (ma femme aussi française que je suis italien), le sérieux donné à cette question de nationalité ! — au fond, affaire de police, de « boun governo [bonne administration] », rien de plus, mais le vulgaire y ajoute du sentiment, de la fierté, des attendrissements. », Valéry Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 879. また、岩崎力『ヴァルボワまで—現代文学へのオペリスクー』、雪華社、1985年、192頁を参照した。

めにみんな一緒にいこう、貴婦人たちを崇拜せしめるためにみんな一緒にいることを誓おう。なぜなら、神の次には、彼女たちによって、この世のすべての恩恵がもたらされるのだから⁴²⁶」との言葉を選んだ背景には、経験と思い出を集結させ、母親に尽くし、故郷に寄り添う決意が見える。かつて拒んだ「大人として生きる」ことを受け入れ、ラルポーが故郷を新たな目で見つめ始めたことを、母と故郷に捧げる献辞とその作品が物語っている。

またラルポーが「著者解題」に記した多くの事柄は、「本編」の理解をうながすだけでなく、『幼なごころ』の数篇の舞台を故郷とし、『A. O. バルナブース全集』で外国へと自己探求に旅立ち、やがて『アレン』で故郷を讃美する彼の道程を探る鍵になりうる。言うなれば「著者解題」はラルポー研究の礎、その「著者解題」を含む『アレン』はラルポーの全作品へのパスポートである。『アレン』を通して、読者はラルポーの他の著作に導かれる。つまり『アレン』とは、ラルポーの創作活動を凝縮した作品であり、その創作活動の原点がブルボネ地方にあることを示している。

最後に、本研究を通して得られた事柄から、今後の展望を二つ述べておきたい。一点目は、『アレン』に関して、本研究における「帰郷」のテーマから外れるため触れなかった事柄を加えた『アレン論』としてまとめることである。例えば、ヴィシー市立図書館が所蔵する『アレン』の複数の草稿の比較や、本研究の「別冊」に付した注をもとに校訂版を作成するなど、何らかの形で「ラルポー友の会」などを通して発信し、『アレン』がラルポーの重要な作品として見直されるよう働きかけたい。

二点目は、ラルポーが『アレン』の完成とともに精神的な帰郷を果たした後、1935年に脳障害を患い言葉を失うまでの数年間を対象にした研究である。独自のコスモポリティスム観を得たラルポーが、ブルボネ地方に実現させた独立国「ラ・テバインド」で送った「罰せられざる悪徳」である読書の日々によって得た広範な知識をもとに、彼自身の楽しみのために書いた成果は、『罰せられざる悪徳：読書 英語の領域』と『罰せられざる悪徳：読書 フランス語の領域』にまとめられた。しかし、これらの作品に関する網羅的な研究はまだ見られない。是非ともこれから取り組むべき課題としたい。

⁴²⁶ « Allons tous ensemble au service de Dieu et à la défense de nos pays, et jurons d'être tous unis pour faire respecter les Dames, car c'est d'elles, après Dieu, que vient tout l'honneur du monde. », Allen, *Pléiade*, p. 729. (イタリック強調は原典)

参考文献目録

(出版地が東京の場合には記述を省略)

I. Valery Larbaud の著作 (出版年順)

1. 全集

Œuvres complètes de Valery Larbaud, 10 tomes, Paris, Gallimard, 1950-1954.

Œuvres, préface de Marcel Arland, Commentaires et notes par G. Jean-Aubry et Robert Mallet, Essai de bibliographie chronologique par Jacqueline Famerie, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1958.

2. 単著

Samuel Butler, conférence faite le 3 novembre 1920 à la Maison des amis des livres, Les cahiers des amis des livres, 6^e cahier, Paris, A. Monnier, 1920.

Notes sur Maurice Scève, Paris, Porte étroite, 1925.

Préface à un recueil de notes sur quelques poètes français, éd. originale, Maestricht, A. A. M. Stols, 1926.

Allen, illustré d'eaux-fortes originales par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 1927.

Crayons de couleurs, Liège, Édition de la lampe d'Aladdin, 1927.

Rues et visages de Paris, Liège, Édition de la lampe d'Aladdin, 1927.

Une campagne littéraire, Jean Royère et La Phalange, MCMVI-MCMXIV, Paris, Camille Bloch, 1927.

Allen, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929.

Allen, Paris, Gallimard, 1929.

Technique, Paris, Gallimard, 1932.

Lettre à deux amis, avant-propos, notes et bibliographie de Peter Mahillon, Genève, Publiée par les soins de Charles Rathgeb, 1965.

Les Poésies de A. O. Barnabooth : suivi de Poésies diverses et des Poèmes de A. O. Barnabooth éliminés de l'édition de 1913, préface de Robert Mallet, Paris, Gallimard, 1966.

Beauté, mon beau souci, édition critique avec des pages inédites, une étude littéraire, des notes et des planches hors-texte par Jacques-Nathan, Paris, Nizet, 1968.

Le Cœur de l'Angleterre, suivi de Luis Losada, textes établis, présentés, et annotés par Frida Weissman, Paris, Gallimard, 1971.

Lettres à Henry-Louis Mermod, Lausanne, Revue de belles-Lettres, 1972.

Lettre de Londres, avant-propos et notes de Charles Rathgeb, Genève, Publié par les soins de

- Charles Rathbeb, 1972.
- La Modernisation de l'orthographe des textes anciens*, postface de l'éditeur, extrait d'une lettre de Valery Larbaud à A. A. M. Stols, Paris, Éditions des Cendres, 1984.
- Lettre aux imprimeurs*, Paris, Éditions des Cendres, 1984.
- Mon itinéraire, août 1881-septembre 1926*, établi en septembre 1926 à la demande d'Alexandre Stols, Paris, Éditions des Cendres, 1986.
- Pages arrachées à un journal de route, Venise-Trieste-Marseille*, Paris, Le Promeneur, 1990.
- De la littérature que c'est la peine*, préface de Jacques Réda, Saint-Clément-la-Rivière, Fata Morgana, 1991.
- Lettres d'un retiré*, édition établie et préfacée par Michel Bulteau, Paris, La Table Ronde, 1992.
- La Force et l'outil*, avec une préface de Roger Grenier, Paris, Éditions des Cendres, 1994.
- Sous l'invocation de Saint Jérôme*, édition augmentée de textes annexes, Paris, Gallimard, 1997.
- Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées*, édition revue et complétée par Béatrice Mousli, Paris, Gallimard, 1998.
- Lettres de Paris : pour le New Weekly (mars-août 1914)*, traduit de l'anglais par Jean-Louis Chevalier, introduction et notes d'Anne Chevalier, Paris, Gallimard, 2001.
- Du Navire d'argent*, chroniques traduites de l'espagnol par Martine et Bernard Fouques, introduction, établissement du texte et notes d'Anne Chevalier, Paris, Gallimard, 2003.
- Allen*, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006.
- Notes pour servir à ma biographie : an uneventful one*, notes et postface par Françoise Lioure, Paris, Éditions Claire Paulhan, 2006.
- Journal*, édition définitive, texte établi, préfacé et annoté par Paule Moron, Paris, Gallimard, 2009.
- A. O. Barnabooth : his diary*, translated from the french by Gilbert Cannan, with an introduction by Alan Jenkins, London, Quartet Books, 1991.
- The Poems of A. O. Barnabooth*, translated from the french by Ron Padgett and Bill Zavatsky, Boston, Black Widow press, 2008.
- 『美わしきフェルミナ』、新庄嘉章訳、新潮文庫、1955年。
- 「恋人よ幸せな恋人よ……」、片山正樹訳、『世界の文学 52 フランス名作集』、中央公論社、1966年。
- 『A. O. バルナブース全集』、岩崎力訳、河出書房新社、1973年。
- 『秘めやかな心の声……』、岩崎力訳、神戸、南柯書局、1980年。
- 『めばえ (アンファンティヌ)』、池田公麿訳、旺文社文庫、1980年。
- 「テゼの船」、岩崎力訳、『ふらんす』1990年10月号-1991年3月号。
- 『罰せられざる悪徳・読書』、岩崎力訳、みすず書房、1998年。
- 『幼なごころ』、岩崎力訳、岩波文庫、2005年。

『恋人たち、幸せな恋人たち』、石井啓子訳、筑摩書房、2009年。

『A. O. バルナブース全集』(上・下)、岩崎力訳、岩波文庫、2014年。

3. 一部執筆

- « Walt Whitman » in *Walt Whitman : Œuvres choisies, Poèmes et Proses*, traduits par Jules Laforgue, Louis Fabulet, André Gide, Valery Larbaud, Jean Schlumberger, Francis Vielé-Griffin, précédés d'une étude par Valery Larbaud, Paris, Éditions de la Nouvelle Revue Française, 1918.
- « Introduction », in Logan Pearsall Smith, *Trivia*, traduction de Philippe Neel avec la collaboration de l'auteur, introduction de Valéry [sic] Larbaud, Paris, Grasset, 1921.
- « Introduction », in Shakespeare, *Les Sonnets*, traduction d'Émile Le Brun, introduction de Valery Larbaud, texte anglais et français (suivi de notes et variantes), Paris, J. Schiffrin, 1927, Collection classique des Éditions de la Pléiade, t. 2, pp. I-XXVIII.
- « Préface », in Lucien Pénat, *Le Bourbonnais : album de dix eaux-fortes*, préface de Valery Larbaud, Paris, impr. E. Dollé, 1927.
- « Préface », in William Faulkner, *Tandis que j'agonise*, traduit de l'anglais par Maurice E. Coindreau, Paris, Gallimard, 1934.
- La relique*, préf. de Valery Larbaud, trad. du portugais par Georges Raeders, introd. Alice Machado, Paris, Nouvelles Éditions Latines, 1999.
- LEVET, Henry J.-M., *Cartes postales et autres textes*, précédés d'une conversation de Léon-Paul Fargue et Valery Larbaud, édition de Bernard Delvaille, Paris, Gallimard, 2001.

4. 雑誌掲載 (作品名で記載・初出を含む)

- « Portrait d'Éliane à quatorze ans », in *La Phalange*, n° 26, 15 août 1908, pp. 97-110.
- « Walt Whitman en français » in *La Phalange*, n° 34, 20 avril 1909, pp. 952-955.
- « In memoriam Charles-Louis Philippe », in *La Phalange*, n° 43, 20 janvier 1910, pp. 193-195.
- « Le Couperet », in *La Phalange*, n° 52, 20 octobre 1910, pp. 344-371.
- « A. O. Barnabooth : Journal d'un milliardaire », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 50, 1^{er} février 1913, pp. 177-237.
- « A. O. Barnabooth : Journal d'un milliardaire », in *La Nouvelle Revue française*, n° 51, 1^{er} mars 1913, pp. 399-471.
- « A. O. Barnabooth : Journal d'un milliardaire », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 52, 1^{er} avril 1913, pp. 579-630.
- « A. O. Barnabooth : Journal d'un milliardaire », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 53, 1^{er} mai 1913, pp. 766-814.
- « A. O. Barnabooth : Journal d'un milliardaire », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 54, 1^{er}

- juin 1913, pp. 933-1000.
- « Questions Militaires », in *Cahiers d'aujourd'hui*, n° 6, aout 1913, pp. 315-318.
- « La Grande Époque », in *La Phalange*, n° 88, 20 octobre 1913, pp. 304-337.
- « Ce vice impuni, La lecture », in *Commerce*, cahier I, été 1924, pp. 63-102.
- « Fragments de *Microcosme*, suivis de « Notes sur Maurice Scève » », in *Commerce*, cahier V, automne 1925, p. 211-231.
- « Quelques notes sur Antoine Héroët », in *Commerce*, cahier IX, automne 1926, pp. 184-194.
- « Allen », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 161, 1^{er} février 1927, pp. 137-154.
- « Allen », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 162, 1^{er} mars 1927, pp. 296-317.
- « Chantelle », in *La Revue du Centre*, mai-juin 1927, pp. 85-87 (avec des bois de Paul Devaux).
- « Une nonnain », in *Commerce*, cahier XVII, automne 1928, pp. 27-70.
- « À propos des Éditions Bourbonnaises », in *Le Bourbonnais littéraire*, n° 7, 1934, pp. 14-16.
- « Jean de Lingendes », in *Le Bourbonnais littéraire*, n° 9, 1935, pp. 69-75.
- « Notes sur Jean de Lingendes (suite) », in *Le Bourbonnais littéraire*, n° 10, 1935, pp. 149-151.
- « Fragment d'autobiographie », traduit de l'espagnol par Nicole Canto, in *Europe revue mensuelle*, n° 798, 1995, pp. 7-11.

5. 書簡

- Francis Jammes et Valery Larbaud, Lettres inédites*, introduction et notes par G. Jean-Aubry, Paris, La Haye, A. A. M. Stols, 1947.
- « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 15, 1957, pp. 226-234.
- « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin (suite) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 16, 1958, pp. 268-272.
- « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin (suite et fin) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 17, 1959, pp. 353-360.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 18, 1960, pp. 409-412.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 19, 1961, pp. 457-460.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud (suite) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 20, 1962, pp. 513-516.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud (suite) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 21, 1963, pp. 52-55.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud (suite) », in *Bulletin des amis de*

- Charles-Louis Philippe*, n° 22, 1964, pp. 68-71.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud (suite) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 23, 1965, pp. 52-55.
- « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud (suite et fin) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 24, 1966, pp. 52-56.
- Correspondance 1920-1935 : Valery Larbaud*, G. Jean-Aubry, introduction et notes de Frida Weissman, Paris, Gallimard, 1971.
- Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud*, texte établi, présenté et annoté par Th. Alajouanine, Paris, Gallimard, 1971.
- Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. I, 1899-1909, introduction et notes de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1979.
- Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. II, 1910-1920, introduction et notes de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1980.
- Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. III, 1921-1937, introduction et notes de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1980.
- Deutsch-französische Gespräche 1920-1950 : La correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valery Larbaud*, éditée par Herbert et Jane M. Dieckmann, Frankfurt am Main, Klostermann, 1980.
- Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, 2 tomes, édition établie par Christiane et Marc Kopylov, introduction de Pierre Mahillon, Paris, Éditions des Cendres, 1986.
- Correspondance André Gide et Valery Larbaud, 1905-1938*, édition établie, annotée et présentée par Françoise Lioure, introduction de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, *Cahiers André Gide*, n° 14, 1989.
- Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach, 1919-1933*, correspondance établie et annotée par Maurice Saillet, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 1991.
- Correspondance avec André Spire*, édition établie et présentée par Bernard Delvaille, Paris, Éditions des Cendres, 1992.
- « Correspondance Valery Larbaud-Paul Claudel », présentée par Françoise Lioure, in *Paul Claudel*, dirigé par Pierre Brunel, *Cahiers de L'Herne*, n° 70, Paris, Éditions de l'Herne, 1997, pp. 399-420.
- Valery Larbaud & Jacques Rivière, Correspondance 1912-1924 : le bénédictin et l'homme de barre*, édition établie, présentée et annotée par Françoise Lioure, Paris, Éditions Claire Paulhan, 2006.
- Valery Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957*, édition établie et annotée par Jean-Philippe Segonds, introduction de Marc Kopylov, préface de Michel Déon de l'Académie Française, Paris, Gallimard, 2010.

II. Valery Larbaud に関する文献

1. 研究書・研究書所収の論文（著者名アルファベット順）

- ALAJOUANINE, Théophile, *Valery Larbaud sous divers visages*, Paris, Gallimard, 1973.
- BAJON, Bernard-Dominique, *La Suisse et la Savoie de Valery Larbaud*, Genève, Slatkine, 1999.
- BERQUIN, François, *Larbaud des Équivoques*, avec le soutien de l'Université du Littoral-Côte d'Opal, Villeneuve d'Ascq, Press Universitaires du Septentrion, 2011.
- BESSIÈRE, Jean, *Valery Larbaud, la prose du monde*, Paris, Presses universitaires de France, 1981.
- BOUMADIANE, Essaid, « Allen et l'avenir de l'Europe », in *Valery Larbaud : Espaces et Temps de l'Humanisme*, études rassemblées par Auguste Dezalay et Françoise Lioure, et présentées par R. Grenier, M. Kuntz et A. Dezalay, Clermont-Ferrand, Association des publications de la Faculté des lettres et sciences humaines de Clermont-Ferrand, 1995, Collection Littératures, pp. 27-33.
- BROWN, John L., *Valery Larbaud*, Boston, Twayne Publishers, 1981.
- CHABROL GAGNE, Nelly, *De l'espace réel à l'espace imaginaire dans l'œuvre de Valery Larbaud*, Lille, Atelier national de reproduction des thèses, 2000.
- , « Style et polyphonie dans Allen », in *Les Langages de Larbaud*, études réunies par Stéphane Chaudier et Françoise Lioure, Centre de recherches sur les littératures modernes et contemporaines, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 2006, Collection Littératures, pp. 203-216.
- CHARBONNIER, Gil, *Les Écritures de la sublimation dans l'œuvre de Valery Larbaud*, Lille, Atelier national de reproduction des thèses, 2006.
- <http://www.theses.paris-sorbonne.fr/these-charbonnier/paris4/2006/these-charbonnier/html/index-frames.html> (2014年7月24日閲覧)
- CONTRERAS, Francisco, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe*, Paris, La Nouvelle revue critique, 1930.
- CORBI SÁEZ, María Isabel, *Valery Larbaud et l'aventure de l'écriture*, Paris, L'Harmattan, 2010.
- DELVAILLE, Bernard, *Essai sur Valery Larbaud*, Paris, Seghers, 1963.
- JEAN-AUBRY, Georges, *Valery Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, Monaco, Éditions Du Rocher, 1949.
- JEUNE, Simon, *De F.G. Graindorge à A. O. Barnabooth, les types américains dans le roman et le théâtre français (1861-1917)*, Paris, Librairie Marcel Didier, 1963.
- LAURENT, Marcel, *Fermina Marquez & Enfants de Valery Larbaud : dialogue avec les chefs-d'œuvre*, Maringues, Chez l'auteur, 1981.

- MOIX, Gabrielle, *Valery Larbaud et l'évolution des formes littéraires*, Publications universitaires européennes, Série XIII. Langue et littérature françaises, Vol. 138, Berne, Peter Lang, 1989.
- MOUSLI, Béatrice, *Valery Larbaud*, Paris, Flammarion, 1998.
- RABATÉ, Ève, *La Revue Commerce : l'esprit « classique moderne » (1924-1932)*, Paris, Classiques Garnier, 2012.
- PASTUREAU, Jean, *Enfance et adolescence dans l'œuvre de Valery Larbaud*, Aix-en-Provence, La Pensée Universitaire, 1964.
- ROMAINS, Jules, *Lettre à A. O. Barnabooth*, Liège, Dynamo, 1950.
- RUGGIERO, Ortensia, *Valery Larbaud et l'Italie*, Paris, Nizet, 1963.
- SALADO, Régis, CHARBONNIER, Gil, WOLKENSTEIN, Julie, ZIEGER, Karl, *La Fiction de l'intime, V. Larbaud, Amants, heureux amants..., Beauté, mon beau souci..., Mon plus secret conseil..., A. Schnitzler Mademoiselle Else et La Nouvelle rêvée, V. Woolf, Mrs. Dalloway*, Neuilly, Atlande, 2001.
- SEGONDS, Jean-Philippe, *L'Enfance bourbonnaise de Valery Larbaud*, Moulins, Éditions des Cahiers bourbonnais, 1967.
- STAAY, Élisabeth van der, *Le monologue intérieur dans l'œuvre de Valéry [sic] Larbaud*, Paris, Champion-Slatkine, 1987.
- THIÉBAUT, Marcel, *Évasions littéraires*, Paris, Gallimard, 1935.
- TROULAY, Marcel, *Valery Larbaud : essai de bibliographie chronologique des études en toutes langues I, 1897-1935*, Paris-Caen, Lettres modernes minard, 1998.
- WEISSMAN, Frida, *L'Exotisme de Valery Larbaud*, Paris, Nizet, 1966.
- Hommage à Valery Larbaud*, Neuchâtel, Revue de Belles-Lettres, 1958.
- Hommage à Valery Larbaud, 1881-1956 [sic]*, *La Nouvelle Revue française*, n° 57, 1^{er} septembre 1957 ; repr., Paris, Nouvelle revue française, 1990.
- Valery Larbaud, Cahiers de L'Herne*, n° 61, ce cahier a été dirigé par Anne Chevalier, Paris, Éditions de l'Herne, 1992.
- 岩崎力『ヴァルボワまで—現代文学へのオベリスク—』、雪華社、1985年。
- 瓜生濃世「ヴァレリー・ラルボーの作品における自己確立の葛藤とその表現」、関西学院大学博士論文、2009年。
- 西村靖敬『1920年代パリの文学—「中心」と「周縁」のダイナミズム—』、多賀出版、2001年。

2. 雑誌論文・新聞記事・インタビュー記事（著者名アルファベット順）

- BLIN, René, « Le masque de Valery Larbaud », in *Prétexte, Revue littéraire bimestrielle*, Nouvelle série, n° 1, Paris, Prétexte, janvier-février 1958.

- BURIOT-DARSILES, Henri, « LETTRES ET ARTS : VOYAGES », in *Courrier de l'Allier*, le 5 mai, 1927, p. 3a-d.
- CHABROL GAGNE, Nelly, « Valery Larbaud et les « États-jouets » ou une approche microcosmique de l'espace larbaldien », in *La Géocritique mode d'emploi de WESTPHAL*, Bertrand, Limoges, Presses Universitaires de Limoges, 2000.
- CHEVALLIER, Georgette, « Valery Larbaud et la Savoie », in *La Revue Savoisienne*, 139^e, Annecy, Académie Florimontaine Annecy, 1999.
- CHEVALIER, Jaques, « Valery Larbaud Bourbonnais au Pays d'Allen », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 2, 1957, pp. 49-52.
- COSTA IDEIAS, José Antonio, « Allen de Valery Larbaud : littérature, esthétique, histoire, quelques implications », in *Ariane* (Lisbonne), n°11-12, 1993-1994, pp. 77-88.
- GAGNON, Camille, « VALERY LARBAUD : Allen, illustré d'eaux-fortes originales, par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 122, boulevard Murat, XVI^e », in *Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais*, juillet-août 1927, pp. 233-236.
- GIDE, André, « Notes » in *La Nouvelle Revue Française*, n° 1, 1^{er} février 1909, pp. 101-103.
- KEMP, Robert, « Les lettres : les livres nouveaux », in *Revue universelle*, t. 38, n° 10, 15 août 1929, pp. 492-497.
- KUNTZ, Monique, « Autour d'Allen », in *Académie du Vernet, Cahier du 40^e anniversaire 1944-1988*, Vichy, impr. Wallon, 1987, pp. 45-58.
- LEFÈVRE, Frédéric, « Une heure avec Valery Larbaud », in *Une heure avec...*, 2^e série, Paris, Nouvelle revue française, 1924, pp. 203-225.
- LE GRIX, François, « Trois romans qui sont des fables : Valery Larbaud, *A. O. Barnabooth* (Nouvelle Revue Française) », in *La Revue hebdomadaire*, juillet 1914, pp. 396-425.
- LIOURE, Françoise, « Valery Larbaud : Allen ou de l'autonomie », in *L'Auvergne littéraire artistique et historique*, n° 201-202, Clermont-Ferrand, L'Auvergne littéraire, 1969, pp. 31-48.
- , « Valery Larbaud », in *Magazine littéraire*, n° 171, avril 1981, pp. 8-31.
- , « La marge d'une œuvre : Valery Larbaud, *Allen* et les *Notes sur Allen* », in *La Marge : Colloque de Clermont-Ferrand*, janv. 1986, édité par François Marotin, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 1988, pp. 61-69.
- <http://books.google.co.jp/books?id=yWSjQ2jD-nkC&pg=PA61&lpg=PA61&dq=francoise+lioure+allen+et+les+notes+sur+allen&source=bl&ots=3c4EVd-BOL&sig=eHJgjqFrDhRkIKABgGnuT4ZKplk&hl=ja&sa=X&ei=bgTHU7uOJI-D8gXPqIGwDw&ved=0CDEQ6AEwAw#v=onepage&q=francoise%20lioure%20allen%20et%20les%20notes%20sur%20allen&f=true>
- (2014年7月17日閲覧)
- , « « Paperasses » Un inédit de Valery Larbaud », in *Genesis : Revue internationale de critique*

- génétique*, n° 32, Paris, Éditions des archives contemporaines, 2011, pp. 149-154.
- MARTIN DU GARD, Maurice, « Pages du Journal », in *Arts*, 13 février 1957.
- MATSUMURA, Takeshi, « Émile Guillaumin, *Allen* de Valery Larbaud et des mots régionaux », in *FRACAS*, numéro 1, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 26 février 2014, pp. 1-11.
- , « Émile Guillaumin et Valery Larbaud autour d'*Allen* de Valery », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 227, 2014, pp. 51-56.
- , « *Allen*, Larbaud et Jean-Aubry : remarques littéraires et lexicographiques », in *FRACAS*, numéro 10, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 12 août 2014, pp. 1-9.
- MINARD, Isabelle, « Le Bourbonnais de Valery Larbaud », in *Arpa*, n° 58, Clermont-Ferrand, Association de recherche poétique en Auvergne, 1995, pp. 16-21.
- O'BRIEN, Justin, « Lafcadio et Barnabooth, une hypothèse », in *Prétexte, Revue littéraire bimestrielle*, Nouvelle série, n° 1, Paris, Prétexte, janvier-février 1958.
- PAZ, Octavio, « Croisements et bifurcations : A. O. Barnabooth, Álvaro de Campos, Alberto Caeiro », traduit de l'espagnol par Jean-Claude Masson, in *La Nouvelle Revue Française*, n° 437, juin 1989.
- POURRAT, Henri, « Valery Larbaud », in *La Montagne*, le jeudi 7 février 1957, p. 8.
- RABATÉ, Ève, « Commerce et La NRF, concurrentes ou complémentaires ? », in *La Revue des revues, Histoire et actualité des revues*, n° 42, Saint-Etienne, Vasti-Dumas, octobre 2009, pp. 39-58.
- RIVIÈRE, Jacques, « Le Roman d'aventure », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 53, 1^{er} mai 1913, pp. 748-765 ; n° 54, 1^{er} juin 1913, pp. 914-932 ; n° 55, 1^{er} juillet 1913, pp. 56-77.
- SATO, Miyuki, « Une traduction juxtalinéaire franco-japonais d'*Allen* de Valery Larbaud », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 228, 214, pp. 49-69.
- SARAZIN, Maurice, « Un correspondant de Valery Larbaud : L'universitaire et écrivain Robert Tournaud (Montluçon 1903-Cestas 1938) », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 200, 2007, pp. 51-61.
- , « Buriot-Darsiles et *Les Cahiers du Centre*, revue régionaliste et décentralisatrice (1908-1936). Cet érudit, honora les lettres bourbonnaises », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 221, 2012, pp. 72-77.
- , « Jacques Chevalier, Valery Larbaud, Paul Devaux et la « République des Arbres » (la forêt de Tronçais) », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 222, 2012, pp. 53-59.
- TOURNAUD, Robert, « « ALLEN » Par Valery LARBAUD », in *Courrier de l'Allier*, le 28 juillet, 1927, p. 2e-f.

- , « *Jaune Bleu Blanc*, par Valery Larbaud (Édition de la N. R. F.) », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 173, 1^{er} février 1928, pp. 247-250.
- , « *Allen*, par Valery Larbaud (Édition de la N. R. F.) », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 193, 1^{er} octobre 1929, pp. 555-558.
- TROUBAT, Oliver, « « Allen » une devise chevaleresque », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 195, 2006, pp. 53-57.
- WAGNER, Birgit, « La psyché mise sur les rails ; Larbaud et Svevo », in *Feuilles de rail, les littératures du chemin de fer*, sous la direction de Gabrielle Chamarat et Claude Leroy, Paris, Paris-Méditerranée, 2006, pp. 174-183.
- « Valery Larbaud : portraits et études », in *Arpa : revue de poésie et de littérature*, n° 58, Clermont-Ferrand, Association de recherche poétique en Auvergne, 1995.
- L'Atelier du roman*, n° 28, « En relisant *A. O. Barnabooth* », Paris, La table ronde, décembre 2001.
- Les Cahiers Bourbonnais*, « In memoriam Valery Larbaud : 1881-1957 », Moulins, Cahiers Bourbonnais, n° 2, 1957.
- Cahiers de l'Académie du Vernet*, Académie du Vernet quatrième cahier, Vichy, impr. Copono-Book, 1959.
- Cahiers de l'Académie du Vernet, En hommage à Valery Larbaud et Maurice Constantin-Weyer à l'occasion du centenaire de leur naissance*, Vichy, impr. Wallon, 1981.
- Cahiers de l'Académie du Vernet, Cahier du 40^e anniversaire 1948-1988*, Vichy, impr. Wallon, 1987.
- « Présence de Valery Larbaud », in *Confluence*, n° 37-38, décembre-janvier 1945, Lyon, Confluences, 1945.
- « Valery Larbaud », in *Europe, revue littéraire mensuelle*, Paris, Europe, octobre, 1995.
- Intentions*, n° 9, « numéro spécial consacré à Valery Larbaud », novembre 1922.
- Roman 20-50, Revue d'étude du roman du XX^e siècle*, n° 37, « *A. O. Barnabooth* et *Enfantines* de Valery Larbaud », études réunies par Catherine Douzou, Lille, Centre d'étude du roman des années 1920 aux années 1950 de l'Université Charles-de-Gaulle-Lille III, juin 2004.
- 岩崎力「ヴァレリー・ラルボーの世界—*Fermina Márquez* をめぐって—」、『東京外国語大学論集』第12号、1965年、1-17頁。
- 「ヴァレリー・ラルボーとコスモポリチスム」、東大比較文学会、『比較文学研究』第10号、1965年11月、74-114頁。
- 「アヌシー、1931年9月7日、月曜日—ヴァレリー・ラルボーの日記を読む—」、『プール学院大学研究紀要』第39号、1999年、357-367頁。
- 佐藤みゆき「ラルボーと「バルナブース」—『A. O. バルナブース全集』における作者と作品—」、『学習院大学人文科学論集』第17号、2008年、225-241頁。

- 「「バルナブース」の変化—『A. O. バルナブース全集』の「日記」における人物像—」、
『学習院大学人文科学論集』第18号、2009年、217-237頁。
- 「バルナブースの「脱物質化」—『A. O. バルナブース全集』の「哀れなシャツ屋」
に関する一考察—」、『学習院大学人文科学論集』第19号、2010年、65-84頁。
- 『A. O. バルナブース全集』「哀れなシャツ屋」における「見せかけ」の否定—ベル・
エポック期の消費社会を背景に—」、学習院大学大学院人文科学研究所共同プロジェク
ト「社会のカタログ化と文学 O-M 2009-2010」、5-13頁。
- 「ヴァレリー・ラルボーの *Allen* における「帰郷」—ブルボネ地方と «*retirance*»—」、
学習院大学大学院人文科学研究所共同プロジェクト「社会のカタログ化と文学 O-M
2010-2011」、5-11頁。
- 「ヴァレリー・ラルボー：『幼なごころ』と少年たちの離郷」、学習院大学大学院人文
科学研究所共同プロジェクト「社会のカタログ化と文学 O-M 2011-2012」、21-30頁。
- 「ヴァレリー・ラルボー：『アレン』と同郷の作家たち」、『学習院大学人文科学論集』
第21号、2012年、133-147頁。
- 「ヴァレリー・ラルボー『アレン』考—「ノート」の意義—」、日本フランス語フラ
ンス文学会『関東支部論集』第21号、2012年、87-98頁。
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud » (ヴァレリー・
ラルボー『アレン』、「著者解題」日本語訳・注釈<1>) , in *FRACAS*, Groupe de recherche
sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), numéro 2, le 12 mars
2014, pp. 1-19.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (2^e article) » (ヴァ
レリー・ラルボー『アレン』、「著者解題」日本語訳・注釈<2>) , in *FRACAS*, Groupe de
recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), numéro 3, le
23 mars 2014, pp. 1-15.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (3^e article) » (ヴァ
レリー・ラルボー『アレン』、「著者解題」日本語訳・注釈<3>) , in *FRACAS*, Groupe de
recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), numéro 4, le
31 mars 2014, pp. 1-19.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (4^e article) » (ヴァ
レリー・ラルボー『アレン』、「著者解題」日本語訳・注釈<4>) , in *FRACAS*, numéro 5,
Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le
11 avril 2014, pp. 1-10.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (5^e article) » (ヴァ
レリー・ラルボー『アレン』、本編、日本語訳・注釈<1>) , in *FRACAS*, numéro 6, Groupe
de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 26 avril

- 2014, pp. 1-22.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (6^e article) » (ヴァレリー・ラルボー『アレン』、本編、日本語訳・注釈<2>) , in *FRACAS*, numéro 7, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 7 mai 2014, pp. 1-23.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (7^e article) » (ヴァレリー・ラルボー『アレン』、本編、日本語訳・注釈<3>) , in *FRACAS*, numéro 8, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 11 mai 2014, pp. 1-23.
- « Une traduction juxtalinéaire franco-japonaise d'*Allen* de Valery Larbaud (8^e article) » (ヴァレリー・ラルボー『アレン』、本編、日本語訳・注釈<4>) , in *FRACAS*, numéro 9, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 24 mars 2014, pp. 1-23.
- 西村靖敬「ヴァレリー・ラルボーのコスモポリチスムをめぐる諸問題」、東大比較文学会、『比較文学研究』第39号、1981年、148-154頁。
- 「トランザトランティーカーコスモポリット＝バルナブースの帰還」、*Méli-Mélo* 第1号、七月堂（印刷）、1985年、1-8頁。
- 『伝記』から『日記』へ—ラルボーの「裕福なアマチュアの詩」から「A. O. バルナブース全集」への改作をめぐる—、『千葉大学フランス文学研究 2』、1988年、52-61頁。
- 「ヴァレリー・ラルボーのウォルト・ホイットマン受容—批評と翻訳を通して—」、『千葉大学人文研究』第42号、2013年、25-56頁。
- 樋口裕一「V. Larbaud における『小説』の問題—A. O. Barnabooth の « Journal intime » をめぐって—」、日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』第35号、1979年、89-100頁。
- 「見えない手・見えない聞き手—V.ラルボーの《語り》と《人称》」、国学院大学外国語研究室編『Walpurgis』、1984年、137-153頁。

3. コロク・シンポジウムカタログ（出版年順）

- Colloque Valery Larbaud*, tenu à Vichy du 17 au 20 juillet 1972, discours, textes consacrés à Valery Larbaud, discussions, Paris, Nizet, 1975.
- Valery Larbaud (1881-1957) : XX^e anniversaire de sa mort, 19 juin-10 juillet 1977, Manifestations organisées par la Bibliothèque Municipale de Vichy*, Vichy, impr. Wallon, 1977.
- Valery Larbaud et la littérature de son temps*, actes du colloque de Vichy, 17-19 juin 1977, XX^e anniversaire de la mort de V. Larbaud, organisé par Association internationale des amis de

- Valery Larbaud, Paris, Librairie C. Klincksieck, 1978.
- Valery Larbaud et le Luxembourg*, exposition à la bibliothèque nationale de Luxembourg, salle Mansfeld du 15 au 30 mai 1981.
- Colloque « *Valery Larbaud et la France* », Paris-Sorbonne, le 21 novembre 1989, sous la présidence de Roger Grenier, Président des Amis de Valery Larbaud, Jacques Lacarin, Député-Maire de Vichy, Clermont-Ferrand, Institut d'études du Massif central, 1990.
- Valery Larbaud et l'Europe*, catalogue par la Bibliothèque de Vichy, 1992.
- Le Bourbonnais de Valery Larbaud*, Exposition organisée à la Médiathèque Valery Larbaud-Vichy, du 20 mai au 15 juillet 1995, à l'occasion du 29^e prix Valery Larbaud.
- Valery Larbaud : Espaces et Temps de l'Humanisme, Colloque Valery Larbaud (1992, Strasbourg)*, études rassemblées par Auguste Dezalay et Françoise Lioure, et présentées par R. Grenier, M. Kuntz et A. Dezalay, Clermont-Ferrand, Association des publications de la Faculté des lettres et sciences humaines de Clermont-Ferrand, Collection Littératures, 1995.
- Les Langages de Larbaud, actes du colloque de Clermont-Ferrand, 11-13 mars 2004*, études réunies par Stéphane Chaudier et Françoise Lioure, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 2006.

4. *Cahiers des amis de Valery Larbaud* (出版年順・2001年以降は副題を併記)

- Cahiers des amis de Valery Larbaud*, n^{os} 1-37, Clermont-Ferrand, 1967-2000.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Lettres d'Italie : Valery Larbaud, Mario Puccini et Milan Begović*, dossier établi par Jean Joinet, Nouvelle série, n^o 1, Paris, Éditions des Cendres, 2001.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Le manuscrit de « Barnabooth »*, dossier établi par Anne Chevalier, Nouvelle série, n^o 2, Paris, Éditions des Cendres, 2002.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Lettres d'un enfant : Valery Larbaud à Sainte-Barbe, 1891-1894*, dossier établi par Marc Kopylov, avec une préface de Jean-Philippe Segonds, Nouvelle série, n^o 3, Paris, Éditions des Cendres, 2003.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Enfances et jeunesse*, dossier établi par Anne Chevalier, Nouvelle série, n^o 4, Paris, Éditions des Cendres, 2004.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Dernière tentation de Valery Larbaud : le Brésil*, dossier établi par Pierre Rivas, Nouvelle série, n^o 5, Paris, Éditions des Cendres, 2005.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Dédicaces, Portraits éclatés*, dossier établi par Stéphane Chaudier, Nouvelle série, n^o 6, Paris, Éditions des Cendres, 2006.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Du journal intime au monologue intérieur dans la littérature du XX^e siècle, Cahier Valery Larbaud*, n^o 43, études réunies et présentées par Anne Chevalier et

- Françoise Lioure, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2008.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Le journal de Larbaud*, études réunies et présentées par Gil Charbonnier, *Cahier Valery Larbaud*, n° 44, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2008.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Valery Larbaud, écrivain critique*, études réunies et présentées par Anne Chevalier, *Cahier Valery Larbaud*, n° 45, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2009.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Valery Larbaud, écrivain critique (2)*, études réunies et présentées par Françoise Lioure, *Cahier Valery Larbaud*, n° 46, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2010.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Valery Larbaud-Nino Frank, Correspondance inédite (1926-1936)*, édition établie, introduite et annotée par Jean Joinet, *Cahier Valery Larbaud*, n° 47, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2011.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Valery Larbaud-Jean Royère, Correspondance I (1908-1918)*, édition introduite, éditée et annotée par Gil Charbonnier, n° 48, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2012.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Valery Larbaud-Jean Royère, Correspondance II (1921-1927)*, édition établie, introduite et annotée par Delphine Viellard, n° 49, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2013.
- Cahiers des amis de Valery Larbaud, Valery Larbaud-Domaine antique*, études réunies et présentées par Delphine Viellard, n° 50, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2014.

5. 書簡（出版年順）

- PHILIPPE, Charles-Louis, « Lettres à Valery Larbaud », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 311, 1^{er} août 1939, pp. 278-285.
- Correspondance Paul Claudel et André Gide 1899-1926*, préface et notes par Robert Mallet, Paris, Gallimard, 1949.

III. ブルボネ地方関連

1. 書籍・研究書（著者名アルファベット順）

- ALLIER, Achille, *L'Ancien Bourbonnais (histoire, monuments, mœurs, statistique)*, 4 tomes, continué par Adolphe Michel ; gravé et lithographié sous la direction de Aimé Chenavard ; d'après les dessins et documents de M. Dufour ; par une société d'artistes, Moulins, Desrosiers fils, 1833-1838 ; réédition, Moulins, Crépin-Leblond, 1934-1938.
- BERNARD, Augustin, *Le Bourbonnais et Berry*, choix de textes précédés d'une étude collection :

- Les Provinces françaises, Anthologies illustrées, Paris, Librairie Renouard, H. Laurens, 1923.
- CASSAGNE, Jean-Marie, KORSACK, Mariola, *Les Noms de lieux de l'Allier : D'où le nom de mon village ?*, Bordeaux, Éditions Sud Ouest, 2008.
- CHAMBON, Jean-Pierre, *Études sur les régionalismes du français, en Auvergne et ailleurs*, Paris, Centre national de la recherche scientifique Klincksieck, 1999.
- CHAZAUD, Martial-Alphonse, *La Chronique du bon duc Loys de Bourbon*, Paris, Renouard, 1876.
- CÔTE, Léon, *Achille Allier, historien, conteur, imaginer bourbonnais 1807-1936*, Moulins, Crépin-Leblond, 1942.
- CREPIN-LEBLOND Marcellin et RENAUD Claude, *Éphémérides moulinoises*, Moulins, Crépin-Leblond, 1926.
- DÉBORDES, Jean, *Les Mystères de l'Allier : histoires insolites, étranges, criminelles et extraordinaires*, Clermont-Ferrand, Éditions de Borée, 2010.
- DELAIGUE, Ernest (publié par), *Annales Bourbonnais : Recueil mensuel l'historique, archéologique et artistique*, avec le concours d'écrivains et d'artistes de la région, sixième année, Moulins, imprimerie Étienne Auclair, 1892 ; repr., Kessinger Publishing, 2010.
- DEPEYRE, Gabriel, *Les Ducs de Bourbon*, Paris, H. Champion, Toulouse, E. Privat, 1897.
- D'ORLIAC Jehanne, *Anne de Beaujeu, roi de France*, Paris, Plon, 1926.
- DUPIEUX Paul et MOREAU Marcel, *Histoire du Bourbonnais pour la jeunesse*, dessins de Yvonne Diverneresse, préf. Monsieur Vérel, inspecteur d'Académie du département de l'Allier, Moulins, Crépin-Leblond, 1945.
- FAZY, Max, *Les Origines du Bourbonnais*, 2 tomes, Impr. du Progrès de L'Allier, 1924.
- HALÉVY, Daniel, *Visites aux paysans du Centre*, Paris, Grasset, 1921.
- LEBEY André, *Le Connétable de Bourbon 1490-1527*, Paris, Académique didier, 1904.
- PERICHON, Nicole, *Vichy de A à Z*, Éditions Alan Sutton, 2009.
- PHILIPPE, Charles-Louis, *Œuvres complètes*, 5 tomes, édition présentée et établie par David Roe, Moulins, Éditions Ipomée, 1986.
- RAYNAL, Louis, *Histoire du Berry depuis les temps les plus anciens jusqu'en 1789*, 4 tomes, Bourges, Vermell, 1844-1847.
- ROCHE, Agnès, *Émile Guillaumin : un paysan en littérature*, Paris, CNRS, 2006.
- SARAZIN, Maurice, *Blaise de Vigenère Bourbonnais : introduction à la vie et à l'œuvre d'un écrivain de la Renaissance*, Charroux-en-Bourbonnais, Éditions des Cahiers bourbonnais, 1996.
- TOURNAUD, Robert, *Visite au Bourbonnais—Notes sur Hérisson*, Paris, Éditions de la Revue du Centre, 1928.
- TROUBAT, Oliver, *La Guerre de Cent Ans et le prince chevalier le « bon duc » Louis II de*

Bourbon, 1337-1410, 2 tomes, Montluçon, Cercle d'archéologie de Montluçon et de la région, 2001.

VIPLÉ, Joseph, *Histoire du Bourbonnais*, Moulins, Société bourbonnaise des études locales, 1923.

WIRTH, Thierry, *Vichy 1860-1914 ou la jeunesse de la Reine des Villes d'Eaux*, Chaponost, Dépôt légal n° 10091, 2000.

——, *Vichy*, Saint-Cyr-sur-Loire, Alan Sutton, Collection Mémoire en Images, 2003.

——, *Hier à Vichy 1830-1930*, Lyon, Les Trois Roses, 2008.

Allier Bourbonnais, J. Corrocher et al., Encyclopédie Bonneton, Paris, Bonneton, 1999.

シャルル=ルイ・フィリップ『小さな町で』、山田稔訳、みすず書房、2003年。

東海麻衣子「シャルル=ルイ・フィリップにおける『時』・『時間』・『時間意識』の考察」、広島大学博士論文、2009年。

2. 雑誌論文・雑誌記事（著者名アルファベット順）

ECOLIVET, Henri, « Nicolas de NICOLAY (1517-1583) Dauphinois, seigneur d'Arfeuille. Sa vie, ses aventures, ses œuvres. », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 221, 2012, pp. 49-53.

GUILLAUMIN, Émile, « Philippe en Bourbonnais », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 14-15, 15 février 1910, pp. 207-217.

PHILIPPE, Charles-Louis, « Lettres de Jeunesse », in *La Nouvelle Revue Française*, 1^{er} novembre 1910, n° 23, pp. 536-567, 1^{er} décembre 1910, n° 24, pp. 691-715, 1^{er} mars 1911, n° 27, pp. 337-369, 1^{er} avril 1911, n° 28, pp. 582-606, 1^{er} mai 1911, n° 29, pp. 664-692.

上田耕造「シャルル6世治世におけるブルボン公ルイ2世の動向—国王と諸侯の紐帯に関する一考察—」、関西大学『史泉』第102号、2005年、1-16頁。

——「『諸侯国家』の並存と中世後期フランス王国の諸相—ブルボン家の親族関係を中心に—」、『関西大学西洋史論叢』第12号、2009年、17-35頁。

——「ムーラン—中世のフランスを旅する—」、『関西大学西洋史論叢』第13号、2010年、41-44頁。

3. ブルボネ地方の地方語・方言に関する文法書・辞書（出版年順）

CHOUSSY, Joseph-Édouard, *Le Patois bourbonnais, précédé d'un simple essai étymologique*, Moulins, impr. Bourbonnaise L. Lamapet, 1914 ; repr., Genève, Slatkine Reprints, 1978.

BONNAUD, Pierre, *L'Auvergnat et le français régional : mots, expressions, tournures et traits phonétiques d'origine auvergnate dans le français régional*, Clermont-Ferrand, Centre régional de documentation pédagogique, 1976.

BRUNET, Frantz, *Dictionnaire du parler bourbonnais et des régions voisines*, Cournon d'Auvergne, Borée, 1993.

- DUBUISSON, Pierrette, BONIN, Marcel, *Dictionnaire du français régional du Berry-Bourbonnais*, Paris, Bonneton, 1993.
- POTTE, Jean-Claude, *Le Parler auvergnat : régionalismes du français d'Auvergne*, Paris, Rivages, 1993.
- Dictionnaire des régionalismes de France : géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*, Rézeau (éd.), Bruxelles, Duculot, 2001.
- BERMARD, Jean et CHARDONNET, Jean, *Lexique du parler bourbonnais : Le bocage bourbonnais*, Charroux-en-Bourbonnais, Éditions des Cahiers bourbonnais, 2001.
- DUBUISSON, Pierrette et BONIN, Marcel, *Le Parler du Berry et du Bourbonnais*, Paris, Christine Bonneton, 2002.
- REICHEL, Karl-Heinz, *Dictionnaire général auvergnat-français*, Éditions Créer, 2005.
- DUCHON, Paul, *Grammaire et dictionnaire du patois bourbonnais (canton de Verennes)*, Moulins, Crépin-Leblond, 1904 ; repr., Bibliobazaar, 2009.
- BONIN, Marcel et GAILLARDOM, David, *Le Parler du Bourbonnais*, Paris, Christine Bonneton, 2010.

4. 書簡

- GIDE, André, *Correspondance avec Charles-Louis Philippe et sa famille 1898-1936*, édition établie, présentée et annotée par Martine Sagaert, Centre d'Études Gidiennes, Université Lumière (Lyon II), 1995.
- MATHÉ, Roger (éd.), *Cent dix-neuf lettres d'Émile Guillaumin (dont 73 inédites) 1894-1951 autour du mouvement littéraire bourbonnais*, Paris, Klincksieck, 1969.

IV. その他

1. 研究書・論文等（著者名アルファベット順）

- BERL, Emmanuel, *Mort de la morale bourgeoise*, éd. Jean-Jacques Pauvert, Paris, Gallimard, 1965.
- BRUNEL, Pierre, *Transparences du roman, le romancier et ses doubles au XX^e siècle, Calvino, Cendrars, Cortazar, Echenoz, Joyce, Kundera, Thomas Mann, Proust, Torga, Yourcenar*, Paris, José Corti, 1997.
- CANNONE, Belinda, *Narrations de la vie intérieure*, Paris, Presses universitaires de France, 2001.
- CARVALLO, Fernando et al., *L'Amérique latine et la Nouvelle Revue Française*, Paris, Gallimard, 2001.
- CASANOVA, Pascale, *La République mondiale des lettres*, Paris, Éditions du Seuil, 1999. (ハスカル・カザノヴァ『世界文学空間：文学資本と文学革命』、岩切正一郎訳、藤原書店、2002

- 年)
- CERISIER, Alban, *Une histoire de la NRF*, Paris, Gallimard, 2009.
- CHARDIN, Philippe, *Autour du monologue intérieur*, dir. Philippe Chardin, Paris, Séguier, 2004.
- COHN, Dorrit, *La Transparence intérieure : modes de représentation de la vie psychique dans le roman*, traduit de l'anglais par Alain Bony, Paris, Seuil, 1981.
- COUTURIER, Maurice, *La Figure de l'auteur*, Paris, Seuil, 1995.
- DIDIER, Béatrice, *Le Journal intime*, Paris, Presses universitaires de France, 1976. (ベアトリス・ディディエ『日記論』、西川長夫、後平隆訳、松籟社、1987年)
- FARGUE, Léon-Paul, *Portraits de Famille : Souvenirs*, Avec un portrait de l'auteur par Denise Lannes et des photographies, Paris, J.B. Janin, 1947.
- , *Portraits de famille*, Préface de Colette, Saint-Clément-la-Rivière, Fata Morgana, 1987.
- GAGNON, Camille, *De l'étoile matutine à l'étoile vespérale ; Mémoires*, t. 1, Moulins, Éditions des Cahiers Bourbonnais, 1978.
- GIRARD, Alain, *Le Journal intime*, Paris, Presses universitaires de France, 1963.
- GENETTE, Gérard, *Seuils*, Paris, Éditions du Seuil, 1987 (ジェラルール・ジュネット『スイユ : テクストから書物へ』、和泉涼一訳、水声社、2001年)
- HUBIER, Sébastien, *Littératures intimes : les expressions du moi, de l'autobiographie à l'autofiction*, Paris, Armand Colin, 2003.
- LEJEUNE, Philippe, *Le Pacte autobiographique*, Paris, Seuil, 1975. (フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』、花輪光訳、水声社、1993年)
- MARTIN, Claude, *La Nouvelle revue française : table et index de 1908 à 1943*, Paris, Gallimard, 2009.
- MICHELET, Jules, *Histoire de France*, t. 10, Réforme, Paris, Marpon, 1881-1884.
- MILLY, Jean, *Poétique des textes*, Paris, Armand Colin, 2008.
- MURAT, Michel, *Le Vers libre*, Paris, Champion, 2008.
- MONNIER, Adrienne, *Les Gazettes, 1923-1945*, Paris, Gallimard, 1996.
- MORLIER, Hélène, *Les Guides-Joanne, genèse des Guides-Bleus : itinéraire bibliographique, historique et descriptif de la collection de guides de voyage (1840-1920)*, ouvrage illustré de vignettes, cartes et plans mis au net par Christophe Bailly, Paris, Sentiers débattus, 2007.
- PERROT, Philippe, *Les Dessus et les dessous de la bourgeoisie : une histoire du vêtement au XIX^e siècle*, Paris, Fayard, 1981.
- RAGON, Michel, *Histoire de la littérature prolétarienne de langue française*, Paris, Albi Michel, 1986. (ミシェル・ラゴン『フランス・プロレタリア文学史 民衆表現の文学』、高橋治男訳、水声社、2011年)
- RAIMOND, Michel, *La Crise du roman, des lendemains du naturalisme aux années vingt*, Paris,

- José Corti, 1993.
- RAYMOND, Marcel, *De Baudelaire au surréalisme*, Paris, José Corti, 1969.
- SCÈVE, Maurice, *Œuvres complètes*, texte établi et annoté par Pascal Quignard, Paris, Mercure de France, 1974.
- SCHUB, Louise Rypko, *Léon-Paul Fargue*, Genève, Droz, 1973.
- VEBLEN, Thorstein, *The Theory of the Leisure Class*, New York, A.M. Kelley, 1975. (『有閑階級の理論』、高哲男訳、筑摩書房、2009年)
- WINOCK, Michel, *La Belle Époque, la France de 1900 à 1914*, Paris, Perrin, 2002.
- ピエール・アスリーヌ『ガストン・ガリマール—フランス出版の半世紀—』、天野恒雄訳、みすず書房、1986年。
- アンドレ・シャステル『ローマ劫掠 1527年、聖都の悲劇』(Chastel, André, *Le Sac de Rome, 1527. Du premier maniérisme à la Contre-réforme*)、越川倫明・岩井瑞枝他訳、筑摩書房、2006年。
- エルンスト・ローベルト・クルティウス『現代ヨーロッパにおけるフランス精神』(Curtius, Ernst Robert, *Französischer Geist im neuen Europa*)、大野俊一訳、みすず書房、1980年。
- モーリス・セーヴ『デリー至高の徳の対象—』加藤美雄訳、青山社、1990年。
- ウィリアム・シェイクスピア『ソネット集』、高松雄一訳、岩波文庫、岩波書店、1986年。
『筑摩世界文学大系 第73巻 フォークナー』、筑摩書房、1974年。
- 朝治啓三・渡辺節夫・加藤玄編『中世英仏関係史 1066-1500：ノルマン征服から百年戦争終結まで』、大阪、創元社、2012年。
- 有田英也「ジャン・ジオノ『丘』の病理的空間—人と自然の相互作用」、『成城文藝』第226号、2014年、105-146頁。
- 岩根久他編『フランス文学小事典』、朝日出版社、2007年。
- 遠藤輝明編『地域と国家：フランス・レジオナリズムの研究』、日本経済評論社、1992年。
- 見目誠訳『フラメンカ物語』(作者不詳、*Le roman de Flamenca*)、未知谷、1996年。
- 坂本浩也「プルーストと自動車旅行の美学—『スピード時代の芸術』から『ネットワーク』としての小説へ—」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第14号、2005年、179-192頁。
- 佐藤猛『百年戦争期フランス国制史研究』、北海道大学出版会、2012年。
- 椎名正博「サロンの延長としての文芸誌—*Commerce* 創刊号について—」、日本大学文理学部人文科学研究所、『研究紀要』第62号、2001年、163-176頁。
- 篠沢秀夫『フランス文学案内』、朝日出版社、2001年。
- 辻調グループ・辻静雄料理研究書編著『フランス料理ハンドブック』、柴田書店、2012年。
- 中内克昌訳『フラメンカ物語』(*Le Roman de Flamenca : publié d'après le manuscrit unique de Carcassonne*)、九州大学出版会、2011年。

森地茂・『二層の広域圏』形成研究会編著『人口減少時代の国土ビジョン：新しい国のかたち「二層の広域圏」』、日本経済新聞社、2005年。

和田章男「20世紀フランス文学における旅とエクリチュール—『旅行記』の終焉と『旅行小説』の興隆—」、柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編『テキストの生理学』、朝日出版社、2008年、543-554頁。

2. 事典類（出版年順）

JAUBERT, Hippolyte-François, *Vocabulaire du Berry et de quelques cantons voisins*, Paris, Roret, 1842.

SMITH, William ; CHEETHAM, Samuel, *A Dictionary of Christian antiquities*, London, John Murray, 1880.

EUDEL, Paul, *Les Locutions nantaises*, Nantes, Morel, 1884.

WARTBURG, Walther von, *Französische etymologisches Wörterbuch : eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes*, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1922-.

KLAPP, Otto, *Bibliographie der französischen Literaturwissenschaft (Bibliographie d'histoire littéraire française)*, 1956-.

RHEIMS, Maurice, *Dictionnaire des mots sauvages : écrivains des XIX^e et XX^e siècles*, Paris, Larousse, 1969.

Dictionnaire des Églises de France, t. IIb, auvergne-limousin-bourbonnais, Paris, Robert Laffont, 1971.

Trésor de la langue française, dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960), publié sous la direction de Paul Imbs, Paris, Édition du centre national de la recherche scientifique, 16 tomes, 1971-1994.

Littérature, XX^e siècle, textes et documents, Bernard Lecherbonnier et al., collection dirigée par Henri Mitterand, introduction historique de Pierre Miquel avec la collaboration d'Olivier Barbarant et al., Paris, Nathan, 1989.

Dictionnaire des lettres françaises, Le XX^e siècle, édition réalisée sous la direction de Martine Bercot et d'André Guyaux, Paris, Librairie Générale Française, 1998.

Le Dictionnaire du littéraire, sous la direction de Paul Aron, Denis Saint-Jacques, Alain Viala; avec la collaboration de Marie-André Beaudet et al., Paris, PUF, 2004.

Parlez-vous Nantais ?, les locutions nantais par Paul Eudel, présenté par Stéphane Pajot, Éditions d'Orbeestier, 2006.

La Littérature française : dynamique & histoire, t. 2, contributions de Michel Delon et al., sous la direction de Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, 2007.

GREVISSE, Maurice et GOOSSE, André, *Le Bon Usage*¹⁴, Bruxelles, De Boeck, 2008.

Le Nouveau Petit Robert 2009.

『小学館ロベール仏和大辞典』、1988年。

『バツハ事典』、磯山雅・小林義武・鳴海史生編著、東京書籍、1996年。

『フランス文化事典』、田村毅・塩川徹也他編、丸善出版、2012年。

3. その他（著者名アルファベット順）

BAUDELAIRE, Charles, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, avec la collaboration de Jean Ziegler, t. 2, janvier 1832-février 1860, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1973.

GIDE, André, *Journal*, t. 1, 1889-1939, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1951.

HACKETT, John, *Select and remarkable epitaphs on illustrious and other persons, in several parts of Europe with translations of such as are in latin and foreign languages ; and compendious accounts of the deceased, their lives and works*, t. 1, London, Printed for T. Osborne, and J. Shipton, 1757.

MELTZ, Renaud, *Alexis Léger dit Saint-John Perse*, Paris, Flammarion, 2008.

MONNIER, Adrienne, *Rue de l'Odéon*, Paris, Albin Michel, 1960. (アドリエヌ・モニエ 『オデオン通り』、岩崎力訳、河出書房新社、1992年)

PERNOUD, Georges et Régine, *Le Tour de France médiéval*, Stock, 1982. (レジュー・ペルヌー、ジョルジュ・ペルヌー 『フランス中世歴史散歩』、福本秀子訳、白水社、白水Uブックス、2010年)

PERSE, Saint-John, *Œuvre poétique*, t. 1, Paris, Gallimard, 1953.

—, *Œuvre complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1972.

SABATIER, Robert, *Dictionnaire de la mort*, Éditions Albin Michel, 1967. (ロベール・サバチエ 『死の辞典』、窪田般彌・堀田郷弘共訳、読売新聞社、1991年)

—, *Histoire de la poésie française, La Poésie de vingtième siècle*, t. 1. Tradition et évolution, Paris, Albin Michel, 1982.

SANDY, Isabelle, *Andorra ou les hommes d'Airain*, Paris, Librairie Plon, 1923.

SCÈVE, Maurice, *Microcosme*, publié par Valery Larbaud et A. A. M. Stols, avec une introduction de Valery Larbaud, Maestricht, A. A. M. Stols, 1928.

STERNE, Laurence, *A Sentimental journey through France and Italy*, with an introduction by Virginia Woolf, London, Oxford University Press, 1928 ; repr., 1967.

THIBAUDET, Albert, *Histoire de la littérature française : de 1789 à nos jours*, Paris, Stock, 1936.

VIRGILE, *Géorgiques*, texte établi et traduit par E. de Saint-Denis, Collection des universités de France, Paris, Les Belles Lettres, 1982.

—, *Énéide*, texte établi et traduit par Jacques Perret, t. 1, Paris, Belles lettres, 1981,

- pp. 6-7 ; Virgil, *Georgics, Eclogues, Aeneid I-VI*, with an English translation by H. Rushton Fairclough, Cambridge, Mass, Harvard University Press, 1986, pp. 240-241.
- L'Œil de la NRF, cent livres pour un siècle*, choix des textes et présentation par Louis Chevallier, Paris, Gallimard, 2009.
- Œuvres de Philippe Desportes*, avec une introduction et des notes par Alfred Michiels, Paris, Adolphe Delahays, 1858.
- Opéra et littérature française, Les journaux intimes Paul Valéry*, Cahiers de l'Association internationale des études françaises, Paris, Les Belles lettres, 1965.
- La Sainte Bible, qui contient l'Ancien et le Nouveau Testament*, d'après la version revue par J.-F. Ostervald, Paris, Société biblique française et étrangère, 1847.
- 秋元幸人『レオン=ポオル・ファルグの詩』、思潮社、2009年。
- ウェルギリウス『牧歌・農耕詩』、河津千代訳、未来社、1981年
- ウェルギリウス『牧歌・農耕詩』、小川正廣訳、京都大学学術出版会、2004年
- F. グイッチアルディーニ『イタリア史 VII』、川本英明訳、太陽出版、2005年。
- 柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編、『世界歴史大系：フランス史 1—先史～15世紀』、山川出版社、1995年。
- 月本昭男訳「コーヘレト書」、『旧約聖書 13』所収、旧約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、1998年。
- 富野幹雄、クララ・M・マルヤマ『ポルトガル語ことわざ用法辞典』、大学書林、1990年。
- 野町二、荒井良雄他『イギリス文学案内』、朝日出版社、2002年。
- 『騎士道百科図鑑』(D'Arcy Jonathan Dacre Boulton, *Knights in history and legend*)、コンスタンス・B・ブシャード監修、堀越孝一日本語版監修、悠書館、2011年。
- 『サン=ジョン・ペルス詩集』、多田智満子訳、思潮社、1975年。

4. インターネットサイト

<Valery Larbaud 蔵書カタログ>

Médiathèque Valery Larbaud (ヴィシー市立図書館、2014年9月24日閲覧)

<http://catalogue-mediathèque.ville-vichy.fr/>

<辞典>

Dictionnaire arthurien (アーサー王辞典、2014年5月30日閲覧)

<http://expositions.bnf.fr/arthur/pedago/06.htm>

Émile Littré, Dictionnaire de la langue française (エミール・リトレ、フランス語辞典、2014年9月13日閲覧)

<http://www.littre.org/definition/>

Trésor de la langue française informatisé (フランス語辞典、2014年9月24日閲覧)

<http://www.cnrtl.fr/definition/>

<http://www.littre.org/definition/fantaisie>

<ブルボネ地方>

Archives départementales de l'Allier (アリエ県立古文書館) における *L'Ancien Bourbonnais* (『旧きブルボネ』〔1833-1838版〕掲載サイト、2014年6月5日閲覧)

http://recherche.archives.allier.fr/?id=recherche_allier_ancien_bourbonnais

Bruère-Allichamps (ブリュエール=アリシャン村、2014年1月8日閲覧)

<http://www.bruere-allichamps.fr/centre-france/village/village.html>

Commune de Hérisson (エリソン町、2014年4月13日閲覧)

<http://herisson03.e-monsite.com/>

<http://herisson03.e-monsite.com/medias/images/village1.jpg>

Devise emblématique et héraldique à la fin du Moyen Age (金の盾騎士団および紋章の画像、2014年9月12日閲覧)

<http://base-devise.edel.univ-poitiers.fr/index.php?id=920>

Société d'Émulation du Bourbonnais (ブルボネ振興協会、2013年5月23日閲覧)

<http://www.societedemulationdubourbonnais.com>

ムーランの出版社 « Vernoy » に関する情報を記載したサイト (2014年4月8日閲覧)

<http://mediatheques.agglo-moulins.fr/agglo-moulins.fr/cms/articleview/id/28>

<作家友の会>

L'Association des Amis de la Fondation Saint-John Perse (サン=ジョン・ペルス財団友の会、2014年4月25日閲覧)

<http://fondationsaintjohnperse.fr/une-vie-de-poete-et-de-diplomate/>

Musée Émile Guillaumin (エミール・ギョーマン博物館、2014年5月21日閲覧)

<http://musee-emile-guillaumin.planet-allier.com/default.htm>

The Walt Whitman Archive (ウォルト・ホイットマン・アーカイヴ、2014年5月10日閲覧)

http://www.whitmanarchive.org/criticism/current/encyclopedia/entry_24.html

<http://www.whitmanarchive.org/published/LG/1867/poems/2>

<書籍・新聞・雑誌記事>

A. Hermant, « L'arbre du vingt mars » in *Le Monde illustré*, n° 310, le 21 mars 1863. (「3月20日の木」に関する『ル・モンド・イリュストレ』、1863年3月21日の記事、2014年4月21日閲覧)

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6221625f/f10>.

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k7575519x/f2>.

Larousse mensuel illustré, n° 197, juillet 1923, pp. 174-175 (『月刊ラルース・イリュストレ』における E. ブーアンの記事、2011 年 10 月 25 日閲覧、2014 年 9 月リンク切れ)

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k397569/f177.image>

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k397569/f178.image>

Lucien de Samosate (サモサタのルキアノスのテキスト、2013 年 6 月 15 日閲覧)

<http://remacle.org/bloodwolf/philosophes/Lucien/dialoguecourt.htm#1>

http://www.mediterranees.net/mythes/lucien/dialogues_courtisanes/index.html

Auguste Raffet (オーギュスト・ラフェの作品、2014 年 4 月 21 日閲覧)

<http://www.edmond-rostand.com/peinture.html>

Rome of the West (聖金曜日の典礼における祈り、2013 年 8 月 21 日閲覧)

http://www.romeofthewest.com/2009_01_01_archive.html

<その他>

L'Académie Goncourt (アカデミー・ゴンクール、2013 年 8 月 22 日閲覧)

<http://www.academie-goncourt.fr/?rubrique=1229171232>

Frantext (フランス文学テキストデータベース、2011 年 4 月 17 日閲覧。使用は契約者に限られる)

<http://www.frantext.fr/>

Montargis office de tourisme & son agglomération (モンタルジ観光協会、2014 年 4 月 28 日閲覧)

<http://www.tourisme-montargis.fr/un-charme-historique>

« statue du chien » (モンタルジの犬像、2014 年 4 月 28 日閲覧)

<http://tatiana.colas.pagesperso-orange.fr/legendeetgeneralite.htm>

Œuvre complètes de Pierre de Bourdeilles, abbé et seigneur de Branthôme, tome 1, Paris, P. Jannet, 1858. (プラントーム全集第 1 巻、2014 年 9 月 20 日確認)

<https://archive.org/details/oeuvrescomplt01bran>

外務省 (2014 年 5 月 4 日閲覧)

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/luxembourg/data.html>

関西学院大学リポジトリ (2014 年 7 月 24 日閲覧)

<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/5619>

国立国会図書館サイト内「過去の貨幣価値を調べる」(2013 年 6 月 4 日閲覧)。

http://rnaivi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-102809.php

1985 年以降にフランスで論文発表された博士論文検索サイト

<http://www.theses.fr/> (2014 年 7 月 24 日閲覧)

2015 年

ヴァレリー・ラルボー研究—ブルボネ地方への帰郷

(千葉大学審査学位論文)

別冊

佐藤みゆき

目次

『アレン』日本語訳・注釈.....	1
献辞・読者への序文.....	2
第1章.....	8
第2章.....	24
第3章.....	31
第4章.....	39
第5章.....	50
第6章.....	61
第7章.....	76
「著者解題」.....	103
第1章 序文の由来と役割.....	103
第2章 『アレン』の概要.....	110
第3章 タイトルの由来.....	112
第4章 ルイ二世の演説.....	114
第5章 『アレン』の典拠.....	117
第6章 対話のモデル.....	121
第7章 『アレン』の単数、あるいは複数の主題.....	123
第8章 構想と成熟過程.....	124
第9章 名前を挙げずにされた引用.....	125
第10章 「ブルボンの名声万歳」.....	129
第11章 均整とバランス.....	130
第12章 「旗に敬礼」.....	130
第13章 発話者たち.....	131
第14章 議論された命題.....	135
第15章 作品の受容.....	137
第16章 ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋.....	138
第17章 紺碧と銀色.....	142
第18章 カンティリア.....	143
第19章 隠遁生活.....	146
第20章 セリイ.....	148
第21章 これらの著者解題.....	149
補遺.....	155

1. 「著者解題」第 16 章に引用した記事三点	155
2. 「シャンテル（ブルボネ地方）」	163
3. 削除された「著者解題」の二章.....	165
4. 関連地図	168
5. ヴァレリー・ラルボー（1881-1957）略年譜	171

『アレン』日本語訳・注釈

注記

以下はValery Larbaud, *Allen* のフランス語原典 (*Pléiade*, pp. 721-774) の日本語訳および注釈を試みたものである。作品名などの定冠詞の表記は原典に従い、文頭に置かれた前置詞 « A » は « À » に置き換えた。なお、注の関係で適宜改ページしている。

また、下記の表に示すように、5人の登場人物による対話について、「あなた」と丁寧に話す « vouvoyer » と、「きみ」と親しげに話す « tutoyer » によって発話者の区別を試みた。

その結果、下記のとおり会話の冒頭に論者が推定した発話者を付け加えた。なお、発話者が不明の場合は<—>としている。

Français	日本語訳
[L'Auteur :]	<作者>
[L'Éditeur :]	<編集者>
[Le Bibliophile :]	<愛書家>
[Le Poète :]	<詩人>
[L'Amateur :]	<アマチュア>
[— :] (L'un des interlocuteurs)	<—> (発話者の一人)

発話者と受け手 (vous は « vouvoyer », tu は « tutoyer », ? は発話者不明)

	受け手					
	作者	編集者	愛書家	詩人	アマチュア	
発話者	作者	?	?	?	?	?
	編集者	?		vous	vous	tu
	愛書家	?	vous		vous	?
	詩人	?	tu	tu		tu
	アマチュア	?	?	tu	tu	

献辞・読者への序文

ALLEN	『アレン』
<i>À ma Mère / je dédie cet ouvrage filialement consacré / à notre pays natal¹.</i>	母に／私は子として私たちの故郷に捧 げられたこの作品を献じます。
(改ページ)	
PROLOGUE AU LECTEUR²	読者への序文
Avant de pénétrer dans ce livre, avant d'ouvrir la porte de la chambre où cinq bons amis fument et causent, regardons ces quelques sous-verres ³ , — vues de cités bourbonnaises, — accrochés aux murs du vestibule.	この物語に入る前に、5 人の良き友た ちがタバコをふかし談笑している部屋の 扉を開く前に、玄関の壁に掛けられたガ ラスで覆われたこの何枚かの版画——ブ ルボネ地方の都市の絵——を見よう。
(一行あき)	

¹ ラルボーの母親 Isabelle (イザベル) が 1843 年にムーランに生まれていることから、「私たちの故郷」がブルボネ地方を指すことがわかる。Cf. Jean-Philippe Segonds, *L'Enfance bourbonnaise de Valery Larbaud*, Moulins, Éditions des Cahiers bourbonnais, 1967, p. 38, note 1. イザベルは、この献辞を入れたオリゾン・ド・フランス版刊行 (1929 年) の翌年、1930 年 10 月 11 日に 87 歳で亡くなった。

² 母への献辞と「読者への序文」は、Valery Larbaud, *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929 出版時に加えられた。この版の巻末の挿絵一覧表、「Table des gravures」に挙げられた 9 点の挿絵は、パリのノートルダム教会前広場の敷石にはめ込まれた、フランスの道路の起点を示す八角形の « Rose des vents du parvis Notre-Dame » (「ノートル=ダム大聖堂広場の羅針図」p. 9) に始まり、「Prieuré de Souvigny」(「スヴィニーの修道院」p. 11)、「Tour Quiquengrogne, à Bourbon-l'Archambaud」(「誰が何と言おうとも塔、ブルボン=ラルシャンポーにて」p. 21)、「Église de Saint-Menoux」(「サン=ムヌーの教会」p. 29)、「Château d'Hérisson」(「エリソン城」p. 35)、「Maison de Madame de Sévigné à Vichy」(「ヴィシーのセヴィニエ夫人の館」p. 43)、「Vieux toits et usines à Montluçon」(「モンリュソンの古い屋根と工場」p. 53)、「Château de Chantelle」(「シャンテル城」p. 63)、「Maisons roses et noires à Moulins」(「ムーランのバラ色と黒の家屋」p. 73) の順に掲載され、これら風景を経てムーランに到着する流れを作ることによって、「読者への序文」に挙げた 6 つの都市と「本編」を補完している。なお、表紙にはブルボネ地方の象徴である「翼を備えた跳躍する鹿」、本文の最後には 5 人の友人たちの目的地であるブリュエールの記念碑の絵が添えられている。だがこの版は発行数が 650 部と少なく、またこれらの版画は、これ以降の版には収録されていない。

³ ガラス板と裏板で写真などを挟み、縁を張り合わせた額縁や写真、絵、版画、書類などのことで、バスパルツーとも言う。

SOUVIGNY ⁴	スヴィニー
Souvigny est la grande église du pays, et la cathédrale de Moulins n'y peut rien ⁵ .	スヴィニーはこの地方の大きな教会であり、ムーラン大聖堂は手も足も出せない。
Souvigny, métropole religieuse, source intellectuelle d'où est sortie toute l'histoire de nos sires et de nos ducs ; Souvigny avec ses restes de palais lévitiqes ⁶ , ses cloîtres où l'herbe monte, sa touchante petite fontaine classique, de ville italienne, et ses deux tours dissemblables au-dessus de la balustrade qui suit le mouvement en retrait de la façade, Souvigny domine tout le pays, et d'abord la petite ville qui sommeille à l'entour, pleine d'un silence villageois, la petite ville laïque et républicaine qui s'appelle aussi Souvigny.	スヴィニー、信仰の中心地であり、我々の主君と公たちのすべての歴史がそこから生じた知のみなもと、レヴィ族の宮殿のなごり、草の伸びた修道院の回廊、イタリアの町にあるような、魅力的で伝統的な小さい噴水、建物の正面から曲線を描きながら奥まで続く手すりの上の方にある異なる形の二つの塔を有するスヴィニー、スヴィニーはその地域全体を見下ろしている。第一にその周辺のみどろむ町、田舎の静けさに満ちた町、すなわち反キリスト教的で共和主義を支持する、これもまたスヴィニーと呼ばれる小さな町を。
BOURBON-L'ARCHAMBAUD ⁷	ブルボン=ラルシャンボー
Bourbon-l'Archambaud, avec le château en ruines au-dessus du petit lac, aujourd'hui tout champêtre, qui a reflété les bannières et les fêtes d'une riche et magnifique cour féodale, nous fait songer à	ブルボン=ラルシャンボー、今ではすっかりひなびてしまい、豪華で見事な封建宮廷の ^{のぼり} 幟や祝祭を映した小さな湖の上に廃墟と化した城を持つこの土地は、雷に打たれ、枝を払われ、倒され、くり抜

⁴ アリエ県の県庁所在地ムーラン南西方にある村。ブルボン公家の墓所を備えた 12 世紀の教会がある。2010 年の人口は約 2,000 人。

⁵ 一般的に教会は大聖堂（司教座聖堂）よりも規模が小さいが、スヴィニーにおいては教会が大きいことを示している。スヴィニー自体が教会の町として認識されているからであろう。

⁶ ユダヤの神殿で祭司を補佐したイスラエルの部族。

⁷ アリエ県ムーランの西北 26 キロにある郡名。かつてのブルボン公国の首府で、居城の廃墟がある。2010 年の人口は約 2,600 人。なお、アリエ県庁によれば、正式な地名の表記は « Bourbon L'Archambault » である（電子メールによる問い合わせに対する 2013 年 11 月 15 日の Le Service du Courrier からの回答による。下線強調は引用者）。また、ブルボン=ラルシャンボー町によれば、地名には幾度かの変遷があり、19 世紀は « Bourbon L'Archambaud » と表記し、1880 年頃に現在の表記になったが、この頃は表記が混在していたようである（電子メールでの問い合わせに対する、Paulette Debordes 助役からの 2013 年 11 月 25 日付の文書回答による）。

un grand arbre foudroyé, ébranché, renversé, évidé, dans lequel les abeilles font leur miel : la ville moderne, propre, bien tenue, avec les hôtels qui sentent la pâtisserie, et le jardin de l'établissement thermal, serait ce nid d'abeilles et ce miel.	かれ、その穴の中でミツバチが蜂蜜を作っているような木を思わせる。近代的で、清潔で、手入れが行き届き、ケーキの香りのするホテルと温泉施設を備えた町の部分は、そのミツバチの巣であり、またその蜜と言えよう。
HÉRISSON⁸	エリソン
Hérisson se tient bon, sous le mont couronné du haut débris de son château et autour de son gros Vieux Chapitre ⁹ ; pas une faute de goût ; rien de ce pittoresque facile que pourrait se donner une vieille petite ville militaire, gardienne d'un défilé et tête de pont ¹⁰ à l'entrée d'une vallée.	高くそびえる城の廃墟を頂きに持つ山のふもとにあり、大きな古い教会参事会堂の周囲にあるエリソンは、今も健在である。ひとつも趣味の悪いところはない。隘路を管理し谷間の入り口で橋頭堡 ^{きょうとうぼ} を務める古い小さな軍事都市に見られるような、あの安っぽい奇抜さは、ここにはない。
Pas idyllique non plus : réservée, coite et fine, comme les filles de chez nous.	それに牧歌的でもない。私たちの地方の娘たちのように慎み深く、もの静かで、繊細である。
VICHY¹¹	ヴィシー
À Vichy, que don Vicente Blasco Ibanez ¹² a comparé à Babylone ¹³ , et (le ciel nous épargne, Vicalidiens ¹⁴ , mes frères) à Sodome	ビセンテ・ブラスコ・イバニェス氏がバビロンと比べた、そして（神が我々に寛大でありますように、ヴィシー人、我

⁸ アリエ県北方の村で、2010年の人口は648人。「Hérisson」とは「ハリネズミ」を意味し、村の紋章はハリネズミの意匠を用いている。

⁹ エリソン町のウェブサイト (<http://herisson03.e-monsite.com/>) に掲載された以下の写真から、教会参事会堂を指すと考えられる。

<http://herisson03.e-monsite.com/medias/images/village1.jpg> (2014年4月13日閲覧)

¹⁰ 橋のたもとに構築する陣地。

¹¹ アリエ県の郡庁所在地。ミネラルウォーターの採水、温泉地として有名。第二次世界大戦中の親ドイツ政権 *Gouvernement de Vichy* (ヴィシー政権、1940-1944) では首都となった。2009年の人口は約25,000人。ラルボーの生地であり、また最期の時を過ごした地でもある。

¹² スペインの作家(1867-1928)。

¹³ メソポタミアの古代都市。紀元前6世紀前半に最盛期を迎えた。

¹⁴ アリエ県の地名事典によれば、「ヴィシー」の語源はラテン語の « vicus calidus » (「暑い村」) であるため、これを用いたラルボーの造語であろう。Cf. « Signalons que l'étymologie populaire veut que Vichy vienne du latin vicus calidus (= le village chaud). », Jean-Marie Cassagne, Mariola Korsak, *Les Noms de lieux de l'Allier : D'où le nom de mon village ?*, Bordeaux, Éditions Sud Ouest, 2008, p. 304. (イタリック強調は原典) また

et à Gomorrhe ¹⁵ , à Vichy, tout passe, et Vichy même.	が兄弟たちに) ソドムとゴモラとも比較したヴィシーでは、すべてがうつろう、そしてヴィシーそのものも。
Dans la musique ¹⁶ , sous le ciel d'été où flottent tous les drapeaux du monde, des foules de choix, prélevées sur la circulation des plus belles rues des plus belles villes d'Europe et d'Amérique, se renouvellent sans cesse, et dans leur mouvement entraînent la ville elle-même ; et les rues changent d'aspect et de nom, et même de direction quelquefois ¹⁷ .	音楽の中で、世界のすべての国旗がはためく夏空の下で、ヨーロッパとアメリカの最も美しい町のどこよりも美しい通りの往来から引き抜かれた選ばれし人々は、絶え間なく入れ代わり、その町そのものを躍動の中へといざなう。そして通りは姿や名前を、時には方向さえも変える。

ラルボーは、同郷の友人で幼なじみの Marcel Ray (マルセル・レイ、1878-1951) への 1928 年 10 月 20 日付の書簡で、『アレン』の「著者解題」に取り組んでいることを説明しながら、ヴィシーの人について「ヴィカリディアン、——ヴィシーの人」と注釈を加えて書いている。Cf. « Vicalidien, — vichyssois », la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 20 octobre 1928, lettre 335, *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, 3 tomes, introduction et notes de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1979-1980, t. III, 1921-1937, p. 126. このほか、詩人 Léon-Paul Fargue (レオン=ポール・ファルグ、1876-1947) への 1922 年末の書簡でも、「寒さと雪。もしきみがここに居たら、きみは美しいヴィシーの女性たちへの情熱的な視線でニーム通りを温めるのにね」と書いている。Cf. « Froid et neige. Si tu étais ici, tu réchaufferais la rue de Nîmes avec des regards enflammés à l'adresse des belles Vicalidiennes. », la lettre de Valery Larbaud à Léon-Paul Fargue [de la fin 1922], lettre 263, in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud*, texte établi, présenté et annoté par Théophile Alajouanine, Paris, Gallimard, 1971, p. 237. (下線強調は引用者) なお、ラルボーとファルグの書簡については、『ヴァレリー・ラルボー友の会会報』第 8 号 (1971 年) に掲載された誤表記などの指摘と未公開の書簡を含んだ書評、およびそれに対する編者の返答も参照。Voir Jean Charpentier, « Léon-Paul Fargue – Valery Larbaud, Correspondance 1910-1946 (compte rendu et 12 lettres inédites) », in *CVL*, n° 8, 1971, pp. 13-49 ; Théophile Alajouanine, « Réponse à M. Charpentier », *ibid.*, pp. 51-57.

¹⁵ ソドムとゴモラ。旧約聖書「創世記」に記された死海南端付近にあった都市。神の火に焼かれて滅びたという。

¹⁶ ラルボーが 1918 年に出版した短篇集 *Les Infantines* (『幼なごころ』) 所収の « Le Couperet » (« 包丁 ») における、ヴィシーを示す架空の地名で「明るい河畔」を意味する Riveclaire-les-Bains (リーヴクレール=レ=バン) の描写によれば、各国からの滞在客が集うアリエ河畔の公園でマズルカ (ポーランドの民族舞曲) が歌われ、夕方には家々のテラスの前でナポリの人たちがイタリアの歌を歌っていたようである。Voir « Le Couperet », *Infantines, Pléiade*, p. 424.

¹⁷ 当時ラルボーの自宅はヴィシー市中心部のヴィクトリア通り 38 番地とパリ通りを結ぶ広大な所有地に構えられていたが、1930 年の母親の死後、1931 年に所有地は割譲された。Cf. « Biographie », *Pléiade*, p. LIV. 現在、邸宅の跡地には父親の名を冠した Rue Nicolas Larbaud (ニコラ・ラルボー通り) が通り、その両側に多くの建物が並び、かつ

<p>Mais l'antique cité forte, le Vieux-Vichy ducal et monacal, sait garder son indépendance et son immobilité au milieu de l'invasion internationale.</p>	<p>だが古い要塞都市、公と修道士の町であるヴィシー旧市街は、さまざまな国の人たちの侵入の最中にも独立と不変を保つことを心得ている。</p>
<p>Par cette Maison de Mme de Sévigné¹⁸, il communique avec les grands parcs qui longent la rivière¹⁹ ; il se les annexe peu à peu à mesure que la Saison approche de sa fin ; et c'est lui qui règne sur leur automne d'or.</p>	<p>セヴィニエ侯爵夫人のこの屋敷を通して、ヴィシー旧市街は川沿いの大きな公園とつながっている。旧市街はシーズンが終わりに近づくにつれて公園を少しずつ我が物にする。黄金の秋を治めるのは旧市街なのだ。</p>
<p>MONTLUÇON²⁰</p>	<p>モンリュゾン</p>
<p>Il est bien qu'au-dessus de ces grands quartiers neufs, de ces usines tonnantes, du fleuve, des voies ferrées, des fils électriques, des foules et des fournaies, on voie l'assaut de tant de vieux toits biscornus au ciel de Montluçon, et, plus haut encore, l'abrupt et lourd château sur sa plateforme, pareille à un autel dédié aux vents et aux horizons, et vers lequel toutes ces fumées s'élèvent.</p>	<p>ここの大きくて新しい地区、音を立てる工場、河、線路、電線、群衆と大かまどの上に多くの不揃いな古い屋根が競うのを、モンリュゾンの空に見るのはいいものだ。そして、さらに上方には、風と地平線に捧げられた祭壇のような高台の上に、急勾配〔の屋根〕の重厚な城が見える。そして城に向かってこれらすべての煙が立ちのぼっている。</p>

て温室や倉庫があった辺りが Rue Valery Larbaud (ヴァレリー・ラルボー通り) となっている。当時の自宅とその後の道路の見取り図は、「Photographies et documents divers», in Jean-Philippe Segonds, *L'Enfance bourbonnaise de Valery Larbaud, op. cit.*, fig. 7 « Plan de la propriété de Vichy » (sans pagination) を参照。

¹⁸ 書簡作家 Marie de Rabutin-Chantal, marquise de Sévigné (マリー・ド・ラビュタン=シャンタル、セヴィニエ侯爵夫人、1626-1696)。ヴィシー市ジョン・ケネディ大通り 50 番地に邸宅が残っている。

¹⁹ ヴィシー市内にあったラルボーの自宅の近くを流れるアリエ川を指す。アリエ河岸は古くから遊歩道として整備され、今昔の写真には、その周囲の広大な公園を、地元の人々やヴィシーの温泉に集う世界各地からの観光客が散歩する様子が写されている。

²⁰ アリエ県西部の郡庁所在地。2010年の人口は約 38,000 人。

CHANTELLE ²¹	シャンテル
<p>Chantelle, ô Cantilia ! le château souverain est devenu un hôpital, et on dit que les religieuses-infirmières mettent leur linge sécher aux fenêtres (où personne ne peut le voir distinctement) qui donnent sur le ravin, la grande entaille, le précipice où l'ancienne gloire et splendeur du vieux duché s'est abîmée, quand nous a quittés, fugitif, de ce côté-là, le plus beau et le plus brave de nos garçons²².</p>	<p>シャンテル、おおカンティリア！ 至高の城は病院になり、看護婦として働く修道女たちが洗濯物を峡谷、大きな溝、断崖に面する窓辺で乾かしているようだ（誰もそれをはっきりと見ることはできないが）、その断崖では、古い公国のいにしへの栄光と栄華が傷ついた。我らが若者たちの中で最も美しく最も勇敢だった若者が我々から離れ、あちらの方へ逃げて行った時に。</p>
(一行あき)	
<p>Et maintenant vous ouvrez la porte, vous tournez la page et vous entrez au beau milieu d'une phrase.</p>	<p>そして今、あなたは扉を開いて、ページをめくり、一つの文の途中へとお入りになるのです。</p>

²¹ アリエ県ムーランの自治体で、2010年の人口は約1,100人。ラルポーは1927年に*La Revue du Centre*（『サントル通信』：サントルとはフランス中部のサントル地域圏を指す）に、シャンテルに関する旅行記を寄せている。本「別冊」、「著者解題」第18章「カンティリア」の項（143-146頁）および補遺2に再録した「シャンテル（ブルボネ地方）」の記事（163-164頁）を参照されたい。

²² フランス王 François I^{er}（フランソワ一世、1494-1547、在位1515-1547）に背いてカール五世（神聖ローマ皇帝、1500-1558、在位1519-1556）と結んだ Charles III de Bourbon（ブルボン公シャルル三世、1490-1527）が、1923年9月初旬にイタリアへ逃亡したことを指す。「本編」第7章では「愛書家」がシャルル三世を象徴する「飛翔する鹿」について、「つまり、フランソワ一世に対抗してカール五世と同盟を結んだブルボン大元帥のことですね」と語っている。（« [Le Bibliophile :] C'est-à-dire : le connétable de Bourbon s'alliant à Charles-Quint contre François I^{er}. », *Allen, Pléiade*, p. 751.）

第 1 章

I	第 1 章
[L'Éditeur :] « Et on voyait déjà ²³ sur la blancheur des routes les ombres vigoureuses de l'été.	<編集者> 「すると街道の白さの上に夏の濃い影がもう見えていました。
[— :] — Était-ce au Pays d'Allen ?	<—>それがアレンの国でだった、ってこと？
[— :] — Pays d'Allen ?	<—>アレンの国？
[L'Bibliophile :] — « Oh ! que de souffles aux Provinces ! » ²⁴	<愛書家> 「おお！ なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」
[L'Éditeur :] — Non, Bibliophile : « Ah ! que de souffles aux Provinces ! » Saint-John Perse ²⁵ , chanson liminaire d' <i>Anabase</i> .	<編集者>いいえ、愛書家さん。それは「あゝ！ なんと多くのそよ風が国々に

²³ この書き出しについて、ラルポーは「著者解題」第 1 章「序文の由来と役割」において説明している。本「別冊」103-110 頁を参照されたい。

²⁴ 「愛書家」の発言。Cf. *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach, 1919-1933*, correspondance établie et annotée par Maurice Saillet, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 1991, p. 96, note 5.

²⁵ フランスの詩人・外交官、サン=ジョン・ペルス (1887-1975) の *Anabase* (『遠征』、1924) からの引用だが、『遠征』おける記述は « Ah ! tant de souffles aux provinces ! » である。Cf. Saint-John Perse, *Œuvre poétique*, t. 1, Paris, Gallimard, 1953, p. 146. ラルポーは、サン=ジョン・ペルスが Saintléger Léger (サンレジェ・レジェ) 名義で発表した *Éloges* (『讃歌』、*La Nouvelle Revue Française* [『新フランス評論』], n° 16, 1^{er} avril 1910, pp. 438-451 に掲載) を読んで高く評価し、1911 年 4 月 6 日には南フランスのスペイン国境近くの町 Pau (ポー) にサン=ジョン・ペルスを訪ね、彼に会えた喜びを友人のマルセル・レイとレオン=ポール・ファルグに書簡で伝えている。Cf. la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 6 avril 1911, lettre 153, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. II, 1910-1920, pp. 95-96 et p. 287, note 3 ; la lettre de Valery Larbaud à Léon-Paul Fargue du 6 avril 1911, lettre 45, in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud, op. cit.*, pp. 65-68 et p. 320, notes. またラルポーは同年末に『讃歌』に関する批評 « Saintléger Léger : *Éloges* (Nouvelle Revue Française) » を雑誌 *La Phalange* (『ラ・ファランジュ』), n° 66, 20 décembre 1911, pp. 498-504 に掲載した。この記事は « Notes sur « Éloges » de Saintléger-Léger » として、*OC*, t. 7, pp. 366-375 に収録されている。なお、サン=ジョン・ペルスの本名 Marie-René Alexis Leger (マリー=ルネ・アレクシ・レジェ) の姓の綴りは、下記の評伝や『フランス詩史』、L'Association des Amis de la Fondation Saint-John Perse (サン=ジョン・ペルス財団友の会) のウェブサイトの情報を総合すると、本来は父方の姓である «e» の上にアクサン記号のない «Leger» だが、サン=ジョン・ペルスが « Saintléger Léger » など数種類のペンネームを用いたことから、「e» の上にアクサン記号を付けた «Léger» や、「Léger» を重ねた « Saint-Léger Léger » などの表記が見られる。Cf. Renaud Meltz, *Alexis Léger dit Saint-John Perse*, Paris, Flammarion, 2008, p. 13 ; Robert Sabatier, *Histoire de la poésie française, La Poésie de vingtième siècle*, t. 1. Tradition et évolution, Paris, Albin Michel, 1982, p. 283 ;

	吹くのだろう！」、サン=ジョン・ペルスの『遠征』の冒頭の歌ですよ。
Je vous disais donc que les auteurs de ma maison ²⁶	あなたに言いましたよね、つまり我が社の作家たちが
[Le Poète :] — On t'a livré ta nouvelle voiture ?	< 詩人 > きみの新しい車が届いたの？
[L'Éditeur :] — je les regarde	< 編集者 > 私が思うに作家というのは
[L'Amateur :] — Une machine ! longue, fine, tranquillement puissante.	< アマチュア > 長くて、すらりとして、もの静かなのに力強い機械だ！
La nuit dernière, pour essayer, de chez moi, au bout de Neuilly ²⁷ , jusqu'à la place du Tertre ²⁸ en quatorze minutes quarante secondes, mon cher, sans changer de vitesse ²⁹ , comme si ça se passait en Sologne ³⁰ .	昨日の夜に試してみたら、自宅からヌイイの端の、テルトル広場までギアチェンジせずに走って 14 分 40 秒だった。まるでソローニュを走っているみたいだったよ。
[Le Bibliophile :] — « Ah ! que de souffles aux Provinces ! »	< 愛書家 > 「ああ！ なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」
[Le Poète :] — Combien ?	< 詩人 > いくらするの？
[L'Éditeur :] — je les regarde comme ces bas-reliefs de Della Robbia ³¹ dont les photographies sont au mur en face ;	< 編集者 > 私が思うに作家というのは、デッラ・ロッビアのあの浅浮き彫り作品のようなものです。向かいの壁にその作品の写真がかかっていますが、

<http://fondationsaintjohnperse.fr/une-vie-de-poete-et-de-diplomate/> (2014年4月25日閲覧)。
ラルボーは一貫して « Saintléger Léger » と表記していた (下線強調は論者)。

²⁶ 「編集者」の発言。Cf. *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach, 1919-1933, op. cit.*, p. 96, note 5.

²⁷ パリ 16 区に隣接する高級住宅地 Neuilly-sur-Seine (ヌイイ=シュル=セーヌ) か。

²⁸ パリ 18 区、モンマルトルの丘にあり、パリ市街を一望できる場所。

²⁹ 1896 年初出の自動車関連用語。Cf. *Trésor de la langue française, dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, publié sous la direction de Paul Imbs, Paris, Édition du centre national de la recherche scientifique, 16 tomes, 1971-1994, t. 16, 1994, p. 1214, s.v. *vitesse*.

³⁰ パリ盆地南部、ロワール川とシェール川に挟まれた地域。

³¹ Luca Della Robbia (ルカ・デッラ・ロッビア 1400 頃-1482)。イタリア・フィレンツェ出身の彫刻家・陶芸家で、釉薬を用いたテラコッタ (素焼き) の技法を開発した。

[L'Amateur :] — quatre-vingt-quinze billets ³² avec la carrosserie.	<アマチュア>95,000 フランだよ、〔エンジンだけでなく〕車体も合わせて。
Mais elle est... Tout ce que je pouvais désirer !	でもその車は…… 僕が望んでいたものすべてなんだ！
J'y ai collaboré un peu.	僕も製造に少し協力したんだよ。
Voilà : pour la route on ne fait pas mieux.	要するに、街道を走るのにこれ以上素晴らしい車はないよ。
[L'Éditeur :] — ce Della Robbia si beau, les <i>Enfants jouant de divers instruments et chantant</i> ³³ .	<編集者>デッラ・ロッチアのこの「さまざまな楽器を奏で歌う子供たち」はとても美しいですね。
Je crois que c'est à Florence ? peu importe ; je les vois de cette façon parce que	確かフィレンツェのものだったと思いますが？ まあそれは大したことじゃない。私にとって作家がそんなふうに見えるというのは
[Le Poète :] — Et Mademoiselle... ?	<詩人>で、彼女はどうなったんだい……？
[L'Amateur :] — Oh ! Fini.	<アマチュア>ああ！ 終わったよ。
[Le Poète :] Je comprends.	<詩人>そりゃそうだね。
Quand on peut se payer des joujoux mécaniques comme celui-là, le reste...	こんな機械のおもちゃを奮発できるとしたら、後のことはね……〔どうでもよくなる〕。
[L'Éditeur :] — parce que toute bonne littérature est Carmen Deo Nostro ³⁴ , et que tout ce qui est bon en littérature est en fin de compte hymne, action de grâces, alleluia ³⁵ .	<編集者>なぜかと言うと、すべてのよき文学とは私たちの神に捧げる讃歌なのであって、文学における良きものとは結局のところ頌歌、〔特にミサ中の〕感謝の祈り、喜びの歌だからです。

³² 旧 1,000 フランを示す話し言葉。当時の貨幣価値は 1 フラン≒62.43 円にあたり、9,5000 フランは約 5,930,850 円に相当する。国立国会図書館サイト内「過去の貨幣価値を調べる」を参照した（2013 年 6 月 4 日閲覧）。

http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-102809.php

³³ 旧約聖書のダヴィデの『詩篇』第 150 章をテーマにした 10 枚の大理石彫刻「聖歌隊席」（1438）のことか。フィレンツェの Museo dell'Opera di Santa Maria del Fiore（サンタマリア デル フィオーレ付属美術館〔旧 Museo dell'Opera del Duomo／ドゥオーモ付属美術館〕）所蔵。

³⁴ 英国の詩人・ピューリタン説教師 Richard Crashaw（リチャード・クラショー、1613-1649）の宗教詩（1652）。作品名だが『アレン』ではイタリック表記でない。

³⁵ 「アレルヤ」、神への讃美の言葉。

Ça monte ; ça n'a pas d'autre raison d'être que de monter, comme un chant ; et ceux qui savent écouter, leur âme s'y associe, et monte avec le chant.	それは上昇する。それには上昇する以外の存在理由がないのですよ、歌声のように。すると聞くことのできる人たちの魂がそこに加わって、歌とともに昇華するのです。
Vous dites : il y a déjà le chant, à quoi bon les paroles, le discours, le bavardage de la raison, au sein de la musique, ou comme un coureur à pied dans l'ombre d'une grande machine volante ?	あなたはおっしゃいましたよね。すでに歌があるのだから、音楽の中で、歌詞や、講話、理屈っぽいお喋りが何の役に立つのか、それは空飛ぶ大きな機械の陰で競歩をする人のようなものではないか？って。
Mais considérez	でも、よく考えてみてください
[L'Amateur :] — tous les cadrans s'éclairent et les petites lampes ont chacune son écran, et il y a un système que j'ai imaginé, qui permet de dérouler la carte routière, qu'on a ainsi constamment sous les yeux ;	<アマチュア>すべての文字盤が照らされて、小さなランプにはそれぞれ覆いがある。それから僕が考案したのだけれど、そこには道路地図を広げて絶えず目の前に置いておける仕組みがあるんだ。
[L'Éditeur :] — la musique sans les paroles.	<編集者>歌詞のない音楽を。
À la musique seule un étranger à la terre distinguerait-il sûrement l'homme de tant d'oiseaux et de cigales ?	音楽だけで地球によそから来た者は人間と多くの鳥やセミとを確実に見分けるものでしょうか？
Mais au seuil de la hutte, à la lisière du camp, la femme assise et tenant entre ses bras l'instrument, de cordes et de bois, de la tribu, ayant préludé, chante ; et à ce discours de la raison accompagnant la musique, à cette littérature, l'étranger à la terre reconnaît...	だが小屋の入り口で、畑のふちで、女性は腰かけ、両腕にその一族に伝わる木製の弦楽器を抱え、試し弾きをしてから歌い出す。すると音楽に付随するこの理性の談話、この文学によって、地球に来たよそ者は認識するのです……。
Qu'est-ce que vous venez de siffler ?	あなたがさっき口笛で吹いていたのは何ですか？
Je crois que c'est...	私が思うには……。
[Le Bibliophile :] — <i>Willst du dein Herz mir schencken,</i>	<愛書家>あなたが私に心をくださるのなら、
<i>So fang es heimlich an...</i>	ひそやかに始めてください……。

musique, et paroles, de Jean-Sébastien Bach ³⁶ .	音楽、歌詞も、ジャン=セバスティアン・バッハのものですよ。
[L'Éditeur :] — Oui. Tout le monde ne peut pas... ³⁷	<編集者>そう。誰にでもできることではない……。
Et puis, on la fait entrer dans les paroles, si on sait.	そこで人は音楽を言葉に吹き込む。もしそれができればね。
Mais il ne faut pas trop.	でも、あまりやり過ぎてはいけません。
Voyez l'ensemble des groupes du Della Robbia :	デッラ・ロッビアの群像を見てみてください。というのも
[L'Amateur :] — je voudrais rendre ce système automatique.	<アマチュア>僕は〔地図を広げて見られる〕このシステムを自動化したいな。
Un mouvement d'horlogerie.	時計のような動きをするように。
Mais réglable à volonté.	しかも好きなように調節できるように。

³⁶ Johann Sebastian Bach (ヨハン・ゼバスティアン・バッハ、1685-1750) 作曲の Aria di Giovannini « Willst du dein Herz mir schenken » (バッハ作品総目録番号 BWV518 : ジョバンニーニのアリア「君われに心を贈りなば」) の最初の二節 (『バッハ事典』、磯山雅・小林義武・鳴海史生編著、東京書籍、1996年、291頁を参照)。歌詞の « schencken » の綴りに関し、1929年出版のガリマール版 19頁を見たマルセル・レイは、ラルボーへの書簡において、「Schencken」ではなく二つ目の « c » のない « schenken » であると、「n」と«k»の間の«c»をイタリックで強調して述べている。マルセル・レイが参照したガリマール版だけでなく、『新フランス評論』における初出 (NRF, n° 161, 1^{er} février 1927, p. 138)、オ・ザルド版 (Allen, illustré d'eaux-fortes originales par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 1927, sans pagination)、オリゾン・ド・フランス版 (Allen, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929, p. 19)、OC, t. 7 (p. 23)、プレイヤー版 (Allen, Pléiade, p. 727)、2006年出版のシャージュ版 (Allen, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006, p. 51) もすべて « schencken » と表記されており、マルセル・レイの指摘は反映されていない。Cf. « À propos, le Pédant parle : page 19, Willst du dein Herz mir schenken, le verbe est écrit : Schencken, ce qui est une erreur ; mais au 18^e siècle l'orthographe flotte en Allemagne comme en France, et s'il ne s'agit pas d'une coquille vous pouvez avoir copié sur une vieille édition. », la lettre de Marcel Ray à Valery Larbaud du 9 octobre 1929, lettre 343, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. III, 1921-1937, op. cit., pp. 135-136. (下線強調は引用者、イタリック強調と « Schencken » の大文字表記は原典) なおマルセル・レイが挙げた « le Pédant » (「衒学者」) とは、この書簡の注釈によれば「愛書家」を指している。Cf. *ibid.*, pp. 325-326, note 1.

³⁷ 「編集者」の発言。Cf. Françoise Lioure, « « Allen » ou de l'autonomie », in *L'Auvergne littéraire artistique et historique*, n° 201-202, Clermont-Ferrand, L'Auvergne littéraire, 1969, p. 45.

La carte se déroulerait sous les yeux du chauffeur en même temps que la route sous les roues de la voiture ³⁸ .	そうしたら車のタイヤの下の道と同時に、運転手の目の前で地図が展開していくんだ。
[L'Éditeur :] — divers instruments, des voix, oh ! la pierre même retentissante des louanges du Seigneur.	<編集者>さまざまな楽器や声、おお！その石じたいが主の頌歌で鳴り響いているのです。
Et ce sont des garçons et des filles de différents âges, de deux ou trois générations, les plus jeunes reprenant quand les plus âgés se taisent, pour que la louange jamais ne cesse en Israël.	そしてここにいるのは異なる年齢、二、三代にわたる少年少女たち。最年少の子供たちは、最年長の子供たちが黙った時にあとを継いで歌う。イスラエルで頌詞が途絶えることのないように。
Tout à fait comme chez moi ³⁹ .	それはうち〔出版社〕で起こっているのとちょうど同じです。
[Le Bibliophile :] — « Ah ! que de souffles aux Provinces ! »	<愛書家>「ああ！ なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」
[Le Poète :] — C'est justement ce que je pense depuis que le marronnier du 21 mars s'est manifesté le 3 avril ⁴⁰ .	<詩人>それは3月21日のマロニエが4月3日に花を咲かせて以来、まさに僕が考えていることだよ。
J'en suis à ce point de saturation où, comme habitat physique ⁴¹ , Paris et la banalité, Paris et la vulgarité, Paris et l'ennui, deviennent une même chose.	あまりにも僕はうんざりしていて、物理的な住環境として、パリと平凡、パリと俗悪、パリと退屈が同じものに見える状態なんだ。
N'importe où plutôt que	他のところだったら、どこだっていい

³⁸ 紙の地図がカーナビのようにぐるぐると伸びてゆき、現在地を常に見られるような動きをすること。

³⁹ 次々と世代交代しながら作者が出版してゆくことを意味する。

⁴⁰ 下記の新聞記事によれば、パリ1区のLe jardin des Tuileries（チュイルリー庭園）には、Napoléon Bonaparte（ナポレオン一世、1769-1821）が1815年にエルバ島から脱出しパリに入った時に開花状況を話題にしたことに由来する「l'arbre du vingt mars」（「3月20日の木」と呼ばれるマロニエの木がある。Cf. A. Hermant, « L'arbre du vingt mars », in *Le Monde illustré*, n° 310, le 21 mars 1863, p. 187.

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6221625f/f10>. (2014年4月21日閲覧) しかし別の新聞によれば、同じくチュイルリー庭園には「3月21日のマロニエ」もあり、いずれもパリの春の風物詩としてその開花が話題になるようである。

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k7575519x/f2>. (2014年4月21日閲覧)

⁴¹ ラルボーのパリでの住まいは、5区La rue du Cardinal-Lemoine（カルディナル＝ルモワヌ通り）71番地の奥にある閑静なアパートマンであった。

[L'Éditeur :] — Et moi, j'ai fait un rêve, cette nuit, qui se passait à San Vicente del Raspeig ⁴² , dans le patio d'une villa où j'ai vécu un bel été.	<編集者>そして私は、昨夜夢を見たのです。それはサン・ビセンテ・デル・ラスペイグの、私が素晴らしいひと夏を過ごした別荘の中庭で起きていました。
[Le Bibliophile :] — Où est San Vicente del... ?	<愛書家>どこですか、サン・ビセンテ・デル……？
[L'Éditeur :] — Province d'Alicante (Espagne).	<編集者> (スペイン) アリカンテの地方都市ですよ。
[Le Bibliophile :] — C'est ce que vous appelez le pays d'Allen ?	<愛書家>それがあなたがおっしゃるところのアレンの国ですか？
[L'Éditeur :] — Oh ! non. Ce rêve m'indique à quel point j'ai besoin de ne plus voir Paris.	<編集者>いやいや！ その夢は、どれほど私がもうパリを見ない必要があるのかを教えてくれているのです。
Un patio dans une maison villageoise du royaume de Valence ⁴³ !	バレンシア王国の村民の家の中庭！
Un patio avec des azulejos ⁴⁴ tout luisants et frais à la vue, et les botijos ⁴⁵ poreux suintants sur la cantarera ⁴⁶ humide.	目に鮮やかでつやつやした彩色タイル、それに濡れたカンタレラの上に水を滴らせる多孔質の水差しのある中庭。
Que ganas tengo de	どれほど私が望んでいるか[スペイン語]
[L'Amateur :] — Moi aussi ; n'importe où, du reste ; mais pas de villes ! non, pas de villes !	<アマチュア>僕もだよ。それに、どこでもいい。でも、都会ではないところ！ そう、都会ではないところ！
[Le Bibliophile :] — Il en oublie qu'il est à Paris, et parle étranger.	<愛書家>彼は自分がパリにいることを忘れて、外国語を話していますね。
Et vous verrez que parce qu'il a fait un rêve il va nous quitter pour six mois.	それにおわかりでしょうが、彼は夢を見たから僕たちと半年間離れようとしているのですよ。

⁴² スペイン、バレンシア州、アリカンテ県の都市。

⁴³ イベリア半島にあった、かつての王国。

⁴⁴ アスレホ（釉薬を塗った陶製のタイル）。スペイン、ポルトガルなどで教会や邸宅の内装、外装に用いられる。

⁴⁵ 差し口と取っ手のついた素焼きの水差し（スペイン語）。

⁴⁶ 壺を置く台（スペイン語）。

Confisqué, loué par sa villa de San José de Malacca, province d'Aliquando ⁴⁷ (Lot-et-Garonne ⁴⁸).	(ロット=エ=ガロンヌ県) アリカンド地方のサン・ジョゼ・ド・マラッカの彼の別荘から取り上げて、貸した。
[L'Éditeur :] — Non : pas de villes.	<編集者>そう。都会じゃないところがいいですね。
Quittant Paris, trouverions-nous mieux ?	パリを離れたら、もっといいものを見つけられるでしょうか？
Filer tout droit à travers les campagnes, contre le vent, sans chapeau.	田園を通過してずっと真っすぐに突っ走る、風に向かって、帽子をかぶらずに。
Douze ou quinze jours de ça et me voilà prêt à reprendre ma vie parisienne jusqu'en juillet s'il le faut.	12日間から2週間の旅行をすれば、必要ならば7月までのパリの生活を再開する準備は万端です。
[L'Amateur :] — Douze jours.	<アマチュア>12日間か。
Vous seriez libres tous les quatre pour douze jours ?	あなた方4人は12日間お暇かな？
Alors. Alors le premier voyage de ma nouvelle voiture, nous pourrions le faire ensemble ?	そうですね。それじゃあ、僕の新車での初めての旅行をご一緒いただけますか？
Six places.	座席は6つあります。

⁴⁷ ロット=エ=ガロンヌ県はフランス南西部の県だが、「アリカンド地方」も「サン・ジョゼ・ド・マラッカ」も、その地方には存在しない地名である。Nelly Chabrol Gagne は博士論文において、これらをラルポーの「いくつかの純粋な空想」による架空の地名であるとしている。Cf. « En effet, nous relevons vraiment très peu d'inventions dans tout le volume des *Œuvres* de l'édition de la Pléiade ; à part quelques pures fantaisies, des toponymes ironiques, des noms géographiques empruntés à d'autres auteurs ou à l'histoire, ainsi que des formulations rhétoriques, voire des déformations, nous n'avons relevé comme exception que Campamento et Putouarey, seuls lieux susceptibles de défier la partie habituelle de Larbaud. » ; « Aliquando et San José de Malacca dans Allen (p. 728). », Nelly Chabrol Gagne, *De l'espace réel à l'espace imaginaire dans l'œuvre de Valéry Larbaud*, Lille, Atelier national de reproduction des thèses, 2000, p. 551 et note 1. (下線強調は引用者) また、Essaid Boumadiane は「『アレン』では、スペインの一地方がロット=エ=ガロンヌ県に置き換えられ、〔スペインの〕アリカンテはアリカンドになっている」と述べている。いずれにせよ架空の地名であろう。Cf. « Dans Allen, une province espagnole est transférée en Lot-et-Garonne, Alicante devenant Aliquando. », Essaid Boumadiane, « Allen et l'avenir de l'Europe », in *Valéry Larbaud : Espaces et Temps de l'Humanisme*, études rassemblées par Auguste Dezalay et Françoise Lioure, et présentées par R. Grenier, M. Kuntz et A. Dezalay, Clermont-Ferrand, Association des publications de la Faculté des lettres et sciences humaines de Clermont-Ferrand, 1995, Collection Littératures, p. 29.

⁴⁸ フランス南西部、ガロンヌ川とロット川が合流する地域にある。県庁所在地はアジャン。

Naturellement, je laisse le chauffeur ici ; pour un maiden voyage c'est le patron qui doit conduire.	もちろん、運転手はここに置いていきます。初走行で運転するのは持ち主の役目ですからね。
Vous ne pouvez pas refuser : je croirais que vous doutez de mes capacités comme chauffeur.	断るのは無しですよ。〔もし断ったら〕あなた方が私の運転能力を疑っていると思ってしまうですよ。
[Le Poète :] — Ô idée excellente ! ô véritable ami !	< 詩人 > おお、素晴らしい考えだ！ おお、真の友よ！
[— :] — Au lieu d'emmener	< — > 持って行く代わりに
[— :] — de quoi coucher sur la douce	< — > 恋人のような車で寝るのに必要なものを
[— :] — il invite ses amis à prendre part au maiden voyage de sa bagnole !	< — > 彼は自分の車の初走行に友達を招待してくれる！
[L'Amateur :] — C'est parce que vous avez tous fait votre devoir de Parisiens et que vous êtes quittes envers Paris, tandis que moi je n'ai rien fait de tout l'hiver, et peu de chose au printemps jusqu'à présent.	< アマチュア > というのも、あなた方全員がパリジャンとしての務めを終えて、パリからの借りがなくなったからですよ。他方、僕はと言えば冬のあいだ何をしたわけでもなく、春になっても今までほとんど何もしてきませんでしたけどね。
Alors je voudrais réparer, vous comprenez, enfin vous donner, vous proposer l'occasion de...	だから埋め合わせしたいのです、おわかりいただけますか、みなさんに提供したい、提案したいのです、機会を……。
Mais non : c'est le plaisir de faire ce voyage en votre compagnie.	いや、違うな。みなさんと一緒に旅行するのが楽しみだからです。
[— :] — Douze jours.	< — > 12 日間か。
Le temps d'aller voir comment se comporte la Suède en cette fin d'avril et au début de mai.	この 4 月末から 5 月の始めにスウェーデンがどんな様子なのかを見る時なのですね。
[— :] — Trop loin ; non ?	< — > 遠すぎませんか？ そうでもない？
[L'Éditeur :] — Quittes envers Paris, c'est vrai ⁴⁹ .	< 編集者 > パリからの借りがなくなったというのは、本当ですね。

⁴⁹ 「編集者」の発言。Cf. Valéry Larbaud, *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, 2 tomes, édition établie par Christiane et Marc Kopylov, introduction de Pierre Mahillon, Paris, Éditions des Cendres, 1986, t. 1, pp. 80-81.

Le Poète a écrit un poème.	詩人さんは詩を一つ書きました。
Le Bibliophile a enrichi son catalogue de plusieurs trouvailles.	愛書家さんはいくつもの掘り出し物で目録を充実させました。
Vous avez présenté au public lettré un nouveau dramaturge anglais.	あなたは教養のある読者たちに一人の新たな英国人劇作家を紹介しました。
Et moi j'ai édité trois livres d'avant-garde ; et trois traductions : un Hölderlin ⁵⁰ , un Eça de Queiroz ⁵¹ et un Ricardo Guiraldes ⁵² ; et trois textes des XVI ^e et XVII ^e siècles, frais comme des filles de quinze ans, et que j'ai tout de neuf habillés ⁵³ , avec de beaux caractères sur du papier bien net et blanc, en modernisant l'orthographe, et sans apparat critique ⁵⁴ .	そして私は前衛的な3冊の本、それから3冊の翻訳を出版しました。それはヘルダーリン、エッサ・デ・ケイロス、リカルド・グイラルデスの作品、それと16世紀と17世紀の三つのテキストを。これは15歳の少女のように新鮮だったから、まっさらな服を着せてやりましたよ。美しい活字を綺麗な真っ白の紙に、綴りを現代のものにして、考証資料は付けずにね。

⁵⁰ ドイツの詩人（1770-1843）。

⁵¹ ポルトガルの小説家（1845-1900）。

⁵² アルゼンチンの小説家（1886-1927）。

⁵³ 装丁だけでなく、綴りなども含めて新たに出版したことを意味する。

⁵⁴ 「編集者」のこの発言は、古い綴りで書かれた作品を新たに出版する際に、綴りを現代のものに改め、また注釈などの考証資料を付加しないとするラルボーの見解を代弁している。ラルボーは、オランダ人編集者 Alexandre Alphonse Maurice Stols（アレクサンドル・アルフォンス・モーリス・ストール、1900-1973）が、フランス・ルネサンス期の詩人でリヨン生まれの Maurice Scève（モーリス・セーヴ、1500頃-1564頃）の死後刊行の詩集 *Microcosme*（『ミクロコスム』、1562）を出版するにあたってその注釈を依頼され、綴りを現代フランス語に改めるという結論に至るまで、両者は書簡で議論を重ねていた。その際ストールは古い綴りの尊重を主張し、一方ラルボーは現代の綴りを取り入れようとするが、両者とも考証資料については付加しないとする意見で一致している。詳細は Valery Larbaud, *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, t. 1, *op. cit.*, pp. 69-89 を参照されたい。ラルボーは特に 1926 年 12 月 16 日付のストールあての書簡において、古い綴りが作者の考えや作品の核心を伝える際の妨げになること、作品が書かれた時代を綴りが伝えているわけではないこと、このような考えが英国の識者の間では一般的であることなど自身の主張の論拠を示し、また『アレン』での「編集者」の発言を引用しながら、『アレン』においては「編集者」を 20 世紀のエティエンヌ・ドレのような人物にしつつも、古い綴りを現代のものに直して考証資料は付け加えない、と言わせたと述べている。Voir la lettre de Valery Larbaud à A. A. M. Stols du 16 décembre 1926, *ibid.*, pp. 74-81. なおこの書簡の一部と 1927 年 1 月 13 日付の書簡の抜粋が Marc Kopylov による後書きを付して、Valery Larbaud, *La Modernisation de l'orthographe des textes anciens*, postface de l'éditeur, extrait d'une lettre de Valery Larbaud à A. A. M. Stols, Paris, Éditions des Cendres, 1984 として出版されている。また『ミクロコスム』は、Maurice Scève, *Microcosme*, publié par Valery Larbaud et A. A. M. Stols, avec une introduction de Valery Larbaud, Maastricht, A. A. M. Stols, 1928 として出版された。

[L'Amateur :] — Oui, trop loin.	<アマチュア>そうですね、遠すぎますよ。
Pas de voyage précipité, pas de courses nocturnes ; le temps de prendre l'air des petites villes, de bien les voir, de lire, au café, les journaux locaux.	慌ただしい旅や、夜に走るのはやめにしましょう。小さな町をいくつも散歩して、それらをよく見て、カフェで地方新聞を読む時間を取りましょう。
Surtout les villages.	とりわけ村々を。
Voir en détail quelque coin d'un pays pas trop loin de Paris et que nous connaissons mal.	私たちが良く知らない、パリからそう遠くない地方のどこかの片隅をつぶさに見るのです。
[— :] — La France, par exemple ?	<—>例えば、フランスの？
[L'Éditeur :] — Et, en France, le Pays d'Allen.	<編集者>そして、フランスで、アレンの国を。
[Le Bibliophile :] — Mais enfin : qu'est-ce que c'est qu'Allen ⁵⁵ ?	<愛書家>ところで、アレンって何ですか？
[Le Poète :] — Un de ses amis.	<詩人>彼の友達の一人さ。
[L'Éditeur :] — Une des devises de mon Pays.	<編集者>私の故郷の標語の一つですよ。
[Le Bibliophile :] — Je vous croyais d'origine auvergnate ?	<愛書家>確かあなたはオーヴェルニュ地方のご出身ですよ？
[L'Éditeur :] — Dites donc... ⁵⁶	<編集者>え、何ですって……。

⁵⁵ « Allen » とはブルボン公ルイ二世が 1366 年に創設した「金の盾騎士団」の標語で、「*tous ensemble*」（「みんな一緒に」）を意味する。本「別冊」、「著者解題」第 3 章「タイトルの由来」（112-113 頁）におけるラルボーの説明を参照されたい。

⁵⁶ 「編集者」のこの反応は、ラルボーがブルボネ地方と、隣接するオーヴェルニュ地方を峻別していたことを表している。現在のフランス地方行政区画において、ブルボネ地方に相当するアリエ県はオーヴェルニュ地域圏に属するが、このような複数の県を包含する地域圏は 1964 年に設けられたもので、フランス革命以前の地域区分によれば、アリエ県が属するブルボネ地方と、オーヴェルニュ地方は隣り合う地方であった。『幼なごころ』の「*La Grande Époque*」（「偉大な時代」）には、主人公でブルボネ地方に生まれた 8 歳のマルセルが、以前両親と訪れたオーヴェルニュ地方での思い出を「真っ黒で大きな町に背の高いブロンドの人々が住んでいる、百の山々の国、つまりオーヴェルニュでのことだった」と述べ、オーヴェルニュ地方を異郷として認識している様子が描かれている。Cf. « C'était au pays des Cent Montagnes, où de grandes villes noires sont habitées par de grands hommes blonds, l'Auvergne. », « *La Grande Époque* », *Enfantines, Pléiade*, p. 442. またラルボーは 1932 年、オーヴェルニュ地方 Ambert（アンベール）出身の作家 Henri Pourrat（アンリ・プーラ、1887-1959）への書簡において、プーラの著作 *En Auvergne : Les Limagnes*（『オーヴェルニュにて、リマーニュ平野』、Grenoble, B. Arthaud, 1932）の恵贈に感謝しつつ、プーラからラルボーへの献辞にも見

[Le Poète :] — Mais l’Auvergne ⁵⁷ ! Blaise Pascal ⁵⁸ ; E. Chabrier ⁵⁹ ...	< 詩人 > おお、オーヴェルニュ地方！ブレーズ・パスカル、エマニュエル・シャブリエ……。
[L’Éditeur :] — Allen est la devise de l’ordre de l’Écu d’or, fondé en 1366 par notre duc, Louis II de Bourbon, au retour de sa captivité en Angleterre.	< 編集者 > アレンとは英国での捕虜生活から帰還した我が公、ブルボン公ルイ二世が 1366 年に創設した金の盾騎士団の標語なのです。
[Le Bibliophile :] — Et que signifie le mot Allen ?	< 愛書家 > それで、アレンという言葉の意味は何ですか？
[L’Éditeur :] — Ah ! voilà.	< 編集者 > ああ！ それはですね。
Je l’ai cherché dans Murray ⁶⁰ et j’ai vu que c’était un ancien datif de All, comme en allemand moderne.	私はそれをマレーの辞書で調べて、それが ^{オール} All の古い与格の形で、現代ドイツ語

られるように、ヴィシーをオーヴェルニュ地方の一つの町であるとしたプーラに対し、プーラ以上にヴィシーを描ける人がいるとは思えないと述べつつも、「*La Reine des Villes d’Eaux*」（「水の町の女王」）であるヴィシーはオーヴェルニュ地方には属していない、と返答している。Cf. « En voyant Vichy annexé à l’Auvergne avec tant d’autorité, je me suis dit que si jamais un « Bourbonnais » entre dans cette même collection, vous entendrez les protestations irrédentistes d’un de mes compatriotes. Cusset à la rigueur, et Saint-Pourçain-sur-Sioule comme enclave auvergnate... ; mais Vichy ! Cependant je doute que le futur protestataire, décrire « La Reine des Villes d’Eaux » », la lettre de Valery Larbaud à Henri Pourrat du 8 juillet 1932, in *CVL*, n° 1, 1967 (sans pagination) ; « [Dédicace à Valery Larbaud :] À Valery Larbaud, Cher Monsieur, c’est un petit essai géographique, oserai-je vous en faire l’hommage ? Je souhaite que ce que vous y trouverez de Vichy, ou à propos de Vichy, ne vous déplaie pas trop. Voyez-y, je vous prie le témoignage d’une admiration que chacun de vos livres renforce et permettez-moi de me dire vraiment à vous. Henri Pourrat. Ambert, 31/5/1932 », *ibid.*, note 1.

⁵⁷ フランス中部の地域圏で、中心都市はクレルモン＝フェラン。現在ではアリエ県もこの地域圏に含まれるが、フランス革命以前の旧州でのオーヴェルニュ地方は、現在のカンタル県とピュイ＝ド＝ドーム県に相当するため、ブルボネ地方に隣接する州となる。

⁵⁸ オーヴェルニュ地方クレルモン＝フェラン生まれの数学者・物理学者・思想家（1623-1662）。1670年に未完の「宗教弁証論」の約900の断片をまとめた *Pensées*（『パンセ』）が死後刊行された。篠沢秀夫『フランス文学案内』、朝日出版社、2001年、37頁を参照した。

⁵⁹ Alexis-Emmanuel Chabrier（アレクシ＝エマニュエル・シャブリエ、1841-1894）、オーヴェルニュ地方アンベール生まれの作曲家。

⁶⁰ ラルボーはマルセル・レイへの1907年6月21付の書簡において、「ずっと欲しかった辞書を手に入れた」と記しており、またこの書簡の注釈から「マレーの辞書」とあると推察される。Cf. « D’abord et avant tout le dictionnaire de Murray, dont j’avais depuis si longtemps envie. », la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 21 juin, 1907, lettre 49, *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. I, 1899-1909, p.174 ; « *New English Dictionary on Historical Principles*, appelé aussi l’*Oxford Dictionary*, œuvre du philologue anglais Sir James Augustus Murray (1837-1915). La publication du dictionnaire, commencée en 1884, s’acheva en 1928. », *ibid.*, p. 355, lettre 49, note 9.

	のものと同じだ、と書いてあるのを見ました。
Mais cela ne va pas avec l'explication donnée par Louis II à ses chevaliers, et qui est (je cite de mémoire) : « Allons <i>tous ensemble</i> au service de Dieu et à la défense de nos pays, et jurons d'être <i>tous unis</i> pour faire respecter les Dames, car c'est d'elles, après Dieu, que vient tout l'honneur du monde. »	しかしそれはルイ二世が騎士たちにおこなった説明とは一致しません。その説明とは（私の記憶によれば）、「神への奉仕と私たちの国の防衛のためにみんな一緒に行こう、貴婦人たちを崇拜せしめるためにみんな一緒にすることを誓おう。なぜなら、神の次には、彼女たちによって、この世のすべての恩恵がもたらされるのだから」ということなのです。
[Le Bibliophile :] — Eh bien, votre duc, il était pourri de littérature chevaleresque.	<愛書家>確かに、あなたの公、彼は騎士道文学にかなり感化されていましたね。
[— :] — « Nos pays », j'aime ce pluriel.	<—>「私たちの故郷」、この複数形がいいね。
[L'Éditeur :] — Je pense donc que c'est une contraction de All One.	<編集者>つまりそれは「すべてが一つになっている」の縮約だと私は思うのです。
[L'Auteur :] — Comme dans : <i>It is all one to me</i> ; autrement dit, je m'en fiche ?	<作者>私にはどうでもいいことだ、言い換えれば、自分には関係ないよ、ってことですか？
[L'Éditeur :] — Non, mais dans le sens de <i>tous ensemble</i> , comme dans l'espagnol <i>Todos Unos</i> , exactement.	<編集者>いえいえ、そうではなくて、「みんな一緒に」という意味です。ちょうどスペイン語のすべてはひとつのようなものです。
Louis II aura entendu All One, et il en a fait Allen.	ルイ二世は ^{オールワン} All Oneと聞いたのでしょうね。そしてそれを ^{アレン} Allen にしたのです。

[Le Bibliophile :] — Curieux, ce goût pour les devises en langue étrangère : <i>Ich dien</i> ⁶¹ , honni soit ⁶² ...	<愛書家>外国語で書かれたモットーが好まれるというのは妙ですよ。私は仕える、[思い邪なる者に] 災いあれ……。
[— :] — le désir de n'être pas entendu des passants.	<—>通りすがりの人には理解されたくないという願い。
[— :] — Et ici l'anglomanie, déjà.	<—>それに、もうここに英国びいきが見受けられますね。
[— :] — Comme Jean le Bon ⁶³	<—>ジャン善良王のようだ
[Le Poète :] — qui se faisait blanchir à Londres.	<詩人>ロンドンで洗濯をさせていた人。
[Le Bibliophile :] — Miracles du printemps !	<愛書家>春の奇跡だ！
Voilà que ce qu'il y a peut-être de plus parisien dans Paris, un Éditeur, se découvre une Province natale.	パリの中で最もパリの的なものかもしれない編集者が、自分の故郷を発見するのだから。
[L'Éditeur :] — Un <i>Duché</i> !	<編集者>公国ですよ！
[— :] — où l'édition ne doit pas être florissante	<—>そこでは出版業が流行りそうもない
[— :] — et la bibliophilie peu répandue.	<—>それに愛書趣味もほとんど広まっていないね。
[L'Éditeur :] — Moi, je vous proposerais ceci : joindre, par une ligne aussi brisée ou sinueuse que nous voudrions, le point de départ des routes françaises au point d'intersection des deux grandes diagonales de la France, qui est situé sur le territoire de mon Duché.	<編集者>私はね、みなさんに次のことを提案しましょう。私たちが望むとおりの折れ曲がった、あるいは曲がりくねった一本の線によって、フランスの道路の出発点を私の公国の領土にあるフランスの二つの大きな対角線の交差点につなぐことを。
Autrement dit : départ du parvis Notre-Dame, et arrivée à la colonne de pierre et de plâtre, généralement surmontée d'un drapeau	言い換えましょうか。ノートルダム教会前広場から出発し、すっかり変形して色あせた粗織りの麻の旗が通常掲げられて

⁶¹ 英国皇太子の紋章に書かれている標語。エドワード三世(1312-1377、在位 1327-1377)の時代に由来する。

⁶² « Honi soit qui mal y pense » (「思い邪なる者に災いあれ」) は、英国最高の勲章である The order of the Garter (ガーター勲章) に刻印された標語。1348年にエドワード三世によって制定されたといわれ、左ひざの下に着けるのが習わしである。

⁶³ フランス王ジャン二世のこと。

d'étamine, tout de travers et déteint, qui est à quatre kilomètres de Saint-Amand-Montrond ⁶⁴ .	いる、サン=タマン=モンロンから 4 キロのところにある、石と石膏でできた柱に到着する、ということにしましょう。
[— :] — Mais c'est dans le Cher, et non dans l'Allier ?	<—>でもそれはシェール県にあるもので、アリエ県ではありませんよね？
[L'Éditeur :] — Saint-Amand-Montrond est du duché de Bourbonnais.	<編集者>サン=タマン=モンロンもブルボネ公国に属しているのですよ。
Et retour au parvis Notre-Dame. Adopté ?	それからノートルダム教会前広場に戻ります。よろしいですか？
[L'Amateur :] — Oui. Et avec la bénédiction de Charlemagne ⁶⁵ , dont la statue sera notre point de concentration.	<アマチュア>了解。彫像が僕たちの集合場所になるだろう、シャルルマーニュの祝福とともに。
Quel jour sommes-nous ?	今日は何日だっけ？
[L'Auteur :] — La Saint-Shakespeare ⁶⁶ : 23 avril.	<作者>聖シェイクスピアの日。4月23日ですよ。
[L'Amateur :] — Donnez-moi quatre jours pleins.	<アマチュア>まる4日間いただけますか。
Le 28 à huit heures du matin ?	28日の朝8時はどうでしょう？
Parvis Notre-Dame, côté Statue de Charlemagne.	ノートルダム教会前広場、シャルルマーニュ像のそばで。
On attendra les retardataires jusqu'à huit heures trois quarts, dernière limite.	遅れた人を8時45分まで待ちましょう。それが最終リミットですよ。
[Le Bibliophile :] — « Ah ! que de souffles aux Provinces ! »	<愛書家>「ああ！ なんと多くのそよ風が国々に吹くのだろう！」

⁶⁴ ブルボネ地方シェール県の町サン=タマン=モンロンの近くに位置する標石（里程標）で、フランス国旗が掲げられている。本「別冊」、「著者解題」第12章「旗に敬礼」の項（130-131頁）を参照されたい。

⁶⁵ ノートルダム教会前広場にある、シャルルマーニュ（742-814）の騎馬像を指す。ドイツ名でカール大帝とも呼ばれる西ローマ皇帝、カロリング朝のフランク王（在位：768-814）で、ヨーロッパのほぼ全土の統治、制度の整備、学術の振興に努め、カロリング・ルネサンスと呼ばれる文化興隆を推進した。

⁶⁶ ウィリアム・シェイクスピアはユリウス暦1616年4月23日に亡くなった。現行の暦法であるグレゴリオ暦では5月3日にあたる。

<p>[L'Éditeur :] — Et pour les respirer nous voilà tous unis, tous ensemble. <i>Todos Unidos</i>, Allen ! »</p>	<p><編集者>そしてそよ風を吸い込むために、私たちはほら、みんな一つに、みんな一緒になった。すべてはひとつ、アレン！」</p>
---	--

第 2 章

II	第 2 章
[L’Auteur :] Nous arrivâmes au rendez-vous, l’Éditeur et moi, à huit heures vingt.	＜作者＞私たちは約束の場所に着いた。編集者と私は、8 時 20 分に。
Le Poète et le Bibliophile étaient déjà installés dans la voiture, face à Notre-Dame.	詩人と愛書家はすでに車に乗り込んでいた。ノートルダム教会の正面で。
C’était une matinée tendre et tiède, et le bleu du ciel descendait jusqu’aux toits, jusqu’au pavé, par l’intermédiaire d’une très légère brume.	穏やかな暖かい朝で、ごく薄い靄をとおして、空の青さが家並みの屋根や舗道まで下りてきていた。
La voiture de notre ami était encore plus belle que nous ne l’avions imaginée : une longue chose toute bleu d’azur et aluminium argenté ⁶⁷ ; et l’adieu des faubourgs nous prouva que cette beauté n’était pas invisible.	友の車は私たちが想像していたよりもずっと美しかった。全体が紺碧の青と銀のアルミニウム色の長い代物だった。そしてパリ近郊との別れの瞬間に、この車の美しさが際立って見えた。
Notre ami, qui conduisait tête nue, cheveux au vent, le buste très droit, l’œil fixe, devint le Fou.	我らが友は、帽子をかぶらずに運転していて、髪を風になびかせ、胸を張り、視線を定め、「狂人」となった。
Le Bibliophile, légèrement voûté par le vice, prétendu impuni ⁶⁸ , de la lecture, devint le Déjeté.	愛書家は、読書という、いわゆる罰せられない悪徳のため軽く背中が曲がり、「奇形の人」になった。
L’Éditeur s’entendit appeler par le nom d’un criminel en vogue dont la barbe	編集者は鬚が似ていることから、人々の関心の的になっているある罪人の名前で

⁶⁷ ラルポーは「著者解題」第 17 章「紺碧と銀色」において、この車について述べている。本「別冊」142 頁を参照されたい。

⁶⁸ この記述はラルポーが 1924 年に雑誌 *Commerce* (『コメルス』) の創刊号に掲載した読書論 «Ce vice impuni, La lecture» (「罰せられざる悪徳・読書」、*Commerce*, cahier I, été 1924, pp. 63-102) を想起させる。読書を «ce vice raffiné et impuni» (「あの洗練された、罰せられざる悪徳」と呼んだのは、アメリカ生まれの Logan Pearsall Smith (ローガン・ピーアソール・スミス、1865-1946) の詩で、ラルポーが序文を寄せた Philippe Neel による仏訳、*Trivia*, Paris, Grasset, 1921 所収の «Consolation» (「慰め」) であるとラルポーは別の場所で述べている。Voir Valéry Larbaud, *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées*, édition revue et complétée par Béatrice Mousli, Paris, Gallimard, 1998, p. 29 ; Logan Pearsall Smith, *Trivia*, traduction de Philippe Neel avec la collaboration de l’auteur, introduction de Valéry [sic] Larbaud, Paris, Grasset, 1921, p. 130 ; Logan Pearsall Smith, *Trivia*, London, Constable and Company, 1918, p. 143.

ressemblait à la sienne, et le Poète fut proscrit de la République comme métèque.	呼ばれた。そして詩人は共和国からよそ者として追放されていた。
Ma casquette et ma pipe me naturalisèrent Angliche ⁶⁹ .	私のハンチング帽とパイプは私を「イギリス野郎」にしていた。
Quelle collection !	何という集団なのだろう！
Et un beau voyou nous prophétisa joyeusement une catastrophe.	すると、一人のハンサムな不良が私たちに、厄介事が起きるよ、とおもしろがって予言した。
Agréable est la voix de l'envie quand elle s'exprime avec cette concision.	嫉妬の言葉をそういう簡潔さで示されるのは愉快なものだ。
Eh oui : nous sommes, aujourd'hui, au nombre des heureux de ce monde ; l'ami qui nous conduit est un des jeunes hommes les plus riches de Paris, et nous avons des pardessus épatants et des tas de trucs et d'accessoires de grand lusque ⁷⁰ et mieux encore : en large et en long, toute la France.	実にそうだ。というのも、私たちは、今日、この世の幸せな者の数の中に入っているからだ。私たちを運んでくれる友はパリでもっとも裕福な青年の一人で、私たちは素敵なオーバーコートや豪華なたくさんのおもちゃやたくさんの付属品、そしてそれ以上により良いものを持っている。すなわち細大漏らさず、フランス全体を。
Passé la barrière, nous nous attendions à sauter et à danser malgré nous sur le pavé du roi ⁷¹ ; mais rien : route de velours ; la grande machine nous servait le chemin comme s'il eût été partout un énorme pneumatique, lisse et gonflé à plein entre les deux cannelures des fossés.	市門を超えると〔パリの外に出ると〕、私たちは否応なしに公道の上を飛びはねたり、揺れたりするだろうと覚悟していた。だが何事もなかった。道がビロードのように心地よいものだった。その大きな機械が私たちを運ぶ道のりは、どこもかしこもまるで二つの溝の間に挟まった、なめらかで目いっぱい空気の入った

⁶⁹ 「イギリス人」を表す隠語。Cf. « Arg. Anglais », *Trésor de la langue française, op. cit.*, t. 3, 1974, p. 19, s.v. *angliche*.

⁷⁰ 『フランス語語源辞典』Walther Von Wartburg, *Französisches etymologisches Wörterbuch : eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes* (FEW) 25, 1115a, s.v. *autonomia* の « *luxus* » の項によれば、標準フランス語で「日常の事柄において誇示する富や華やかさ」を意味する « *luxe* » を、パリの俗語的発音では 19 世紀初頭以来 « *lusque* » とも言うようである。Cf. FEW 5, 481a, s.v. *luxus*. なお 1929 年出版のガリマール版 (p. 31) のみ、「*grand*」と « *lusque*」をつなげた « *grandlusque*」と表記している。

⁷¹ Cf. « *Le pavé du roi* (vx [vieux]), Voie, endroit public. », *Trésor de la langue française, op. cit.*, t. 12, 1986, p. 1217, s.v. *pavé*.

	タイヤで出来ているかのようなだったからだ。
Pas un heurt, tandis que les jeunes ombres des arbres jouaient délicatement à sautemouton avec nous.	衝撃一つ起きなかった。木々の新鮮な影は私たちと一緒にそっと馬跳びしていたけれど。
Et les maisons, dans un continuel chahut de quilles renversées puis redressées, filaient de chaque côté de notre course dont elles réverbéraient le vent.	そして家々は、ひっくり返っては立て直される ^{きゅうちゅうぎ} 九柱戯 ⁷² のピンの絶え間ない大騒ぎのように、私たちの走行の両側で飛び去ってゆき、起こす風を跳ね返すのだった。
Mais peu à peu leur mouvement se ralentit sans que nous eussions changé d'allure.	だが少しずつ家々の動きは、私たちが速度を変えるまでもなく緩慢になった。
Elles s'espacèrent, s'éloignaient de la route au fond des jardins de la grande banlieue.	家々の間隔が空き、道から離れ、遠い郊外の庭園の奥へと引っ込んでいった。
Et ce mouvement de retraite s'accroît jusqu'au moment solennel où on passa de l'allegro à l'andante et où, malgré notre vitesse plus grande, l'horizon plus lointain se mit à tourner plus lentement.	そして家々が道から離れてゆく様子はさらに強調され、ついに荘厳な瞬間に達すると、私たちはアレグロ〔快速〕からアンダンテ〔歩くような速さ〕に移り、私たちのさらなる加速にもかかわらず、今までより遠ざかった地平線はさらにゆっくりと回り始めた。
Un château blanc à toit bleu entre deux bois sur une longue colline marqua nettement cet instant : ce fut la première maison qui resta en vue assez longtemps pour que nous ayons pu la regarder en détail.	長い丘の上の二つの森の間に、青い屋根の白い城がその瞬間をはっきりと示してくれた。それは私たちがつぶさに見ることができたほど、視界に長い間残っていた最初の家だった。
Puis ce furent d'autres maisons, d'autres bois, des champs, qui s'attardèrent, et la fumée d'un train que nos regards suivirent longtemps.	続いて他の家々、森、畑、それらが延々と続いた。そして私たちの視線が長時間追いかけた汽車の煙も。
En nous un calme attentif répondit au ralentissement général du paysage, et entre nous comme en nous un silence eut lieu.	私たちの中で、細かなことに注意を向ける落ち着きが、風景の全体的な減速と呼

⁷² ボウリングの原型と言われる室内競技。

	応じた。そして私たちの内部と同様に、私たちの間にも沈黙が生まれた。
Si soigneusement la carrosserie nous porte, si affectueusement nous enveloppent les souples étoffes de nos habits de voyage, si longuement nous caresse le vent pur et tiède que	車体が私たちをととても丁寧に運び、旅行服のしなやかな布が私たちをととても優しく包み、澄みわたる心地よい風が私たちをずっとなでているので
Repos.	休息。
Repos dans le sein de la vitesse maxima, quatre-vingt-dix à l'heure, marquée au cadran.	最高速度、目盛盤が時速 90 キロを示す中での休息。
Oui, il y eut cet instant où sans aucun son retentit le mot d'ordre : Chut !	そう、この瞬間、何の音もしない時に、その指令が響き渡った。「静かに！」
Nous venions d'entrer dans les Provinces ⁷³ .	旧州の地域に入ったところだった。
...ligne de vitesse ininterrompue coupant comme des ciseaux la soie l'Austrasie ⁷⁴ et la Neustrie ⁷⁵ , la Bourgogne ⁷⁶ et l'Aquitaine ⁷⁷ ...	……淀みないスピードが描く直線がハサミのように、絹のアウストラシア、ネウストリア、ブルゴーニュ、アキテーヌを切り裂きながら……。
[L'Amateur :] « Je vais à cent ?	<アマチュア> 「時速 100 キロまで行こうか？」
[L'Éditeur :] — Non ! non ! ralentis jusqu'à cinquante pour tourner à gauche.	<編集者> いやいや！ 時速 50 キロまで落としてくれ、そして左へ曲がるんだ。

⁷³ フランス革命 (1789) 以前のフランスは « province » (「州」) に分けられていたが、これは現在のフランスの « région » (「地域圏」) にほぼ対応する。ここでは、小さな公国がフランス国内にいくつもあることを強調するために、大文字と複数形を用いて « Provinces » と表記していると考えられる。

⁷⁴ フランク王国の東部地方で、現在のフランス北東部、ドイツ西部、ベルギーを含むライン川西岸地域を指す。

⁷⁵ フランク王国の西部にあったセーヌ川流域を中心とする分国。

⁷⁶ フランス中東部の地方で古くからブルゴーニュ公国として栄えた。中心地はディジョン。

⁷⁷ フランス南西部、ガロンヌ川流域一帯の地名。中心地はボルドー。

Ça passe à Sens ⁷⁸ , à Provins ⁷⁹ , ça suit la Voulzie ⁸⁰ ; alors, à partir de là, fais du trente, on déjeunera à Troyes ⁸¹ .	この道はサンス、プロヴァンを通るんだ、ヴルジー川に沿ってね。それで、そこからは時速 30 キロにしてくれ。トロワで昼食にしよう。
Et puis nous rejoindrons la vallée de l'Yonne ⁸² . »	それからヨンヌ渓谷へ行こう。」
[L'Auteur :] Sur la campagne sans âge, à travers la distance, l'histoire du plus récent tassement des peuples dans la grande plaine d'Europe, l'histoire carolingienne ⁸³ , se reforme par fragments émergeant aux horizons.	<作者>老いることのない田園地帯の上に、時を超えて、ヨーロッパの大平原に諸民族がひしめき合った、最も近い過去の歴史、すなわちカロリング朝の歴史が、地平に浮かび上がる断片によって再び形作られる。
On respire largement l'air de la première Renaissance ⁸⁴ .	最初のルネサンスの空気を大きく吸い込む。
Entre le Centre-Est ⁸⁵ et nous, nulle barrière, et ce sont des moines de la vallée de la Loire ⁸⁶ qui possèdent et cultivent la presqu'île de Sirmio ⁸⁷ , où fut la villa de Catulle ⁸⁸ .	東サントル地方と私たちとの間には、何の障壁もなく、カトゥルス ⁸⁸ の別荘だったシルミオ半島を所有し耕しているのは、ロワール渓谷の修道士たちである。
Mais déjà les coteaux se rapprochent, la terre se limite, on est moins au large, et c'est	だがすでに小さな丘の連なりが近づいていて、そこがその地所の境界となってい

⁷⁸ フランス中東部、ヨンヌ県の町。

⁷⁹ フランス北部地方、セーヌ=エ=マルヌ県の町。

⁸⁰ セーヌ=エ=マルヌ県を通る川。

⁸¹ シャンパーニュ地方、オーブ県の県庁所在地。

⁸² ヨンヌ県はブルゴーニュ地方北西部、ヨンヌ川流域に位置する。

⁸³ Carolingiens (カロリング朝、751-987)、フランク王国後期の王朝。小ピピンが創始し、その子シャルルマーニュ(カール大帝)が 800 年にローマ教皇より皇帝号を与えられ、ローマ帝国の継承者となった。後に王国は三つに分裂、現在のドイツ、フランス、イタリアのもととなる。

⁸⁴ 8 世紀末から 9 世紀初頭にかけて、フランク王国のシャルルマーニュ(カール大帝)の宮廷を中心に行われた古典文化の再興運動であるカロリング・ルネサンスを指す。

⁸⁵ フランス南東部ローヌ=アルプ地域圏とオーヴェルニュ地域圏一帯を指す。

⁸⁶ ロワール川(フランス最長の川、フランスを文化的に南北に分ける境界線になっている)流域に広がる渓谷。アンボワーズ、アンジェ、ブロワ、オルレアン、トゥールといった歴史上の重要都市が点在する。

⁸⁷ イタリア、ガルダ湖の近くの町。

⁸⁸ Gaius Valerius Catullus (ガイウス・ヴァレリウス・カトゥルス、前 87-前 54) ローマの詩人。

l'histoire de la Nouvelle Germanie ⁸⁹ , Frankreich ⁹⁰ , qui commence.	る。これまでに比べて広々とした感じは しない。始まるのは新ゲルマニア、フラ ンクライヒの歴史である。
Comme si le Rhin ⁹¹ était devenu soudain aussi large que l'Atlantique.	まるでライン川が突然、大西洋と同じ大 きさになるかのようだ。
Expliquez ça.	私には説明しかねるけれど。
Mais déjà les rois au nom grec ; déjà Philippe le Bel ⁹² .	しかしすでにギリシャの名前の王たちが 現れる。すでにフィリップ端麗王が。
Déjà les Grandes Compagnies et toutes les fileuses de France filant pour la rançon de Du Guesclin ⁹³ .	すでに〔百年戦争の〕傭兵部隊とゲクラ ンの身代金のために糸をつむぐフランス のすべての紡ぎ手の女性たちが。
Déjà (et enfin !) la marche de Charles VIII ⁹⁴ , moins roi de France qu'empereur d'Orient ⁹⁵ , vers l'Italie.	すでに（そして最後に！）シャルル八世 の行軍、フランス王というよりも東ロー マ帝国皇帝が、イタリアに向かってゆく。
Voyageurs dans le temps, à cette allure nous serons bientôt en l'an MM... ⁹⁶	時間旅行する私たちは、この速さだと間 もなく 2000 年に着くだろう……。
À Paris, nous savions la date, et l'heure, et l'instant.	パリでは、私たちは日、時刻、瞬間を把 握していた。

⁸⁹ Le traité de Verdun (ヴェルダン条約、843) によってフランク王国が三分割されてきた東フランク王国。

⁹⁰ ドイツ語で「フランス」を意味する。

⁹¹ スイス南部のアルプス山脈に発し、ドイツ西部、オランダを貫流して北海に注ぐ。

⁹² Philippe IV (フランス王フィリップ四世、1268-1314、在位 1284-1305)。

⁹³ Bertrand du Guesclin (ベルトラン・デュ・ゲクラン、1320?-1380)。中世フランスの軍人、百年戦争時の軍事司令官。初期に大活躍してフランスの劣勢を挽回した。1364年の La bataille d'Auray (オレーの戦い) で敗北し、ブルターニュ公ジャン四世に捕えられて捕虜となるが、国王シャルル五世の払った身代金によって解放された。レジーヌ・ペルヌー、ジョルジュ・ペルヌー『フランス中世歴史散歩』の「ブルターニュとデュ・ゲクラン将軍」の項によれば、この時フランス中の娘たちが彼の身代金支払いのために機を織った、とのことである。Georges et Régine Pernoud, *Le Tour de France médiéval*, Stock, 1982, p. 309 およびレジーヌ・ペルヌー、ジョルジュ・ペルヌー、福本秀子訳、白水社、白水Uブックス、2010年、215頁を参照した。

⁹⁴ ヴァロア朝第7代のフランス王(1470-1498、在位 1483-1498)で、l'Affable (温情王) と呼ばれた。

⁹⁵ 395年、東西に分裂したローマ帝国の東半分を支配した帝国(ギリシャ、小アジア、シリア、エジプト)。首都はコンスタンチノーブル。1453年にオスマントルコに滅ぼされた。

⁹⁶ カロリング朝の歴史を後に、もう中世末期まで一気に来たという速さを指している。

<p>Il arrivait même que quelqu'un de notre connaissance, un ami, un homme que nous rencontrions le jeudi chez les Un-Tel, sonnât une de ces secondes retentissantes⁹⁷ qui introduisent un élément nouveau dans le temps des hommes.</p>	<p>私たちの知り合いの誰かや友人、毎週木曜日に誰れさんの家で会う人が、人々の時間の中に新たな要素を導入した、あの響き渡る秒針の一つまで告げてくれるようなことさえあった。</p>
<p>Ici, rien que le silence des champs sous la simplicité du ciel, et la lente histoire agricole sur les abîmes temporels de la géologie.</p>	<p>だがここにあるのは、すっきりとした空の下、田園の静けさと、地質学が見せる時の深淵の上に成り立った、農業の緩慢なる歴史だけである。</p>
<p>Tiens : la première bergère⁹⁸.</p>	<p>おや、羊飼いの少女が初めて現れた。</p>

⁹⁷ 時計の秒針が普及したことによって、時間を尋ねた時に、それまでの「何時何分」との返答に加え、「何秒」まで答えるようになったことを指すと考えられる。

⁹⁸ 田園詩の伝統では、都会を出た男性（騎士・貴族）が田園で羊飼いの少女に出会う、という展開になるため、それを指して（ふざけて）いると思われる。

第3章

III	第3章
[— :] « Comme ils se trouvaient en Champagne	<—> 「シャンパーニュ地方にいた時
[Le Poète :] — Leur esprit battit la campagne ⁹⁹ .	<詩人>彼らはばかげたことを考えた。
[— :] — Puis par Tonnerre ¹⁰⁰ , Auxerre ¹⁰¹ , Lichères ¹⁰²	<—>続いてトネール、オーセール、リシエールを經由し
[— :] — Jusqu'en Avallon ¹⁰³ ils allèrent.	<—>アヴァロンまで彼らは行った。
[Le Poète :] — On est bien, sur cette terrasse de Vézelay ¹⁰⁴ .	<詩人>ヴェズレーのこの展望台は居心地がいいね。
[— :] — Description dans tous les guides et pensum à l'École des beaux-arts.	<—>どのガイドブックにも載っている説明と美術学校の退屈な作業ですね。
[Le Poète :] — Un peu encombrée d'ordures, la terrasse, sauf vot' respect m'sieur le Maire.	<詩人>展望台はゴミでいっぱいだけど、失礼ながら市長閣下。

⁹⁹ Cf. « Loc. *Esprit qui bat la campagne*, divaguer, extravaguer », *Le Nouveau Petit Robert 2009*, p. 233, s.v. *battre*.

¹⁰⁰ ブルゴーニュ地域圏。

¹⁰¹ ヨンヌ県の県庁所在地。

¹⁰² リシエール=シュル=イオンヌ、ブルゴーニュ地域圏。

¹⁰³ ブルゴーニュ地方北部、ディジョン北西にある郡庁所在地。東京大学の松村剛教授によれば、Avalon と書けばアーサー王が重傷を負った際に妹 Morgane によって連れて行かれたと伝えられる伝説的な妖精の島を指す（フランス国立図書館のサイトで閲覧できる「アーサー王辞典」<http://expositions.bnf.fr/arthur/pedago/06.htm> 2014年5月30日閲覧）。この伝説が地名の類似性によって示唆されているのは、中世フランス文学においてアーサー王物語の作者として有名な Chrétien de Troyes（クレティアン・ド・トロワ、1135頃-1183頃）がシャンパーニュ地方の出身であることや、上述の「ばかげたことを考えた」からの連想によるのだろうか。直前まで中世が話題になっていたことを考えればこの連想はまったくありえなくはないように思われる。また、ここまでの4行はそれぞれ8音節（octosyllabe）からなり、aabbの組み合わせで韻を踏んでいる。中世の物語でよく使われるこの形式が採用されているのは、アーサー王伝説への暗示と無関係ではないのかもしれない、とのことである。

¹⁰⁴ ブルゴーニュ地方ヨンヌ県にある村。エルサレム、バチカンと並ぶキリスト教三大巡礼地の一つであるスペインの Santiago de Compostela（サンティアゴ・デ・コンポステーラ）への巡礼路で、世界遺産となったロマネスク様式の Basilique Sainte-Madeleine（サント・マリー・マドレーヌ大聖堂）は、入り口上部にある装飾（tympan：タンパン）の彫刻も有名である。

[— :] — Alors la prochaine étape : Dijon ¹⁰⁵ ?	<—>それで次の行き先というのは、ディジョンかな？
[L'Amateur :] — Mais non : Bourges ¹⁰⁶ , pour rejoindre la vallée de la Creuse ¹⁰⁷ .	<アマチュア>いや、ブルジュだよ。クルーズ川流域に行くためにね。
[— :] — Nous passerons la Loire à Cosne ¹⁰⁸ ?	<—>私たちはコヌでロワール川を渡るのかな？
[Le Poète :] — Pourquoi pas à Gien ¹⁰⁹ ?	<詩人>ジアンはどうかな？
J'aimerais revoir, et vous montrer, à Gien, une jolie église dont j'oublie le nom ; mais je me souviens d'une chose comme l'intérieur d'une belle boîte de dragées ¹¹⁰ , rose et bleu ciel.	もう一度行って、きみたちに見せたいなあ、ジアンには、素敵な教会があるんだよ。名前は忘れちゃったけど。でも教会の中がピンクとスカイブルーの、ドラジェの綺麗な箱のようだったことは覚えているよ。
Une église pour un <i>Manon Lescaut</i> ¹¹¹ illustré en couleurs, avec Des Grioux en chaire ¹¹² .	説教台にデ・グリューがいるカラーの挿絵が入った『マノン・レスコー』のような本のための教会。
À moins que ça ne soit à Montargis ¹¹³ ?	あるいは、モンタルジだったかな？

¹⁰⁵ ブルゴーニュ地方コート=ドール県の県庁所在地。ワインやマスタードの山地として有名。

¹⁰⁶ ベリー地方シェール県の県庁所在地。

¹⁰⁷ クルーズ、リムーザン地域圏。

¹⁰⁸ コヌ=クール=シュル=ロワール、ブルゴーニュ地域圏。

¹⁰⁹ オルレアン南東、ロワール川上流の町。ファイアンス陶器の産地。

¹¹⁰ 白やピンク、ブルーなどの硬い糖衣で包んだアーモンド。洗礼や出産祝いには青やピンク、結婚祝いには白のドラジェを配る。

¹¹¹ Abbé Prévost (アベ・プレヴォ、本名 Antoine François Prévost : アントワーヌ・フランソワ・プレヴォ、1697-1763) の全 7 巻の作品 *Mémoires et Aventures d'un homme de qualité qui s'est retiré du monde* (『ある隠遁貴族の回想と冒険』、1731) のうちの第 7 巻、*Histoire du chevalier Des Grioux et de Manon Lescaut* (『騎士デ・グリューとマノン・レスコーの物語』) を指す。

¹¹² ラルボーの『日記』に収録された « Journal de Quasie » (「カジーの日記」) における 1911 年の記述の « Du Bourbonnais à Paris par Orléans » の項 (1911 年 3 月 6 日) には、レオン=ポール・ファルグとともにヴィシーからパリへ向かう途中にジアンに半時間とどまり、ブルボネ地方の農民作家 Émile Guillaumin (エミール・ギョーマン、1873-1951) に「マノン教会」を見せたことが、この箇所の記述と似た文章で記されている。Cf. « [...] l'église qui est une des plus jolies du Centre (l'intérieur surtout avec ses piliers peints en rose, et ses plafonds où le rose et le bleu dominant ; l'église de Manon ; intérieur de boîte à bijoux capitonnée. », Valery Larbaud, *Journal*, édition définitive, texte établi, préfacé et annoté par Paule Moron, Paris, Gallimard, 2009, p. 81. 「カジー」はラルボー家の自家用車の愛称。

¹¹³ サントル地域圏。

[— :] — Pendant que nous y sommes, nous pourrions aller passer la Loire à Orléans ¹¹⁴	<—> ついでにオルレアンでロワール川を渡りに行けるかも
[L'Amateur :] — en nous arrêtant à Paris, boulevard de la Madeleine, où j'ai vu un chapeau de voyage d'une étoffe gris-mauve que je regretterai toute ma vie de n'avoir pas acheté avant notre départ ¹¹⁵ .	<アマチュア> 僕たちがパリで一時停止した時、マドレーヌ大通りで、紫がかかったグレーの布製の旅行用の帽子を見たのに、出発前に買わなかったことを、僕は一生後悔することになりそうだな。
Il irait si bien avec ces paysages du Centre !	それはサントル地方のこの景色にとてもよく似合うだろうに！
[— :] — Non, c'est à Gien : on voit les marques des inondations, et les dates des grandes crues sur les murs.	<—> いや、それはジアンですよ。城壁に洪水の痕跡と大増水の日付が記されているからね。
[— :] — À Montargis la principale curiosité c'est le Chien ¹¹⁶ .	<—> モンタルジの主な見どころは、犬ですよ。
[Le Poète :] — Et à Gien, en hiver ou quand il pleut, la grande plaisanterie est : Temps de Gien ¹¹⁷ !	<詩人> そしてジアンでは、冬や雨の時の、うまい冗談はこれだよ。ジアンのお天気！
[L'Éditeur :] — Je l'aurais deviné.	<編集者> 私でもそれを当てられましたよ。
Vous venez de l'inventer ?	あなたは今それを思いついたのですか？
[Le Bibliophile :] — Ces maisons des vieilles rues, à Troyes, me sont restées dans la	<愛書家> トロワの古い通りにあった家々が私の脳内に留まっています。狭くて、淡い色で、鋭角の屋根の下で後ろに

¹¹⁴ ロワール川はフランス最長の川で、オルレアンは川の中流域にある Orléanais (オルレアネ地方) の中心都市。

¹¹⁵ A. O. Barnabooth, *ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* (『A. O. バルナブース全集、すなわち一つの短篇、詩および日記』、1913、以後『A. O. バルナブース全集』と略記) におけるバルナブースの «boutiquisme» (「買物趣味」) を想起させる発言である。Voir A.O.B., *Pléiade*, p. 104.

¹¹⁶ 1371 年、国王シャルル五世がモンタルジの森で殺された息子の犯人を確かめるため、容疑者の騎士と犬を決闘させた伝説に基づく。モンタルジ観光協会のウェブサイトの 8 番目の写真が、騎士と犬の像 «statue du chien» である (2014 年 4 月 28 日閲覧)。
<http://www.tourisme-montargis.fr/un-charme-historique>
また次のウェブサイトを参照した

<http://tatiana.colas.pagesperso-orange.fr/legendeetgeneralite.htm> (2014 年 4 月 28 日閲覧)。

¹¹⁷ 話し言葉で「ひどい悪天候」を表す «temps de chien [シアン]» と地名 «Gien [ジアン]» との掛け言葉であろう。

fantaisie ¹¹⁸ : les façades étroites, pâles, inclinées en arrière sous l'angle aigu du toit, comme des visages priant, les yeux au ciel.	傾いたファサード〔建築物の正面デザイン〕は、眼差しを天に向けて祈る顔のようです。
[L'Éditeur :] — Pâles, non. Couleur champagne.	<編集者> 淡い色、いや。シャンパン色〔淡い黄褐色〕ですよ。
La Champagne est cendre bleue et champagne.	シャンパーニュ地方は青灰色とシャンパン色なのです。
[Le Bibliophile :]— Oh ! et à Auxerre, ou à Sens ? cette vitrine de photographe dans le jardin public désert, quelle idée, comme c'était triste ! ¹¹⁹	<愛書家> おお！ じゃあオーセールやサンスは？ 人気のない公園の写真店のこのショーウィンドーは、なんてことだ、なんて寂しげだったろう！
[L'Éditeur :] — Toute la Province.	<編集者> 地方というものは、どこでも。
[Le Bibliophile :]— Les villes riveraines de la Loire, en amont du coude vers Orléans, le fleuve trop large pour elles leur donne un air égaré, peureux, résigné à la tristesse, à l'abandon.	<愛書家> ロワール川の沿岸の町々、オルレアンに向かって湾曲した部分の上流では、あまりにも大きな流れが、町の中に、取り乱し、おびえ、悲しみを受け入れ、諦めたような雰囲気を与えていますね。
Dans une d'elles, un soir, pas très tard mais tout le monde était couché, comme je suivais une ruelle mal éclairée, je me suis trouvé soudain au bord d'une grande masse d'eau noire en mouvement vers le Nord : un fleuve sans barques, sans trafic, un fleuve de colonie septentrionale à population clairsemée.	そんな町の中の一つで、そんなに遅くではなかったけれど、みんなが寝静まったある夜に、私が明かりの暗い路地を歩いていると、突然北へと流れる大量の黒い水をたたえた川の沿岸に行き当たりました。小舟も、往来もない川、人のまばらな北方の開拓地の川にね。

¹¹⁸ Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, s.v. *fantaisie* では « esprit, pensée, idée » (「心、思考、考え」) の意味があると指摘されている。「愛書家」の古めかしい言葉使いの表れだと見なせば、この意味で解釈できるのかもしれない。
<http://www.littre.org/definition/fantaisie> (2014年9月13日閲覧)

¹¹⁹ ラルボーの『日記』に収録された「カジーの日記」における « De Paris en Bourbonnais par l'Yonne et la Nièvre » の項 (1911年2月11日) には、パリからトロワへ向かった時の様子が、この箇所の記事と似た文章で記されている。Cf. « Arrivé à Troyes, promené à pied dans les rues. — La province apparaît tout de suite : une vitrine de photographe isolée dans un square. (Il n'y a rien de plus triste que cela.) — En gros Troyes semble une ville agréable. », Valéry Larbaud, *Journal, op. cit.*, 2009, p. 76.

Si différent de la Loire des châteaux avec / Le pacifique arroi de mille peupliers ¹²⁰ .	城が立ち並ぶロワール川とはあまりにも違っていましたよ／数知れぬポプラの穏やかな連なりのある
[L'Éditeur :] — De qui est-ce ?	<編集者>これは誰からの引用？
[Le Bibliophile :] — Devinez. Vielé-Griffin.	<愛書家>当ててみてください。ヴィエレ=グリファンですよ。
[Le Poète :] — Quelques-unes pourtant ont dû jadis essayer d'être gaies, de vivre leur vie ; à Gien même on voit des espèces de loggie, des façades sculptées, des terrasses.	<詩人>そうは言っても、それらの町のうちのいくつかは、昔は活気のある町になろうと試み、独自の生活を営もうとしたはずだよ。まさにジアンでも、さまざまなお廊や彫刻が施されたファサードやテラスが見られるよ。
Elles ont eu comme une crise de bonheur et de volupté.	町は幸福と逸楽の熱狂のようなものを経験した。
Elles ont voulu faire des folies.	町は馬鹿げたことをしたかった。
Elles ont été italianisantes.	町はイタリア風になったんだ。
Et puis, elles ont renoncé, se sont rangées, sont redevenues les villes de la Nouvelle Germanie, les cousines pauvres des petites résidences allemandes.	それから、町はあきらめ、おとなしくなり、再び新ゲルマニアの町、ドイツの小さな住まいのみすばらしい従姉妹になったんだ。
[Le Bibliophile :] — Paris et la Cour leur suçaient la vie comme avec une paille	<愛書家>パリと宮廷はストローで吸うように町の生命を吸い取り
[Le Poète :] — et le courant d'air de la Loire leur a donné un rhume de cerveau chronique.	<詩人>そしてロワール河の空気の流れが町に慢性の鼻風邪を与えた。
[L'Éditeur :] — Vous verrez Bourges ¹²¹ : une cathédrale de grande capitale européenne, des palais superbes, dignes d'une sous-préfecture de la Lombardie ¹²²	<編集者>みなさんはブルージュをご覧になれますよ。ヨーロッパの大いなる中心地の聖堂、ロンバルディアやヴェネトの郡庁所在地にふさわしい壮麗な

¹²⁰ アメリカ出身の象徴派の詩人、Francis Vielé-Griffin（フランシス・ヴィエレ=グリファン、1864-1937）の詩集、*La Clarté de vie*（『人生の光明』、1897）所収の「*La lente Loire passe altière...*」（「緩やかなロワール川は気高く流れ……」）からの引用。

¹²¹ サントル地域圏、旧ベリー地方の中心地。

¹²² イタリア北部の州、州都はミラノ。

ou du Veneto ¹²³ , et puis... silence dans la rue Moyenne ¹²⁴ .	宮殿。それから…… モワイエンヌ通りの静けさも。
[Le Poète :] — La rue Moyenne est le crébillon de Bourges ?	<詩人>モワイエンヌ通りって、ブルージュのクレビヨンかな？
[L'Amateur :] — Tu dis ?	<アマチュア>え、何？
[Le Poète :] — À Nantes ¹²⁵ le centre élégant est la rue Crébillon, et les Nantais ont su en faire l'admirable verbe « crébillonner » ¹²⁶ , où il y a du pluriel, crebro, et du tourbillon, et d'où j'ai tiré le substantif « crébillon » ¹²⁷ que j'applique à toutes les villes de province.	<詩人>ナントでは洗練された中心地と言えばクレビヨン通りで、ナントの人々はそれから素晴らしい動詞「クレビヨネ」を作ることができたんだ。そこにはクレブロに〔ラテン語：頻繁に〕とトゥルビヨン〔渦〕という二つの単語が組み合わさっていて、そこから僕はすべて

¹²³ イタリアの都市。

¹²⁴ ブールジュ大聖堂近くの通り。

¹²⁵ フランス西部、ロワール河口に近い商工業都市。Loire-Atlantique（ロワール・アトランティック県）の県庁所在地。

¹²⁶ 市内中心部にある商店街 « la rue Crébillon »（「クレビヨン通り」）をウィンドーショッピングすることを意味するナントの言葉で、次の資料では「クレビヨン通りで気取ること」、「クレビヨン通りでの夜歩き」と説明している。Cf. Paul Eudel, *Les Locutions nantaises*, Nantes, Morel, 1884, p. 44, s.v. *crébillonner*, « Faire le beau dans la rue Crébillon » ; FEW 2, 1298b s.v. *crébillon*, Nantais *crébillonner*, v.n., « se promener le soir dans la rue Crébillon ». しかし論者がナント出身のフランス人男性（35歳）に2013年の夏に尋ねたところ、「クレビヨン通りの近くに住んでいたが「*crébillonner*」は聞いたことがない。おそらく古い言葉で、いま現地で使っても通じないだろう」とのことである。ラルポーは1923年8月にナントに滞在した際、自分の短編小説集の近刊予告をパリで発行された新聞で見て、その一篇が全く意味をなさない文字の羅列 « RLDASEDLRAD LES DLICMHYPBGF » となっていたことについて、同じ綴りをタイトルに用いたエッセーを書き、この作品の中で「もし一人の友人が、ナントの商店街、クレビヨン通りの人ごみの中に私を見つけて、私を名前と呼んだなら、『おや、まさにここに、発音不可能なタイトルを持つあれの著者ではないか』と思っただろう通行人がいたことであろう」と、クレビヨン通りを挙げている。Cf. « Si un ami, de passage à Nantes, m'avait aperçu dans la foule, rue Crébillon, et m'avait appelé par mon nom, il aurait pu se trouver un passant qui aurait songé : Tiens, voilà justement l'auteur de cette chose qui a un titre imprononçable. », « RLDASEDLRAD LES DLICMHYPBGF », *Pléiade*, p. 835. (下線強調は引用者) この短篇の初出は *L'Œuf dur*, n° 15, printemps 1924, pp. 34-17 で、現在は « Jaune Bleu Blanc » に収録されている。Voir *Pléiade*, pp. 834-837.

¹²⁷ 「詩人」のモデルとされるレオン=ポール・ファルグは、Adrienne Monnier（アドリエンヌ・モニエ、1892-1955）が店主をつとめるパリのオデオン通りにあった書店 La Maison des Amis des Livres（本の友の家）に集う作家仲間たちを « Potassons »（「ポタッソン」）と呼ぶ言葉をつくって置いた。「ポタッソン」とはもともと、ファルグが飼っていた « pot »（「壺」）のように四角く太った飼い猫の名前だった。Voir Adrienne Monnier, *Rue de l'Odéon*, Paris, Albin Michel, 1960, pp. 47-48. また「ポタッソン」につい

	の地方都市に適用する名詞「クレビヨン」を引き出したんだ ¹²⁸ 。
[— :] — Eh bien, demain nous crébillonnerons dans la rue Moyenne, à Bourges.	<—>じゃあ、明日はブルジュのモワイエンヌ通りでクレビヨネすることにしましょう。
[L'Éditeur :] — Admirez la mémoire du Poète : il a passé, voici quinze ans, dix minutes au buffet de la gare de Nantes, et il a trouvé le moyen d'apprendre et de retenir le verbe crébillonner :	<編集者> 詩人さんの記憶力に感心してください。彼は15年前、ナント駅のビュッフエで10分過ごしたただけなのに、動詞「クレビヨネ」を知って記憶に留めることができたのだから。
[Le Poète :] — Je me demande où est le crébillon de Gien ?	<詩人> ジアンのクレビヨンはどこだろう？
[L'Éditeur :] — Non, écoutez.	<編集者> いや、聞いてください。
Nous sommes de trop vieux et trop vrais Parisiens, trop Parisiens des grands et des vieux quartiers, pour blaguer la province.	私たちは昔からの正真正銘のパリジャンで、偉大な古い地区のパリジャンであるあまりに、地方のことをからかうことはできないのですよ。
Bon pour les faubourgs, où les souvenirs et la tradition représentent la province comme la sauvagerie dont on est sorti : le tas de fumier devant la maison de l'aïeul.	都市近郊を「からかうのは」いいでしょう。そこでは思い出や伝統が、私たちがそこから抜け出した野蛮さ、つまり祖父の家の前の堆肥の山のようなものとして地方を表しています。
Nous pouvons voir Bourges telle qu'elle fut : la capitale de l'Aquitaine du Nord, la rivale d'une Tholoze ¹²⁹ plus puissante que Paris, et la ville épiscopale et universitaire toute remplie de lettrés et de métèques	私たちはブルジュのかつての姿を見ることができます。北部アキテーヌ地方の中心地で、パリよりも力のある ^{トゥールーズ} Tholozeのような町に比肩する町、教養人と外国人でいっぱい <small>の司教と大学の町を</small>

ては、ファルグの次の論考も参照。Léon-Paul Fargue, « Les Potassons », in *Intentions*, n° 9, « numéro spécial consacré à Valéry Larbaud », novembre 1922, pp. 22-24.

¹²⁸ 日本語訳における傍点強調は訳者。

¹²⁹ この地名は現存しないが、南仏の町 Toulouse (トゥールーズ) の16世紀頃の表記を指すと思われる。トゥールーズ市の当時の手書きの編年史に見られるいくつかの綴りのうちの 하나가 « Tholoze » で、かつては聞いたままの音を綴っていたようである(2013年12月23日の電子メールによる問い合わせに対する、Catherine Bernard, Adjointe du Directeur, Chef du service des publics, fonds clos et audiovisuels, Archives municipales, Mairie de Toulouse の返答による)。

[Le Bibliophile :] — et d'éditeurs ?	<愛書家>それから、編集者たち？
[L'Éditeur :] — Mais telles qu'elles sont devenues, ces anciennes grandes villes, je les aime, et j'ai pitié d'elles et je les admire.	<編集者>だけどそれらの古い町が変化したそのままの形でも、私はそういった町が好きですね。気の毒にも思うし、尊敬もしています。
Elles me font penser à mon Duché arrêté en pleine croissance, à mon pays confisqué, démembré, mon Duché sans duc avec sa capitale endormie autour du fantôme d'un grand palais rose entouré de jardins pleins de portiques, de fontaines et d'orangers ¹³⁰ .	古い町は私に、完全に成長の止まった自分の公国について、政権を取り上げられ、分割された私の国、柱廊、噴水、オレンジの木でいっぱい公園に囲まれたバラ色の大きな城の幻影のまわりに眠る首都を持った、公なき私の公国について考えさせるのです。
[— :] — Du feu ? En voilà. »	<—>火が要るの？ どうぞ。」

¹³⁰ 「編集者」の発言。Cf. Françoise Lioure, « « Allen » ou de l'autonomie », *op. cit.*, p. 38.

第 4 章

IV	第 4 章
[Le Poète :] « Moi aussi, j'aime ces villes endormies.	< 詩人 > 「僕も、これらの眠った町が好きだな。
Mais quand je les vois, l'envie me vient de les réveiller.	でもそれを見ると、起こしたくなる衝動にかられるんだ。
J'ai la manie de remonter les pendules, de les remettre à l'heure, de ranger les choses qui traînent, de faire reluire ce qui est terni, d'éclairer ce qu'on a obscurci, de réparer et nettoyer les vieux jouets de la civilisation relégués dans les combles.	僕はね、振り子時計のぜんまいを巻き直して、時刻を合わせたり、散らかったものを片付けたり、輝きを失ったものをぴかぴかに磨いたり、曖昧になったものを明らかにしたり、屋根裏にしまいこまれた文明の古ぼけた玩具を修理したり掃除することに夢中になるんだよ。
Tu me comprends : c'est aussi ce que tu fais, toi, avec tes éditions de textes anciens.	きみにはわかるだろう。だってそれはきみが古いテキストを自分で編集することでやっていることと同じなのだから。
Lutter contre la tendance générale des choses à <i>ruere in pejus</i> ¹³¹ ;	〔ものごとは〕悪い方へ転じるといふ事物の一般的な傾向に対抗して。
[L'Éditeur :] — c'est ça, la « défense de nos pays » !	< 編集者 > それこそが「私たちの国の防衛」ですよ！
[Le Poète :] — et quand je suis dans une de ces villes, je me sens tout disposé à la taquiner, à lui faire des farces telles que : redorer les pointes des grilles de la sous-préfecture, mettre des poissons rouges dans les bassins des jardins publics, peindre sur les rideaux de fer des boutiques des emblèmes	< 詩人 > それに、僕はそれらの町の一つにいる時、自分がすっかりその町をからかう気になっていることに気付くんだ。町にいたずらする気になっているんだよ。例えば、郡庁の鉄柵の先端の金を塗り替えるとか、公園の池に金魚を放り込むとか、お店のシャッターに、そこで行

¹³¹ 語順は異なるが、古代ローマの詩人 Publius Vergilius Maro (プブリウス・ウェルギリウス・マロ、前 70-前 19) の *Georgica* (フランス語表記 *Géorgiques*、『農耕詩』) 第一巻、199-200 行、「*Sic omnia fati in peius ruere ac retro sublapsa referri*」(「*Se peut-il que fatalement tout s'abâtardisse ainsi et rétrograde insensiblement*」(「こうして万物は運命によって、すばやく悪いほうへ向かって進み、知らぬ間に後もどりする」) からの引用(下線強調は引用者)。Cf. Virgile, *Géorgiques*, texte établi et traduit par E. de Saint-Denis, Collection des universités de France, Paris, Les Belles Lettres, 1982, pp. 8-9. 邦訳は、ウェルギリウス『牧歌・農耕詩』、小川正廣訳、京都大学学術出版会、2004 年、88 頁を参照した。

<p>appropriés au commerce qu'on y fait ou des paysages ou des combinaisons et des rayures de couleurs vives ou tendres, pour que les rues des dimanches et des jours fériés soient moins tristes.</p>	<p>われている商売にぴったりの紋章とか風景とか、鮮やかな、あるいは淡い色合いの組み合わせとか、縞模様などを描くとか。日曜日や祝日にそれらの通りがいまほど寂しげにならないようにね。</p>
<p>Même à Paris cette manie ne me quitte pas ; mais à Paris je suis bien trop occupé et Paris est bien trop éveillé pour que je m'y laisse aller, — et pourtant vous avouerais-je que j'ai essayé de planter des lis entre de grosses pierres dans le terrain vague grand comme la main, qui était naguère encore à la fine pointe du jardin de la Cité ?</p>	<p>パリにいても、この癖が治らなくてね。でもパリでの僕はあまりにも忙しいし、パリは活気があり過ぎるから、僕はその癖を実際に行うことができない——とはいえ、僕はみなさんに私が百合の花を、手のひらほどに小さい空き地にある、大きな石の間に植えようとしたことを告白したほうがよいかも知れないかな？そこは最近まで、まだシテ島の公園の突先にあったところなんだ。</p>
<p>Mais dans le sommeil et l'abandon de la Province, cela devient une obsession.</p>	<p>でも地方が眠っていて、打ち捨てられた状態の中では、それは強迫観念になる。</p>
<p>Pendant qu'ils dorment, moi je crébillonne tout seul dans la Grand'Rue, imaginant des plans d'urbanisation et des réformes municipales.</p>	<p>みんなが寝静まっている間に、僕はね、独りきりで大通りでクレビヨネするんだ。都市化の計画と市町村改革を思い描きながら。</p>
<p>Je démolis la villa prétentieuse d'un parvenu, je déplace la halle, je trace une avenue, je dessine un jardin, je bâtis un hôtel, des bains publics, des écoles, des maisons ouvrières.</p>	<p>とある成りあがりが出た、気取った邸宅を取り壊し、卸売市場を移転し、並木道を通し、公園を設計し、ホテルを一軒といくつかの公衆浴場と学校、それに労働者用の住宅を建設する。</p>
<p>Je dégage le vieux quartier, je l'exproprie pour le nettoyer, améliorer ses rues et ses passages, et dans ses maisons j'installe, avec un luxe tout royal, les services publics qui m'intéressent le plus : bibliothèques, salles de concerts, musées, — et comme cela ne me coûte pas plus cher, j'y mets partout des</p>	<p>旧市街から余計なものを追い払い、土地を買い上げて、綺麗にし、そこの通りや小道を改良する。この上なく豪華に、僕が最も関心を持っている公共サービス機関をそこにある建物に開設するんだよ。すなわち図書館、コンサート会場、美術館を——そしてそれは僕にはさほど高額だとは思えないけれど、そこには銀の鎖</p>

huissiers à chaîne d'argent ¹³² , culottes de satin et bas blancs ¹³³ .	をかけてサテンのキュロットと白いストッキングをはいた守衛を、至る所に配置しようと思うんだ。
[Le Bibliophile :] — C'est la forme que prend chez vous la réaction de l'habitant d'une grande capitale transplanté dans le milieu provincial.	<愛書家>それこそまさに大きな都市の住人が地方の環境の中に置かれる時のあなたなりの反応の形ですね。
D'autres cèdent à l'ennui, tombent dans la torpeur, l'inaction, le désespoir.	他の人たちの中には退屈に負け、無気力、無反応、絶望に陥っている人もいる。
D'autres se naturalisent, acceptent les rues mal pavées, les belles vieilles maisons négligées, l'engourdissement, la méfiance, le refus général de prendre au sérieux autre chose que les petites affaires de la vie quotidienne.	他には同化してしまい、舗装の悪い道やほったらかしにされた美しく古い家々、活動力の鈍化、猜疑心、日常生活の些末な問題以外のことを真面目に考えることへの恒常的な拒絶を受け入れる人もいます。
D'autres, qui ne font que passer, se moquent de tout ce qu'ils voient, de tout ce qu'ils entendent ; ils sont des Blancs ¹³⁴ chez les sauvages, ou plutôt des gradés, — sous-officiers, — parmi une population entièrement composée d'hommes de troupe et de recrues ; ceux-là sont au-dessous du niveau provincial, et les sottises que la province leur fait dire ne sont même pas amusantes.	また、ちょっと立ち寄っただけの人たちは、見聞きするものすべてを軽蔑するのです。彼らは未開人の中にいる白人、あるいはむしろ兵隊と新兵だけで構成される住民たちの中にいる階級つきの兵士——下士官——です。〔地方を軽蔑する〕この人たちは地方のレベルに達していないのであって、彼らが地方に対して発さずにいられない侮蔑的な言葉は、愉快でさえない。
Vous, vous devenez, d'intention ¹³⁵ , le régénérateur de la petite ville.	ところがあなたは心の中で、小さな町の再生者になっていらっしゃる。

¹³² 国務諮問会議や大法官府の守衛は金の鎖を首にかけていることから、守衛が私設であることを強調していると思われる。

¹³³ 下記の資料によれば、これは「愛書家」の発言とされているが、発言の内容などから、発話者を「詩人」と推測した。Cf. Francisco Contreras, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe*, Paris, La Nouvelle revue critique, 1930, p. 61.

¹³⁴ 植民地世界にいるヨーロッパ人を指す。

¹³⁵ Cf. « En esprit et de cœur (avec quelqu'un). », *Trésor de la langue française, op. cit.*, t. 10, 1983, p. 400, s.v. *intention*.

Mais imaginez-vous habitant pendant deux ans l'une quelconque des villes que nous venons de traverser.	でも私たちが通り過ぎたばかりのどこかの町の一つに自分が2年間住むことを想像してみてください。
[Le Poète :] — Je ne pourrais pas.	<詩人>僕にはできないだろうな。
[Le Bibliophile :] — Vous voyez bien.	<愛書家>よくわかっておられる。
[Le Poète :] — Pourtant, lorsque je vais passer un mois, et quelquefois deux, dans ma maison familiale, qui est en pleine campagne	<詩人>そうは言っても、田舎のど真ん中にある実家に行って、一か月、時には二か月過ごすということはあるけれど
[Le Bibliophile :] — ça, c'est autre chose	<愛書家>それはまた別の話で
[Le Poète :] — une campagne tout à fait rude et platement primitive, sans pittoresque, à cinq cents kilomètres de Paris, où je ne vois personne, où personne ne me voit, où il m'arrive de passer des journées entières sans dire un seul mot, — je donne plus de temps et de réflexion au soin de ma personne, à ma toilette, à mon vêtement, que je ne le fais à Paris ou dans n'importe quelle autre capitale.	<詩人>本当に荒っぽくて味気ない未開の、目を引く面白味もなく、パリから500キロも離れている田舎、そこで僕が誰にも会わず、誰も僕に会うこともなく、何日間もずっと一言も話すことなく過ごす時には、——パリや他のどの首都にいる時よりも、体に気を遣ったり、身づくろいや、服装の手入れをしたりすることにもっと時間をかけるし、もっとよく考えるんだ。
Ainsi je parfume l'eau de ma baignoire, je soigne mes mains, je songe même à préserver mon teint du hâle ! je	例えば僕は浴槽のお湯に香りを付けて、手の手入れをし、顔の日焼け予防のことだって、そこでは考える！僕は
[Le Bibliophile :] — oui, cela vous aide à passer le temps.	<愛書家>そうですね。それであなたは時間つぶしができる。
[Le Poète :] — je mets des gants pour aller en forêt, je me demande laquelle de mes vestes de homespun, laquelle de mes cravates, est la plus appropriée à la couleur du temps, et si je vais faire un tour à cheval, j'hésite entre cinq ou six paires de leggings de teintures différentes.	<詩人>森へ行くために手袋をして、どのホームスピンのベスト、どのネクタイがこの季節の色合いに最も合うだろうかと思う。そして馬で一回りする時には、色の違う5、6組のすね当てのどれを選ぼうかと迷う。
À Paris un complet gris pour le matin, un complet sombre pour l'après-midi et souvent aussi pour le soir, me suffisent ;	パリでは朝はグレー、午後としばしば夜も黒っぽい背広で僕は十分なのに。我が家に一番に近いマニキュア師に僕の手を

j'abandonne entièrement mes mains à la manucure la plus voisine de chez moi, et je ne songerais jamais à parfumer l'eau que la ville de Paris envoie dans ma baignoire.	すっかり委ねているし、パリ市が僕の浴槽の中に送る水に香りを付けようなんてことは全く考えないだろう。
Donc, dans un certain sens, la province	だから、ある意味、地方は
[Le Bibliophile :] — la campagne	<愛書家>田舎は
[Le Poète :] — a sur moi une influence civilisatrice, me raffine.	<詩人>僕に文明化の影響を与え、僕に磨きをかけるんだ。
[Le Bibliophile :] — Ce n'est qu'une autre forme de la réaction dont je vous parlais ; une protestation, une lutte inconsciente contre la platitude, le laisser-aller, la laideur de ce qui vous entoure.	<愛書家>それは私がみなさんに話した反応の別の形に過ぎませんよ。あなた方を取り囲む凡庸さ、無頓着、醜さに対する抗議、抵抗。
Mais avez-vous jamais passé plus de deux mois dans votre maison familiale sans revenir pour une semaine à Paris ou sans aller faire un tour à Brighton ¹³⁶ , à Rapallo ¹³⁷ ou à Pérouse ¹³⁸ ?	それにあなたはパリに一週間戻ることなく、あるいはブライトンやラパッロ、ペルーズめぐりをすることなく、二か月以上実家で過ごしたことが、これまでにありましたか？
Vous voyez bien !	お分かりですよね！
[Le Poète :] — Après tout, c'est vrai que ces petites villes endormies ne sont pas mal comme <i>campagnes</i> où passer la belle saison pour y travailler tranquillement, ce qui devient de plus en plus utopique à Paris ¹³⁹ .	<詩人>いずれにしても、これらの眠れる小さな町が、そこで静かに仕事をするために、良い季節を過ごしに行く田舎として悪いものではないことは確かだね。静かに仕事をすることはパリではますます非現実的なものになってゆく。
Moi, dans presque toutes les villes que nous venons de voir, je me suis installé en imagination.	僕はね、僕たちが見てきたほとんどの町で、そこに住むことを想像していたんだ。
J'y ai loué des appartements, acheté des maisons, changé plusieurs fois d'adresse.	そこではアパルトマンを借りたり、家を買ったり、何度も住所を変えた。

¹³⁶ イングランド南部の都市。

¹³⁷ イタリア北西部の地名。

¹³⁸ フランシュ=コンテ地域圏の地名。

¹³⁹ 「詩人」の発言。本「別冊」、「著者解題」第19章「隠遁生活」の項(146-147頁)を参照されたい。

À Sens, par exemple, le quartier où il y a cette île...	例えば、サンスでは、あの島のある地区だった……。
Et de chaque ville choisie je faisais mon château où je vivais noblement, travaillant dans une solitude complète, tout absorbé dans la construction d'un poème de quelques centaines de vers où je condensais la quintessence de dix années de ma vie.	そして、選んだそれぞれの町を城にして、そこで気高く生き、完全な孤独の中で仕事をしていったんだ。僕の生涯の10年間の精髓を凝縮させた数百行からなる一篇の詩の執筆に心底没頭していた。
Alors Paris devenait, au loin, « la ville », celle où on va faire les provisions, où on envoie le chauffeur avec la liste des commissions...	その時パリは遠くにあって、そこに買い物に行ったり、運転手にリストを持たせて使いにやる「都会」になったんだ……。
Et de temps en temps on sort, on va voir les amis : châtelains d'Auteuil ¹⁴⁰ , gentilshommes de la plaine Monceau ¹⁴¹ , prélats et abbesses des V ^e et VI ^e arrondissements.	時々はお出かけたり、友達に会ったりもするよ。オートゥイユの別荘の主人たち、プレーヌ・モンソー地区の貴族たち、5区や6区の高位聖職者〔管区長、修院長〕や女子大修道院長たちにね。
Voilà tout le rôle qu'avait Paris dans ma vie telle que je l'organisais.	これらが僕の人生設計においてパリが果たしていた役割のすべてだよ。
[Le Bibliophile :] — Et les bibliothèques, et les musées, et les concerts, et les expositions ?	<愛書家>じゃあ、図書館や、美術館や、コンサートや展覧会は？
[Le Poète :] — Il suffirait de choisir une ville qui ne fût pas à plus de deux heures du square Louvois ¹⁴² .	<詩人>ルーヴォア小公園から2時間もかからない町を選ぶだけで十分でしょう。
[Le Bibliophile :] — Et cela vous ramène bien près de la banlieue.	<愛書家>そうすると、あなたは郊外のすぐそばへと連れ戻されますよ。
[— :] — Saint-Germain ¹⁴³ ou Versailles ¹⁴⁴ semblent tout indiqués.	<—>サン=ジェルマンかヴェルサイユがうってつけのようだね。

¹⁴⁰ パリ 16 区。

¹⁴¹ パリ 17 区、「Quartier de la Plaine Monceau」と表記されるパリ行政区の一つ。

¹⁴² パリ 2 区。

¹⁴³ パリ西郊、16世紀の城館がある Saint-Germain-en-Laye(サン=ジェルマン=アン=レー)を指していると思われる。

¹⁴⁴ パリ南西の都市。

[L'Amateur :] — Tu reviendrais vite au boulevard Raspail ¹⁴⁵ !	<アマチュア>きみは直ちにラスパイユ通りに戻るだろう！
[Le Bibliophile :] — Nous montons ?	<愛書家>乗りましょうか？
Il croit	彼は、自分なら
[L'Éditeur :] — Si vous voulez changer de place avec moi, ça m'est égal d'être devant.	<編集者>もし私と席をかわりたいなら、前へ行ってもいいですよ。
[Le Bibliophile :] — qu'il pourrait vivre en province toute l'année ;	<愛書家>彼は地方に丸一年住めるだろうと、思っていて、
[L'Amateur :] — quel drôle de provincial ferait notre Poète !	<アマチュア>我らが詩人さんは、どれほど奇抜な地方住民になるだろうか！
[Le Bibliophile :] — qu'il n'y manquerait de rien	<愛書家>彼はそこでは何も足りないものはないだろうと、思っている
[Le Poète :] — Ah ! le mouvement de l'air fait du bien !	<詩人>ああ！ 風のそよぎが心地いいね！
« On respire, et on sent jusqu'au fond du cœur la douceur de la France. » ¹⁴⁶	「息を吸いこむと、心の奥にまでフランスの心地よさが感じられる。」
[L'Auteur :] — Merci pour la citation.	<作者>引用ありがとう。
[Le Bibliophile :] — Après tout... Mais non ; il y manquerait de la chose la plus nécessaire.	<愛書家>いずれにしても…… いや、そこには最も必要なことが欠けているでしょう。
[L'Éditeur :] — D'un éditeur ?	<編集者>編集者がいないってことですか？
[Le Bibliophile :] — Vous brûlez !	<愛書家>正解まであと一歩！
Mais ici l'éditeur n'est qu'un signe algébrique (et je vous en demande bien pardon), le symbole d'un certain degré, d'une certaine qualité de civilisation.	しかしここでの編集者とは、一つの代数学の記号に過ぎない（大変失礼）。文明がある水準、ある程度に達していることの象徴に過ぎません。
Le manque dont je veux parler est plus général, et, puisque nos quatre-vingts coursiers-vapeur vont au pas, qui est	私が話したい欠乏とは、もっと一般的なことなのです。私たちの 80 馬力の蒸気競走馬〔自動車〕は、時速 40 キロで徐行し

¹⁴⁵ リュクサンブール公園の近くの通り。

¹⁴⁶ ラルボーの 1911 年の作品『フェルミナ・マルケス』の一節、「夏のはじめ。息を吸いこむと、心の奥にまでフランスの心地よさを感じられる」が引用されている。Cf. « C'est le commencement de l'été : on respire ; et l'on sent jusqu'au fond du cœur la douceur de la France. », *Fermina Márquez, Pléiade*, p. 314.

du quarante à l'heure, je vais essayer de vous l'expliquer.	ているのですから。そのことを私はみなさんにお話してみたい。
Je vous raconterai même une ou deux aventures qui me sont arrivées en province.	私はあなた方に、地方で起きた出来事も、一つ二つお話ししようと思います。
Remarquez aussi qu'il a dit « dans une solitude complète », et il a raison ; son intuition de poète lui a fait sentir que la province, pour lui, ne peut être que du paysage et non pas un milieu, un chez nous.	彼が「全くの孤独の中で」と言ったことにも注目してください。彼の言う通りです。彼の詩人の直感が彼に、地方とは、彼にとって風景でしかあり得ず、環境や私たちの家ではないということを感じさせたのですね。
Nous sommes plus en pays de connaissance, plus à notre aise, dans n'importe quelle grande ville de l'étranger que dans ces villes, relativement importantes, que nous venons de traverser.	私たちは、通り過ぎたばかりのこれらの町、比較的大きな町の中でよりも、外国の大都市の方がより身近に感じられるし、くつろいでもいます。
Il suffisait de voir les librairies, de lire la presse locale.	本屋さんを見て、地方新聞を読むだけで十分だったのです。
[L'Amateur :] — C'est vrai.	<アマチュア>確かに。
À Rome, l'autre hiver, à peine le Poète s'était-il fait connaître qu'on nous demandait des nouvelles de tous nos amis.	ローマで、この前の冬、詩人さんが素性を明かすやいなや、僕たちの友達みんなの近況を尋ねられたよ。
On nous a même appris le prochain divorce de X..., dont nous ne savions rien quand nous avons quitté Paris.	僕たちがパリを離れた時には何も知らなかったX氏がじきに離婚するとさえ知らされたし。
[Le Bibliophile :] — C'est bien ça ; et dans les villes que nous venons de voir, presque aux portes de Paris, la littérature, la peinture et la musique françaises contemporaines sont moins connues qu'à Barcelone, à Varsovie, à Buenos Aires, ou à Salzbourg.	<愛書家>まさにそれです。私たちが見てきたばかりの、ほとんどパリとの境にある町では、現代フランスの文学、絵画、音楽がバルセロナやワルシャワ、ブエノス・アイレスやザルツブルグほどには知られていません。

[Le Poète :] — Et à Florence, on l'a même reconnu, d'après son portrait par Pierre Sichel ¹⁴⁷ .	<詩人>それにフィレンツェでは、ピエール・シシエルによる肖像画によって彼 ¹⁴⁸ が誰であるかわかる人さえいたね。
[Le Bibliophile :] — Mais, bien entendu, c'est de ce genre de province que je veux parler, celle où nous nous promenons depuis quatre jours, et non celle des grandes villes françaises, où il y a tout de même des groupes	<愛書家>でも、もちろん、私がお話したいのはこの種の地方のことなのです。4日前から私たちが散策してきた地方のことで、フランスの大都市ではありません。それでもそこにもやはり、あちこちに人の集まりがあって
[Le Poète :] — moins nombreux qu'à l'étranger	<詩人>外国ほどは多くないけれど
[Le Bibliophile :] — où nous trouverions des gens qui nous demanderaient ce que préparent Paul Morand ¹⁴⁹ et Darius Milhaud ¹⁵⁰ et si Léon-Paul Fargue ¹⁵¹ va bientôt donner son <i>Vulture</i> ¹⁵² ; de cette province.	<愛書家>私たちはそこでポール・モランやダリウス・ミヨーが準備していることや、レオン=ポール・ファルグが『ヴェルチュルヌ』をまもなく出版するかどうかを私たちに尋ねるであろう人々に出会おうでしょう。あの地方の。
[Le Poète :] — aux villes endormies que j'aime	<詩人>僕が愛する眠れる町の

¹⁴⁷ ラルボーの肖像画を描いた画家。Cf. *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, t. 2, « Index », pp. 77-78. なおラルボーに関する資料を所蔵・収集する Fonds Valery Larbaud (ラルボー文庫) を擁するヴィシー市立図書館 Médiathèque Valery Larbaud (メディアテック・ヴァレリー・ラルボー、以下、ヴィシー市立図書館、と表記する) の蔵書カタログ (OPAC : <http://catalogue-mediathèque.ville-vichy.fr/>) の情報では、生年は 1899 年であるが、没年が不明である。

¹⁴⁸ ラルボーを指すと思われる。ヴィシー市立図書館所蔵のラルボーの肖像画は、シシエルが 1924 年に描いたものである。

¹⁴⁹ フランスの外交官・作家 (1888-1976)。代表作 *Ouvert la nuit* (『夜ひらく』、1922)、*Fermé la nuit* (『夜とざす』、1923) によって作家の地位を確立した。

¹⁵⁰ フランスの作曲家 (1892-1974)。

¹⁵¹ ラルボーは「著者解題」において「詩人」のモデルがレオン=ポール・ファルグであると述べている。本「別冊」、「著者解題」第 13 章「発話者たち」の項 (131-135 頁) を参照されたい。

¹⁵² ラルボー、ファルグ、ヴァレリーが共同編集者を務めていた季刊誌『コメルス』にファルグが発表した作品をまとめた詩集、Léon-Paul Fargue, *Vulture*, Gallimard, 1928 を指す。『レオン=ポール・ファルグの詩』の著者である秋元幸人は「ヴェルチュルヌ」の意味について、「イタリア中部カムパニアの現在 *Volturno* と呼ばれる河の名か、それに沿った街にちなむか。ロオマ人の神 *Vulturnus* を指すか。南西の風 *vulturnus* を指すか」と四つの可能性を述べている。秋元幸人『レオン=ポール・ファルグの詩』、思潮社、2009 年、115 頁を参照した。

[Le Bibliophile :] — et qui semblent vouées à la dépopulation	<愛書家>そして過疎化の運命にあるかのように見える眠れる町々
[Le Poète :] — où Paris, trop proche, fait le vide	<詩人>そこはパリが近すぎて、閑散となる
[Le Bibliophile :] — et qui donnent à tout le pays, le Centre ¹⁵³ , le Cœur, l'air d'une Allemagne anémique	<愛書家>そして眠れる町々はその地方全体、すなわちサントル地方、中部地方に、衰退したドイツのような雰囲気をもたらす
[Le Poète :] — anémique et négligée ;	<詩人>衰退し、打ち捨てられた雰囲気、
[L'Éditeur :] — oui ; cette province qui est, par excellence, la Province.	<編集者>そう。あの地方は、典型的な属州ですよ。
[Le Bibliophile :] — Et votre pays d'Allen sera quelque chose comme ça.	<愛書家>するとあなたのアレンの国も、そうになってしまいます。
[L'Éditeur :] — Le département, oui ; mais le Duché, non pas.	<編集者>その県は、そうですね。でも公国は違います。
« Bourbon est en avant ! » ¹⁵⁴	「ブルボンが前進する！」
[Le Poète :] — Mais tu devais nous dire quelle est « la chose la plus nécessaire », plus nécessaire à un poète qu'un éditeur et qui manque en province ?	<詩人>ところできみは何が「最も必要なもの」か、詩人にとって編集者の存在よりも必要で、地方に欠けているものが何かを、僕たちに話さなければならなかったんじゃないかな？
[L'Éditeur :] — Oui, quelle est-elle ?	<編集者>そうですね、「最も必要なもの」とは何ですか？
[Le Poète :] — Attention ! Nom de Dieu ! Ah ! trop tard.	<詩人>気をつけろ！ 何てことだ！ ああ！ 遅すぎた。
[L'Amateur :] — Oh ! ça y est ; les reins cassés ; il se traîne sur la route, rien à faire.	<アマチュア>おお！ やれやれ。腰がやられたね。地べたを這っているけど、どうしようもないな。

¹⁵³ フランス中部の広域行政圏、中心都市はオルレアン。

¹⁵⁴ ブルボン公シャルル三世が 1527 年にローマで亡くなった時の辞世の句。Cf. Achille Allier, « Introduction », in *L'Ancien Bourbonnais (histoire, monuments, mœurs, statistique)*, 4 tomes, continué par Adolphe Michel ; gravé et lithographié sous la direction de Aimé Chenavard ; d'après les dessins et documents de M. Dufour ; par une société d'artistes, Moulins, Desrosiers fils, 1833-1838 ; réédition, Moulins, Crépin-Leblond, 1934-1938, t. 1, 1934, p. xii.

[Le Poète :] — Pauv'petit cabot ¹⁵⁵ .	< 詩人 > 可哀想な子犬。
Il a vu cette belle voiture brillante et il a voulu jouer avec elle.	キラキラする綺麗なこの車を見て、一緒に遊びたかったんだろうね。
Il s'est approché en remuant la queue, pour lui mordre sa grosse patte de caoutchouc et	しっぽを振りながら近づいていたもの。大きなゴムの脚に噛み付くために、それに
[L'Amateur :] — J'aurais préféré écraser dix poules.	< アマチュア > 十羽の雌鶏をはねた方がまだましだったけどね。
Elles sont si bêtes.	あいつらほんとバカだから。
On dirait qu'elles le font exprès.	わざとやってるみたいだね。
[— :] — Oui, la soif du martyr.	< — > ああ、犠牲欲だね。
[— :] — Ou le point d'honneur, peut-être. »	< — > あるいはメンツの問題かもしれないね。」

¹⁵⁵ ラルボーは 1911 年 2 月 11 日から 2 月 28 日にかけておこなった、パリからブルボネ地方をめぐる自動車旅行の途中、レオン=ポール・ファルグに宛てた 2 月 15 日付の書簡で、フランス中部ニエーヴル県のポワズーで子犬をはねたことを記している。Cf. « J'ai fait un voyage merveilleux, par Provins — Troyes — Avallon — Vézelay (sublime !) — Clamecy, — Poiseux (où j'ai écrasé un petit chien) — Nevers — le Guétin (pays scientifique : un pont traverse la Loire en portant un canal à trois écluses, deux chemins de halage et je ne sais quelles tiges de fer) — Ygrande où j'ai vu le vieux Guillaumin — Valbois où ma tante allait bien — et enfin la Thébaïde. », la lettre de Valery Larbaud à Léon Paul Fargue du 15 février 1911, in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valery Larbaud, op. cit.*, p. 52. (下線強調は引用者)

第 5 章

V	第 5 章
[Le Bibliophile :] « Eh bien, cette chose la plus nécessaire et qui manque en province, je l'appelle naïveté.	<愛書家> 「さて、地方に最も必要なことで不足していること、私はそれを素朴さ、と呼んでいます。
Non pas niaiserie, elle y surabonde, mais naïveté.	愚かさではありませんよ。それはそこに有り余るほどありますから。そうではなくて、素朴さ、です。
Et un jeune écrivain du groupe de <i>la Revue nouvelle</i> , Georges Petit ¹⁵⁶ , parlant de certains provinciaux, a écrit très justement : « Ces âmes flétries. »	『新評論』グループの若い作家、ジョルジュ・プティは、ある種の地方住民たちについて語った時に、いみじくも「しなびた精神」と書きました。
Oui, manque de naïveté.	そう、素朴さの欠如です。
Ils ont perdu le pouvoir d'admirer.	彼らは感心する力を失いました。
Ils sont devenus indifférents.	彼らは無関心になったのです。
L'indifférence de la province, incroyable pour nous autres Parisiens, et devant elle notre cœur se serre ¹⁵⁷ .	地方の無関心さは、私たちパリジャンには信じられないことで、無関心を前にすると私たちの心は締め付けられます。
Elle a un air de sagesse suprême.	無関心には至高の賢明さがあるように見えますからね。
On dirait qu'elle proclame que tout est vanité ¹⁵⁸ sous le soleil, et devant une telle affirmation, qu'est-ce que la dernière mode de Paris ? que sont nos inventions, nos livres, nos tableaux, nos philosophies ?	無関心は太陽の下にあっては、いっさいは空だと主張しているようです。そして、そんな主張の前で、パリの最新の流行が何になるのでしょうか？ 私たちの発明、書籍、絵画、哲学とは何なのでしょう？

¹⁵⁶ ヴィシー市立図書館がラルポーあての書簡を所蔵している (Cote : P 167) が、生没年などは不詳で、他の資料の所蔵もない。また「しなびた精神」の出典も不詳。

¹⁵⁷ 「愛書家」の発言。Cf. Francisco Contreras, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe, op. cit.*, p. 61.

¹⁵⁸ *Ancien Testament*, « Éclésiaste » (『旧約聖書』、「コーヘレトの言葉」〔「伝道の書」〕) 第一章第二節の言葉、「Vanité des vanités, dit l'Éclésiaste, vanité des vanités, tout est vanité.」(「空〔くう〕の空、とコーヘレトは言う、空の空、いっさいは空と。」)の一部(下線強調は引用者)。翻訳は、月本昭男訳「コーヘレト書」、『旧約聖書 13』所収、旧約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、1998年、61頁を参照した。コーヘレトは「伝道者」を意味する。

La place du village que nous venons de traverser, avec son affreux petit monument aux morts, quelle négation consciente, militante, de tout ce que nous admirons !	私たちが今しがた通った村の広場は、死者を祀るおぞましくて小さな記念建造物も合わせて、私たちが感心するすべてに対して、なんて意識的で、攻撃的な否定なのでしょう！
Et pour bien voir certaines erreurs, inévitables, de la mode, des engouements, du snobisme, de la naïveté de Paris, c'est en province qu'il faut se placer.	パリの流行、熱狂、新しがり、素朴さの中にある、ある種の避けがたい誤りを見極めるためには、地方に身を置く必要があるのです。
Oh, c'est une position très forte, indiscutable	おお、それはとても強い、議論の余地のない立場です
[Le Poète :] — comme la mort.	<詩人>死と同じように。
[Le Bibliophile :] — Mais pour l'Ecclésiaste une chose n'est pas vanité : la crainte du Seigneur.	<愛書家>とは言っても、「伝道の書」にとっては空 ^{くう} でないものが一つあります。それは神への畏怖です。
Et pour la province aussi ; mais ce n'est pas la crainte du Seigneur.	地方にとっても一つあります。でもそれは神への畏怖ではない。
C'est le côté matériel, primitif de la vie : le désir du bien-être, contrarié par la peur de la dépense.	それは生活における物質的、原初的な面です。つまり物質的な充足の希求と、それを妨害する、支出への恐れです。
Voilà leur ciel et leur enfer.	ここに彼らの天国と地獄があるのです。
Ce qui, pour nous, est à l'arrière-plan et comme dans les coulisses, le cadet de nos soucis, devient ici la principale, l'unique préoccupation.	私たちにとって、背景であり、舞台裏にあるようなもの、取るに足りないものが、ここでは主要な、唯一の関心事になるのです。
De là, l'orgueil de la richesse, le mépris de la pauvreté, et la mesquinerie de la vie, et les clans, et la vilaine morale, et l'avarice.	そこから、富ゆえの傲慢さ、貧しさに対する軽蔑、生活のさもしさ、派閥、醜悪な道義、吝嗇が起こってきます。
À propos, avez-vous lu <i>les Avars</i> ¹⁵⁹ , de Henri Ménabréa ?	ところで、あなた方はアンリ・メナブレアの『守銭奴たち』を読まれましたか？

¹⁵⁹ フランス東部サヴォワ地方の作家 Henri Ménabréa (アンリ・メナブレア、1882-1968) の *Les Avars*, Paris, Plon, 1920 を指す。ヴィシー市立図書館所蔵の書籍 (Cote : F 1600) には、「À Valéry Larbaud bien affectueusement. Henri Ménabréa」との自筆の献辞が付されている。

Cela se passe justement dans votre prov... — pardon, votre Duché.	それはまさにあなたの田舎…… —失礼、あなたの公国で起こっていることです。
Et de là l'indifférence pour tout ce qui nous paraît le plus digne de soins et de sacrifices.	そしてそこから心遣いと犠牲を払うに最も値すると私たちには思われる、あらゆるものに対する無関心が生まれるのです。
Et cette indifférence produit l'ignorance.	そしてこの無関心が無知を招くのです。
Si la littérature, ou la géographie, ou l'histoire de l'imprimerie, me sont indifférentes, je n'en saurai jamais un mot.	もし私にとって、文学や地理学、印刷の歴史がどうでもいいことなら、私はそれらについて一言も知ることはないでしょう。
Ainsi ce qui est pour nous l'essentiel, la vie même, est pour la province un luxe que sa peur de la dépense lui fait regarder avec méfiance, et où nous disons « sérieux » elle pense « frivole ».	このように私たちにとっては本質的なもの、命そのものであるものが、地方の人にとっては、出費への恐れから警戒せざるを得ない贅沢なのです。私たちが「真面目」と表現するところを、地方の人は「軽薄」と考えるのです。
J'ai vu jadis la rapide provincialisation d'un couple de bons bourgeois parisiens, des cousins à moi, qui étaient allés vivre dans une petite ville du Centre-Ouest.	かつて私は、パリの結構なブルジョワの一組のカップルが、それは私のいとこ達なのですが、急速に地方化するのを見たことがあります。彼らは中西部の小さな町で暮らし始めました。
Vraiment, une chute, une déchéance, comme celle que produisent les drogues ou l'abus des somnifères.	それはまさに、墮落、零落で、麻薬や睡眠薬の乱用が引き起こすのと同じようなものでした。
Notre parenté, des raisons de convenances, m'obligeaient à leur faire une visite annuelle ; et j'ai vu comment ils se laissèrent envahir par la rusticité de leur nouveau milieu ; comment des locutions et des prononciations vicieuses, d'abord adoptées par eux pour s'en moquer et qu'ils employaient comme entre guillemets,	親戚だったことと世間体ゆえに、私は彼らを毎年訪問しなくてはなりませんでした。そして私は、どんなふうに彼らが新たな環境の田舎臭さに取り込まれ、どんなふうにして変な言い方や発音が、最初はそれらをからかうために取り入れてカギカッコ付きで使っているようだったものが、彼らには当たり前になっていった

leur devinrent naturelles ; et comment leurs manières se modifièrent à tel point qu'il était pénible de manger à leur table.	のか、そしてどんなふうに、食事で同席するのが苦痛になるほどまでに彼らの行儀が変わってしまったのかを見たのです。
Le mari lutta pendant quelque temps : il fut, les deux premières années, le Parisien de Saint-Machin-sur-Chose ¹⁶⁰ , et soutint l'idée qu'on s'y faisait d'un Parisien.	夫の方はしばらくの間、格闘していました。彼は最初の 2 年間は、サン=ネンタラ=シュル=ネントカのパリジャンであり続け、そこでパリジャンについて人々が抱くイメージを保っていたのです。
Mais la femme se laissa tout de suite aller.	でも奥さんの方はすぐに、周りに流されてしまいました。
La tenue de son ménage, qui était, à Paris, le souci le moins apparent de son existence, une activité secrète, un travail de fée, l'absorbait tout entière, devint une préoccupation constante dont elle entretenait ses visiteurs.	家政の維持は、彼女がパリにいる時には、彼女の生活の中で最も目立たない心配事で、人目につかない活動、〔妖精の魔法のように〕手際よく済まされる仕事でしたが、それが彼女をすっかりとらえてしまい、来客たちと話すいつもの関心事になってしまったのです。
Elle se négligeait ; bientôt j'eus peine à reconnaître en elle la jeune femme élégante que j'avais accompagnée à des concerts, à des expositions.	彼女は身なりに気を遣わなくなってしまうまでね。やがて、私は彼女に、コンサートや展覧会へ連れて行ってあげた頃の、優雅な若い女性の面影をほとんど見ることができなくなったのです。
Elle donnait dans une espèce de puritanisme affreux, sans motifs religieux, sans autre raison d'être que la crainte d'une opinion publique égarée par l'hypocrisie et l'envie...	彼女はおぞましい一種の厳格主義に染まっていたのです。宗教的な動機も、偽善と羨望に惑わされた世論の恐怖以外の存在意義もなく……。

¹⁶⁰ パリ中西部の町を指す架空の地名のようである。「machin」には「(名前を知らないか忘れてしまった) なんとかという人や物」、「あれ、それ」という意味がある。また「chose」も「あれ、それ、誰それ」の意味で用いる場合がある。日本語訳における傍点強調は訳者。

<p>Au bout de quatre ans je les trouvai tous deux au même niveau : rudes, farouches, imbibés d'un ennui contagieux...¹⁶¹</p>	<p>4年目の終わりには、私は二人ともが同じレベルにいたと思いました。粗野で、非社交的で、伝染性の倦怠がしみ込んでいました……。</p>
<p>[L'Éditeur :] — Cela me rappelle une remarque que j'avais faite dans mon enfance, lorsque j'allais passer mes vacances en Limousin¹⁶².</p>	<p><編集者>それは私に、私が子供の頃に気付いたことを思い出させますね。リムーザンでヴァカンスを過ごした時に。</p>
<p>Les messieurs de la petite ville, quand ils revenaient d'un voyage à Paris, en gardaient pendant quelques jours une allure plus vive, un visage plus animé, plus d'entrain dans leurs propos.</p>	<p>その小さな町の男性たちは、パリへの旅から戻ってくると、何日間かはいつもより活発な様子、生きいきとした表情、発言の快活さをとどめていましたよ。</p>
<p>Et en voyant marcher un des notables, je pensais : Tiens, M. Durand-Dupont est donc allé à Paris cette semaine ?</p>	<p>そして名士たちの一人が歩くのを見ながら、私は考えたものです。おや、あの様子だとデュラン=デュボンさんは今週パリへ行かれたのかな？ って。</p>
<p>[Le Bibliophile :] — C'était une triste maison que celle de ces miens cousins.</p>	<p><愛書家>その私のいとこの家は哀れなものとなっていました。</p>
<p>Et pourtant j'essayais de profiter de mes séjours forcés chez eux pour les distraire ; je leur apportais des livres, de la musique, des histoires et des racontars du Monde, des Lettres, des Théâtres ; mais nous étions devenus si différents déjà que tout cela ne faisait que les irriter.</p>	<p>それでも私は彼らの家での強制された滞在を、彼らを楽しませるために活用しようと試みました。彼らに本や音楽や、社交界、文学界、演劇界の逸話とか噂話なんかを持って行ってね。でも、私たちはもう違い過ぎていたので、何もかもが彼らを苛立たせるだけだったのです。</p>
<p>Nous n'avions plus rien à nous dire.</p>	<p>もうお互い何も話すことがありませんでした。</p>
<p>Le grand vice provincial, l'avarice, les avait saisis à leur tour, et si fortement, qu'ils étaient tombés au-dessous du niveau social de la ville.</p>	<p>今度は田舎の大きな悪徳、吝嗇が、彼らを取り囲み、それがとても強固だったので、彼らは町の社会水準より下に転落してしまっただけです。</p>

¹⁶¹ 「愛書家」の発言。Cf. Francisco Contreras, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe*, op. cit., p. 61.

¹⁶² フランス中央部の地域圏、中心都市はリモージュ。

Ils ne recevaient presque plus, restaient entre eux, ne se trouvant tout à fait à l'aise qu'avec leurs domestiques, qu'ils tourmentaient savamment.	彼らはもう、ほとんど誰も客を招くことはなくなっていました。自分たちだけで居て、彼らがうまく弄んでいた使用人と一緒の時だけは心底くつろいでいました。
Et ils s'imposaient de petites privations de plus en plus nombreuses.	それから彼らはちょっとした節約に努めていましたが、その対象はだんだん多くなってゆきました。
Je les crus appauvris.	私は彼らが貧しくなったのだと思いましたよ。
Mais non : ils achetaient chaque année de nouvelles valeurs, de nouveaux terrains.	でも、違っていたのです。彼らは毎年新しい株券や土地を買っていましたからね。
On avait une servante de moins, mais c'est parce qu'on avait décidé d'augmenter de six mille francs ¹⁶³ chaque année la dot de la fille aînée...	女中は一人減らしていましたが、それは長女の持参金を毎年 6,000 フランずつ増やすことに決めたからだったのです……。
En suivant cette pente, dans des familles guère moins riches que celle-là, on finit par se coucher à tâtons dans une chambre froide, et par se lever de table ayant faim ¹⁶⁴ .	この傾向に従うと、そこと比べても特に貧しいわけではない家庭でも、ついには寒い寝室に手さぐりで寝に行ったり、空腹のままテーブルを離れるようになるものです。
[Le Poète :] — Voilà peut-être le secret de la dépopulation.	< 詩人 > そこに人口減少の秘密があるのかもしれないな。
Ils ne redoutent pas d'avoir des enfants : ils n'ont même pas envie de faire ce qu'il faut pour en avoir.	彼らは子供を持つことを恐れているわけではない。そうではなくて、彼らは子供を持つために必要なことをしたいとも思わないのだろうね。

¹⁶³ 当時の貨幣価値 1 フラン≒62.43 円で計算すると約 374,580 円になる。

¹⁶⁴ 「愛書家」の発言。Cf. Francisco Contreras, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe*, op. cit., p. 61.

[L'Auteur :] — Les vrais pays rabelaisiens ¹⁶⁵ , dans l'Europe d'à présent, c'est la Belgique, l'Allemagne occidentale ¹⁶⁶ et la Lombardie ¹⁶⁷ .	<作者>いまヨーロッパで真にラブレール風の地域と言え、ベルギー、ドイツ西部、ロンバルディアですね。
Et les <i>Contes de La Fontaine</i> ¹⁶⁸ paraissent plus étrangers à la France que les <i>Canterbury Tales</i> ¹⁶⁹ ne le sont à l'Angleterre.	それに、『カンタベリー物語』は英国にとって馴染みのないものとなったけれど、それ以上にラフォンテーヌの『寓話集』はフランスに馴染まなくなってしまったように思えますよ。
[L'Éditeur :] — Je suppose que vous attendiez sans impatience l'époque de votre visite à vos cousins ?	<編集者>あなたが従兄妹たちを訪ねる時期をいやいやながら迎えていた、と考えればいいのでしょうか？
[Le Bibliophile :] — Ç'a été un grand soulagement pour moi quand j'ai été libéré de l'obligation de leur faire cette visite.	<愛書家>彼らを訪ねるという義務から解放された時、私は大層ほっとしたものですよ。
[L'Éditeur :] — Comment avez-vous pu vous en libérer ?	<編集者>どうやってそれから解放されたのですか？
[Le Bibliophile :] — Ils m'ont chassé ; ou tout comme.	<愛書家>彼らが私を追い払ったのですよ。追い払ったのも同然でした。
Ils avaient fini par me détester, par détester en moi le Parisien.	彼らはしまいには私を嫌悪していました。私がパリジャンだからです。
Je n'avais pas de plus rigoureux censeurs de ma conduite.	私の行動について、あれほどまでに容赦なく批判する人はいませんでしたよ。
Ils m'avaient condamné sans appel ; mon genre de vie, mes occupations, les opinions que j'exprimais, leur étaient suspects, odieux.	彼らは徹底的に私を非難しました。私の生き方やすること、私が述べた意見が、彼らにとっては胡散臭くて、不愉快なものだったからです。

¹⁶⁵ フランスの作家 François Rabelais (フランソワ・ラブレール、1494 頃-1553 頃) の作品の登場人物たちのように、言葉や話しぶりなどが陽気で大胆な様子を表す。

¹⁶⁶ 西ドイツ (ドイツ連邦共和国) の建国は 1949 年であるため、ここで示されているのは「ドイツ西部」である。

¹⁶⁷ イタリア北部。

¹⁶⁸ フランスの詩人 Jean de La Fontaine (ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ、1621-1695) 。『寓話集』は 1668 年の作品。

¹⁶⁹ 英国の詩人 Geoffrey Chaucer (ジェフリー・チョーサー、1340 頃-1400) の作品、1387-1400 作。

Jusqu'à mon goût pour les livres, qui, disaient-ils, n'était « ni de mon âge ni de ma condition » (je me demande quelle pouvait être ma condition ?).	彼らの非難は、私の本の趣味にまで至りました。彼らが言うには、「私の年齢にも合わなければ、私の身分にも合わない」のだそうです。（いったい何が自分の身分だったのかと思いますけどね）。
C'était, à leurs yeux, une manie d'esprit faible que des libraires exploitaient.	彼らの見解では、私の本の趣味は頭の弱い者〔ばか〕の偏愛であり、本屋たちに搾取されているとのことでした。
Ils me soupçonnaient d'avoir « des vues » sur leur fille aînée, qui était bien la plus désagréable jeune personne que j'aie connue.	彼らは私が長女に「目をつけている」のではと疑っていました。彼女は私が知っている若い子の中で、本当に一番不愉快な人だったのに。
Ils finirent par me soupçonner de leur avoir volé de l'argent !	とうとう彼らは、私が彼らからお金を盗んだと疑ったのです！
Je leur étais devenu si complètement étranger qu'ils me croyaient capable de cela.	彼らにとって私はすっかりよそ者になっていたのです。私ならやりかねないと考えていたのです。
Et ils me le firent comprendre.	そして彼らは私にそのことを伝えました。
J'aurais dû partir immédiatement, et même fuir, pour voir s'ils oseraient déposer une plainte.	彼らが厚かましくも訴訟を起こすかどうかを見るために、私もすぐにでも立ち去れば、いや逃げだせばよかったのですが。
Mais j'attendis qu'on eût découvert le voleur, et j'eus la faiblesse de faire, avant de m'en aller, une espèce de scène, avec une allusion à leur déchéance, et le serment de ne plus fréquenter des gens qui étaient devenus mes inférieurs sociaux.	でも私は泥棒が見つかるのを待って、立ち去る前に、おろかにも喧嘩を売るようなことをしたのです。彼らの零落を暗示したり、私の社会的格下になった人たちと今後は交際しませんという誓いをしたりしながら。
[L'Éditeur :] — Souffle gaspillé !	<編集者>無駄な言葉ですね！
Ils n'auront pas compris.	彼らは理解しなかったでしょうね。
Ils ne sentaient pas leur déchéance : la plus grosse fortune de la ville !	自分たちがすでに落ちぶれているとは思っていませんでした。町で一番の資産家だから！

Et puis, comme vous étiez moins riche qu'eux, c'est vous qui étiez leur inférieur social.	それに、あなたは彼らよりも裕福ではなかったから、彼らにしてみれば、あなたの方が社会的に格下だったのですよ。
[Le Poète :] — Tu es complètement brûlé à Saint-Machin-sur-Chose.	<詩人> きみはサン=ナンタラ=シュル=ナントカ ¹⁷⁰ ですっかり信用をなくしたんだね。
[Le Bibliophile :] — Oui ; j'ai su depuis qu'ils avaient dit (encore une de leurs locutions) « les mille horreurs » sur moi dans leur entourage : ivrogne, joueur, débauché, « indélicat »...	<愛書家> ええ。彼らが私について（これがまた彼らの言いまわしの一つなのですが）「千もの悪口」を彼らの取り巻き連中のいる所で言っていたということが、そのあとで分かったのです。酒飲み、ギャンブラー、放蕩者、「不正直」……。
[Le Poète :] — Ah ! j'aime ça.	<詩人> ああ！ それはいいね。
Voilà une ville où, sans le vouloir, vous mystifiez tout le monde.	一つの町で、思いがけなく、きみはみんなを煙に巻いたんだ。
À votre place, j'y retournerais de temps en temps, pour « nager dans le déshonneur comme un poisson dans l'eau » ¹⁷¹ .	もし僕だったら、時々そこへ戻るだろうね。「水の中の魚のように不名誉の中を泳ぐ」ために。
[Le Bibliophile :] — Non ; le pays est trop laid.	<愛書家> とんでもない。あの地方はひどすぎますよ。
Mais voici un autre souvenir du même cru.	それに同じ種類のもう一つ別の思い出もあります。
Mon désir de réveiller les petites villes, de faire marcher leur commerce, m'avait donné l'idée de profiter de mes séjours à Saint-Machin-sur-Chose pour confier mes livres brochés au relieur du pays, un homme	小さな町を再興したい、その商業を活発にさせたいという願いは、私にサン=ナンタラ=シュル=ナントカ ¹⁷² での滞在を活用して、その地元の製本屋に私の仮綴じの書籍を預けようという考えを与えてくれました。無愛想な男で、陰気な声

¹⁷⁰ 日本語訳における傍点強調は訳者。

¹⁷¹ フランスの詩人 Charles Baudelaire（シャルル・ボードレー、1821-1867）が友人であるポール・ムーリス夫人にブリュッセルから送った 1865 年 1 月 3 日付の書簡に同じ文言が書かれている。Cf. Charles Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, avec la collaboration de Jean Ziegler, t. 2, janvier 1832-février 1860, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, p. 437.

¹⁷² 日本語訳における傍点強調は訳者。

bourru et qui, d'une voix triste, dépréciait la marchandise que je lui apportais.	で、私が彼に持って行った商品をけなしたものですよ。
« Ce livre ne valait pas la reliure qu'il aurait » ; et c'était un exemplaire rare et dédicacé.	「この本は製本するほどのものではないね」って。でもそれは希少本で献辞が入ったものだったのですよ。
Les reliures simples et nettes que je lui commandais étaient moins belles que celles qu'il faisait pour M. le Maire ; et c'étaient des veaux pleins surchargés de fers d'un goût pitoyable, genre grands magasins.	私が彼に依頼した簡素ですっきりとした装丁は、彼が市長のためにしたものに比べて品の良いものではありませんでした。量販店が作る類の、趣味の悪い型押し模様でいっぱい、子牛革の総革装丁できていましたからね。
Un jour il me dit : « Ceux-ci, une fois reliés, seront réduit au tiers de leur grosseur.	ある日彼は私に言いました。「こちらは、一度装丁したら、厚さが三分の一に減ってしまいますよ」って。
— Tant mieux : ils tiendront moins de place sur les rayons. »	「それはよかった。本棚で本が占める面積がもっと少なくなりますから。」
Sa femme, qui nous avait entendus, se mit à rire, comme pour lui dire : « Il t'a fait la leçon ! »	話を聞いていた彼の奥さんは笑い始めたのです。その笑いは彼にこう言おうとしているみたいでした。「この人ったらあんたに御教示くださってるよ！」って。
Mais j'avais dit ce que je pensais simplement.	私は考えていたことを言っただけなのに。
Il me fallut même assez longtemps pour comprendre qu'il avait encore une fois cherché à m'être désagréable, et ce que signifiait le rire de sa femme.	私には、彼が再び私に対して不快な態度を取ろうとしたこと、それから彼の妻の笑いが意味していたものを理解するのにも長い時間が必要でした。
Il pensait que, pour moi comme pour lui, un gros livre était plus beau, « faisait plus d'effet », qu'un livre mince.	彼はこう考えていたのです。彼にとって同じように私にとっても、大きな本の方が薄い本よりも美しく、そして「より効果がある」のだと。
Je ne sais pourquoi, mais cette affaire avec ce relieur me semble résumer toute l'ignorance, la vanité mal placée, la stupidité, la	なぜだかわかりませんが、私にはこの製本屋との一件が、小さな町の無学、下手なうぬぼれ、愚かさ、ばかげた悪意、半ば未開人的な（そして面白味もない）性

malveillance bête, la demi-sauvagerie (sans pittoresque) des petites villes.	質をすべて凝縮しているように思われるのです。
[— :] — Mais aussi le manque de naïveté ?	<—>それだけではなくて、素朴さの欠如もあるのでは？
[Le Bibliophile :] — Oui ; il apparaît dans cette interprétation basse des motifs et des sentiments d'autrui.	<愛書家>そうですね。それは他人の動機や感情に、あのような下卑た解釈をすることからも明らかですね。
Et c'est tout le malentendu entre Provincial et Parisien.	そして、それがまさに地方に住む人とパリに住む人之間にある思い違いなのです。
« C'est par économie ou c'est pour la dot de notre fille qu'il vient chez nous. »	「彼が家に来るのは、儉約のためか私たちの娘の持参金目当てだからだ」と。
Et moi, Parisien naïf, enthousiaste, peu s'en était fallu que je n'eusse interprété les privations des avarés comme des mortifications pour gagner le ciel ou la mise en pratique de vertus stoïciennes, et que je n'eusse vu dans l'indifférence, et dans l'ignorance volontaire, une haute sagesse qui n'était pas pour mon nez. »	そして、お人好しで、情熱家のパリジャンの私は、すんでのところ、吝嗇家たちの節制を、天国へ行くための苦行、あるいはストア的な徳を積むための実践だと曲解するところでしたし、それに、無関心や故意の無知を、もう少しで自分にはもったいない高い見識だと思うところだったのです。」

第 6 章

VI	第 6 章
[L'Éditeur :] « Voyez comme elle s'éloigne, se dissout, la vision grise et brun doré, dans le bleu-Centre-de-la-France.	<編集者>「どんなふうにフランス中部の青の中に、〔シャンパーニュ地方の〕灰色と金茶色の光景が遠ざかり、溶けてゆくのかをご覧ください。
[L'Amateur :] — Bleu de Nevers ¹⁷³ ; de la céramique de Nevers, où nous dînerons ce soir.	<アマチュア>ヌヴェールの青、ヌヴェールの陶磁器の青、今夜はそこで夕食にしましょう。
[L'Éditeur :] — Le bleu du pays d'Allen est encore plus beau.	<編集者>アレンの国の青はより一層美しいものですよ。
Ce n'est pas ce bleu minéral, de saphirs, de bouquets de cristaux, des pays du Midi ; mais la couleur pure, la traînée lente du pinceau chargé d'un outremer éblouissant sur la palette de porcelaine de l'horizon.	それは南仏にあるサファイアだとか水晶の塊のような鉱物の青ではなくて、澄んだ色、地平線という磁器製のパレットの上のまばゆいばかりの群青色を含んだ絵筆がゆるやかに描く帯なのです。
[Le Poète :] — Ainsi donc il y a, debout au milieu de la France, ce gigantesque Bayard ¹⁷⁴ sur son cheval caparaçonné ¹⁷⁵ .	<詩人>つまりフランスの真ん中に、馬飾りを着せた馬の上に、この巨人のようなバヤールが立っている、ってことだね。
[— :] — À son tour il bleuit, comme une colline.	<—>今度はバヤールが、丘と同じくらい青くなった。

¹⁷³ フランス中部、ブルゴーニュ地方にあるニエーヴル県の県庁所在地。

¹⁷⁴ ブルボン公シャルル三世の敵将であるフランスの軍人 Pierre Terrail de Bayard (ピエール・テライユ・ド・バヤール、1476-1524) を指す。Cf. Robert Sabatier, *Dictionnaire de la mort*, Éditions Albin Michel, 1967, p. 477. 同書の邦訳における「Traîtres 裏切り者」の項の訳注によれば、シャルル八世以来三代の国王に仕え、軍功と豪胆ぶりから「恐れを知らぬ騎士」と称された人物である。ロベール・サバチエ〔ママ〕『死の辞典』、窪田般彌・堀田郷弘共訳、読売新聞社、1991年、839頁を参照した。著者 Robert Sabatier (ロベール・サバチエ、1923-2012) は、Association internationale des amis de Valéry Larbaud (ヴァレリー・ラルボー国際友の会) の名誉会員である。

¹⁷⁵ この発言は、ラルボーとファルグが 1910 年 11 月 22 日から 30 日にかけて、ラルボーの母親の車でパリからブルージュへ旅行した際、ファルグがブルージュ大聖堂を見た時に発した言葉を引用したものという説がある。Cf. « C'est à ce moment-là, que Fargue se serait écrié, en voyant la belle Cathédrale de Bourges : « Ainsi donc il y a debout au milieu de la France, ce gigantesque Bayard sur son cheval caparaçonné ». », Louise Rypko Schub, *Léon-Paul Fargue*, Genève, Droz, 1973, p. 98. (下線強調は引用者) 本「別冊」、「著者解題」第 13 章「発話者たち」(131-135 頁) も参照されたい。

[L'Éditeur :] — Alors, on va tout droit pour repasser la Loire à La Charité ¹⁷⁶ , et y voir ce clocher qui vous plaît ?	<編集者>では、まっすぐ行って、シャリテでロワール川をもう一度渡って、そこでみなさんお気に入りのあの鐘楼を見ることにしましょうか？
Et de là, Nevers, où nous coucherons ; puis Decize ¹⁷⁷ , et l'entrée au pays d'Allen par Banville et Saint-Ennemond ¹⁷⁸ ?	それから、ヌヴェールに行って、そこで泊まりましょう。次にドゥシーズ、それからバンヴィルとサン=テンヌモンを通過って、アレンの国の入り口に行くということはどうですか？
Tout le monde approuve ?	みなさんよろしいかな？
[L'Amateur :] — Oui. Nous prendrons la vallée de la Creuse au retour.	<アマチュア>了解。帰りにはクルーズ渓谷を通りましょう。
[L'Éditeur :] — Je suis content de penser que vous verrez la jolie lumière de mon Duché ; et ses gris, et ses bleus, et ce vert de mousse sur les rochers comme dans le paysage d'Hérisson : des ruines sur une haute colline, une gorge de pays montagneux, abrupte, et, tout de suite au-dessous, la petite ville tassée à l'entrée de la tendre vallée de l'Aumance ¹⁷⁹ .	<編集者>私はみなさんに私の公国の綺麗な光を見てもらえると思うと嬉しくなります。その灰色、その青、それにエリソンの景色にあるような岩の上の苔のあの緑も。高い丘の上の廃墟、山岳地帯の険しい峡谷、それにすぐ下方の、なだらかなオマンス渓谷の入り口にうずもれた小さな町をね。

¹⁷⁶ La Charité-sur-Loire（シャリテ=シュル=ロワール）、フランス中部ヌヴェール北方の町。

¹⁷⁷ ブルゴーニュ地域圏。

¹⁷⁸ バンヴィル、サン=テンヌモンは、ドゥシーズから「アレンの国の入り口」であるムーランへ向かう途中にある道路の名前。

¹⁷⁹ エリソンにある川。『アレン』の批評を書いたモンリュソン出身の歴史家・批評家ロベール・トゥルノーは、献辞をラルポーに捧げた郷土に関する小冊子 *Visite au Bourbonnais—Notes sur Hérisson*（『ブルボネ地方探訪—エリソンに関する覚え書き』1928）で、オマンス渓谷について「ここオマンスは、何より美しく流れの緩やかな川で、私たちを魅了し、また見とれさせているかのようだ」と述べている。Cf. «L'Aumance est là, d'abord, belle lente rivière, qu'on admire et qui semble se laisser admirer. », Robert Tournaud, *Visite au Bourbonnais—Notes sur Hérisson*, Paris, Éditions de la Revue du Centre, 1928, p. 5. トゥルノーの批評については、本「別冊」、「著者解題」第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」（138-142頁）、および補遺1「『著者解題』第16章に引用した記事三点」において161-162頁に再録した記事を参照されたい。

<p>Ou encore Saint-Pourçain ¹⁸⁰ , avec son clocher et sa tour, si joliment arrangé au-dessus des deux bras paresseux de la Sioule¹⁸¹ étalée dans la verdure ; la Sioule, dont le nom latin est <i>Scivola</i>, qui semble vouloir dire la Glissante.</p>	<p>あるいは鐘楼と塔のある、サン=プルサン。緑の中に広がったシウール川のゆったりとした二つの分流の上に、とても綺麗に整備されています。ラテン語で滑るという名前のシウール川とは、「なめらかな川」を表しているようですよ。</p>
<p>Et au fond des larges plaines et du haut des plateaux modestes, toujours ce bleu de la montagne bourbonnaise à l'horizon.</p>	<p>そして広い平野の奥に、なだらかな高原の上からは、いつも地平線にブルボネの山のあの青が見えるのです。</p>
<p>Et l'unité qu'il y a dans la lumière de chaque journée, le calme.</p>	<p>それから毎日の光、静寂の中にある一体性。</p>
<p>Pas de ces changements brusques, comme dans le Midi, de ces coups de vent et d'orage qui laissent le pays tout bouleversé, la nature toute dépeignée, comme nous le disait l'autre jour Dunoyer de Segonzac ¹⁸² , qui a si bien su voir et rendre cela : ces mèches dans les yeux, ce regard assombri et perdu comme après la colère ou le bonheur, — mais les yeux toujours clairs et tranquilles entre les cils blonds, ou au delà des larmes...</p>	<p>南仏でのような急激な天候の変化や、その地方をすっかり荒らす突風や雷雨はありません。デュノワイエ・ド・スゴンザックがある時言ったような、すっかりかき乱された自然はね。彼はそれをとてもよく理解して、それを表現することを心得ていましたよ。眼の中のあの毛束、怒りや幸福の後のように暗くてうつろな眼差し、——しかし両目はブロンドのまつ毛の間で、あるいは涙の奥でいつも静かに澄んでいる……。</p>
<p>On ne la voit plus.</p>	<p>あれ〔Notre-Dame de La Charité-sur-Loire : ノートル=ダム・ド・ラ・シャリテ=シュール=ロワール教会〕はもう見えなくなっていましたね。</p>
<p>[Le Bibliophile :] — Ah, hier soir, ç'a été le coup au cœur, lorsque en arrivant sur cette petite place de village, nous l'avons vue</p>	<p><愛書家> ああ、昨夜、それは強烈な感動でした。村のあの小さな広場に着いた時、私たちはあれ〔教会〕が、真っ黒な</p>

¹⁸⁰ Saint-Pourçain-sur-Sioule (サン=プルサン=シュール=シウール)、アリエ県の地名。この近くの Valbois (ヴァルボワ) にラルポーの母方の屋敷があった。

¹⁸¹ フランス中部を流れるアリエ川の支流。クレルモン=フェラン西方に源を発し、ヴィシー北方で本流に注ぐ。

¹⁸² André Dunoyer de Segonzac (アンドレ・デュノワイエ・ド・スゴンザック、1884-1974)、南仏を多く描いたフランスの画家・版画家。

monter, toute noire, effrayante, sur ses cinq porches, comme une montagne sculptée, jusqu'aux étoiles !	恐ろしい姿で高くそびえ立っているのを見ましたよね。五つのポーチの上で、彫刻された山のように、それは星にまで届きそうなほどでした！
Comme si elle avait vraiment quelque accointance avec les astres.	まるで星たちと本当に何かしらの付き合いがあるかのようでした。
Comme une invention surhumaine.	超人的な発明のような。
Je voudrais la voir de la plaine, pendant une messe de minuit.	あれを平地から見たいものですね、クリスマス・イヴのミサの間に。
Quelle lanterne à éclairer tout le royaume !	王国全体を照らす、何というランプなのだろう！
[— :] — Oui : nous avons eu ceci, et Sens, et Vézelay ¹⁸³ , et encore quatre ou cinq églises et deux ou trois palais	<—>そうですね。ランプはここに一つあって、他にはサンス、ヴェズレー、その他にも4つか5つの教会と2つ3つのお城にも
[— :] — et les promenades d'Avallon	<—>それにアヴァロンの散歩道
[— :] — et c'est tout.	<—>それで全部かな。
[— :] — Mais presque partout nous avons bien mangé.	<—>それにしても、大抵どこでも、私たちはおいしい物を食べたね。
Troyes et Bourges ¹⁸⁴ cuisinent bien.	トロワやブルジュは料理がうまいね。
[— :] — C'est leur seul plaisir.	<—>それが彼らの唯一の楽しみ。
[L'Auteur :] — La Province anglaise n'a même pas cette compensation.	<作者>イギリスの地方だったら、こんな埋め合わせはありませんよ。
[L'Éditeur :] — Alors, après l'accusation, la défense ? Allez-y.	<編集者>では、非難の後は、擁護かな？ さあ、どうぞ。
[Le Bibliophile :] — Ce serait plutôt à vous, avec votre régionalisme, de fraîche date, à dire vrai.	<愛書家>あなたの近頃の地方主義からすれば、むしろそれはあなたの役目でしょう、実を言うと。
[Le Poète :] — Régionaliste, moi ? Mais, mon cher, le seul mot de province me remplit d'ennui ; et quand, par hasard, des gens qui	<詩人>地方主義者、僕が？ いや、きみね、地方という言葉一つで僕は退屈で満たされるんだよ。それに、自分たちのパリをもっとよく知っているはずの人た

¹⁸³ ブルゴーニュ地域圏。

¹⁸⁴ サントル地域圏。

devraient mieux savoir leur Paris me prennent pour un provincial, je rougis.	ちにたまたま地方出身者扱いされるような時だって、僕は赤面するのに。
[— :] — Nous ne comprenons plus ! Expliquez-vous.	<—> 私たちにはもう分かりません！あなたの考えを説明してくださいよ。
[L'Éditeur :] — Je m'expliquerai après que vous aurez prononcé votre plaidoyer, puisque vos aventures de Saint-Machin ne vous ont pas dégoûté de la province.	<編集者>あなたが地方を擁護された後に、私がお話ししましょう。あなたはサン=ナンタラ ¹⁸⁵ での出来事の後でも地方嫌いになってはいないのでから。
[Le Bibliophile :] — Ces bourgeois de Saint-Machin ne sont pas toute la province, et nous n'aurions pas grand'peine à trouver leurs pareils dans notre arrondissement.	<愛書家>サン=ナンタラのブルジョワたちが地方の全住民というわけではないし、私たちが彼らに似たような人たちを自分たちの区で見つけることも難しいことではありませんよ。
Paris est rempli de provinciaux d'hier et d'avant-hier et de toujours.	パリは、ついこの間やその少し前、あるいはずっと前に来たような地方住民であふれているのですから。
L'ensemble des passants que nous avons vus dans les rues de Troyes, d'Auxerre et de Bourges, c'était une moyenne prélevée n'importe où dans Vaugirard ¹⁸⁶ , Montrouge ¹⁸⁷ ou Popincourt ¹⁸⁸ ; et la comtesse d'Escarbagnas ¹⁸⁹ , depuis qu'elle va à Paris « pour un oui, pour un non », son pittoresque s'est réduit à des nuances, — que nous retrouverions autour de nous dans Paris.	トロワやオーセール、ブルージュの道々で見かけた歩行者の集団はみな、ヴォジラルールや、モンルージュ、ポパンクールはどこでだってサンプルの取れる、ごくありきたりなものです。それにエスカルバニヤス伯爵夫人は、「何かにつけて」パリへ行って以来、彼女の精彩は弱まり、ある種の趣に限定されてしまった——パリで私たちが身の回りに見出すような趣に。
Et si les caractéristiques de l'esprit provincial sont : le manque d'initiative, la peur du risque, l'indifférence et la méfiance	そしてもし、地方の精神の特性というのが、自主性の欠如、リスクへの恐れ、進歩を生み出す大きな喜びに関する無関心

¹⁸⁵ 日本語訳における傍点強調は訳者。

¹⁸⁶ パリ 15 区。

¹⁸⁷ イル=ド=フランス地方。

¹⁸⁸ ピカルディー地域圏。

¹⁸⁹ モリエールの戯曲の登場人物。作品名も同じ *La Comtesse d'Escarbagnas* (『エスカルバニヤス伯爵夫人』、1671 年)。

<p>à l'égard des grands plaisirs inventeurs du progrès, le grossissement des choses sans importance, le préjugé en faveur de tout ce qui est officiel, la transformation de toute activité en une carrière, et le mépris du travail désintéressé, — est-ce que tout cela ne se voit pas aussi à Paris ?</p>	<p>と猜疑心、重要性のない事柄の誇張、あらゆる公認されたものをよしとする思い込み、あらゆる活動を商売に変えてしまうこと、実利を生まない仕事の軽視だとしても、——そうしたことは全部パリでも見られないでしょうかね？</p>
<p>Nous serions tentés de répondre que non, parce que nous avons le privilège de ne fréquenter que la meilleure société : esprit, talents, manières et naissance ; mais si nous avons pratiqué la moyenne et la petite bourgeoisies de Paris, nous aurions reconnu que la grande majorité des Parisiens vivent et pensent provincialement.</p>	<p>私たちなら「見られない」と答えたくないのでしょね。なぜなら私たちは最良の仲間としか付き合わないという特権を持っているからですよ。例えば知性、才能、礼儀、出自を持った人たちとしかね。でも、もし私たちがパリのブルジョワやプチブルたちと付き合っていたら、大部分のパリジャンが田舎風に暮らし、田舎風に考えていることに気付きもしたでしょうが。</p>
<p>Et cela est vrai de Londres, de Madrid, de toutes nos capitales d'Occident : de très grandes et très belles villes provinciales ; mais ce n'est pas ainsi que j'imagine la capitale idéale de l'Europe.</p>	<p>それはロンドン、マドリッド、それに我らが西洋の全首都でも同じことです。いずれも、とても大きくてとても美しい地方の都市なのです。でもそれは私が想像するヨーロッパの理想的な首都ではないのですよ。</p>
<p>Pourtant, d'où vient donc la différence très réelle entre capitale et province ?</p>	<p>それにしても、首都と地方との間の本当の意味での違いって、一体どこから来るのでしょうかね？</p>
<p>Je vais essayer de vous le faire voir.</p>	<p>私はあなた方にそれをお教えしようと思います。</p>
<p>[Le Poète :] — Je sais où tu veux en venir.</p>	<p><詩人> 僕はきみが何を言いたいかわかるよ。</p>
<p>Ta théorie des trois Ordres¹⁹⁰.</p>	<p>きみの三身分の理論だね。</p>

¹⁹⁰ Ancien Régime (アンシャン・レジーム、革命以前のフランス封建的王制下での政治・社会制度)における身分制度。第一身分の Clergé (聖職者)、第二身分の Noblesse (貴族)、第三身分の Tiers (平民)に分けられる。

[Le Bibliophile :] — C'est la seule qui me donne une explication claire et complète de toute société...	<愛書家>それは私にあらゆる社会について明確で完璧な説明を与えてくれる唯一の理論なのです……。
Vous admettez, vous savez par expérience, que la plupart des gens vivent et travaillent uniquement en vue du bien-être.	あなた方は、大多数の人が物質的充足を得るためだけに生き、働いていることを認めているし、経験からもご存知だ。
Et vous admettez qu'une minorité ne se contente pas du bien-être, mais qu'il lui faut encore : le pouvoir, l'influence, le commandement, choses qui leur paraissent si désirables que souvent pour les atteindre, ou les possédant, ils deviennent indifférents au bien-être.	一方であなた方は、少数の人たちがそうした物質的充足では満足せず、彼らにさらに必要なものがあることを認めてもいる。すなわち権力、影響力、指揮権といった、彼らに大変望ましく思えるものなので、しばしばそれらを手に入れるために、あるいはそれらを手に入れていても、彼らは物質的充足に無関心になる。
Mais il y a deux sortes de pouvoirs. Matériel : l'homme d'État ; et spirituel : le prêtre, le penseur, l'artiste.	しかし二種類の権力があります。物理的なのは、政治家。精神的なのは、聖職者、思想家、芸術家です。
Et n'est-ce pas là une division de la société en trois ordres, non plus légaux, mais réels, indestructibles, permanents : Tiers, Noblesse et Clergé ?	そこに見られるのは、もはや法的なものではなくなってしまったけれど、それでも現実にある、不滅にして不変の、社会の三身分、すなわち平民、貴族、聖職者ではないでしょうか？
[L'Éditeur :] — Bon. Mais où rangeriez-vous un commerçant qui s'occuperait, mettons, d'érudition, d'archéologie ?	<編集者>ほう。するとあなたは、例えば考証とか、考古学に関心を持っているような商人をどこに分類なさるのかな？
[Le Bibliophile :] — Ça dépend.	<愛書家>それは場合によりますね。
Le supposez-vous plus commerçant qu'érudit ou plus érudit que commerçant ?	あなたが想定しているのは、考証学者というよりも商売人、それとも商人というよりも考証学者ですか？
Ses travaux ont-ils une réelle valeur ?	彼の業績には本当の価値があるのでしょうか？
[L'Éditeur :] — Ils l'ont.	<編集者>ありますよ。

[Le Bibliophile :] — Alors : Clergé. Haut, bas ou moyen, selon la valeur de ses travaux.	<愛書家>それなら、聖職者に分類します。仕事の価値によって、上位、中位、下位とさらに分かれていますが。
Et si c'est Schliemann ¹⁹¹ : prélat, prince de l'Église.	もしそれがシュリーマンなら、高位聖職者、つまり教会の第一人者ですね。
En d'autres temps un pape lettré lui aurait donné, — ou donnera à son pareil, — le chapeau de cardinal ¹⁹² .	世が世なら、教養のある教皇が彼に——あるいは彼と同等の人に——枢機卿の帽子を与えていたでしょう。
Son commerce, dont il tire ses ressources pour ses fouilles, ce sont les tentes de saint Paul ¹⁹³ , c'est de l'épicerie sanctifiée, qui n'a rien à voir avec le bien-être.	発掘作業にかかる財源を引きだした彼の商売とは、聖パウロのテントです。それは神聖な食料品販売で、物質的充足とは無縁のものですよ。
[L'Éditeur :] — Mais le vrai clergé ?	<編集者>でも真の聖職者でしょうか？
[Le Bibliophile :] — Comment, vrai ?	<愛書家>真の、って何です？
Vous oubliez le sens de clerc : l'homme du bon lot, celui qui a choisi la meilleure part.	あなたは聖職者の意味をお忘れですね。それは運のいい人、最良の取り分を選んだ人のことですよ。
Toute votre vie est consacrée au Saint-Esprit et à la louange des ouvrages de Dieu et vous n'appartiendriez pas au clergé ?	あなたの全人生は聖霊と神の作品の礼讃に捧げられている、なのにあなたは聖職者の一員ではないのですか？
[L'Éditeur :] — Mais, par exemple : les évêques	<編集者>でも、例えば、司教たちは
[Le Bibliophile :] — sont, à ne considérer que le domaine temporel, nos princes visibles, les cadres de notre ordre, les mainteneurs de notre indépendance à l'égard des deux autres ordres ; nos modèles, qui font admettre et respecter, en leurs personnes symboliques,	<愛書家>現世のことだけを考えるなら、司教たちは我々の目に見える君主であり、我々の秩序の管理者であり、他の二つの身分に対する我々の独立性を維持する者です。すなわち私たちの模範、彼らの象徴的な人格を、研究者、瞑想家、

¹⁹¹ Heinrich Schliemann (ハインリッヒ・シュリーマン、1822-1890)、ドイツの考古学者で、ギリシャ神話に出てくるトロイアを発掘した。ミュケナイ文明の発見者。

¹⁹² ローマ・カトリック教会で教皇に次ぐ高位聖職者。

¹⁹³ Saint Paul de Tarse (タルススの聖パウロ)で、職業はテント職人。生誕地タルスは古代ローマ帝国の属州キリキア(トルコ南部)の首都。シュリーマンが生計を立てるために食料品店で働いていたことを、聖パウロが同じく生活のためにテントを作っていたことに関連させたものと思われる。

l'homme d'étude, l'homme de méditation, l'homme de science, l'homme de louange.	科学者、名誉ある人たちの姿として認めさせ、敬わせる人たちですよ。
Et le curé de campagne lisant son bréviaire sous sa tonnelle montre aux villageois l'image, en lui sacrée, du Bibliophile.	そして田舎の司祭は聖務日課書を〔緑に覆われた〕東屋の下で読みながら、村民たちに、彼を神聖なる「愛書家」像として示すのです。
[— :] — Et pour être noble, que faut-il faire ?	<—>そうすると、貴族〔第二身分〕になるには、どうすればいいのでしょうか？
[Le Poète :] — Lutter contre « la tendance des choses à ruere in pejus », organiser, construire, remettre les pendules à l'heure	<詩人>「悪い方へ転じる傾向にあるもの」と戦い、組織し、構築し、振り子時計の時刻を合わせ
[L'Éditeur :] — augmenter l'empire : <i>Imperio aucto</i> ¹⁹⁴	<編集者>帝国を広げる。すなわち、帝国を大いに増やし
[Le Bibliophile :] — vaincre le désordre, la barbarie matérielle ; réveiller les villes endormies	<愛書家>無秩序、物欲的な蛮行を打ち負かす。そうやって眠った町を再興し
[Le Poète :] — installer le chauffage central en Europe	<詩人>セントラルヒーティング〔その当時に新しくできたもの〕をヨーロッパに備え付け
[L'Éditeur :] — avec raccordements d'attente pour les autres continents qui l'installent aussi chez eux	<編集者>セントラルヒーティングを彼らの国に同じく設置する他のすべての大陸への接続待機の状態
[Le Bibliophile :] — se conformer aux plus saintes inspirations du clergé.	<愛書家>聖職者の最も神聖な靈感に従う。
[Le Poète :] — Amen.	<詩人>アーメン。

¹⁹⁴ 偉人たちの墓碑銘に関する下記文献におけるラテン語原文と英語での注釈から、ブルボン公シャルル三世が 1527 年にローマで戦死した時のことを指していると考えられる。〔原文〕« Cajeta. aucto Imperio, Gallo victo, fuperata Italiâ, Pontifice obfeffo, Româ capitâ, Borbonius hic jacet. », 〔注釈〕« Charles de Bourbon was General of the army of Charles 5th. Emperor. He was killed on the 6th of May, 1527 at an Assault, when he was scaling the Fort of St. Peter at Rome. », John Hackett, *Select and remarkable epitaphs on illustrious and other persons, in several parts of Europe with translations of such as are in latin and foreign languages ; and compendious accounts of the deceased, their lives and works*, t. 1, London, Printed for T. Osborne, and J. Shipton, 1757, p. 244. (イタリック強調は原典、下線強調は引用者)

<p>[L'Éditeur :] — Mais la différence entre Province et Capitale, où entre-t-elle, là dedans ?</p>	<p><編集者>ところで地方と首都との間の違いは、そこでどのように関係してくるのでしょうか？</p>
<p>[Le Bibliophile :] — Précisément ici : la province est Tiers-État dans la proportion de quatre-vingt-quinze à quatre-vingt-dix-neuf pour cent, et la capitale est Noblesse et Clergé dans la proportion énorme de vingt-cinq à trente pour cent.</p>	<p><愛書家>まさしくこの点において、ですよ。地方は住民の 95~99 パーセントが第三身分〔平民〕、首都は貴族〔第二身分〕と聖職者〔第一身分〕が 25~30 パーセントという非常に大きな割合を占めています。</p>
<p>Et voilà pourquoi les notables de la petite ville limousine marchaient plus vite et souriaient en parlant lorsqu'ils revenaient de Paris : ils avaient vu que Dieu accomplissait de grandes choses au royaume de France et que le ciel répandait ses dons sur la Gaule.</p>	<p>だからリムーザンの小さな町の有力者たちはパリから戻ってくると、いつもより早く歩き、話しながら微笑んでいたのですよ。彼らはフランス王国で神が偉大なことを成し遂げたり、ガリアの上に神が恵みを与えるのを見てきたのですから。</p>
<p>[L'Éditeur :] — Et voici où entre mon duc avec toute sa cour, ramenant dans notre capitale, sœur française de Mantoue ¹⁹⁵, cinquante pour cent de clercs et de gentilshommes.</p>	<p><編集者>そしてそこに、私たちの公〔シャルル三世〕が、すべての廷臣たちとともに、マントヴァのフランスにおける妹である私たちの首都〔ムーラン〕に、聖職者と貴族の半分を連れながら入って来られる。</p>
<p>[Le Poète :] — Mais, mon cher, si quelqu'un du Tiers vous entendait, il</p>	<p><詩人>しかし、きみ、もし平民の誰かが、きみたちの言うことを聞いていたら、ひょっとするとその人は、きみたちがそ</p>

¹⁹⁵ ムーランとマントヴァを姉妹に例える「編集者」の発言は、シャルル三世の母と叔母との関係を指すものと思われる。マントヴァは 14 世紀から 18 世紀までの 400 年にわたり、ゴンザーガ家の統治のもとで発展したイタリア北部の町で、その歴史においてルネサンス期イタリアの文芸、政治を代表する女性の一人に、「モナ・リザ」のモデルの一人にも挙げられる Isabella d'Este (イザベラ・デステ、1474-1539) がいる。イザベラはシャルル三世の母でイタリアのマントヴァ侯フェデリーコ 1 世の娘である Claire de Gonzague-Mantoue (キアラ・ド・ゴンザーグ=マントヴァ、1464-1503) の弟の妃であるため、二人は義理の姉妹、またシャルル三世にとって叔母にあたる。また、ブルボン宗家の Pierre II (ブルボン公ピエール二世、1438-1503) に男子がなかったため、シャルル三世は 1505 年に、その娘で相続人である Suzanne de Bourbon (シュザンヌ・ド・ブルボン、1491-1521) と結婚し、ブルボン家の家長およびブルボン公になった。国王フランソワ一世によるブルボン大元帥の任命は、1515 年のマリニャーノの戦いにおける功績によるものだが、それに先立つこの結婚によって、ムーランに来たことを指していると推察される。

trouverait peut-être que vous ravalez son ordre ?	の人の身分をおとしめていると思うのでは？
[Le Bibliophile :] — Le ravalé ? impossible.	<愛書家>身分をおとしめている？ そんなことはありません。
Le Tiers-État est tout : <i>the divine average</i> ¹⁹⁶ , — et son idéal, le bien-être, c'est la réalisation de la parole : Dieux de la terre.	第三身分がすべてなのですから。尊き普通人、——彼らの理想、すなわち物質的な充足とは、神の言葉の実現を意味している。彼らは地上における神々なのです。
Au Tiers seul toute félicité, toute gloire et toute santé, car c'est là que le Seigneur a placé sa bénédiction, et une très longue vie.	すべての祝福、すべての栄光、すべての健康は、平民たちにのみ向けられているのです。なぜなら、主が彼の祝福を、そしてとても長い人生を授けたのは彼らに對してだからですよ。

¹⁹⁶ 米国の詩人 Walt Whitman (ウォルト・ホイットマン、1819-1892) の詩集 *Leaves of Grass* (『草の葉』、1855 初版) に 1867 年に加えられた詩篇 « Starting from Paumanok » (「パウマノクを出発して」) からの引用。なお原文は « O divine average ! » である。いずれも下記のウェブサイト、The Walt Whitman Archive を 2014 年 5 月 10 日に参照した。http://www.whitmanarchive.org/criticism/current/encyclopedia/entry_24.html
<http://www.whitmanarchive.org/published/LG/1867/poems/2>

『草の葉』は、フランスでは 1909 年に Léon Bazalgette (レオン・バザルジェット、1873-1928) の翻訳によるフランス語版が出版された。だがラルボーは Lycée Louis-le-Grand (リセ・ルイ=ル=グラン) 在学中の 1899 年頃にホイットマンの存在を認識し、独自に『草の葉』の詩篇の仏語訳や、ホイットマン流の自由詩の詩作を試みていた。Cf. Georges Jean-Aubry, *Valery Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, Monaco, Éditions Du Rocher, 1949, pp. 56-57. また 1909 年には、雑誌『ラ・ファランジュ』に « Walt Whitman en français » (「フランス語のウォルト・ホイットマン」) を寄稿し、20 世紀初頭のフランスでのホイットマンの評判について述べた。Cf. Valery Larbaud, « Walt Whitman en français » in *La Phalange*, n° 34, 20 avril 1909, pp. 952-955. この論考は現在、同じタイトルのまま Valery Larbaud, *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées, op. cit.*, pp. 335-339 に収録されている。ラルボーはさらに、1918 年に刊行されたフランス語訳による『ウォルト・ホイットマン選集』に、詩篇の翻訳と散文の抄訳だけでなく、1914 年に書いたホイットマンに関する研究論文を序文として掲載した。Cf. Valery Larbaud, « Walt Whitman » in *Walt Whitman : Œuvres choisies, Poèmes et Proses*, traduits par Jules Laforgue, Louis Fabulet, André Gide, Valery Larbaud, Jean Schlumberger, Francis Vielé-Griffin, précédés d'une étude par Valery Larbaud, Paris, Éditions de la Nouvelle Revue Française, 1918, pp. 9-53. この論考は、Valery Larbaud, *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées, op. cit.*, pp. 220-255 に « Walt Whitman 1819-1892 » のタイトルで再録されている。なお、ラルボーによるホイットマンの受容については、西村靖敬「ヴァレリー・ラルボーのウォルト・ホイットマン受容——批評と翻訳を通して——」、『千葉大学人文研究』第 42 号、2013 年、25-56 頁に詳しい。

L'ambition qui mène à la Noblesse et au Clergé n'est qu'une ambition servile.	貴族と聖職者へと導く野心は卑屈な野心でしかありません。
Serviteurs du Tiers.	彼らは平民たちのしもべなのです。
Mais il fallait tourner à droite en sortant de Pougues ¹⁹⁷ ?	ところでプーグを出たら右に曲がらなければならなかったのでは？
[L'Amateur :] — C'est ce que nous avons fait.	<アマチュア>もう曲がったよ。
[Le Bibliophile :] — Non ; ou alors pas assez à droite, et nous filons en ce moment, à une allure d'express, vers Prémery ¹⁹⁸ .	<愛書家>いいや、もう少し右に行かないはずだ。いま私たちはプレムリーに向かって全速力で走っているよ。
[L'Amateur :] — Tu es sûr ? ah, un poteau : Guérigny ¹⁹⁹ .	<アマチュア>ほんと？ ああ、標識があるね。グリニーって。
La flèche : Nevers. Voilà.	あの矢印、ヌヴェールだって。これで大丈夫だ。
Nous sommes sur la route de Nevers.	僕たちはヌヴェール街道にいるんだ。
L'erreur est réparée.	失敗は挽回したよ。
Je ralentis ?	減速しようか？
[Le Bibliophile :] — Oui, ralentis.	<愛書家>ああ、減速してくれ。
La vallée est jolie.	谷が綺麗なんだ。
[— :] — Nous sommes donc jeudi ²⁰⁰ ?	<—>今日は木曜日だった？
Ce pensionnat en promenade...	寄宿学校の生徒たちが散歩しているよ……。
[Le Poète :] — Attention aux enfants. Merci.	<詩人>子供たちに気をつけて。ありがとう。
En voilà, des petites, dit-on Neverroises ?	これぞまさしく、ヌヴェロワーズって呼ばれている少女たちなのかな？
[— :] — Oui, jeudi.	<—>そう、木曜日。
[L'Amateur :] — Oh, tu as vu ?	<アマチュア>おお、見たかい？
[Le Bibliophile :] — Un baiser à nous partager.	<愛書家>私たちが分けるための一つのキス。

¹⁹⁷ Pougues-les-Eaux (プグ=レ=ズー)、フランス中部ヌヴェール北西にある温泉地。

¹⁹⁸ ブルゴーニュ地域圏。

¹⁹⁹ ブルゴーニュ地域圏。

²⁰⁰ フランスの初等・中等教育は 1972 年まで木曜日が休校だった (現在は水曜日) 。

Un baiser pour cinq hommes.	5人へのキス。
C'est peu.	それじゃ足りませんね。
À moins qu'elle n'ait visé.	あの子が誰かを狙った、というのでなければ。
Vous peut-être ?	あなたに向けたのかも？
[L'Éditeur :] — C'était pour le groupe, pour l'ensemble.	<編集者>このグループに、みんなに向けていたのですよ。
[L'Amateur :] — Plutôt pour le Poète.	<アマチュア>むしろ、詩人さんに向けたんじゃないかな。
[Le Poète :] — Hein ? quoi ? qu'est-ce qu'il y a eu ?	<詩人>ええ？ 何？ 何があったの？
[— :] — Celle qui était la dernière, qui s'était attardée pour cueillir des fleurs : une friponne de bonne famille, entre quatorze et quinze ans, jolie	<—>最後にいた女の子、花を摘んでいて遅れた子。良家のおてんば娘、14、5才ってところかな。可愛いな
[— :] — un de ces jeunes lis français, haut sur tige et bien blanc, avec un air un peu sainte Jeanne d'Arc ²⁰¹ , un peu sainte Nitouche ²⁰²	<—>茎の上高くに咲いた、実に白い、フランスの若き百合の一輪、聖女ジャンヌ・ダルクに少し似ているようでもあり、聖女ニトウシュ〔猫かぶり〕のようでもあり
[Le Poète :] — eh bien ?	<詩人>それで？
[L'Amateur :] — elle a vu que la surveillante avait le dos tourné, que ses camarades ne la regardaient pas et, maladroitement, toute sérieuse et sentimentale, et comme si elle faisait quelque chose d'affreusement défendu, d'une main elle a jeté ses fleurs devant la voiture et de l'autre elle t'a envoyé un baiser.	<アマチュア>生徒監督が背を向けたのを見計らって、仲間たちが彼女を見ていなかったすきに、不器用ながらもとても真面目で感情に満ちた彼女は、絶対に禁じられたことをするかのよう、片方の手で車の前に花を投げて、もう片方の手できみにキスを送ったんだよ。

²⁰¹ 百年戦争でオルレアン解放に貢献したが、異端のかどでルーアンにおいて火刑に処せられた（1412-1431）。

²⁰² Trésor de la langue française informatisé, s.v. *sainte(-)nitouche* によれば、「*Fam., péj.* Jeune fille ou femme qui joue à la prude, qui prend hypocritement des airs offensés. »（「日常会話で使う軽蔑語。淑女ぶったり、むっとしたふりをする若い娘や女性」）との意味がある。ウェブサイト <http://www.cnrtl.fr/definition/>（2014年9月22日閲覧）

[Le Poète :] — À moi ?	< 詩人 > 僕に？
[L'Amateur :] — Ça t'étonne ?	< アマチュア > 驚いた？
[Le Poète :] — C'est gentil, qu'un pays nous salue ainsi	< 詩人 > それはご親切に。この地方が僕たちにこんな風に挨拶してくれるとはね
[— :] — comme des ministres ou le président de la République en voyage : la petite fille et le bouquet.	< — > 旅行中の大臣たちか共和国大統領みたいだ。小さな女の子と花束なんて。
[Le Bibliophile :] — Mais le geste n'avait rien d'officiel.	< 愛書家 > でもその仕草には堅苦しいところがなかったね。
Je parie qu'elle repousse les gamins de son âge, les petits cousins. Son idéal, c'est un beau monsieur de quarante ans, très soigné, très parisien, décoré, l'air important et sympathique, comme notre Poète.	きっと彼女は同じ年頃の子供や小さな従兄弟たちなら拒否すると思いますね。彼女の理想、それは 40 歳の素敵な紳士。身だしなみが行き届いていて、生粋のパリジャンで、勲章をつけていて、威厳があるけれども感じのいい人だ、我らが詩人さんのように。
[L'Éditeur :] — Oui, un gentil salut à Paris et aux voyages et à la vie romanesque et luxueuse, que nous représentons.	< 編集者 > そうですね。私たちが象徴する、パリと旅行、浮世離れした贅沢な暮らしへの心のこもった挨拶でした。
Je regrette seulement que cela n'ait pas eu lieu à Banville ou à Saint-Ennemond, et que ce ne soit pas une de mes compatriotes qui, à l'entrée de mon Duché...	私はただ、それがバンヴィルかサン=テンヌモンで起きなかったことと、あの少女が私の同郷人でないことが悔やまれますよ。もしそうだったら私の公国の入り口で……。
Mais après tout, si cette enfant est native d'Imphy ²⁰³ ...	でもまあ、もしあの子がアンフィの出身なら……。
Imphy est une enclave du Bourbonnais dans le Nivernais ²⁰⁴ .	アンフィはニヴェルネにある、ブルボネ地方の飛び地の一つなのです。

²⁰³ ムーランの北方の地名。Joseph Viple, *Histoire du Bourbonnais*, Moulins, 1923, p. 86 に記述が見られ、また同書 84 頁に添付の地図 « L'ANCIEN BOURBONNAIS » において確認できる。ジョゼフ・ヴィップルについては、本「別冊」、「著者解題」第 5 章「『アレン』の典拠」におけるラルポーによる原注（117 頁、注 329）を参照されたい。

²⁰⁴ フランスの旧州で、南部がブルボネ地方に隣接する。

[L'Amateur :] — Nous pourrions revenir en arrière et lui demander si elle est d'Imphy	<アマチュア>バックして彼女にアンフィの出身かどうか聞くこともできますよ
[L'Auteur :] — et comme nous avons une place libre dans la voiture...	<作者>それに車には空席が一つあるし……。
Allons, Poète !	さあ、詩人さん！
[Le Poète :] — Pourquoi pas vous ?	<詩人>どうしてきみたちが聞きに行かないんだ？
[L'Auteur :] — Même si c'était praticable, le souvenir est plus précieux tel qu'il est.	<作者>もしそれが出来るとしても、思い出はそのままの方が貴重なものです。
Sans retouches. »	手直しをせずにね。」

第 7 章

VII	第 7 章
[L'Auteur :] SILENCE. Et façades roses et noires.	<作者> 静寂。そしてバラ色と黒の正面部分。
[— :] « Lumière plus calme encore que celle du Nivernais.	<—> 「ニヴェルネ地方のよりもずっと穏やかな光だ。
[— :] — Nous y voilà, au Pays d'Allen, et assis comme de vieux habitués à la terrasse du principal hôtel de la capitale ; Allen, Allen, tous ensemble, tous unis.	<—> やっと着きましたね、アレンの国に。そして昔からの常連のように首都で一番大きなホテルのテラスに腰を下ろして。アレン、アレン、みんな一緒に、みんな一つになって。
[L'Éditeur :] — Allen et Espérance. Allen, l'élan, l'essor, du cerf ailé de Charles III.	<編集者> アレンと希望。アレン、跳躍、飛翔、シャルル三世の翼を備えた鹿。
[Le Bibliophile :] — Attendez donc. Ah ! j'y suis :	<愛書家> あ、待ってください。ああ！わかった。
Le Cerf volant aux abois de l'Autruche ²⁰⁵ .	「ダチョウの声に驚いて飛ぶ鹿」
C'est-à-dire : le connétable de Bourbon ²⁰⁶ s'alliant à Charles-Quint ²⁰⁷ contre François I ^{er} .	つまり、フランソワ一世に対抗してカール五世と同盟を結んだブルボン大元帥のことですね。

²⁰⁵ モーリス・セーヴの詩集、*Délie, objet de plus haute vertu* (『デリー、至高の徳の対象』、1544) の一節で、ラルポーはこの引用について「著者解題」第 9 章「名前を挙げずにされた引用」で説明している。本「別冊」125-126 頁の注 355 を参照されたい。

²⁰⁶ ブルボン公シャルル三世のこと。フランス王フランソワ一世からマリニャーノの戦いの武勲に対して Connétable (大元帥) に叙せられたが、妻 Suzanne de Bourbon (シュザンヌ・ド・ブルボン、1491-1521) の死後、フランソワ一世の母ルイズ・ド・サヴォワ (77 頁の注 209 を参照) との相続権争いの結果、神聖ローマ皇帝カール五世側に寝返り、パヴィアの戦いでフランス軍と戦いフランソワ一世を捕虜とした。ブルボン公シャルル三世は神聖ローマ皇帝カール五世と 1523 年 7 月 18 日に、イギリス国王ヘンリー八世と 1523 年 9 月 7 日に協定を結び、強力な軍隊、一つはピカルディア〔ピカルディー地方〕とギエンナ〔当時イギリス領だったギエンヌ地方〕の軍隊と戦争に入ることを約束した。その結果、カール五世は同盟の条件として、自分の姉エレオノーラをブルボン公の妻にすることを約束した。F. グイッチアルディーニ『イタリア史 VII』、川本英明訳、太陽出版、2005 年、185 頁および 215 頁を参照した。なおブルボネ地方の歴史家 Achille Allier (アシール・アリエ、1807-1836) の郷土史 *L'Ancien Bourbonnais* (『旧きブルボネ』、1833-1838) には、日時は明記されていないが、関連する記述が見られる。Voir « Charles III, 9^e duc de Bourbon, connétable de France », Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, pp. 524-528.

²⁰⁷ 神聖ローマ皇帝カール五世。

[L'Éditeur :] — Oh ! le connétable ! Avant tout et après tout : Charles III, notre duc, « ce grand et sage garçon » ²⁰⁸	<編集者>おお！ 大元帥！ とにもかくにも、シャルル三世、我らが公、「この大柄でおとなしい若者」
[Le Bibliophile :] — trop sage. S'il avait consenti à coucher avec Louise de Savoie ²⁰⁹ ...	<愛書家>あまりにもおとなし過ぎた。もし彼がルイーズ・ド・サヴォワと寝ることに同意していたら……。
Cela me donne envie de relire Brantôme ²¹⁰ en rentrant.	戻ったらブラントームをもう一度読みたくなりますね。
[Le Bibliophile :] — l'Eau-qui-dort, <i>el Pobre Caballero</i> ²¹¹ , notre dernier souverain légitime :	<編集者>よどんだ水、貧しい紳士、私たちの最後の正当な君主、つまり
Race des dieux français, honneur de l'univers, / Mon prince, mon seigneur... ²¹²	フランスの神々の一門、宇宙の誉れ／私の君主、私の領主……。
[Le Bibliophile :] — Lui-même, l'homme qui a « fait le rêve atroce de démembrer la France » ²¹³ .	<愛書家>彼こそが「フランスを分割するという恐ろしい夢想にふけた」男ですよ。

²⁰⁸ ブルボン公シャルル三世を指す。ヴィシー市立図書館所蔵 (Cote : Br 18) の Gabriel Depyre, *Les ducs de Bourbon*, Paris, H. Champion, Toulouse, E. Privat, 1897, p. 413 に « On a dit que Louis XII répétait quelquefois : « Ne nous fions pas à ce grand et sage garçon ; il n'est pas pire eau que l'eau qui dort » » (「ルイ 12 世は『我々は、この大柄でおとなしい若者を信用してはならない。よどんだ水ほど悪い水はない〔「おとなしい奴ほど油断がならない」という意味のことわざ〕からだ。』と時折繰り返した。』) との記述がある (下線強調は引用者)。

²⁰⁹ フランス王フランソワ一世の母、ルイーズ・ド・サヴォワ (1476-1531)。ブルボン公シャルル三世の妻シュザンヌの死後、相続権を主張し、フランソワ一世はブルボン公の領地と爵位を没収した。シャルル三世が神聖ローマ皇帝カール五世のもとへ走った原因を作ったとされる。

²¹⁰ 回想記録者 Pierre de Brantôme (ピエール・ド・ブラントーム、1540 頃-1614) の歴史書を指し、ラルボーは「著者解題」第 9 章「名前を挙げずにされた引用」において、ブラントームの著作として『ブルボン大元帥の生涯』を挙げている。本「別冊」126 頁の注 357、注 358 を参照されたい。

²¹¹ スペイン語で「けちな騎士」の意味。ロシアの詩人・小説家 Александр Сергеевич Пушкин (Alexander Pushkin : アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン、1799-1837) の劇詩『小悲劇』の一篇「吝嗇の騎士」(仏語タイトル *Les Petites tragédies*, « Le Chevalier avare », 1836) を指していると思われる。

²¹² フランスの詩人 Philippe Desportes (フィリップ・デポルト、1546-1606) の *Angélique, I* (『アンジェリック I』) の詩句。詳しくは本「別冊」126 頁の注 359 を参照されたい。

²¹³ フランスの歴史家 Jules Michelet (ジュール・ミシュレ、1798-1874) の *Histoire de France* (『フランス史』、中世 6 巻、1833-1844・近代 11 巻、1855-1867) からの引用と思われる。本「別冊」127 頁の注 360 を参照されたい。

C'est curieux, qu'il y ait pourtant ici une rue du Cerf-Volant ²¹⁴ .	でも妙ですね、ここに「跳躍する鹿通り」があるのは。
[L'Éditeur :] — C'est tout naturel.	<編集者>それは当然のことですよ。
Mais Charles III est encore tout noirci de la mauvaise presse payée par François I ^{er} qui voulait justifier la spoliation et contenter sa putain de mère.	しかしシャルル三世は、強奪を正当化して忌々しい母親を満足させようとしたフランソワ一世がお金を出した下劣な出版物のせいで、まだ名誉を汚され続けているのです。
Et Michelet, homme de la Révolution, nationaliste dangereux, parlant de lui, s'exprime comme ces bourreurs de crâne.	それにフランス革命支持者、危険な国粋主義者のミシュレときたら、彼のことで、こんな嘘八百を言っているのですよ。
« Le dernier des grands féodaux » ²¹⁵ , disent les manuels, — ou le premier des politiques modernes ²¹⁶ , s'efforçant de rompre les mailles du système national ? prévoyant les conséquences de cette anarchie appelée l'Ancien Régime ?	複数の概説書が言うには、「偉大なる封建君主の最後をなす者」——あるいは、近代政治家の最初をなす者ですね。国家体制の鎖を断ち切ろうとしていたとか、アンシャン・レジームと呼ばれるあの無政府状態の結果を予見していたとかだったかな？
Oh, ne serait-ce que pour une heure, conduisez-moi jusqu'à ma terre familiale de Breuilly ²¹⁷ , pour qu'elle reçoive, cette année encore, l'empreinte des pas de son seigneur !	おお、一時間でいいから、私をブルイイの家族の地所まで連れて行ってもらえますか。今年も領地が主君の足跡を受け取れるように！
[— :] — Qu'est-ce qu'il a ?	<—>彼は一体どうしたんだ？

²¹⁴ ムーランにある通りの名称。

²¹⁵ ジュール・ミシュレの『フランス史』には、「この見事な計画において、この狂女は支持を必要としていたので、もう一方のアンヌ（アンヌ・ド・ボージュール）の支持を取り付けつつ、この半ばイタリア人であるシャルルに、フランスの諸々の大封土の中で最後の封土を譲るという、もう一つの気狂い沙汰を許してしまった」との記述がある。Cf. « Dans ce beau projet, cette folle, qui avait besoin d'appui, s'assura celui de l'autre Anne (Anne de Beaujeu) en permettant l'autre folie, celle de transmettre à ce Charles, moitié Italien, le dernier des grands fiefs de France. », Jules Michelet, *Histoire de France*, t. 10, « Réforme », Paris, Marpon, 1881-1884, p. 171. (下線強調は引用者)

²¹⁶ 「編集者」の発言。Cf. Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages*, Paris, Gallimard, 1973, p. 33.

²¹⁷ サン=プルサン=シュル=シール西方の町 Cesset（セセ）にある地名。すぐそばにラルボー家の邸宅に通じる Rue de Valbois（ヴァルボワ通り）がある。

[—:] Et pourtant hier, à Saint-Menoux ²¹⁸ , lui aussi a mis la tête dans la Débredinoire ²¹⁹ ...	<—>でも昨日、サン=ムヌーで、彼も ^{デブルディノワール} 脱 狂 気 と呼ばれている石棺の中に頭を入れたよ……。
[L'Éditeur :] —... <i>et pro Christianissimo Imperatore nostro, ut Deus et Dominus noster subditas illi faciat omnes barbaras nationes ad nostram perpetuam pacem</i> ²²⁰ .	<編集者>……そして私たちの最も信仰厚い皇帝のために、私たちの神、主が、私たちの永遠の平和のために、すべての蛮族を服従せしめんことを〔祈る〕。
[—:] — Mais qu'est-ce qui l'a pris ?	<—>彼に一体何があったのやら？
[L'Éditeur :] — Peut-on mieux dire ? demander rien de plus souhaitable ?	<編集者>これ以上うまく言うことなんてできるでしょうか？ これ以上願わしい事柄を望むことなど？
[—:] — Les nations modernes n'étaient pas dans la pensée de ceux qui ont rédigé cette prière.	<—>この祈りを書いた人たちの考えの中に近代国家はありませんでした。

²¹⁸ アリエ県の町、2009年の人口は約千人。

²¹⁹ サン=ムヌーの教会にある石棺で、中に頭を入れると狂気が治ると言われている。Cf. Jean Débordes, *Les Mystères de l'Allier : histoires insolites, étranges, criminelles et extraordinaires*, Clermont-Ferrand, Éditions de Borée, 2010, « chap. III : La débredinoire de Saint-Menoux », pp. 37 et suiv. ; Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, p. 25 et p. 27. なお « débredinoire » がブルボネ地方の言葉であることについて、次の論考を参照されたい。Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, *Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux* », in *FRACAS*, numéro 1, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), le 26 février 2014, p. 6 et note 30. ラルボーは、「アレン」を『新フランス評論』に発表したほぼ同じ頃である1927年3月にアドリエヌ・モニエに送った葉書にも、それがブルボネ地方の言葉で、正気を取り戻すために頭を柩の開口部へ入れることを説明しつつ « débredinoire » を用いている。Cf. « Bourbonnais — Environs de Saint-Menoux — Intérieur de l'église — Le saint et la Débrédinoire [sic] — Une légende du Pays prétend que les gens bredins (mot bourbonnais) n'avaient qu'à passer la tête dans l'ouverture du tombeau pour recouvrer tout [sic] leur lucidité. / Moulins, 15 Mars [sic] 1927. / — La plupart de nos amies seraient bien empêchées d'y mettre des épingles à cheveux. / — C'est qu'elles n'ont pas besoin de la Débrédinoire [sic]. », Carte postale de Valery Larbaud à Adrienne Monnier du 15 mars 1927, in *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach, 1919-1933, op. cit.*, p. 299 et note 2. (下線強調は引用者) またこの葉書の書き出しに « Bourbonnais » (「ブルボネ」) と記し、「les gens bredins」(「頭がおかしな人々」) には « (mot bourbonnais) » (「(ブルボネの言葉)」) と注記、さらに『アレン』からの引用を添えていることから、ラルボーが « débredinoire » をブルボネ地方の言葉と認識した上で『アレン』の中で用いたと言える。

²²⁰ ラルボーは「著者解題」第9章「名前を挙げずにされた引用」において、この文が聖週間の典礼で朗読されるものであると述べている。本「別冊」127頁の注362、注363を参照されたい。

[L'Éditeur :] — Elle est peut-être prophétique.	<編集者>この祈りは預言かもしれませぬね。
Mais supposez qu'on l'ait récitée pour François I ^{er} , c'est-à-dire, qu'il ait réussi à se faire élire empereur.	でもこの祈りがフランソワ一世のために唱えられた、つまり彼が皇帝に選ばれることに成功したことを示しているのだと仮定してみてください。
Que devenait son royaume de France dans l'ensemble de ses préoccupations politiques ?	彼の一連の政治的配慮によって、彼のフランス王国はどうなったか？
Après cela, parlez de la trahison du connétable !	その後で、〔ブルボン公シャルル三世〕大元帥の裏切りについて話していただきたいものですね！
Traître envers qui ?	誰に対しての謀反人なのか？
Nous étions libres de nous donner les alliés que nous voulions, et de choisir entre l'ordre européen : l'empereur ; et le désordre national : les rois ²²¹ .	私たちは自由に、我々が望むような盟友を自分たちに与えたり、ヨーロッパの秩序、すなわち皇帝〔ただ一人によって統治される状態〕か、国家動乱、すなわち王たち〔が複数存在する状態〕かを、選ぶことができていたのです。
[Le Poète :] — J'ai aimé cette petite église de Saint-Menoux, toute féminine, avec la procession de ses jolies colonnes et leur ronde gracieuse et modeste derrière l'autel.	<詩人>僕はサン＝ムヌーのあの小さな教会が気に入ったよ。まったく女性的だね、綺麗な円柱の列や、祭壇の後ろに優雅で控えめな円柱の輪舞 ^{ロンド} があって。
[Le Bibliophile :] — Mélange de bourguignon et de byzantin, comme à Souvigny ; mais le mélange a donné quelque chose de très bien ; l'originalité est dans les proportions : à Souvigny, les proportions grandioses ; à Saint-Menoux, le bijou ²²² .	<愛書家>ブルゴーニュ様式とビザンティン様式の混合物ですね、スヴィニーで見た物のように。でもその混合が何かしらとても良いものを生んでいましたね。その均整の取り方に独自性があります。スヴィニーの教会はスケールが大きいけ

²²¹ 「編集者」の発言。Cf. Françoise Lioure, « « Allen » ou de l'autonomie », *op. cit.*, p. 40.

²²² 下記の資料によれば、これは「編集者」の発言とされているが、発言の内容などから、発話者を「愛書家」と推測した。Cf. Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages*, *op. cit.*, p. 25.

	れど、サン=ムヌーの教会は宝石のようですから。
Mais que signifiaient ces épingles à cheveux et ces clous dans ce cercueil de pierre, derrière l'autel, avec cette ouverture pour y mettre la tête, la Débredinoire ?	ところで、祭壇の後ろの、頭を入れる穴があった ^{デブルディノワール} 脱狂気の石棺の中のヘアピンや釘にはどんな意味があったのでしょうか？
[L'Auteur :] — Des ex-voto.	<作者>〔教会などへの〕奉納物です。
En réalité, c'est des maux de tête qu'on guérit, paraît-il, quand on met la tête dans cette ouverture ; et de là à dire qu'on guérit aussi de la folie, de la singularité, de ce qui s'appelle à Paris loufoquerie et ici bredinerie ²²³ ...	実は、この穴に頭を入れると、頭痛が治るそうですよ。それから、狂気や奇行、パリでは「 ^{ルーフォクリ} loufoquerie」〔頭がおかしいこと〕、ここでは「 ^{ブルディヌリ} bredinerie」と呼ばれるものが治ると言うのは……〔無理がある〕。
[Le Poète :] — La plupart de nos amies seraient bien empêchées d'y mettre des épingles à cheveux.	<詩人>僕たちの女友たちの大半は、ヘアピンをここに入れられないだろうな。
[L'Auteur :] — C'est qu'elles n'ont pas besoin de la Débredinoire.	<作者>それは彼女たちには ^{デブルディノワール} 脱狂気の治療が要らないからですよ。
[L'Éditeur :] — Je pense que la bredinerie c'est aussi tout ce qui sort un peu des préoccupations les plus matérielles.	<編集者>〔ここで〕 ^{ブルディヌリ} 狂気というのは、もともと物質的な関心事からいささかはみ出すことすべてを指すと思いますよ。
La poésie, la bibliophilie, doivent être d'incurables bredineries.	詩や、書籍道楽は、不治の ^{ブルディヌリ} 狂気である違いないでしょう。
[Le Bibliophile :] — Elle me plaît, votre petite capitale.	<愛書家>おもしろいですね、あなたの小さな首都は。
J'aime voir à travers la verdure tendre ces belles façades de briques roses et noires.	私は柔らかな草むら越しに、このバラ色と黒のレンガでできた綺麗なファサードを見るのが気に入りましたよ。
Je crois que c'est très Henri-IV ²²⁴ , cette sorte de construction, ce réseau noir sur fond rose.	私はそれがとてもアンリ四世的だと思います。こんな種類の構造、バラ色の下地の上の黒いこの網目がね。

²²³ ブルボネ地方の言葉であることについて、次の論考を参照されたい。 Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, *Allen de Valéry Larbaud et des mots régionaux* », in *FRACAS*, numéro 1, *op. cit.*, p. 6 et note 29.

²²⁴ フランス王（1553-1610、在位 1589-1610）、ブルボン王朝の祖。

Le Duché, son indépendance perdue et oubliée, a dû l'adopter comme une jolie invention.	公国は、その独立が失われて忘れられた時、素敵な発明として、その建築方法を取り入れたに違いありません。
C'était comme si le pays rougissait de plaisir en voyant enfin un Bourbon sur le trône et son Espérance réalisée.	それはまるで、ブルボン公のひとりが王位に就いて、みずからの「希望」が実現したのをついに見て、この国が喜びに頬を染めているかのようなようでしたよ。
[L'Éditeur :] — Son espérance était ensevelie à Rome, <i>Imperio aucto, Gallo vicio, Roma capta...</i> ²²⁵	<編集者>彼の希望はローマに埋葬された。帝国を大いに増やし、ガリアを征服し、ローマを捕えた……。
Tué en prenant Rome, il dort sur sa conquête.	ローマを掌握した時に殺され、彼は征服した国に眠る。
[Le Bibliophile :] — Et vous l'attendez, comme les Portugais don Sébastien ²²⁶ ?	<愛書家>そしてあなたは彼を待っているではありませんか？ ポルトガル人がドン・セバスティアンを待ったように。
[L'Éditeur :] — C'est la ville de Théodore de Banville ²²⁷ .	<編集者>テオドール・ド・バンヴィルの町に着きましたよ。
Les briques roses, le pont construit par son aïeul, les grands jardins entourés de murs.	バラ色のレンガ、彼の祖先によって造られた橋、壁に囲まれたいくつもの大きな庭園。
Ville lévitique aussi, avec tant de couvents tintants.	たくさんの修道院の鐘が鳴り響くレヴィ族の町でもある。
Et aux beaux soirs d'été, ville rêveuse, attendrie, sous les longs tournoisements et les cris d'hirondelles.	夏の美しい夜には、夢みがちな、和やかなその町は、ツバメたちの長い旋回と鳴き声の下にあります。
Dans la géographie de la France des hirondelles, Moulins doit être une des villes les plus importantes du Centre.	ツバメたちにとってフランスの地理の中で、ムーランは中部地方の最も重要な町の一つのはずです。

²²⁵ 「本編」第6章でも引用された文言である。本「別冊」69頁の注194を参照されたい。

²²⁶ ポルトガル王セバスティアン一世（1554-1478）。

²²⁷ ムーランを指す。テオドール・バンヴィルはムーラン生まれである。

Peut-être à cause du silence et des jardins ²²⁸ .	もしかすると、この静けさと庭の多さのためかもしれません。
[Le Poète :] — Oui, c'est une ville que je n'aurais pas envie de réveiller.	<詩人>確かに、ここはいくら僕でも起こしたいと思わないような町だね。
Elle est très bien telle qu'elle est.	この町はありのままで十分だ。
Et cette courte perspective urbaine qu'on voit entre les colonnades de l'Hôtel de Ville quand on tourne le dos à Jacquemart	それに〔時計台の〕時計打ち人形に背を向けた時に市庁舎の列柱の間に見えた、この低くて都会っぽい見晴らしは
[L'Éditeur :] — la place de la Bibliothèque et la rue Denain ²²⁹ au fond	<編集者>奥の図書館広場とドゥナン通りは
[Le Poète :] — est douce à la vue comme le cœur d'une rose.	<詩人>一輪のバラの芯のように見た目も優しいね。
Je souhaiterais seulement que toutes les maisons neuves et à bâtir fussent en briques roses et noires, que toutes les rues fussent asphaltées, et qu'il n'y eût pas cette foire qui agite la ville si péniblement, d'une façon si incongrue, une fois par semaine. ²³⁰	僕はただ、建てたばかりの家もこれから建てられる家もすべてバラ色と黒のレンガで出来ていたら、すべての道がアスファルトで舗装され、週に一度、非常識極まりないやり方でこの町を耐えがたく掻きまわすこの市場がなかったらと願うだけだよ。
[L'Éditeur :] — Leur principale ressource.	<編集者>住民の主要な財源ですからね。
Ce souhait est une bredinerie.	その願いは一つの狂 ^{ブルディヌリ} 気ですよ。
[Le Bibliophile :] — À propos : vous oubliez que vous nous devez l'explication de votre régionalisme, non ! je veux dire de votre... quoi ? comment l'appellez-vous ? et de cette scandaleuse admiration pour le connétable, non ! le duc Charles III.	<愛書家>ところで、あなたは私たちにあなたの地方主義について説明しなければならぬことをお忘れですよ！ いえ、私は言いたいのです、あなたの……何でしたっけ？ それを何ておっしゃってました？ それと大元帥、いやシャルル三世公に対する呆れた敬服について。

²²⁸ 「編集者」の発言。Cf. Francisco Contreras, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe*, *op. cit.*, p. 62.

²²⁹ ムーランの通りの名称。

²³⁰ フランソワーズ・リウールは「発話者の一人」の発言としている。Cf. « L'un des interlocuteurs », Françoise Lioure, « « Allen » ou de l'autonomie », *op. cit.*, p. 39.

<p>[L'Éditeur :] — Eh bien, demain, dans la forêt de Tronçais²³¹, à un endroit que je connais, un des bras de l'étang de Pirot²³², une longue avenue liquide et pure que nous trouverons au cœur des bois, toute fleurie de renoncules aquatiques, et où, dans le plein été, on voit émerger les mille petits doigts roses de la renouée amphibie, je</p>	<p><編集者> えーっと、明日、トロンセの森の中の、私が知っている所にある、ピロ池の分流の一つに、私たちが森の真ん中に見つけるでしょう。一本の長く澄んだ水の流れには、水生のキンポウゲが咲き誇っていて、そこでは、夏の盛りに、何千もの小さな指先ほどのバラ色をした両生植物のタデが水面に現れるのが見られるのですが、私は</p>
<p>[Le Bibliophile :] — la forêt est déjà bien près de ce que vous appelez votre frontière ; c'est ici, dans votre capitale, qu'il nous faut cette explication.</p>	<p><愛書家> その森はあなたがあなたの境界と呼ぶところの、すぐ近くではありませんか。私たちにこの説明をしなければならぬのは、ここ、あなたの中心地なんですよ。</p>
<p>[L'Éditeur :] — Eh bien, allons ;</p>	<p><編集者> では、始めましょ<u>う</u>。</p>
<p>[Le Poète :] — non : allen</p>	<p><詩人> 違うよ、アレン</p>
<p>[L'Éditeur :] — et je commencerai par vous avouer que pendant longtemps j'ai détesté ce pays.</p>	<p><編集者> まず初めに、私はあなた方に、長い間私がこの地方を嫌っていたことから告白しようと思います。</p>

²³¹ ブルボネ地方の作家 Charles-Louis Philippe (シャルル=ルイ・フィリップ、1874-1909) の出生地セレイに近い、アリエ県 Isle-et-Bardais (イル・エ・バルデ) にある 1 万ヘクタールの森。フィリップの父親が木靴職人であるように、この地方の人々は、木こりや製材業、桶屋など、森林のカシワやブナをもちいることで生計を立てていた。1914 年に英国の週刊誌 *New Weekly* (『ニュー・ウィークリー』) に «Lettres de Paris» (「パリ通信」) を英語で連載し、英国の読者に向けてフランスの文化活動や地方に関する記事を書いていたラルボーは、6 月 6 日付の記事でトロンセの森をフォンテーヌブローの森と比較し、「素晴らしいトロンセの森は、風光明媚なさまにおいて、フォンテーヌブローの森のそれにのみ負けるだけである〔フォンテーヌブローにはかなわないが、他の森には勝る〕」と述べている。Cf. «la merveilleuse forêt de Tronçais qui ne le cède en pittoresque qu'à celle de Fontainebleau.», Valery Larbaud, *Lettres de Paris : pour le New Weekly (mars-août 1914)*, traduit de l'anglais par Jean-Louis Chevalier, introduction et notes d'Anne Chevalier, Paris, Gallimard, 2001, p. 76.

²³² トロンセの森の中央にある池。

Je l'appelais l'Exil, la Réclusion, la Thébaïde ²³³ , le Sépulcre ²³⁴ .	私はこの地方を「流刑地」、「隠遁地」、「隠棲地」、「墓場」と呼んでいました。
J'y suis né ; j'avais des intérêts matériels ; mais tous mes vrais biens, et mes amitiés, et mes habitudes et mes pensées appartenaient à Paris ; et d'aussi loin qu'il me souvienne, j'ai dit : « Je rentre à Paris », et : « Je vais en province. »	私はここに生まれ、実際的な利害関係がここにありましたが、私の本当の財産のすべて、私の友人関係、習慣や思考はパリに属していたのです。だから私が覚えている限りでは、私はこう言っていました。「パリへ帰る」、そして「地方へ行く」と。
Mais j'étais obligé d'y aller, d'y faire des séjours, pour des raisons de famille, d'intérêt, pour d'inéluctables raisons.	しかし家族や利益の問題のために、また避けられない事情のために、そこへ行き、滞在せざるを得ませんでした。
J'y rongerais mon frein ; j'y comptais les jours ²³⁵ ; le temps passé était du temps perdu, gâché.	私はその場所でじっとこらえていました。そこで日々を数えていたのです。そこで過ごした時間は、無駄な、浪費した時間だったのです。

²³³ ラルボーは自宅に構えた書齋を「隠遁地、人里離れた所」を意味する「ラ・テバイード」と名付け、自宅に居る時にはそこに長く滞在していた。ラルボーが残した「*la Thébaïde*」の最初の記述は、20歳当時の1901年9月11日付の日記であるが、下記の資料によれば、1895年（14歳）頃にこの書齋を作っていたようである。『アレン』において故郷への嫌悪を象徴する言葉や場所はまた、ラルボーにとって読み書きに集中できる静かな場所だったのである。Cf. Valery Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 37 ; *Colloque « Valery Larbaud et la France »*, Paris-Sorbonne, le 21 novembre 1989, sous la présidence de Roger Grenier, Président des Amis de Valery Larbaud, Jacques Lacarin, Député-Maire de Vichy, Clermont-Ferrand, Institut d'études du Massif central, 1990, pp. 1-2.

²³⁴ 「編集者」の発言。Cf. Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, p. 20.

²³⁵ 『A. O. バルナブース全集』の「日記」において、バルナブースの友人ピュトゥアレイが「僕の幼年時代と青年時代がどんなに不幸だったか、今になって自分ではっきり認めることができるからなんだ。僕は僕の人生から6年間を他人に盗まれたんだ。すんでのところの不具者にされる場所だった。青年時代飢えに苦しんだとか、病気に悩んだとかいう連中のことを聞くと、普通かわいそうに、と思うだろう？ しかし田舎の城に閉じ込められ、ブルジョワ好みの快適な環境の中で教師たちの深情けに拷問の苦しみをなめ、法律上の青年に達するまでの年月を、いや一日一日を、指折り数えながらうめいていた連中のこともたまには考えて欲しいものだ……」と似たような発言をしている。Cf. « À ce qu'à présent j'ose m'avouer combien mon enfance et ma jeunesse ont été malheureuses. On m'a volé six ans de ma vie. On a failli m'estropier. On plaint les hommes qui ont souffert de la faim ou de la maladie dans leur jeunesse. Pensez aussi quelquefois à ceux qui ont gémi, prisonniers dans des châteaux, en province, dans un confortable milieu bourgeois, amoureuxment torturés par leurs éducateurs, et comptant les années, les mois et les jours qui les séparaient de leur majorité légale... », A. O. B., *Pléiade*, p. 300. (下線強調は引用者)

Ma maison familiale et la terre dont je vous parlais féodalement, c'était Nulle-Part ²³⁶ , un espace abstrait où j'attendais, comme je l'eusse fait en prison, de pouvoir rentrer à Paris ou partir pour l'étranger.	みなさんに封建的な態度でお話しした私の実家と地所、それは「どこでもない場所」、抽象的な空間で、そこで私は、監獄でそれをするかのように、パリへ戻る、あるいは外国へ出発できるのを待っていたのです。
Je n'avais aucun désir de connaître ce que j'appelais avec mépris : la région.	私には私が軽蔑して「地方」と呼んでいたものを知ろうという気持ちが、これっぽっちもありませんでした。
J'ignorais l'existence de cette belle forêt avec ses grands étangs (de vrais lacs) que nous verrons demain.	私たちが明日見ようとしている、幾つも大きな池（本当の湖）のある、あの美しい森の存在も知らなかったのです。
J'étais en province et ce n'était pas drôle.	私は地方にいたけれど、それは辛いものでした。
Je me sentais épié, menacé, abandonné ²³⁷ , et comme tombé au fond d'un ravin.	私は監視され、脅され、見捨てられていると感じていて、狭い谷底に落ちたかのように感じていたのです。

²³⁶ ラルポーがフランスに紹介した英国の作家 Samuel Butler (サミュエル・バトラー、1835-1902) の *Erewhon* (『エレホン』、1872) を想起させる発言である。「Erewhon」とは英語 «Nowhere» (「実在しない場所」) を逆に綴った造語で、ユートピア文学の一つとして挙げられるこの作品は、どこにもない国からの現代批判の物語である。ラルポーは『エレホン』の仏語訳 (*Erewhon, ou, De l'autre côté des montagnes*, traduit de l'anglais par Valery Larbaud, Paris, Éditions de la Nouvelle revue français, 1920) のほかにもバトラーの作品の翻訳を手掛けた。Cf. Samuel Butler, *Ainsi va toute chair*, traduit de l'anglais par Valery Larbaud, Paris, Éditions de la Nouvelle Revue française, 1921 ; *La vie et l'habitude*, traduit de l'anglais par Valery Larbaud, Paris, Éditions de la Nouvelle Revue française, 1922 ; *Nouveaux voyages en Erewhon, accomplis, vingt ans après la découverte du pays, par le premier explorateur et par son fils*, traduit de l'anglais par Valery Larbaud, Paris, Éditions de la Nouvelle Revue française, 1924 ; *Carnets*, traduits de l'anglais et préfacés par Valery Larbaud, Paris, Gallimard, 1936. また、ラルポーはバトラーに関する評論、「Introduction à l'œuvre de Samuel Butler. Auteur d'*Erewhon* (1835-1902)」(「サミュエル・バトラー著作序説、『エレホン』をめぐって(1835-1902)」)を雑誌 *La Revue de France*, 1^{er} octobre 1923, pp. 449-464 に発表した。この論考は現在同じタイトルのまま、Valery Larbaud, *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées*, op. cit., pp. 100-115 に収録されている。また同書は、ラルポーが1924年に発表した「L'étrange dédicace d'*Erewhon* expliquée par le traducteur français de Samuel Butler」(「サミュエル・バトラーのフランス人翻訳者によって解説された『エレホン』の風変わりな献辞」)も pp. 560-562 に収録されている(初出は *Les Nouvelles littéraires*, 2 février 1924)。

²³⁷ 「編集者」の発言。Cf. Françoise Lioure, « «Allen» ou de l'autonomie », op. cit., p. 43.

<p>Alors — et c'est de ma seizième ou dix-septième année que je vous parle²³⁸, — par dérision, et pour m'exprimer l'isolement où j'étais, je jouai à considérer ma terre familiale, d'abord comme une île où j'étais le naufragé qui attend qu'un navire passe ; puis comme un minuscule État indépendant, dont ma maison, — le « château », — était la capitale, et les fermes qui en dépendent, les villes principales (j'en dressai même une carte en trois couleurs).</p>	<p>そして——私がみなさんにお話しするのは、私の 16 歳か 17 歳の頃のことです——あざけりの気持ちから、そして私がおかれていた孤独を自分に表すために、私は自分の家族の所有地を、まずは私が遭難した、外洋船舶が通りかかるのを待っている島だと思う遊びをしたのです。それから、とても小さな独立国、私の家——「お城」——が首都で、それに属す農場が主要な町であるような独立国と思う遊びをね（それらを三色の地図に仕上げました）。</p>
<p>Ainsi, ayant commencé à jouer avec ce fragment de « la région », j'en vins par degrés à inventer le jeu, plus intéressant, du « Duché ».</p>	<p>こうして、「地方」のこの一部と遊ぶことを始めて、私は「公国」のもっとおもしろい遊びをだんだんに思いつくようになったのです。</p>
<p>Je voulus savoir jusqu'à quel point il avait été indépendant ; et, l'ayant su, je vis en lui non plus une région, ni une province, ni un département, mais un État d'Europe, moins grand que la Suisse ou la Belgique, mais plus étendu que le Grand-Duché de Luxembourg²³⁹ ; un État qui, allié des rois de France jusqu'à la sécession très justifiée de Charles III, avait joué un rôle en Europe.</p>	<p>私は、どの程度まで公国が独立していたのか知りたと思いました。そして、それがわかると、私は公国を地域ではなく、地方でもなければ、県でもない、一つのヨーロッパ国家だとみなしたのです。スイスやベルギーほど大きくはないけれど、ルクセンブルク大公国よりも広い国家。シャルル三世による至極正当な分離の時までフランスの王たちと同盟を結んでいたこの一国家は、ヨーロッパにおいて一つの役割を果たしていたのです。</p>

²³⁸ 「編集者」の発言。Cf. Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, p. 20.

²³⁹ フランス、ドイツ、ベルギーに囲まれた大公国。面積は 2,586 平方キロメートル。外務省のウェブサイト <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/luxembourg/data.html> を参照した（2014 年 5 月 4 日閲覧）。

La petite ville de Lewes ²⁴⁰ , dans le Sussex ²⁴¹ , où je changeais de train pour aller de Brighton ²⁴² à Newhaven ²⁴³ , était le nom d'une victoire de mon État : un de nos ducs, le seul envahisseur qui eût pris pied en Angleterre depuis Guillaume le Conquérant, y avait battu les troupes anglaises.	ブライトンからニューヘヴンへ行くために私が列車を乗り換えていた、サセックス州にある小さな町ルーイスは、私の国家の勝利に由来する名前です。私たちの公の一人は、征服王ギョーム以来、英国に乗り込んだ唯一の侵略者で、そこで英国部隊を打ち破りましたからね。
Et Rye ²⁴⁴ aussi, la jolie Rye, est le lieu d'une victoire bourbonnaise.	それからライもそうですよ。綺麗なライも、ブルボネの戦勝地なのです。
Un de nos sires, Archambaud VIII ²⁴⁵ , était mort à Chypre ²⁴⁶ .	我々の陛下の一人、アルシャンボー八世は、キプロスで亡くなりました。
Et, sous Charles III, le Bourbonnais fut une des hautes parties contractantes dans un traité d'alliance avec l'Empire et l'Angleterre ²⁴⁷ .	それに、シャルル三世の下で、ブルボネ地方はローマ帝国と英国との同盟条約において、締結国の一つだったのです。
Et nos ducs sont aussi rois de Thessalonique ²⁴⁸ .	それから私たちの領主たちはテッサロニキの王たちでもあるのです。
[— :] — Rois honoraires.	<—> 名誉職の王様たち。

²⁴⁰ イングランド南部、イースト・サセックス州の中心地。1264年、イングランド王 Henry III (ヘンリー三世、1207-1272) がフランス出身のイングランド諸侯 Simon de Montfort (シモン・ド・モンフォール、1208-1265) に敗れた地。

²⁴¹ 英国南部の旧州 (1974年まで)。現在はウエスト・サセックス、イースト・サセックスに二分されている。

²⁴² 英国、イースト・サセックス州南西の町。

²⁴³ 英国、イースト・サセックス州南部の海岸の保養地。

²⁴⁴ 英国、イースト・サセックス州のリゾート地。

²⁴⁵ Archambaud VIII de Bourbon (ブルボン卿アルシャンボー八世、1197頃-1249、在位1216-1242)

²⁴⁶ 東地中海に浮かぶ島嶼 (とうしょ) 国家。

²⁴⁷ 1520年にフランス王フランソワ一世が神聖ローマ皇帝カール五世およびイングランド王ヘンリー八世と結んだ条約を指すと思われる。Cf. « Charles III, 9^e duc de Bourbon, connétable de France », Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, *op. cit.*, pp. 516-517.

²⁴⁸ 「編集者」の発言。Cf. Francisco Contreras, *Valéry [sic] Larbaud : son œuvre, portrait et autographe*, *op. cit.*, p. 62. テッサロニキはギリシャ北部の港湾都市。

[L'Éditeur :] — Comme Charles VIII était empereur d'Orient et comme le duc de Savoie ²⁴⁹ est roi de Jérusalem...	<編集者>シャルル八世が東ローマ帝国の皇帝で、サヴォワ公がエルサレムの王様だったようなものです……。
Et puis il y avait « Flamenca » ²⁵⁰ , et le Maître de Moulins ²⁵¹ , et Pierre de Nesson ²⁵² , et Henri Baude ²⁵³ .	それに「フラメンカ」や、ムーランの画家、ピエール・ド・ネッソン、アンリ・ボードもいました。
C'était un État ayant une vie propre et des souverains bien à lui, de plus en plus puissants, et qui jusque dans Shakespeare ²⁵⁴ disent leur nom et leur mot...	固有の活動と独自の君主たちを持つ一つの国家だったのです。そしてこの君主たちは次第に権力を増して、シェイクスピアの作品の中で名乗ったり発言したりするまでになりました……。
Et même une fois notre indépendance perdue, nous avons eu encore des ducs spirituels qui nous avaient représentés sur la scène du monde : Blaise de Vigenère ²⁵⁵ , Jean de	そしてひとたび我々の独立が失われてからも、私たちには世界の舞台で我々を代表する精神上的の君主たちがなおもいたのです。ブレーズ・ド・ヴィジュネール、ジャン・ド・ランジャンド、最近ではテ

²⁴⁹ フランス王シャルル八世の生没年（1470-1498）と在位（1483-1498）から判断すると、Duché de Savoie（サヴォワ公国）の君主 Charles I^{er} de Savoie（サヴォワ公シャルル一世、1468-1490、エルサレム王在位：1485-1490）を指すと思われる。サヴォワ公国は、サヴォワ家 19 代当主の Amédée VIII de Savoie（サヴォワ公アメデ八世、1383-1451）が神聖ローマ皇帝 Sigismond（シジスモン、1368-1437）から公位を授かり 1416 年に成立し、現在のフランス、スイス、イタリアにまたがる領地を持っていた。

²⁵⁰ 13 世紀中頃の創作とされる、フランス南部で用いられる Langue d'oc（オック語）で書かれた作者不詳の韻文物語 *Le Roman de Flamenca*（『フラメンカ物語』）を指すと思われる。物語の舞台がブルボン＝ラルシャンボーで、登場人物に領主アルシャンボーと妻フラメンカがいる。

²⁵¹ 16 世紀に活躍した「ムーランの画家」と呼ばれる匿名の画家。初期フランドル派の画家 Jean Hey（ジャン・エイ、生没年不詳）と同一人物であると考えられているが、詳細は不明である。

²⁵² ブルボン公ジャン一世の将校、詩人（1384-1442 頃）。

²⁵³ ムーラン生まれの詩人（1429 頃-1496）。

²⁵⁴ シェイクスピアの歴史劇『ヘンリー五世』は、アジャンクールの戦い（1415 年 10 月 25 日）に焦点をあてており、Jean I^{er} de Bourbon（ブルボン公ジャン一世、1381-1434、在位 1410-1434）が登場する。

²⁵⁵ サン＝プルサン生まれの作家、詩人、外交官（1523-1596）。ブルボネ地方においても知名度は低いようであるが、郷土史家 Maurice Sarazin（モーリス・サラザン、1929-）による学生向けの伝記で生涯をたどることができる。Cf. Maurice Sarazin, *Blaise de Vigenère Bourbonnais : introduction à la vie et à l'œuvre d'un écrivain de la Renaissance*, Charroux-en-Bourbonnais, Éditions des Cahiers bourbonnais, 1996.

Lingendes ²⁵⁶ , et plus près de nous Théodore de Banville ²⁵⁷ et Charles-Louis Philippe.	オドール・ド・バンヴィルとシャルル＝ルイ・フィリップです。
Et maintenant encore, nous pourrions déléguer au Conseil amphictyonique du Continent le plus illustre linguiste de l'Europe ²⁵⁸ .	今だって、私たちはヨーロッパで最も有名な言語学者をヨーロッパ大陸隣保同盟評議会の代表に送り込むことができますでしょう。
Et les livres de notre Émile Guillaumin ²⁵⁹ servent de textes français aux écoliers d'Allemagne et d'Angleterre.	それに我らがエミール・ギョーマンの著作はドイツや英国の生徒たちのフランス語の教科書になっています。

²⁵⁶ ムーラン生まれの詩人（1580 頃-1616 頃）。*Les Changements de la Bergère Iris*（『羊飼いの女イリスの変心』、1605）で知られる。

²⁵⁷ ムーラン生まれの高踏派の詩人（1823-1891）。郷里に触れた詩篇もあるが、1830 年からパリで教育を受け、その後もパリを中心に活動していた。ラルボーはブエノス・アイレスの日刊紙 *La Nación*（『ラ・ナシオン』）1923 年 7 月 22 日号に掲載したスペイン語でのコラム « Renan et Banville prosateur »（「散文作家ルナンとバンヴィル」）においてバンヴィルの創作活動を紹介する中で、バンヴィルがボードレールを礼賛していたことなどを記しており、両者の作風を把握していたと考えられる。記事は Valery Larbaud, *Du Navire d'argent, chroniques traduites de l'espagnol par Martine et Bernard Fouques, introduction, établissement du texte et notes d'Anne Chevalier*, Paris, Gallimard, 2003, pp. 257-274 に収録されている。同時代のロマン派の詩人 Victor Hugo（ヴィクトール・ユゴー、1802-1885）の名声の陰に隠れていた人物である。

²⁵⁸ ムーラン生まれのインド＝ヨーロッパ祖語が専門のフランスの言語学者、コレージュ・ド・フランス教授の言語学者であったアントワヌ・メイエ（1866-1936）を指す。ラルボーは 1908 年の時点で、メイエの著作を愛読していた。Cf. la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 3 novembre 1908, lettre 88, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. I, 1899-1909, *op. cit.*, pp. 276-280 et p. 381, note 18. またメイエはラルボーが招待されていたブルボネ振興協会の会議で議長を務めていた。Cf. Maurice Sarazin, « Jacques Chevalier, Valery Larbaud, Paul Devaux et la « République des Arbres » (la forêt de Tronçais) », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 222, 2012, p. 57.

²⁵⁹ エミール・ギョーマンの作品のうち、ドイツにおけるフランス語の教科書とは、*Les Tableaux champêtres, Scènes de la vie rurale en Bourbonnais à la fin du XIX^e siècle*（『農村の風景：ブルボネ地方における 19 世紀末の田園生活情景』、1901）を指すと思われるが、英国においては該当する作品がない。この事柄については次の論考を参照されたい。Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux », in *FRACAS*, numéro 1, *op. cit.*, pp. 1-3. ラルボーと親交の深かったギョーマンは、ブルボネ地方イグランド生まれで、農業を営むかたわら創作に励んだ。二人の交流の様子を知るには、*Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*（『シャルル＝ルイ・フィリップ友の会会報』）に 1957 年から 1966 年にかけて掲載された、1909 年から 1938 年までに断続的に交わされた書簡（« Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 15-n° 17, 1957-1959 et « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 18-n° 24, 1960-1966. すべてヴィシー市立図書館所蔵）および各々の手紙のコメントを付した書簡集 Roger Mathé (éd.), *Cent dix-neuf lettres d'Émile Guillaumin (dont 73 inédites) 1894-1951 autour du mouvement littéraire bourbonnais*, Paris, Klincksieck, 1969 が参考にな

Il est vrai que la plupart de ces ducs spirituels n'ont pas habité le Duché, mais ni Louis I ^{er} , ni Jean II ²⁶⁰ , ni Charles II ²⁶¹ n'ont résidé dans leur État...	こうした精神上的の君主たちの大部分が公国に住んでいなかったことは事実ですが、〔ブルボン公〕ルイー一世も、〔ブルボン公〕ジャン二世も、〔ブルボン公〕シャルル二世だって、自分の国に住んでいなかったのですから……。
Oh, nous avons un grand et glorieux passé, comme la Catalogne ou l'Irlande, et autant de droits qu'elles à l'indépendance...	ああ、私たちには、カタロニアやアイルランドのような偉大で輝かしい過去がありました。それらの国と同じだけ独立する権利も持っていたのです……。
Alors, comme je ne connaissais personne dans le Duché, je fondai et je fus, à moi tout seul, le Parti autonomiste.	それで、私はこの公国の人を誰も知らなかったのので、私は自治主義者党を設立し、ただ一人でその党を代表したのです。
J'eus même mon prétendant, Bourbon authentique, contraint par ordonnance royale à porter sur ses armoiries le signe de la bâtardise, mais dont la légitimité est patente.	私には私の公位権利主張者さえいました。本物のブルボン公で、王の勅令によって、大紋章の上に正当な子供ではないと示さなければならぬけれど、王位の正当継承権が明らかな人が。
Nous, parti autonomiste	私たち、自治主義者党は
[Le Poète :] — toi, parti autonomiste	< 詩人 > きみだけだよ、自治主義者党は
[L'Éditeur :] — nous le rétablirions, nous rebâtirions le palais ducal, nous fonderions une université, un conservatoire de musique et de chant, un grand théâtre, un Opéra	< 編集者 > もし私たちだったら、自治主義者党を立て直し、公の宮殿を再建し、大学、音楽と声楽の芸術学校、大劇場、オペラハウスを創設できるでしょう
[Le Poète :] — le corps de ballet serait charmant : ces belles filles blanches avec leurs douces joues roses sous les cheveux les plus noirs et les plus fins de France	< 詩人 > 〔オペラハウスができれば〕バレエ団は魅力的だろうな。フランスで最も黒くて極上の髪の下はバラ色の優しい頬の色白の美しい少女たち

る。またギョーマンの業績は、Musée Émile Guillaumin の下記のウェブサイト詳しい (2014年5月21日閲覧)。

<http://musee-emile-guillaumin.planet-allier.com/default.htm>

²⁶⁰ (1426-1488)

²⁶¹ 幼少期より聖職者の道を歩み、リヨン大司教および枢機卿となる。公位に就いた年に死去した (1434-1488)。

[L'Éditeur :] — vous n'avez rien vu encore ; attendez d'être dans la région de Tronçais et de Saint-Amand.	<編集者>みなさんはまだ何もご覧になっていませんよ。トロンセとサン=タマン地方に入るのをお待ちください。
Nous ferions enfin, de cette ville une résidence où un Goethe, un Wagner pourraient vivre dans le climat d'une cour d'esprits choisis, et faire parler de nous dans le monde et faire venir le monde ici.	私たちはついに、この町を居住地にすることでしょう。そこでは、例えばゲーテのような人、ワグナーのような人が、優れた人たちからなる宮廷のような雰囲気の中で暮らせるでしょうし、世界中で我々のことを話題にさせたり、世界の人々をここへ来させたりすることもできるでしょう。
Ce ne serait plus la province, une province ; ce serait le Duché, mon pays, où je rentrerais.	それはもはや首都に対する地方でも、国の一部としての地方でもなく、公国でしょう。私が帰るべき私の国。
[Le Bibliophile :] — Et en récompense de vos efforts pour la Cause, vous voici Imprimeur ducal, baron de Breuilly et commandeur de l'ordre de l'Écu d'Or.	<愛書家>そして、その大義に対するあなたの努力へのご褒美として、あなたが公の印刷屋、ブルイイのお偉方、金の盾騎士団の騎士分団長になる、と。
[L'Éditeur :] — Naturellement. Oui, c'était un jeu, un roman rêvé pour tuer le temps, une transfiguration pour me rendre supportables les mois vécus dans cette solitude ²⁶² .	<編集者>もちろんです。ええ、それは遊び、暇つぶしのための夢物語、あの孤独の中で私が現実の月日に耐えるための変容でした。
[Le Bibliophile :] — Bien entendu, vous n'avez jamais passé de la rêverie aux actes ?	<愛書家>よくわかりました。空想から行動には移さなかったのですか？
[L'Éditeur :] — J'ai vraiment songé à m'installer ici, à transporter ici ma maison d'édition ²⁶³ .	<編集者>私はここに身を落ち着きたい、ここに自分の出版社を移転させたいと本当に考えていました。

²⁶² 「編集者」の発言。Cf. Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, p. 33.

²⁶³ 『旧きブルボネ』の1934年版の前書きには、「ラルボーが『アレン』で述べた、ムーランをブルボネ地方の出版の中心地とする願いは、1927年10月19日の愛書家たちの集まりでも表明された。その願いに対する返答の一つが『旧きブルボネ』の再版である」と記されている。Cf. « M. Valery Larbaud, dans son *Allen*, exprimait le désir que Moulins devienne un centre bourbonnais d'éditions ; l'idée fut reprise par M. Buriot-Darsiles qui l'exposa, le 19 octobre 1927, devant une assemblée de bibliophiles (1). Cette réimpression de *l'Ancien Bourbonnais* est une réponse au vœu exprimé par notre éminent compatriote et par les régionalistes de notre province. Nous souhaitons à notre tour que cet

[Le Poète :] — Ça, par exemple !	< 詩人 > なんてこったい !
Vite, à la Débredinoire !	急げ、脱 ^{デブルディノワール} 狂気の石棺へ !
[L'Éditeur :] — C'était la meilleure façon que j'avais de servir la Cause.	< 編集者 > それが大義の実現に尽くすために私が取りえた最善の方法だったのですよ。
Voyez-vous tous les bibliothécaires du monde obligés d'inscrire sur leurs fiches le nom de ma capitale et apprenant ainsi à la respecter, se disant : « Ça doit être un centre intellectuel important », et l'imaginant un peu comme Bari ²⁶⁴ ou Iéna ²⁶⁵ ?	世界中の図書館員たちが私の首都の名前をカードに記入しなければならなくなり、そうやって私の首都に敬意を払うことを覚えて、「これは重要な知的中心地にちがいない」と思い、パリやイエナみたいだなと、ちょっと想像する様子わかりますか？
[Le Poète :] — Il ne doute de rien.	< 詩人 > 彼は怖いもの知らずだな。
[L'Éditeur :] — La bibliographie française est d'une telle monotonie à l'article <i>lieu de publication</i> !	< 編集者 > フランスの書誌は出版地の項目について、あまりにも単調なのですよ !
J'aurais voulu introduire un peu de variété, de fantaisie.	私はちょっとした多様性や独創性を取り入れたかったです。
Une fois même pour une plaquette à tirage restreint, d'un vrai jeune, j'ai fait imprimer sur la couverture le nom d'une des villes de mon Duché ²⁶⁶ .	一度だけ、あるとても若い人の限定版の小冊子に、私の公国の町の名前の一つを表紙に印刷させたことがありますね。

essai ne soit pas sans lendemain, et suscite des imitateurs. (1) : Voir le rapport présenté par M. Buriot-Darsiles, *Pour une firme d'éditions bourbonnaises*, (Crépin-Leblond, 1928). », « Avant-Propos », in Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 1, 1934, p. VI^e.

²⁶⁴ イタリア南東部、アドリア海に臨む港湾都市。

²⁶⁵ ドイツのチューリンゲン州の都市。人口 10 万。ワイマールから列車で 15 分ほどの距離にある。フリードリヒ・シラー大学イエナ（通称イエナ大学）を擁する歴史の古い大学町。

²⁶⁶ このエピソードからは、ラルボーが 1911 年にレオン=ポール・ファルグに内密におこなったとされる、ファルグの詩集 *Tancrede* (『タンクレード』) 出版の経緯が想起される。この私家版の詩集は、ファルグが 1895 年にドイツの雑誌 *Pan* に発表した同名の詩篇を、ラルボーが費用を負担して 200 部のみ印刷された。Cf. Théophile Alajouanine, « Un complot littéraire Valéry Larbaud et la publication de *TANCREDE* », in *CVL*, n° 4, 1969, pp. 23-29. この論考は、ほぼ同じ内容が、ラルボーとファルグの書簡集の補遺に収録されている。Voir « Appendice IV, Un « complot littéraire » de Valéry Larbaud : la publication de *Tancrede* de Léon-Paul Fargue », in *Correspondance, 1910-1946 : Léon-Paul Fargue, Valéry Larbaud*, op. cit., pp. 267-271. 詩集の表紙にはファルグの名前、表題、出版年の他に「パ

Je pensais que cela plairait à l'auteur, poète d'extrême avant-garde, Plusultraïste ²⁶⁷ , décidé à tout oser, à tout casser.	私はそれが極度の前衛詩人、超前衛派で、何でも思い切ってやってみよう、すべてを壊そうと決めた作者を喜ばせるだろうと考えていたのです。
Eh bien, il a protesté : « Pensez-vous que je veuille passer pour un amateur provincial ! »	ところが、彼は異議を唱えたのです。「僕が一地方のアマチュアにみなされたいとでもお思いですか！」ってね。
Et il a fallu tirer de nouvelles couvertures avec « Paris » en gros caractères.	それで、「パリ」と大きな活字で書いた新しい表紙を印刷しなければならなかったのです。
Ça m'a découragé...	それにはがっかりしましたよ……。
Oui, ce n'est qu'un jeu de l'imagination pour les jours de pluie à la campagne, un jeu à base de lectures historiques et de rêveries politiques sur l'avenir de l'Europe : la voir à la fois unie et consciente de sa vie sur tous les points de son étendue.	そう、それは田舎で雨の続く日々のための空想のお遊び、歴史に関する読書とヨーロッパの将来についての政治的夢想にもとづいた遊びでしかなかったのです。それは、ヨーロッパが統一されると同時に自らの生き方を自覚したさまを、

リ」とだけ印刷されており、二番目の本扉に « Achevé d'imprimer / le vingt Février mil neuf cent onze / Par A. RAYMOND / à SAINT-POURÇAN-SUR-SIOULE (Allier) » と印字されている。ヴィシー市立図書館所蔵 (Cote : C 65)。ラルボーはこの「企て」がファルグに内緒であるとアンドレ・ジッドとマルセル・レイに書簡で明かしていた。Cf. la lettre de Valery Larbaud à André Gide du 13 février 1911, lettre 39, in *Correspondance André Gide et Valery Larbaud, 1905-1938*, édition établie, annotée et présentée par Françoise Lioure, introduction de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, *Cahiers André Gide*, n° 14, 1989, p. 68 et p. 244, note 3 ; la lettre de Valery Larbaud à Marcel Ray du 23 janvier 1911, lettre 146, in *Correspondance Valery Larbaud-Marcel Ray 1899-1937*, t. II, 1910-1920, *op. cit.*, pp. 82-85 et p. 283, note 10. しかし、1911年1月7日付のファルグへの書簡において、ラルボーがファルグに詩集の表紙の選定やサン=プルサン=シュル=シールの印刷所について言及していることから、出版までの行程がすべて秘密裡に行われていたのではなかったようである。Cf. la lettre de Valery Larbaud à Léon-Paul Fargue du 7 janvier 1911, lettre 16, *ibid.*, p. 45. また後のファルグからラルボー宛ての書簡からは、ファルグからラルボーへの謝意が読み取れる。Cf. les lettres de Léon-Paul Fargue à Valery Larbaud des 9 et 23 mars 1911, lettres 36-37, *ibid.*, p. 57. だが二人は1924年の季刊誌『コメルス』の創刊の頃に仲違いし、以降直接会話することはなく、終生直接の和解には至らなかった。

²⁶⁷ 下記の『俗語辞典』によれば、「(nec) plus ultra」(「極み」)から作った新語である。Cf. « Néologisme. Dérivé amusé de (nec) plus ultra. Avant-gardiste placé sur les positions les plus avancées. », Maurice Rheims, *Dictionnaire des mots sauvages*, Paris, Larousse, 1969, p. 450, s.v. *plusultraïste*.

	その広大さのあらゆる点において見てとることでした。
Un jeu ; mais qui m'a rendu intéressant et aimable ce pays où je suis né, et grâce auquel j'ai pu aussi, en la compagnie d'amis indulgents comme vous me rendre intéressant et vous distraire : citoyen d'un pays opprimé, le mystérieux Duché ma patrie, la grande aventure de Charles III et son interprétation moderne...	単なるお遊びですよ。でもそれは私に私が生まれたこの国を、おもしろくて心地よいものにしてくれました。みなさんのような寛大な友人たちと一緒に、その遊びのおかげで私自身をあなた方にとって面白い存在にして、あなた方を楽しませることもできました。抑圧された地方の市民、私の祖国である神秘的な公国、シャルル三世の大冒険と彼の近代的な解釈……。
Mais, en réalité, il m'arrive de me demander si tout n'est pas mieux ainsi : ce beau silence ; ce bon sommeil ; cette vie tranquille, éclairée et réchauffée de loin par la lumière d'un Paris prestigieux, officiel, mal connu, et séparée de l'Europe par une sorte d'enchantement, de mur invisible.	でも、実を言うと、すべてが今の状態でよいのではないかと思うことがあります。この快い静けさが。快適な眠りが。威信に満ち、格式があり、未知なるパリからの光によって遠くから照らされ、温められた静かな生活、魔法や見えない壁のようなものでヨーロッパから切り離されたこの生活がね。
Oh oui, c'est très bien ainsi ; il ne faut pas y toucher.	そう、とても素晴らしいものですよ。そこを変えてはならないのです。
Un lieu de repos, de « retirance » ²⁶⁸ , qu'il faut nous ménager.	ここは私たちが確保しておくべき安らぎの地、「 <small>ルテイランス</small> 隠遁生活」の地なのです。
Mais quand je songe à nos frères (et confrères) d'ici, à nos pareils, à ceux qui aiment ce que nous aimons, qui recherchent ce que nous désirons, — à tant de fines et spirituelles lectrices provinciales des <i>Provinciales</i> de Jean Giraudoux ²⁶⁹ , — alors	でも私がここにいる私の兄弟（と同業者たち）、仲間たち、私たちが愛するものを愛してくれる人たち、私たちが望むものごとを追いかけてくれる人たち、——ジャン・ジロドゥーの『田舎の女たち』の多くの繊細で知的な地方在住の女

²⁶⁸ 「隠遁所」や「隠遁生活」を表すブルボネ地方の古い言葉。本「別冊」、「著者解題」第19章「隠遁生活」の項（146-147頁）を参照されたい。

²⁶⁹ フランス、リムーザン地方出身の小説家・外交官、ジャン・ジロドゥー（1882-1944）の最初の作品（1909）。ジロドゥーは学生時代、セレイのシャルル＝ルイ・フィリップの家の近くに住んでいた。シャルル＝ルイ・フィリップ『小さな町で』、山田稔訳、み

je souhaite un réveil, une chaleur et une lumière plus vives, la renaissance de l'initiative, la fin de la saison d'ennui, la transformation de la ville de province en résidence.	性読者たち——のことを考える時、私は目覚め、もっと激しい熱気や光、自主性の再興、退屈な季節の終わり、地方都市が居住地に変わることを願うのです。
[— :] — L'application de ce projet de Colbert ²⁷⁰ ?	<—> コルベールのあの計画を実施するのですか？
[L'Éditeur :] — Pas suffisant ; il faudrait une sortie de tutelle ²⁷¹ , un statut d'État confédéré.	<編集者> それでは不十分です。保護状態からの脱出と、連合国という地位が必要でしょうね。
Qui sait si, malgré toutes les apparences et tous les discours, le système national, qui semblait logique, et le seul raisonnable et naturel, aux gens du XIX ^e siècle, n'a pas fait son temps ?	19世紀の人々にとって、論理的で、唯一合理的かつ自然なものであるかに見えていた国家体制が、あらゆる外面と講釈に反し、いまだ時代遅れになっていないかどうか誰に分かるのでしょうか？
À voir ce qui s'est passé dans ces douze dernières années ²⁷² , ce système si vanté, devenu un dogme, a tout l'air d'une mauvaise affaire.	ここ12年間に起こったことを見ると、大変称讃されたこのシステムは、一つの教義になりましたが、実に厄介な問題をはらんでいるように思われるのです。
D'une hérésie.	一つの邪説のように。
D'un idéal en retard sur le développement de la vie continentale qu'il entrave et menace.	ヨーロッパ大陸の活動の発展に遅れをとり、その発展を妨げおびやかす一つの理想のように。

すず書房、2003年、254頁の「解説」および「Philippe et Giraudoux se connaissent depuis 1895 (le père de Jean était percepteur à Cérilly). », André Gide, *Correspondance avec Charles-Louis Philippe et sa famille 1898-1936*, édition établie, présentée et annotée par Martine Sagaert, Centre d'Études Gidiennes, Université Lumière (Lyon II), 1995, p. 125, note 4 de la lettre 29 を参照した。

²⁷⁰ Jean-Baptiste Colbert (ジャン=バプティスト・コルベール、1619-1683)、17世紀にルイ14世の下で財務総監を務めて重商主義政策を実施し、絶対王政の経済的基盤を固めた。

²⁷¹ ラルボーは「保護状態からの脱出」について「著者解題」第14章「議論された命題」でも触れている。本「別冊」135-136頁を参照されたい。

²⁷² 第一次世界大戦開戦(1914)以降の12年間を指すものと思われる。

Un état antérieur à l'an 800 ²⁷³ ; et bientôt, sinon déjà, barbare.	西暦 800 年以前の状態。間もなく訪れるであろう——すでに訪れているのかも知れませんが——野蛮な状態。
Le remède serait peut-être	その治療法は、ひょっとすると
[Le Bibliophile :] — je vous entends ; et je vois un grand nombre de petits États faibles, mais très bien tenus	<愛書家>あなたがおっしゃることはわかりますよ。私は数多くの弱小な、でもとても整備された国家を見てきましたからね
[— :] — très élégants	<—>とても洗練された〔国家〕
[Le Bibliophile :] — je suis à votre disposition pour l'organisation civile	<愛書家>その市民体制のためなら、何なりと致しましょう
[L'Auteur :] — et moi pour inventer les uniformes ²⁷⁴	<作者>じゃあ私は軍服を考えますよ
[Le Poète :] — et notre ami Gaëtan de Putouarey ²⁷⁵ dessinera les timbres-poste !	<詩人>そして我らが友、ガエタン・ド・ピウトゥアレイが切手をデザインするだろう！
[L'Éditeur :] — réunis autour d'un pouvoir unique, indiscutable, abstrait, fonctionnant comme une machine, essentiellement service et accessoirement force, mais pour assurer le service, <i>ut subditas illi faciat omnes barbarae nationes</i> ²⁷⁶ .	<編集者>ただ一つの、異議を生まない、観念的な、機械のように機能する権力、すなわち本質的には奉仕のために、付随的には軍事のために機能する権力の周りに統合した国家。しかしその奉仕が遂行されるために、すべての蛮族を服従せしめんことを。

²⁷³ 800 年にシャルルマーニュ(カール大帝)がローマ教皇より皇帝号を与えられてローマ帝国の継承者となり、政治の安定や文化の成立によって西ヨーロッパ世界の礎ができた。

²⁷⁴ 鉛の兵隊で遊ぶラルボーの軍服に対する関心については、例えば « Questions militaires », in *Les Cahiers d'aujourd'hui*, n° 6, août 1913, pp. 315-318 を参照。現在同じタイトルのまま、内容を大幅に追加したものが *Pléiade*, pp. 1117-1124 に収録されている。プレイヤー版に注釈はないが、*Les Cahiers d'aujourd'hui*, janvier 1921 に二度目の掲載をしていることから、ここで改稿した可能性が考えられる。なお掲載ページは不詳である。Cf. *Valery Larbaud, Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, t. 2, « Bibliographie », *op. cit.*, p. 93 ; Marcel Troulay, *Valery Larbaud, essai de bibliographie chronologique des études en toutes langues*, I, 1897-1935, Paris-Caen, Lettres modernes Minard, 1998 (sans pagination).

²⁷⁵ 『A. O. パルナブース全集』の登場人物で、切手などを収集する趣味人。

²⁷⁶ この祈りの言葉については、本「別冊」127 頁の注 362、注 363 を参照されたい。

Et que ce soit encore une fois l'équipe parlant français qui ait le plus contribué à cette amélioration.	そして、この改善に最も貢献したのがフランス語話者のチームであらんことを。
[L'Auteur :] — <i>Olives of endless age</i> ! ²⁷⁷ et les frères réunis librement, sans qu'aucune jalousie intervienne, et partout le mot « nation » effacé, et Genève et Liège ²⁷⁸ couronnées s'asseyant sur leurs trônes de pierre, dans l'assemblée des capitales de langue française, place de la Concorde.	<作者>永遠なるオリーブ！そして、思い思いに、いかなる嫉妬の介入もなく兄弟たちが集まり、至る所で「国」という言葉が消され、王冠を戴いたジュネーヴとリエージュがそれぞれ石の玉座に腰を下ろすでしょう。コンコルド広場での、フランス語圏の諸々の首都の集会で。
[Le Bibliophile :] — Pour devenir unis et passer sans heurts du système national au système impérial, il faudrait que les États aient déjà repris conscience d'eux-mêmes.	<愛書家>統一をはかり、国家体制から帝国体制へ軋轢なく移行するためには、国家がとにかく自分自身を再認識していなければならないでしょう。
Bien, si dans chacun d'eux quelques individus atteints de bredinerie songent sérieusement à rétablir le duc ou le comte, ou la république ou le prince : mais qui les suivra ?	実際、もしそれぞれの国家において、 ^{ブルディヌリ} 狂気にかかっている何人かの人が公や伯爵、共和制や君主の復活を真剣に考えたとしたら。でも誰が彼らに従うでしょうか？
[L'Éditeur :] — Ceux qui n'auront pas oublié le nom de leur État ; ceux qui auront gardé mémoire de leurs annales, de leurs souverains, de leurs alliances, de leurs devises.	<編集者>自分たちの国の名前を忘れなかった人たち、年代記や彼らの君主たち、同盟や標語の記憶を保っていた人たちです。
[Le Poète :] — So few...	<詩人>とても少ない……。
[L'Auteur :] — <i>We few, we happy few we band of brothers</i> ²⁷⁹ .	<作者>少数だが、幸せな少数よ、我々は兄弟の絆で結ばれている。

²⁷⁷ シェイクスピアのソネット 107 番からの引用。オリーブは平和の象徴を意味する。『ソネット集』、高松雄一訳、岩波文庫、岩波書店、1986年、258頁、訳注(2)を参照した。またラルボーは『ソネット集』の仏語訳に際して序文を寄せている。Cf. Shakespeare, *Les Sonnets*, traduction d'Émile Le Brun, introduction de Valery Larbaud, texte anglais et français (suivi de notes et variantes), Paris, J. Schiffrin, 1927, Collection classique des Éditions de la Pléiade, t. 2, pp. I-XXVIII. この論考は現在同じタイトルのまま、Valery Larbaud, *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées*, op. cit., pp. 617-641 に収録されている。

²⁷⁸ ベルギー東部の町。

²⁷⁹ シェイクスピア『ヘンリー五世』からの引用。

Shakespeare, <i>Henri V</i> , la pièce où paraît Bourbon.	シェイクスピアの『ヘンリー五世』、ブルボン公が出てくる戯曲ですね。
[L'Éditeur :] — En attendant, c'est le système national qui nous fait ces loisirs	<編集者>さしあたり、私たちにこんな気晴らしをさせてくれるのは、その国家体制ですね
[— :] — ces loisirs qui nous permettent de travailler	<—> 私たちに働くことを許してくれる、こんな気晴らし
[L'Éditeur :] — et de rêver à ce qui le remplacera <i>ad nostram perpetuam pacem</i> ²⁸⁰ .	<編集者>それから私たちの永遠の平和のために国家体制を刷新するものに思いを馳せることを〔可能にしてくれる〕。
[L'Amateur :] — C'est la vieille maison construite entre 1789 ²⁸¹ et 1792 ²⁸² , incommode, mais elle nous abrite, et il n'y en a pas d'autre.	<アマチュア>これは 1789 年から 1792 年の間に建てられた古い館で、窮屈だけど、僕たちを入れてくれるね。それにここには他のものがないし。
[L'Éditeur :] — Il y en a vingt autres. Le choix.	<編集者>他にも 20 軒ありますよ。選択の余地は。
Mais la plupart sont aussi vieilles, avec les mêmes inconvénients, et les plus neuves ont été construites sur le même plan	でも大抵同じように古くて、同じように不便で、最新のものだって同じ図面に従って建てられています。
[— :] — et sur le même sol instable.	<—> しかも同じく不安定な土地の上に。
[L'Éditeur :] — Après-demain, à la limite du Pays d'Allen et du Pays d'Oursine — le Berry ²⁸³ — nous serons au cœur de notre vieille demeure et nous verrons un piédestal sans autre statue possible qu'une hampe avec un pauvre morceau d'étamine flétrie	<編集者>明後日、アレンの国とウルシーヌの国——つまりベリー地方ですが——の境目で私たちは古い屋敷の中心にいますでしょう。そして私たちは、色あせた薄い木綿の貧弱な切れ端のついた旗竿

²⁸⁰ ラルボーは「著者解題」第 9 章「名前を挙げずにされた引用」で、「編集者」がこの発言をしたと述べている。本「別冊」127 頁の注 362 を参照されたい。

²⁸¹ フランス革命が始まった年。

²⁸² この年、フランス王ルイ 16 世が拘束された。

²⁸³ フランス革命以前の州の一つ。ブルジュを州都とした。サントル地域圏（シェール県、アンドル県、ロワレ県の一部、アンドル＝エ＝ロワール県の一部）、リムーザン地域圏（クルーズ県の一部）。なおラルボーは「著者解題」第 5 章「『アレン』の典拠」において、「ウルシーヌ」の国について説明している。本「別冊」118 頁の注 332 を参照されたい。

	のほかに置ける彫像のない台座を見るでしょう
[Le Bibliophile :] — emblème d'un ancien jeu de l'esprit, à base de lectures historiques (Plutarque ²⁸⁴ et Tacite ²⁸⁵) et de rêveries politiques sur l'avenir	<愛書家> (プルタルコスとタキトゥスといった) 歴史に関する読書と、将来の政治的夢想にもとづいた古い頭脳ゲームの象徴
[L'Éditeur :] — et derrière : la guillotine ²⁸⁶ ruisselante du sang de nos aïeux, les fils de Montesquieu ²⁸⁷ , de Bayle ²⁸⁸ et de Voltaire ²⁸⁹ ; et tout autour : la Revue Nocturne ²⁹⁰ des effectifs de nos guerres nationales.	<編集者>その後ろにあるのは、私たちの祖先の血をしたたらせたギロチンであり、モンテスキューや、ベール、ヴォルテールの息子たちです。そして周りには、我らが国家の戦争に参じた兵員たちの夜の閲兵式が。
[Le Bibliophile :] — Vous le saluerez, autonomiste ?	<愛書家>あなたはあの旗に敬礼するおつもりですか、自治論者さん？
[L'Éditeur :] — Qui donc étant d'Europe et sachant notre histoire, ne le saluerait pas ?	<編集者>まさかヨーロッパ生まれで私たちの歴史を知っている人で、旗に敬礼しない人なんていないのでは？
[Le Bibliophile :] — Quelle réponse de casuiste !	<愛書家>理屈屋の何という答えだろう！
[Le Poète :] — Mieux : enlevons celui qui est décoloré, et remplaçons-le par un neuf, en belle soie bleu, blanc, rouge, avec franges d'or si possible, que nous allons acheter tout de suite.	<詩人>それより、色褪せたものを取り外して、新しいものに取り替えよう。綺麗な青、白、赤の絹に。できれば金色の縁飾りをつけて。それをすぐに買いに行こう。

²⁸⁴ 古代ローマ帝政期のギリシャ系歴史家、伝記作家（50頃-125頃）。

²⁸⁵ 古代ローマの歴史家（55頃-120頃）。

²⁸⁶ フランス革命における暴走の象徴。

²⁸⁷ Charles Louis de Montesquieu（シャルル＝ルイ・ド・モンテスキュー、1689-1755）、フランスの啓蒙思想家。

²⁸⁸ Pierre Bayle（ピエール・ベール、1647-1706）、哲学者、プロテスタントの思想家。主著は *Dictionnaire historique et critique*（『歴史批評辞典』、1697）。18世紀の啓蒙思想の先駆的役割を果たす。

²⁸⁹ フランスの小説家、啓蒙思想家（1694-1778）。

²⁹⁰ フランスの画家 Auguste Raffet（オーギュスト・ラフェ、1804-1860）には、Napoléon Bonaparte（ナポレオン一世、1769-1821）の最後の演説をモチーフにした、1837年制作の同じタイトルの作品がある。<http://www.edmond-rostand.com/peinture.html>（2013年6月13日閲覧）

Et après-demain, la cérémonie aux sons de l'orchestre d'avertisseurs que nous avons à bord : trompes, klaxons, crécelles ²⁹¹ perfectionnées.	そして明後日は、車のクラクション・オーケストラに合わせて式典だね。申し分ないラッパ、警笛、改良したラチェットも積んであるよ。
[L'Amateur :] — Bonne idée ; de quoi te consoler de ta mésaventure avec ces lis républicains qui ont refusé de pousser dans cet espace entre des pierres au bout de l'île sacrée ²⁹² .	<アマチュア>いい案だな。聖なる島〔シテ島〕の突先のあの空き地で石の間にせっかく植えたのに、生えることを拒否した共和主義の百合をめぐるきみの災難の慰めになるだろうね。
[— :] — Mais les gens du voisinage ?	<—>でも近隣の人たちは？
[Le Poète :] — Nous sommes envoyés — non, « délégués » — par le ministre des Beaux-Arts.	<詩人>僕たちは送り込まれた——いや、「派遣された」んだ——美術大臣にね。
Nous pourrions même mobiliser les pompiers, inviter le maire et offrir aux assistants un vin d'honneur	僕たちは消防士を動員し、市長を招き、列席者たちに祝い酒をふるまうことさえできるだろう
[L'Auteur :] — comme dans les <i>Copains</i> de Jules Romains ²⁹³ , avec lesquels nous	<作者>ジュール・ロマンの『仲間たち』にあるように、彼らと一緒に私たちは
[Le Poète :] — cette manie qu'il a de trouver des sources !	<詩人>出典を見つけたがる、彼のこの奇癖！
[L'Auteur :] — C'est héréditaire chez moi ²⁹⁴ .	<作者>それは我が家では先祖代々のものですよ。
[Le Poète :] — Oh oui : Rassemblement, et : Au drapeau !	<詩人>ああ、そうだね。集合、そして、旗に敬礼！
[Le Bibliophile :] — Mais aussi : Espérance, et : Allen !	<愛書家>それに、希望、そしてアレン！
[L'Éditeur :] — Criez Allen, criez Espérance.	<編集者>アレンと叫び、希望と叫んでください。

²⁹¹ 打楽器奏者が演奏する木製の楽器で、mardi gras（謝肉祭の最終日）などに使用する。

²⁹² 「本編」第4章冒頭の「詩人」の発言を指している。Voir Allen, *Pléiade*, p. 736.

²⁹³ フランスの小説家・劇作家（1885-1972）の1913年の作品。

²⁹⁴ ラルボーの父親がヴィシーでミネラルウォーターの源泉（source）を見つけたことに基づいていると考えられる。下記の資料によれば、これは「編集者」の発言とされているが、発言の内容などから、「作家」の発言であると推測した。Cf. Théophile Alajouanine, *Valéry Larbaud sous divers visages*, op. cit., p. 22.

Charles III dans son tombeau romain vous écoutez.	シャルル三世がローマのお墓の中であなたの方の声を聞いています。
Et le ciel vous répond : Silence	すると空があなた方に答えますよ。静寂
[L'Auteur :] — et façades roses et noires ²⁹⁵ . »	<作者>そしてバラ色と黒の正面部分。」

²⁹⁵ 第7章冒頭の表現がこのように繰り返されているが、もう一度この章が繰り返されるかのような構成を目指しているのであろうか。

「著者解題」

第1章 序文の由来と役割

NOTES	「著者解題」
<p>I. Origine et fonction du Prologue</p>	<p>第1章 序文の由来と役割</p>
<p>— Le <i>Prologue au lecteur</i> ne figurait pas dans la première version d'<i>Allen</i>, publiée d'abord par la <i>Nouvelle Revue Française</i> dans ses numéros de février et de mars 1927²⁹⁶, et quelques mois plus tard en un volume illustré par Coubine²⁹⁷ (1^{re} édition, <i>Aux Aldes</i>, Paris 1927).</p>	<p>「読者への序文」は、当初『新フランス評論』から出版した1927年2月、3月号での『アレン』の初版、および数ヵ月後に出版したクービーヌによる挿絵入り版（初版、パリ、オ・ザルド社、1927年）には載っていなかった。</p>
<p>Préoccupé de faire entrer le lecteur brusquement, de plain-pied, au milieu de la conversation des Cinq Amis, l'auteur n'avait même pas songé à le prévenir par un mot d'explication — et pourtant, sur un des premiers brouillons des deux premières pages, le dialogue était précédé d'une indication de lieu (« Une chambre à Paris... », « dans une chambre, à Paris... ») qui fut bientôt biffée et ne reparut plus au cours de la composition de l'ouvrage, c'est-à-dire sur aucune des trois copies manuscrites complètes qui précédèrent la première copie à la machine.</p>	<p>読者を不意に、いきなり5人の友人たちの会話に引き入れることに気を取られていたので、作者は一言説明することで、前もって読者に知らせようとする考えていなかった——それでもやはり、冒頭の2頁に関する最初の下書きの一つでは、対話に先立ち、場所の指示（「パリのある一室……」、「パリの、ある一室で……」）がなされていたのだが、それはやがて削除され、作品の制作中に、すなわち最初のタイプ原稿に先立つ三つの手書きの完全原稿のどれにも、再び現れることはもうなかったのである。</p>

²⁹⁶ 『アレン』の初出は1927年、『新フランス評論』誌上においてである。Cf. « Allen », in *NRF*, n° 161, 1^{er} février 1927, pp. 137-154 ; n° 162, 1^{er} mars 1927, pp. 296-317. ラルボーは「著者解題」を、1929年2月20日に出版した同郷の版画家 Paul Devaux（ポール・ドゥヴォー、1894-1949）の版画を入れた版（限定650部）において、母への献辞と「読者への序文」とともに収録した。また、この時に含まれていた « Questions de virgules »（「読点の問題」）および « Double titre »（「二つのタイトル」）の二章を、同年6月10日のガリマール社による「普及版（決定版）」出版時に削除している。Cf. *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, *Chronique des lettres françaises*, Horizons de France, 1929 ; *Allen*, Paris, Gallimard, 1929.

²⁹⁷ 1927年3月27日に Othon Coubine（オートン・クービーヌ、1883-1969）の挿絵を入れた版を限定120部で出版した。Cf. *Allen*, illustré d'eaux-fortes originales par O. Coubine, Paris, *Aux Aldes*, 1927.

Le premier brouillon à l'encre débutait par un tiret ²⁹⁸ suivi de : « Et on voyait déjà... », et la première copie complète donnait : « — et on voyait déjà... » la majuscule initiale ayant été remplacée par une minuscule.	ペンで書いた最初の下書きは「Et ^{すると} もう見えていた……」がダッシュ〔—〕に続いて始まり、最初の完全原稿は、大文字の頭文字が小文字に替えられて、「— e ^{すると} t もう見えていた……」となっていた。
Le début était trouvé.	書き出しは見出されていたのだ。
Il n'y aurait pas de Prologue.	「序文」はないだろう。
Cependant, au cours de la composition des chapitres (ou reprises du dialogue) VI et VII, je m'aperçus avec regret que les descriptions du « pays d'Allen » étaient trop succinctes, et qu'il n'y avait pas moyen de leur donner plus d'étendue.	しかしながら、第6章と第7章の執筆（あるいは対話の再編）をするうちに、惜しいことに「アレンの国」の描写があまりに簡潔で、しかもそれらの描写にさらなる広がりを与える方法がないことに気付いた。
De I à VI il ne pouvait en être question : il s'agit de la vie des provinces françaises en général et on traverse des régions éloignées, et assez différentes ²⁹⁹ ,	第1章から第6章までには、そのような広がりを与えるのは問題外であった。話題はフランスの地方の生活全般に関することで、ブルボネ地方から遠く離れた、

²⁹⁸ 対話によって構成される作品において、ダッシュは話者の交代を示す印である。すなわち『アレン』が登場人物たちの会話の途中から始まるのが、ダッシュの使用によって判断される。

²⁹⁹ 原注 « Voir le début de la *Visite [sic] aux paysans du Centre* de Daniel Halévy, et l'impression de dépaysement qu'il éprouve au cours de son voyage à pied de Moulins à Ygrande. » (「ダニエル・アレヴィの『サントル地方の農民視察記』の冒頭と、パリ生まれのアレヴィがムーランからイグランドへの徒歩での旅行の間に受けた居心地の悪い印象を参照のこと。」) ダニエル・アレヴィ (1872-1962) はフランスの歴史家・批評家で、Charles Péguy (シャルル・ペギー、1873-1914) が1900年に創刊した雑誌 *Cahiers de la quinzaine* (『半月手帖』) において活動していた時期がある。ムーラン、イグランドはともにブルボネ地方の地名。この原注は、Daniel Halévy, *Visites aux paysans du Centre*, Paris, Grasset, 1921 において旅の手順を述べた « Ingrediamur » (pp. 9-17) と、ブルボネ地方に入った時の人の気配のない様子を描写した19頁の « La grande solitude est une des marques du paysage français, l'une de ces beautés. Nulle part l'abandon : l'homme a tout surveillé. Mais il est peu visible, il est rare, sa présence n'encombre pas, et trouble rarement l'espace, le silence. Où sont les habitations ? Le bord de la route est désert ; c'est en appuyant le regard, et à quelque cents mètres, qu'on devine les métairies nichées en arrière des haies. L'air du soir devient humide et mouille un peu. Le jour tombe, les fumées montent. Que se passe-t-il, que dit-on à ces foyers ? Le Parisien qui avance se sent un étranger et s'étonne d'être là. » (「大いなるしじまはフランスの風景の特徴の一つであり、美しさの一つだ。打ち棄てられた場所はどこにも見当たらないが、それは人がすべてを監視したからだ。だが人が目に付くことは滅多になく、少数で、その存在が邪魔になることもなく、場所や静けさを乱すこともほとんどない。家々はどこにあるのだろう？ 沿

<p>du Bourbonnais : seul un rappel des mots « duché » et « pays d'Allen », seule une allusion à l'incendie du château de Moulins³⁰⁰, sont possibles.</p>	<p>相当異なる地方を通過しているからである。ただ、「公国」と「アレンの国」という単語を思い出させ、ムーラン城の火災に言及することだけが、そこでは可能な程度である。</p>
<p>Dans VI, qui se passe entre Bourges et Nevers, et où je n'ai presque rien dit du paysage, — escamotant même la description de La Charité, — que pouvais-je faire de plus que ce que j'ai fait ?</p>	<p>第6章はブルージュとヌヴェールの間で展開するが、そこで私は風景についてはほとんど何も言わなかった——シャリテ〔シャリテ=シュル=ロワール〕の描写すら避けながら——私には自分がしたこと以上に何ができただろうか？</p>
<p>On approche de ce qui est, au moins pour l'Éditeur, bourbonnais, le but, ou le « clou » du voyage : le chef-lieu de son département natal.</p>	<p>少なくとも、ブルボネ地方の人である「編集者」にとっては、旅の目的、あるいは「目玉」であるものに近づいている。すなわち彼が生まれた県の県庁所在地に。</p>
<p>Il en parle donc à ses amis, leur fait prévoir l'aspect et les couleurs de la campagne de son « duché » et trace brièvement un schéma du paysage d'Hérisson et de Saint-Pourçain-sur-Sioule.</p>	<p>それゆえ彼は友人たちにそのことを話し、彼らに彼の「公国」の田舎の様子や色彩を予見させ、またエリソンとサン=プルサン=シュル=シウールの風景の概要を手短に描写する。</p>
<p>Impossible d'allonger cette liste de villes bourbonnaises en cet endroit : ce serait trop anticiper sur le progrès décrit dans le dialogue ; ce serait aussi, de la part de l'Éditeur, abuser de la patience de ses auditeurs.</p>	<p>この箇所でブルボネ地方の町々の、このリストを伸ばすことは不可能だ。それは対話で描写される進行を先回りしすぎることになるだろう。それはまた、「編集者」としては、彼の聞き手たちの辛抱強さにつけ込むことになるだろう。</p>

道には人通りがなく、じっと見つめると、何百メートルか先の、生垣の後ろに隠れた小作地があることが察せられる。夜の空気が湿ってきて、少し雨が降ってきた。日が落ちて、煙が立ち上る。この家々では何が起きているのか、何を話しているのか？歩みを進めるパリジャンは、自分が一介のよそ者であると感じ、そこに居ることに違和感を覚えた。」)の部分であると思われる(下線強調は引用者)。この手記は、アレヴィがエミール・ギョーマンの*La Vie d'un simple* (『ある百姓の生涯』、1904年)を読み、ギョーマンが住むイグランドを同じ年に訪問したことを機に書かれたものである。なお、ラルボーによる『アレン』における『サントル地方の農民視察記』への言及について、次の論考を参照されたい。Cf. Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, *Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux* », in *FRACAS*, numéro 1, *op. cit.*, pp. 10-11, note 46.

³⁰⁰ ムーラン城は1755年に起きた火災によって著しく損傷した。

<p>Le mouvement du dialogue en aurait été ralenti et tout le chapitre VI alourdi.</p>	<p>対話の動きはそれによって速度を落としたであろうし、第6章全体が重苦しくなっただろう。</p>
<p>La forme dialoguée donne à l'écrivain le sentiment d'une liberté complète : à n'importe quel moment n'importe qui pourrait dire n'importe quoi.</p>	<p>対話形式は作家に完璧な自由という感覚を与える。いつでも、誰でもが、何でも言うことができるだろうという感覚を。</p>
<p>Sentiment trompeur, piège et tentation : le mouvement, la ligne, l'équilibre de l'ouvrage littéraire deviennent une loi, — qu'on peut appeler « loi du poème », — laquelle interdit certains détours, certaines surcharges.</p>	<p>それは人をあざむく感覚、罠と誘惑である。文学作品の動き、方向、均衡は、一つの掟——「詩の掟」と呼べるであろう——となり、それはある種の迂回やある種の過剰を禁じるからである。</p>
<p>Cette loi a contraint l'auteur à s'en tenir à un petit nombre de faits, de traits, de noms propres choisis avec soin et destinés, non pas à renseigner le lecteur, mais à toucher son imagination et sa curiosité, à éveiller chez lui un désir de connaître, par les livres et par le voyage, l'histoire et l'aspect du pays.</p>	<p>この掟ゆえに、慎重に選択された少数の事実、特徴、固有名詞だけにとどめておくことを著者は余儀なくされた。これらの事実、特徴、固有名詞は、読者に情報を与えることではなく、読者の想像力や好奇心をかきたてること、書物と旅によって、この地域の歴史と様相を知りたいという欲求を読者に引き起こすことを目的としている。</p>
<p>Ainsi donc, même dans le chapitre VII, qui se passe à Moulins, l'Éditeur a dû, non sans regret, rentrer tout ce qu'il aurait voulu dire des principales villes de son duché, en particulier de Bourbon-l'Archambaud, l'ancienne capitale ; et l'auteur a repoussé, non sans peine, la tentation de faire faire à ses personnages (et de faire avec eux) une excursion dont l'itinéraire aurait été : Souvigny, Montluçon, Chantelle, Gannat, Vichy, Varennes et retour à Moulins.</p>	<p>かくして、ムーランを舞台とする第7章においてさえ、「編集者」は、いくぶん後悔しつつも、彼の公国の主要な町々について述べたいことをすべて、特にかつての中心都市であるブルボン＝ラルシャンボーに関することを胸にしまわなければならなかった。そして著者は、やすやすとではないにせよ、彼の登場人物たちに、行程がスヴィニー、モンリュソン、シャンテル、ガナ、ヴィシー、ヴァレンヌそしてムーランへと戻るような小旅行をさせたい気持ち（そして彼らと一緒にいきたい気持ち）を退けた。</p>

Le chapitre VII pourrait commencer le lendemain de cette excursion, et la raconterait brièvement.	そうしたら第7章はこの小旅行の翌日に始められたかもしれず、また小旅行について手短かに語るものになっていただろう。
Mais la « loi du poème » leur a interdit de dépasser Saint-Menoux et Souvigny : ils étaient las des grandes routes, du vent et de la vitesse ; le calme et le silence de Moulins les invitaient à se reposer ; et il ne fallait pas que VII devînt un guide descriptif du Bourbonnais.	だが「詩の掟」は彼らがサン=ムヌーとスヴィニーを通り過ぎることを禁じた。彼らが幹線道路、風、スピードにうんざりしていたからだ。ムーランの静寂と沈黙が彼らに休むようにうながした。それで第7章はブルボネ地方の描写的なガイドブックになるわけにはいかなかったのだ。
Ils ont donc fait tout juste ce petit tour, entre le café à l’Hôtel de Paris ³⁰¹ et le thé chez Buck ³⁰² , et le lendemain, après déjeuner : « Silence — et façades roses et noires... » ³⁰³	それゆえ彼らは、オテル・ド・パリでのコーヒーとバックの店でのお茶との間に、ちょっとした周遊をただけで、翌日の昼食後に「静かに——それにバラ色と黒のファサードも……」という次第となったのだ。
Rien de plus, rien d’autre, n’était possible.	これ以上のものも、これ以外のものも、不可能だった。
Et pourtant, ce « pays d’Allen » tant annoncé dès le chapitre I par l’Éditeur, le lecteur, arrivé au point final, le connaissait-il suffisamment ?	それでも、第1章から「編集者」によって存分に知らされていたこの「アレンの国」を、読者は最終地点に到着した時、十分に知ることができているだろうか？
Au point de vue historique, oui, il en avait aperçu l’essentiel ; mais au point de vue géographique ?	歴史的見地からすれば、確かに、読者はその最重要の点は見取ることができただろう。だが地理的見地からはどうだろ

³⁰¹ ラルボーは友人で英文学者の Georges Jean-Aubry (ジョルジュ・ジャン=オーブリ、1882-1950) への 1923 年 1 月 3 日付の書簡において、ムーランでの宿泊先としてこのホテルを勧めている。Cf. Takeshi Matsumura, « Allen, Larbaud et Jean-Aubry : remarques littéraires et lexicographiques », in *FRACAS*, numéro 10, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d’ailleurs (Tokyo), le 12 août 2014, pp. 1-2. 同名のホテルがムーラン市パリ通り 21 番地に現存する。

³⁰² ムーランのカフェの名前である。ラルボーは 1919 年 8 月 23 日の日記に、開店したばかりのこのカフェを訪れ、感じのよい店だったと書いている。Cf. Valery Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 511.

³⁰³ 「本編」の最後の文。Voir Allen, *Pléiade*, p. 759.

	う？
<i>Allen</i> avait paru, en revue et en volume, sans prologue, lorsqu'un peintre d'origine bourbonnaise, Lucien Pénat ³⁰⁴ , me fit l'honneur de me demander une préface pour un album de gravures qu'il publia, sous le titre <i>le Bourbonnais</i> , en novembre 1927.	『アレン』が雑誌と単行本で、序文なしに出版された後、ブルボネ地方出身の画家、リュシアン・ペナが、ある版画集の序文執筆を私に依頼してきた。その本は1927年11月に『ブルボネ地方』というタイトルで出版されたものである。
J'écrivis cette préface d'après les gravures : vues de Moulins et de six autres anciennes cités bourbonnaises, précisément de celles dont je regrettais de n'avoir rien dit, ou de n'avoir pas assez dit, dans <i>Allen</i> .	私はこの序文をそれらの版画をもとに執筆した。すなわちムーランの景色と別の六つのブルボネ地方の古い町の風景で、それはまさに『アレン』において、私が何も言わず、あるいは十分に言わなかったことを残念に思っていた町々だ。
Ce fut au cours de ce travail que me vint l'idée d'accrocher, pour ainsi dire, ces vues aux murs d'un vestibule que le lecteur d' <i>Allen</i> traverserait avant d'entrer dans la chambre où les Cinq Amis sont en train de causer.	これらの風景画を『アレン』の読者が5人の友人たちが語り合っている部屋に入る前に通るであろう玄関に、いわば掛けようというアイディアが浮かんだのは、この作業の間でのことだった。
Je retranchai donc de ma préface l'exorde et ce qui concerne Moulins (dont assez de vues paraissent dans VII), conservant les paragraphes sur Souvigny, Bourbon-	それゆえ私は自分の序文から導入部分と（第7章にかなり風景が出てくる）ムーランに関する部分を削除し、スヴィニー、ブルボン=ラルシャンボー、エリソン、ヴィシー、シャンテルとモンリュソンに関

³⁰⁴ ラルボーは1927年11月にリュシアン・ペナ（1873-1955）の版画集 *Le Bourbonnais*（『ブルボネ地方』、1927）に序文を書いた。Cf. « Préface », in Lucien Pénat, *Le Bourbonnais : album de dix eaux-fortes*, préface de Valéry Larbaud, Paris, impr. E. Dollé, 1927. ヴィシー市立図書館所蔵（Cote : B 774）。版画は、「Tour Jacquemart, à Moulins」（「ジャックマール塔、ムーランにて」）、「Église de Souvigny」（「スヴィニーの教会」）、「Vieux toits à Moulins」（「ムーランの古い屋根」）、「Le vieux chapitre, à Hérisson」（「古い教会参事会堂、エリソンにて」）、「Château de Bourbon-l'Archambault」（「ブルボン=ラルシャンボー城」）、「Ruines du château de Hérisson」（「エリソン城址」）、「Château de Chantelle」（「シャンテル城」）、「Château de Montluçon」（「モンリュソン城」）、「Maison de Madame de Sévigné, à Vichy」（セヴィニエ夫人の屋敷、ヴィシーにて）、「Cloître de Souvigny」（「スヴィニーの修道院回廊」）の順に掲載されている。Cf. Nelly Chabrol Gagne, *De l'espace réel à l'espace imaginaire dans l'œuvre de Valéry Larbaud*, op. cit., p. 465, note 2. ここに取り上げられた6都市は、いずれもフランス革命前のブルボネ州とほぼ同じである現在のアリエ県に属する。

<p>l'Archambaud³⁰⁵, Hérisson, Vichy, Chantelle et Montluçon, qui devinrent les « sous-verre » accrochés aux murs du vestibule.</p>	<p>する段落を残し、それが玄関の壁に掛けた「ガラス板に挟んだ写真」になったのだ。</p>
<p>Je les retouchai légèrement et les disposai dans un ordre différent.</p>	<p>私はそれらに少々手を加えて、別の順序で並べた。</p>
<p>De cette façon le lecteur, avant d'aborder le chapitre I et bien avant d'arriver, avec les Cinq Amis, à Moulins, aura fait une rapide excursion au « pays d'Allen » ; les noms de Souvigny et d'Hérisson, prononcés par l'un des interlocuteurs, lui rappelleront des images précises ; et l'ouvrage, dans son souvenir, commencera et finira en Bourbonnais.</p>	<p>この方法によって読者は、第1章に入る前に、また5人の友人たちとムーランに到着するずっと以前に、「アレンの国」を駆け足で小旅行することになるだろう。発話者の一人から発せられるスヴィニーとエリソンという名前が、読者に鮮明なイメージを思い出させるだろう。そして、読者の記憶の中で、この作品はブルボネ地方に始まり、そして終わることになるだろう。</p>
<p>Dans la préface de l'album de Lucien Pénat, le paragraphe sur Chantelle est placé avant le paragraphe sur Montluçon (ville natale du peintre) qui termine la série.</p>	<p>リュシアン・ペナの版画集の序文において、シャンテルについての段落は、一連の並びを締めくくるモンリュソン（この画家の故郷）についての段落の前に置かれていた。</p>
<p>L'arrangement de ces « vues » dans le prologue d'<i>Allen</i> a cet avantage que, commençant par Souvigny, origine et point de départ de l'histoire bourbonnaise, la série se ferme sur Chantelle, où le dernier duc³⁰⁶ passa les dernières journées de son règne.</p>	<p>『アレン』の序文におけるこれらの「風景画」の並べ方には、ブルボネ地方の歴史の起源であり出発点であるスヴィニーに始まり、その一連の並びが、最後の君主が彼の治世の最期の日々を過ごしたシャンテルで閉じるという利点がある。</p>
<p>Ainsi, dès le prologue, les deux thèmes de l'indépendance (Souvigny) et de la confiscation du duché (Chantelle) sont introduits, et le dernier membre de phrase de « Chantelle » fait entendre le leitmotiv de</p>	<p>このように、序文の時点で、公国の独立（スヴィニー）と収奪（シャンテル）という二つのテーマが早くも導入され、また「シャンテル」の文の最終部分は、シャルル三世のライトモチーフを聞かせて</p>

³⁰⁵ リュシアン・ペナの『ブルボネ地方』にラルボーが寄せた序文では「**Bourbon-l'Archambault**」となっていることから、連結符「-」を付した書き方はラルボー独自のものと思われる。

³⁰⁶ ブルボン公シャルル三世のこと。

Charles III, qui domine, avec la devise « Allen », tout mon ouvrage.	いる。このライトモチーフこそ、「アレン」という標語とともに、私の作品全体を支配しているのである。
--	--

第2章 『アレン』の概要

II. Le sommaire d' <i>Allen</i>	第2章 『アレン』の概要
— La bande qui entoure les livres brochés vendus en librairie, est entrée, au cours de ces dix dernières années, dans l'histoire littéraire.	書店で売られている仮綴じ本をくるむ帯は、この十年の間に、文学史の中に入り込んだ。
Elle ne disait, au début, rien de plus que « vient de paraître » ; puis, comme sa présence signifiait par elle-même que le livre qu'elle défendait contre la curiosité des chalands venait en effet de paraître, on la chargea d'autres messages : « Prix Goncourt » ³⁰⁷ , « A obtenu six voix au prix Z ».	初めは、帯は「新刊」とだけ伝えていた。それから、帯によって顧客の好奇心から身を守られていた本は、帯の存在それ自体によって新刊であることを意味するようになったので、そこには他のいくつかのメッセージが加えられた。すなわち「ゴンクール賞」、「Z賞で6票を獲得した」と。
Un peu plus tard, on y vit le portrait et une courte notice bio-bibliographique de l'auteur, et bientôt après des inscriptions qui concernaient le contenu du livre, qui annonçaient ce qu'on y trouverait, et qui étaient un peu comme les sommaires en quatre ou huit ou dix vers qui ont été placés après coup en tête de plusieurs ouvrages poétiques ou dramatiques de l'antiquité (<i>Ille</i>	もう少し後になると、帯には著者の肖像や短い略歴と作品目録が見られるようになり、それから間もなく広告文が見られるようになった。つまり書籍の内容に関するもので、本の中で何を知ることができるかを知らせるものである。それは、いくつかの古代の詩や戯曲の冒頭の後から置かれた4行、8行、または10行の韻文による要約（私はかつての彼…、プラウトゥスの喜劇のあらすじ、な

³⁰⁷ 小説家 Edmond de Goncourt (エドモン・ド・ゴンクール、1822-1896) の遺産をもとに、1902年に発足した L'Académie Goncourt (アカデミー・ゴンクール) が主催する文学賞。1903年より、アカデミーの10人の文学者によって選考が行われる。公式サイト：<http://www.academie-goncourt.fr/?rubrique=1229171232> (2013年8月22日閲覧) ラルボーが1911年に出版した中編小説『フェルミナ・マルクス』は1913年度の候補作品となったものの受賞を逸した(受賞は Alphonse de Châteaubriant [アルフォンス・ド・シャトーブリアン、1877-1951] の *Monsieur des Lourdines* 『ムッシュー・デ・ルルディーヌ』)。またラルボーは1913年に出版した『A. O. バルナブース全集』でも候補になったが、この年の受賞は Marc Elder (マルク・エルデル、1884-1933) の *Le Peuple de la mer* (『海の人々』) である。

<p><i>ego qui quondam...</i>³⁰⁸, les <i>Argumenta</i> des comédies de Plaute³⁰⁹, etc.).</p>	<p>ど) にいささか似ていると言えよう。</p>
<p>L'usage s'est établi et généralisé ; à présent l'inscription sur la bande, presque toujours rédigée, ou du moins approuvée, par l'auteur, a quelquefois la valeur d'un sous-titre explicatif, presque inséparable du titre, et qui peut renseigner les critiques et les historiens sur la façon dont l'écrivain a vu et jugé son propre ouvrage.</p>	<p>この帯の使用は定着し、一般化した。現在著者によってほぼ常に書かれた、あるいは少なくとも著者から承認された帯の広告文は、時には説明的な副題のような価値を持っている。その場合、タイトルとほぼ不可分となり、批評家や歴史家たちに、作家がどのように自分の作品を見たり判断したのかを教えることができる。</p>
<p>Pour diverses raisons, je ne suis pas du tout partisan de ces bandes parlantes, mais lorsqu'il a été question de celle qui devra entourer les exemplaires de l'édition « courante » d'<i>Allen</i> (la 3^e, N.R.F., Paris) et qu'il a bien fallu trouver une inscription, j'ai composé l'argumentum suivant : « Un voyage, par la route, de Paris au centre de la France ; « Un dialogue sur la vie des provinces françaises ; « Un éloge du Bourbonnais. »</p>	<p>さまざまな理由から、私は断じてそのような雄弁な帯の支持者ではないが、『アレン』の「普及」版(第3版、N.R.F、パリ)をくるまなければならず、まさに広告文を考え出さなければならなくなった時、私は次の宣伝文句を書いた。すなわち「パリからフランス中部への陸路の旅」、「フランスの地方の生活に関する対話」、「ブルボネ地方の礼讃」である。</p>
<p>Ainsi, ce que j'avais masqué sous un titre ambigu, inexplicable pour qui ne connaît pas bien l'histoire bourbonnaise, il m'a fallu le découvrir sur cette bande indiscreète et</p>	<p>そのようなわけで、謎めいていて、ブルボネ地方の歴史をよく知らない方には説明がつかないタイトルの下に隠していたことを、私は無遠慮でどぎついこ</p>

³⁰⁸ 古代ローマの詩人 Virgile (ウェルギリウス、前 70-前 19) の、ローマの建国を謳った長編叙事詩 *Énéide* (『アエネーイス』) 第 1 巻第 1 行に書かれていた « Ille ego qui quondam gracili modulates auena » (« Moi qui jadis sur un frêle modulai mon chant » : 「かつて折れそうな葦の上で歌に節をつけた私」) の一部分(下線強調は引用者)。この詩句は後に « Arma viru mque cano, [...] » (« 戦と英雄を私は謳う [...] 」) に差し替わった。Cf. Virgile, *Énéide*, texte établi et traduit par Jacques Perret, t. 1, Paris, Belles lettres, 1981, pp. 6-7 ; Virgil, *Georgics, Eclogues, Aeneid I-VI*, with an English translation by H. Rushton Fairclough, Cambridge, Mass, Harvard University Press, 1986, pp. 240-241.

³⁰⁹ プラウトゥス(前 254 頃-前 184) 古代ローマの喜劇作者。

accrocheuse.	の帯で明らかにしなければならなかったのである。
Il est vrai, du reste, que l'obscurité, autrement dit l'attrait, du titre, subsiste en partie : « Mais alors pourquoi ce mot d'apparence germanique... ? »	もっとも、タイトルの不明瞭さ、言い換えれば魅力が部分的に残っていることは確かである。すなわち「ではなぜゲルマン語のようなこの言葉が……？」ということが。

第3章 タイトルの由来

III. Origine du titre	第3章 タイトルの由来
— Le titre avait été choisi bien des années avant la conception de l'ouvrage.	タイトルはこの作品の構想の何年も前に決まっていた。
« Si jamais j'écrivais une chose bourbonnaise, je l'intitulerais <i>Allen</i> . »	「いつか私がブルボネ地方の事柄を書くとしたら、私はそれに『アレン』というタイトルを付けるだろう」と。
Cette idée m'était venue en lisant ou en relisant l'histoire du règne de Louis II ³¹⁰ dans le livre d'Achille Allier.	この考えが浮かんできたのは、アシール・アリエの本でルイ二世の治世の歴史を読んだ時、あるいは再読した時である。
J'aurais pu songer à l'autre devise, plus connue, moins spéciale : « Espérance. » ³¹¹	私はもっと有名な、けれどもさほど特別ではない他の標語、すなわち「希望」を

³¹⁰ 『旧きブルボネ』では、「ルイ公はこの標語を英国から持ち帰った。すなわち、今日では « all » と表記する « Allen » とは、すべてを意味する英国の言葉なのである」と説明されている。Cf. « Le duc Louis avait rapporté cette devise d'Angleterre : Allen, qu'on écrit aujourd'hui *all*, est un mot anglais qui signifie TOUT. », Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, *op. cit.*, p. 136, note 2. (イタリック強調および « TOUT » の大文字による強調は原典) 『アレン』を掲載した『新フランス評論』の編集長 Jean Paulhan (ジャン・ポーラン、1884-1968) との書簡集によれば、ラルボーは 1928 年 12 月 7 日付の書簡の中で「19 世紀の伝統における本当の意味でただ一人といえるブルボネ地方の作家がアリエだ」と述べている。Cf. « Et je tiens beaucoup à ce livre [= *Allen*], que j'ai voulu (pendant, depuis, des années) faire comme une chose toute bourbonnaise, dans la tradition du seul écrivain vraiment bourbonnais du XIX^e siècle : Achille Allier, [...] », la lettre de Valery Larbaud à Jean Paulhan du 7 décembre 1928, lettre 86, in *Valery Larbaud, Jean Paulhan, Correspondance 1920-1957*, édition établie et annotée par Jean-Philippe Segonds, introduction de Marc Kopylov, préface de Michel Déon de l'Académie Française, Paris, Gallimard, 2010, pp. 115-116. (下線強調は引用者) アシール・アリエについては、本「別冊」第5章「『アレン』の典拠」(117-121頁)も参照されたい。

³¹¹ « trois vertus théologiques » (「キリスト教の三対神徳」)である foi (信仰)・espérance (希望)・charité (愛)の一つ。

	検討することもできたはずだ。
Par exemple « Ceinture d'Espérance » ferait un beau titre de livre bourbonnais.	例えば「希望の帯」なら、ブルボネ地方の書物の洒落たタイトルになるだろう。
Cependant, j'ai choisi <i>Allen</i> sans hésitation, à cause de son caractère à la fois énigmatique et précis, de la belle anecdote historique à laquelle il se rapporte, du discours chevaleresque de Louis II ³¹² et du son que le mot, prononcé à la française, rend ; et aussi parce que son aspect et son étymologie le rattachent à la vie européenne : <i>Allen</i> , cela « dit quelque chose » à un tiers des habitants de notre continent et des Amériques ; c'est un passeport pour l'Allemagne, une lettre d'introduction pour la Grande-Bretagne, les États-Unis et l'Australie.	しかしながら、私は躊躇することなく『アレン』を選んだ。その謎めいていながらも明快な特徴、それが関わる美しい歴史上の逸話、ルイ二世の騎士道的な演説、フランス風に発音された時にその語が発する音によって。さらに、この単語は、その外見と語源によってヨーロッパの生活と結びつくからである。なぜなら『アレン』、それは我々の大陸とアメリカの三分の一の住人に「何かを伝える」もので、それはドイツへのパスポートであり、大英帝国、アメリカ合衆国とオーストラリアへの紹介状だからである。
Enfin et surtout c'est un mot de ralliement dont la signification est proche parente de termes tels que : Union, Unité, Catholicité ³¹³ .	最後に、そして特にその意味は「団結、統一、普遍性」といった言葉と同系統の合言葉なのである。

³¹² 次章を参照されたい。

³¹³ « Union » は団結、合同、(一致)協力、「Unité」は統一性、一体性、同質性、「Catholicité」は、みなと統合一致するような教会、普遍的な「教会」の意味。ラルボーはジュネーヴ出身の父親と同じくプロテスタントだった(実際には無信仰)が、1910年12月24日にカトリックに改宗した。当時ラルボーは、匿名で自費出版した *Poèmes par un riche amateur, ou Œuvres françaises de M. Barnabooth* (『裕福なアマチュアの詩、あるいはバルナブース氏によるフランス語の作品』、1908) から1913年に出版することになる『A. O. バルナブース全集』への改作に取り組んでいた。『A. O. バルナブース全集』の第三部に収録された「日記」には、プロテスタントであるバルナブースがカトリック教徒の女性コンチャとの交際を通じてカトリックへの改宗を示唆する、「今や僕も結婚した。それも三重に。英国国教会によって、ローマ教会によって、そして***国領事館によって」との記述がある。Cf. « Me voici marié, et triplement marié ; selon l'église d'Angleterre, selon l'église de Rome, et selon le consulat du ***. », *A.O.B., Pléiade*, p. 301. 西村靖敬はラルボーの改宗と『A. O. バルナブース全集』における記述に関し、「この事実〔改宗〕が改作のプロセスに影響を及ぼしたことは当然であろう」(『1920年代パリの文学—「中心」と「周縁」のダイナミズム—』、多賀出版、2001年、23頁)と述べている。改宗のきっかけには、パリ近郊のカトリック系私立学校コレージュ・サント=バルブ=デ=シャンで出会った神父の影響があったようである。Cf. « Valery Larbaud religieux, Un aspect méconnu de Valery Larbaud », in Théophile Alajouanine, *Valery Larbaud sous divers visages, op. cit.*, pp. 34-84. この改宗をラルボーは母親にも内緒にしていたが、André Gide (アンドレ・ジッド、1869-1951) に報告した

第4章 ルイ二世の演説

IV. Le discours de Louis II	第4章 ルイ二世の演説
<p>— Par une coïncidence curieuse, en janvier 1927, alors que la copie d'<i>Allen</i> était aux mains des typographes de la N.R.F., les <i>Éphémérides moulinoises</i>³¹⁴ par Marcellin Crépin-Leblond³¹⁵ et Claude Renaud³¹⁶ (Moulins, 1926) furent mises en vente³¹⁷, et il se trouve que la première éphéméride pour le premier jour de l'année est le « 1^{er} janvier 1366 »³¹⁸. La voici :</p>	<p>ある不思議な偶然の一致によって、1927年1月に、『アレン』の写しが NRF 『新フランス評論』の植字工の手元にあった時、マルセラン・クレパン=ルブロンとクロード・ルノーによる『ムーランの暦』（ムーラン、1926年）が発売され、年の最初の日にあたる最初の暦が「1366年1月1日」のものだった。そこには以下のように書かれている。</p>

ところ、ジッドがラルボーの承諾を得ずに Paul Claudel (ポール・クロードル、1868-1955) に知らせてしまった。ジョルジュ・ジャン=オーブリーはラルボーの伝記において、ジッドがクロードルに 1912年1月13日付の書簡でラルボーの改宗を伝えたと記している。しかしジッドとクロードルの書簡集 (*Correspondance Paul Claudel et André Gide 1899-1926*, préface et notes par Robert Mallet, Paris, Gallimard, 1949) には、該当する書簡は収録されていない。Cf. « Ce matin, dans une grande lettre, j'ai parlé à Claudel de votre conversion, ainsi que vous m'aviez autorisé à le faire, tout en le priant de la garder secrète ; sans doute il vous écrira la grande joie que je sais que cette nouvelle va lui causer et que je n'ai pas voulu lui faire plus attendre. », la lettre de André Gide à Valery Larbaud du 13 janvier 1912, citée par Georges Jean-Aubry, *Valery Larbaud. Sa Vie et son œuvre d'après des documents inédits. La Jeunesse (1881-1920)*, op. cit., p. 198. この手紙への返信で、ラルボーはジッドに対し、「なぜあのこと〔改宗〕をクロードルに伝えたのですか？」と述べている。Cf. « Pourquoi avez-vous écrit cela à Claudel ? Enfin tant pis : du reste, il est discret », la lettre de Valery Larbaud à André Gide du 18 mars 1912, lettre 83 in *Correspondance André Gide et Valery Larbaud, 1905-1938*, op. cit., pp. 117-118 et p. 275, note 7. (下線強調は引用者) なお、ジッドからの知らせを受けて、クロードルは同年3月20日付の書簡でラルボーに祝福の言葉を述べている。Cf. « Une lettre de Gide m'annonce une nouvelle qui me remplit de joie. Comment assez vous féliciter et vous dire combien je me réjouis de ce nouveau lien qui s'établit entre nous ? », la lettre de Paul Claudel à Valery Larbaud du 20 mars 1912, in « Correspondance Valery Larbaud-Paul Claudel », présentée par Françoise Lioure, in *Paul Claudel*, dirigé par Pierre Brunel, *L'Herne*, n° 70, Paris, Éditions de l'Herne, 1997, p. 416.

³¹⁴ ムーランにおける異なる年の同じ日に起こった出来事を記した暦。ラルボーによる引用には若干の表記の違いが見られるものの、当文献を参照したものと考えられる。

³¹⁵ ムーランの印刷業者、編集者 (1867-1927)。

³¹⁶ 1881-没年不詳。

³¹⁷ 原注 « L'achevé d'imprimer est du 9 décembre 1926. » (「奥付は 1926年12月9日となっている。」)

³¹⁸ アシール・アリエの記述では、「その時、1367年の始まりの日に、公が彼の金の盾騎士団の騎士たちにお年玉を贈った」である。Cf. « C'est là, qu'au premier jour de l'an 1367, le duc donna pour étrennes à ses chevaliers son ordre de l'*Ecu d'or*. », « Louis II, Surnommé le Bon et le Grand », in Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, op. cit., p. 132. (下線強調は引用者) だが当時は復活祭 Pâques

<p>« Ce matin-là le bon duc Louis II de Bourbon, avant d'aller, avec ses chevaliers et gentilshommes, à la messe solennelle en l'église Notre-Dame de Moulins, les voulut estrener d'une belle ordre qu'il avoit faite, qui s'appeloit <i>l'Escu d'Or</i>, et en celui Escu d'Or³¹⁹ estoit une bande de perles³²⁰ où il avoit escript : <i>Allen</i>. ».</p>	<p>「その日の朝、善良公ルイ二世は、騎士たちや貴族たちとともに、ムーランのノートル=ダム教会での荘厳ミサに出発する前に、彼らにお年玉として、自らが創設した^{エキユ・ドール}金の盾という名前の騎士団を与えることを望んだ。その金の盾には真珠の斜め帯の装飾があり、そこには『アレン』と書かれていた」。</p>
<p>Louis II venait de rentrer à Moulins après une captivité de sept ans en Angleterre où, de par le traité de Brétigny³²¹, le roi Édouard III³²² l'avait emmené comme otage avec trois autres princes français.</p>	<p>ルイ二世は、ブレティニー条約によって、エドワード三世が彼を人質として他の3人のフランスの王族たちとともに連行していた英国での7年間の捕虜生活の後に、ムーランに戻ってきたばかりだった。</p>
<p>En créant l'Escu d'Or, il voulut, par cette décoration, récompenser les seigneurs ses vassaux de s'être employés avec zèle à réunir sa rançon et aussi d'avoir délivré des</p>	<p>金の盾を作った時、ルイ二世はこの勲章によって、彼の捕虜生活中に熱意を持って身代金集めに尽力し、彼の公国の12の拠点を英国人から解放してくれた彼の臣</p>

(4月頃、春分後最初の満月の次の日曜日)を一年の始まりとしていたため、1月はまだ1366年だった。

³¹⁹ 最初のイタリック表記「*l'Escu d'Or*」は騎士団の名前、二度目の「*Escu d'Or*」は「金の盾」を意味する。ラルポーはどちらも同じ表記を用いているが、『ムーランの暦』では、騎士団の名称が「*l'Escu d'or*」、金の盾は「*escu d'or*」と表記されている。Cf. Marcellin Crépin-Leblond et Claude Renaud, *Éphémérides moulinoises*, Moulins, Crépin-Leblond, 1926, p. 1. マルセラン・クレパン=ルブロンらが参考にした Martial-Alphonse Chazaud, *La Chronique du bon duc Loys de Bourbon*, Paris, Renouard, 1876, p. 9における表記は「*l'escu d'or*」および「*escu d'or*」。ラルポーは引用の際に度々独自の綴りを用いている。

³²⁰ 「真珠を施した斜め帯」の画像を確認するため、博士論文 *La Guerre de cent ans et le prince chevalier le « bon duc » Louis II de Bourbon, 1337-1410* の著者で、Cercle d'Archéologie de Montluçon et de la région (モンリュソン地方考古学研究会) 所属の Olivier Troubat (オリヴィエ・トルゥバ) 博士に尋ねたところ、画像は存在しないが、当時ルイ二世は真珠や宝石を施した衣類を所持していた、とのことであった(2012年12月4日の電子メールによる問い合わせに対する回答による。その時に添付されていた金の盾騎士団の画像と同じものが以下のサイトに掲載されている。2014年9月12日閲覧) <http://base-devise.edel.univ-poitiers.fr/index.php?id=920>

³²¹ 英仏百年戦争時にフランス王 Jean II de France (ジャン二世、1319-1364、在位 1350-1364) が、1356年のポワティエの戦いでイングランド軍に捕えられ、1360年に締結したブレティニー条約によって、ブルボン公ルイ二世らの人質と交換に釈放されたことを指す。

³²² プランタジネット朝(中世イングランドの王朝)の第7代イングランド王(1312-1377、在位 1327-1377)。

Anglais, pendant sa captivité, douze places de son duché.	下である領主たちに報いることを望んだ。
Ils furent une trentaine à recevoir l'Escu d'Or dont tous se montrèrent « moult honorés ».	金の盾を受け取ったのは約 30 人で、彼らは皆「大いなる名誉を受けた」と述べた。
Au grand dîner ³²³ qu'après la messe il leur offrit, le duc prit soin d'instruire les nouveaux « décorés » que la devise <i>Allen</i> , faite d'un mot d'outre Manche signifiant <i>tous</i> , voulait dire : « Allons tous ensemble au service de Dieu et soyons tous ungs en la deffense de nos pays, et là où nous porrons trover et conquerer honneur par fait de chevalerie. »	ミサの後にルイ二世が彼らに供した豪勢な昼食の時、公は新たな「受勲者」たちに、すべてを意味する英仏海峡の向こう側の言葉から作られた『アレン』という標語が、「神様に仕えるために皆で行こう。そして皆で我々の国を守り、騎士にふさわしい活躍によって栄誉を見出し、得ることができるところに皆で行こう」を意味すると教えた。
Les nobles convives répondirent par des discours chaleureux ³²⁴ . (Cité d'après : <i>la Chronique du bon duc Loys</i> ³²⁵ , publiée par A.-M. Chazaud, Paris, Renouard, 1876, et : <i>l'Escu d'Or et l'Ordre de Nostre-Dame dans les Curiosités bourbonnaises</i> de l'abbé J. Clément, Moulin 1900 ³²⁶ .)	食事に招かれた貴族たちは心のこもった演説で応えた。(引用は、A. M. シャゾー校訂『善良公ルイ年代記』、パリ、ルヌアール社刊、1876 年、および J.クレマン師著『ブルボネ地方の名所旧跡』における「金の盾〔騎士団〕とノートル=ダム騎士団」、ムーラン、1900 年出版によるものであ

³²³ 当時 « dîner » は「昼食」を意味していた。また下記の『オーヴェルニュ地方語辞典』によれば、話し言葉の « dîner » (「夕食を取る」) は、« prendre le repas de midi » (v.i.) (「昼の食事を取る」：自動詞)、« repas de midi » (s.m.) (「昼食」：男性名詞) の意味である。しかし「本編」第 2 章では « — Bleu de Nevers ; de la céramique de Nevers, où nous dînerons ce soir. » (*Pléiade*, p. 745) と「夕食」の意味で使用しているため、ラルポーが著作と引用で使い分けられていると考えられる。Cf. Jean-Claude Potte, *Le Parler auvergnat : régionalismes du français d'Auvergne*, Paris, Rivages, 1993, p. 66, s.v. dîner ; *Dictionnaire des régionalismes de France : géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*, Pierre Rézeau (éd.), Bruxelles, Duculot, 2001, p. 365, s.v. dîner.

³²⁴ この文章も Marcellin Crépin-Leblond et Claude Renaud, *Éphémérides moulinoises*, *op. cit.*, p. 1 からの再録である。

³²⁵ Martial-Alphonse Chazaud (1827-1880), *La Chronique du bon duc Loys de Bourbon*, Paris, Renouard, 1876. 同書は 1429 年の初版の後、Jean Cabaret d'Orronville が 1612 年に編集・出版した後、1841 年にも再版されている。Voir introduction, p. ii.

³²⁶ Joseph-Henri-Marie Clément (ジョゼフ=アンリ=マリ・クレマン、1860-1927) の著作 *L'« Escu d'or » et l'Ordre de « Nostre-Dame » institués par Louis II, duc de Bourbonnais*, par l'abbé Joseph-H.-M. Clément, *Curiosités Bourbonnaises*, XVII, Moulins, H. Durond, 1900. ヴィシー市立図書館所蔵 (Cote : 10 929.8 CLE)。

	る。
C'est la <i>Chronique</i> qui a été la principale source du récit dans Achille Allier.)	アシール・アリエの記述の主な典拠は『〔善良公〕年代記』による。)

第5章 『アレン』の典拠

V. Sources d' <i>Allen</i>	第5章 『アレン』の典拠
— Ma source directe, pour l'explication que l'Éditeur donne touchant <i>Allen</i> , avait été Achille Allier, que j'ai suivi presque partout où il est question de l'histoire du Bourbonnais dans <i>Allen</i> .	『アレン』の登場人物の一人である「編集者」が行う〔標語〕「アレン」に関する説明のための、私の直接の典拠とは、私が『アレン』におけるブルボネ地方の歴史関連のほぼすべてを依拠したアシール・アリエ〔の本〕であった。
J'ai cependant pris quelques détails ailleurs que dans <i>l'Ancien Bourbonnais</i> ³²⁷ : l'ouvrage de Max Fazy ³²⁸ m'a fourni les noms géographiques latins des villes et des rivières ; le petit manuel d' <i>Histoire du Bourbonnais</i> de Joseph Viple ³²⁹ m'a donné une vue d'ensemble que <i>l'Ancien Bourbonnais</i> — deux énormes tomes — ne peut donner, et une des cartes qui s'y trouvent m'a suggéré « l'enclave bourbonnaise d'Imphy ³³⁰ », plus visible là que sur les anciennes cartes du duché, qui pourtant m'étaient familières.	とはいえ、私は〔アシール・アリエの〕『旧きブルボネ』以外からもいくつかの詳細事項を取り入れた。マックス・ファジーの著作は私に町や川のラテン語の地名を示してくれた。またジョゼフ・ヴィップルの小さな手引書『ブルボネ地方の歴史』は、『旧きブルボネ』——2巻の大著——が与えてくれなかった全体像を私に与えてくれたし、そこにある地図のうち一枚は、私が見慣れていた公国の古い地図で見ると「ブルボネ地方の飛び地アンフィ」をはっきりと示してくれた。

³²⁷ 原注 « Achille ALLIER, *l'Ancien Bourbonnais*, 2 vol. et un atlas, Moulins, Desrosiers, 1833. » (「アシール・アリエ『旧きブルボネ』、2巻および地図、ムーラン、デロジエ社、1833年。」)

³²⁸ 原注 « Max FAZY, *les Origines du Bourbonnais*, 2 vol. (I. Catalogue de Actes... jusqu'au milieu du XIII^e siècle ; II. Histoire des Sires de Bourbon jusqu'à la mort d'Archambaud VIII), Moulins, 1924 » (「マックス・ファジー『ブルボネ地方の起源』、2巻、1924年。」) なお生没年は1883-1955である。

³²⁹ 原注 « J. VIPLE, *Histoire du Bourbonnais*, Moulins, 1923. » (「J. ヴィップル、『ブルボネ地方の歴史』、1923年。」) ジョゼフ・ヴィップルはアリエ県生まれの行政官、ブルボネ地方の歴史家(1880-1942)で、『ブルボネ地方研究協会』会長。Cf. « Le président de la Société bourbonnaise des Études locales. », Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 1, 1934, *op. cit.*, p. v.

³³⁰ 「本編」第6章に地名が引用されている。Voir *Allen*, *Pléiade*, p. 750.

<p>Le livre d'Augustin Bernard³³¹, son étude surtout, m'a fourni quelque détails, — par exemple le surnom « pays d'Oursine » que j'ai donné au Berry, vient de la devise « Oursine, le temps viendra »³³², que j'ai trouvée, ou retrouvée, dans ce livre.</p>	<p>オーギュスタン・ベルナルの書籍、特にその研究は、私にいくつかの詳しい点を教えてくれた——例えば私がベリー地方に与えた「ウルシーヌの国」という異名は、私がこの本で見つけたか再発見した「ウルシーヌよ、〔熊と白鳥が合体するような〕時が来るだろう」という標語に由来するものである。</p>
<p>En lisant la partie anthologique, j'ai eu le plaisir de voir qu'à propos du ciel et de l'horizon bourbonnais opposés à ceux du Midi, je m'étais rencontré avec Émile Mâle³³³ : « [Notre ciel] est plus varié, plus fin, plus expressif, que celui du Midi. Avec un tel ciel, à peine accompagné d'une étroite bande de paysage, un grand peintre ferait des tableaux aussi éloquents que ceux des vieux maîtres de la Hollande. »³³⁴</p>	<p>〔同書の〕アンソロジーの部分を読んでいた時、嬉しいことに私は、南仏の空と地平線と対比させたブルボネ地方の空や地平線に関して、エミール・マールと意見が一致したことがわかった。「(私たちの空は) 南仏の空よりも多様で、より繊細で、より表現力に富んでいる。風景の狭い帯状の道がかろうじて付け加わっているこのような空があれば、偉大な画家ならオランダの古い時代の巨匠たちと同</p>

³³¹ 原注 « Augustin BERNARD, *le Bourbonnais et le Berry*, choix de textes précédés d'une étude (Collection : Les Provinces françaises. Anthologies illustrées, Paris, Renouard, 1923). »

(「オーギュスタン・ベルナル、『ブルボネ地方とベリー地方: 研究とアンソロジー』、パリ、ルヌアール社刊、1923年。)」ベルナルはフランスの歴史家(1865-1947)。

³³² ベリー公ジャン(1340-1416)の標語。「ウルシーヌ」は、ベリー公ジャンの標章である « ours » (ウルス: 「熊」) と « cygne » (シーニュ: 「白鳥」) を縮約した造語で、オーギュスタン・ベルナルは「フランス王シャルル五世の弟ベリー公は、それ以上に偉大な建築者であり、多くの建造物には一頭の熊と一羽の白鳥に支えられた彼の楕形紋が、『ウルシーヌよ、時が来るだろう』という、謎めいた標語とともに施されていた」と説明している。Cf. « Son [= Charles V] frère de Berry fut bien plus grand bâtisseur encore et maints édifices portèrent son écusson supporté par un ours et un cygne, avec l'énigmatique devise : *Oursine, le temps venra.* », Augustin Bernard, *Le Bourbonnais et Berry*, Paris, Librairie Renouard, H. Laurens, 1923, p. 48. (下線強調は引用者) « venra » は « viendra » (「来る」を意味する動詞 « venir » の単純未来形) の古仏語の形。Cf. Hippolyte-François Jaubert, *Vocabulaire du Berry et de quelques cantons voisins*, Paris, Roret, 1842, p. 111.

³³³ アリエ県 Commentry (コマントリー) 出身の美術史家(1862-1954)。ヴィシー市立図書館は1943年のマールからラルボー宛の書簡と訪問用の名刺を所蔵している(Cote : M 10, M 10 Bis)。

³³⁴ 下記『ブルボネ地方年代記』に掲載された、エミール・マールのエッセー「コマントリー」からの引用。Cf. Émile Mâle, « Commentry », in Ernest Delaigue (publié par), *Annales Bourbonnais : Recueil mensuel l'historique, archéologique et artistique*, avec le concours

	じくらい表現力に富んだ絵を描けるだろう」という意見である。
À une époque où la matière et le plan d' <i>Allen</i> étaient encore imprécis dans ma pensée, j'avais pris de nombreuses notes dans Max Fazy.	『アレン』の題材と構成がまだ私の頭の中でおぼろげだった頃、私はマックス・ファジー〔の書籍〕から多くの抜き書きをしたものだ。
Je n'en ai utilisé aucune pour <i>Allen</i> .	そのうちのどれも『アレン』のためには使わなかったが。
Une, cependant, m'a fourni plus tard le sujet du paragraphe final de mes <i>Notes sur Jean de Lingendes</i> ³³⁵ .	とはいえ、一つだけ、後になって『ジャン・ド・ランジャンドに関する覚え書き』の最後の段落の主題を私に与えてくれたものがある。
Je n'ai fait aucun emprunt, du moins conscient, aux autres ouvrages d'ensemble, historiques ou géographiques, ni aux monographies, concernant le Bourbonnais, que j'ai lus ou feuilletés (Nicolas de Nicolay ³³⁶ , L.-J. Alary ³³⁷ , Coiffier-	私は、自分が他に読んだ、ないしは斜め読みした、ブルボネ地方に関する歴史あるいは地理的な総合的著作からも、個別研究からも、少なくとも意識的には借用しなかった(ニコラ・ド・ニコレ、L.-J. アラリイ、コワフィエ=ドゥモレ、

d'écrivains et d'artistes de la région, sixième année, Moulins, imprimerie Étienne Auclair, 1892 ; repr., Kessinger Publishing, 2010, p. 17.

³³⁵ 『ジャン・ド・ランジャンドに関する覚え書き』は、「Jean de Lingendes」として OC, t. 7, pp. 143-166 所収。初出は 1927 年、*Chronique des lettres françaises*, juillet-août, pp. 500-508。しかし「le sujet du paragraphe final」の詳細は不明である。

³³⁶ 地理学者(1517-1583)で、ヴィシー市立図書館は次の二冊を所蔵している。*Vichy et les bains chauds du Bourbonnais (Bourbon-Lancy, Bourbon-l'Archambault, Nérès, St-Pardoux) au XVI^e siècle, d'après un manuscrit inédit rédigé, en 1567, pour Catherine de Médicis*, préf. et notice sur l'auteur par M. Victor Advielle, Paris, N. Haix, Dentu, 1864 (Cote : Br 217) ; *Générale description du Bourbonnais*, 2 tomes, publ. avec une introd. par A. Vayssière, Moulins, E. Durond, 1889. (Cote : L 10 944.5 NIC) 『レ・カイエ・ブルボネ』における下記の記述によれば、ニコラ・ド・ニコレはブルボネ生まれではないが、長く住んでいたようである。Cf. « Nicolas de Nicolay n'est pas né Bourbonnais, mais il a fort bien décrit dans un style poétique cette ancienne et noble province dans laquelle il a longtemps vécu. », Henri Ecolivet, « Nicolas de NICOLAY (1517-1583) Dauphinois, seigneur d'Arfeuille. Sa vie, ses aventures, ses œuvres. », in *Les Cahiers Bourbonnais*, n° 221, 2012, p. 49.

³³⁷ ヴィシー市立図書館の情報ではフルネームや生没年が不詳であるが、19 世紀の人物で、ムーランの高校教師だったようである。ヴィシー市立図書館は 4 著作を所蔵している。*Album des eaux thermales du centre de la France : Vichy*, texte par M.L.-J. Alary, membre de la société d'Émulation de l'Allier, cartes et plans par M. Pujol, ancien chef du bureau du cadastre de Moulins, dessins de M. A. Gué, lithographies de M.J. Berthet, Moulins, chez Martial Place, Cusset, chez Bougarel et madame Jourdain, Vichy, chez Bougarel et

Demoret ³³⁸ , l'abbé J.-J. Moret ³³⁹ , <i>la Forêt de Tronçais</i> de Jacques Chevalier ³⁴⁰ , les ouvrages du Dr F. Cornillon ³⁴¹ , etc.).	J.-J. モレ師、ジャック・シュヴァリエの『トロンセの森』、F. コルニヨン博士の著書、など)。
Cependant ces livres, et quelques études publiées dans le <i>Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais</i> ³⁴² , ont dû avoir une certaine part dans la conception et la réalisation de mon écrit.	しかしながら、これらの書物、および『ブルボネ振興協会会報』に発表された幾つかの研究は、私の著作の構想と実現において何らかの役割を果たしたはずである。

madame Lafont, 1846. (Cote : 10 R) ; *Moulins il y a 50 ans : 1831-1836, souvenirs*, Moulins, Crépin-Leblond, 1886. (Cote : L 10 944.5 MOU) ; *Petite géographie historique, commerciale, agricole et industrielle du département de l'Allier ; précédé d'un précis de l'histoire de l'ancien Bourbonnais*, Moulins, P.-A. Desrosiers, 1851. (Cote : 10 914.45 ALA) ; *Souvenirs Moulins depuis 50 ans 1838-1888*, Moulins, Crépin-Leblond, 1889. (Cote : 10 848.03 ALA)

³³⁸ ヴィシー市立図書館の情報では Simon Coiffier de Moret (1764-1826) と登録されている (下線強調は引用者)。著書は *Le Cheveu*, avec notice et bibliog. par le Chevalier de Perceflour, Paris, Bibliothèque des curieux, 1920. (Cote : L 10 843 COI)、ラルポーの死後に出版された *Histoire du Bourbonnais et des Bourbons qui l'ont possédé*, Marseille, Laffitte Reprints, 1977. (Cote : 10 944.5 COI)

³³⁹ Jules Jacques Moret (1846-1920)。ヴィシー市立図書館は *Calendrier bourbonnais : histoire religieuse*. t. 1, Janvier, février, mars, Chanoine J.-J. Moret, Moulins, Impr. régionale, 1918. (Cote : L 10 248 MOR) など多数を所蔵している。

³⁴⁰ (1882-1962)。ヴィシー市立図書館は Jacques Chevalier et G. Raffignon, *La Forêt de Tronçais : notice descriptive et historique*, Limoges, Ducourtieux, 1913 (Cote : 10 634.9 CHE) などを所蔵している。

³⁴¹ ヴィシー市立図書館の情報では Jean Cornillon (1846-1936)、Docteur J. Cornillon となっており、誤植の可能性がある (下線強調は引用者)。最初に「著者解題」を収録したオリゾン・ド・フランス版、ガリマール版、『ヴァレリー・ラルポー全集』では「J」だが、プレイヤード版および最近の出版であるシヤージュ版は「F」と表記されていることから、プレイヤード版の出版時に生じたようである。同様の誤植は、「著者解題」第10章「ブルボンの名声万歳」におけるシャルル三世の名前の表記にも見られる。Cf. *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929, p. 93 ; *Allen*, Paris, Gallimard, 1929, p. 129, *Allen, OC*, t. 5, p. 81 ; *Allen*, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006, p. 133.

³⁴² 1846年創刊で現在も発行されている雑誌。前身は *Bulletin de la Société d'Émulation du département de l'Allier*。

ウェブサイト <http://www.societedemulationdubourbonnais.com> (2013年5月23日閲覧)

Tout ce qui concerne Charles III me vient de Brantôme ³⁴³ et d'Achille Allier ³⁴⁴ .	シャルル三世に関することのすべては、ブラントーム〔の著作〕とアシル・アリエ〔の著作〕に依拠している。
---	--

第6章 対話のモデル

VI. Modèles du dialogue	第6章 対話のモデル
— Causant d'Allen avec un critique ³⁴⁵ , peu de semaines après la publication en revue, il me dit : « Vous avez fait spontanément ce que X... a fait, vers le même temps, par réflexion et en suivant d'assez près son modèle : un dialogue selon la formule de Diderot ³⁴⁶ . ».	雑誌に発表したほんの数週間後、『アレン』についてある批評家とおしゃべりしていた時、彼が私に言った。「ディドロのスタイルを踏襲した対話に関して、熟考した上で、その手法をかなり模倣しながら同じ時期に X…氏がされたことを、まったく自由な形でなさいましたね」と。

³⁴³ 回想記録者 Pierre de Brantôme (ピエール・ド・ブラントーム、1540 頃-1614) の歴史書を指す。ヴィシー市立図書館は多数の書籍を所蔵しており、そのうち『アレン』に該当するものは全 11 巻の *Œuvres du seigneur de Brantôme*, Nouv. éd. considérablement augmentée et accompagnée de remarques historiques et critiques, La Haye, 1740 のうちの「フランス著名名将伝」の部分、「Les vies des hommes illustres et grands capitaines français」(t. 6-10) であると思われる。(Cote : F 3083-3094)

³⁴⁴ Voir « Charles III, 9^e duc de Bourbon, connétable de France », Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, *op. cit.*, pp. 489-561.

³⁴⁵ 人物不詳。

³⁴⁶ Denis Diderot (ドゥニ・ディドロ、1713-1784)、フランスの啓蒙思想時代を代表する哲学者。

En effet, je n'avais pas songé précisément à Diderot, mais à Fontenelle ³⁴⁷ , à Walter Savage Landor ³⁴⁸ , et à Lucien ³⁴⁹ .	実際には、私はそれほどデイドロのこと気にかけていたわけではなく、フォントネル、ウォルター・サヴィジ・ランドーとリュシアンを思い浮かべていた。
C'est le souvenir que j'avais de la vivacité du dialogue chez Lucien qui m'a	セリフの冒頭で発話者を指示することとか、一人の新しい登場人物が他の登場人

³⁴⁷ Bernard le Bovier de Fontenelle (ベルナール・ル・ボヴィエ・ド・フォントネル、1657-1757)、思想家、アカデミー・フランセーズ会員。*Dialogue des morts* (『死者の対話』、1683) や *Entretiens sur la pluralité des mondes* (『世界の複数性についての対話』、1686) などの作品において軽妙な文体で科学的啓蒙をおこなった。

³⁴⁸ Walter Savage Landor (ウォルター・サヴィジ・ランドー、1775-1864)、イギリスの詩人・散文作家。ラルポーが言及しているのは *Imaginary Conversations* (『想像的対話集』、1824) であろう。同書は「約 150 編、古今の著名人の対話を空想的に作り上げたもので、『ヘレキウスとヘレナ』『ダンテとベアトリーチェ』『ワシントンとフランクリン』など多種多様」である(野町二、荒井良雄他『イギリス文学案内』、朝日出版社、2002 年、170 頁を参照)。ヴィシー市立図書館に『想像的対話集』の所蔵はないが、ランドーの孫息子からラルポーへの書簡一通を保管している(Cote : L 27, Sp. L 59-60)。また、ラルポーによる翻訳 (*Serena Bruchi*, trad. de Valery Larbaud, ill. de Alecos Fassianos, Fontfroide-le-Haut, Fata Morgana, 1989) があるほか、*Sous l'invocation de saint Jérôme*, Paris, Gallimard, 1997 (『聖ヒエロニムスの加護のもとに』) の補遺に « Walter Savage Landor, Hautes et basses classes en Italie » (「ウォルター・サヴィジ・ランドー、イタリアにおける上流階級と下流階級」) の章がある(初出は Paris, Victor Beaumont 社刊、1911)。ラルポーは 1909 年から 1912 年にかけて『ウォルター・サヴィジ・ランドーの対話集』とのテーマで英文学の博士論文の準備をしていたが、論文は未完成に終わり、それ以降は創作活動に専念していた。

³⁴⁹ Lucien de Samosate (Lucianus、サモサタのルキアノス、120 年頃-200 年頃)、ギリシャ語で執筆したギリシャ人の風刺作家で、*Dialogue des Dieux* (『神々の対話』) や *Dialogue des Courtisanes* (『遊女の対話』) などの著作がある。ヴィシー市立図書館には Lucien でも Lucian でも所蔵がないようである。テキストは下記の二つのサイトを参照した。(2013 年 6 月 15 日閲覧)

<http://remacl.org/bloodwolf/philosophes/Lucien/dialoguecourt.htm#1>

http://www.mediterranees.net/mythes/lucien/dialogues_courtisanes/index.html

しかし、ブルボネ地方モンリュソン出身の歴史家・批評家 Robert Tournaud (ロベール・トゥルノー、1903-1938) は『アレン』の書評 (« *Allen*, par Valery Larbaud (Édition de la N. R. F.) », in *NRF*, n° 193, 1^{er} octobre 1929, pp. 555-558) の中で、リュシアンの著作、とりわけ『遊女の対話』がラルポーに影響を与えてはいるが、『アレン』とリュシアンの対話形式は根本的に異なっていると述べている。その理由として、リュシアンの対話形式は演劇的で、一方ラルポーの方には演劇的な印象がなく、単なる意見交換で、どちらかと言うとフォントネルやデイドロの対話形式に似ている、としている。Cf. « Je ne pense pas que nulle part elle [= l'édition en 1929] soit tout à fait la même, et si les dialogues de Lucien, particulièrement ceux « Des Courtisanes [*Dialogue des Courtisanes*] », ont fourni à Valery Larbaud la base d'où partir, je remarque surtout ce qui, dans les deux œuvres achevées [paru dans *la Nouvelle Revue Française* en 1927 et l'édition de la *NRF* en 1929], est différent. », Robert Tournaud, « *Allen*, par Valery Larbaud (Édition de la N. R. F.) », in *NRF*, n° 193, 1^{er} octobre 1929, p. 555.

encouragé à me libérer d'entraves comme la mention des interlocuteurs au début des répliques, et des points lorsqu'un personnage nouveau continue la phrase commencée par un autre.	物によって始められた話を続ける時に終止符を打つことなどの束縛から私を解放しようと後押ししたのは、リュシアン作品における対話のテンポの良さに関する私の記憶である。
Cette influence a complété celle de Fontenelle et corrigé celle de W. S. Landor, qui m'aurait entraîné dans de longues digressions.	この影響はフォントネルの影響の不足部分を補い、私を長い脱線に導いたであろう W. S. ランドーの影響を修正してくれた。

第7章 『アレン』の単数、あるいは複数の主題

VII. Sujet, ou sujets, d' <i>Allen</i>	第7章 『アレン』の単数、あるいは複数の主題
— Si on me demandait d'établir une hiérarchie entre les trois sujets principaux qui, tressés, forment cet écrit, je donnerais la première place à « la vie des provinces françaises », et la seconde à « l'éloge du Bourbonnais », — le « voyage par la route » venant en troisième lieu.	もし誰かが私に、三つ編状のこの作品を構成している三つの主要な主題に序列をつけるよう求めるなら、私は一番目に「フランスの地方の生活」、二番目に「ブルボネ地方の礼讃」——そして「陸路の旅」を三番目にするだろう。
Mais la tresse est fort serrée et si, d'une part, on peut dire que l'« éloge » n'est que l'illustration de la thèse débattue dans « la vie des provinces françaises », on peut, d'autre part, considérer cette thèse comme la principale conséquence de l'« éloge » entrepris dès le prologue, et dès le chapitre I par l'Éditeur qui vient de « se découvrir une province natale », et qui est celui des Cinq Amis qui assigne au « voyage par la route » son but.	しかしその三つ編みはしっかりと束ねられていて、もしも、一方で、「礼讃」が「フランスの地方の生活」において議論された命題の例証でしかないと言えとしても、他方では、この命題こそが、「礼讃」の主要な帰結であると考えることができる。この「礼讃」はすでに序文から始められ、また第1章においても、「自分の故郷を発見」したばかりの「編集者」が早くも行っており、「陸路の旅」にその目的を定める5人の友人たちの「礼讃」でもある。
Selon le premier point de vue, il est certain que dans <i>Allen</i> le Bourbonnais est pris	最初の観点から見れば、『アレン』においてブルボネ地方が例として挙げら

comme exemple, et représente « la » province française.	れ、またフランスの地方「そのもの」を代表していることは確かである。
Cela est bien indiqué par le surnom de « pays d'Oursine » donné au Berry, « Oursine » pouvant faire le titre d'un ouvrage de même intention qu' <i>Allen</i> , mais où le Berry jouerait un rôle analogue à celui que joue le Bourbonnais dans <i>Allen</i> , et qui serait basé sur l' <i>Histoire du Berry</i> de Raynal ³⁵⁰ comme <i>Allen</i> est basé sur <i>l'Ancien Bourbonnais</i> d'Achille Allier.	そのことはベリー地方に与えられた「ウルシーヌの国」という異名が適切に示しており、「ウルシーヌ」は『アレン』と同様の目的の作品のタイトルになりうるだろう。だがそこではベリー地方が『アレン』におけるブルボネ地方の役割に類する役割を果たすことになるだろうし、『アレン』がアシル・アリエの『旧きブルボネ』をもとにしたように、「ウルシーヌ」はレナルの『ベリー地方の歴史』に基づくことになるだろう。

第 8 章 構想と成熟過程

VIII. Conception et maturation	第 8 章 構想と成熟過程
— À l'état de projet, et avant d'être entrée, imperceptiblement, au cours des années, dans la période de maturation, la « chose bourbonnaise », <i>Allen</i> , aurait pu déjà être définie par ce qu'elle ne serait certainement pas : ni un guide descriptif, ni un roman rustique ou de « mœurs de province » ³⁵¹ , — encore moins un roman historique ou une série de nouvelles.	計画の段階や、漠然と何年もの間に成熟過程に入る前に、「ブルボネ地方の事柄」を語るという『アレン』は、決してそうはならないだろうということによってすでに定義することができただろう。すなわち、描写的なガイドブックでも、田園小説、あるいは「地方風俗」でも、——ましてや歴史小説や短篇小説集でもないのだ。

³⁵⁰ Louis Hector Chaudrude Raynal (レイ・エクトール・ショードリュード・レナル、1805-1892) の著作 *Histoire du Berry : depuis les temps les plus anciens jusqu'en 1789*, 4 tomes, Bourges, Librairie de Vermeil, 1844-1847 を指す。

³⁵¹ Honoré de Balzac (オノレ・ド・バルザック、1799-1850) の *La Comédie humaine* (『人間喜劇』、1842-1848) の分類体系の一つ « Études de mœurs » (「風俗研究」) の下位区分には « Scènes de la vie de province » (「地方生活情景」: 『ウジェニー・グランデ』など)、« Scènes de la vie de campagne » (「田園生活情景」: 『谷間のゆり』など) 等のジャンルがある。また、Gustave Flaubert (ギュスターヴ・フローベール、1821-1880) の *Madame Bovary* (『ボヴァリー夫人』) の 1857 年発表時のタイトルは *Madame Bovary, mœurs de province* で、副題 « mœurs de province » はバルザックの『人間喜劇』における分類法に依拠していた。

<p>Le mot « Allen » a joué, dans la détermination de la forme et de la substance de l'ouvrage, le rôle d'une parole magique : autour de lui tout a surgi, tout s'est assemblé : les Cinq Amis réunis dans une chambre et organisés en un groupe par le voyage, et le « pays d'Allen » avec son histoire et sa géographie et le contraste entre son passé et son présent.</p>	<p>「アレン」という言葉は、作品の形式と内容を決定する上で、魔法の言葉の役割を果たした。その言葉の周りにすべてが出現し、すべてが集まってきた。すなわち、一つの部屋に集い旅を通して一団となった5人の友人たち、そして歴史や地理とともに、過去と現在の対比とともに「アレンの国」が。</p>
--	--

第9章 名前を挙げずにされた引用

IX. Les citations anonymes	第9章 名前を挙げずにされた引用
<p>— Le psaume CXXXIII <i>Ecce quam bonum...</i>, auquel la Bible protestante (Ostervald³⁵²) donne pour sous-titre « Éloge de l'union et de la concorde fraternelle », est cité une fois, bien entendu sans guillemets, dans VI (« Car c'est là que le Seigneur a placé sa bénédiction... »³⁵³), et il y est fait allusion dans VII (« ...et les frères réunis... »³⁵⁴).</p>	<p>プロテスタントの聖書（オステルヴァールド）が「友愛の団結と一致の讃美」と副題を付した旧約聖書の詩篇第133の『見よ、何と言う幸せ……』は、第6章で、ご承知のように括弧をつけずに、一度だけ引用された（「なぜなら、主が彼の祝福を授けたのは彼らに対してだからですよ……」）。そして第7章でもそのことが触れられた（「……そして兄弟たちが集まり……」）。</p>
<p>Les citations anonymes de VII sont tirées : la première, de la <i>Délie</i>³⁵⁵ de Maurice</p>	<p>第7章の名前を挙げずにされた引用は次のものから得られた。一番目はモーリ</p>

³⁵² Jean Frédéric Ostervald (ジャン・フレデリック・オステルヴァールド、1663-1747) は、スイス人のプロテスタント牧師。「Éloge de l'union et de la concorde fraternelle」はPsaume CXXXIIIの副題。Cf. *La Sainte Bible, qui contient l'Ancien et le Nouveau Testament*, d'après la version revue par J.-F. Ostervald, Paris, Société biblique française et étrangère, 1847, p. 750.

³⁵³ Voir *Allen, Pléiade*, p. 749.

³⁵⁴ Voir *ibid.*, p. 757.

³⁵⁵ 「本編」第7章で引用された「ダチョウの声に驚いて飛ぶ鹿」（« Le Cerf volant aux abois de l'Austruche. »）を指す。Voir *ibid.*, p. 751. この引用はモーリス・セーヴの『デリー、至高の徳の対象』第21章の一節、「Le Cerf volant aux abois de l'Austruche / Hors de son giste esperdu s'envola : / Sur le plus hault de l'Europe il se jusche, / Cuydant trouver seurté, et repos là, / Lieu sacre, et saint, lequel il viola / Par main a tous prophanément notoyre. / Aussi par mort precedant la victoyre / Luy fut son nom insignément playé, / Comme au besoing pour son loz meritoyre / De foy semblable a la sienne payé. »（「ダチョウの声に

Scève ³⁵⁶ ; la seconde, de la <i>Vie du Connétable de Bourbon</i> ³⁵⁷ par Brantôme ³⁵⁸ ; la troisième, d'une épître de Philippe Desportes ³⁵⁹ ; la quatrième, de	ス・セーヴの『デリー』、二番目はブラントームの『ブルボン大元帥の生涯』、三番目はフィリップ・デポルトの書簡、
--	--

驚いて飛ぶ鹿は／寝ぐら〔没収されたブルボンの領地〕を離れ、度を失って飛び立った。／そしてヨーロッパの最高の梢〔ローマ〕に止まっては、／そこを安全な休息の場とみなしたのか／実はその神聖きわまりないその土地を／世俗的に万人周知の勇敢さ〔ドイツ傭兵隊〕で侵害したのだ。／さらに勝利に先立つ死によって／彼の名は途方もなく傷つけられたが、／時に応じて彼の名誉にふさわしいものとして、／彼の信念にひとしい信念によって報われた。」）にあたる。（下線強調は引用者）。原文は Maurice Scève, *Œuvres complètes, texte établi et annoté par Pascal Quignard*, Paris, Mercure de France, 1974, p. 23、邦訳はモーリス・セーヴ『デリ〔ママ〕—至高の徳の対象—』加藤美雄訳、青山社、1990年、32頁を参考にした。ここで「ダチョウ」を意味する「autruche」は、オーストリア大公領の仏語表記「archiduché d'Autriche」との掛け言葉、また「飛ぶ鹿」〔跳躍する鹿〕はブルボン公シャルル三世を、さらには彼が同盟を結び戦っていた神聖ローマ皇帝カール五世の紋章であるワシがダチョウに化したという皮肉を含んでいる。

³⁵⁶ 『アレン』執筆前の1924年に、ラルボーはブエノス・アイレスの日刊紙『ラ・ナシオン』に、モーリス・セーヴに関する記事をスペイン語で寄稿していた。この記事は1924年8月10日に掲載された後、1925年の *Commerce V*, pp. 209-231 に「Maurice Scève : Fragments de *Microcosme* : suivis de Notes sur Maurice Scève par Valery Larbaud」（「モーリス・セーヴ：『マイクロコスム』断章：ヴァレリー・ラルボーによるモーリス・セーヴに関する覚え書き調査」として掲載されている。このようなラルボーの研究が、セーヴの作品を再評価する契機となった。

³⁵⁷ 「ブルボン大元帥」とは、「本編」第7章での「編集者」の発言「おお！ 大元帥！ とにもかくにも、シャルル三世、我らが公、『この大柄でおとなしい若者』」と挙げられた、ブルボン公シャルル三世を指す。（「[L'Éditeur :] Oh ! le connétable ! Avant tout et après tout : Charles III, notre duc, « ce grand et sage garçon » », Allen, *Pléiade*, p. 751.）なおラルボーは『ブルボン大元帥の生涯』を、次の注に挙げるブラントームの著作としているが、これは Guillaume de Marillac（ギョーム・ド・マリヤック、1490-1521）の著作ではないかと思われる。

³⁵⁸ ヴィシー市立図書館に *La Vie du Connétable de Bourbon* の所蔵はない。ブラントームの著作のうち、『アレン』に該当するものは、全11巻の *Œuvres du seigneur de Brantôme*, Nouv. éd. considérablement augmentée et accompagnée de remarques historiques et critiques, La Haye, 1740 のうちの「フランス著名名将伝」の部分、「Les vies des hommes illustres et grands capitaines français」（t. 6-10）であると思われる（Cote : F 3083-3094）。

³⁵⁹ 「本編」第7章に引用された、フィリップ・デポルトの『アンジェリック I』の詩句、「フランスの神々の一門、宇宙の誉れ／私の君主、私の領主……」（「Race des dieux français, honneur de l'univers, / Mon prince, mon seigneur...」）を指す。Voir Allen, *Pléiade*, p. 751. なおデポルトの著作では「Race des dieux de France」となっている（下線強調は引用者）。Cf. *Œuvres de Philippe Desportes, avec une introduction et des notes par Alfred Michiels*, Paris, Adolphe Delahays, 1858, p. 357. ヴィシー市立図書館は *Les Chefs d'œuvre lyriques de Pierre de Ronsard et de son école*, choix et notice d'Auguste Dorchain, Paris, A. Perche, 1907（Cote : F 3063）、*Œuvres de Philippe Desportes, avec une introd. et des notes par Alfred Michiels*, Paris, A. Delahays, 1858 を所蔵（Cote : F 3096）。

Michelet ³⁶⁰ ; et la cinquième, d'un sonnet de Shakespeare ³⁶¹ .	四番目はミシュレ、五番目はシェイクスピアのソネットからである。
La prière citée par l'Éditeur ³⁶² appartient à la liturgie de la Semaine Sainte ³⁶³ ; jusqu'à la chute des Habsbourg, elle était encore récitée dans les églises catholiques d'Autriche-	「編集者」に引用された祈りは、聖週間の典礼のものである。ハプスブルク家の崩壊までずっと、その祈りはオーストリア=ハンガリーのカトリック教会におい

³⁶⁰ 若干の表記の違いはあるが、ジュール・ミシュレの『フランス史』における「そして七つの地方の君主となったブルボン公シャルルは、莫大な財力と、常軌を逸した自尊心を育んだがゆえに、フランスを分割するという恐ろしい夢想に至った」の部分からの引用と思われる、「本編」第7章の「愛書家」の発言 « Lui-même, l'homme qui a fait le rêve atroce de démembrer la France ». » (「彼こそが『フランスを分割するという恐ろしい夢想にふけた』男ですよ。」) に対応する (下線強調は引用者)。 Cf. « Et Charles de Bourbon, devenu souverain dans sept provinces, fut, par cette fortune monstrueuse, par une éducation de frénétique orgueil, mené au rêve atroce de mettre la France en morceaux. », Jules Michelet, *Histoire de France*, t. 10, « Réforme », *op. cit.*, pp. 171-172 ; Allen, *Pléiade*, p. 751. (下線強調は引用者)

³⁶¹ 「本編」第7章で挙げた William Shakespeare (ウィリアム・シェイクスピア、1564-1616) のソネット 107 番からの引用、「永遠なるオリーブ!」 (« *Olives of endless age!* ») を指す。 Voir *ibid.*, p. 757. (イタリック強調は原典) オリーブは平和の象徴を意味する。(『ソネット集』、高松雄一訳、岩波文庫、岩波書店、1986年、258頁、訳注(2)を参照) なおラルポーは1927年出版の『ソネット集』に序文を寄せている。 Voir Shakespeare, *Les Sonnets*, traduction d'Émile Le Brun, introduction de Valéry Larbaud, texte anglais et français (suivi de notes et variantes), Paris, J. Schiffrin, 1927, Collection classique des Éditions de la Pléiade, t. 2, pp. I-XXVIII ; préface reprise dans Valéry Larbaud, *Ce vice impuni, la lecture. Domaine anglais, suivi de Pages retrouvées*, *op. cit.*, pp. 617-641.

³⁶² 「本編」第7章における「編集者」の発言、「……そして私たちの最も信仰厚い皇帝のために、私たちの神、主が、私たちの永遠の平和のために、すべての蛮族を服従せしめんことを〔祈る〕」および「それから私たちの永遠の平和のために国家体制を刷新するものに思いを馳せることを〔可能にしてくれる〕」を指す。(« ... *et pro Christianissimo Imperatore nostro, ut Deus et Dominus noster subditas illi faciat omnes barbaras nationes ad nostram perpetuam pacem.* », Allen, *Pléiade*, p. 751 ; « et de rêver à ce qui le remplacera *ad nostram perpetuam pacem.* », *ibid.*, p. 758. イタリック強調は原典) 「編集者」が引用した祈りは、William Smith, Samuel Cheetham, *A Dictionary of Christian antiquities*, London, John Murray, 1880, p. 902 および下記のウェブサイトによれば、聖金曜日(復活祭の前の金曜日)の典礼で唱えられたもののようである。 Cf. « *OREMUS et pro omnibus res publicas moderantibus, eorumque ministeriis et potestatibus : ut Deus et Dominus noster mentes et corda eorum secundum voluntatem suam dirigat ad nostram perpetuam pacem.* » (英語訳 « Let us pray too for all engaged in affairs of state and for all their ministries and powers : that our God and Lord may guide according to His will their minds and hearts, to our lasting peace. ») 下記ウェブサイトを参照した(2013年8月21日閲覧)。
http://www.romeofthewest.com/2009_01_01_archive.html

³⁶³ 復活祭(イエス=キリストの復活を記念する祝日で、春分後最初の満月の次の日曜日に行われる)に先立つ一週間。

Hongrie pour l'empereur considéré comme le successeur de Constantin ³⁶⁴ .	て、コンスタンティヌスの後継者とみなされていた皇帝のために朗読されていた。
Récemment (février 1929) presque tous les journaux du monde ³⁶⁵ l'ont reproduite en annonçant l'accord conclu entre le Saint-Siège et le royaume d'Italie ³⁶⁶ .	最近（1929年2月）、世界中のほぼすべての新聞がローマ法王庁とイタリア王国との間で締結された条約を報じた際に、この祈りを転載した。
Et presque tous l'ont présentée comme une innovation introduite dans la liturgie catholique.	さらにほぼすべての新聞がその祈りを、まるでカトリックの典礼に取り入れられた改革のように紹介した。

³⁶⁴ コンスタンティヌス（歴代のローマ皇帝、東ローマ皇帝の名前）初代ローマ皇帝は Constantin I^{er} le Grand（280頃-337、在位 306-337）。

³⁶⁵ ラルポーが欧米諸語以外の言語による新聞に、この祈りの言葉を確認したとは考え難い。かつてラルポーがローマを頂点として欧州の大国が主導権を握るという構図のもとで「ヨーロッパは一つ」との考えを持っていたことを考えると、ラルポーがこの当時も「le monde」（「世界」）をヨーロッパ諸国、あるいは欧米諸国のみとして捉えていることを示唆しているのではないだろうか。

³⁶⁶ 1929年2月11日にローマ教皇庁とムッソリーニ政権下のイタリア王国との間で締結された *Accords du Latran*（ラテラノ条約）のこと。この条約によって、イタリア政府が教皇庁のあるバチカン一帯を「バチカン市国」とし、独立した主権国家として認めた。また、1870年の教皇領の没収への補償として、教皇庁への資金調達をおこなった。1984年に条約の改定が行われ、カトリック教会が国家に承認された特別な宗教であるという旨の部分が削除された。ラルポーの1929年当時の日記は残っておらず、また同時代の書簡にもこの条約に関する記述は見られないが、3年後の1932年2月11日、ローマに滞在していたラルポーは日記に、「実際、今日ローマは旗を飾っている。半日の祭典——締結記念日だからだ」と記している。Cf. « En effet Rome est pavoisée aujourd'hui et c'est demi-journée de fête, — anniversaire de la Conciliation. », Valery Larbaud, *Journal, op. cit.*, p. 905. この記述について『日記』の注は「1929年2月11日に、ローマ教皇庁とイタリア国家との間で、ラテラノ条約、すなわち妥協（あるいは和解）が締結された。この文書により、当時ムッソリーニに代表される国家は、バチカンにおけるローマ教皇の統治権の完全性を認めた。1871年の非宗教的な収益の損失に対する損害補償が認められ、宗教的な政教条約は、教会に学校教育と結婚の分野において特権的な地位を与えた。この政教条約は、政教分離の意味において1984年2月18日に変更された」と説明している。Cf. « Le 11 février 1929, ont été signés les accords du Latran, conciliation (ou réconciliation) entre le Saint-Siège et l'État italien. Par cet acte, l'État, représenté alors par Mussolini, reconnaissait la plénitude de la souveraineté papale sur l'État du Vatican. Un dédommagement était accordé pour la perte des revenus temporels en 1871 et un concordat religieux donnait une position privilégiée à l'Église en matière scolaire et matrimoniale. Ce concordat a été modifié dans un sens plus laïc le 18 février 1984. », *ibid.*, p. 1025, note 360.

L'unique innovation consiste dans la substitution (peut-être provisoire) du mot « Rege » ³⁶⁷ au mot « Imperatore » ³⁶⁸ .	唯一改革的なことは（暫定的なものかもしれないが）「皇帝」という言葉の代わりに「王」という言葉を置いたことにある。
--	--

第 10 章 「ブルボンの名声万歳」

X. « Viva la fama de Borbon »	第 10 章 「ブルボンの名声万歳」
— Michelet pense avoir toute raison avec lui lorsqu'il surnomme Charles II [<i>sic</i>] ³⁶⁹ « l'Italien » ³⁷⁰ .	ミシュレはシャルル二世〔原文ママ：ブルボン公シャルル三世を指す〕に「イタリア人」との異名を与えた時、自分がまったく正しいと考えていた。
Oui, l'Italien, si on ne considère que l'origine, qu'une partie même de l'origine.	そう、イタリア人である。もし出ただけ、出自のうち的一部分だけを見るならば。
Mais l'éducation, la « nourriture » ³⁷¹ a bien autant d'importance.	だが教育、「育ち」には、出自に勝るとも劣らない重要性がある。
Et alors, pourquoi pas « le Bourbonnais » ?	それならば、「ブルボネ地方の人」で構わないのではないだろうか？

³⁶⁷ ラテン語「王」。

³⁶⁸ ラテン語「皇帝」。

³⁶⁹ « Charles III »（「シャルル三世」）の誤植であると考えられる。ブルボン公シャルル二世（1434-1488、在位 1488）は、ムーランに生まれてリヨンに没しており、本章で扱われるイタリアとの関係を考えることができない。Voir « Charles II, 7^e duc de Bourbon », in Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, *op. cit.*, pp. 447-458. シャルル三世の母親 Claire de Gonzague-Mantoue（クレール・ド・ゴンザーグ=マントヴァ）は、イタリアの Federico I Gonzaga（マントヴァ侯フェデリーコ一世、1444-1484）の長女であるため、シャルル三世はイタリア人とのハーフである。また、本章のタイトル « Viva la fama de Borbon » が、『ブラントーム全集』におけるシャルル三世に関する記述に引用されていることから判断できる。Cf. « Livre I. Chapitre XI. 30.—M. de Bourbon », in *Œuvre complètes de Pierre de Bourdeilles, abbé et seigneur de Branthôme*, tome 1, Paris, P. Jannet, 1858, p. 301.

<https://archive.org/stream/oeuvrescompl01bran#page/300/mode/2up/search/%22viva+la+fama+de+borbon%22>（2014年9月20日確認）この誤植は「著者解題」第5章「『アレン』の典拠」での人名の誤植と同じく、プレイヤー版の出版時に生じたものであろう。

³⁷⁰ Cf. « Dans ce beau projet, cette folle, qui avait besoin d'appui, s'assura celui de l'autre Anne (Anne de Beaujeu) en permettant l'autre folie, celle de transmettre à ce Charles, moitié Italien, le dernier des grands fiefs de France. », Michelet, *Histoire de France*, t. 10, « Réforme », *op. cit.*, p. 171.（下線強調は引用者）

³⁷¹ 古い用法では « nourriture » は「食糧」ではなく「教育」を意味していた。Cf. « Vieilli. Éducation ou enseignement. », *Trésor de la langue française, op. cit.*, t. 12, 1986, p. 267, s.v. *nourriture*.

第 11 章 均整とバランス

XI. Proportions et équilibre	第 11 章 均整とバランス
— L'arrivée des Cinq Amis au centre de la France, de même que leur traversée de la forêt de Tronçais, est vue pour ainsi dire « en perspective », à la fin du dialogue.	トロンセの森の横断と同様に、5 人の友人たちのフランス中部への到着は、対話の終わりに、いわば「遠近法的に」見られている。
Il fallait, en effet, que les chapitres II, III, IV, V et VI, où l'on voyage tout le temps (et la halte sur la terrasse de Vézelay, dans III et au début de IV, est encore du voyage), fussent placés entre deux « chapitres immobiles » : I, qui se passe à Paris, et VII, qui se passe à Moulins.	実際、みなぎ絶えず旅する第 2 章、第 3 章、第 4 章、第 5 章および第 6 章は（それに第 3 章、第 4 章の冒頭におけるヴェズレーの展望台での小休止もまた旅である）、二つの「動かない章」の間に、すなわちパリを舞台とする第 1 章とムーランで展開する第 7 章の間に置かれなければならなかった。
Ainsi VII s'oppose à I et correspond au Prologue, et le lecteur, arrivé avec les Cinq Amis dans la capitale de l'ancien duché, voit en perspective, au bout de la route parcourue, les six vieilles cités bourbonnaises du Prologue, et, au bout de la route à parcourir, la forêt de Tronçais et la borne pavoisée de Bruère ³⁷² .	このように第 7 章は第 1 章と対立し、そして序文に対応する。5 人の友人たちとともに古い公国の中心地へ到着した読者は、駆け抜けてきた旅路の先に序文の六つのブルボネ地方の古い町を、そして、以後に駆けめぐる旅路の先に、トロンセの森とブリュエールにある旗を飾った里程標を遠近法的に見るのである。

第 12 章 「旗に敬礼」

XII. « Au drapeau »	第 12 章 「旗に敬礼」
— Le but du voyage indiqué dans I et qui fait le principal sujet du dialogue tout à la fin de VII, est ainsi décrit dans l'ouvrage d'Augustin Bernard : « Le Bourbonnais et le Berry sont situés au centre géographique de	第 1 章で示され第 7 章の締めくくりで対話の主要テーマとなる旅の目的地は、オーギュスタン・ベルナルの著書にこのように描写されている。「ブルボネ地方とベリー地方はフランスの地理的な

³⁷² 現在の Bruère-Allichamps（ブリュエール=アリシャン村）を指し、2010 年の人口は約 630 人。三差路に設置された「旗を飾った里程標」が、同村のウェブサイトの「Bruère-Allichamps, ses monuments, ses installations」のページの「Le Centre de la France」の項目で確認できる（2014 年 1 月 8 日閲覧）。<http://www.bruere-allichamps.fr/centre-france/village/village.html>

<p>la France : dans la commune de Saint-Amand-Montrond³⁷³, une pyramide marque le point d'intersection des diagonales de la France. »³⁷⁴</p>	<p>中心部に位置している。サン=タマン=モンロン村では、ピラミッド型のものがフランスの対角線の交差点の目印となっている」と。</p>
<p>Plutôt que d'une pyramide, ce monument placé au milieu de la route de Saint-Amand à Bourges, dans la traversée du village de Bruère, a la forme d'un fût de colonne carrée haut d'environ deux mètres, posé sur un soubassement et surmonté d'un chapiteau où flotte un drapeau tricolore. (Voir sur la question assez complexe du « Centre géographique de la France » l'article de E. Bouant dans le <i>Larousse mensuel</i>, 1923, p. 174.)³⁷⁵</p>	<p>ピラミッド型ものというよりも、このサン=タマンからブルージュへ向かう街道の中ほどの、ブリュエール村を通り抜ける途中に据えられた記念碑は、高さ約 2メートルの四角い柱身の形をしている。それは土台の上に取り付けられ、上部の柱頭には三色の旗が掲げられている。(かなり込み入った「フランスの地理的中心地」の問題については、『月刊ラルース』1923年号、174頁における E. ブーアンの記事を参照のこと。)</p>

第 13 章 発話者たち

XIII. Les interlocuteurs	第 13 章 発話者たち
<p>— Les Cinq Amis ne sont pas nommés, et ne sont pas indiqués expressément dans le dialogue, pour la même raison qui m'a détourné de décrire minutieusement leur itinéraire et de les suivre jusqu'à leur retour à Paris.</p>	<p>5人の友人たちは名前を付けられておらず、対話の中でも明確に示されていない。それは、私が彼らの旅程を綿密に描写することや、彼らがパリへ戻るまで追うことを思いとどまったのと同じ理由による。</p>
<p>C'est là le résultat, encore une fois, de la loi intérieure de l'ouvrage.</p>	<p>それもまた、作品の内的な掟の結果である。</p>

³⁷³ ブルボネ地方シェール県の村。2008年の人口は約 11,000 人。

³⁷⁴ ラルボーが「著者解題」第 5 章「『アレン』の典拠」の原注で挙げた『ブルボネ地方とベリー地方』（1923）からの引用。原典では « [d'intersection des] grandes diagonales du territoire français. » となっている（下線強調は引用者）。Cf. Augustin Bernard, *Le Bourbonnais et Berry*, *op. cit.*, p. 2.

³⁷⁵ *Larousse mensuel illustré*, n° 197, juillet 1923, pp. 174-175 を指す。フランス国立図書館の電子図書館サイト Gallica で確認。（2011 年 10 月 25 日閲覧、2014 年 9 月リンク切れ）

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k397569/f177.image>

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k397569/f178.image>

<p>Mais le dialogue a été composé de telle sorte qu'un lecteur attentif distingue sans peine, du moins partout où cela est nécessaire, les répliques de l'Éditeur de celles du Bibliophile, et les répliques de ces deux principaux interlocuteurs de celles des trois autres personnages.</p>	<p>しかし対話は、注意深い読者が難なく、少なくともそれが必要なところではどこでも、「編集者」のセリフと「愛書家」のセリフを見分けたり、この主要な発話者たちのセリフと他の3人の登場人物のセリフを見分けられたりするように書かれている。</p>
<p>Il n'y a du reste pas d'inconvénient à attribuer soit au Poète, soit à l'Amateur, soit à l'Auteur, un certain nombre de répliques « sans maître ».</p>	<p>そもそも、かなりの数の「発言者不明」の受け答えを「詩人」に割り当てようが、「アマチュア」、あるいは「作者」に割り当てようが不都合はない。</p>
<p>Cependant, à quelques moments donnés, il n'y a pas de doute sur l'identité de celui des trois comparses qui prend la parole.</p>	<p>しかしながら、いくつかの場合において、発言しているのが3人の脇役のうち誰なのかということについて疑いを挟む余地はない。</p>
<p>L'introduction de l'auteur comme cinquième interlocuteur a été nécessitée par le désir de marquer nettement qu'aucun des personnages n'est mon porte-parole, et que ni l'Éditeur ni le Bibliophile, même lorsqu'ils semblent près de se trouver d'accord, n'expriment des opinions que j'approuve sans réserve et que je désire faire approuver par le lecteur.</p>	<p>作者を5番目の発話者として導入したのは、次のことを際立たせたいという願望から必要とされた。それはすなわち、どの登場人物も私の代弁者ではないということ、そして、「編集者」と「愛書家」のどちらも、お互いにもう少しで同意に至りそうな時でさえも、私が全面的に賛同し、読者に同意してもらいたいと思う意見を述べてはいないということである。</p>
<p>Leur dialogue a eu lieu d'abord dans l'imagination de l'auteur, et sans que son jugement intervînt ; il écoutait ; et dans le dialogue écrit, l'Auteur, — spectateur, truchement entre le lecteur et les interlocuteurs, et narrateur dans le chapitre II, — écoute, et très rarement dit son mot,</p>	<p>彼らの対話は、まず作者の想像力の中で起こったが、ただし彼の判断が介入したことはなかった。彼は聞いていたのだ。それから文字で記された対話の中で、「作者」——傍観者であり、読者と発話者たちの間の代弁者、かつ第2章の語り手——は、話を聞き、ごくまれに自分の言葉を語ったが、それは二つの箇所におけ</p>

qui, en deux endroits ³⁷⁶ , n'est guère plus qu'une signature discrète, et presque cryptique, dans un coin du texte.	る、テキストの片隅に潜んだ、ほとんど暗号のような署名に過ぎない。
Les interlocuteurs ne sont pas des portraits, mais quelques-unes de leurs caractéristiques sont empruntées à des personnes réelles.	発話者たちはモデルを持たないが、彼らの特徴のうちのいくつかは、実在の人物から借用したものである。
Par exemple, le propriétaire de l'automobile (que nous appelons, pour être bref, l'Amateur) a été esquissé d'après un modèle qui lui a fourni son attitude au volant, « tête nue, le buste très droit », sa délicatesse et sa générosité à l'égard de ses amis, et ses connaissances et son ingéniosité dans les inventions mécaniques.	例えば、自動車の所有者（それを私たちは、手短に「アマチュア」と呼んでいる）は、あるモデルをもとに素描され、そのモデルが「帽子をかぶらず、胸を張」って運転する姿勢や、友人たちに対する気遣いや気前の良さ、機械の発明に関する知識や器用さを「アマチュア」に与えたのである。
Le Poète a quelques traits physiques et quelques expressions verbales qui le font,	「詩人」は、いくつかの身体的な特徴といくつかの言葉の言い回しによって、少なくとも私の考えでは、レオン=ポール・ファルグに似ている。

³⁷⁶ 「本編」には、ラルボーの既刊の作品を想起させるくだりが二か所ある。一点目は、第4章で「詩人」が「作者」に対し、『フェルミナ・マルケス』の一節、「夏のはじめ。息を吸いこむと、心の奥にまでフランスの心地よさを感じられる」を引用し、「ああ！ 風のそよぎが心地いいね！ 息を吸いこむと、心の奥にまでフランスの心地よさを感じられる」と述べ、それに対して「作者」が「引用ありがとう」と返答する場面である。二点目は、第7章において「詩人」が「そして我らが友、ガエタン・ド・ピュトゥアレイが切手をデザインするだろう！」と、『A. O. バルナブース全集』の登場人物を挙げて述べた部分である。（« [Le Poète :] — Ah ! le mouvement de l'air fait du bien ! « On respire, et on sent jusqu'au fond du cœur la douceur de la France. » / [L'Auteur :] — Merci pour la citation. », *Allen, Pléiade*, p. 739 ; « [Le Poète :] — et notre ami Gaëtan de Putouarey dessinera les timbres-poste ! », *ibid.*, p. 757.）だが、これらはいずれもよく知られたラルボー作品に関連し、またそのうち一つは「詩人」の発言であることから、本章でラルボーが述べる「テキストの片隅に潜んだ、ほとんど暗号のような署名」には該当しないだろう。むしろ、第7章で、それまで趣味や出自といった個人に関わる発言をしてこなかった「作者」の、次の二つの発言が候補に挙げられる。一つ目は、ラルボーの軍服への関心を連想させる、「じゃあ私は軍服を考えますよ」、二つ目は、「詩人」が「出典を見つけたがる、彼のこの奇癖！」と述べたことに対する「作家」の返答で、ラルボーの父親がヴィシーでミネラルウォーターの源泉を見つけたことを示唆する「それは我が家では先祖代々のものですよ」である。（« [L'Auteur :] — et moi pour inventer les uniformes », *ibid.*, p. 757 ; « [L'Auteur :] — C'est héréditaire chez moi. », *ibid.*, p. 759.）

du moins dans ma pensée, ressembler à Léon-Paul Fargue ³⁷⁷ .	
La phrase sur la cathédrale de Bourges, « Bayard sur son cheval caparaçonné » ³⁷⁸ , a été réellement prononcée par L.-P. Fargue au cours d'un « voyage par la route » où nous avons pour conducteur notre ami le « propriétaire de l'automobile ».	ブルージュの大聖堂についての言葉、「馬飾りを着せた馬の上のバヤール」は、実際に L.-P. ファルグが、私たちの友人である「自動車の所有者」を運転手にしていた「陸路の旅」の途中で言ったものである。
Par contre, ni l'Éditeur, ni le Bibliophile n'ont eu de modèles dans la vie réelle.	それに対して、「編集者」にも「愛書家」にも、実生活でのモデルはいなかった。
Pour l'Éditeur, j'ai inventé un personnage idéal, mais non invraisemblable, que caractérisent son amour et son respect pour son métier, sa croyance au rôle civilisateur des Lettres, ses connaissances, son goût et la vivacité de son imagination.	「編集者」のために、私は理想的な、とはいえ有り得なくもない人物像を考案した。それは、仕事に対する彼の愛情と尊敬、文学の文明化の担い手という役割に対する信念、知識、審美眼や想像力の活発さによって特徴づけられる。
Et j'ai souhaité, en le composant, que le lecteur qui lui accorderait un peu d'attention, se le représentât comme un homme de la lignée des Étienne Dolet ³⁷⁹ .	そして「編集者」を創作しながら、私は彼に少々関心を寄せるであろう読者が、彼をエティエンヌ・ドレの系譜のような人を想像してくれることを願った。

³⁷⁷ フランスの詩人でラルボーの友人（1876-1947）。「本編」第4章では、1928年刊行の詩集 *Vulture*（『ヴュルチュルヌ』）が挙げられている。Voir *ibid.*, p. 740.

³⁷⁸ この発言は、「本編」第6章冒頭での「詩人」の発言と思われる「つまりフランスの真ん中に、馬飾りを着せた馬の上に、この巨人のようなバヤールが立っている、ってことだね」を指す。（« [Le Poète :] — Ainsi donc il y a, debout au milieu de la France, ce gigantesque Bayard sur son cheval caparaçonné. », *ibid.*, p. 745.）本「別冊」61頁の注174、注175を参照されたい。

³⁷⁹ エティエンヌ・ドレ（1509-1546）、フランス・ルネサンス期の印刷・出版業者・ラテン語学者。前掲のロベール・サバチエ〔ママ〕『死の辞典』、110頁「Bonheur 幸福」の項の訳注によれば、「リヨンで印刷所を開き、古典語や伝説の文献を出版するかたわら、著書『ラテン語注解』などを刊行した。無神論的思想と激的な性格からしばしば逮捕され、最後は梵刑に処せられた」人物である。また同書本文では「学者で出版者であったエティエンヌ・ドレは、その時代の思潮にほとんど配慮しないやり方でプラトンを翻訳してしまったので、死刑に処せられることになった。翻訳の最初の殉教者である。」（「Edition 出版」、303頁）、「エティエンヌ・ドレは一箇所の印刷まちがいのために死んだ。その誤植とは、プラトンの訳文が『死してのちは、お前はもはや何者でもなくなるであろう』となっていたが、本当は否定の *du tout* をつけて『～なくなることはない』としなければならなかったのである。」（「Coquilles 誤植」、230頁）と説明されている。

Le Bibliophile est un homme de la même classe intellectuelle, sinon du même caractère, et bien fait pour lui donner la réplique.	「愛書家」は「編集者」と同じ性格ではなくても、彼と同じ知識階級の男性なので、「編集者」の相手役にうってつけである。
--	---

第 14 章 議論された命題

XIV. La thèse débattue	第 14 章 議論された命題
— Débattue, non soutenue.	命題は議論されているのであり、支持されてはいない。
En réalité, il y a thèse, antithèse et synthèse, cette dernière laissée en partie au jugement et à l'imagination du lecteur.	実は、定立、反定立、総合があるのだが、総合は部分的には読者の判断と想像力に委ねられている。
Et au fond, cette synthèse correspond aux conclusions de la grande Préface d'Achille Allier à <i>l'Ancien Bourbonnais</i> ³⁸⁰ , Préface qui est un manifeste, trop peu connu, de la renaissance provinciale au temps du Romantisme.	そして結局のところ、この総合は『旧きブルボネ』のアシール・アリエによる長大な序文、あまりにも知られていないがロマン主義時代において地方の再興を宣言する序文の結語に対応している。
Ce qu'il y a de nouveau, peut-être, dans les propos de l'Éditeur et les remarques du Bibliophile, c'est la relation de la « sortie de tutelle » avec un nouvel ordre européen.	「編集者」の発言と「愛書家」の指摘の中で、新しいと言えるかもしれないのは、ヨーロッパの新しい秩序と「保護状態からの脱出」との関係である。
Allier, par exemple, concevait nettement des États-Unis de France ³⁸¹ ; l'Éditeur et ses amis imaginent des États-Unis français dans les États-Unis d'Europe ³⁸² .	例えば、アリエはフランス合衆国をはっきりと思い描いていた。「編集者」と友人たちはヨーロッパ合衆国におけるフランス合衆国を想像するのである。
Le panégyrique de Charles III par l'Éditeur appartient à ce qu'on peut appeler la littérature de la réhabilitation du Connétable.	「編集者」によるシャルル三世への賛辞は、大元帥の名誉回復の文献と呼べるものに入る。

³⁸⁰ Voir « Introduction » in Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 1, 1934, *op. cit.*, pp. i-xx.

³⁸¹ 首都（パリ）と各地方が同等に発展することで、フランス全土が活性化する状態。

³⁸² 「フランス合衆国」と同様に活性化したヨーロッパ各国が、大国、小国にかかわらず同等の力関係によってヨーロッパが一つの総体となること。

<p>On peut consulter à ce sujet l'ouvrage d'André Lebey : <i>le Connétable de Bourbon</i> (Paris, 1904), et celui de Jehanne d'Orliac, <i>Anne de Beaujeu, roi de France</i>, paru chez Plon en décembre 1926 ou janvier 1927³⁸³, quand Allen était aux mains des typographes de la N.R.F.</p>	<p>我々はこのテーマに関して、アンドレ・ルベイの著作、『ブルボン大元帥』（パリ、1904年）と、『アレン』が NRF [『新フランス評論』] の植字工の手にあった頃、1926年12月または1927年1月にプロン社から出た、ジュアンヌ・ドルリアックの著作、『アンヌ・ド・ボーリュー、フランス王』を参照することができる。</p>
<p>J'ai trouvé, avec surprise et plaisir, dans les <i>Éphémérides moulinoises</i> déjà citées, ceci (page 305) :</p>	<p>私は、驚きと喜びを持って、すでに挙げた『ムーランの暦』に、次のこと（305頁）を見つけた。</p>
<p>« Le 11 septembre 1523, dans la grande cour du château de Moulins, le bâtard de Savoie³⁸⁴ et le maréchal de Chabannes³⁸⁵ déclarent, en raison de la trahison du Connétable, « le Bourbonnais saisi et mis sous la main du roi ».</p>	<p>「1523年9月11日、ムーラン城の広大な中庭において、大元帥の裏切りを理由に、サヴォワの私生児とシャバンヌ元帥が『ブルボネ地方は没収され、王の手中に収められた』と宣言した。」</p>
<p>La duchesse d'Angoulême³⁸⁶ en jouira jusqu'en 1531, époque à laquelle il sera réuni à la couronne, servant de douaire³⁸⁷ aux veuves des rois de France...</p>	<p>アングレーム公妃はブルボネ地方を1531年まで享受し、その後、この地域は王国に統合され、フランス王の未亡人たちへの寡婦資産として使われることになる……。</p>
<p>Passant ainsi de mains en mains, la malheureuse province n'eut pas de vie propre, et cette existence constamment ballottée explique bien des choses de notre histoire, notamment le progressif délabrement du château de nos ducs jusqu'à l'incendie qui en consumma la ruine. »</p>	<p>このように人手から人手へと渡ったことから、この不幸な地方は固有の生を持てなかった。そして絶えず翻弄されたこうした生こそ、我々の歴史にまつわる多くの事象、とりわけ我々が公の城が徐々に荒廃してゆき、火災によって廢墟となるまでを説明するのである。」</p>

³⁸³ 発行は1926年。

³⁸⁴ Philippe II de Savoie（サヴォワ公フィリップ二世、1448-1497）の非嫡出子 René de Savoie（ルネ・ド・サヴォワ、1473-1525）。

³⁸⁵ Jacques II de Chabannes de La Palice（パリス=シャバンヌ元帥ジャック二世、1470-1525）。

³⁸⁶ フランス王フランソワ一世の母、ルイーズ・ド・サヴォワを指す。

³⁸⁷ 亡夫の財産を継承する権利。

第 15 章 作品の受容

XV. Réception de l'ouvrage	第 15 章 作品の受容
— Elle fut d'abord une déception pour l'auteur.	まず初めに、これは作者にとって期待はずれだった。
Des extraits publiés, avec ou sans commentaires, dans des journaux donnaient d'Allen une idée très fausse, le réduisaient à une espèce de satire contre la province et les provinciaux.	新聞に出た抜粋は、解説の有無にかかわらず、『アレン』にひどく間違った見解を与えており、『アレン』を地方や地方住民に対する風刺のようなものに単純化していた。
Le chapitre V, avec la petite histoire de la mésaventure du Bibliophile, retint l'attention de quelques critiques au détriment de tout le reste de l'ouvrage.	「愛書家」の災難のちょっとした身の上話のある第 5 章は、この作品の残りをすべて犠牲にしてまで、何人かの批評家の注意を引いていた。
Peut-être ne l'avaient-ils lu ni attentivement, ni entièrement ; peut-être n'avaient-ils lu qu'une des deux livraisons parues en revue ³⁸⁸ .	批評家たちは『アレン』を注意深くも、最後まで読んでいなかったのかもしれない。彼らは雑誌に掲載された二回の連載のうちの一つしか読んでいなかったのだろう。
Par bonheur, il trouva en Bourbonnais des critiques ou plus attentifs, ou plus bienveillants, ou plus indulgents ³⁸⁹ .	幸いにも、この作品はブルボネ地方において、もっと行き届いた、あるいは好意的な、さもなければ寛容な批評家たちに巡り合った。
En tout cas, l'analyse qu'ils donnèrent d'Allen était exacte, et leurs jugements me parurent justes.	いずれにせよ、彼らが『アレン』について示した分析は正確なもので、彼らの判断は私には公平なものに思われた。

³⁸⁸ 1927 年に『新フランス評論』2 月号・3 月号に分けて連載されたことを指す。

³⁸⁹ 次章で詳細を述べている。

第 16 章 ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋

<p>XVI. Quelques extraits de la presse bourbonnaise³⁹⁰</p>	<p>第 16 章 ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋</p>
<p>— De M. Henri Buriot-Darsiles³⁹¹, dans <i>le Courrier de l'Allier</i> du 6 mai 1927³⁹² :</p>	<p>1927 年 5 月 6 日付『アリエ通信』所収、アンリ・ビュリオ=ダルシル氏の記事。</p>
<p>« Lorsqu'il parut, il y a quelques semaines, dans <i>la Nouvelle Revue Française</i>, j'en ai lu, dans des revues de la presse, des extraits si intelligemment choisis qu'ils faisaient dire à l'auteur presque le contraire de sa pensée...</p>	<p>「数週間前、『新フランス評論』に「アレン」が掲載された時、私は新聞記事の要約紹介でその抜粋を読んだが、それは巧妙に抜き出されており、作者に彼の考えとほぼ逆のことを言わせていた……。</p>
<p>Voyons donc ce qu'est <i>Allen</i>.</p>	<p>そこで『アレン』とは何かを見てみよう。</p>
<p>C'est, sous la forme, d'abord, d'une conversation, à Paris, entre cinq³⁹³ personnes : un poète, un bibliophile, etc., ensuite, d'un court récit, puis à nouveau d'une causerie entre ces mêmes personnes roulant en auto sur les grandes routes, entre la capitale de la France et celle du Bourbonnais, et finalement assises à la terrasse du principal hôtel de notre bonne ville (il n'est pas nommé), c'est, dis-je, à la fois une série d'impressions de route... et la défense et illustration³⁹⁴ d'une thèse qui</p>	<p>これは、まず初めに、詩人、愛書家など、5 人の登場人物たちのパリでの会話、次に短い物語、それから新たに、この同じ登場人物たちが、フランスの首都とブルボネ地方の中心地の間幹線道路を自動車移動している時と、我らが良き町最大のホテル（名前は付いていない）のテラスに最後に座っている時のおしゃべりで成り立ち、言うなれば、それは、陸路での一連の感想……であると同時に、私たちみんなにとって重要であろう命題に対する擁護と顕揚である……。</p>

³⁹⁰ 本「別冊」の補遺 1「『著者解題』第 16 章に引用した記事三点」に、本章で取り上げた三つの記事の全文を示し、ラルボーが引用したおおよその箇所を論者が下線強調した。155-162 頁を参照されたい。なお、本章におけるイタリック表記でない作品名および文中のイタリック強調はプレイヤード版による。

³⁹¹ ムーランの高校 Lycée Théodore de Banville（リセ・テオドール・ド・バンヴィル）のドイツ語教師で、雑誌 *Les Cahiers du Centre* の創刊者（1875-1944）。二人は共通の友人シャルル=レイ・フィリップの紹介で 1908 年に知り合った。

³⁹² Henri Buriot-Darsiles, « LETTRES ET ARTS : VOYAGES », in *Courrier de l'Allier*, le 5 mai, 1927, p. 3a-d からの抜粋である。Archives départementales de l'Allier（アリエ県立古文書館）が所蔵する紙面では、日付が « le 5 mai 1927 »（1927 年 5 月 5 日）であるため、プレイヤード版の記述は誤植、あるいはラルボーの誤記であろう。

³⁹³ 記事では « quatre »（Poète, Bibliophile, Éditeur, l'Auteur）となっている。

³⁹⁴ 16 世紀のフランスの詩人、Joachim du Bellay（ジョアシャン・デュ・ベレー、1522 頃-1560）の *Défense et illustration de la langue française*（『フランス語の擁護と顕揚』、1549）を下敷きにした表現であろう。

devrait nous être chère à tous...	
Un grand mot est prononcé dans ces pages, un mot qui sonne mal à la plupart des oreilles françaises : autonomisme ³⁹⁵ .	ある一つの大げさな言葉がこれらのページで発せられる。大方のフランス人の耳には不快に響く言葉、すなわち自治主義である。
Alors quoi, ce n'est pas assez de la Bretagne [et de l'Alsace] et de ses [leurs] séparatistes...	何たることか、ブルターニュ地方（とアルザス地方）と、またその（それらの）分離独立主義者でもう十分ではないのか……？
Non. L'autonomisme que nous expose l'Éditeur... n'est... qu'une fiction.	いや違う。「編集者」が我々に述べる自治主義は……虚構でしかない……。
Il ne sert qu'à présenter avec plus de relief un passé qui fut grand, et un présent qui a encore quelques gloires [en note le passage : « Et même une fois notre indépendance perdue... » et la clé des mots : « le plus illustre linguiste de l'Europe » : Antoine Meillet] ³⁹⁶ mais qui, hélas, comparé à ce passé, est presque un néant.	その自治主義は偉大だった過去と、また何がしかの栄光をなおも有する現在（「そしてひとたび我々の独立が失われてからも……」の一節が注で引用され、「ヨーロッパで最も有名な言語学者」という言葉はアントワーヌ・メイエを指すということもそこで述べられている）を、より鮮明に提示することにだけ使われているのである。残念ながら、現在はこの過去に比べて、無に等しいとはいえ。
Et ce que l'auteur voudrait, ce que doivent vouloir avec lui tous les véritables régionalistes et tous les vrais patriotes et tous ceux qui rêvent d'États-Unis européens, c'est, dans cette province un peu somnolente, et dans toutes nos provinces, « un réveil, une chaleur et une lumière plus vives, la renaissance de l'initiative, la fin de la saison d'ennui ».	そして作者が望むようなこと、作者とともにすべての真の地方主義者とすべての真の愛国者、ヨーロッパ合衆国を夢見るすべての人たちが望むべきこと、それは、若干眠っているようなこの地方と、すべての我々の地方における、『目覚め、もっと激しい熱気や光、自主性の再興、退屈な季節の終わり』なのである。

³⁹⁵ « autonomisme » の初出は、この記事が出た前年の 1926 年頃である。Cf. FEW 25, 1115a, s.v. *autonomía*.

³⁹⁶ 本「別冊」の補遺 1「『著者解題』第 16 章に引用した記事三点」に再録した 1. Henri Buriot-Darsiles, « LETTRES ET ARTS : VOYAGES », in *Courrier de l'Allier*, le 5 mai, 1927, p. 3a-d. における 157 頁の注 (1) を参照されたい。

<p>De M. Camille Gagnon ³⁹⁷, dans <i>le Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais</i>, juillet-août 1927³⁹⁸ :</p>	<p>1927年7-8月号『ブルボネ振興協会会報』所収、カミーユ・ガニョン氏の記事。</p>
<p>« ...L'auteur a tenu à livrer son travail en 1927 parce que cette année-là présente deux anniversaires qui, par un curieux hasard, ouvrent et ferment l'histoire de notre indépendance ducale ; l'érection de la Sirerie en Duché (1327) et la mort de Charles III, le connétable, sous les murs de Rome (1527)... »</p>	<p>「……作者はその仕事を1927年に出版することを強く望んだ。なぜならこの年は、ある奇妙な偶然によって、二つの出来事を記念する年だからである。私たちの公国の独立の歴史を開き、また閉じる〔ブルボン家の〕公領の公国への昇格（1327年）とローマの城壁の下での、シャルル三世、大元帥の死（1527年）である……。」</p>
<p>« ...La confession qu'il va faire n'a rien de surprenant ; quel intellectuel de province, en la lisant, ne retrouvera pas les étapes d'une crise personnelle ? »</p>	<p>「……彼がしようとする告白に驚くようなことは何もない。その告白を読みながら、自分も経てきた煩悶の過程を見出さない地方知識人がいるだろうか？」</p>
<p>Longtemps toutes ses pensées appartinrent à Paris ; le pays natal lui paraissait une terre d'exil...</p>	<p>長い間、すべての彼の思考はパリにあった。彼には生まれ故郷が流刑地のように思われていた……。</p>
<p>« N'allez pas croire, d'après cette sèche analyse, que les idées se déduisent, dans <i>Allen</i>, comme pour la démonstration d'un théorème... : le dialogue³⁹⁹... »</p>	<p>「この無味乾燥な分析にもとづいて、さまざまな観念が定理の証明のように『アレン』において導き出されるとは思わないでいただきたい……。というのも、対話であり……。」</p>

³⁹⁷ ブルボネ地方の行政官、文学者（1893-1983）。ブルボネ地方の民俗研究の著書として *Le Folklore Bourbonnais, Première partie, La Vie matérielle*, dessins de Claude Joly, Moulins, Crépin-Leblond, 1947 ; *Deuxième partie, Les Croyances et les coutumes*, Moulins, Crépin-Leblond, 1948 ; *Troisième partie, Les Dits, les chants, les jeux*, Roanne, Horvath, 1981 ; *Quatrième partie, Les Parlers*, Moulins, A. Pottier, 1972（いずれもヴィシー市立図書館所蔵、Cote : 10 390 GAG）などがある。またガニョンはエミール・ギョーマンの友人で、1935年の *Société des Amis de Charles-Louis Philippe*（シャルル＝レイ・フィリップ友の会）設立時の共同設立者でもあった。

³⁹⁸ Camille Gagnon, « VALÉRY LARBAUD : *Allen*, illustré d'eaux-fortes originales, par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 122, boulevard Murat, XVI^e », in *Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais*, juillet-août 1927, pp. 233-236 からの抜粋である。

³⁹⁹ ラルボーがこの箇所を大きく省略しているのでわかりにくくなっているが、原文によって補って訳せば、「古い時代の二流作家に通暁しているヴァレリー・ラルボーは、

<p>De M. Robert Tournaud, dans <i>le Courrier de l'Allier</i> du 28 juillet 1927⁴⁰⁰ (après la publication en volume, I^{er} édition) :</p>	<p>1927年7月28日付（単行本初版の出版後）『アリエ通信』所収、ロベール・トゥルノー氏の記事。</p>
<p>« Une bien curieuse offrande aux puissances spirituelles. Après les voyages lointains... après <i>A. O. Barnabooth</i>, de la « Bulgarie pleine de roses »⁴⁰¹ aux brouillards londoniens... [l'auteur] nous restitue de sa province natale, du duché, ce qu'il y a en elle de vivant... l'essence.</p>	<p>「精神的な権力者たちへの大層奇妙な贈り物である。長い旅の後、……「バラいっぱいブルガリア」から霧のロンドンへの『A. O. バルナブース全集』の後、……（作者は）彼の故郷、公国に関して、そこにある生命力あふれるものを我々に復元して示したのだ、……本質を。」</p>
<p>« ...Puis par delà l'histoire, la théorie des trois ordres... mais animés d'une vie nouvelle, non plus selon la naissance, selon la valeur spirituelle, symbole et condition... d'une société... où les hiérarchies nécessaires se grouperaient sur le plan de l'esprit. »</p>	<p>「……続いて歴史を超えて、三身分の理論が提示される……がその身分を突き動かすのは、もはや出自ではなく精神的な価値に従った新しい生命であり……その価値とは、必要な諸階層が精神面で構成されるような……社会の象徴、あり方である。」</p>

彼らの中で何人もが得意とした『対話』という形式を彼らから借り、その形式にきわめて生き生きとした体裁を与えている」となる。（« Valery Larbaud, qui connaît si bien les petits auteurs des siècles passés, leur emprunte une forme où plusieurs ont excellé : le dialogue, et lui donne une allure extrêmement vivante. »）本「別冊」160頁を参照されたい。

⁴⁰⁰ Robert Tournaud, « « ALLEN » Par Valery LARBAUD », in *Courrier de l'Allier*, le 28 juillet, 1927, p. 2e-fからの抜粋である。記事はアリエ県立古文書館蔵。当時ロベール・トゥルノーは教職のかたわら、郷土に関する小冊子『ブルボネ地方探訪—エリソンに関する覚え書き』などを出版していた。1927年の『アレン』の出版をきっかけに、二人は1927年から1929年にかけて書簡を交わした。Voir Monique Kuntz, « Autour d'Allen », in *Académie du Vernet, Cahier du 40^e anniversaire 1944-1988*, Vichy, impr. Wallon, 1987, pp. 45-58 ; « Lettre à Robert Tournaud », in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, édition établie et préfacée par Michel Bulteau, Paris, La Table Ronde, 1992, pp. 197-212. 当時トゥルノーは博士論文 *Charles-Louis Philippe et son temps* の執筆に取り組んでいた。ラルボーはフィリップとの書簡を提供するなどして、研究の進捗具合を時々尋ねていたが、トゥルノーの病死により論文は未完成に終わっている。ラルボーとトゥルノーの文通は2年あまりの期間であったが、ラルボーは彼を « mon cher compatriote »（「親愛なる同郷人」）と呼ぶなど同郷意識を示していた。

⁴⁰¹ 『A. O. バルナブース全集』の「詩」に収録された « Ode »（「頌歌」）からの引用。Voir. *AOB, Pléiade*, p 45.

(J'aurais voulu citer davantage, et surtout ne pas abrégé ces extraits, mais l'espace m'a manqué.) ⁴⁰²	(もっと引用したいところで、とりわけ引用を省略したくなかったが、紙幅が尽きた。)
---	--

第 17 章 紺碧と銀色

XVII. Azur et argent	第 17 章 紺碧と銀色
— Deux ou trois critiques, qui ont bien voulu s'occuper d'Allen, n'y ont vu que quatre interlocuteurs, et celui qu'ils ont ainsi oublié est précisément l'Amateur.	2、3 の批評家は、ありがたくも『アレン』を論評してくれつつ、4 人の対話者しかそこに見なかったが、このように彼らが忘れていた発話者が、まさしく「アマチュア」である。
Pourtant son rôle est considérable, et il dit son mot de temps en temps, et lui et sa voiture « bleu d'azur et aluminium argenté » ⁴⁰³ sont « un peu là » ⁴⁰⁴ , comme on disait à l'époque où on peut placer le « voyage par la route ».	しかしながら彼の役割は重要なもので、彼は時々言葉をはさみ、また彼と彼の「紺碧の青と銀のアルミニウム色」の車は、「陸路の旅」がなされたと想定できる時代に流行していた表現を使うなら「いささか存在感を」持っている。
D'autres ont fait de l'Auteur l'heureux propriétaire de cette belle et puissante machine ⁴⁰⁵ .	他の何人かの批評家は、「著者」を美しく力強いこの車の幸福な所有者と見なした。

⁴⁰² ラルボーはトゥルノーへの 1929 年 3 月 11 日付の書簡において、「著者解題」でダルシル、ガニョン、トゥルノーの書評の一部を取り上げたことを伝え、さらに「この作品のすぐれた論評であるこれらの記事からわずかな文章しか引用できなかったことだけが心残りです」と述べている。 Cf. « Une de ces notes cite des fragments des articles que vous, M. C. Gagnon et M. Burriot [-] Darsiles avez bien voulu consacrer à mon livre, soit sa publication en revue, soit après la publication de la première édition illustrée. [...] Je regrette seulement de n'avoir pu citer que quelques phrases de ces articles qui sont un excellent commentaire du texte. », « Lettre à Robert Tournaud (du 11 mars 1929) », in Valery Larbaud, *Lettres d'un retiré*, op. cit., pp. 204-205.

⁴⁰³ Voir Allen, *Pléiade*, p. 731.

⁴⁰⁴ Cf. « Fam. Être un peu là. Tenir sa place, jouer un rôle important. », *Trésor de la langue française*, op. cit., t. 10, 1983, p. 876, s.v. là.

⁴⁰⁵ ラルボーはギョーマン宛ての 1927 年 4 月 9 日付の書簡において、1921 年のブルボネの散策で利用した友人の車がモデルになったと述べている。 Cf. « En effet, il y a un peu du « Journal de Quasie » à la base de « Allen ». Mais l'excursion que j'avais en vue quand je l'ai composé a eu lieu en 1921, dans la voiture d'un ami qui est celle qui est décrite dans « Allen » et non pas la modeste « Quasie ». », la lettre de Valery Larbaud à Émile Guillaumin du 9 avril 1927, « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin (suite et fin) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 17, 1959, p. 358. なおこの事柄については次の論考を参照されたい。 Takeshi Matsumura, « Émile Guillaumin, Allen de Valery Larbaud et des mots régionaux », in *FRACAS*, numéro 1, op. cit., p. 3.

第 18 章 カンティリア

XVIII. Cantilia	第 18 章 カンティリア
— C'était Chantelle-la-Vieille et non Chantelle-le-Château ; mais dans les actes cette Chantelle aussi a dû être longtemps appelée <i>Cantilia</i> .	それはシャンテル=ラ=ヴィエイユであって、シャンテル=ル=シャトーではなかった。しかし文書の中では、このシャンテルもまた長い間カンティリアと呼ばれていたに違いない。
Le nom latin est aussi joli que le nom français.	ラテン語の名称もまたフランス語の名称と同様にしゃれている。
Sur Chantelle, j'ai donné à <i>la Revue du Centre</i> , qui paraît à Nevers et à Paris, ces feuillets d'un journal de voyage, qu'elle a publiés dans son numéro de mai-juin 1927 ⁴⁰⁶ , avec des bois inédits de mon compatriote Paul Devaux :	シャンテルについて、私はヌヴェールとパリで発行されている『サントル通信』に、次に示す旅行記を寄稿し、『サントル通信』は同郷人ポール・ドゥヴォーの未発表の木版画を添えて 1927 年 5 - 6 月号に掲載した。
« Nous avons suivi la grand'route, qui reste « la route nationale » à travers toute la ville, ne devient, à aucun endroit, « la rue », ne prend nulle part un air citadin ; mais rien que la grand'route entre les maisons.	「私たちが通った幹線道路は、町全体を通過する間も『国道』であり続け、いかなる場所でも『街路』とはなっておらず、都会の雰囲気などどこにもない。家々の間を通る幹線道路以外のなにものでもない」。
« B... me fait remarquer que toutes les femmes que nous rencontrons, — les bourgeoises, — portent chapeau, comme dans	「B…は次のことを私に指摘した。私たちが出会うすべての女性——すなわちブルジョワの女性たち——は、都会と同

⁴⁰⁶ Valery Larbaud, « Chantelle », in *La Revue du Centre*, mai-juin 1927, pp. 85-87 (avec des bois de Paul Devaux) を指す。全文は、本「別冊」163-164 頁に再録した補遺 2「シャンテル（ブルボネ地方）」を参照されたい。本章における引用には原典に加筆・修正した箇所が多くある。細かい異同は指摘しないが、最大の異同は、引用された文「私たちは居心地が悪く、自分たちが残念なことによそ者で、お客さんで、派手で、しかも品がないと感じた」（« Nous nous sentons dépaysés, fâcheusement étrangers, touristes, et voyants, et vulgaires. »）の後半、「touristes」（「お客さん」）以後に続く部分で、原典にあった箇所 « la maison moderne (la seule du pays) [...] »（「唯一の近代的な家」がシャンテルの真ん中で異彩をはなっているという記述）が省略され、その代わりに「私たちもシャンテルの住民たちのように [……] いやむしろ城の亡霊とかに似合うだろう……」が加えられている点である。なお、「B」がレオン=ポール・ファルグを指す可能性、また 1926 年 9 月に書かれたこの旅行記に、別の年にシャンテルを訪れた際のエピソードが示唆されていることについては、本研究の第 2 部第 2 章第 3 節で論じている。

<p>une ville, et que c'est surtout cela qui donne à Chantelle l'air campagnard, l'air d'une bourgade rurale... ce qui donnerait à Chantelle, en cette saison, un aspect un peu citadin, ce serait d'y voir des gens vêtus d'étoffes claires, chandails, blazers, pull-overs multi-couleurs, jupes et pantalons blancs, les dames tête nue, en souliers plats, enfin tout le négligé élégant et gai des « villegiantis », des bourgeois de grande ville en vacances...</p>	<p>じように帽子をかぶり、それがむしろシャンテルに田舎の雰囲気、家もまばらな農村の雰囲気を与えるということ。…この季節にシャンテルにわずかな都会の様相を与えるものがあるとしたら、それは、明るい色の生地の服、セーター、ブレザー、多色使いのプルオーバー、白いスカートや長ズボンを身につけた人々、平底靴を履いた無帽のご婦人方を見かける、つまり、「行楽客たち」〔イタリア語〕、ヴァカンス中の大都市のブルジョワたちの上品で明るい、くだけた身なりをそこに見ることだったのであると……。</p>
<p>C'est de quoi nous avons l'air, et on nous regarde beaucoup.</p>	<p>それこそが私たちの身なりだったので、しょっちゅう視線を向けられることになった。</p>
<p>Nous nous sentons dépaysés, fâcheusement étrangers, touristes, et voyants, et vulgaires.</p>	<p>私たちは居心地が悪く、自分たちが残念なことによそ者で、お客さんで、派手で、しかも品がないと感じた。</p>
<p>Nous devrions, comme les habitants de Chantelle, être en deuil.</p>	<p>私たちもシャンテルの住民たちのように、喪服を着ればよかった。</p>
<p>Un deuil pauvre ou un demi-deuil maussade seraient seuls en harmonie avec la tristesse du grand village désespérément accroché à la route où rien ne passe ; avec ses faubourgs écrasés entre la solitude du ciel, et le silence des champs, — comme Philippe, dans <i>le Père Perdrix</i>⁴⁰⁷, a bien exprimé l'abandon et l'irréparable pauvreté de ses faubourgs des petites villes bourbonnaises ! — avec le château, ou plutôt le spectre du château ducal</p>	<p>質素な喪服か陰気な半喪服だけが、何も通らない街道に絶望的にしがみついている大きな村の陰気さに似合うだろう。空の孤独と畑の静けさの間で押しつぶされた町外れとか、——〔シャルル＝ルイ・〕フィリップは、『ペルドリ爺さん』の中で、ブルボネ地方の小さな町の周辺の打ち捨てられた状態や、手の施しようのない貧しさを何と巧みに描いたことか！——あるいはムーランの画家が描</p>

⁴⁰⁷ 1902年発表。Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes*, 5 tomes, édition présentée et établie par David Roe, Moulins, Éditions Ipomée, 1986, t. II, pp. 236-355 所収。

de Chantelle qui se dresse triomphalement dans le bleu des fonds du Maître de Moulins ⁴⁰⁸ ...	いた背景の青の中に堂々とそびえ立つシャンテルの公の城、いやむしろ城の亡霊とかに似合うだろう……」。
« Ce soir, au soleil couchant, de la plate-forme qui est la promenade publique (et le champ de foire), le ravin, avec ses flancs couverts d'une végétation épaisse et courte, fraîche et verte, encore dans la lumière au sommet, était déjà plein de nuit dans ses profondeurs.	「今夜、夕暮れ時に、公共の遊歩道（と市場の会場）のデッキから見える峡谷は、生い茂った短く清々しい緑色の草木に側面が覆われ、その頭頂部はなおも光の中にあるが、その底の部分には闇がもう満ちていた。
Retranchement énorme, qui semble un travail humain abandonné ; long corridor étroit entre les bords d'une colline cassée en deux morceaux, entaillée jusqu'au niveau de la plaine (invisible de cette plate-forme).	人間の手によってつくられ放棄されたかのような巨大な砦。二つに割られた（このデッキからは見えないが）平野まで切り込みが入った丘の縁の間の長く狭い隘路」。
« Je me suis rappelé un après-midi de juillet passé dans un grand jardin de maison bourgeoise, ici, au bas du jardin, au fond du ravin.	「私はこぎれいな家の大きな庭で過ごした、ある7月の午後を思い出した。ここ、この庭の下、峡谷の底にあった家である。
On y était dans une ombre très douce, et très loin du ciel du plein été, et les visages étaient éclairés par le reflet de l'eau.	とても心地よい日陰、真夏の空のはるか彼方において、人々の顔が水の反射で照らされていた」。
« Mais sous le ciel déjà pâli de septembre, aujourd'hui, le ravin laissait deviner son aspect de l'hiver, la chute des feuillages qui voilent sa grande désolation de l'hiver.	「だが今日、9月のすでに褪せた空の下では、峡谷は冬の様相、つまり冬の深い悲しみを覆う落ち葉を感じさせていた。
C'était bien le jour et le moment pour songer à la méditation de Chartes III regardant à ses pieds cette profondeur, — tandis qu'il préparait son itinéraire dans les vallées du Massif central ⁴⁰⁹ , avec ses fidèles	それはまさにシャルル三世の瞑想に思いを馳せるべき日であり時であった。——腹心たちとともにエルマンまで、続いてポンペランだけを連れて中央山地の谷での旅程を準備しながら——足下

⁴⁰⁸ 16世紀に活躍した Jean Hey（ジャン・エイ、生没年不詳）の作品を指していると思われる。

⁴⁰⁹ フランスの中央高地。

jusqu'à Herment ⁴¹⁰ , et puis seul avec Pompéran ⁴¹¹ , —et, en face de lui, l'énorme levée de terre de l'autre bord, sans horizon ⁴¹² . »	にこの谷底を見て、正面の川向うに視界をさえぎる巨大な隆起を見つめていたシャルル三世の」。
--	--

第 19 章 隠遁生活

XIX. Retirance	第 19 章 隠遁生活
— Le mot a dû, à quelque époque, appartenir au français commun.	この単語〔retirance〕は、ある時期、一般的なフランス語だったはずである。
Je ne l'ai entendu qu'en Bourbonnais, et dit par de vieilles gens.	私はそれをブルボネ地方でしか聞いたことがなく、お年寄りたちだけが使っていた。
Il est beau, et ne devrait pas faire double emploi avec la « retraite » dont les forces ont à soutenir plusieurs significations : militaire, religieuse, etc.	この単語は美しく、軍事上の意味〔退却〕や宗教上の意味〔黙想〕など内容的に複数の意味を持たなければならない「 ^{ルトレット} retraite」と重複することはないだろう。
Il pourrait désigner tout particulièrement l'action de l'habitant d'une grande ville qui va s'installer pour quelque temps, — un mois, six mois, un an, — soit à la campagne, soit dans une paisible ville provinciale.	この単語は、田舎に、あるいは地方の静かな町にしばらくの間——1 か月、6 か月、1 年——住みに行く大都市の住民の行動を特に示すことができるだろう。
Les « retirances » des hommes d'étude et des gens de lettres parisiens en province française et même en province étrangère, deviennent assurément de plus en plus fréquentes : « De la part de l'auteur absent de Paris. »	パリの学者たちと文人たちのフランスの地方や、さらには外国の地方での「 ^{ルトイランス} 隠遁生活」は、間違いなく次第に頻繁なものになっている。「パリに不在の作者に代わり」という献辞が示す通りである。
Je causais récemment avec un aîné, un maître	私は最近ある年長の、著名な大作家と、パリで文学の仕事や、熟考、またあらゆる

⁴¹⁰ オーヴェルニュ地域圏、ピュイ＝ド＝ドーム県の都市。

⁴¹¹ オーヴェルニュ地方の貴族。

⁴¹² 『旧きブルボネ』によれば、1523年9月9日の夜から10日にかけての出来事である。Voir « Charles III, 9^e duc de Bourbon, connétable de France », in Achille Allier, *L'Ancien Bourbonnais*, réédition, Moulins, Crépin-Leblond, t. 2, 1937, *op. cit.*, pp. 532-534.

<p>illustre ⁴¹³ , de la difficulté croissante du travail littéraire, de la réflexion, et même de tout commerce intellectuel, à Paris, — je répétais, en somme, ce que j’ai fait dire au Poète dans le chapitre IV (« après tout, c’est vrai que ces petites villes endormies... »).</p>	<p>る知的交流が次第に困難になってきていることを話していた——要するに、私が「詩人」に第4章で言わせたこと（「いずれにしても、これらの眠れる小さな町が……」）を繰り返していた。</p>
<p>Il m’approuvait, lui qu’une haute situation officielle et une renommée plus qu’européenne désignent à l’attention indiscreète d’une foule de fâcheux ; et comme je prononçais de nouveau « Paris... » il corrigea : « ex-Paris ».</p>	<p>彼は私に同意していた。彼は公的な高い地位とヨーロッパを超える名声のために、多くのうるさ方の差し出がましい注目を受けていた。そして私が再び「パリ……」と言いかけると、彼は訂正したのだ。「かつてのパリ」と。</p>

⁴¹³ ラルボーからジョルジュ・ジャン=オーブリへの1929年9月12日付の書簡によれば、この人物はラルボーが敬愛していたフランスの詩人 Paul Valéry（ポール・ヴァレリー、1871-1945）を指している。Cf. Takeshi Matsumura, « Allen, Larbaud et Jean-Aubry : remarques littéraires et lexicographiques », in *FRACAS*, numéro 10, *op. cit.*, pp. 2-3. またラルボーは季刊誌『コメルス』の出資者であるバツシアール大公妃に宛てた、1924年10月26日付の書簡において、共同編集責任者だったヴァレリーへの敬意を、「私が熱意をもってこの雑誌の構想に加わった頃、私の動機は次のようなものでした。／あなたと大公が私に対して示してくださったすべてのご厚意に、私にできる限りの手段でお応えし、私の友情を証し、あなたのそれにふさわしいものにする。／私の名前がポール・ヴァレリーの名前のそばに並べられているのを見ること——私が誇りに思う虚栄です。／私たちの最良の詩人のうちの二人と考える、レオン=ポール・ファルグとサンレジェ・レジェにもっと多くのものを書く機会を与えること。／そして最後に、あなたとともに他のどんな雑誌とも似ていない、すなわちそのタイトルにも関わらず、商業化されない雑誌を作ること」と表している。（« Lorsque je suis entré, avec enthousiasme, dans l’idée de cette revue, mes motifs étaient les suivants : / répondre dans la mesure de mes moyens à toutes les bontés que vous et le Prince avez eues pour moi, vous prouver mon affection et mériter la vôtre ; / voir mon nom figurer près de celui de Paul Valéry, — vanité dont je suis fier ; / donner à L.-P. Fargue et à Saintléger Léger, que je considère comme deux de nos meilleurs poètes, l’occasion de produire davantage / et enfin, fonder avec vous une revue qui ne ressemblerait à aucune autre, c’est-à-dire qui, en dépit de son titre, ne se commercialiserait pas. », la lettre de Valéry Larbaud à La Princesse de Bassiano du 26 octobre 1924, in *Lettres à Adrienne Monnier et à Sylvia Beach, 1919-1933*, *op. cit.*, p. 202. イタリアック強調は原典、下線強調は引用者）

第 20 章 セリイ

XX. Cérilly ⁴¹⁴	第 20 章 セリイ
— Encore un nom que j’aurais voulu introduire dans <i>Allen</i> .	これも私が『アレン』に入れたかった名前の一つである。
Mais on sait bien que c’est la ville natale de Charles-Louis Philippe, de Marcellin Desbouts ⁴¹⁵ , et du géographe et explorateur François Péron ⁴¹⁶ , dont le nom aurait dû figurer dans la liste des « ducs spirituels » ⁴¹⁷ .	とはいえ周知のとおり、シャルル=ルイ・フィリップ、マルセラン・デブータン、地理学者で探検家のフランソワ・ペロンの生まれた町である。彼らの名は「精神上の君主たち」のリストに挙げるべきだったであろう。
François Péron a laissé des ouvrages qu’on pourrait rééditer, — après ceux d’Achille Allier.	フランソワ・ペロンは——アシル・アリエの著作の後にだが——再版してもよい複数の著作を残している。
Grand voyageur, comme plusieurs de nos duc[s] temporels.	幾人もの霊的ならざる意味での我々の公たちのように、偉大な旅行家である。
Et sait-on qu’une île voisine de la côte d’Australie s’appelle encore François-Péron ? ⁴¹⁸	それからオーストラリアの海岸に隣接する島が今でもフランソワ=ペロン島と呼ばれていることはご存知だろうか？
En réalité, sur une ébauche, au crayon, du chapitre VII, une phrase de l’Éditeur mentionnait l’île François-Péron, et le Bibliophile, pour le taquiner, parlait, à ce propos, des « colonies bourbonnaises ».	実は、第 7 章の鉛筆で書いた下書きでは、「編集者」のある発言がフランソワ=ペロン島に言及しており、また「愛書家」が彼をからかうために、それについて「ブルボネ地方の植民地」と語っていた。

⁴¹⁴ ムーランの西北約 45 キロに位置する町。2010 年の人口は 1351 人。

⁴¹⁵ セリイ生まれの画家、版画家、小説家（1823-1902）。

⁴¹⁶ セリイ生まれの地理学者、探検家（1775-1810）。

⁴¹⁷ 「本編」第 7 章における「編集者」の発言に由来する説明で、歴史上の ducs（公たち）はすでに存在していないが、ブルボネ地方には心の拠りどころとしての公たちが存在し続けていることを示している。Voir *Allen, Pléiade*, p. 755. 訳語は西村靖敬『1920 年代パリの文学—「中心」と「周縁」のダイナミズム—』、多賀出版、2001 年、39 頁を参考にした。なおセリイでは 1999 年 5 月 15、16 日に、シャルル=ルイ・フィリップの死後 100 年を記念し、フィリップ、ペロン、デブータンの業績を顕彰するシンポジウム « Une petite ville, trois grands hommes »（「一つの小さな町、三人の偉大な人物」）が開催された。シャルル=ルイ・フィリップ『小さな町で』、前掲書、257 頁の「解説」を参考にした。

⁴¹⁸ 西オーストラリアのインド洋に面するペロン半島には、フランソワ・ペロン国立公園がある。

Mais cela fut vite sacrifié comme une surcharge, et d'autant plus lourde que la pensée était plus légère : surcharge de mots, surcharge d'encre, gaspillage.	しかしそれは重量超過であるかのように早々に処分された。考え方が軽かっただけに、いっそう重たかったからだ。言葉の重ねすぎ、インクの無駄づかい、浪費だったのだ。
--	--

第 21 章 これらの著者解題

XXI. Ces notes	第 21 章 これらの著者解題
— On m'avait demandé, pour la seconde édition d' <i>Allen</i> ⁴¹⁹ , illustrée par mon compatriote Paul Devaux, « quelques pages inédites », et j'avais d'abord songé à donner une série de variantes prises dans les quatre copies qui précédèrent l'impression en revue et la première édition, illustré par Coubine.	私は同郷人ポール・ドゥヴォーによる挿絵の入った『アレン』の第二版のために、「未発表の数ページ」を頼まれた。そこで私はまず雑誌の版とクービーヌによる挿絵入りの初版に先立つ 4 種類の原稿から一揃いの異文を集めて提供することを考えた。
Mais, à l'essai, ce travail me parut fastidieux, et au lieu de choisir et de recopier des variantes, je me suis mis, avec beaucoup d'entrain et de plaisir, à écrire ces notes, — commentaire critique, explicatif, anecdotique, dans lequel j'ai eu pour guides ou modèles, suivis de très loin et sans docilité, tour à tour le <i>Parere dell'Autore</i> qu'Alfieri ⁴²⁰ a placé à la fin de chacune de ses tragédies, et les <i>Marginalia</i> d'Edgar Poe ⁴²¹ , — surtout l'admirable	しかし、試してみると、この作業は私には気乗りがしないように思われた。そこで異文を選んで書き写すのではなく、私は大いなる熱意と喜びを持って、これらの解題を書き始めた——批判的で、説明的で、逸話的な解説を。その解説において私は手引き書あるいは手本として、かなり隔たりがあるし、従順に模倣したわけではないが、アルフィエーリが彼の各々の悲劇作品の最後に挟んだ著者の意見や、エドガー・ポーの『マージナリア』、

⁴¹⁹ オリゾン・ド・フランス版を指す。

⁴²⁰ Vittorio Alfieri (ヴィットーリオ・アルフィエーリ、1749-1803)、イタリアの劇作家。

⁴²¹ 米国の詩人・小説家 Edgar Allan Poe (エドガー・アラン・ポー、1809-1849) の書評集 *Marginalia* (『マージナリア』、1845-49) や物語詩 *The Raven* (『大鴉』 [おおがらす]、1845、『アレン』では *Le Corbeau* と表記)、特に『大鴉』を解説した *The Philosophy of Composition* (『詩の原理』、1846) を参考にしたこと。ポーは『詩の原理』の中で、『大鴉』の構成が計算し尽くされたものであることを示し、読者のさらに深い理解をうながしていた。

<p>analyse logique qu'il a faite de son propre poème, <i>le Corbeau</i> et j'ai parfois aussi songé au <i>Journal des Faux-Monnayeurs</i>⁴²² d'André Gide.</p>	<p>——とりわけポーが彼自身の詩『大鴉』におこなった見事で理論的な分析を代わる代わる真似たり、また時折アンドレ・ジッドの『贋金作りの日記』のことを思い浮かべたりもした。</p>
<p>Mais si j'ai, dans une dizaine de notes, essayé de montrer la genèse et le mécanisme de mon ouvrage, et de le démonter et remonter, comme a fait E. A. Poe, je me suis abstenu de prononcer un jugement d'ensemble sur <i>Allen</i>, un <i>parere</i> alfiérien.</p>	<p>だが私は、この10ほどの解題において、E. A. ポーがそうしたように、私の作品の創作過程や構造を示し、それを分解して再び組み立てることを試みたとしても、『アレン』についての全体の評価、アルフィエーリ的な意見を述べることは差し控えた。</p>
<p>Ce que je peux dire cependant, sur ce point, c'est qu'<i>Allen</i> est bien la « chose bourbonnaise » que j'avais longtemps projeté d'écrire, et un ouvrage consacré à ma province natale, — ou mon duché natal, comme dirait l'Éditeur.</p>	<p>しかしながら、私がこの点について言えることは、『アレン』こそ長年書きたいと計画していた「ブルボネ地方の事柄」であり、私の生まれ故郷——あるいは「編集者」が言うであろうように、私の生まれた公国——に捧げる作品だということである。</p>
<p>Or, tandis que je travaillais à ces notes, un roman, vu à la devanture d'une librairie, retint mon attention : <i>Andorra ou les hommes d'airain</i>, par Isabelle Sandy⁴²³, auteur d'un <i>Llivia ou les cœurs tragiques</i>⁴²⁴, dont le titre m'avait fait déjà regretter de n'avoir pas assez de temps pour lire tout ce qui, dans la production contemporaine, éveille ma curiosité.</p>	<p>ところで、私がこの著者解題に取り組んでいる時、ある書店のショーウィンドーで見かけた一冊の小説が私の注意を引いた。すなわちその題名が、現代の文学作品の中で私の好奇心をそそるものすべてを読む十分な時間を持ってないことを以前私に後悔させた『リビアあるいは悲痛な心』の著者、イザベル・サンディの『アンドラあるいは非情な人々』である。</p>

⁴²² アンドレ・ジッドの1926年の作品。

⁴²³ アンドラ共和国に隣接するフランスのAriège（アリエージュ県）Cos（コス）生まれの作家（1884-1975）の*Andorra ou les hommes d'Airain*, Paris, Plon, 1923を指す。

⁴²⁴ Isabelle Sandy, *Llivia ou Les cœurs tragiques*, Paris, Plon, Nourrit et Cie, 1926.

(La république d'Andorre et l'enclave espagnole de Llivia ⁴²⁵ , m'ont toujours attiré, et j'espère pouvoir les visiter un jour.)	(アンドラ共和国とスペインの飛び地リビアは、常に私の心を引きつけており、私はいつかそれらの土地を訪問できればと思っている。)
J'achetai donc <i>Andorra</i> et vers le milieu de l'avant-propos, je lus ceci :	そこで私は『アンドラ』を買い、前書きの中ほどで以下のことを読んだ。
« À ce point de mes réflexions, je compris mieux le savoureux génie d'un Kipling, d'un Jack London, d'un Henry David Thoreau.	「私の思索のこの点で、私はキプリング、ジャック・ロンドン、ヘンリー・ダヴィッド・ソローといった人たちの趣のある特質をよりよく理解した。
D'instinct et de parti pris, chacun recherche dans les dernières solitudes l'homme primitif, moins pour l'opposer au civilisé que pour le faire cheminer comme un guide à son côté.	彼らは本能的に、また意図的に、極度の孤独の中に原始人を追い求めているが、それは原始人を文明人と対立させるためというよりはむしろ、彼のかたわらでガイドとして彼を歩ませるためである。
À la littérature cosmopolite d'un Valery Larbaud, d'un Paul Morand, d'un Giraudoux ⁴²⁶ , <i>s'oppose</i> (c'est moi qui souligne), en un heureux souci d'équilibre humain, celle d'un Alphonse de Chateaubriant [<i>sic</i>] ⁴²⁷ , d'un Pérochon ⁴²⁸ , d'un Pesquidoux ⁴²⁹ , d'un Pergaud ⁴³⁰ ,	ヴァレリー・ラルボーやポール・モラン、ジロドゥーのような作家による国際色豊かな文学には、人間的な均衡への的確な関心において、アルフォンス・ド・シャトーブリアンや、ペロション、ペスキドゥー、ペルゴー、フレッド〔フレデリック〕・ルーケットやその他何人かのよう

⁴²⁵ フランス側にあるスペインの飛び地。

⁴²⁶ ジャン・ジロドゥーを指す。本「別冊」95-96頁の注269を参照されたい。

⁴²⁷ フランスの作家(1887-1951)、原典 *Andorra ou les hommes d'airain* では Châteaubriant と表記(下線強調は引用者)。1911年、*Monsieur Des Lourdines* (『ムッシュー・デ・ルルディーヌ』)でゴンクール賞を受賞した。

⁴²⁸ フランスの作家 Ernest Pérochon (エルネスト・ペロション、1885-1942)。1920年に *Nêne* (『眠れる沼』)でゴンクール賞を受賞。

⁴²⁹ フランスの作家 Joseph de Pesquidoux (ジョゼフ・ド・ペスキドゥー、1869-1946)。1927年にアカデミー・フランセーズ文学賞のグランプリを受賞、1936年にはアカデミー・フランセーズ会員に選ばれた。

⁴³⁰ フランス東部フランシュ・コンテ地方出身の作家 Louis Pergaud (ルイ・ペルゴー、1882-1915)。1910年に *De Goupil à Margot, histoires de bêtes* (『キツネからカササギまで：動物物語』)でゴンクール賞を受賞。映画化された *La Guerre des boutons* (『わんぱく戦争』、1912)など、寡作ながらも故郷の自然と住民を題材に、方言をふんだんに取り入れた地方色豊かな作品を執筆した。第一次世界大戦で戦死。

d'un Fred. Rouquette ⁴³¹ et de quelques autres.	な作家の文学が対立する（強調は引用者）。
Si je chante les bois, c'est parce que l'usine sévit, et à cause de la ville surpeuplée, je célèbre la vie au village. » ⁴³²	私が森を讃えるのは、工場が我がもの顔をするからであり、また都会が人口過剰であるがゆえに、私は村の生活を称賛するのだ」。
Ces lignes me présentaient un problème qui me touchait d'assez près.	この文章は私に密接に関わる一つの問題を提示していた。
Allen était-il vraiment le livre bourbonnais que j'avais voulu écrire ? ou encore : l'« essence », comme avait dit M. Robert Tournaud ⁴³³ , de ma « province natale », n'était-elle pas précisément là où je n'avais même pas songé à la chercher : dans le peuple des campagnes, dans ses coutumes, ses habitudes, ses penchants et ses passions, et, en deux mots : dans la <i>tradition rurale</i> , et non dans la tradition (ce qu'il en reste) <i>citadine</i> et politique (= historique), du Bourbonnais ?	『アレン』は本当に私が書きたかったブルボネ地方の本だったのだろうか？ あるいはまた、ロベール・トゥルノー氏が述べた私の「生まれた故郷」の「本質」は、私が求めようとも思わなかったところにまさににあったのではないだろうか。すなわち、田舎の人々、彼らの社会的なしきたり、個人的な習慣、傾向、情熱の中に。要するに農村の伝統の中にあって、ブルボネ地方の（まだ残っている）都会的・政治的（＝歴史的）伝統の中にはなかったのではないか？
Un peu de réflexion m'a ôté ce doute.	少し考え直してみて、この疑念は取り除くことができた。
Ces mots, « littérature cosmopolite », sont trompeurs : il suffit, pour s'en rendre compte, de songer à la part que Jean Giraudoux,	「国際色豊かな文学」という、この語句が誤解のもとなのである。それを理解するには、まさにジャン・ジロドゥーが彼

⁴³¹ モンペリエ出身の作家、旅行家 Louis-Frédéric Rouquette (ルイ＝フレデリック・ルーケット、1884-1926)。

⁴³² Voir Isabelle Sandy, *Andorra ou les hommes d'Airain*, Paris, Librairie Plon, 1923, p. 10.

⁴³³ 「著者解題」第16章「ブルボネ地方の出版物からのいくつかの抜粋」で、トゥルノーの批評から引用した、「精神的な権力者たちへの大層奇妙な贈り物である。長い旅の後、……『バラいっぱいブルガリア』から霧のロンドンへの『A. O. バルナブース全集』の後、……（作者は）彼の故郷、公国に関して、そこにある生命力あふれるものを我々に復元して示したのだ、……本質を」の部分を目指す。（« Une bien curieuse offrande aux puissances spirituelles. Après les voyages lointains... après *A. O. Barnabooth*, de la « Bulgarie pleine de roses » aux brouillards londoniens... [l'auteur] nous restitue de sa province natale, du duché, ce qu'il y a en elle de vivant... l'essence. », « Note XVI. Quelques extraits de la presse bourbonnaise », *Allen, Pléiade*, p. 770.）トゥルノーの批評全文は、本「別冊」161-162頁を参照されたい。

justement, a faite au Limousin dans son œuvre.	の作品においてリムーザンに与えた役割を思い起こすだけでよいだろう。
Il y a certainement un contraste apparent entre la littérature qui, « d’instinct et de parti pris, recherche... l’homme primitif », et celle dont <i>Siegfried et le Limousin</i> ⁴³⁴ est un si bel exemple, et dans ce cas on pourrait opposer une littérature « rurale » à une littérature « citadine ».	「本能的に、また意図的に……原始人を追い求める」文学と、『ジークフリートとリムーザン人』がその好例である文学との間には、確かに対立があるように見え、この場合「農村の」文学と「都会の」文学を対立させることができそうである。
Mais ces classifications n’ont pas une grande portée, et à réussite, ou à talent, égaux, l’opposition est bien superficielle (D’Annunzio ⁴³⁵ « citadin » et Verga ⁴³⁶ « rural ») ⁴³⁷ .	だがこうした分類には大した価値がなく、作品の出来や作家の才能が同等であるとしても、この対立はごく表面的なものである（ダンヌンツィオの「都会」とヴェルガの「農村」のように）。
Des livres tels que <i>la Bonne Madeleine et la pauvre Marie</i> ⁴³⁸ de Charles-Louis Philippe, ou encore <i>la Vie d’un simple</i> ⁴³⁹ d’Émile Guillaumin, qui sont inspirés de la vie rurale moderne dans le département de l’Allier, ne sont ni plus ni moins bourbonnais que la <i>Vie de tel ou tel de nos ducs</i> par Achille Allier, ou même que l’œuvre de Jean de Lingendes, poète de cour, dont les bergers ont le ton et les manières des grands seigneurs et dont les	シャルル=レイ・フィリップの『優しいマドレーヌと哀れなマリー』や、エミール・ギョーマンの『ある百姓の生涯』のようにアリエ県の現代の農村の生活に着想を得た本は、アシル・アリエによる我々の公たちの誰その生涯、あるいは宮廷詩人ジャン・ド・ランジャンドの、そこで羊飼いたちが大領主たちの口調とふるまいを見せ、作品に出てくる風景がアリエの谷と、彼がモドンと呼ぶムーラ

⁴³⁴ ジャン・ジロドゥーの1922年の作品。

⁴³⁵ Gabriele D’Annunzio (ガブリエーレ・ダンヌンツィオ、1863-1938)、イタリアの詩人、作家。

⁴³⁶ Giovanni Verga (ジョヴァンニ・ヴェルガ、1840-1922)、イタリアの小説家。短篇集 *Vita dei campi* (『田舎の生活』、1880) には、シチリア島内の田舎での出来事が描かれている。

⁴³⁷ 原注 « Ou Hardy « rural » et Meredith « citadin ». » (「あるいはハーディの「農村」とメレディスの「都会」のように。») Thomas Hardy (トーマス・ハーディ、1840-1928) はイギリスの作家、詩人。郷里ドーチェスターのウェセックスを舞台とする牧歌的な作品が多い。George Meredith (ジョージ・メレディス、1828-1909) はイギリスの小説家。知的な批評精神上で上流社会を見た作品を残している。

⁴³⁸ 1898年出版。

⁴³⁹ 1904年出版。

<p>paysages sont ceux de la vallée de l'Allier et des environs de Moulins, qu'il appelle Modone⁴⁴⁰.</p>	<p>ン近郊の景色であるような作品と比べてさえも、全く同じようにブルボネ的である。</p>
<p>J'ai suivi, de « parti pris », — et vraiment je n'en pouvais guère prendre d'autre, — la tradition « citadine » et, à un siècle de distance, j'ai essayé, selon mes moyens, de continuer et de développer la pensée de l'auteur romantique de <i>l'Ancien Bourbonnais</i>.</p>	<p>「意図的に」——そして実際には他の決断をすることがほとんどできなかったが——私は「都会の」伝統に従い、一世紀の時をおいて、私は私のできる範囲で、『旧きブルボネ』のロマン派的な作者の考え方を継承し発展させようと試みた。</p>
<p>Je crois donc pouvoir offrir <i>Allen</i> en tout premier lieu à mes compatriotes, comme un livre écrit pour eux, et ainsi le confier, avec mon nom, à leur mémoire. V. L.</p>	<p>それゆえ私は『アレン』をまずは私の同郷の人たちに、彼らのために書いた本として捧げることができよう。そうすることでこの本を、私の名前とともに、彼らの記憶に残せると思うのである。 V. L.</p>

⁴⁴⁰ ジャン・ド・ランジャンドの作品集における記述では、綴りが « Modonne » となっている。Cf. « Je [je] dressay [dressai] mes pas vers Modonne. », Jean de Lingendes, *Œuvres poétiques*, édition critique avec une introduction et des notes publiée par E.T. Griffiths, Paris, Hachette, 1916, p. 114. (「私はモドンの方へと足を向けた。」下線強調は引用者) ムーラン近郊には「モドン」に類する地名が見当たらないが、ラルボー研究者のフランソワーズ・リウールによれば、「単にランジャンドがムーランのことをモドンと呼んでいただけであろう。この地名の確かな語源にはたどり着けないが、ランジャンドの作品の文脈から判断して、モドンはその地域だけでなく、ムーラン自体を指している。当時ムーランはとても小さな町だったからだ」とのことである（電子メールでの問い合わせに対する 2013 年 6 月 16 日の回答による）。

補遺

1. 「著者解題」第16章に引用した記事三点

以下はラルポーが「著者解題」第16章で抜粋を引用した、ブルボネ地方の定期刊行物（日刊紙および雑誌）に掲載された同郷の批評家による三本の記事の全文を再録したものである。第16章のテキストと比較していただけるよう、おおよその引用部分を論者が下線強調で示している。

1. Henri Buriot-Darsiles, « LETTRES ET ARTS : VOYAGES », in *Courrier de l'Allier*, le 5 mai, 1927, p. 3a-d.

Pour marcher de pair avec notre vieux *Courrier* qui, comme la nature en ce mois de mai, s'est efforcé et a, ce me semble, assez bien réussi à se rénover, nous allons, en ce premier feuillet littéraire, secouer un peu, au moins au figuré, la poussière du cabinet de travail et, puisque le printemps nous y invite, voyager !

Pour notre premier voyage, prenons en main cette précieuse édition que l'on vient de publier d'*Allen* (1), récent ouvrage de notre compatriote Valery Larbaud. Cet *Allen*, que des bibliographes évidemment peu au courant de l'histoire bourbonnaise ont défiguré en *Albin* et que, sans l'avoir ouvert, ils ont peut-être bien catalogué roman, s'est déjà heurté à pas mal d'incompréhension. Lorsqu'il parut, il y a quelques semaines, dans la *Nouvelle Revue française*, j'en ai lu, dans des revues de la presse, des extraits si intelligemment choisis qu'ils faisaient dire à l'auteur presque le contraire de sa pensée, et je sais des gens qui, gênés sans doute par la forme adoptée, n'y ont rien compris du tout. Voyons donc ce qu'est *Allen*.

(1) Éditions d'art « Aux Aldes », 122, boulevard Murat, Paris XVI^e. Ce volume de grand luxe a été illustré de neuf eaux-fortes, se rattachant en partie au Bourbonnais, par O. Coubine, l'artiste russe actuellement si coté à Paris. De ces eaux-fortes, un tirage à part, sur japon, vient d'être offert par M. Valery Larbaud à la Société d'Émulation, pour ses collections.

C'est, sous la forme d'abord d'une conversation, à Paris, entre quatre personnes, un Poète, un Bibliophile, un Éditeur et l'Auteur, ensuite d'un court récit (tout cela n'est que le prologue), puis, à nouveau, d'une causerie entre ces quatre personnes, roulant en auto sur les grandes routes entre la capitale de la France et celle du Bourbonnais, et, finalement, assises à la terrasse du principal hôtel de notre

bonne ville (il n'est pas nommé), c'est, dis-je, à la fois une série d'impressions de route et, accompagnant un aveu, la défense et illustration d'une thèse qui devrait nous être chère à tous.

Les impressions ! Ici, je suis bien embarrassé pour faire un choix. Elles sont toutes pittoresques, certaines sont exquises, et il en est de toutes neuves, tant en elle [*sic*]-mêmes que par la façon dont elles sont traduites. Voici, à Gien (« à moins que ce ne soit à Montargis), » une jolie église dont, dit l'un des interlocuteurs, « j'oublie le nom ; mais je me souviens d'une chose comme l'intérieur d'une belle boîte de dragées, rose et bleu ciel ; une église pour un *Manon Lescaut* illustré en couleurs, avec Des Grieux en chaire ». Voici « des villes riveraines de la Loire, en amont du coude vers Orléans », à qui « le fleuve trop large pour elles..... donne un air égaré, peureux, résigné à la tristesse, à l'abandon ». Puis c'est, chez nous, « cette petite église de Saint-Menoux, toute féminine, avec la procession de ses jolies colonnes et leur ronde gracieuse et modeste derrière l'autel », Saint-Menoux, « le bijou ».

Et, enfin, c'est Moulins, « endormie autour du fantôme d'un grand palais rose », la ville qui n'est que « silence et façades roses et noires », la ville aux « grands jardins entourés de murs. Ville lévitique aussi, avec tant de couvents tintants. Et aux beaux soirs d'été, ville rêveuse, attendrie, sous les longs tournoisements et les cris d'hirondelles. Dans la géographie de la France des hirondelles, Moulins doit être une des villes les plus importantes du Centre. Peut-être à cause du silence et des jardins ».

L'aveu, c'est que Valéry Larbaud (qui, ici, nous semble bien parler lui-même par la bouche de l'Éditeur, tandis que, ailleurs, il confie tantôt à l'un, tantôt à l'autre des interlocuteurs le soin d'exprimer ce qu'il pense) n'a pas toujours été le Bourbonnais — conscient, si je puis dire — qu'il est maintenant. Il fut un temps où toutes ses « pensées appartenaient à Paris », un temps où il disait : « Je *rentre* à Paris », et : « Je *vais* en province », un temps où il n'avait aucun désir de connaître ce qu'il appelait « avec mépris : la Région ». Mais une évolution s'est faite en lui, et le voici qui revendique hautement l'honneur d'être né en ce vieux duché de Bourbonnais, et le voici qui, dans « un jeu de l'imagination pour les jours de pluie à la campagne, un jeu à base de lectures historiques et de rêveries politiques sur l'avenir de l'Europe », imagine pour sa province natale un renouveau.

C'est ici qu'intervient la thèse, et c'est ici surtout qu'il ne faut pas se méprendre. Un grand mot est prononcé dans ces pages, un mot qui sonne mal à la plupart des oreilles françaises : autonomisme ! Alors, quoi ? Ce n'est pas assez de

la Bretagne et de ses séparatistes ! Vous aussi, Larbaud, vous voudriez voir rétablie l'indépendance de votre petite partie ?

Non. L'autonomisme que nous expose l'Éditeur de Valery Larbaud n'est, au fond, qu'une fiction. Il ne sert qu'à présenter avec plus de relief un passé qui fut grand (sa seule tache, la « trahison » du Connétable, n'est peut-être même pas aussi grave qu'on le crie partout !) et un présent qui a encore quelques gloires (1), mais qui, hélas ! comparé à ce passé, est presque un néant. Et ce que Larbaud voudrait, ce que doivent vouloir avec lui, et tous les véritables régionalistes, et tous les vrais patriotes, et tous ceux qui rêvent d'États-Unis européens, c'est, dans cette province un peu somnolente, et dans toutes nos provinces, « un réveil, une chaleur et une lumière plus vives, la renaissance de l'initiative, la fin de la saison d'ennui », c'est la France, et puis l'Europe, « à la fois unie et consciente de sa vie sur tous les points de son étendue », sur tous les points, soulignons-le, et non pas seulement en quelques centres privilégiés.

Telle est, si je ne me trompe, la thèse d'Allen. Que ceux qui veulent la défendre, la faire triompher, adoptent donc, eux aussi, et inscrivent sur leur pennon la vieille devise de l'ordre de l'Écu d'Or, fondé par Louis II de Bourbon : Allen ! C'est-à-dire : *Tous ensemble* allons à la défense de nos pays de France !

(1) « Et même une fois notre indépendance perdue nous avons eu encor [sic] des Ducs spirituels qui nous avaient représentés sur la scène du monde : Blaise de Vigenère, Jean de Lingendes, et plus près de nous Théodore de Banville et Charles-Louis Philippe. Et maintenant encore, nous pourrions déléguer au Conseil Amphictyonique du Continent le plus illustre linguiste de l'Europe. Et les livres de notre Émile Guillaumin servent de textes français aux écoliers d'Angleterre et d'Allemagne. Il est vrai que la plupart de ces ducs spirituels n'ont pas habité le Duché, mais ni Louis I^{er}, ni Pierre I^{er}, ni Jean II ni Charles II n'ont résidé dans leurs États. » (Est-il besoin de rappeler aux lecteurs du *Courrier* que « le plus illustre linguiste de l'Europe » est le Moulinois Antoine Meillet, professeur au Collège de France et membre de l'Institut ? Non. Mais annonçons-leur une nouvelle : M. Meillet présidera, cet été, la première séance *publique* annuelle de notre Société d'Émulation, et à cette séance assisteront aussi et prendront aussi la parole MM. Valery Larbaud et Jacques Chevalier).

H. BURIOT-DARSILES.

2. Camille Gagnon, « VALERY LARBAUD : *Allen*, illustré d'eaux-fortes originales, par O. Coubine, Paris, Aux Aldes, 122, boulevard Murat, XVI^e », in *Bulletin de la Société d'Émulation du Bourbonnais*, juillet-août 1927, pp. 233-236.

Valery Larbaud nous a si souvent mené au pays étranger, qu'au titre de son dernier ouvrage : *Allen*, on songe tout de suite à quelque lointaine révélation.

Ce nom pourtant reste bourbonnais, malgré sa consonnance, puisqu'il forme la devise de l'ordre de l'Écu d'Or que le duc Louis II de Bourbon fonda en 1366, au retour de sa captivité en Angleterre. Valery Larbaud nous entraîne cette fois vers la province française, plus particulièrement vers celle qui est nôtre. Et malgré le soin qu'il apporte à refondre lentement ses œuvres dans une longue mise au point (*Allen* lui-même ne connut-il pas au moins trois brouillons ?), l'auteur a tenu à livrer son travail en 1927, parce que cette année-là présente deux anniversaires qui, par un curieux hasard, à deux siècles d'intervalle, ouvrent et ferment l'histoire de notre indépendance ducale : l'érection de la Sirerie en Duché (1327), et la mort de Charles III, le Connétable, sous les murs de Rome (1527).

Qu'est-ce donc *Allen* ? Le sujet tient en peu de mots. Quatre amis : l'Éditeur, le Poète, le Bibliophile et l'Auteur se proposent d'essayer une automobile. Au jour fixé, ils partent de Notre-Dame de Paris, filant sur les belles routes de France jusqu'au duché natal de l'Auteur. Et, soit en formant leur projet, soit en chemin, soit arrivés à la capitale provinciale, ils devisent. Mais leur conversation présente pour nous un intérêt puissant, car, tantôt par la bouche de l'un, tantôt par la bouche de l'autre, Valery Larbaud exprime des idées que voudront connaître tous ceux qui, fiers de la grandeur passée de leur province, rêvent pour elle d'un relèvement.

La province est triste, la province est comme endormie. Oubliant l'épanouissement heureux qu'elles ont pu connaître à quelques époques de leurs annales, nos provinces centrales notamment, tandis que Paris aspire leurs forces vives, se laissent aller à un abandon résigné, à une négligence anémique. La province a perdu ainsi toute naïveté, c'est-à-dire tout pouvoir d'admirer et de s'enthousiasmer. Dès lors, elle n'est plus occupée que du « côté matériel, primitif, de la vie : le désir du bien-être, contrarié par la peur de la dépense... De là l'orgueil de la richesse, le mépris de la pauvreté, et la mesquinerie de la vie, et les clans, et la vilaine morale, et l'avarice... Et de là, l'indifférence pour tout ce qui nous paraît le plus digne de soins et de sacrifices. Et cette indifférence produit l'ignorance. »

Comment l'esprit provincial pourrait-il prendre goût aux recherches intellectuelles, à la littérature, à la peinture, à la musique contemporaines par exemple. Replié sur lui-même, il se caractérise par « le manque d'initiative, la peur du risque, l'indifférence et la méfiance à l'égard des grands plaisirs inventeurs du progrès, le grossissement des choses sans importance, le préjugé en faveur de ce qui est officiel, la transformation de toute activité en une carrière, et le mépris du travail désintéressé ».

Voilà sans doute de cruelles affirmations qui vaudront à Valery Larbaud d'amères critiques. On ne manquera pas de lui objecter que ces défauts, loin d'être propres à la province, ont cours à Paris. Mais, répondra-t-il, toute société se divise en trois ordres : le Tiers-État qui vit et travaille uniquement en vue du bien-être ; la Noblesse et le Clergé, qui aspirent au pouvoir matériel ou spirituel. Et la province est Tiers-État « dans la proportion de 95 à 99 pour cent », tandis que Paris « est Noblesse et Clergé dans la proportion énorme de 25 à 30 pour cent ».

La confession qu'il va faire n'a plus alors rien d'étonnant. Quel intellectuel de province, en la lisant, ne retrouvera les étapes d'une crise personnelle ?

Longtemps, toutes les pensées de Valery Larbaud appartiennent à Paris. Le pays natal lui paraissait une terre d'exil indigne d'attention. Et puis, par ennui, par moquerie, comme un naufragé au bord de son île, il se mit à considérer la propriété familiale comme un minuscule état dont le château serait la capitale, et les fermes les villes principales. Petit à petit, il recula ses limites jusqu'aux frontières du duché. Et ce duché dédaigné lui apparut dans son histoire ancienne comme une puissance indépendante, qui avait joué son rôle en Europe, et porté jusqu'à de lointains rivages la gloire de son nom et le retentissement de ses victoires. Avec la chute du connétable, le duché s'arrête en pleine croissance, la capitale sans duc s'endort « autour du fantôme d'un grand palais rose, entouré de jardins pleins de portiques, de fontaines et d'orangers ». Pourtant si les ducs conquérants sont morts, des ducs spirituels soutiennent par le monde le renom de leur terre : Blaise de Vigenère, Jean de Lingendes, plus récemment : Théodore de Banville, Charles-Louis Philippe, aujourd'hui encore : Antoine Meillet, Émile Guillaumin, et pouvons-nous ajouter Valery Larbaud.

Convient-il, dès lors, de laisser le beau duché à son assoupissement, de le regarder comme un lieu de « retirance » agréable ? Faut-il plutôt travailler à lui rendre une véritable autonomie. Que ce grand mot n'effraie personne. Valery Larbaud ne songe pas à dresser le Bourbonnais contre la nation. Mais un jour viendra

peut-être où quelque statut d'états confédérés se substituera au système national, où l'Europe unie aura besoin, pour son équilibre, de reprendre conscience « de sa vie sur tous les points de son étendue ». Alors, afin de prévenir des heurts trop violents, interviendront utilement « ceux qui n'auront pas oublié le nom de leur état, ceux qui auront gardé mémoire de leurs annales, de leurs souvenirs, de leurs alliances, de leurs devises ». Et, quel que soit l'avenir, malgré le silence du ciel, malgré l'indifférence des façades roses et noires, qui se groupent dans un même effort, tous ensemble *Allen*, ceux qui veulent pour leur province « un réveil, une chaleur et une lumière plus vives, la renaissance de l'initiative, la fin de la saison d'ennui ».

N'allez pas croire, d'après cette sèche analyse, que les idées se déduisent dans *Allen* comme pour la démonstration d'un théorème. Valery Larbaud, qui connaît si bien les petits auteurs des siècles passés, leur emprunte une forme où plusieurs ont excellé : le dialogue, et lui donne une allure extrêmement vivante. Ses personnages échangeant leurs réflexions avec une fantaisie très moderne, ne restent pas insensibles aux beautés de la route qu'ils parcourent et du lieu où ils s'arrêtent. Ils nous livrent leurs impressions provinciales, et l'on donnera sur le Bourbonnais, sur Moulins, Saint-Menoux, Souvigny, Hérisson, Saint-Pourçain, la forêt de Tronçais, des notations précieuses dans leur brièveté, telle cette description de Moulins où la phrase chante en belle harmonie avec l'émotion intime :

« C'est la ville de Théodore de Banville : les briques roses, le pont construit par son aïeul, les grands jardins entourés de murs, ville lévitique aussi, avec tant de couvents tintants. Et aux beaux soirs d'été, ville rêveuse, attendrie, sous les longs tournoisements et les cris d'hirondelles. Dans la géographie de la France des hirondelles, Moulins doit être une des villes les plus importantes du Centre. Peut-être à cause du silence et des jardins. »

Et encore, ces teintes du ciel bourbonnais, dont Valery Larbaud, après le Maître de Moulins, retrouve le secret :

« Le bleu du pays d'*Allen* est encore plus beau. Ce n'est pas ce bleu minéral de saphirs, de bouquets de cristaux, des pays du Midi, mais la couleur pure, la traînée lente du pinceau chargé d'un outre-mer éblouissant sur la palette de porcelaine de l'horizon. »

Allen, paru dans les numéros de février et de mars de la *Nouvelle Revue Française*, a excité la plus vive curiosité. Aussitôt discutée, l'œuvre n'a pas toujours

été bien comprise. Notre confrère, M. Buriot-Darsiles, en la présentant au *Courrier de l'Allier*, le 4 [sic] mai 1927, a excellemment remis les choses au point.

L'édition originale a été livrée en avril par les éditions d'art « Aux Aldes ». Tirée à 120 exemplaires seulement, cette édition, tant par la qualité du papier que par la noblesse de la typographie, donnera une joie inestimable aux bibliophiles qui en seront les heureux possesseurs. Elle est en outre ornée de neuf eaux-fortes de Coubine. Notre cerf-volant moulinois orne la couverture et le titre comme un symbole de l'élan de notre mouvement provincial. Par une délicate attention, Valery Larbaud a offert à notre Société un tirage à part sur japon de ces eaux-fortes dont plusieurs représentent des paysages bourbonnais. Nos confrères pourront donc à loisir goûter l'art grâce auquel le graveur allie à une science profonde des traits essentiels la naïveté qui conserve la fraîcheur des impressions.

Nous espérons d'ailleurs qu'*Allen* paraîtra bientôt dans une édition à large tirage, qui connaîtra en Bourbonnais le plus mérité des succès.

C. GAGNON.

3. Robert Tournaud, « « ALLEN » Par Valery LARBAUD », in *Courrier de l'Allier*, le 28 juillet, 1927, p. 2e-f.

Une bien curieuse offrande aux puissances spirituelles que cette fantaisie en Bourbonnais, apportée jusqu'à nous par la *Nouvelle Revue Française* (février-mars 1927) ! Après les voyages lointains, après les découvertes d'A. O. Barnabooth, de la Bulgarie pleine de roses aux brouillards londoniens, voici que notre grand humaniste nous raconte le Bourbonnais. Il y apporte les vents du large, les souffles de l'Europe, il y arrive sur sa voiture trépidante, miracle de mécanique, et il nous restitue de la Province natale, de la [sic] Duché, ce qu'il y a en elle de vivant, ce qui en elle est le joyau unique, l'essence.

Allen débute par une symphonie discordante, où des voix se heurtent, s'affrontent, puis s'apaisent en une complexe unité. Alors tout passe devant nos yeux, d'un rythme vif : c'est d'abord la campagne préliminaire de France, où s'éveillent les petites villes blotties dans la campagne : Vézelay, Troyes, Sens, Bourges... « une cathédrale de grande capitale européenne, des palais superbes, dignes d'une sous-préfecture de Lombardie ou du Veneto... et puis, silence dans la rue Moyenne... » Ce sont ensuite des notes profondes sur l'indifférence de la vie

provinciale, sur le mépris lamentable où elle tient les choses essentielles, comme si tout de l'humanité était vain, périssable.

Mais vous entendez bien que la course se poursuit. Voici le bleu du pays d'Allen – le Bourbonnais. – Voici Moulins, « les briques roses, les grands jardins entourés de murs..., et aux beaux soirs d'été, ville rêveuse, attendrie, sous les longs tournolements et les cris des hirondelles ». Voici Souvigny, la Débredinoire et « cette petite église de Saint-Menoux, toute féminine, avec la procession de ses jolies colonnes et leur ronde gracieuse et modeste derrière l'autel ».

Et les rêves historiques, les rêves politiques, à la suite des grandes pensées de Charles III, le grand Connétable. Puis, par delà l'histoire, la théorie des trois ordres : Tiers, Noblesse, Clergé, mais animés d'une vie nouvelle, non plus selon la naissance, selon la valeur spirituelle, symbole et condition d'un réveil de l'intelligence, d'une société apaisée, où les hiérarchies nécessaires se grouperaient sur un plan de l'esprit. « Nous ferions de cette ville une résidence, où un Goethe, un Wagner pourraient vivre dans le climat d'une cour d'esprits choisis, et faire parler de nous dans le monde, et faire venir le monde ici. Ce ne serait plus la Province, ce serait le Duché, mon pays, où je rentrerais. »

Allen se dédie aux puissances bourbonnaises. Voudront-elles se tirer de leur long sommeil ? C'est, de toute façon, le vibrant appel que leur lance Valery Larbaud.

Robert TOURNAND [*sic*].

2. 「シャンテル（ブルボネ地方）」

以下はヴァレリー・ラルポーが『サントル通信』、1927年5-6月号、85-87頁に掲載した「シャンテル（ブルボネ地方）」の記事全文を再録したものである（木版画を除く）。ラルポーは「著者解題」第18章において大きな変更を加えつつ、この記事の大部分を引用している。第18章のテキストと比較していただけるよう、おおよその引用部分を論者が下線強調で示している。

« Chantelle (Bourbonnais) »

Cantilia. — C'était Chantelle-la-Vieille et non Chantelle-le-Château. Mais dans les actes, cette Chantelle aussi a dû être longtemps appelée Cantilia (Consulter l'ouvrage de Max Fazy). Le nom est aussi joli en latin qu'en français.

Nous y sommes arrivés, B... et moi, dans la première quinzaine de Septembre, vers le moment de l'anniversaire de la fuite de Charles III et nous avons vu le ravin tel qu'il l'a pu voir, du Château, pendant qu'il songeait à son itinéraire dans les vallées du Massif Central, avec ses fidèles jusqu'à Herment et puis seul avec Pompéran.

« Le Cerf volant aux abois de l'Autruche »

dit Maurice Scève, ajoutant son petit calembour à l'énorme masse de la « mauvaise presse » de notre grande victime.

Nous avons suivi la grand'route, qui reste « la route nationale » à travers toute la ville, ne devient, à aucun endroit, « la rue », ne prend nulle part un aspect citadin. La grand'route entre des maisons.

B... me fait observer que toutes les femmes que nous rencontrons — les bourgeoises — portent chapeau, comme dans une ville et que c'est surtout cela qui donne à Chantelle l'air campagne, l'air d'une bourgade rurale... Ce qui donnerait à Chantelle, en cette saison, un aspect un peu citadin, ce serait d'y voir des gens vêtus d'étoffes claires, chandails, blazers, pull overs multicolores, jupes et pantalons blancs, les dames tête nue, en souliers plats, enfin tout le négligé élégant et gai des « villeggianti », des bourgeois de grande ville en vacances... C'est de quoi nous avons l'air et on nous regarde beaucoup ; nous nous sentons dépaysés, fâcheusement « touristes », déplacés comme la maison moderne (la seule du pays) devant laquelle

nous venons de passer. À Moulins, à Montluçon, ce serait un hôtel particulier quelconque, qu'on ne remarquerait pas. Ici, elle prend l'air d'une maison de campagne d'un château, construit par erreur, par une inexplicable fantaisie, en plein village.

Au soleil couchant, de la plate-forme qui est la promenade publique (et le champ de foire), le ravin, avec ses flancs couverts d'une végétation épaisse et courte, fraîche et verte, encore dans la lumière au sommet, était déjà plein de nuit dans ses profondeurs. Retranchement énorme, qui a l'air d'un travail humain abandonné ; long corridor étroit entre les bords d'une colline cassée en deux morceaux, entaillée jusqu'au niveau de la plaine (invisible de cette plate-forme).

Je me souviens d'un après-midi de juillet passé dans un grand jardin bourgeois, au bas du jardin, au fond du ravin. On y était dans une ombre très douce et comme très loin du ciel du plein été, les visages éclairés par le reflet de l'eau.

Mais sous le ciel déjà pâli de septembre, aujourd'hui, le ravin laissait deviner son aspect de l'hiver, la chute des feuillages qui valent sa grande désolation de l'hiver. C'était bien le jour et le moment, pour songer à la méditation de Charles III regardant à ses pieds cette profondeur, et en face, l'énorme levée de terre de l'autre bord, sans horizon.

Chantelle, septembre 1926.

Valery LARBAUD.

Bois gravés inédits de Paul Devaux.

3. 削除された「著者解題」の二章

以下の二章「読点の問題」、「二つのタイトル」は、ラルポーが出版元のオリゾン・ド・フランス社の依頼を受けて *Allen, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929, p. 104* (« Note XXI. Questions de virgules ») および *p. 107* (« Note XXIII. Double titre ») に掲載したものの再録である。

この二章は同年、ガリマール版の出版時に削除された。現在、2006年に出版されたシヤージュ版に「補遺」として掲載されているが⁴⁴¹、『ヴァレリー・ラルポー全集』、プレイヤー版などには収録されていない。本稿では再録に加え、日本語訳と注釈を試みた。

(I) Questions de virgules	(I) 読点の問題
— L'éditeur de ce volume, G.-J. Place ⁴⁴² , m'a fait remarquer que l'emploi de la virgule à la page 41 (ligne 8 [sic] ⁴⁴³) dans la phrase : « Vous, devenez, d'intention, le régénérateur de la petite ville » ⁴⁴⁴ , était anormal et contraire aux règles généralement suivies.	本書の編集者 G.=J. プラスは、41 頁(8 行目)の、「あなたは心の中で、小さな町の再生者になっていらっしゃる」という文における読点の使用法が、変則的で一般的な慣習に反するものだと私に指摘した。
J'ai cependant maintenu cette virgule, qui correspond à une pause du discours, à une	しかしながら私はこの読点を残しておいた。会話の間、ある種の強調に呼応して

⁴⁴¹ Voir « Appendice », in *Allen*, introduction de Bernard Delvaille, Paris, Éditions de Sillage, 2006, *op. cit.*, pp. 35-37.

⁴⁴² 下記の資料の記述から *Chronique des lettres françaises* の編集者でヴィシー生まれの Joseph Place であると考えられる。Cf. la lettre de Valery Larbaud à A. A. M. Stols du 12 janvier 1929, in Valery Larbaud, *Correspondance avec A. A. M. Stols, 1925-1951*, t. 1, *op. cit.*, p. 204 et t. 2, « Index », *op. cit.*, p. 69.

⁴⁴³ 原典オリゾン・ド・フランス版では lignes 2-3 に掲載されている。

⁴⁴⁴ 「本編」第4章における「愛書家」の「詩人」に対する発言の一部で、プレイヤー版では « Vous, vous devenez, d'intention, le régénérateur de la petite ville. » (« ところがあなたは心の中で、小さな町の再生者になっていらっしゃる。」下線強調は引用者) と書き改められ、「強勢形代名詞 Vous + 読点」の代わりに「強勢形代名詞 Vous + 読点 + 主語代名詞 vous」となっている(この問題については Maurice Grevisse et André Goosse, *Le Bon Usage*¹⁴, Bruxelles, De Boeck, 2008, p. 135 を参照)。Voir *Allen, Pléiade*, p. 737. この問題についてラルポーは、*Sous l'invocation de saint Jérôme* (『聖ヒエロニムスの加護のもとに』、1946) 所収の論考、「La Ponctuation littéraire」(「文芸上の句読点」、初出は *Commerce*, l'été 1930, pp. 104-110) において、オリゾン・ド・フランス版における読点の使用の意図と「著者解題」での解説の掲載、ガリマール版での当該箇所改稿、「著者解題」からの本章の削除の経緯を述べている。Voir « La Ponctuation littéraire », *OC*, t. 8, pp. 278-282.

certainne emphase, un certain accent, mis sur le mot : « Vous. »	おり、「あなたは」という単語にある種 のアクセントをもたらすからである。
En espagnol, la virgule joue quelquefois le même rôle.	スペイン語では、読点は時としてこの場 合同じ役割を果たしている。

(II) Double titre	(II) 二つのタイトル
— La deuxième page de titre ⁴⁴⁵ qui figure dans cette édition, et qui ne figurera dans aucune autre, constitue un hommage à la mémoire du premier en date des Imprimeurs moulinois, Pierre Vernoy ⁴⁴⁶ , dont les premières éditions sont du début du XVII ^e siècle et qui peut être considéré comme l'ancêtre de la brillante lignée des typographes et éditeurs bourbonnais qui a produit, au XIX ^e siècle, l'illustre maison Desrosiers ⁴⁴⁷ .	この版には存在するが他のどの版にも登場することはないであろう二番目の本扉は、ムーランの最古の印刷業者で、その初出版が17世紀初頭であり、19世紀に名門デロジエ社を生み出すことになるブルボネ地方の植字工と編集者たちの輝かしい系譜の始祖と見なせるピエール・ヴェルノワの御霊に捧げられている。
L'idée de cet hommage est due à G.-J. Place, à qui j'avais, à plusieurs reprises, exprimé le désir de voir paraître <i>Allen</i> dans une édition bourbonnaise, c'est-à-dire illustrée par un artiste bourbonnais, imprimée dans une des villes du Duché, et portant sur la page de titre, comme lieu de publication, le nom de Moulins ⁴⁴⁸ .	この敬意の着想は G. =J. プラスによるもので、私は彼に、『アレン』がブルボネ地方の出版社から出版されるのを見たいものだとし繰り返して申し述べていた。つまりブルボネ地方の画家に挿絵を描いてもらい、公国の町の一つで印刷してもらい、本扉には出版地としてムーラ

⁴⁴⁵ この版の二番目の本扉には、タイトルとポール・ドゥヴォーによる飛翔する鹿の挿絵とともに « À Molins [*sic*] / chez Pierre Vernoy / Au Vase d'Or / 1929 » と記されている。

⁴⁴⁶ *Pléiade*, p. 1248 の «NOTES» には «Vernon» と記されているが、オリゾン・ド・フランス版の表紙、下記ウェブサイトやヴィシー市立図書館の情報から、ムーランの出版社 Pierre Vernoy であると考えられる（下線強調は論者）。<http://mediatheques.agglo-moulins.fr/agglo-moulins.fr/cms/articleview/id/28> (2014年4月8日閲覧)

⁴⁴⁷ アシール・アリエの『旧きブルボネ』の初版時(1833)の出版社。本「別冊」、「著者解題」第5章「『アレン』の典拠」におけるラルボーによる原注(本「別冊」117頁、注327)を参照されたい。

⁴⁴⁸ この好みは、「本編」第7章における「編集者」の発言 « Une fois même pour une plaquette à tirage restreint, d'un vrai jeune, j'ai fait imprimer sur la couverture le nom d'une

	ンの名前が記されているということである。
Ce rêve ne me paraissait pas irréalisable : j'avais bien obtenu, deux ou trois ans plus tôt, une édition montpelliéraine de <i>Septimanie</i> ⁴⁴⁹ , petit ouvrage republié ensuite dans <i>Jaune Bleu Blanc</i> ⁴⁵⁰ .	私にはこの夢が実現不可能だとは思えなかった。その 2、3 年前に、後に『黄・青・白』に再録される小品『セプティマニ』のモンペリエ版を首尾よく得ていたからだ。
À vrai dire, c'était un éditeur parisien d'origine anglaise qui en avait fait les frais ; mais enfin j'eus le plaisir de lire « Montpellier » sur la couverture.	実を言うと、それについて尽力してくれたのは英国生まれのパリの編集者だった。だがついに私は「モンペリエ」を表紙に読む喜びを授かったのだ。
Pour <i>Allen</i> , les circonstances voulurent que ce fût l'édition parisienne de « Aux Aldes » qui sortit la première.	『アレン』に関してはさまざまな事情によって最初に出たのは「オ・ザルド」社によるパリ版であった。
Cependant je n'avais pas renoncé à réaliser le rêve d'une édition bourbonnaise ; et il l'a été, du moins en partie, par la présente édition ; le point principal : l'illustration du texte par un artiste bourbonnais ⁴⁵¹ , est acquis, et grâce à l'ingénieuse trouvaille de G.-J. Place, le nom d'une firme bourbonnaise figure sur une des pages de titre.	それでも私はブルボネ版の夢を実現することをあきらめていなかった。そしてその夢は、少なくとも部分的に、この版で実現されたのだ。肝心な問題、すなわちブルボネ地方の画家よるテキストの挿絵は得られたし、また G.=J. プラスの巧みな工夫のおかげで、ブルボネ地方の会社の名前が本扉の一つに記されたからである。

des villes de mon Duché. » (「一度だけ、あるとても若い人の限定版の小冊子に、私の公国の町の名前の一つを表紙に印刷させたことがありましてね。」) に呼応している。 Voir *Allen*, *Pléiade*, p. 756.

⁴⁴⁹ 初出は Valery Larbaud, *Septimanie*, Montpellier, Éditions de l'Âne d'Or, 1925 で、プレイヤード版 876-883 頁に収録されている。Septimanie とは南フランスの地中海にのぞむローヌ川の西方を指した旧地名を意味する。

⁴⁵⁰ Valery Larbaud, *Jaune Bleu Blanc*, Paris, Gallimard, Éditions de la Nouvelle Revue Française, 1927.

⁴⁵¹ ポール・ドゥヴォーを指す。

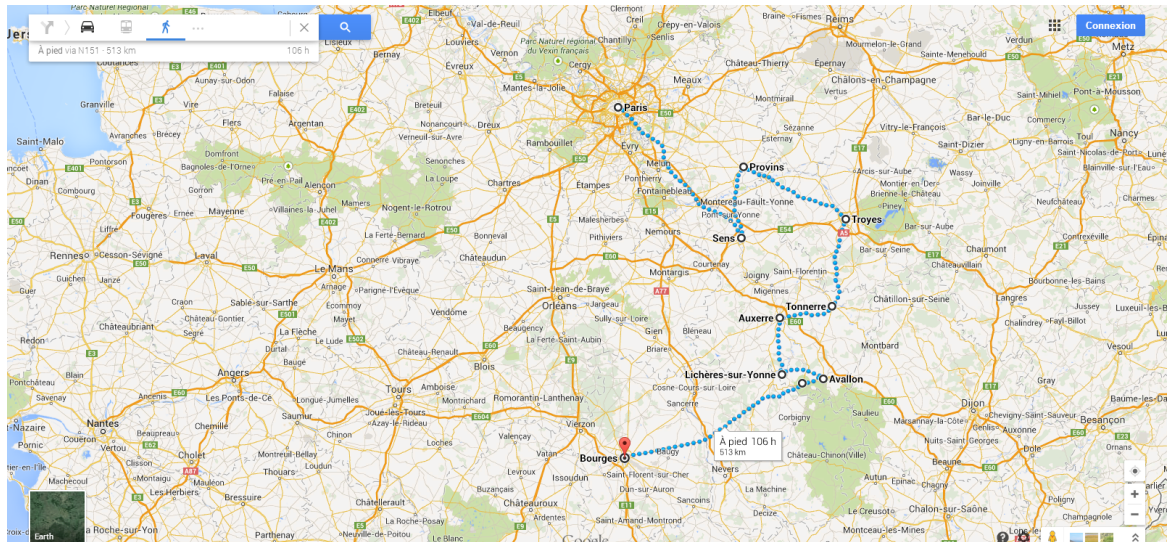
4. 関連地図

以下の三枚の地図は、『アレン』における主な行程と地名を挙げたものである。
「『アレン』の行程」はグーグル・マップ、「ブルボネ地方」はウィキペディアの情報をもとに作成した。

4-1. L'itinéraire d'Allen (『アレン』の行程)

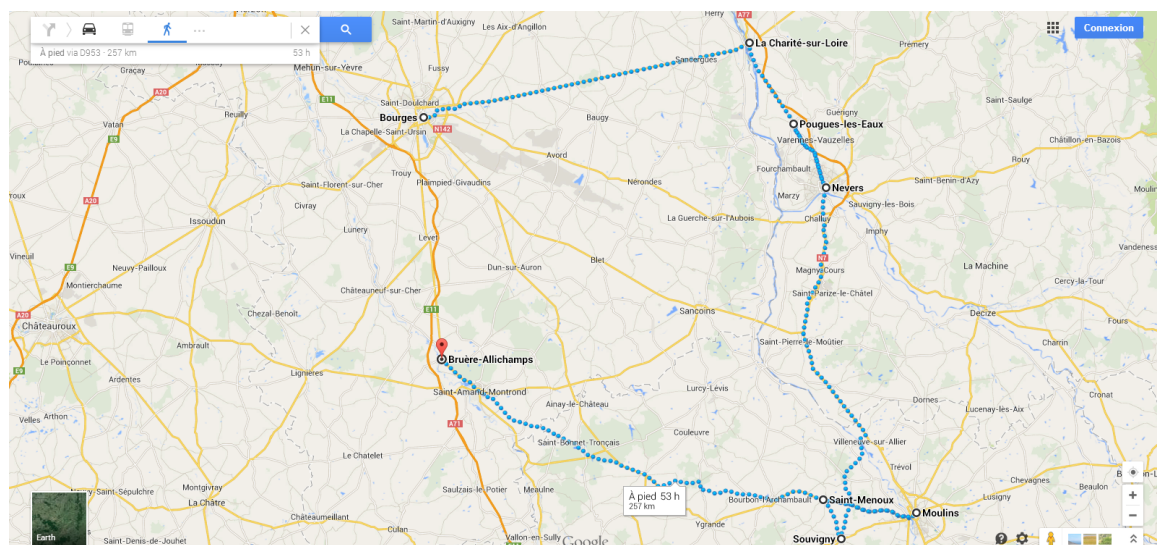
4-1-1. Entre Paris et Bourges (パリームーラン) : Paris (パリ) → Sens (サンス) → Provins (プロヴァン) → Troyes (トロワ) → Tonnerre (トネール) → Auxerre (オーセール) → Lichère-sur-Yonne (リシェール=シュル=ヨンヌ) → Avallon (アヴァロン) → Vézelay (ヴェズレー) → Bourges (ブルージュ)

<http://goo.gl/V4r7CY> (2014年9月1日閲覧)

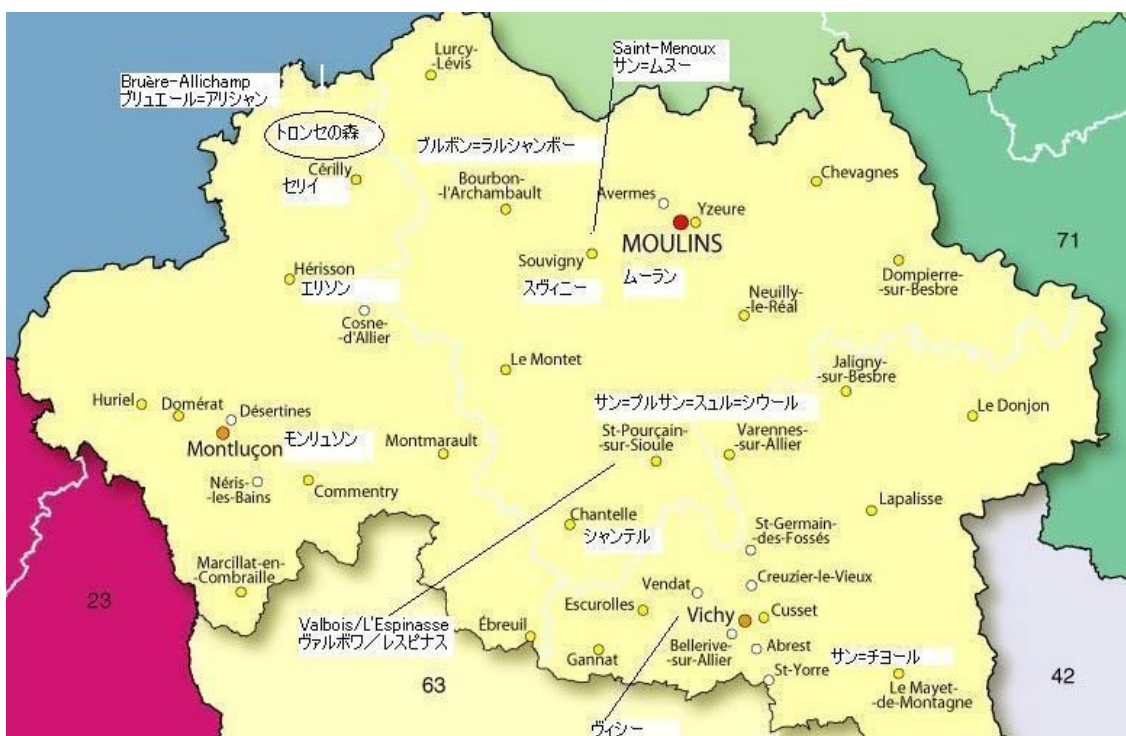


4-1-2. Entre Bourges et Bruère-Allichamps (ブルージュブリュエル=アリシャン) :
Bourges (ブルージュ) → Charité-sur-Loire (シャリテ=シュル=ロワール) → Nevers (ヌ
ヴェール) → Pougues (プーグ) → Souvigny (スヴィニー) → Saint-Menoux (サン=ム
ヌー) → Moulines (ムーラン) → Bruère-Allichamps (ブリュエル=アリシャン : 石碑
の所在地)

<http://goo.gl/j1dQfT> (2014年9月1日閲覧)



4-2. Bourbonnais : ブルボネ地方



5. ヴァレリー・ラルボー (1881-1957) 略年譜

- 1881年8月29日：フランス中部の町ヴィシーに、父ニコラ、母イザベルの一人息子として生まれる。父はヴィシー近くのサン=チヨールにミネラルウォーターの鉱泉を所有していた。
- 1889年：父ニコラ死去。
- 1891-94年：さまざまな国籍の生徒が在籍するパリ近郊のカトリック系私立学校コレージュ・サント=バルブ=デ・シャンにて寄宿生活を送る。
- 1894年：生涯の友人となるマルセル・レイと出会う。
- 1895年：ヴィシーの自宅に書斎を作り、隠遁地を意味する「ラ・テバイード」と名付ける。パリのアンリ四世高校に入学。
- 1896年：アンリ四世校を退学し、アリエ県の県庁所在地ムーランの高校リセ・テオドール・ド・バンヴィルに入学。詩集『柱廊』を自費出版。
- 1899年：パリのルイ大王校に入学するが、学年末間近に休学。
- 1900年：大学入学資格試験バカロレアに失敗。
- 1901年：バカロレアに合格し、英語・ドイツ語学士号取得準備のためソルボンヌに登録（1907年学士号取得）。
- 1903年：小説「哀れなシャツ屋」（後に『A.O.バルナブース全集』に収録）完成。
- 1905年：アンドレ・ジッドと書簡を交わす。
- 1906年：同郷の友人マルセル・レイの紹介で、同郷の作家シャルル=ルイ・フィリップと出会う。
- 1907年：シャルル=ルイ・フィリップの紹介で、同郷の農民作家エミール・ギョーマンと出会う。
- 1908年：『裕福なアマチュアの詩、あるいはバルナブース氏によるフランス語の作品』を匿名で自費出版（1913年『A. O.バルナブース全集』に改作）
- 1909年：英文学での博士論文の準備（未完成に終わる）。アンドレ・ジッドを通じて『新フランス評論』へ参加、「ドリー」（後に『幼なごころ』に収録）寄稿。12月24日、シャルル=ルイ・フィリップの葬儀に参列し、詩人レオン=ポール・ファルグと出会う。
- 1910年：「フェルミナ・マルケス」を『新フランス評論』に4回にわたり連載。「包丁」を雑誌『ラ・ファランジュ』に発表。12月24日、母親にも内緒でプロテスタントからカトリックへ改宗。
- 1911年：『フェルミナ・マルケス』出版。
- 1913年：『A.O.バルナブース全集、すなわち一つの短篇、詩および日記』出版。7月から8月にかけて「偉大な時代」を執筆。

- 1914年：3月から8月まで、英国の『ニュー・ウィークリー』に「パリ通信」を英語で寄稿。7月下旬、「《顔》との一時間」を執筆。
- 1917年：7月から8月にかけて「夏休みの宿題」を執筆。
- 1918年：短篇集『幼なごころ』出版。
- 1920年：「自伝断章」を執筆。
- 1923年：『恋人よ、幸せな恋人よ……』（『秘めやかな心の声……』、『美、我が美しき憂い』を同時収録）出版。この年から3年間、アルゼンチンのブエノス・アイレスで発行の日刊紙『ラ・ナシオン』に、フランス文学についての記事をスペイン語で執筆、寄稿。
- 1924年：季刊誌『コメルス』の共同編集者として活躍。この頃レオン＝ポール・ファルグと仲違いする。
- 1925年：『罰せられざる悪徳・読書 英語の領域』出版。
- 1926年：1月、リスボンにて「アレン」の執筆に取りかかる。5月、母親の双子の妹・叔母ジャーヌ死去。9月、『私の道のり』脱稿。
- 1927年：『新フランス評論』2月号、3月号に「アレン」を連載の後、出版。
- 1928年：『私の伝記のための覚え書き：ごくありふれた伝記』を執筆。
- 1929年：ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』の翻訳監修。『アレン』決定版を出版。
- 1930年：母イザベル死去。
- 1935年：8月5日、パリで脳障害に倒れ、失語症に陥る。事実上の創作活動停止。
- 1941年：『罰せられざる悪徳・読書 フランス語の領域』出版。
- 1946年：『聖ヒエロニムスの加護のもとに』出版。
- 1950-55年：ガリマール社より『ヴァレリー・ラルボー全集』（全10巻）刊行。
- 1957年：ヴィシーにて死去。
- 1958年：ガリマール社より『プレイヤード叢書・ヴァレリー・ラルボー全集』刊行。